

## 東京電力福島第一原子力発電所事故に係る継続的な 調査・分析の進め方について

令和元年9月11日

原子力規制庁

東京電力福島第一原子力発電所事故に係る継続的な調査・分析の進め方について、令和元年9月4日の第27回原子力規制委員会での指摘を踏まえ、事故分析と廃炉に関して連絡・調整する仕組み及び事故分析に係る検討会の具体的検討内容及び体制を示す。

### 1. 福島第一原子力発電所の廃炉及び事故調査に係る連絡・調整会議について

#### (1) 会議の目的及び役割

福島第一原子力発電所において進められている廃炉作業によって、事故分析に必要な情報が失われてしまうおそれがある一方、事故分析のために現場の保存等を東京電力に求めることで廃炉作業への干渉や作業が重複するケースも考えられる。

このような干渉等が対応する現場での混乱・支障となることを避けるため、廃炉を進める資源エネルギー庁、更にこれらの作業に係る原子力損害賠償・廃炉等支援機構（NDF）、東京電力、日本原子力研究開発機構（JAEA）その他関係機関と原子力規制庁との間で、公開で行う「福島第一原子力発電所廃炉・事故調査に係る連絡・調整会議」（以下「連絡・調整会議」という）を設けて、双方の作業の方針や実施計画を共有・確認し、統一された認識のもと、現場で作業を行う東京電力に対するそれぞれの指示を整合させる。

#### (2) 具体的な連絡・調整事項

- ① 資源エネルギー庁等は、廃炉に係る作業・調査計画や技術戦略プラン等を、原子力規制庁は、事故分析の対象とする個別検討事項や具体的調査内容を共有する。
- ② ①について、相互に干渉し得る事項又は重複する事項の有無を確認する。
- ③ 確認の結果、双方の作業が干渉又は重複するなどのおそれのあるときは、リスクを低減するための廃炉作業の観点と事故進展のプロセス解明の観点からの重要度や作業の先後関係を比較考慮し、具体的な作業方針、計画、手順を変更する、あるいは相互協力により双方の目的を達成する。

上記の他、作業によって留意すべき事項の明確化なども含め、それぞれの目的が達成されるように検討・調整を行い、この会議としての対処方針を決定する。

連絡・調整会議は四半期に1回程度の頻度での開催を念頭に置き、原子力規制庁は、連絡・調整会議により得られた対応方針を原子力規制委員会に報告し、必要な指示を受けるなどして調査・分析を進める。

### (3) 体制

以下のメンバーで構成する。なお、適宜、廃炉作業に関係するその他関係機関からも出席を求める。

- ・ 資源エネルギー庁  
担当審議官、原子力発電所事故収束対応室職員、原子力政策課職員
- ・ 原子力規制庁  
担当審議官、東京電力福島第一原子力発電所事故対策室員、技術基盤グループ職員
- ・ 原子力損害賠償・廃炉等支援機構  
担当執行役員、技術グループ職員
- ・ 東京電力ホールディングス株式会社  
担当執行役員、プロジェクト計画部職員

## 2. 事故分析に係る検討会の具体的検討事項及び体制について

事故分析の具体的内容については「東京電力福島第一原子力発電所における事故分析に係る検討会」で検討する。検討状況は、適宜原子力規制委員会に報告する。

### (1) 主な具体的検討事項（調査・分析の進展に応じて見直す）

- ① 原子炉格納容器から放射性物質等の放出又は漏えい経路・箇所
  - ・ 原子炉格納容器の耐圧強化ベントシステムのラプチャーディスクの作動状況、ベントガスの移行経路及び非常用ガス処理系を通じたベントガスの原子炉建屋内への逆流の有無
  - ・ 原子炉格納容器トップフランジからの放射性物質等の放出の程度
  - ・ 1号機オペレーティングフロアシールドプラグがずれたメカニズムの考察また、原子炉格納容器の耐圧強化ベントシステムの設計方針、具体的系統構成の妥当性については、福島第一原子力発電所以外のBWRプラントとの比較を行うこと、過去のアクシデントマネジメント策の策定方針を確認することなどにより検証し、そこから得られる教訓及び規制基準に反映すべき点の有無等を検討する。
- ② 原子炉冷却に係る機器の動作状況
  - ・ 1号機非常用復水器の動作条件、操作手順及び運転員への教育内容
  - ・ 3号機自動減圧系の作動状況
  - ・ 消防車による原子炉注水

### (2) 体制

検討会の構成メンバーは、別紙のとおりする。なお、オブザーバーとして適宜、東京電力、資源エネルギー庁等からも出席を求める。

(3) 検討スケジュール

2ヶ月に1回程度の頻度で検討会を開催し、検討を進め、2020年内を目途に中間的な報告書を取りまとめる。

(別紙)

「東京電力福島第一原子力発電所における事故分析に係る検討会」構成メンバー（案）

(原子力規制委員会)

更田 豊志 原子力規制委員会委員長

(原子力規制庁)

櫻田 道夫 原子力規制技監  
金子 修一 長官官房審議官  
安井 正也 原子力規制国際特別交渉官  
平野 雅司 地域連携推進官  
永瀬 文久 システム安全研究部門 安全技術管理官  
梶本 光廣 シビアアクシデント研究部門 技術参与  
星 陽崇 シビアアクシデント研究部門 主任技術研究調査官  
竹内 淳 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室長  
岩永 宏平 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 企画調査官  
川崎 憲二 実用炉審査部門 安全管理調査官

(日本原子力研究開発機構 安全研究・防災支援部門)

丸山 結 安全研究センター 副センター長  
与能本 泰介 企画調整室 規制・国際情報分析室長  
杉山 智之 安全研究センター リスク評価研究ディビジョン長

(外部専門家)

前川 治 原子力損害賠償・廃炉等支援機構 技監  
牟田 仁 東京都市大学 工学部原子力安全工学科 准教授

※検討課題に応じて構成メンバーの見直しを行う。

## 「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る 中間取りまとめ」を踏まえた対応について（第1回）

令和3年3月31日  
原子力規制庁

### 1. 経緯・趣旨

令和3年3月10日の第63回原子力規制委員会に東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ（以下「中間取りまとめ」という。）を報告した際に、今後の継続的な調査・分析、発電用原子炉設置者の見解等の確認、及び安全規制との関係の精査について、改めて原子力規制委員会に諮ることとしており、今回は、今後の調査・分析の進め方及び発電用原子炉設置者の見解等の確認について諮る。

### 2. 今後の調査・分析の進め方

東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（以下「事故分析検討会」という。）において、主に以下の事項について、調査・分析を進める。

- ① モニタリングポスト、エリアモニタ、プロセスモニタ等のデータに基づく核種放出挙動の分析（セシウムの放出時期に関する検討）
- ② シールドプラグの汚染状況の追加調査（シールドプラグの裏面、原子炉ウェル等の汚染状況の調査）
- ③ 水素爆発時の原子炉建屋内のガス組成の検討（水素、可燃性有機化合物等を含むガスの物理的・化学的特性の検討）
- ④ 当時のアクシデントマネジメント策による設備や安全上の重要度の異なる設備の接続などの設計方針の確認（原子炉格納容器の耐圧強化ベントシステムの追加設置、1号機非常用復水器の操作等に係る設計方針の確認）
- ⑤ 原子炉建屋に対する継続的な3次元レーザースキャン、線量率の測定

なお、下記3.（発電用原子炉設置者の見解等の確認）の結果等も踏まえて、更に調査・分析事項を追加、精査する。

調査・分析は、引き続き原子力規制庁の職員が中心となって作業を進め、適時、事故分析検討会を開催して検討を行う。また、調査・分析を円滑に進めるとともに、得られた知見を共有するため、福島第一原子力発電所廃炉・事故調査に係る連絡・調整会議において、必要な調整・連携等を図る。

調査・分析の成果は、年度ごとに取りまとめることを念頭に検討を行う。

### 3. 発電用原子炉設置者の見解等の確認

発電用原子炉設置者に対して、中間取りまとめの内容に対する見解等を、別紙に記載した事項について聴取する。

原子力規制庁から、発電用原子炉設置者に、聴取する事項と回答要領を送付し、1か月を目処に回答の提出を受け、その内容を整理した上で、事故分析検討会において回答内容を確認する。

別紙 中間取りまとめに関する見解等を聴取する事項

(別紙)

## 中間取りまとめに関する見解等を聴取する事項

下記の事項は、中間取りまとめで確認した事実、確認した事実に基づいて考えられること、及び確認した事実を踏まえて更なる検討が必要と考えられることを記述しています。

これらの記述内容ごとに異なる見解の有無を明確にし、その理由を具体的に記述することを求めます。その際、その他の見解や意見がある場合は、その内容の記述を求めます。加えて、更なる調査・検討に関する見解（更なる調査・検討の要否、具体的な調査・検討内容、実施主体及びこれらの理由）、及び自らの各発電用原子炉施設の設計、施工、運用等への反映に係る考え方を記述することも求めます。

### 記

- (1) 2号機における原子炉格納容器ベント（以下「ベント」という。）は、主要な隔離弁の開操作など、ベントラインの系統構成は完了していたが、ラプチャーディスク（以下「RD」という。）の作動圧力（原子炉格納容器（以下「PCV」という。）の設計圧力の1.1倍）に到達せず、ベントは成功しなかった。

このことを踏まえると、事象進展に応じたPCV破損防止対策の意義や役割を検討する必要がある。

なお、3号機のRDにおいてもベントラインの系統構成完了時点では作動圧力には到達しておらず、その後の意図しない自動減圧系（以下「ADS」という。）の動作に伴ってRDが破裂したことでベントに成功している。

- (2) 「発電用軽水型原子炉施設におけるシビアアクシデント対策としてのアクシデントマネジメントについて」（平成4年5月、原子力安全委員会決定）を踏まえて、発電用原子炉設置者が自主的な保安措置として当時整備したアクシデントマネジメント対策（以下「AM対策」という。）の1つである耐圧強化ベントラインが重要安全施設である非常用ガス処理系（以下「SGTS」という。）配管へ接続されていたことにより、自号機のSGTS及び原子炉建屋内へのベントガス（核分裂生成物、水素等）の逆流、汚染及び水素流入による原子炉建屋の破損リスクの拡大を招いている。

これを踏まえ、設計基準対象施設等への接続を含めたAM対策（耐圧強化

ベントライン等) の設計、施工及び運用の考え方を確認する必要がある。

- (3) 1号機におけるベントは、AM対策により、ベントガスがSGTS配管の一部を經由して排気筒から排出される設計、施工及び運用がされていた。

1/2号機共用排気筒内部では、排気筒頂部までの排気配管がなく、排気筒内にベントガスが滞留したことが、排気筒下部の高い汚染の原因となった。

このことを踏まえると、AM対策が排気系統配管の構造やベントガスの挙動、組成等をどのように考慮していたのか確認する必要がある。

また、現行の原子炉施設の排気系統におけるベントガスの挙動の考え方について確認する必要がある。

- (4) 放射性物質の漏えい経路について、真空破壊弁の故障が炉心熔融後のベント時などに生じると、ドライウェル中の気体がサプレッションプールにおけるスクラビングを經由せずにPCV外に放出される経路が生じる可能性がある。

このため、当該経路を従来の重大事故等(以下「SA」という。)時における漏えい経路に追加する必要がある。

- (5) 水素爆発時の映像及び損傷状況を踏まえると、原子炉建屋の破損の主要因は、原子炉建屋内に滞留した水素の爆燃(水素濃度8%程度)によって生じた圧力による可能性が高い。

また、3号機の水素爆発で生じている火炎や爆煙については水素以外の可燃性ガスが寄与している可能性が高い。

- (6) 主蒸気逃がし安全弁(以下「SRV」という。)の逃がし弁機能の不安定動作(中途開閉状態の継続と開信号解除の不成立)が生じた原因が不明である。

このことを踏まえると、全交流動力電源喪失(以下「SBO」という。)条件下でのSRVの逃がし弁機能の挙動、計装用圧縮空気系の隔離による影響(窒素圧の低下等)及び不安定動作が確認されたSRV以外の機器における不安定動作の可能性について、網羅的に把握する必要がある。

- (7) SRVの安全弁機能の作動開始圧力が低下していたなど、SA条件下では様々な機器が設計基準事故条件下とは異なる挙動をしている。

このため、SA時の機器の挙動に関する知見を集積する必要がある。

また、AM対策の圧力計を含めて、SA条件下での計測機器の信頼性について検証する必要がある。



(8) 3号機のベントについては、(1)でも触れているが、ADSが設計の意図と異なる条件(サブプレッションチェンバ圧力の上昇による低圧注水系ポンプの背圧上昇を誤検知したこと)で作動したことによりPCV圧力がRDの破壊圧力に達し、ベントが成立した。

このことを踏まえると、SA時のADSの作動に関する設計条件等を確認する必要がある。

また、PCV圧力が上昇する主要因として、水蒸気発生が想定されてきたが、水素による加圧及び漏えいによる減圧などのふるまいが、従来の事故シナリオに対してどの程度影響するのか具体的に確認する必要がある。

(9) 3号機のベント成功回数は2回である。

3号機のベント時にSGTS配管を通じて4号機原子炉建屋内に水素が流入、その後、40時間に渡り同建屋内に水素が滞留し、爆発に至った。

同建屋内に水素が滞留していた間には、同建屋周辺で作業員による復旧作業が実施されていたことを踏まえると、水素が滞留した原子炉建屋等における重大事故等対策や復旧作業等の安全確保に関して検討する必要がある。

(参考)

東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る被ばく実績

令和3年3月10日の第63回原子力規制委員会において、ご指示いただいた東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る現地調査における被ばく実績は、以下のとおり。(現地調査参加者：計26名)

(単位：mSv)

	累積線量 (令和元年度)	累積線量 (令和2年度)
A	11.7	9.4
B	15.9	9
C	9.1	8.9
D	14.1	8.5
E	5	6
F	0.1	3.1
G	—	2.5
H	—	1.3
I	—	1.3
J	—	1.3
K	2.8	1.1
L	2.8	1.0
M	—	0.9
N	2.7	0.5
O	0.2	0.5
P	2.7	0.4
Q	—	0.1
R	—	0.0
S	—	0.0
T	0.0	0.0
U	3.9	—
V	0.4	—
W	0.1	—
X	0.1	—
Y	0.0	—
Z	0.0	—

※1：小数点以下第2位を四捨五入した値

※2：—は、現地調査参加実績なし

## 東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析の状況

令和4年4月20日  
原子力規制庁

### 1. 趣旨

本議題は、東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析の状況について報告するものである。

### 2. 経緯

東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析については、令和3年3月31日に開催された第70回原子力規制委員会において、調査・分析を継続し、その状況について、年度ごとに取りまとめながら進める方針が了承された。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症予防などのため、報告書をまとめるだけの進捗が達成できず、また、可燃性ガスの発生源の分析作業も継続中であり、現在に至っている(これまでの経緯は参考1のとおり)。

### 3. 令和3年度の調査・分析の状況

(1)シールドプラグの汚染状況の追加調査(シールドプラグの裏面、原子炉ウエル等の汚染状況の調査)(調査概要は別紙1のとおり)

(ア)2号機シールドプラグ下面の高線量の汚染をより詳細に把握するため、東京電力ホールディングス株式会社(以下「東京電力」という。)との協働調査として、シールドプラグの既存の穿孔穴2箇所(直径50mm、深さ70mm)及び新規に穿孔した穿孔穴13カ所(直径50mm、深さ100mm)の穴内部での線量率分布の測定を行った。また、シールドプラグ下面の放射性物質の偏在性を確認するため、シールドプラグ上の床表面並びにシールドプラグ周囲部及び継ぎ目部の周辺線量当量率を測定した。

(イ)その結果、床表面の汚染は低く、シールドプラグ下面に放射性物質が存在し、偏在性を有していることが確認された。また、シールドプラグ継ぎ目部の周辺線量当量率が高く、放射性物質を含む気体の放出経路の検討に資する知見が得られた。今後、穿孔した穴内部の線量率分布の測定結果が生じるメカニズムの検討を行う。

(2)水素爆発時の原子炉建屋内のガス組成の検討(水素、可燃性有機化合物等を含むガスの物理的・化学的特性の検討)(調査概要は別紙2のとおり)

(ア)BWRの格納容器内には、可燃性有機化合物を含むガスの発生源となり得るケーブルや保温材が存在することから、東京電力から格納容器内で使用され

ているケーブル及び保温材の同材品及び類似品の試料提供を受け、これらの試料の加熱試験を東京電力及び日本原子力研究開発機構(以下「JAEA」という。))にて行った。

- (イ) その結果、各試料を約 1,000°Cまで加熱した際に複数の温度域で試料重量が減少すること、ケーブル等に使用されている有機材料が熱分解生成ガスとして検出されていることが確認された。検出されたガスについては、ガス成分の推定を行ったが、今後、発生ガスの定量化の検討を行う。また、少量(2%程度)の酸素存在条件下での実験の検討を行う。

(3) 原子炉建屋に対する継続的な3次元レーザースキャンの測定(調査概要は別紙3のとおり)

- (ア) 4号機原子炉建屋における継続的な3次元レーザースキャンの測定を行うため、定点測定用の基準点を用いた3次元レーザースキャンを行うとともに、2号機シールドプラグの変形を調査するため、同様の構造を有する他プラントのシールドプラグの詳細な形状測定(3次元レーザースキャン)を行った。
- (イ) その結果、4号機原子炉建屋並びに2号機シールドプラグ及び5号機シールドプラグ等の詳細な形状データが得られた。今後、継続的なデータ取得を進めるとともに、得られた形状データの分析を行う。

(4) 継続的な線量率の測定(調査概要は別紙4のとおり)

- (ア) 3号機原子炉建屋内のガンマカメラ測定及び2号機原子炉建屋内等のスミア試料の採取・分析を行うとともに、高い周辺線量当量率となっている1号機非常用ガス処理系フィルタトレインの線量率測定に用いる遠隔調査用ローダーの準備及び1/2号機非常用ガス処理系配管撤去作業に伴う切断配管のガンマカメラ測定の準備を行った。
- (イ) その結果、3号機原子炉建屋1階における局所的な高線量率の箇所を確認するとともに、2号機原子炉建屋各階、3号機非常用ガス処理系フィルタトレイン内、及び1/2号機非常用ガス処理系配管内のスミア試料の分析により、放射性核種の分布傾向に関する情報が得られた。今後、高い周辺線量当量率の環境下における線量率測定のための資機材準備及び配管切断等の作業が進捗次第、1号機非常用ガス処理系フィルタトレインの線量率測定及び1/2号機非常用ガス処理系配管のガンマカメラ測定を行う。

(5) モニタリングポスト、エリアモニタ、プロセスモニタ等のデータに基づく核種放出挙動の分析(セシウムの放出時期に関する検討)(調査概要は別紙5のとおり)

- (ア) 東京電力福島第一原子力発電所敷地外の空間線量率モニタリングデータ及び同発電所敷地内の6号機非常用ガス処理系排ガス放射線モニタの線量率

データに基づく放射性核種の放出挙動の分析を行った。

- (イ) その結果、平成23年3月12日以降に浪江町浪江のモニタリングポスト(発電所敷地から北北西約 8.6km)等において、複数の空間線量率のピークが確認されること、6号機非常用ガス処理系排ガス放射線モニタでは、1号機格納容器ベント及び1号機原子炉建屋の水素爆発以前にも複数のピークが確認された。今後、バックグラウンドの低い同年3月12日前後のデータ及び空間線量率の高いピークが確認された同年3月15、18、20、24日等のデータを基に放射性核種の放出挙動の分析を行う。

なお、安全規制との関係について、大量の水素発生時における格納容器の圧力制御のあり方、極限環境下におけるインターロック解除の可能性などについて、問題提起をした。

#### 4. 今後の予定

令和4年度は、上記の事項について、調査・分析を継続し、結果がまとまり次第、取りまとめた上で原子力規制委員会に報告する。

なお、中間取りまとめに対する発電用原子炉設置者及び原子力エネルギー協議会(以下「ATENA」という。)の見解等を確認したが、発電用原子炉設置者から共有される情報等についても調査・分析に活用する。

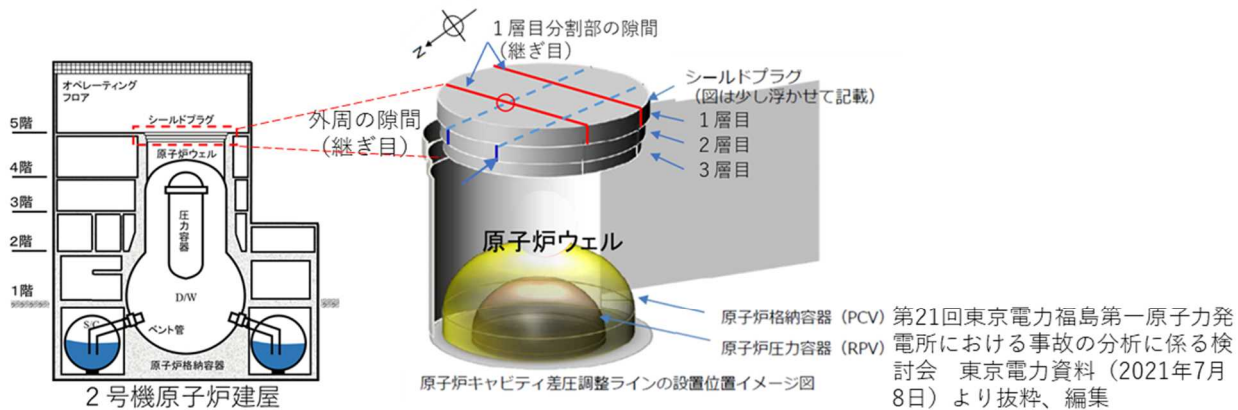
これまでの調査・分析により得られた損傷状況、汚染状況等の画像、データ等については、データベースとして公表するよう検討を進める。

以上

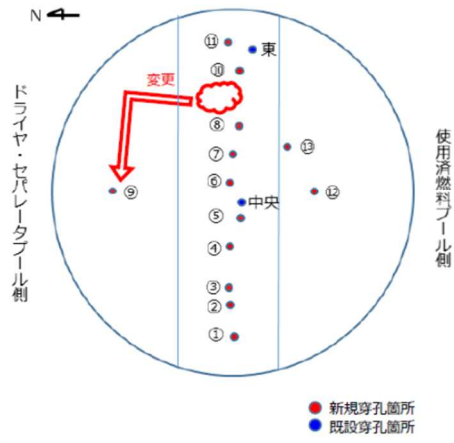
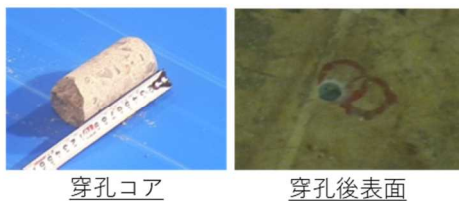
#### <別紙>

- 別紙1 シールドプラグの汚染状況の追加調査(シールドプラグの裏面、原子炉ウェル等の汚染状況の調査)の調査概要
- 別紙2 水素爆発時の原子炉建屋内のガス組成の検討(水素、可燃性有機化合物等を含むガスの物理的・化学的特性の検討)の調査概要
- 別紙3 原子炉建屋に対する継続的な3次元レーザースキャンの測定の調査概要
- 別紙4 継続的な線量率の測定の調査概要
- 別紙5 モニタリングポスト、エリアモニタ、プロセスモニタ等のデータに基づく核種放出挙動の分析(セシウムの放出時期に関する検討)の調査概要
- 参考1 これまでの経緯
- 参考2 東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る被ばく実績

(1)シールドプラグの汚染状況の追加調査(シールドプラグの裏面、原子炉ウェル等の汚染状況の調査)の調査概要



シールドプラグ1層目に穿孔し、穿孔箇所内の線量率測定等



穿孔箇所の状況



線量調査の状況

測定位置No.	穿孔箇所床面からの挿入深さ					
	(最大挿入深さ)	8cm	6cm	4cm	2cm	0cm
1	(9.5) 7.37	7.35	10.2	12.0	24.1	35.3
2	(9.0) 8.65	8.15	8.23	10.4	18.5	41.4
3	(8.0) 32.3	34.7	43.3	43.7	65.5	101
4	(7.0) 72.2	-	66.3	86.4	110	147
5	(7.5) 24.5	-	25.1	26.2	70.1	125
6	(7.0) 42.8	-	44.4	45.9	78.1	169
7	(9.0) 62.0	51.5	52.7	53.9	72.9	112
8	(10.0) 36.5	40.4	45.6	40.5	65.5	137
9	(8.5) 70.2	69.5	91.5	93.6	97.4	176
10	(7.0) 4.83	-	5.34	6.37	12.7	24.0
11	(8.0) 5.90	-	8.41	10.6	15.6	26.8
12	(8.0) 87.3	-	92.4	95.6	111	228
13	(10.0) 75.4	76.2	77.6	88.4	91.3	182
既設穿孔箇所(中央部)	(5.0)	-	-	807	773	529
既設穿孔箇所(東側)	(5.0)	-	-	289	221	136

測定器: Polimaster PM1703MO-1

第27回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 東京電力資料 (2021年12月21日) より抜粋、編集

測定データ (2021.12.14測定)

(2) 水素爆発時の原子炉建屋内のガス組成の検討(水素、可燃性有機化合物等を含むガスの物理的・化学的特性の検討)の調査概要

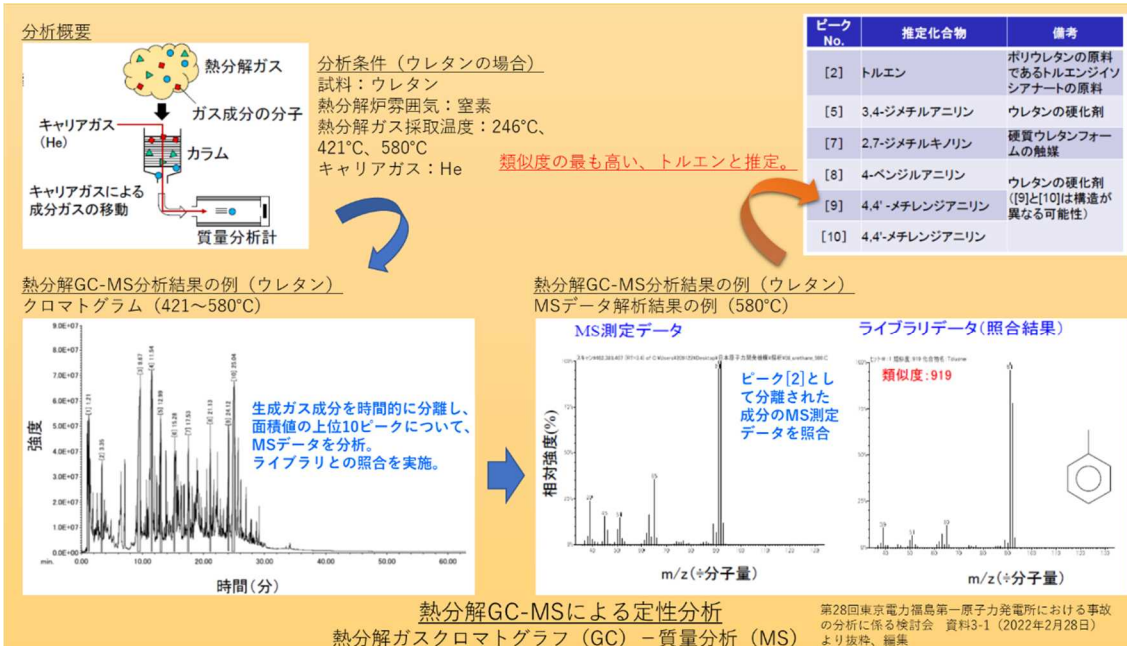
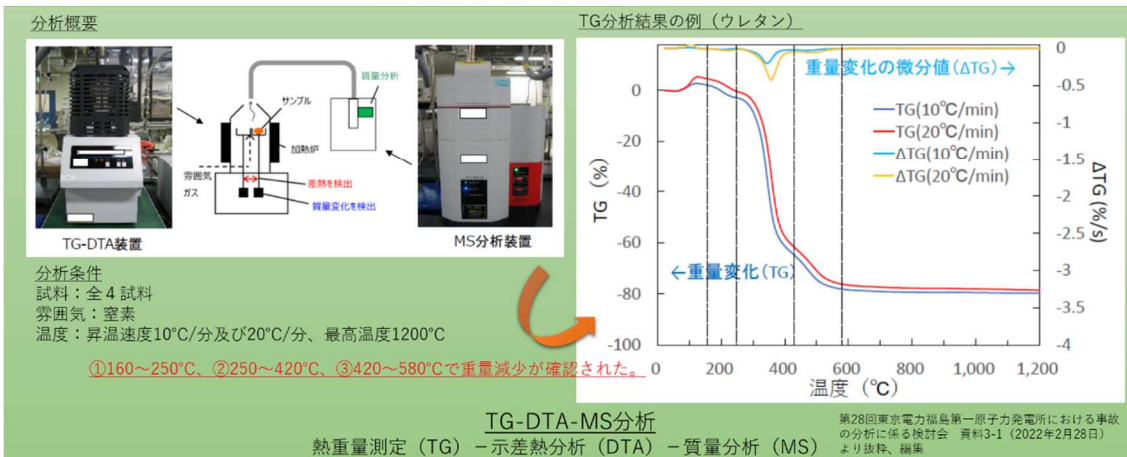
提供試料	仕様	提供試料写真	ケーブル分解前
PNケーブル (絶縁体)	難燃性エチレンプロピレンゴム		
PNケーブル (シース)	特殊クロロブレンゴム		
CVケーブル (絶縁体)	架橋ポリエチレン		
CVケーブル (シース)	難燃性特殊耐熱ビニル		
保温材	ウレタン		

JAEA BWR格納容器内有機材料  
熱分解生成気体の分析  
(ケーブル及び保温材の加熱試験)

熱重量測定 (TG) -  
示差熱分析 (DTA) -  
質量分析 (MS)

熱分解ガスクロマトグラフ (GC) - 質量分析 (MS)

(東京電力提供試料を使用)



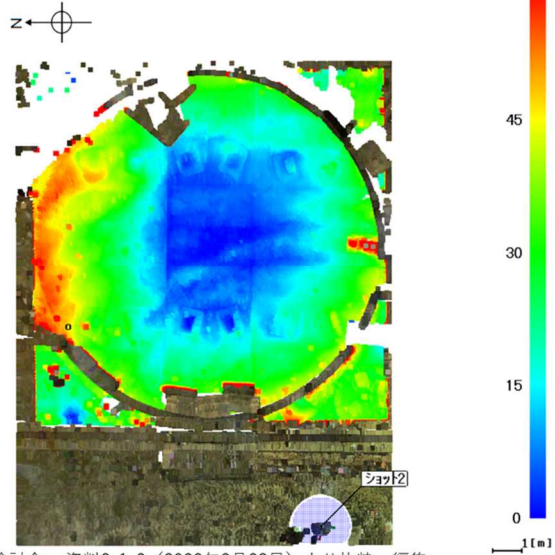
### (3) 原子炉建屋に対する継続的な3次元レーザースキャンの測定の調査概要

#### 2号機シールドプラグの形状測定 (各測定点の高低差による分析)

(単位: mm)

シールドプラグの中心を基準点として、高低差を分析

- 端部から中心部に向けて落ち込みが見られる。
- 東西方向よりも南北方向の方が落ち込みの程度が大きい。(東西方向は概ね3cm程度の落ち込みに対して、南北方向は概ね6cm程度の落ち込み)



第28回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 資料2-1-3 (2022年2月28日) より抜粋、編集  
シールドプラグ表面の状況 (1F2号機)



写真は、いずれも2021年12月14日に原子力規制庁撮影



中心付近を拡大

第28回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会  
資料2-1-3 (2022年2月28日) より抜粋、編集

#### シールドプラグの形状比較 (1F2号機、1F5号機及び島根1号機の比較)

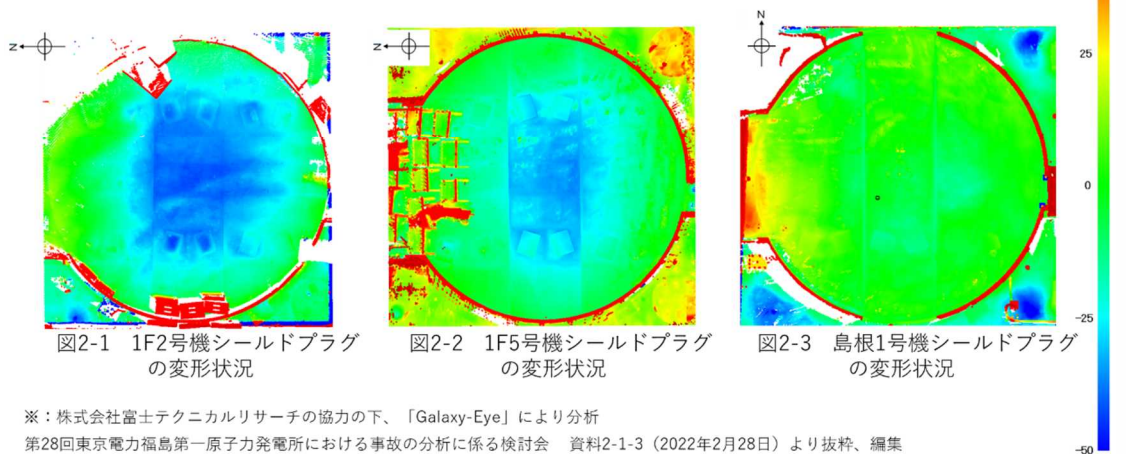


図2-1 1F2号機シールドプラグの変形状況

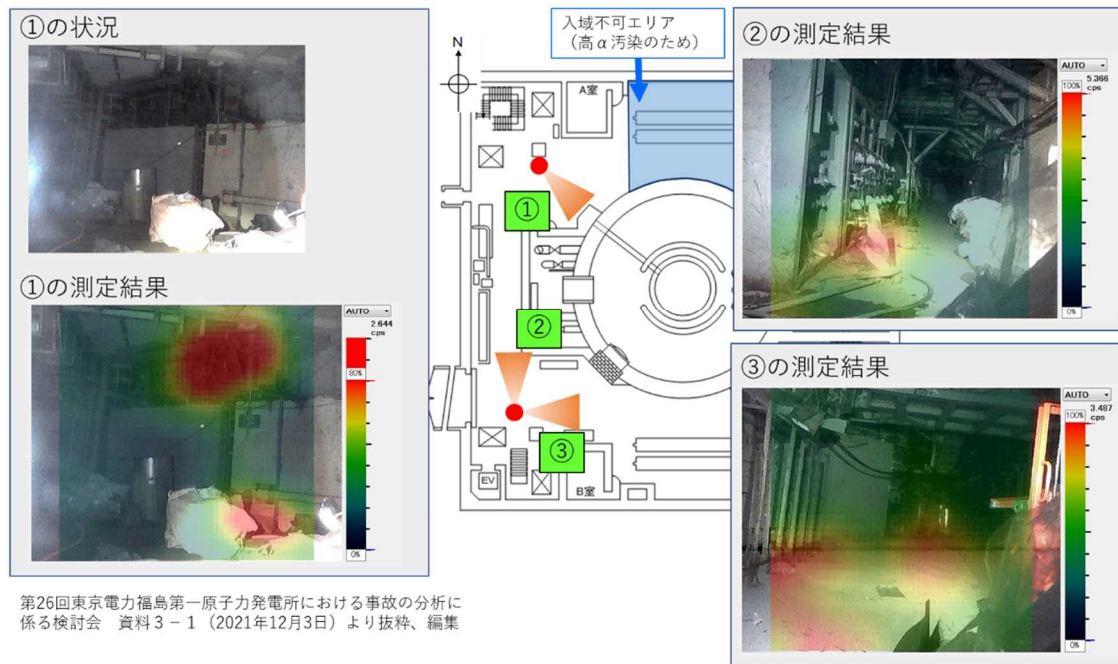
図2-2 1F5号機シールドプラグの変形状況

図2-3 島根1号機シールドプラグの変形状況

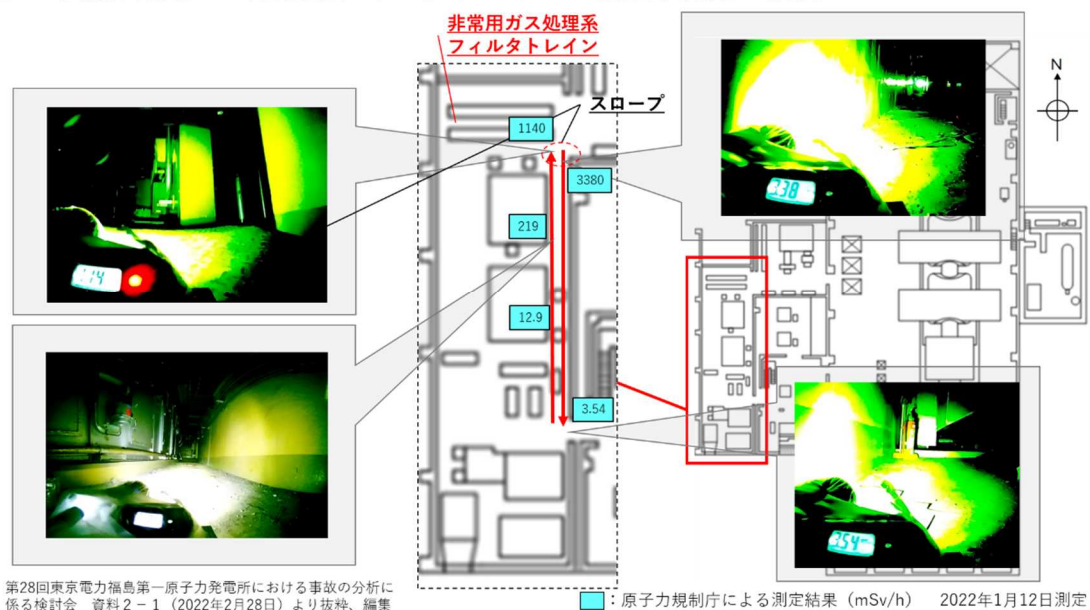


#### (4) 継続的な線量率の測定の調査概要

##### ○ 3号機原子炉建屋1階におけるガンマカメラ測定の概要

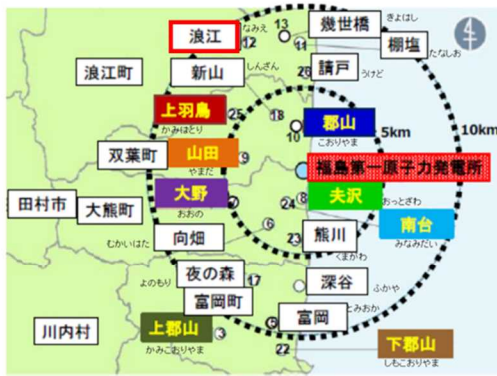


##### ○ 1号機非常用ガス処理系フィルタトレインの線量率測定の概要



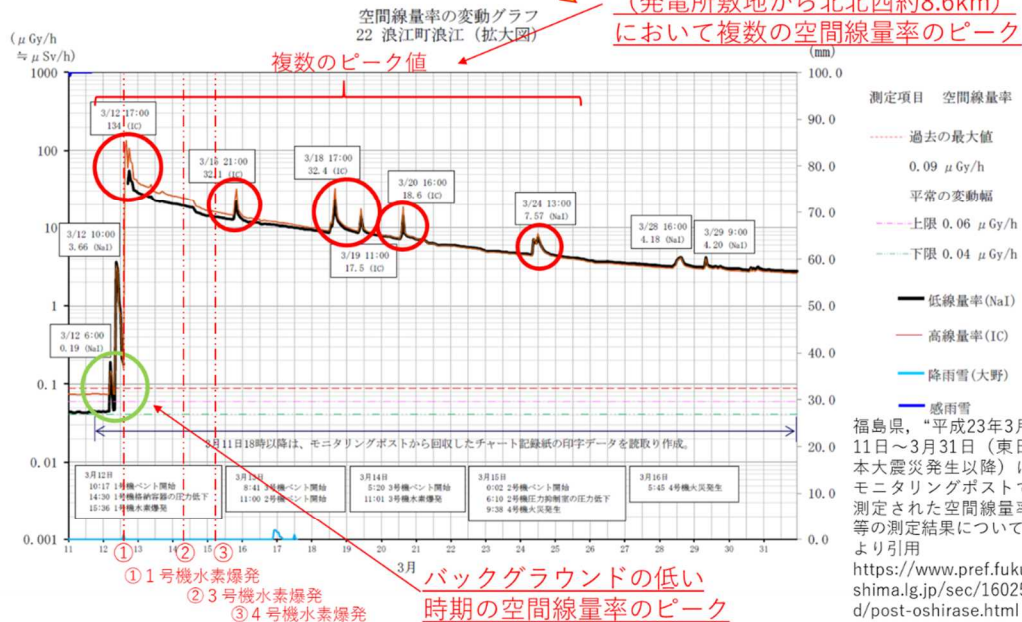
(5) モニタリングポスト、エリアモニタ、プロセスモニタ等のデータに基づく核種放出挙動の分析(セシウムの放出時期に関する検討)の調査概要

○モニタリングポスト等のデータに基づく核種放出挙動の分析

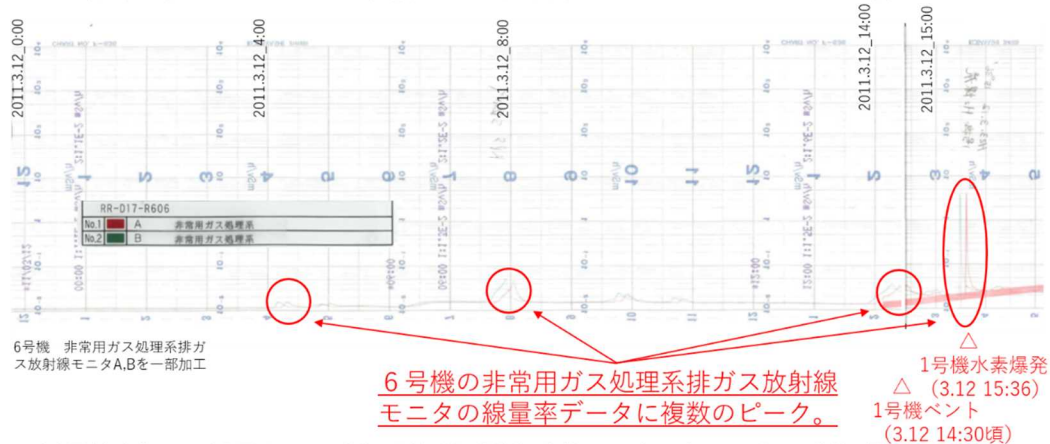


東京電力ホールディングス株式会社, “福島第一原子力発電所 1～3号機の炉心・格納容器の状態の推定と未説明問題に関する検討 第5回進捗報告,” 2017年12月25日より抜粋、一部加工

浪江町浪江のモニタリングポスト  
(発電所敷地から北北西約8.6km)  
において複数の空間線量率のピーク



○6号機非常用ガス処理系排ガス放射線モニタのデータ分析



第20回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 資料2-3 (2021年5月18日)より抜粋、編集

## これまでの経緯

### 令和3年

- 3月 5日 第 19 回事故分析検討会にて中間取りまとめを取りまとめ
- 3月10日 第 63 回原子力規制委員会へ中間取りまとめを報告
- 3月31日 第 70 回原子力規制委員会において、今後の調査・分析の進め方等について了承
- 5月12日 第 7 回原子力規制委員会へ中間取りまとめに対する発電用原子炉設置者の見解等の回答を報告
- 5月18日 第 20 回事故分析検討会
- 今後の調査・分析
  - 中間取りまとめに対する発電用原子炉設置者の見解等
  - (JAEA)試料分析の計画
  - (東京電力)1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
  - (東京電力)2号機シールドプラグ高濃度汚染への対応状況及び今後の計画
  - (東京電力)原子力規制庁と協働で実施した2号機オペレーティングフロア調査結果
- 7月 8日 第 21 回事故分析検討会
- 中間取りまとめに対する中国電力株式会社の見解等
  - 2号機シールドプラグ調査、2号機及び4号機原子炉建屋内調査
  - (JAEA)試料分析の状況(前回中間とりまとめ未掲載分の令和2年度成果)
  - (東京電力)福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
  - (東京電力)1~4号機 SGTS 室調査の結果
  - (東京電力)2号機シールドプラグ高濃度汚染への対応状況
  - (東京電力)2号機オペレーティングフロア調査におけるシールドプラグ穿孔の検討状況
- 9月14日 第 22 回事故分析検討会
- 中間取りまとめに対する東北電力株式会社及び日本原子力発電株式会社の見解等
  - 2号機シールドプラグ調査、2号機及び4号機原子炉建屋内調査等の状況

- (JAEA)2号機原子炉建屋スミア試料の $\gamma$ 線分析結果
  - (東京電力)有機化合物を含む可燃性ガスの発生源に関する過去の調査結果から得られた情報
  - (東京電力)1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
  - (東京電力)2号機シールドプラグ穿孔部の調査状況
- 10月19日 第23回事故分析検討会
- 中間取りまとめに対する中部電力株式会社、北陸電力株式会社及び電源開発株式会社の見解等
  - 2号機シールドプラグ調査状況
  - (JAEA)BWR格納容器内有機材料熱分解生成気体の分析計画
  - (東京電力)2号機オペフロ内シールドプラグ穿孔部調査状況
  - (東京電力)ケーブル及び塗料の可燃性有機ガス発生量評価計画
  - (東京電力)福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
- 11月9日 第24回事故分析検討会 非公開
- 中間取りまとめに対する北海道電力株式会社及び関西電力株式会社の見解等
- 11月11日 第25回事故分析検討会 非公開
- 中間取りまとめに対する九州電力株式会社及び四国電力株式会社の見解等
- 12月3日 第26回事故分析検討会
- 中間取りまとめに対する東京電力の見解等
  - 2号機シールドプラグ調査、1号機及び3号機原子炉建屋内調査、2号機及び3号機SGTS室 $\beta$ 汚染調査の状況
  - (東京電力)2号機オペフロ内シールドプラグ穿孔部調査状況
  - (東京電力)ケーブル及び保温材の可燃性ガス発生量評価予備試験速報
- 12月21日 第27回事故分析検討会
- 2号機シールドプラグ調査、1号機及び3号機原子炉建屋内調査等の状況
  - 令和3年度(2021年度)の調査・分析の状況
  - (JAEA)試料分析の状況
  - (東京電力)2号機オペフロ内シールドプラグ穿孔部調査状況
  - (東京電力)ケーブル及び保温材の可燃性ガス発生量評価予備試験速報
  - (東京電力)福島第一原子力発電所事故調査の中長期計画

令和4年

1月19日 第60回原子力規制委員会へ中間取りまとめに対する発電用原子炉  
設置者の見解等の確認結果を報告

2月28日 第28回事故分析検討会

- 4号機原子炉建屋火災、2号機シールドプラグ変形調査、格納容器内ケーブル等調査の状況
- (JAEA)BWR 格納容器内有機材料熱分解生成気体の分析－結果速報－
- (東京電力)ケーブル・塗料・保温材の可燃性ガス発生量評価試験結果
- (東京電力)3号機 RHR 配管における滞留ガス
- (東京電力)1号機 PCV 内部調査の状況
- (東京電力)1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
- (ATENA)中間取りまとめに対する ATENA の取り組み

以上

(参考2)

東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る被ばく実績

令和3年度の東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る現地調査における被ばく実績は、以下のとおり。(現地調査参加者：計17名)

(単位：mSv)

	累積線量 (令和元年度)	累積線量 (令和2年度)	累積線量 (令和3年度)
1	14.1	8.5	8.8
2	9.1	8.9	8.7
3	15.9	9	8.5
4	—	—	8.2
5	11.7	9.4	6.5
6	5	6	6.2
7	—	1.3	6.2
8	0.2	0.5	6.0
9	—	2.5	0.8
10	2.7	0.5	0.3
11	2.7	0.4	0.3
12	2.8	1.1	0.2
13	—	1.3	0.1
14	0.1	3.1	0.1
15	—	—	0.1
16	—	—	0.1
17	2.8	1.0	0.0
18	—	1.3	—
19	—	0.9	—
20	—	0.1	—
21	—	0.0	—
22	—	0.0	—
23	0.0	0.0	—
24	3.9	—	—
25	0.4	—	—
26	0.1	—	—
27	0.1	—	—
28	0.0	—	—
29	0.0	—	—

※1：小数点以下第2位を四捨五入した値

※2：—は、現地調査参加実績なし

#### (参考4)

### 事故分析検討会の構成メンバー

#### (原子力規制委員会)

更田 豊志 原子力規制委員会委員長 (第30回まで)  
山中 伸介 原子力規制委員会委員長 (第31回から)  
杉山 智之 原子力規制委員会委員 (第32回から)

#### (原子力規制庁)

櫻田 道夫 原子力規制技監 (第30回まで)  
市村 知也 原子力規制技監 (第31回から)  
金子 修一 緊急事態対策監 (第30回まで)  
森下 泰 長官官房審議官 (第31回から)  
安井 正也 原子力規制特別国際交渉官  
遠山 眞 技術基盤課 課長 (第21回から)  
平野 雅司 技術基盤課 技術参与  
阿部 豊 シビアアクシデント研究部門 統括技術研究調査官 (第20回から)  
竹内 淳 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室長  
岩永 宏平 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 企画調査官  
星 陽崇 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 上席技術研究調査官  
木原 昌二 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 室長補佐  
佐藤 雄一 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 管理官補佐  
安部 諭 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 室長補佐  
川崎 憲二 実用炉審査部門 安全管理調査官 (第20回まで)  
角谷 愉貴 実用炉審査部門 管理官補佐 (第21回から第30回まで)  
建部 恭成 実用炉審査部門 主任安全審査官 (第31回から)  
上ノ内 久光 原子力安全人材育成センター 原子炉技術研修課 教官

#### (日本原子力研究開発機構 安全研究・防災支援部門)

丸山 結 安全研究センター 副センター長  
杉山 智之 安全研究センター 副センター長 (第31回まで)  
天谷 政樹 安全研究センター 副センター長 (第14回から)  
与能本 泰介 安全研究センター 特別専門職

#### (外部専門家)

市野 宏嘉 防衛大学校 准教授  
浦田 茂 三菱重工業株式会社原子力セグメント炉心・安全技術部 安全評価担当部長

(第31回から)

大石 佑治 大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻 准教授

(第30回から)

門脇 敏 長岡技術科学大学 教授

二ノ方 壽 東京工業大学 名誉教授

前川 治 原子力損害賠償・廃炉等支援機構 技監

宮田 浩一 原子力エネルギー協議会 部長 (第21回から)

牟田 仁 東京都市大学 工学部原子力安全工学科 准教授

山路 哲史 早稲田大学理工学術院先進理工学研究科共同原子力専攻 教授

(第31回から)

#### 【その他検討会出席者】

(原子力規制委員会)

山中 伸介 原子力規制委員会委員 (第30回まで) (再掲)

(原子力規制庁)

秋葉 美幸 シビアアクシデント研究部門 統括技術研究調査官 (第21回まで)

栃尾 大輔 シビアアクシデント研究部門 主任技術研究調査官 (第29回から)

塚本 直史 シビアアクシデント研究部門 主任技術研究調査官 (第27回、第32回)

西村 健 シビアアクシデント研究部門 技術研究調査官 (第21回まで)

小城 烈 シビアアクシデント研究部門 技術研究調査官 (第21回まで)

岡本 肇 実用炉審査部門 上席安全審査官 (第25回)

照井 裕之 実用炉審査部門 安全審査官 (第24回)

坂中 伸次 福島第一原子力規制事務所 防災専門官 (第28回)

平山 英夫 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 技術参与

(日本原子力研究開発機構)

永瀬 文久 安全研究センター 副センター長 (第28回まで)

阿部 仁 規制・国際情報分析室長代理 (第29回、第31回)

飯田 芳久 規制・国際情報分析室 福島第一原子力発電所事故分析チームリーダー  
(第20回から)

垣内 一雄 規制・国際情報分析室 福島第一原子力発電所事故分析チーム  
研究副主幹 (第29回)

大野 卓也 規制・国際情報分析室 福島第一原子力発電所事故分析チーム 研究員  
(第28回、第29回、第31回、第33回)

西田 明美 材料・構造安全研究ディビジョン 副ディビジョン長  
(第32回、第34回)

真野 晃宏 材料・構造安全研究ディビジョン 耐震・構造健全性評価研究グループ  
研究員 (第32回、第34回)



(原子力損害賠償・廃炉等支援機構)

中村 紀吉 執行役員 (第 28 回から)  
山中 康慎 執行役員 (第 32 回から)  
福田 俊彦 執行役員 (第 28 回まで)  
若林 宏治 技監  
湊 和生 理事特別補佐  
笹沼 美和 審議役 (第 31 回)  
中野 純一 審議役  
藪内 彰夫 (第 31 回)

(大阪大学)

牟田 浩明 大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻 准教授 (第 33 回から)

(東京電力ホールディングス株式会社)

稲垣 武之 常務執行役員 (第 26 回)  
飯塚 直人 福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉技術担当 (第 32 回から)  
田南 達也 執行役員 福島第一廃炉推進カンパニー バイスプレジデント  
(第 31 回まで)  
大野 公輔 福島第一廃炉推進カンパニー バイスプレジデント (第 33 回から)  
石川 真澄 理事 福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉技術担当 (第 31 回まで) 他

(中国電力株式会社) 【第 21 回】

北野 立夫 取締役常務執行役員 電源事業本部 副本部長  
山本 直樹 執行役員 電源事業本部 部長 (原子力安全技術) 他

(東北電力株式会社) 【第 22 回】

加藤 功 取締役 常務執行役員 原子力本部長  
佐藤 大輔 原子力本部 原子力部 原子力技術課長 他

(日本原子力発電株式会社) 【第 22 回】

劔田 裕史 取締役副社長  
山口 嘉温 執行役員 発電管理室長 他

(中部電力株式会社) 【第 23 回】

伊原 一郎 専務執行役員 原子力本部長 兼 原子力部長 CNO  
竹山 弘恭 原子力本部フェロー (原子力技術) 他

(北陸電力株式会社) 【第 23 回】

石黒 伸彦 原子力本部長  
福村 章 原子力本部 原子力部長 他

(電源開発株式会社) 【第 23 回】

浦島 彰人 代表取締役副社長執行役員  
首藤 敦 原子力事業本部 原子力技術部長 他

(北海道電力株式会社) 【第24回】

勝海 和彦 原子力事業統括部長補佐  
西條 政明 原子力事業統括部 部長 (運営管理担当) 他

(関西電力株式会社) 【第24回】

佐藤 拓 原子力事業本部 副事業本部長  
吉原 健介 原子力事業本部 安全高度化対策部長 他

(九州電力株式会社) 【第25回】

林田 道生 上席執行役員 原子力発電本部 副本部長  
金子 武臣 原子力発電本部 (原子力建設) 部長 他

(四国電力株式会社) 【第25回】

黒川 肇一 常務執行役員 原子力本部副本部長 原子力部長  
中川 俊一 原子力本部原子力部 安全グループリーダー 他

(原子力エネルギー協議会)

富岡 義博 理事 (第28回、第29回)  
山中 康慎 部長 (第28回) 他

(日立GEニュークリア・エナジー株式会社) 【第30回】

米谷 豊 主管技師  
上野 雄一郎 主任研究員  
鶴貝 宏久 チーフプロジェクトマネージャー

(大成建設株式会社) 【第31回】

道越 真太郎 技術センター都市基盤研究部防災研究室 室長  
馬場 重彰 技術センター都市基盤研究部防災研究室  
井尻 祐二 原子力本部 役員本部長 他

(株式会社テプコシステムズ) 【第34回】

野崎 謙一郎 原子力エンジニアリング事業部 原子力炉心技術部 マネージャー

※役職・所属は、出席時点。

以上

## 事故分析検討会の開催実績（令和3年5月以降、計●回開催）

第20回（令和3年5月18日）

- 今後の調査・分析
- 「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ」に対する発電用原子炉設置者の見解等
- （JAEA）試料分析の計画
- （東京電力）1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
- （東京電力）2号機シールドプラグ高濃度汚染への対応状況及び今後の計画
- （東京電力）原子力規制庁と協働で実施した2号機オペレーティングフロア調査結果

第21回（令和3年7月8日）

- 「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ」に対する発電用原子炉設置者（中国電力株式会社）の見解等
- 2号機シールドプラグ調査、2号機及び4号機原子炉建屋内調査
- （JAEA）試料分析の状況（前回中間とりまとめ未掲載分の令和2年度成果）
- （東京電力）福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
- （東京電力）1～4号機SGTS室調査の結果
- （東京電力）2号機シールドプラグ高濃度汚染への対応状況
- （東京電力）2号機オペレーティングフロア調査におけるシールドプラグ穿孔の検討状況

第22回（令和3年9月14日）

- 「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ」に対する発電用原子炉設置者（東北電力株式会社及び日本原子力発電株式会社）の見解等
- 2号機シールドプラグ調査、2号機及び4号機原子炉建屋内調査等の状況
- （JAEA）2号機原子炉建屋スミア試料の $\gamma$ 線分析結果
- （東京電力）有機化合物を含む可燃性ガスの発生源に関する過去の調査結果から得られた情報
- （東京電力）1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
- （東京電力）2号機シールドプラグ穿孔部の調査状況

第23回（令和3年10月19日）

- 「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ」に対する発電用原子炉設置者（中部電力株式会社、北陸電力株式会社及び電源開発株式会社）の見解等
- 2号機シールドプラグ調査状況
- （JAEA）BWR 格納容器内有機材料熱分解生成気体の分析計画
- （東京電力）2号機オペフロ内シールドプラグ穿孔部調査状況

- (東京電力) ケーブル及び塗料の可燃性有機ガス発生量評価計画
- (東京電力) 福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況

第24回(令和3年11月9日)

- 「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ」に対する発電用原子炉設置者(北海道電力株式会社、関西電力株式会社)の見解等

第25回(令和3年11月11日)

- 「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ」に対する発電用原子炉設置者(九州電力株式会社、四国電力株式会社)の見解等

第26回(令和3年12月3日)

- 「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ」に対する発電用原子炉設置者(東京電力ホールディングス株式会社)の見解等
- 2号機シールドプラグ調査、1号機及び3号機原子炉建屋内調査、2号機及び3号機SGTS室β汚染調査の状況
- (東京電力) 2号機オペフロ内シールドプラグ穿孔部調査状況
- (東京電力) ケーブル及び保温材の可燃性ガス発生量評価予備試験速報

第27回(令和2年10月16日)

- 2号機シールドプラグ調査、1号機及び3号機原子炉建屋内調査等の状況
- 令和3年度(2021年度)の調査・分析の状況
- (JAEA) 試料分析の状況
- (東京電力) 2号機オペフロ内シールドプラグ穿孔部調査状況
- (東京電力) ケーブル及び保温材の可燃性ガス発生量評価予備試験速報
- (東京電力) 福島第一原子力発電所事故調査の中長期計画

第28回(令和4年2月28日)

- 3号機及び5号機原子炉建屋内調査等の状況
- (JAEA) 有機材料熱分解生成気体の分析結果速報
- (東京電力) 可燃性ガス発生量評価試験結果
- (東京電力) 2号機RHR配管で確認した滞留ガスに関わる対応
- (東京電力) 1号機PCV内部調査の状況
- (原子力エネルギー協議会) 「東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ」に対する原子力エネルギー協議会の取り組み

第29回（令和4年4月26日）

- （JAEA）有機材料熱分解生成気体の分析結果
- （東京電力）可燃性ガス発生量評価試験結果
- （JAEA）試料分析のまとめ
- 1号機原子炉建屋内調査、5号機 RHR 配管等確認調査、敦賀1号機シールドプラグ調査等の状況
- （東京電力）1号機 PCV 内部調査の状況
- （原子力エネルギー協議会）ベント後に格納容器が負圧になる可能性

第30回（令和4年6月30日）

- （東京電力）1号機 PCV 内部調査の状況
- （東京電力）1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
- 2号機及び3号機原子炉建屋内調査、1号機原子炉建屋外観調査等の状況
- （東京電力）1号機 CS(A)系テストライン他の配管表面線量の測定結果
- （東京電力）2号機燃料取扱機操作室調査の実施

第31回（令和4年9月6日）

- （東京電力）1号機 PCV 内部調査の状況
- モニタリングポスト等の空間線量率データ等の分析
- 2号機シールドプラグの汚染量評価
- （JAEA）有機材料熱分解生成ガス分析の計画
- （東京電力）可燃性有機ガス評価計画
- 水素燃焼試験等の概要
- 5号機原子炉建屋調査、モニタリングポスト現地調査の状況
- （東京電力）2号機燃料取扱機操作室調査の状況
- （東京電力）福島第一原子力発電所事故調査中長期計画の取組状況

第32回（令和4年10月31日）

- （東京電力）1号機 PCV 内部調査の状況
- （大阪大学）1号機 PCV 内部調査により核にされたコンクリートに関する事象の検討
- 1号機 PCV 内部調査の整理点
- モニタリングポスト等の空間線量率データ等の分析
- 1, 2号機非常用ガス処理系配管の汚染の分析
- 2号機シールドプラグ変形の状況
- （JAEA）シールドプラグの隙間の断面積の評価
- （東京電力）2号機シールドプラグにおける汚染の状況
- 6号機シールドプラグの形状測定、1号機タービン建屋地下1階の予備調査の状況
- 2号機燃料取扱機操作室調査の状況

- 1号機原子炉補機冷却系内包水サンプリング作業の状況

第33回（令和4年12月5日）

- （東京電力）福島第一原子力発電所1号機の格納容器内部調査から得られた情報
- 東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ（2022年度）素案
- （東京電力）福島第一原子力事故発生後の詳細な進展メカニズムに関する未確認・未解明事項の調査・検討結果（第6回進捗報告）
- （東京電力）1号機RCW熱交換器入口ヘッダ配管の滞留ガスの分析結果
- 福島第一原子力発電所2号機シールドプラグの変形に係る検討内容等のまとめ
- 1号機タービン建屋地下1階調査及び2号機原子炉建屋三角コーナー部予備調査の状況

第34回（令和4年12月20日）

- 

以上

(参考5)

調査チームの構成員

(原子力規制庁)

森下 泰	長官官房審議官
安井 正也	原子力規制特別国際交渉官
竹内 淳	東京電力福島第一原子力発電所事故対策室長
岩永 宏平	東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 企画調査官
星 陽崇	東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 上席技術研究調査官
木原 昌二	東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 室長補佐
佐藤 雄一	東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 管理官補佐
佐藤 匡	東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 室長補佐
安部 諭	東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 室長補佐
小西 興治	東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 係長
羽賀 英希	広報室 専門職
上ノ内 久光	原子力安全人材育成センター 原子炉技術研修課 教官
平山 英夫	技術参与
近藤 健次郎	技術参与
鈴木 征四郎	技術参与
林 克己	技術参与
吉田 善行	技術参与

※役職・所属は、2022年●月●日時点。

以上

(参考6)

現地調査の実施実績

2022年			
回数	月	日	実施内容
40	11	30日	2号機 原子炉建屋
39	月	11日	1号機 タービン建屋
38	10	21日	1号機 タービン建屋 (地下階予備調査)
37		13, 14日	4号機 原子炉建屋、5号機 原子炉建屋 6号機 原子炉建屋 オペフロ 3D レーザースキャナによる構造測定
36	9	26, 27日	4号機 カバー建屋、4号機 原子炉建屋
35	8	25日	5号機 原子炉建屋
34	7	4, 5日	発電所周辺のモニタリングポスト
33	6	16, 17日	4号機 原子炉建屋、1号機タービン建屋屋上、3号機原子炉建屋
32	月	8日	4号機 カバー建屋
31	5	25, 26, 27日	4号機 原子炉建屋 3D レーザースキャナによる構造測定 2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) ガンマカメラによる汚染密度測定
30		12日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) ガンマカメラによる汚染密度測定
29		11日	4号機 カバー建屋 (1/2号機 SGTS 撤去配管予備調査)
28	4	28日	4号機 原子炉建屋
27		14, 15日	5号機 原子炉建屋、1号機 原子炉建屋
26		13日	5号機 SGTS 室
25		8日	敦賀発電所1号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) 3D レーザースキャナによる構造測定
24	3	30日	4号機 原子炉建屋
23	月	3日	4号機 原子炉建屋
22	2	24日	4号機 カバー建屋 (1/2号機 SGTS 撤去配管予備調査)
21		22日	島根原子力発電所1号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) 3D レーザースキャナによる構造測定
20		17, 18日	4号機 原子炉建屋、5号機 原子炉建屋



19	1月	12, 13, 14日	1号機 SGTS 室 4号機 カバー建屋 (1/2号機 SGTS 撤去配管予備調査) 5号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) 3D レーザースキャナによる構造測定 屋外
2021年			
回数	月	日	実施内容
18	12月	16, 17日	1号機 SGTS 室、3号機 原子炉建屋
17		13, 14, 15日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) 3D レーザースキャナによる構造測定
16		9日	ケーブル加熱試験[東京電力経営技術戦略研究所]
15		6, 7, 8日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査)
14		1日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査)
14	11月	29, 30日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) 5号機 SGTS 室
13		25, 26日	1号機 原子炉建屋 3号機 原子炉建屋 ガンマカメラによる汚染密度測定
12		18, 19日	2号機 SGTS 室、3号機 SGTS 室
11		12日	4号機 カバー建屋 (1/2号機 SGTS 撤去配管予備調査)
10	10月	7, 8日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) 4号機 タービン建屋 4号機 カバー建屋 (1/2号機 SGTS 撤去配管予備調査)
9	9月	9, 10日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査)
8	8月	26, 27日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) 5号機 原子炉建屋
7		5, 6日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査) 2号機 SGTS 室
6	7月	29, 30日	2号機 SGTS 室
5		20, 21日	4号機 原子炉建屋 3D レーザースキャナによる構造測定
4	6月	24, 25日	2号機 SGTS 室 4号機 原子炉建屋 3D レーザースキャナによる構造測定
3	4月	13, 14日	2号機 原子炉建屋 オペフロ (シールドプラグ調査)
2	1月	28日	1, 2号機共用排気筒 解体片 ガンマカメラによる汚染密度測定

2020年			
回数	月	日	実施内容
1	12 月	24, 25 日	1, 2 号機共用排気筒 解体片 <span style="border: 1px solid black;">ガンマカメラによる汚染密度測定</span>

※2022年●月●日時点。

(参考7)

東京電力提供情報等

No.	関連する 検討会	調査・分析に係る資料等	東京電力からの提供情報等
<b>第一章 シビアアクシデント時の Cs 移動メカニズムについての考察</b>			
<b>第一節 1/2 号機ベント配管系の特徴的汚染パターンからの知見</b>			
特になし			
<b>第一章 シビアアクシデント時の Cs 移動メカニズムについての考察</b>			
<b>第二節 2 号機シールドプラグ汚染からの知見</b>			
1	第 21 回 資料 3-3	2 号機オペフロ内表面汚染密度調査の状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 4 月 1 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000349065.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000349065.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 4 月 21 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000351509.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000351509.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 5 月 10 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000353385.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000353385.pdf</a>
2	第 21 回 資料 3-3	2 号機シールドプラグの穿孔 作業に関する状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 6 月 2 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000355134.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000355134.pdf</a> <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000355133.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000355133.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 6 月 14 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000357857.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000357857.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 6 月 30 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000359237.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000359237.pdf</a>
3	第 21 回 資料 3-3	2 号機オペフロ全域の空間線 量率及び表面線量率の測定結 果	2 号機原子炉建屋オペフロ内残置物移動・片付後調査 の結果について（2019 年 2 月 28 日廃炉・汚染水対策 チーム会合／事務局会議第 63 回資料 3-2） <a href="https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/decommissioning/committee/osensuitaisakuteam/2019/02/3-2-4.pdf">https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/decommissioning/committee/osensuitaisakuteam/2019/02/3-2-4.pdf</a>
4	第 21 回 資料 3-3	2 号機オペフロ全域の表面汚 染密度の測定結果	原子力規制庁と協働で実施した 2 号機オペレーティ ングフロア調査結果について（2021 年 5 月 27 日廃 炉・汚染水・処理水対策チーム会合／事務局会議第 90 回資料 3-2）

No.	関連する 検討会	調査・分析に係る資料等	東京電力からの提供情報等
			<a href="https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/decommissioning/committee/osensuitaisakuteam/2021/05/90-3-2-3-1.pdf">https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/decommissioning/committee/osensuitaisakuteam/2021/05/90-3-2-3-1.pdf</a>
5	第 22 回 資料 3-1	コアサンプリングの採取状況	2号機原子炉建屋オペレーティングフロアフェンス撤去およびコアサンプル採取について(結果報告)(2014年3月27日廃炉・汚染水対策チーム会合/事務局会議第4回資料3-2) <a href="https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/pdf/20140327_02/140327_02_020.pdf">https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/pdf/20140327_02/140327_02_020.pdf</a>
6	第 22 回 資料 3-3	3号機シールドプラグの変形	福島第一原子力発電所 3号機原子炉建屋上部ガレキ撤去後の建屋躯体調査結果について(2014年2月27日廃炉・汚染水対策チーム会合/事務局会議第3回資料3-5) <a href="https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/pdf/140227/140227_02kk.pdf">https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/pdf/140227/140227_02kk.pdf</a>
7	第 22 回 資料 3-3	2号機オペフロの空間線量率の測定結果	2号機原子炉建屋オペフロの放射線等調査結果について～残置物移動・片付後～(2019年5月20日特定原子力施設監視・評価検討会第71回資料2) <a href="https://www.nsr.go.jp/data/000270450.pdf">https://www.nsr.go.jp/data/000270450.pdf</a>
8	第 22 回 追加説明 資料	2号機オペフロの測定状況	2号機オペフロ測定調査時の写真
9	第 23 回 資料 3-1	2号機シールドプラグ上の測定結果	2号機オペフロ線量測定記録
10	第 26 回 追加説明 資料	2号機オペフロ内シールドプラグ穿孔に関する状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する面談(2021年11月15日) <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000374602.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000374602.pdf</a> <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000374603.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000374603.pdf</a>
11	第 27 回 資料 2-1 別添 2	1号機シールドプラグの変形	1号機 原子炉建屋 ガレキ撤去関連調査結果及び北側屋根鉄骨の切断開始について(2019年9月27日廃炉・汚染水対策チーム会合/事務局会議第70回資料3-2) <a href="https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/decommissioning/committee/osensuitaisakuteam/2019/09/3-2-3-1.pdf">https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/decommissioning/committee/osensuitaisakuteam/2019/09/3-2-3-1.pdf</a>
12	第 27 回 資料 2-1 別添 2	3号機シールドプラグの変形	福島第一原子力発電所 3号機原子炉建屋上部ガレキ撤去後の建屋躯体調査結果について(2014年2月27日廃炉・汚染水対策チーム会合/事務局会議第3回資料

No.	関連する 検討会	調査・分析に係る資料等	東京電力からの提供情報等
			料 3-5) <a href="https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/pdf/140227/140227_02kk.pdf">https://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/pdf/140227/140227_02kk.pdf</a>
13		2号機及び5号機シールドブ ラグ下方変形の検討状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022年10月17日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000408362.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000408362.pdf</a>
<b>第一章 シビアアクシデント時のCs移動メカニズムについての考察</b>			
<b>第三節 水蒸気によるCs移動仮設</b>			
特になし			
<b>第二章 落下炉心の挙動と原子炉格納容器への影響</b>			
<b>第一節 1号機原子炉格納容器内の様子と検討状況</b>			
14	第30回 資料1-1 第31回 資料1-1, 1-2 第32回 資料1-1	1号機PCV内部調査の状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022年5月31日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000392933.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000392933.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000392934.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000392934.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022年5月10日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000391110.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000391110.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000391111.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000391111.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022年6月15日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000394729.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000394729.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000394676.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000394676.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022年6月28日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000396839.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000396839.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000396840.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000396840.pdf</a>
15	第31回 資料1-2 第32回 資料1-2, 1-3	1号機原子炉建屋西面外壁の コンクリートコアに係る検討 状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022年11月9日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000410422.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000410422.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000410423.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000410423.pdf</a>
<b>第二章 落下炉心の挙動と原子炉格納容器への影響</b>			
<b>第二節 2号機及び3号機原子炉格納容器内の様子と検討状況</b>			
特になし			
<b>第二章 落下炉心の挙動と原子炉格納容器への影響</b>			
<b>第三節 今後の分析評価の進め方</b>			
特になし			

No.	関連する 検討会	調査・分析に係る資料等	東京電力からの提供情報等
<b>第三章 その他の調査項目の進捗状況など</b>			
<b>第一節 4号機「火災現場」位置の特定</b>			
特になし			
<b>第三章 その他の調査項目の進捗状況など</b>			
<b>第二節 3号機水素爆発関連の試験等</b>			
16	第22回 資料3-4	る原子炉格納容器内での可燃性ガスの発生の可能性に係る調査状況等	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する面談（2021年7月28日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000362394.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000362394.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する面談（2021年8月3日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000362395.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000362395.pdf</a>
17	第23回 資料4-1	可燃性ガス発生源に関する加熱試験を行うケーブル及び塗料等の情報	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する面談（2021年10月1日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000367204.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000367204.pdf</a> <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000367203.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000367203.pdf</a> 可燃性有機ガス発生量評価に関わる試料について（試験用試料の提供含む）
18	第23回 資料4-1	ケーブル及び保温材の加熱試験（予備試験）の状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する面談（2021年12月9日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000377368.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000377368.pdf</a> <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000377369.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000377369.pdf</a>
19	第28回 資料4-1	ケーブル・塗料・保温材の可燃性ガス発生量評価試験結果	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する面談（2022年2月21日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000383054.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000383054.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000383055.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000383055.pdf</a>
20	第29回 資料1-2	ケーブル・塗料・保温材の可燃性ガス発生量評価試験結果	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する面談（2022年4月12日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000387511.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000387511.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000387512.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000387512.pdf</a>
21	第31回 資料4-2	可燃性有機ガス評価計画等	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する面談（2022年5月20日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000391913.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000391913.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する面談（2022年8月3日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000400769.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000400769.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000400770.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000400770.pdf</a>
<b>第三章 その他の調査項目の進捗状況など</b>			
<b>第三節 非常用ガス処理系の汚染状況測定等</b>			

No.	関連する検討会	調査・分析に係る資料等	東京電力からの提供情報等
22	第 23 回 資料 5-3	1 号機及び 2 号機非常用ガス 処理系配管の一部撤去作業 の状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 8 月 25 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000364072.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000364072.pdf</a> <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000364071.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000364071.pdf</a>
23	第 28 回 資料 4-4 第 30 回 資料 2	1 号機及び 2 号機非常用ガス 処理系配管の一部撤去作業 の状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 10 月 27 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000369904.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000369904.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 11 月 10 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000373948.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000373948.pdf</a> 1 号機及び 2 号機非常用ガス処理系配管の一部撤去 作業の進捗状況に係る面談（2021 年 11 月 24 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000373958.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000373958.pdf</a> <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000373959.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000373959.pdf</a> 1 号機及び 2 号機非常用ガス処理系配管の一部撤去 作業の進捗状況に係る面談（2021 年 12 月 15 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000377370.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000377370.pdf</a> <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000377371.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000377371.pdf</a> 1 号機及び 2 号機非常用ガス処理系配管の一部撤去 作業の進捗状況に係る面談（2022 年 3 月 15 日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000384395.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000384395.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000384396.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000384396.pdf</a> 1 号機及び 2 号機非常用ガス処理系配管の一部撤去 作業に係る面談（2022 年 7 月 8 日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000399073.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000399073.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000399074.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000399074.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000399075.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000399075.pdf</a>
<b>第三章 その他の調査項目の進捗状況など</b>			
<b>第四節 発電所敷地内外のモニタリングポスト等の空間線量率の推移</b>			
特になし			
<b>第三章 その他の調査項目の進捗状況など</b>			
<b>第五節 その他の活動状況</b>			
24	第 26 回 資料 3-1	1~2 号機原子炉建屋上部階調 査の計画	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2021 年 7 月 20 日） <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000360478.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000360478.pdf</a> <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000360477.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000360477.pdf</a>
25	第 26 回 資料 3-1	3 号機建屋内調査計画	東京電力福島第一原子力発電所の調査に関する面談 （2021 年 5 月 24 日）

No.	関連する 検討会	調査・分析に係る資料等	東京電力からの提供情報等
			<a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000354193.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000354193.pdf</a> <a href="https://www2.nsr.go.jp/data/000354192.pdf">https://www2.nsr.go.jp/data/000354192.pdf</a>
26	第 32 回 資料 5	1 号機タービン建屋地下 1 階調査等の状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022 年 4 月 27 日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000390000.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000390000.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000390001.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000390001.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022 年 11 月 7 日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000410158.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000410158.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000410159.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000410159.pdf</a>
27	第 30 回 資料 4-2	2 号機燃料交換機遠隔操作室 調査状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022 年 5 月 19 日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000391618.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000391618.pdf</a> 東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022 年 6 月 9 日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000396296.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000396296.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000396297.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000396297.pdf</a>
28	第 32 回 資料 6-1	2 号機燃料交換機遠隔操作室 調査状況	2 号機燃料交換機遠隔操作室調査により採取した試 料（一部）
29	第 32 回 資料 6-2	1 号機原子炉補機冷却系内包 水サンプリング作業状況	東京電力福島第一原子力発電所の事故分析に関する 面談（2022 年 10 月 4 日） <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000406178.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000406178.pdf</a> <a href="https://www2.nra.go.jp/data/000406179.pdf">https://www2.nra.go.jp/data/000406179.pdf</a>

※2022 年 11 月 16 日時点。



(参考8)

連絡・調整会議の開催状況（令和3年5月以降、計4回開催）

第7回（令和3年5月11日）

- 原子力規制庁における今後の調査・分析事項
- 東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所における多核種除去設備等処理水の処分に関する基本方針

第8回（令和3年10月25日）

- 2号機シールドプラグ調査状況
- ケーブル等の加熱実験計画
- 3Dレーザースキャナーの定点測定状況
- （東京電力）2号機オペフロ内シールドプラグ穿孔部調査状況
- （東京電力）ケーブル及び塗料の可燃性有機ガス発生量評価計画
- （東京電力）1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況

第9回（令和4年5月13日）

- 中期的リスクの低減目標マップの改定
- （東京電力）試料採取・分析計画
- （東京電力）1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去の状況
- 3号機RHR配管における水素滞留の状況
- （東京電力）3号機RHR配管で確認した滞留ガスに関わる対応状況
- 建物構築物の形状測定等の状況
- （東京電力）建屋健全性評価の進捗状況
- ケーブル、塗料等の加熱試験の実施状況
- （東京電力）ケーブル等の加熱試験の状況

第10回（令和4年12月8日）

- （東京電力）福島第一原子力発電所1号機の格納容器内部調査から得られた情報
- （東京電力）福島第一原子力発電所1号機の格納容器内部調査 後半調査について
- 1号機原子炉格納容器内部調査における試料分析
- （東京電力）1号機RCW熱交換器入口ヘッダ配管の滞留ガスの分析結果
- （東京電力）福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管撤去の進捗

以上



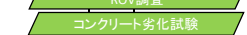


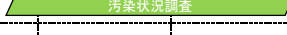


(参考9)

福島第一原子力発電所の事故分析に関する調査・分析項目の整理

R5年度以降も継続見込み

凡例 ★:現場調査、◆:解析、●:分析等、□:実験等

調査・分析事項		報告書等	2021年度	2022年度	中間取りまとめ	2023年度～	備考
(1) 放射性物質の放出経路	① ベントラインの汚染メカニズムの解明						
	● 1/2号機SGTS配管の汚染メカニズムの検討【分析等】		実施検討				
	● がれき、サンプ水等の試料分析【分析等】		試料採取・分析【JAEA】		○	試料採取・分析	委託等
	● SGTSフィルタレイン内部の溜まり水の核種分析【分析等】		試料採取・分析【東電】		○		
	◆ SGTS配管内流動解析・FP沈着検討【解析】		解析		○		
	● ベントガス中のCs-水素-水蒸気の濃度、挙動の分析【分析等】		実施検討				
	★ 1/2号機SGTSフィルタレイン、不活性ガス系の汚染状況調査 γカメラ		汚染状況調査		○		
	★ ベントライン、SGTS、排気筒等の線量率測定 γカメラ		汚染状況調査		○	汚染状況調査	1/2号機SGTS撤去配管調査を含む。
	★ 原子炉建屋内空調ダクト等の汚染分布調査 スミア・γカメラ		実施検討				
	② 1～3号機シールドプラグの汚染量の確定						
★ 1～3号機シールドプラグ表面、原子炉ウエル等の汚染状況調査		追加汚染調査		○	汚染調査等		
◆ FP付着シミュレーション【解析】		実施検討					
③ 核種放出のタイミングとメカニズムの分析							
● モニタリングポスト等のデータに基づく核種放出挙動の分析【分析等】		MP等分析		○	MP等分析	1～3号機の事故進展との比較検討を予定	
● Cs等の核種の化学形態、移行挙動の検討【分析等】		実施検討					
(2) 水素爆発等	1) 1,2号機ベント配管の汚染		○				
	★ 1,2号機ベント配管の汚染調査 γカメラ		○				
	● スタック下部のドレン水サンプル分析【分析等】		○				
	● スタック内高度別汚染分布【分析等】		○				
	◆ シミュレーションによる汚染分布再現【解析】		△				
	□ S/ClにおけるDF【実験or文献調査】		○				
	2) SGTS逆流汚染（他号機及び自号機）		△				
	★ SGTS配管、フィルタレイン等の汚染状況調査 γカメラ		△				
	◆ ベント時の自号機、他号機への排気比率のシミュレーション【解析】		△				
	□ GDの逆流防止機能の確認・実験【実験・文献調査】		△				
3) シールドプラグ調査		○					
★ 1～3号機シールドプラグ表面汚染分布調査		○					
◆ 1号機シールドプラグずれの分析【解析】		△					
4) 建屋DF		○					
★ 2号機オペフロの汚染分布確認 γカメラ		○					
● 2号機原子炉建屋内スミア試料分析【分析等】		○					
5) 3号機原子炉建屋4階調査		○					
★ 原子炉建屋3階及び4階の損傷状況調査及び線量率測定		○					
● 原子炉建屋の汚染分布・核種確認【試料採取・分析】		△					
(3) AM策等の機器の設計方針等	1. 1号機原子炉建屋4階の出水の検討		○				
	★ 1号機原子炉建屋4階調査		○				
	● 作業員の証言確認等【分析等】		○				
	◆ スロッシング解析【解析】		○				
	2. 3号機使用済燃料プール内の臨界の可能性及び白煙の発生		○				
	★ 使用済燃料プール内及び白煙の発生状況の調査		○				
	◆ 臨界評価【解析】		○				
	④ 水素燃焼の物理・化学的検証						
	● 水素爆発時の炎色、噴煙、凝縮波の検討【分析等】		実施検討				
	● 水素爆発時のガス組成の検討【分析等】		ガス組成		ケーブル加熱試験	○	ケーブル加熱
□ 水素-水蒸気-可燃性ガス混合気体の燃焼実験【実験等】		実施検討					
● 3号機原子炉建屋火災への可燃性ガスの影響分析【分析等】		実施検討					
● 1号機シールドプラグ等のずれ・破損シミュレーション【解析】		実施検討					
6) 1号機及び3号機原子炉建屋における水素爆発		○					
★ 水素爆発による原子炉建屋の損傷調査 レーザースキャナ等		△					
● 水素爆発に係る映像解析等【分析等】		○					
◆ 水素爆発に係る地震計観測波の解析【解析】		○					
3. 4号機原子炉建屋における水素爆発		○					
★ 4号機原子炉建屋の損傷状況及びSGTS線量率調査		○					
● 水素量の推定【分析等】		○					
⑤ 耐圧強化ベントによるPCV破損防止の設計確認							
● 耐圧強化ベントの系統構成に係る設計確認【分析等】		設計確認					
⑥ 1号機非常用復水器(IC)の運用変更の確認							
● 1号機ICの設計・運用等の確認【分析等】		設計確認					
⑦ 3号機RHR配管滞留ガス調査							
★ 3号機RHR配管系統調査等							
● 滞留ガス分析等【分析等】							
現地調査等							
試料分析							
⑧ 消防車による原子炉注水							
★ 1～3号機注水ラインの系統状態調査							
● コンデンサー-ホットウエル内の水のサンプリング【試料要求、分析】							
◆ 代替注水シミュレーションによるRVへの注水量推定【解析】							
⑨ 1～3号機耐圧強化ベント							
★ ベント時の系統構成(MO弁、AO弁、真空破壊装置等の状態・設計も含む)		○					
★ 格納容器過温破損の可能性確認		○					
★ 有効ベント回数の推定		○					
◆ ベント時の排気時挙動シミュレーション【解析】		△					

調査・分析事項		報告書等	2021年度	2022年度	中間取りまとめ	2023年度～	備考
(3) AM策等の機器の設計方針等	8) RDの動作	<input checked="" type="checkbox"/> RD破壊圧力と格納容器破損モードのシミュレーション【解析】 <input type="checkbox"/> RD破壊試験【実験・文献調査】	<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>				
	9) 3号機自動減圧系	★ 原子炉建屋内損傷状況及び汚染状況調査 ◆ 3号機RPV圧力挙動【解析】	<input checked="" type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>				
	4) 1号機非常用復水器(IC)の作動状況	● IC隔離弁等の作動状況の確認等【分析等】	<input checked="" type="checkbox"/>				
	5) 1号機小規模漏えいと逃がし安全弁不作動の可能性	◆ 小規模漏えい解析等【解析】	<input checked="" type="checkbox"/>				
	6) 1号機A系非常用交流電源系統の機能喪失	★ 電源盤調査等 ● 津波襲来時の波高計、写真等の整理【分析等】	<input checked="" type="checkbox"/>				
	⑧ 1号機PCV内部調査(水中ROV調査)	★ ベDESTAL損傷状況 ★ 堆積物調査 ★ 中性子測定 <input type="checkbox"/> 高温環境下でのコンクリート劣化試験【実験等】				<input checked="" type="checkbox"/>    	東京電力&IRID調査 東京電力&IRID調査 東京電力&IRID調査 委託・役務
(5) その他	⑨ 現場情報のアーカイブ化	★ 3Dレーザースキャナーによる損傷状況調査 レーザースキャナー ★ 原子炉建屋内の汚染状況調査 スミア・γカメラ等	 		<input checked="" type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/>	 	継続的に実施 継続的に実施
	⑩ 設計、運転記録等の基礎情報	★ 設計図面、運転記録等の確認(旧事務本館、情報棟)					

【報告書等】

- 中間取りまとめ(2021年度・2022年度) 1F事故分析検討会 第20回～
- 中間取りまとめ(2021年3月5日 1F事故分析検討会) 1F事故分析検討会 第8回～第19回 <https://www.nra.go.jp/data/000345595.pdf>
- 中間報告書(2014年10月8日 原子力規制委員会) 1F事故分析検討会 第1回～第7回 <https://www.nra.go.jp/data/000069286.pdf>

東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 [https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/iiko\\_bunseki01/index.html](https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/iiko_bunseki01/index.html)

(別添 1)

## ベント配管の汚染パターンの追加調査データ等

原子力規制庁原子力規制部

東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 小西 興治

### 1. 背景及び目的

1/2号機のSGTS配管及び共用排気筒については、2020年度中間取りまとめにおいても調査結果を報告しており、ベントに成功していない2号機のSGTS配管の下流がベントに成功した1号機のSGTS配管よりも汚染の程度が高いことや、1/2号機共用排気筒基部に汚染の程度が高い箇所が存在する状況が確認されていた。

前回の報告以降、東京電力によるSGTS配管の放射線量率測定調査が進展していることを踏まえ、東京電力が公表した測定結果やそれに基づく汚染量評価の結果を改めて整理する。また、2016年に東京電力が実施した小型無人飛行機（ドローン）による1/2号機排気筒周辺における線量調査においても地上に近いほど線量率が上昇するという結果が得られていることから、それらの情報についても整理を行う。

### 2. 調査の結果

東京電力による1/2号機のSGTS配管の調査の結果を図1に示す。測定方法については前回と同様に、コリメートされた線量計を用いて、配管上端から0.1 m及び1.0 mの高さでの空間線量率を計測している。今回も1号機と比較して2号機の線量が高いことや、2号機のSGTS配管のうち1号機主排気ダクトから分岐した箇所付近で最も高い線量率(160.0 mSv/h)となっていることが明らかになった。

上記の測定結果を基に東京電力が評価したSGTS配管の汚染量を図2に示す。1号機側の10の10乗Bq～11乗Bqという値に比べて、2号機側は10の11乗Bq～12乗Bqという高い値が算出されており、2号機が1桁程度高い値となっている。

また、東京電力が実施したドローンによる測定結果を原子力規制庁が高さ方向に整理したものを図3に示す。共用排気筒の頂部より底部の線量が高いことが確認されている。なお、SGTS配管合流部や共用排気筒底部の内部の高線量についてもあわせて示している。

<参考> 配管切断箇所の放射線量率測定（測定結果）



(1) SGTS配管線量測定結果

- ・下記に示す通り、配管線量率は2号機側が高く1号機側は低い結果となった。（昨年と同傾向）
- ・これらは、ベント流速が速かった1号機配管より2号機は原子炉建屋内のSGTS系機器（フィルタ、ラプチャーディスク等）が抵抗となり流速が抑えられ滞留したものと推測している。
- ・なお、2号機配管で高線量が確認された範囲（測定点21～26）の配管位置関係は、屋外配管のハイポイント（測定点20）より約1.2m低く、2号機R/Bからは水平位置となっている。

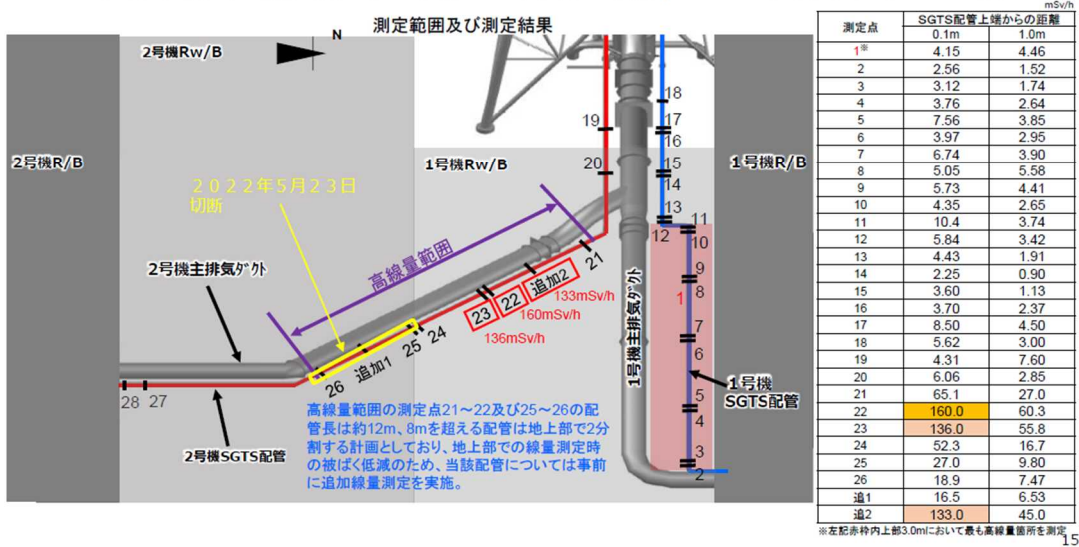


図1 配管切断箇所の放射線量率測定（測定結果）

<参考> 配管切断箇所の放射線量率測定（汚染量評価）



(2) SGTS配管内の汚染評価結果

- ・測定した放射線量率から汚染密度を算出し、切断後の配管ごとに汚染量の算出を実施した。
- ・1号機側の汚染量は10～11乗オーダー、2号機側は11～12乗オーダーで、第82回監視・評価検討会で示された汚染量評価値と同等な結果となった。

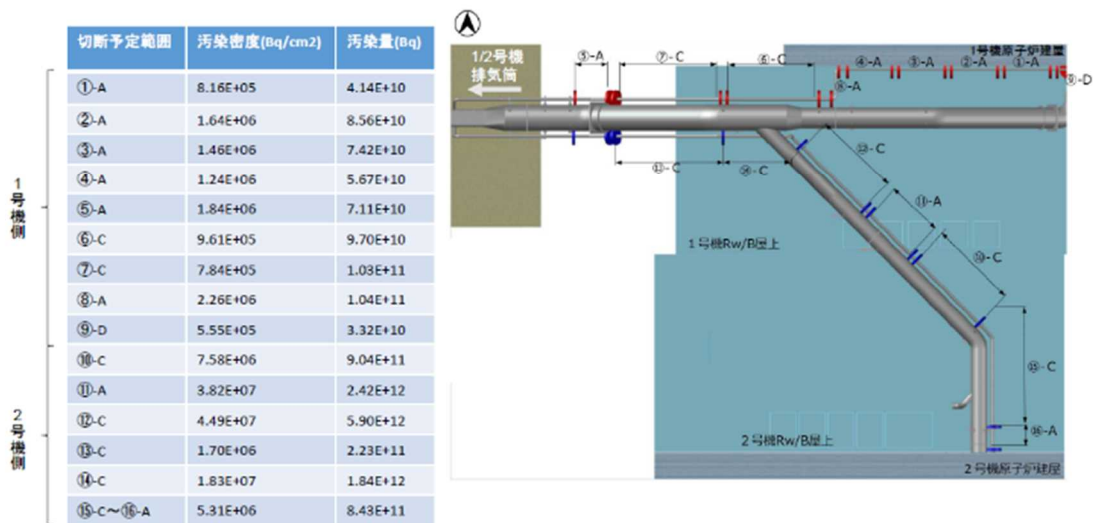


図2 配管切断箇所の放射線量率測定（汚染量評価）

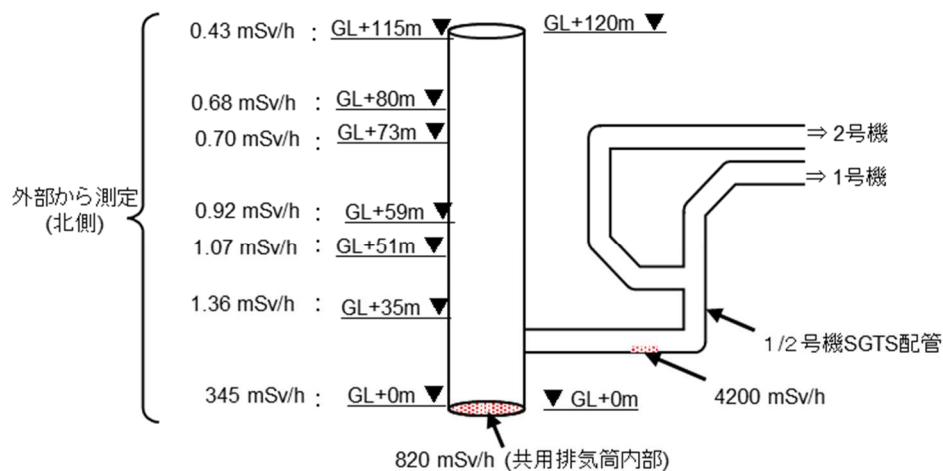


図3 共用排気筒の汚染状況

### 3. まとめ

東京電力による1/2号機のSGTS配管及び共用排気筒の調査の結果は、これまでの調査により得られていた汚染状況と同様の傾向を示している。今後東京電力が実施するSGTS配管撤去作業の進捗に伴い、さらなる情報が得られることが期待される。

#### 引用文献等

- 1) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（第30回会合）  
資料2 福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去について、2022年6月30日 東京電力ホールディングス株式会社
- 2) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（第28回会合）  
資料4-4 福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去について、2022年2月28日 東京電力ホールディングス株式会社
- 3) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（第22回会合）  
資料5-2 福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去について、2021年9月14日 東京電力ホールディングス株式会社
- 4) 福島第一原子力発電所1/2号機排気筒周辺における線量調査結果について、2016年10月27日 東京電力ホールディングス株式会社

(別添 2)

## 1/2 号機 SGTS 配管内流動解析

原子力規制庁長官官房技術基盤グループ  
シビアアクシデント研究部門 塚本 直史

### 1. はじめに

#### 1. 1 背景

1/2 号機非常用ガス処理系 (SGTS) 配管の現地調査において線量測定がなされ、セシウム (Cs) の残留分布の推定がなされている [1]。図 1 に示すように、汚染分布は 2020 年度中間とりまとめの別添 3 でとりまとめられ、また、令和 3 年度においても新たな測定データに基づき一部更新されている [2]。

1 号機からのベントガスは、1 号機のサプレッションチェンバー (S/C) から配管を通過して 1/2 号機共用排気筒 (スタック) により環境へ放出されたと考えられていたが、線量測定に基づく汚染分布によると、1/2 号機 SGTS の配管やフィルタで高汚染箇所があり、ベントガスが通過する配管に接続された 1/2 号機 SGTS へと逆流が生じたと推測されている。また、大半のベントガスが通過した配管が低汚染であるにもかかわらず、2 号機 SGTS 配管において局所的に高汚染となっていることが確認されている。

令和 2 年度、上記の汚染分布に至る原因を分析するため、JAEA が RELAP5 コードを用いた流動解析を実施し、1/2 号機 SGTS に設置されているグラビティダンパ (GD) が設計どおりに動作しなかったため逆流が生じたとの推定結果等を示したが [3]、2 号機 SGTS 配管で生じた局所的な高汚染の原因の解明には至らなかった。

そこで、原子力規制庁において RELAP5 コードによる流動解析を継続して実施することとなった。

#### 1. 2 目的

以下 2 つを目的に、RELAP5 コードによる解析を実施した。

- 測定結果に基づく配管内ベントガス挙動の再現、及び事故当時の 1/2 号機 SGTS の状態の推定
- 大半のベントガスが通過したベントラインが低汚染となり、2 号機 SGTS 配管において局所的に高汚染となった原因

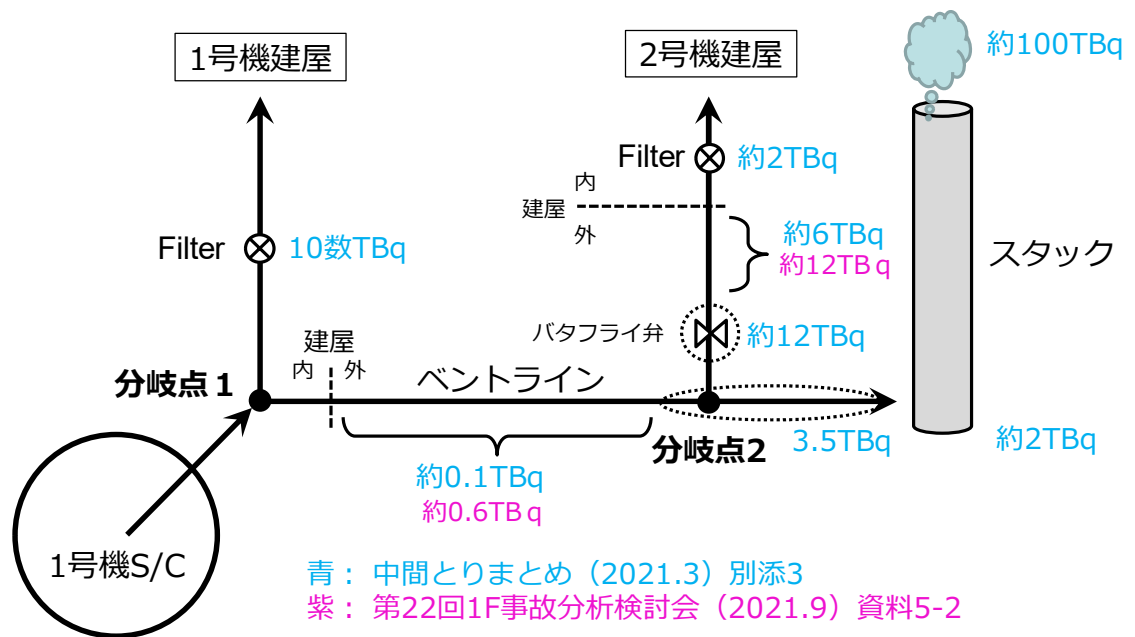


図1 1/2号機SGTSの推定汚染分布

### 1. 3 検討の概要

1. 2の目的を満たすべく、RELAP5コードを用いて以下3つの検討を行った。
  - 検討① 流量配分の再現解析  
測定結果に基づき配管内のベントガス挙動を再現するために、図1に示す汚染分布から1/2号機SGTSへの逆流量を設定し、その逆流量を再現する圧力損失係数等の解析条件の算出を行う。測定結果を再現する解析条件を得て、事故当時の1/2号機SGTSの状態の推定につながる情報を提供する。
  - 検討② 凝縮と汚染分布の対応性の確認  
ベントガス中のCsがSGTS配管の途中で残留することで局所的な高汚染となったと考えられるが、RELAP5コードでは配管内でCsが残留するメカニズムを評価することができない。しかし、Csの沈着に影響があると考えられる蒸気凝縮の発生状況を評価し、汚染分布との対応関係を確認する。
  - 検討③ 時間変化を考慮した解析  
ベント期間を通じて、ベントガス中のCs濃度、フィルタの流動抵抗が変化すると考えられる。両者の変化を組み合わせることで、SGTS配管内に高濃度のCsが閉じ込められる状況が生じ得る。RELAP5コードでの解析により、ベントラインよりも2号機SGTS配管での高汚染の要因となる可能性について検討する。



## 2. RELAP5 解析

### 2. 1 解析コード

解析には、米国 NRC が開発する RELAP5/MOD3.3[4]を使用した。令和 2 年度に JAEA が使用した RELAP5/MOD3.3 は 2006 年にリリースされたバージョンであったが、今回の解析では 2016 年にリリースされたバージョンを使用した。RELAP5 コードは多数の妥当性確認が実施され、軽水炉の事故解析に適用されている<sup>1</sup>。

### 2. 2 解析体系と解析条件

JAEA が令和 2 年度に実施した RELAP5 解析のインプットを一部修正して、解析を実施した。解析モデルを図 2 に示す。1 号機 S/C から放出されたベントガスが通る耐圧強化ベント配管とそれに接続する 1/2 号機 SGTS 配管を流体コンポーネントでモデル化し、配管内の流体を 2 流体モデルにより評価した。また、配管の管壁を熱構造材コンポーネントでモデル化し、管壁内の温度を熱伝導計算で評価した。

配管外側の温度は、1 号機建屋内で 40℃、2 号機建屋内で 20℃、建屋外で 8℃と仮定し、配管外壁との間の熱伝達係数は 5 W/m<sup>2</sup>/K で固定とした。1 号機 S/C からのベントガスの放出は THALES2[5]の計算結果を流量境界 (T911, T921, T931, TJ912, TJ922, TJ932) としてテーブル値により与えた。スタックと配管との接続口 (T199)、1 号機 SGTS の送風機 (T151) 及び 2 号機 SGTS の送風機 (T251) の位置を圧力境界とし、各々の高さ位置で補正した大気圧の値に設定した。

THALES2 の計算結果に基づき、ベントは約 3120 秒継続するとした。ベントが停止した時点において、ベント期間中に 1 号機 S/C から流入したベントガス (蒸気を除く) のトータル質量の約 99.5%が出口境界から体系外へ流出している計算結果となっていたことから、ベント停止後の挙動が与える影響は小さいとみなし、ベントが開始してから停止するまでの期間を解析対象とした。

なお、JAEA の解析インプットからの主な修正点として、①スタックを圧力境界に変更、②1 号機 S/C からのベントガスの流量境界にアルゴン (Ar) ガスの追加 (T941, TJ942)、③配管のノード分割において粗いノードに対して細分化処理を行った。①のスタックの変更に関して、JAEA のインプットにおいてはスタックを 2 本の配管としてモデル化していたが、スタック内を非現実的な速度で外気が循環する計算となっており、RELAP5 では適切なモデル化が難しいと判断して圧力境界に変更した。②の Ar の追加は、Ar をベントガス中の Cs の代替ガスとして、配管内の

---

<sup>1</sup> 参考文献[4]の Vol. 7 に RELAP5/MOD3.3 の妥当性確認の結果がまとめられている。また、U. S. NRC の ADAMS で RELAP5 等のキーワードで検索すれば、RELAP5 を用いた米国の原子力発電所の評価に関する文書が多数表示される。

Cs 分布を仮想的に評価するために追加したものである。追加した Ar の量はベントガスの流入量に比べて十分に小さくしており、Ar の追加による影響が軽微であることは確認済みである。また、③の配管のノーディング変更は、後述する質量バランスの改善のために実施したものであり、ノード長が最大でも 5m 程度以下かつ前後のノード長が可能な限り近くなるように変更している。

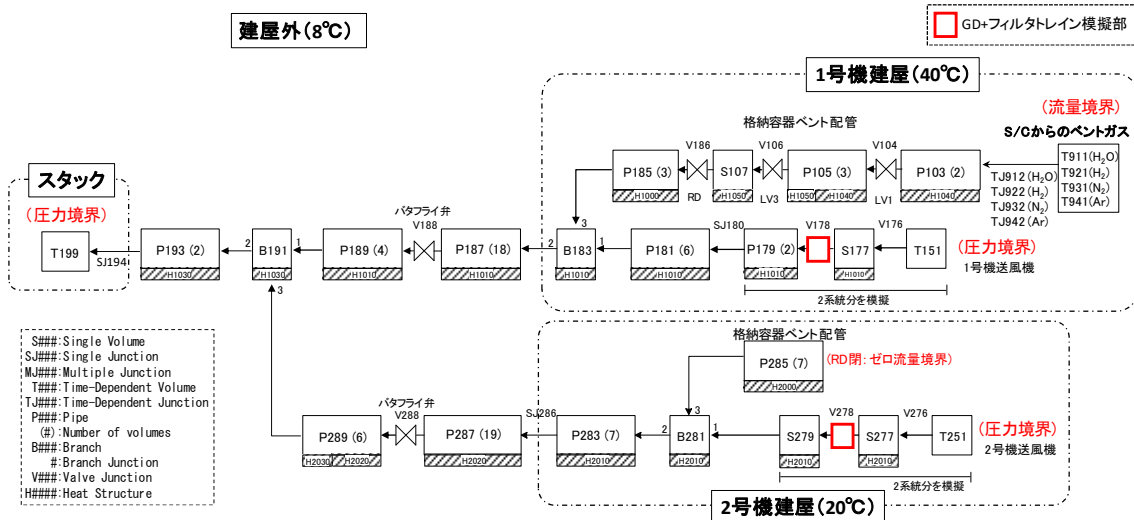


図2 RELAP5 コードによる解析体系

### 3. 検討① 流量配分の再現解析

#### 3. 1 測定結果に基づく流量配分

図1に示すように、分岐点1又は2に接続されたSGTS配管の途中やフィルタで汚染が観測されている。この汚染は1号機のベントガスの逆流によるものと考えられており、その汚染量に相当するCsを含むベントガスが分岐点からSGTSへと逆流していることを示している。

ベントガスはスタック、1号機SGTSへの逆流、2号機SGTSへの逆流の3つの経路を経ており、各経路上のCsの残留量(スタックは環境放出分を含む)の合計は、概算としてそれぞれ100 TBq、10 TBq、20 TBqである。各経路には少なくともその量のCsを含むベントガスが流れ込んだことになるため、各経路への流量配分がこの比率と一致すると仮定する。その結果を図3に示す。

1/2号機SGTSにはGDが設置されているが、測定結果から図3に示す程度の逆流が生じたと推定される。

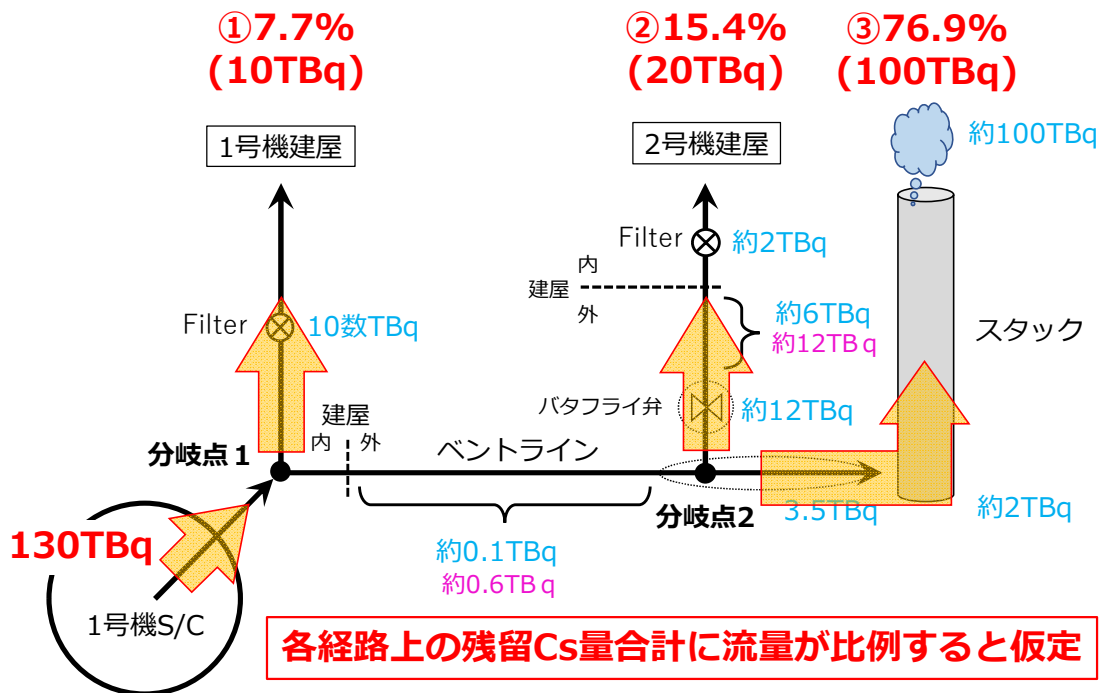


図3 流量配分の仮定

- ① 分岐点1から1号機SGTSへの流量 (10 TBq/130 TBq = 7.7%)
- ② 分岐点2から2号機SGTSへの流量 (20 TBq/130 TBq = 15.4%)
- ③ 分岐点2からスタックへの流量 (100 TBq/130 TBq = 76.9%)

### 3. 2 解析内容

図3の流量配分が事故当時の配管内のベントガス挙動を表すと考え、RELAP5コードを用いて、その流量配分を再現する条件の算出を行う。算出された条件が事故当時の1/2号機SGTSの状態を推定するための情報となる。

この検討においては、ベント開始から終了までの期間を対象に、各経路に流入したCs（解析においては代替ガスのAr）の質量の積算値を評価し、その比率が図3の流量配分と一致するように1/2号機の圧力損失係数 $K$ の調整を行った。その他不確かさの大きい要因については、変動パラメータとして条件を変更し、その条件下で流量配分を再現する1/2号機SGTSのGDとフィルタの圧力損失係数の算出を行うことで、その影響の程度を定量化する。ベントガスが各経路に分配される事象において重要となる物理現象や模擬するための解析手法、不確かさ要因等に対する考え方を以下に示す。

1/2号機SGTSへの流量配分は、出口境界の圧力と経路上の圧力損失とで決まる。1/2号機SGTSにおける圧力損失のうち、支配的な流動抵抗となるのがフィルタトレインとGDである。その局所的な圧力損失が流量配分を決める最も重要な要因と

なることから、流量配分の再現解析における調整パラメータとして圧力損失係数 $K$ を選定した<sup>2</sup>。なお、令和2年度のJAEAの解析においてはGDの動圧を圧力損失とし、GDの開度 $R_{open}$ という形で圧力損失の調整を行っていた<sup>3</sup>。

ベントライン及び1/2号機SGTSにおける圧力損失のうち配管壁による摩擦損失は、RELAP5コードに内蔵の汎用的な計算モデルで算出される。今回の解析においては配管内の液相の体積割合は最大でも1%程度であり、ほぼ単相の気体であることから、摩擦損失計算における不確かさは小さいと考えられる。配管の高さ変動による圧力損失（位置圧損）についても同様である。1/2号機SGTSの出口境界で設定する圧力は大気圧としたが、当時の建屋内の状況が不明であり不確かさが大きいと考え、影響を確認するために出口境界圧力を変動パラメータとした。

スタック内及び配管接続部における流動状況はRELAP5では直接評価することができないため、スタックの圧力境界値と入口圧力損失係数を入力条件として与えることで評価している。しかし、その設定根拠はなくその不確かさは大きいと考えられるため、その影響を確認するためにスタック入口の圧力損失係数を変動パラメータとした。なお、2号機SGTSの入口（分岐点2）の圧力はスタック圧力にスタック入口の圧損を足した値となり、スタックの圧力境界値の不確かさはスタック入口の圧力損失係数を変えた解析で包含できるため、スタックの圧力境界値は変動パラメータとしなかった。

また、図3に示した流量配分は現在の測定結果から推定される汚染分布に基づき設定したが、測定できていない場所の線量データがないなど不確かさが大きいと考えられるため、流量配分も変動パラメータとして選定した。

### 3.3 再現解析の結果

図3の流量配分を再現する1/2号機SGTSの圧力損失係数 $K$ を表1に示す。出口境界とスタックの入口圧損を令和2年度のJAEA解析と同一としたノミナル条件に加えて、3.2で列挙した不確かさ要因を変動パラメータとした以下の感度解析ケースで圧力損失係数の算出を行っている。

- A) 1号機建屋圧力が1 kPa高い（事故の進展により1号機建屋内が高圧化したことを想定<sup>4</sup>）

---

<sup>2</sup> 圧力損失は $\Delta P = \frac{1}{2} K \rho v^2$ と評価される（ $\rho$ は流体密度、 $v$ は流速）。圧力損失は流路面積に依存するが、GDが設置された配管（2系統分）の流路面積に対する値として与えた。

<sup>3</sup> GDの開度は実際の流路面積を表しておらず、流動抵抗を間接的に表すものである。両者の関係は $K = (R_{open})^{-2}$ であり、令和2年度のJAEA解析における開度 $R_{open} = 1\%$ は圧力損失係数 $K = (0.01)^{-2} = 10000$ に相当する。

<sup>4</sup> 1号機建屋内の高圧化を仮定して圧力を増加させたところ、2 kPa程度増加させると1号機への逆流が止まったため、その半分の増加量を代表ケースとして選定した。

- B) 2号機建屋圧力が0.06 kPa 低い (2号機建屋の負圧維持を想定<sup>5</sup>)
- C) スタック入口の圧力損失係数を10倍 (スタック入口において凝縮水等が流動抵抗として作用したことを想定)
- D) 流量配分が1/2号機ともに10%、スタックが80%
- E) 流量配分が1/2号機ともに15%、スタックが70%

令和2年度のJAEA解析で用いたGDの漏えい面積の設計値を圧力損失係数に換算すると1/2号機ともに $10^6$ を超える値となるが、表1に示す圧力損失係数はいずれもその値よりも圧倒的に小さい結果となっている。

また、1号機に比べて2号機の圧力損失係数が1~2桁小さいことが分かる。これは、図4に示すように1号機と比べて2号機の圧力差が小さく、2号機側の逆流の駆動力が小さいことが原因である。分岐点2の圧力は大気圧にスタックの入口圧損を増加した値となるが、分岐点1の圧力は分岐点2の圧力にベントラインの圧損(主に摩擦圧損)を加えた値となるため、圧力差のこの大小関係は確定的なものと考えられる。

感度解析A)~C)はいずれもノミナル条件よりも1/2号機SGTSの出入口の圧力差が近づく条件であり、感度解析D),E)は1/2号機の流量が近づく条件のため、両者の差が縮まる結果となるが、いずれのケースでも1号機より2号機の圧力損失係数の方が十分に小さいとの関係は変わらなかった。

なお、感度解析C)の結果からスタックの入口圧損が、特に2号機の圧力損失係数に与える影響が大きいことが分かる。これは、2号機SGTSの出入口間の圧力差が小さいことから、スタックの入口圧損の変更による分岐点2の圧力変動の影響が大きく表れるためである。

表1 流量配分を再現する圧力損失係数

条件	1号機	2号機
ノミナル条件	3400	46
A)1号機建屋圧力+1 kPa	880	46
B)2号機建屋圧力-0.06 kPa	3400	123
C)スタック入口圧損10倍	5000	900
D)1, 2号機の流量配分10%	1900	200
E)1, 2号機の流量配分15%	760	47

<sup>5</sup> 2号機建屋の設計気密度が水柱約6 mm (約0.06 kPa)の負圧状態における漏えい率として与えられており、その負圧が維持されたと仮定して設定した。

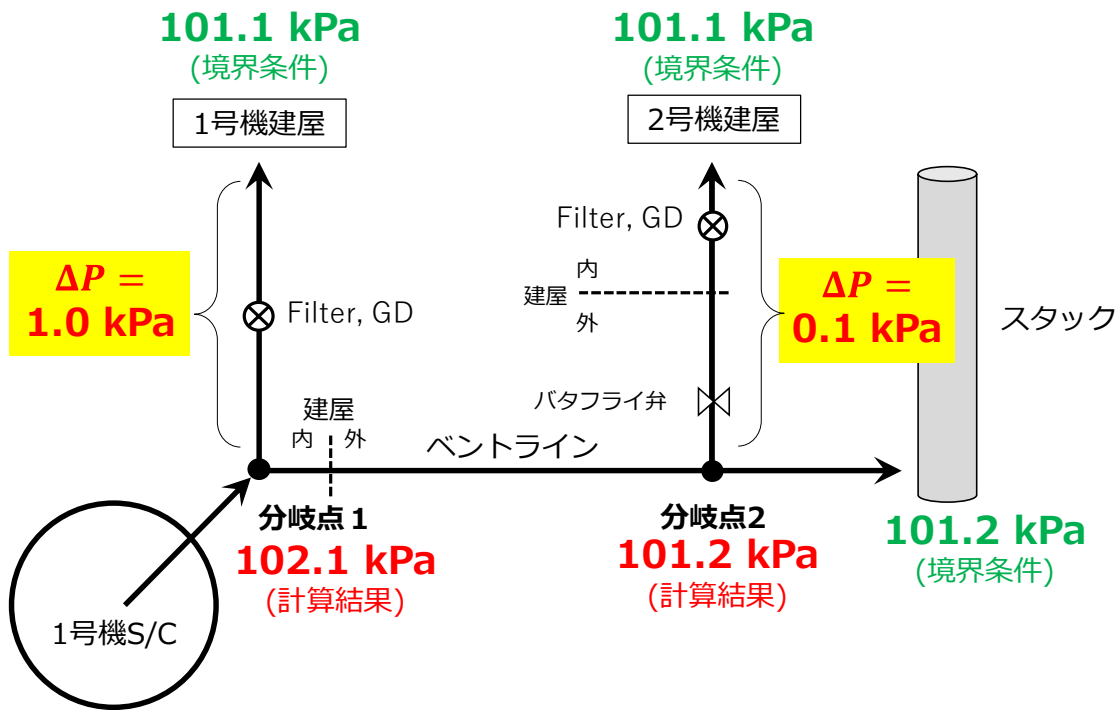


図4 ベント終了時の圧力分布と圧力差（ノミナル条件）

### 3. 4 流量配分の再現解析からの考察

GD が設置されていたものの、測定データに基づき設定した図3の流量配分が示すように、1/2号機 SGTS にはそれなりの逆流が生じたことが推定される。これは、ベント時の状況下では GD は逆流を妨げるほどの流動抵抗として働かないことを示している。

図3の流量配分を再現する圧力損失係数（表1）を見ると、ノミナル条件だけでなく不確かさ要因を考慮した感度解析においても、2号機の圧力損失係数が1号機よりも1~2桁小さいという結果が得られた。このことから、ベント時に2号機 SGTS の方が1号機 SGTS に比べて流動抵抗が少ない状態だったと推定される。圧力損失係数は GD 及び／又はフィルタトレインの状態が反映される値であり、ベント時において1号機と2号機とで GD 及び／又はフィルタトレインの状態に差があったことが示唆される。令和2年度の JAEA の検討においては、1号機と2号機とで圧力損失係数（漏えい面積）を同程度に設定したことから、出入口間の圧力差が小さい2号機への逆流量を過小評価する結果となっている。

なお、スタックの入口圧損が2号機の圧力損失係数に与える影響が大きい結果が得られている。今回の解析では、スタックの圧力境界値及びスタック入口における圧力損失係数の値を仮定して評価したが、SGTS への逆流について詳細に調査する場合には、これらパラメータにスタック入口周辺の流体挙動を適切に反映するこ

とが重要となる。スタックの入口圧損は3号機ベントにおける4号機SGTSへの水素逆流の問題にも強く影響しており、共通の課題と考える。

## 4. 検討② 凝縮と汚染分布の対応

### 4. 1 検討内容

大半のベントガスが通過したベントラインが低汚染で、少量のベントガスが通過した2号機SGTS配管が高汚染との測定事実は、ベントガスの通過量で汚染量を評価できないことを示している。汚染の評価をするためにはCsの沈着メカニズムを考慮する必要があるが、それはRELAP5コードで扱うことができない。しかし、Csの沈着に影響し得る現象として配管内の蒸気凝縮をRELAP5コードでは評価できることから、汚染分布と蒸気凝縮との関係について調べた。

### 4. 2 RELAP5解析における凝縮水の発生、残留状況

3. のノミナル条件の解析結果は、線量測定から推定された汚染分布(図1)に基づき設定した流量配分(図3)となっていることから、事故当時のベントガスの流れを再現していると考えて、その解析結果の分析を行った。蒸気凝縮の発生位置、各経路を通過した蒸気・水の質量、凝縮水の残留位置を図5に示す<sup>6</sup>。図5において「残留水…kg」とはベント停止時に網掛けした領域に存在する液相の水の質量、「(凝縮…kg)」とはベント開始から停止までの間に網掛けした領域で凝縮により発生した水の質量、「水…kg」「蒸気…kg」とはベント開始から停止までの間に矢印位置を通過した水と蒸気の質量を示している。

有意な量の蒸気凝縮の発生が確認できたのは、1号機S/Cから流調弁の高圧領域(建屋内)、ベントライン(建屋外)、2号機SGTS配管(建屋内外)の3か所である。1号機S/Cから流調弁の高圧領域で発生した凝縮水の大半は入口部に残留し、一部流出した水は分岐点1に至るまでの間に蒸発して蒸気となっている。ベントラインで発生した凝縮水は全てスタックへと流出し、ベントライン内に水は残留しない結果となった。2号機SGTS配管内で発生した凝縮水の一部は2号機建屋側の出口境界に到達し、残りが途中の配管内に残留する結果となった。1号機SGTS配管内においては配管壁の温度が高いことから、凝縮が生じなかったと考えられる。

図6に2号機SGTSにおける凝縮水の残留位置の詳細を示す。残留した位置は配

---

<sup>6</sup> 第27回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会の資料2-3では水の質量バランスが大きく崩れた結果を示していたが、これは配管のノード分割が不十分であることが一因であった。この報告書に示した解析結果は全てノード分割修正後の結果であるが、依然としてベントラインでの質量バランスが取れておらず、今後の検討課題である。

管の向きが水平となっている2か所である。当該箇所では凝縮した水に加え、上流位置での凝縮水が流されたり、下流位置の凝縮水が配管の傾斜により戻ったりすることで、配管の水平位置に溜まったと考えられる。

ノミナル条件では2号機SGTSへの流量配分は15.4%であるが、流量配分への影響を確認するため、3.の感度解析ケースD(2号機に流量10%)における蒸気凝縮の発生位置、各経路を通過した蒸気・水の質量、凝縮水の残留位置を図7に示す。2号機SGTSへと流入する蒸気量がノミナル条件より少なくなるため、2号機SGTS配管内での凝縮量は減少し、凝縮水は2号機建屋側の出口境界に到達しなくなっている。図7に示すように、凝縮水の残留位置は上流側のバタフライ弁前後の水平配管部のみとなり、下流の水平配管部には凝縮水が残留しない結果となった。

なお、2号機SGTSへの流量を5%まで減少させると、2号機SGTS配管内において凝縮がほとんど生じず、凝縮した水が残留しない結果となった。令和2年度のJAEAの解析においては2号機SGTSへの流量が約5%であり、2号機SGTS配管内で凝縮がほとんど生じない結果となっていたものと推測する。

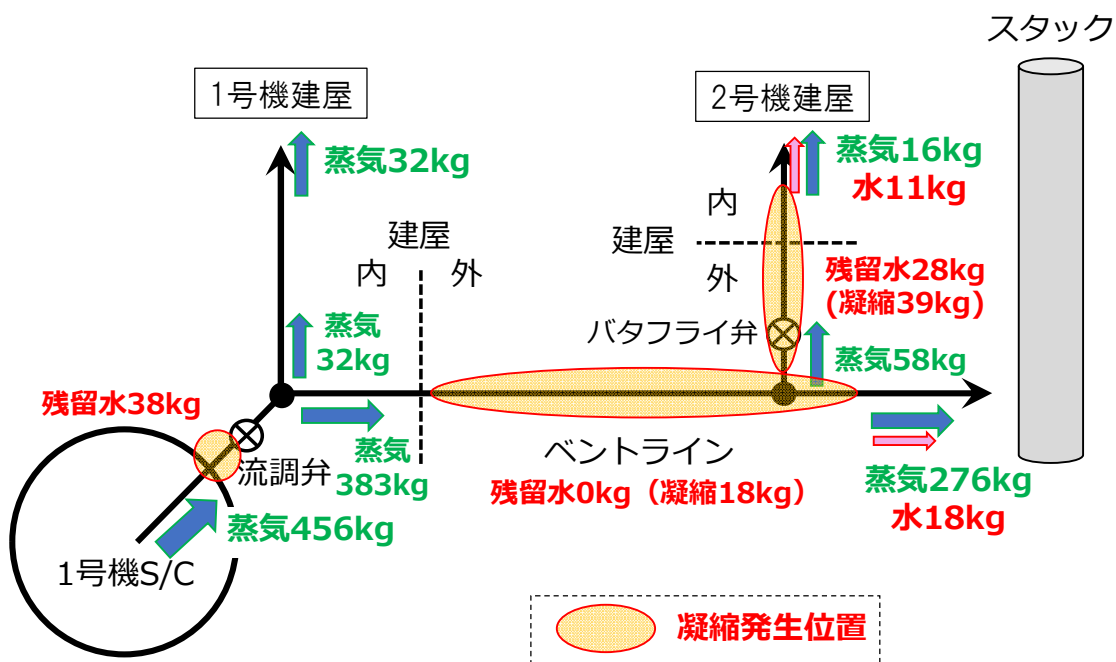


図5 凝縮発生位置、蒸気・水の通過量、残留水 (ノミナル条件)



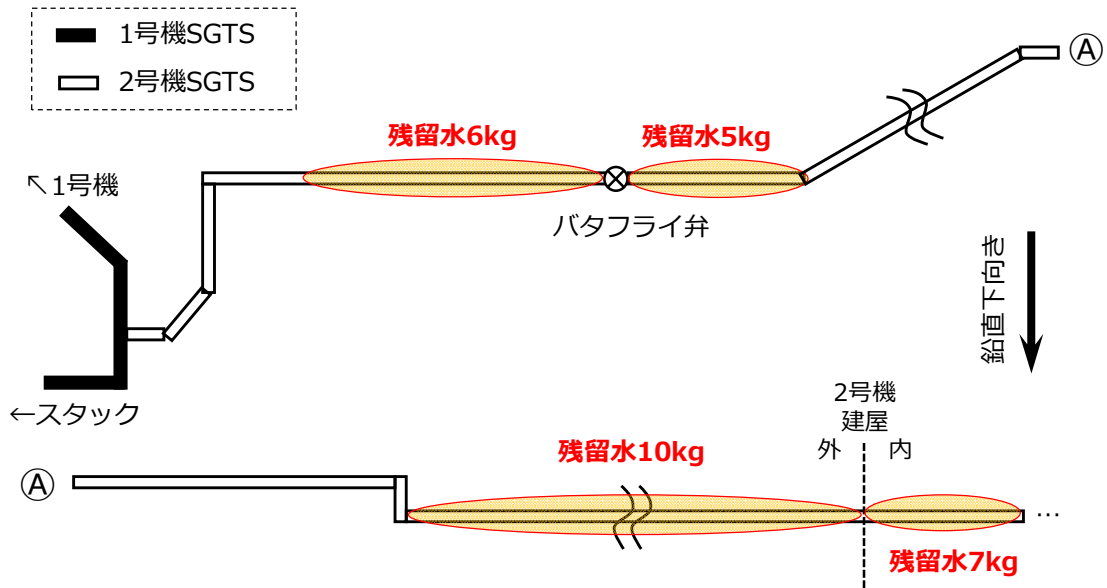


図6 凝縮した水の残留位置と残留量（ノミナル条件）

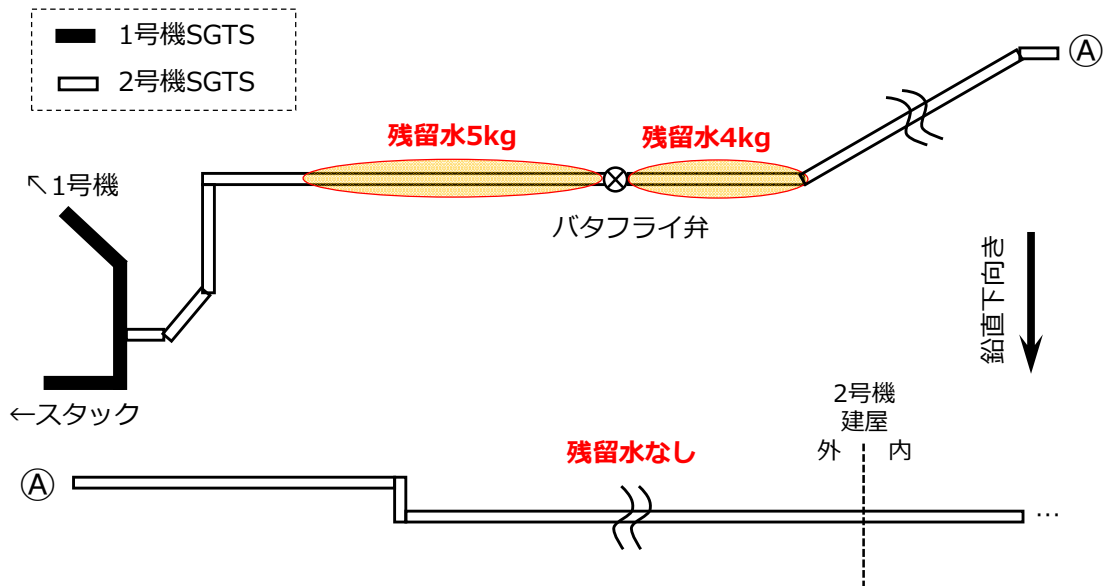


図7 凝縮した水の残留位置と残留量（感度解析ケースD）

#### 4. 3 汚染分布と凝縮水の解析結果との対応関係について

汚染分布は図8に示す線量の測定結果から推定されており、図8で網掛けをした以下の3か所が高汚染箇所となっている。

- ①2号機SGTSのバタフライ弁近傍
- ②2号機SGTSの水平配管部
- ③スタック接続部近傍の配管

図8の①と②の2か所が図6で示した凝縮水の残留位置と一致している。③の位置はベントラインで発生した凝縮水が通過するものの、凝縮水の残留はしない結果となっている。

①の2号機SGTSのバタフライ弁近傍に関して、バタフライ弁から離れた位置では線量が大幅に減少しており、弁の近くで主に汚染していると考えられる。しかし、RELAP5ではバタフライ弁前後に広く凝縮水が分布する結果となっている。RELAP5ではバタフライ弁位置をバルブジャンクションで模擬したものの、解析においては弁を全開としており弁による影響を考慮しない計算となっている。実際には弁の構造物が流路内に存在しており、凝縮した水やベントガスの流れがその影響を受けることで弁のごく近傍のみ汚染された可能性がある。RELAP5解析の結果は2号機SGTSのバタフライ弁前後の水平配管部で凝縮水が残留することを示唆しており、その情報と弁の幾何構造を考慮してより詳細な検討をすることが望ましい。

②の2号機SGTSの水平配管部に関しては、配管が垂直方向から水平方向となって以降の配管部で高線量が観測され、RELAP5解析ではその場所で凝縮水が残留しており、高汚染位置との一致が見られる。図9に示すように、線量の測定値は垂直方向から水平方向へと変わるエルボ一部から下流方向へ進むと指数関数的に減衰する結果となり、建屋の手前で低線量となっている。それに対し、RELAP5解析の凝縮水の残留量の分布として液相の体積率とエルボ一部からの距離との関係を図10に示すが、エルボ一部から離れることで凝縮水が増える結果となっており、線量の分布とは異なっている。これは凝縮水の多寡と線量値とが対応しないことを示している。

③のスタック接続部近傍の配管に関しては、RELAP5解析ではベントラインで発生した凝縮水は全て通過し、この位置で残留する結果とはなっていない。RELAP5は配管内の流れを流れ方向1次元の計算により評価するため、垂直方向の配管位置での重力による加速とベントガスの速い流れとにより、凝縮水が一方向的にスタックへと流れ出る計算結果となっている。しかし、配管の曲がり部では一般に流れが乱れた状態となる。配管の幾何形状、凝縮水との相互作用等を考慮した熱流動解析や実験等ができれば、凝縮水が配管内に残留する結果となるかもしれない。なお、スタックの底部においても高線量が観測されており、配管からスタック底部へと流出した凝縮水が一因となっている可能性がある。

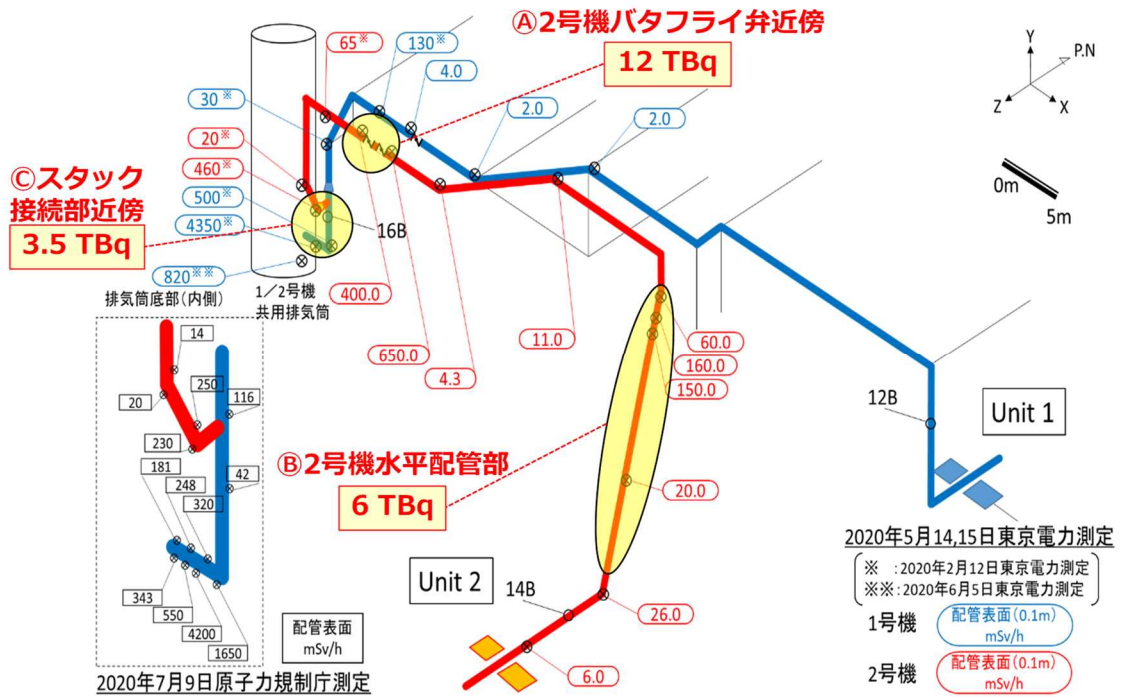


図8 線量の測定結果と高汚染位置 (参考文献[1]の図3に一部加筆)

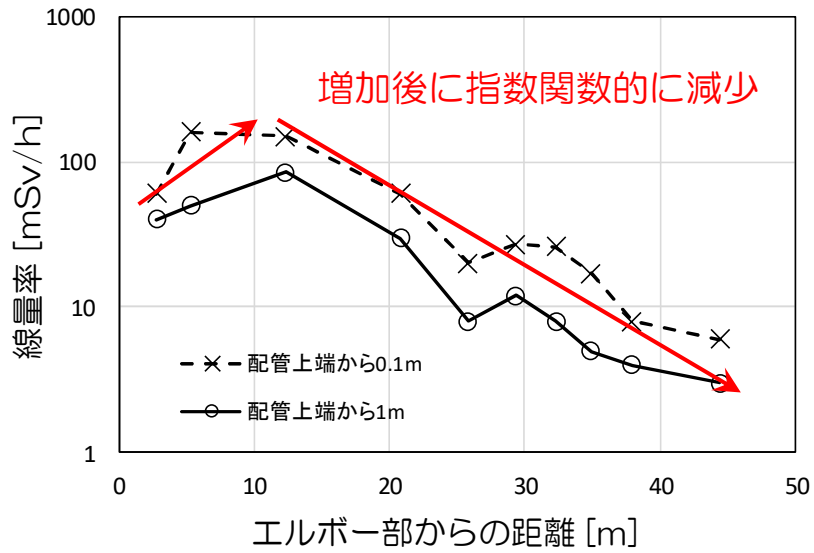


図9 2号機 SGTS 水平配管部の線量分布  
 参考文献[6]に記載の測定データから作成

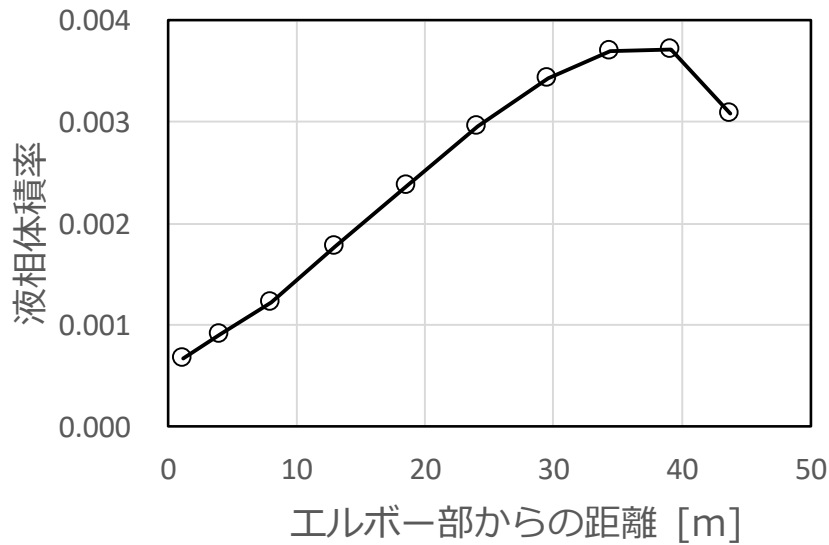


図 10 2号機 SGTS 水平配管部の液相体積率の分布 (ノミナル条件)

#### 4. 4 RELAP5 解析の凝縮水の残留量による汚染分布評価

凝縮水の残留量から汚染量を直接算出できないことは明らかであるが、凝縮水の残留量と汚染量との間にある程度の相関があると考えられる。そこで、RELAP5 解析の凝縮水の分布と汚染分布との対応関係を示すべく、Cs が水・蒸気の質量当たり均等に配分されると仮定して、配管内の Cs 分布を評価した結果を表 2 に示す。

放射性物質の移行プロセスを考慮しておらず、参考程度の結果ではあるものの、線量から推定される汚染分布をオーダーレベルで再現できている。

表2 水・蒸気の質量にCs量が比例<sup>※1</sup>するとして評価したCs分布 [TBq]

場所↓	条件→ ノミナル条件	感度解析 ケースD	線量からの 推定値 <sup>[1]</sup>
1号機 SGTS 配管	0	0	0.1
1号機 SGTS フィルタ <sup>※2</sup>	9	12	10数
①2号機バタフライ弁近傍	3	2	12
②2号機水平配管部	5	0	6
2号機 SGTS フィルタ <sup>※2</sup>	8	2	2
ベントライン	0	0	0.1
スタック <sup>※2</sup>	84	87	約100
スタック底部 <sup>※3</sup>	5	5	(測定結果なし)
1号機 S/C～流調弁	11	11	(測定結果なし)

※1 流入蒸気量 (456 kg) を 130 TBq として算出

※2 出口境界に到達した水と蒸気の質量から算出

※3 出口境界に到達した水の質量から算出

## 5. 検討③ 時間変化を考慮した解析

### 5. 1 ベント中の時間変化

検討②において、大半のベントガスが通過したベントラインよりも2号機 SGTS 配管の方が高汚染となっている理由として、凝縮水の残留位置と汚染位置とが対応している可能性を示した。しかし、検討①及び検討②においては、ベントガスの流入条件以外はベント中に一定との条件で解析を行っており、その他条件の時間変化の影響については検討できていなかった。

ベント中に時間変化し得る状態は多数考えられるが、ここでは以下2つの変化を考慮した。まず、SGTSのフィルタラインに装着されているHEPAフィルタは、蒸気を処理することで液滴による目詰まりを起こすことが知られている[7]。次に、ベントガス中のCs濃度は初期に高く、1号機S/Cの気相部のCsが排出されていくことでCs濃度が低下すると考えられる。

この2つの時間変化を考えることで、ベントラインよりも2号機 SGTS 配管で高汚染となりうる状況をRELAP5解析で模擬できるかを確認した。RELAP5解析において、SGTSフィルタの蒸気による目詰まりの模擬として、図2のV176及びV276を通過する蒸気量が一定量を超えた場合に、その位置を閉塞するように設定した。また、Csの代わりとしてArを結果に影響しない少量(トータル1.0kg)だけ流入させ、そのガスの排出量及び残存量をトレースすることで、ベント停止時のCsの配置を評価した。Cs濃度の変化は、流量境界(図2のTJ942)のArガスの流入量の

テーブルデータとして入力を行った。

## 5. 2 解析内容

ベントガスは初期に Cs を高濃度含み、含有量が時間とともに減少する。この特性から、高濃度 Cs を含む初期ベントガスが 2 号機 SGTS 配管内に残留するような状況が起こりえないかを検討した。すなわち、ベント初期に体系全体が高濃度 Cs のベントガスで満たされるが、その状態で 1/2 号機のフィルタが目詰まりすることで、1/2 号機 SGTS 配管内の流れが止まり、SGTS 配管内の高濃度 Cs ガスが閉じ込められる。他方、その後もベントガスはベントラインを通過してスタックから環境放出されることから、ベントラインはその後の低濃度 Cs のベントガスで置換される。その結果、図 1 1 に示すように、SGTS の配管内には初期の高濃度 Cs のベントガスが残留して高汚染、ベントラインは低濃度 Cs が残留して低汚染となるというシナリオである。

ベントガスの Cs 濃度の時間変化は、図 1 2 のように初期の高濃度期間を経て、それ以降は低濃度となると仮定した。初期の濃度として、Cs 濃度を全時間一定としたときの濃度の①30 倍、②70 倍、③150 倍の 3 つのパターンを考え、いずれの場合も流入する全 Cs 量は一定 (130 TBq) とする。

フィルタの目詰まりは、蒸気 0.1 kg が通過するときを生じると仮定する。目詰まりの蒸気量の影響を見るために、蒸気 1.0 kg が通過するときフィルタの目詰まりが生じる (Cs 濃度パターンは②) とした場合の解析も行う。

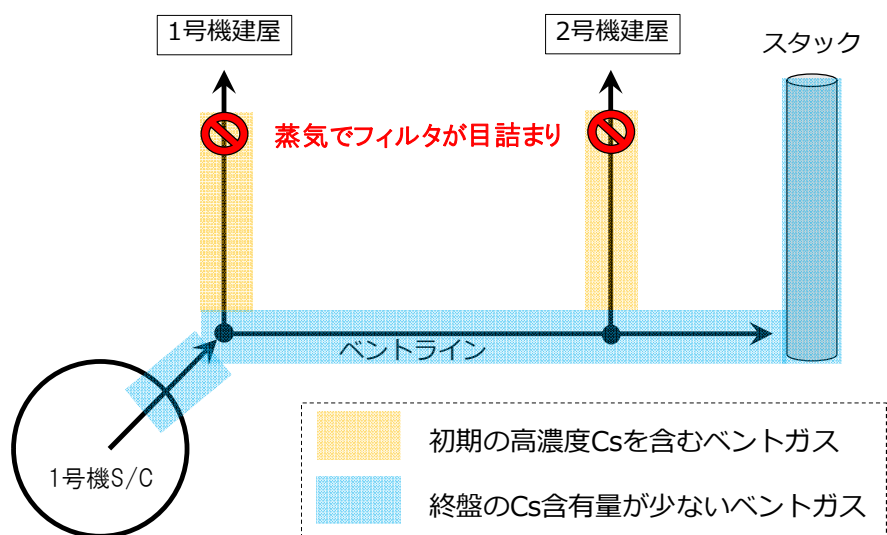


図 1 1 Cs 濃度変化とフィルタ目詰まりにより SGTS 配管が高汚染となる想定状況

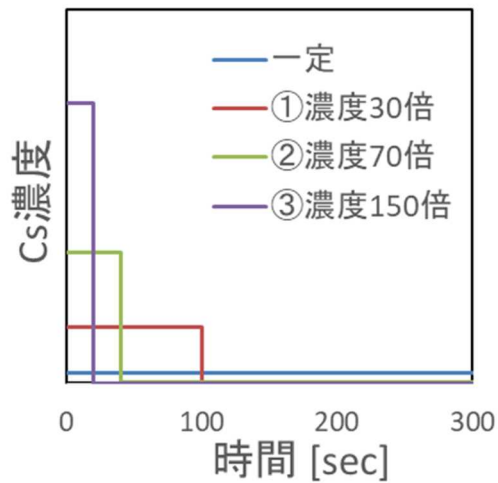


図 1 2 ベントガス中の Cs 濃度の時間変化

### 5. 3 解析結果

ベント停止時の残留 Cs 分布の解析結果を表 3 に示す。表 3 において 1 号機 SGTS 配管とは分岐点 1 から 1 号機 SGTS の出口境界まで、2 号機 SGTS 配管とは分岐点 2 から 2 号機 SGTS の出口境界まで、ベントラインとは分岐点 1 から分岐点 2 までの配管内の残留量を表す。

条件①～③のいずれにおいても、1/2 号機 SGTS 配管内に有意に Cs が残留し、ベントラインにはほとんど残留しない結果となり、図 1 1 で示すような状況が生じている。なお、初期 Cs 濃度を増加させると、1 号機 SGTS の残留量は増加する一方で、2 号機 SGTS の残留量は③で減少している。1 号機 SGTS 配管（分岐点 1～1 号機 SGTS の出口境界）は 30 m 弱と短いことから、1 号機 SGTS 配管では初期の Cs 濃度に比例するように残留量が増えるが、2 号機 SGTS 配管（分岐点 2～2 号機 SGTS の出口境界）は 100 m 以上と長いこと、初期濃度が高いと高濃度の時間帯が短いことから、2 号機 SGTS 配管ではフィルタが閉塞するまでに低濃度のベントガスが 2 号機 SGTS 配管に到達してしまい残留量が減少したと考えられる。

フィルタの目詰まりが生じる蒸気量を 1.0 kg とした感度解析②' においてはフィルタが閉塞するまでに高濃度 Cs が低濃度 Cs に置換されてしまい、図 1 1 のような状況とはならなかった。

表3 ベント停止時の残留 Cs 分布 [TBq]

条件	1号機 SGTS	2号機 SGTS	ベントライン
	分岐点1～1号機出口	分岐点2～2号機出口	分岐点1～分岐点2
測定結果 <sup>※1</sup>	(測定結果なし)	18	0.1
Cs 濃度一定、閉塞なし <sup>※2</sup>	0.04	0.26	0.14
① 初期 Cs 濃度 30 倍 <sup>※3</sup>	0.22	6.26	0.006
② 初期 Cs 濃度 70 倍 <sup>※3</sup>	0.50	11.2	0.015
③ 初期 Cs 濃度 150 倍 <sup>※3</sup>	1.1	3.70	0.007
②' 初期 Cs 濃度 70 倍 <sup>※3</sup> (閉塞蒸気量 1.0 kg)	0.6	0.02	0.02

※1: 2021 年度中間とりまとめ別添 3[1]の結果 (フィルタ部を除く) を参照

※2: 検討①のノミナル条件かつ Cs 濃度全時間で一定とした解析結果

※3: Cs 濃度以外は検討①のノミナル条件とした解析結果

#### 5. 4 汚染分布と凝縮水の解析結果との対応関係について

条件①～③において図 1 1 のような汚染分布となったものの、1/2 号機の SGTS 配管全体が同程度に汚染する結果となっている。これは図 8 のように局所的に高汚染となる測定結果とは異なる。

また、フィルタの目詰まり蒸気量を 0.1 kg から 1.0 kg に増加させると、図 1 1 のような汚染分布とはならず、目詰まり蒸気量をこれ以上の設定値としても同様である。3 号機の SGTS フィルタトレインでの観測結果<sup>7</sup>から考えると、フィルタの目詰まりに要する蒸気量として 0.1 kg や 1.0 kg は小さいと考えられる。

さらに、このシナリオでは 1 号機 S/C～分岐点 1 の配管は低汚染となるが、この範囲において高線量箇所があるとのことであり<sup>8</sup>、この観測事実を説明できない。

以上より、ここで検討したシナリオでの汚染分布の説明は難しいと考える。しかし、事故当時も Cs 濃度等の時間変化はあったはずであり、それらの影響は今後の課題と考える。

<sup>7</sup> 例えば、3 号機の SGTS フィルタユニット A 系に約 3 リットル、B 系に約 50 リットルのたまり水が確認されている [8]。

<sup>8</sup> 第 27 回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会において、東京電力より 1 号機 S/C と分岐点 1 との間に高汚染箇所がある旨のコメントがあった。



## 6. 結論

### 6. 1 検討①の結論

測定結果に基づきベントガスの流量配分（図3）を設定したところ、1/2号機SGTSに有意な量の逆流が生じたとの結果となった。1/2号機SGTSにはGDが設置されているが、ベント時の状況下ではGDは逆流を妨げるほどの流動抵抗として働かないことを示している。これは2020年度のJAEAの検討[3]と同じ結論である。

測定結果に基づく流量配分を再現するように圧力損失係数（主にGD及びフィルタトレインでの圧力損失）をRELAP5解析で算出したところ、1号機SGTSよりも2号機SGTSの圧力損失係数が1~2桁小さい結果となった。流量配分に影響する不確かさ要因を変えた条件で計算しても、その傾向が変わらなかったことから、ベント時に2号機SGTSの方が1号機SGTSよりもGD及び／又はフィルタトレインの流動抵抗が小さい状態だったと考えられる。

### 6. 2 検討②の結論

RELAP5では配管へのCs吸着等を評価できないが、それに影響し得る蒸気凝縮についてRELAP5解析の結果を用いて整理を行った。RELAP5解析で有意な量の蒸気凝縮が発生した位置は、ベントライン、2号機SGTS配管、1号機S/C～流調弁の配管の3か所であった。低汚染のベントラインで蒸気凝縮が発生していることから、蒸気凝縮の発生位置と高汚染位置とは必ずしも一致しないことが分かった。しかし、低汚染のベントラインには凝縮水が残留せず、2号機SGTS配管内の高汚染位置2か所で凝縮水が残留していたことから、高汚染位置と凝縮水の残留位置とが一致することを示唆する結果となった。この結果からの類推として、ベントラインで発生した凝縮水は全てスタックへと流れ出ており、その凝縮水がスタック底部の高線量の一因となっている可能性がある。RELAP5解析の結果と汚染分布との定量的な比較のために、RELAP5解析の結果において水と蒸気の質量に汚染量が比例すると仮定して汚染分布を算出したところ、測定に基づく汚染分布をオーダーレベルで再現でき（表2）、凝縮水の残留量と汚染量との間に相関があることを示唆している。

なお、もう一つの高汚染箇所であるスタックへの接続配管部においては、RELAP5解析では凝縮水が残留しなかった。この位置は配管が曲がる構造となっており、RELAP5ではそのような幾何形状に起因した複雑な流れを模擬できない。幾何形状等を考慮した詳細な流動解析、実験等ができれば、今回の解析では考慮されていない凝縮水、エアロゾルの挙動等について理解が深まると期待される。また、解析では1号機S/C～流調弁の配管においても蒸気凝縮が発生しており、凝縮水が残留するような配管構造があれば高線量となっている可能性がある。

### 6. 3 検討③の結論

検討①、②では、ベント期間中にベントガスの Cs 濃度や流動状態に大きな変化がないことを前提としてきた。検討③では、それらの時間変化を考慮することでベントラインよりも 2 号機 SGTS 配管が高汚染となりうるかを検討した。ベント初期のみ Cs が高濃度、それ以降は Cs が低濃度に変化し、また、SGTS フィルタが通過した蒸気が目詰まりにより完全閉塞するとの仮定の下で、RELAP5 解析を行った。その結果、初期の高濃度 Cs のガスが 2 号機 SGTS 配管に残留し、ベントラインには終盤の低濃度 Cs のベントガスが残留し、ベントラインよりも 2 号機 SGTS 配管の方が高汚染となる状況が再現された。

しかし、このシナリオでは 2 号機 SGTS 配管内が一様に汚染することになり、また、フィルタが閉塞する蒸気量を 0.1 kg から 1.0 kg に増加させると成立しないことを確認した。さらに、このシナリオでは 1 号機 S/C～分岐点 1 は低汚染になるはずであるが、その領域で高汚染箇所があるとの観測事実を説明できないことから、検討③のシナリオでは汚染分布を説明できないと結論づけた。

### 6. 4 全体的な結論

1. 2 節で示した検討目的に対して、今回の検討で得られた結論を以下に示す。

➤ **検討目的 1 : 測定結果に基づく配管内ベントガス挙動の再現、及び事故当時の 1/2 号機 SGTS の状態の推定**

検討①により、測定結果に基づき流量配分の設定を行ったところ、GD があるにもかかわらず 1/2 号機 SGTS へのベントガスの有意な逆流が生じる結果となった。ベント時の状況下においては GD が逆流を妨げるほどの流動抵抗として働かないものと推測される。また、この流量配分を RELAP5 解析で再現させることで事故当時のベントガス挙動を模擬した。流量配分を再現する 1/2 号機 SGTS の圧力損失係数を算出したところ、1/2 号機の間には有意な差があり、GD 及び/又はフィルタの状態に差があったことを示唆する結果が得られた。

➤ **検討目的 2 : 大半のベントガスが通過したベントラインよりも 2 号機 SGTS 配管の方が高汚染となった原因の解明**

検討②により、RELAP5 解析の結果を用いて蒸気凝縮に関する分析を行ったところ、凝縮水の残留位置が高汚染位置と一致することが分かった。また、ベントラインで凝縮した水がスタックへと流出する解析結果となっており、それがスタック底部の高線量の一因となったと類推される。汚染量が凝縮水の残留量に比例すると仮定して汚染分布を評価すると、測定結果をオーダー

レベルで再現できており、配管の高汚染と凝縮水の残留とに密接な関係があることを示唆している。

なお、2号機 SGTS の線量測定データと凝縮水の残留状況とを細かく比較すると、2号機のバタフライ弁近傍等、両者が一致しない部位が存在することを確認している。また、スタック手前の接続配管部の高汚染位置においては、RELAP5 解析では凝縮水の残留がなく、高汚染位置との対応が必ずしも一致していない。この位置には配管の曲がり構造があり、RELAP5 解析では評価できない幾何形状の効果を考慮した流体解析や実験等により検討することで、この位置での汚染メカニズムの理解が深まる可能性がある。さらなる分析を行うには、配管・弁の幾何形状に加え、汚染プロセスも考慮したより詳細な検討が必要と考える。

## 7. 今後の調査に期待すること

この検討では、測定データに基づき RELAP5 解析を行い、6の結論を得た。不明な点は推測を重ねて検討したが、今後の調査でそのような推測の正否が分かれば、事故時の状況の把握が進むと考える。ここでは、今回の検討から今後の調査で確認できると有用と思われる点を列挙する。

### 7. 1 GD、フィルタトレイン

検討①で、2号機 SGTS の圧力損失係数が1号機 SGTS よりも小さいとの推定結果が得られた。圧力損失の主要素である GD とフィルタトレインの状態が1/2号機で異なっているか、今後の調査により確認できることを期待する。

また、3号機同様にフィルタトレインでのたまり水が確認できれば、フィルタ部に到達した蒸気量やフィルタの目詰まり状況等の推定に有用と考える。

### 7. 2 2号機バタフライ弁

2号機のバタフライ弁で高線量が測定されており、検討②により凝縮水が残留する位置と一致することを示した。しかし、測定結果は弁の近傍に限定されている一方で、RELAP5 解析での凝縮水の残留位置はそれよりも広い範囲となっている。より詳細な汚染状況（配管の上部・底部の汚染状況の違い、弁から離れた位置の汚染状況等）が確認できれば、汚染メカニズムの検討に有用と考える。

### 7. 3 2号機 SGTS 水平配管部

検討②で高汚染箇所と凝縮水の残留位置との一致を示したが、今回の検討結果からでは凝縮水の残留が汚染の原因と特定できない。配管の底部が上部よりも高汚染

となっていれば凝縮水が汚染メカニズムと関連することを支持するデータとなり得る。また、流れ方向の汚染量の変化が分かれば、汚染メカニズムの検討に有用と考える。

#### 7. 4 1号機 S/C から流調弁の間の配管

検討②で、RELAP 解析において1号機 S/C から流調弁の間の配管で有意な蒸気凝縮が発生し、その近辺に凝縮水が残留する結果となった。この範囲の配管で、凝縮水が残留しそうな位置に高汚染箇所があれば、凝縮水の残留が汚染の原因であることを支持するデータとなり得る。また、検討③のように事故分析の正否の判断に使える可能性がある。

#### 参考文献

- [1] 木原昌二、“1/2号機 SGTS 配管系の汚染状況”、東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ ～2019年9月から2021年3月までの検討～ 別添3、Mar. 2021.
- [2] 東京電力ホールディングス株式会社、“福島第一原子力発電所1号機及び2号機非常用ガス処理系配管の一部撤去について”、第22回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 資料5-2、Sep. 2021.
- [3] 与能本泰介、竹田武司、丸山結、“ベントガスの挙動に関するシミュレーション”、東京電力福島第一原子力発電所事故の調査・分析に係る中間取りまとめ ～2019年9月から2021年3月までの検討～ 別添3-1、Mar. 2021.
- [4] U. S. Nuclear Regulatory Commission, “RELAP5/MOD3.3 Code Manual”, NUREG/CR-5535/Rev.1, 2001.
- [5] 石川淳、森山清史、“BWR4/Mark-I プラントのヨウ素化学挙動を考慮した格納容器内ソースターム評価に係わる検討”、JAEA-Research 2010-051、2011.
- [6] 東京電力ホールディングス株式会社、“1/2号機 SGTS 配管撤去に向けた調査結果について”、第84回特定原子力施設監視・評価検討会 資料4-3、Oct. 2020.
- [7] 尾崎誠、杉本憲治、金川昭、“高性能エアフィルタの苛酷時健全性試験、(IV)多湿試験”、日本原子力学会誌、Vol. 28、No. 6、1986.
- [8] 東京電力ホールディングス株式会社、“1-4号機 SGTS 室調査の結果について”、第21回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 資料5-2、July 2021.

(別添 3-1)

## 原子炉ウェル内の線量率と原子炉ウェル差圧調整ダクトの状態

原子力規制庁原子力規制部

東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 木原 昌二

### 1. 背景及び目的

東京電力は、事故分析及び廃炉作業への知見拡充を目的に、原子炉キャビティ差圧調整ラインを用いて、2号機シールドプラグ下部の原子炉ウェル内の調査<sup>1</sup>を実施している。

当該原子炉キャビティ差圧調整ラインは、運転中に原子炉キャビティ（原子炉ウェル）とオペレーションフロアの差圧を調整するラインで、空気作動弁を経て原子炉建屋換気空調系の排気ダクトに接続されている。

そのため、当該空気作動弁が開状態となっていると、原子炉ウェルと原子炉建屋換気空調系ダクトが繋がった状態となり、原子炉格納容器から原子炉ウェルへ漏えいした放射性物質を含む水蒸気が原子炉建屋4階に放出された可能性が出てくる。なお、空気作動弁は通常時開、異常時閉の設計であり、制御用空気が喪失した場合には空気作動弁は閉じた状態になる。

調査チームは、2号機の原子炉キャビティ差圧調整ラインに設置されている空気作動弁の調査を実施<sup>2</sup>するとともに、当該系統の空気作動弁の作動状況を比較検討するために4号機の原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁の調査を実施<sup>3</sup>した。3号機については、当該配管及び空気作動弁が設置されている原子炉建屋4階西側フロアは高線量であり、かつ、水素爆発等による建屋の破損により階段等が喪失していることから、人の立ち入りができない状態であり、空気作動弁の作動状態の確認はできていない。

### 2. 調査の概要

東京電力による2号機原子炉ウェル内の調査は、原子炉ウェル内の映像取得及び線量測定を行うとともに、2号機原子炉建屋4階西側の原子炉キャビティ差圧調整ラインの配管内部の調査及び配管内の堆積物やダクト腐食部のサンプル採取、同建

<sup>1</sup> 2021年5月20日、24日、6月23日に実施。

東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（第21回）資料5-3 2号機シールドプラグ高濃度汚染への対応状況について、2021年7月8日 東京電力ホールディングス株式会社

<sup>2</sup> 2号機については、2020年10月8日に実施。

<sup>3</sup> 4号機については、2021年6月24日、7月20日に実施。

屋 4 階東側の原子炉キャビティ差圧調整ライン及びダクトの腐食等の外観調査が実施されている。(図 1 及び図 2 参照)

## 2. 原子炉ウェル内調査の実施概要

TEPCO

- ① 原子炉ウェル内の映像取得および線量測定を実施
- ② 西側の原子炉キャビティ差圧調整ラインの配管内部の調査および配管内の堆積物やダクト腐食部のサンプル採取を実施
- ③ 東側の原子炉キャビティ差圧調整ラインおよびダクトの腐食等の外観調査を実施

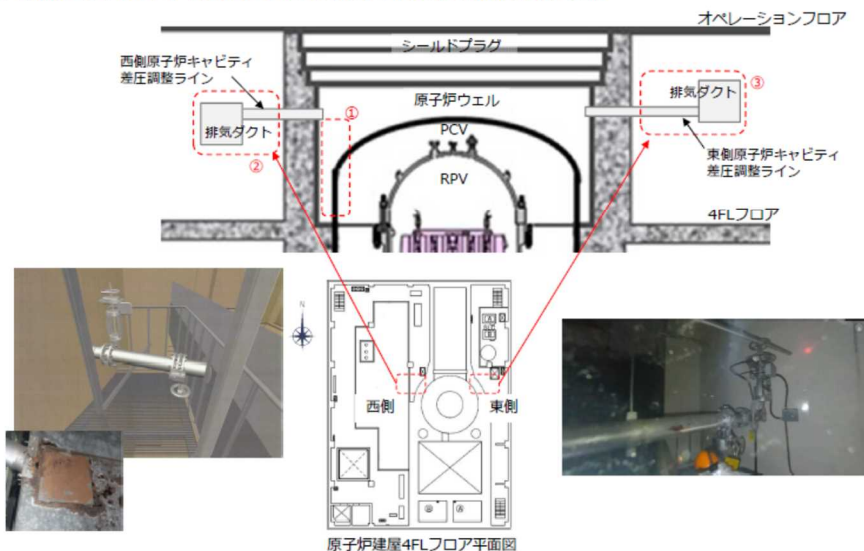
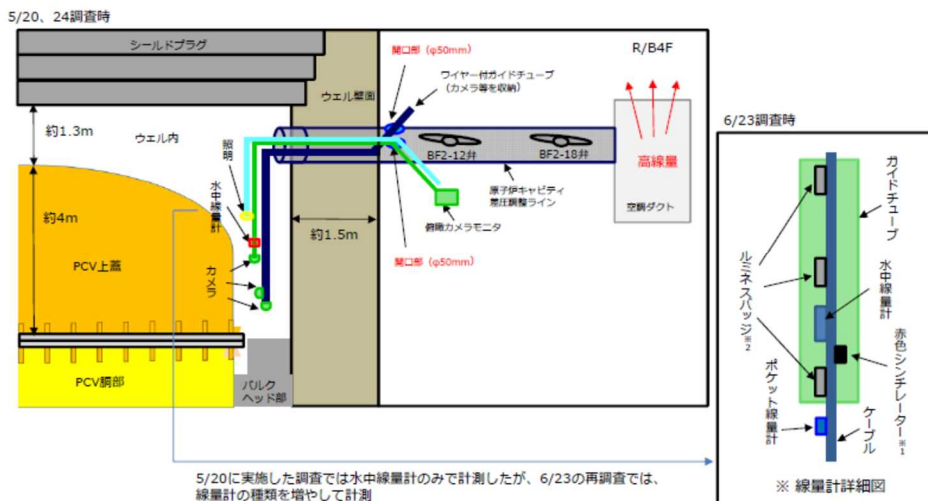


図 1 2号機原子炉ウェル内調査の実施概要

### 3-①. 原子炉ウェル調査 (内容・方法)

TEPCO

- 原子炉キャビティ差圧調整ラインから原子炉ウェル内に線量計・カメラを投入し線量、状況等を調査。



- ※ 1 東北大学(英知事業)、CLADS (JAEA)、東電が開発中の線量計
- ※ 2 ガラスパツジのようなもの

図 2 2号機原子炉ウェル内調査 (内容・方法)

## 2. 現地調査の結果

東京電力による2号機原子炉ウェル内の調査の結果、2号機原子炉ウェル内の線量については、最大で530mSv/hであった。また、原子炉ウェル内の線量は、ウェル上部（測定点①）からウェル床面（測定点⑨）に向かって徐々に高くなる傾向が確認された。（図3参照）

### 3-①. 原子炉ウェル調査結果（線量測定結果）

TEPCO

- 水中線量計で測定したウェル内の線量については、最大で530mSv/hであった。
- ポケット線量計およびルミネスバジは、累積線量をウェル内滞在時間で換算した値であるため、参考値ではあるが、概ね水中線量計と同等の値であることを確認した。なお、赤色シンチレーターの測定値についても、コバルト60で校正しているため、参考値ではあるが、概ね水中線量計と同等の値であることを確認した。
- ウェル内の線量はウェル上部（測定点①）からウェル床面（測定点⑨）に向かって徐々に高くなる傾向であった。

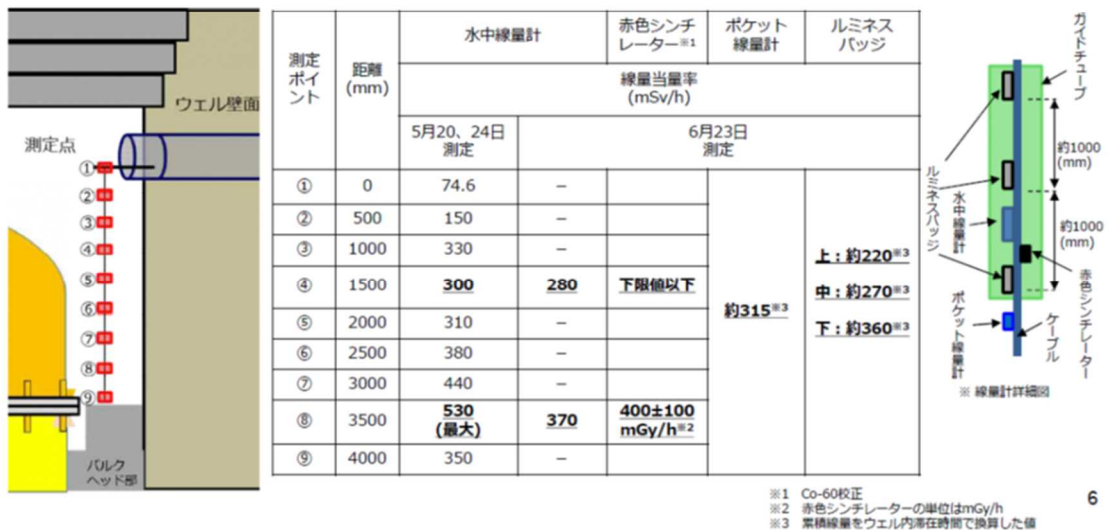


図3 2号機原子炉ウェル調査結果（線量測定結果）

2号機原子炉建屋4階西側の原子炉キャビティ差圧調整ラインの配管内部の調査及び配管内の堆積物やダクト腐食部のサンプル採取の結果、ダクト上部の劣化部分、ダクト点検口裏のゴムパッキン部分及び配管内堆積物の試料が採取された。また、配管内部については、空気作動弁<sup>4</sup>の上流側配管（SUS材）には、炭素鋼の配管や弁箱で確認された表面荒れや堆積物は確認されなかった。空気作動弁については、開状態であることが確認された。（図4及び図5参照）

原子炉キャビティ差圧調整ラインが接続されている原子炉建屋換気空調系の排気ダクトについては、ダクトに腐食等の劣化やダクト内部の底面及び側面に付着物が確認された。（図6及び図7参照）

<sup>4</sup> 2号機原子炉建屋4階西側原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁（BF2-12弁）

3-②. 西側原子炉キャビティ差圧調整ライン調査 (サンプル採取) **TEPCO**

■ 事故調査の観点から、下記箇所のサンプル採取を実施した。

- ・ ダスト上部の劣化部分
- ・ ダクト点検口裏のゴムパッキン部分
- ・ 配管内堆積物

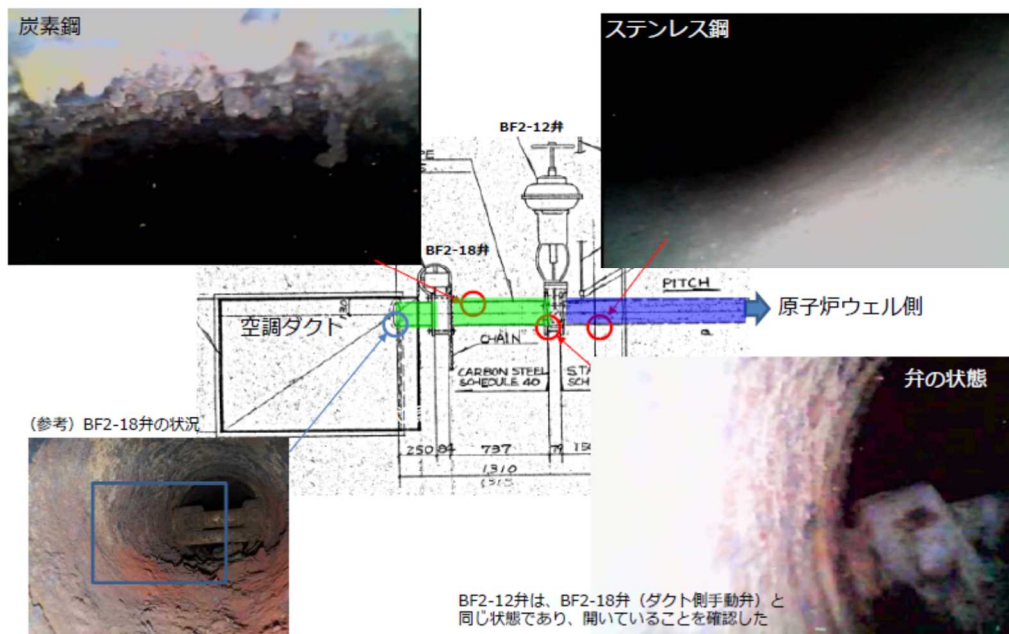


7

図4 2号機西側原子炉キャビティ差圧調整ライン調査 (サンプル採取)

3-②. 西側原子炉キャビティ差圧調整ライン調査 (配管内部調査) **TEPCO**

- BF2-12弁上流側配管 (SUS) には、配管・弁箱 (炭素鋼) にある肌荒れや堆積物は確認されなかった。
- BF2-12弁については、開状態であることを確認した。



8

図5 2号機西側原子炉キャビティ差圧調整ライン調査 (配管内部調査)



(参考) 現場調査の結果



現場作業に資する各部の放射線データその他、事故調査、原子炉ウエル内の状況予測に資する幾つかの情報が得られた。

【調査結果】

- 原子炉キャビティ差圧調整ラインから排気ダクトへの直線上の部分が劣化している（その他の箇所には大きな劣化は見られない）。
- また、ダクト下部に高線量箇所が存在し、ダクト下部の（4m下の）床面付近にも高線量箇所を確認。



図6 2号機原子炉建屋換気空調系の排気ダクトの劣化（外観調査）

(参考) 現場調査の結果



【調査結果】

- 排気ダクト内、配管部等の各部のスミヤ測定を実施。
- ダクト内部の底面および側面には、黄色の付着物が確認された。

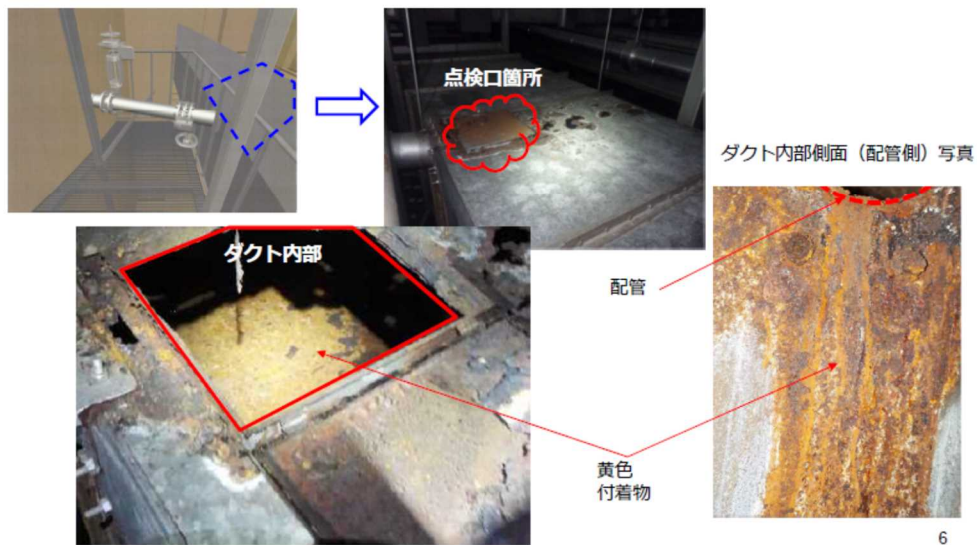


図7 2号機原子炉建屋換気空調系の排気ダクトの付着物（外観調査）

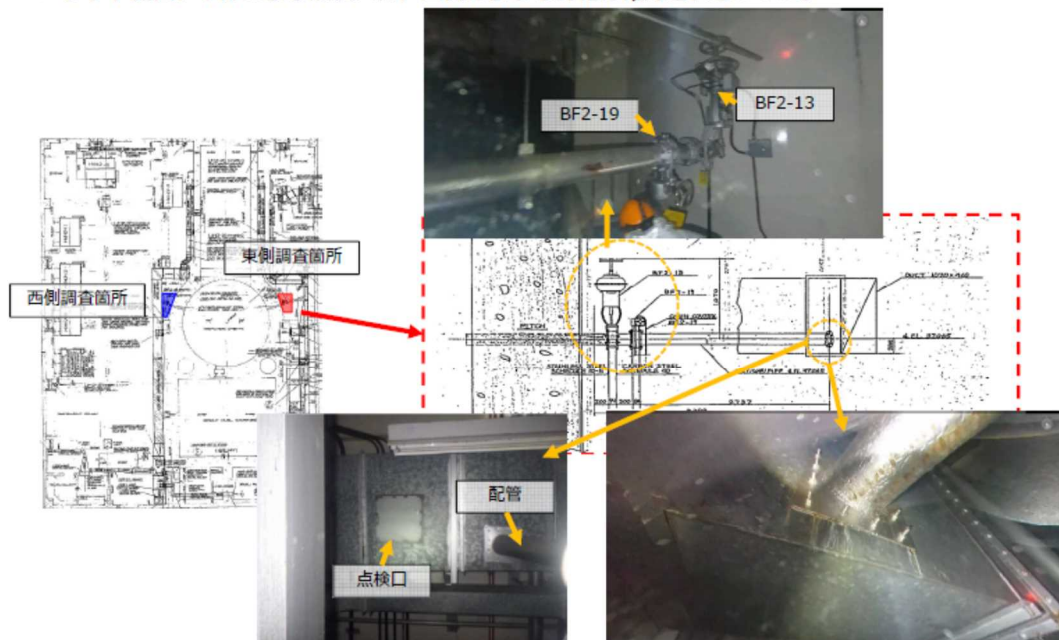
2号機原子炉建屋4階東側の原子炉キャビティ差圧調整ライン及びダクトの腐食等の外観調査の結果、作業エリアの空間線量は約10mSv/hであり、西側の作業エリアの約12mSv/hと同程度であった。ダクトについては、ダクト側面、下部及び点検口に、西側のような劣化は確認されなかった。また、空気作動弁<sup>5</sup>は西側と同様に開状態であることが確認された。(図8～図10参照)

<再掲 第91回 特定原子力施設監視・評価検討会資料>

### 3-③. 東側原子炉キャビティ差圧調整ライン調査 (外観調査)

TEPCO

- 東側に敷設された原子炉キャビティ差圧調整ラインについて、現場調査を実施した。
  - 作業エリア（グレーチング）上の空間線量は約10mSv/hであった。※西側：約12mSv/h
  - BF2-13弁は、西側と同様に開状態であった。
  - ダクト側面、下部および点検口に、西側のような劣化は確認されなかった。



9

図8 2号機東側原子炉キャビティ差圧調整ライン調査 (外観調査)

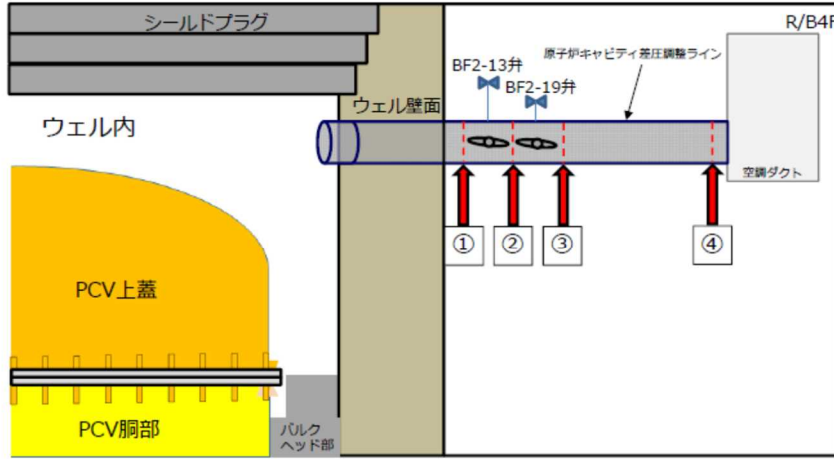
<sup>5</sup> 2号機原子炉建屋4階東側原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁 (BF2-13弁)

3-③. 東側原子炉キャビティ差圧調整ライン調査 (線量調査)



■ 線量測定結果は以下の通り。

➤ 測定ポイント②の配管下部に、最大線量：51mSv/hを確認した。

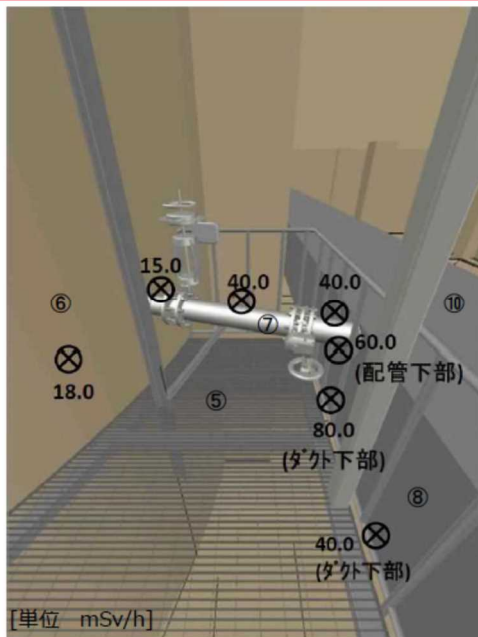


測定ポイント		①	②	③	④
		PCV壁面～BF2-13弁間	BF2-13～BF2-19弁間	BF2-19弁～ダクト間	ダクト近傍
配管	上部(mSv/h)	13	41	25	18
	下部(mSv/h)	13	51	37	20

10

図9 2号機東側原子炉キャビティ差圧調整ライン調査 (線量調査)

(参考) サーベイデータ (原子炉キャビティ差圧調整ライン (西側))



測定日：2021/3/5

使用測定器  
ICW,ICWBL,ICWBH,GMAD,a

スミヤ採取場所	$\beta$ (cpm)	$\alpha$ (cpm)	$\gamma$ (mSv/h)	$\beta+\gamma$ (mSv/h)
⑤	>100000	0	0.15	10.0
⑥	>100000	30	0.14	5.0
⑦	>100000	50	0.18	12.0
⑧	>100000	0	0.15	8.0
⑩	>100000	0	0.14	7.0

11

図10 2号機西側原子炉キャビティ差圧調整ライン調査 (線量調査)

なお、原子炉ウェル及び原子炉キャビティ差圧調整ラインの調査については、東京電力が2019年8月に1号機シールドプラグ下の線量測定及び11月に1号機原子炉キャビティ差圧調整ラインの調査を実施<sup>6</sup>している。(図12及び図13参照)

1号機のシールドプラグ下の線量については、測定位置によって差があるが最大約670mSv/hから約1190mSv/hの空間線量率が測定されている。

また、1号機原子炉キャビティ差圧調整ラインの配管出口部周辺の線量測定では、2600mSv/h(配管出口下50cm)が測定されている。

なお、1号機原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁については、閉状態であることが確認されている。

(参考) 中段プラグ下线量測定結果【速報】



- 測定位置(①~⑤)において、下段のプラグやガレキに接触しない範囲で線量計を吊下げて100mm毎に空間線量率を測定。
- 線量測定の結果、各測定位置共に、中段プラグより下側で高くなる傾向を確認。

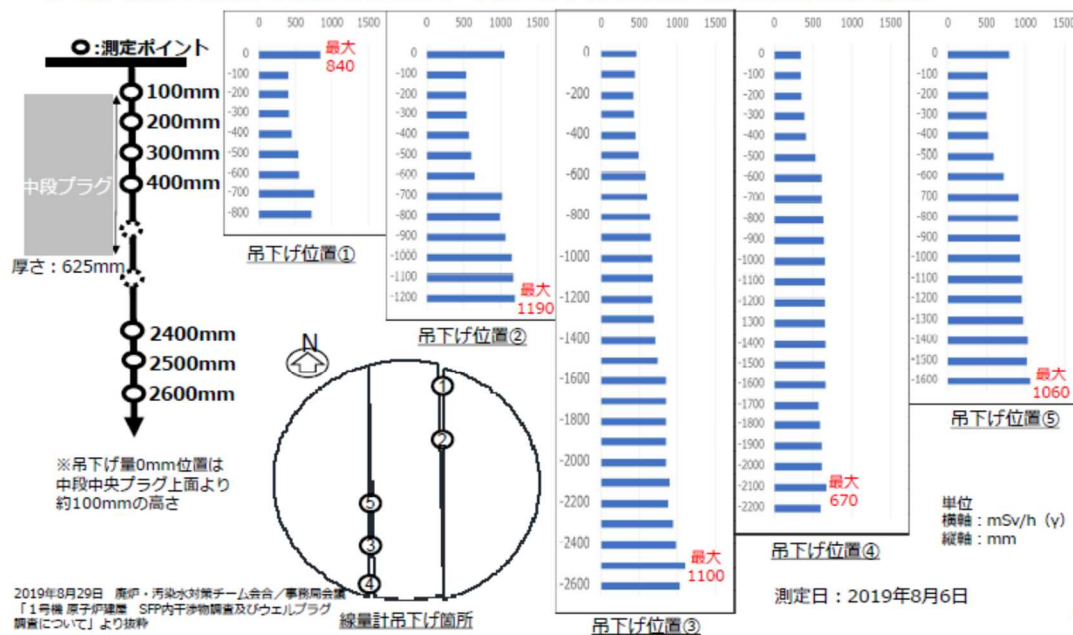
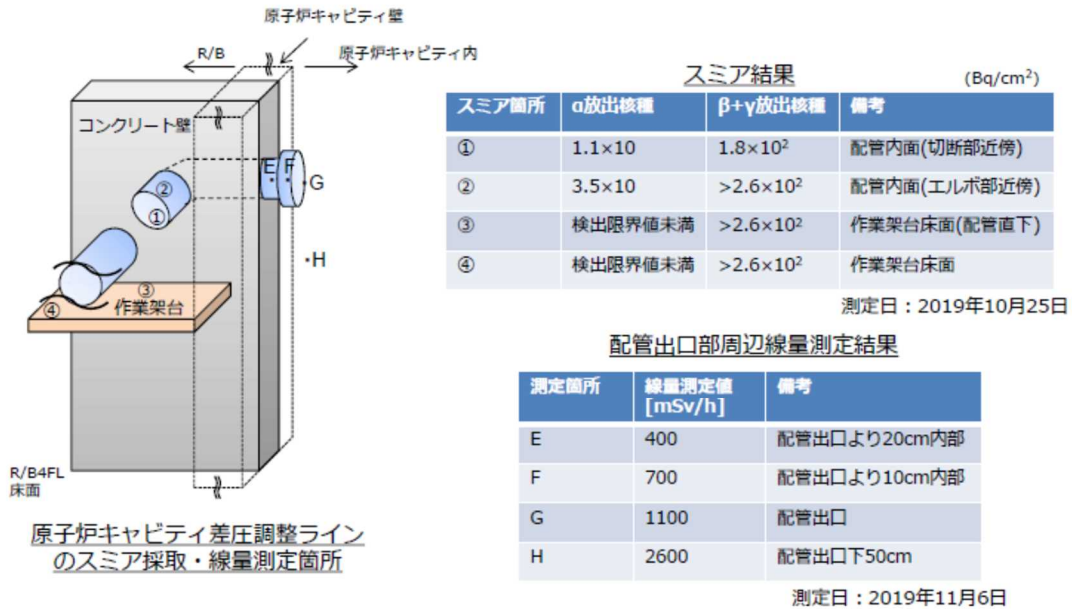


図11 1号機シールドプラグ下の線量測定結果

<sup>6</sup> 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 第10回会合 資料6-3「1号機原子炉格納容器上蓋の状況確認について」(東京電力ホールディングス株式会社)



7

図12 1号機シールドプラグ下の線量測定結果

調査チームによる2号機及び4号機の原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁の調査の結果、2号機と4号機で空気作動弁の動作を示すリミットスイッチの指示が異なること及び東京電力の2号機西側原子炉キャビティ差圧調整ラインの配管内部の調査結果から空気作動弁が開状態であることが確認されていることから、現在の状態は、2号機西側原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁は開状態、4号機西側原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁は閉状態であると判断した。(図13参照)

また、2号機西側原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁付近の空間線量は約8mSv/h<sup>7</sup>であった。

<sup>7</sup> 2020年10月8日の現地調査時に測定。



図 1 3 2号機及び4号機西側原子炉キャビティ差圧調整ライン  
空気作動弁調査（外観調査）

### 3. まとめ

東京電力におけるこれまでの調査・分析では、2号機原子炉ウェル内の線量については、最大で 530mSv/h（2021年5月）であり、1号機原子炉ウェルでの 2600mSv/h（2019年11月）に比べて低い線量率となっている。さらに、2号機原子炉キャビティ差圧調整ラインの配管下部では 60mSv/h、ダクト下部では 80mSv/h となっており、2号機原子炉建屋4階西側エリアの約 3mSv/h～10mSv/h<sup>8</sup>の空間線量率よりも高い値が確認されている。

また、1号機の原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁は閉状態であることが確認されているが、2号機の原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁は開状態であることが確認されている。東京電力は、当該弁は手動操作で開状態になっているとしている。（図 14 参照）

この2号機の手動操作による開状態については、いつ操作が行われたのか不明であり、周辺の空間線量率及び空気作動弁の設計を踏まえると、事故時に電源及び制御用空気が喪失した2号機では、閉状態であった可能性も十分考えられる。

これらの調査結果から、2号機原子炉キャビティ差圧調整ラインの空気作動弁は、事故時にいつのタイミングで開状態に操作されたのかは不明であるが、原子炉キャビティ差圧調整ラインの線量率は、2号機原子炉建屋4階西側エリアのものよりも高く、ダクトの腐食等の劣化の状態も踏まえると、放射性物質を含む水蒸気が流れ

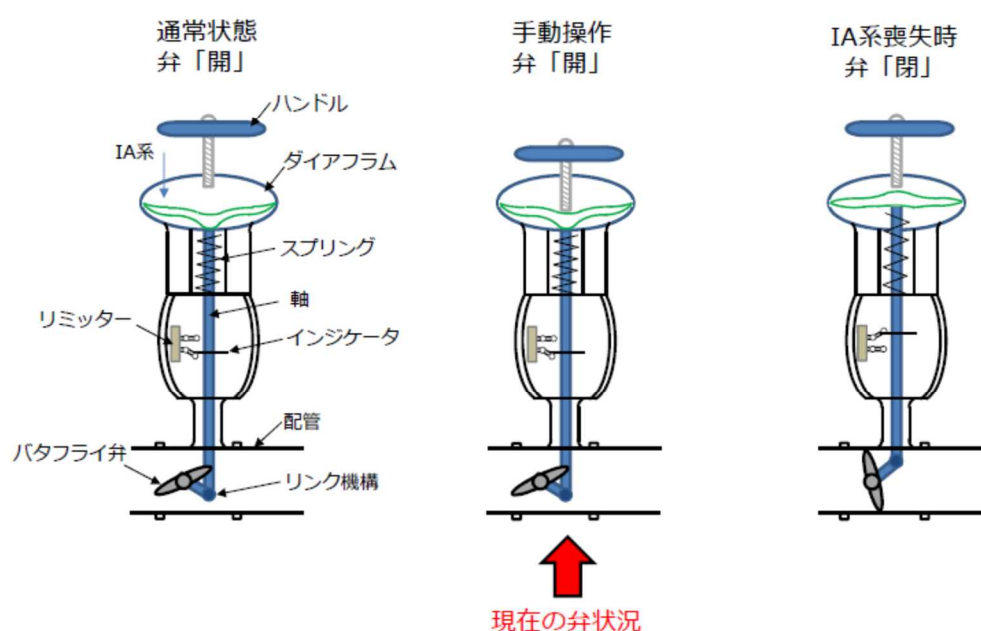
<sup>8</sup> 2020年9月10日、10月8日原子力規制庁による測定

たものの、その量は限られたものであることを示唆している。ただし、2号機原子炉ウェルの空間線量は、1号機に比べても低く、2号機原子炉建屋5階のオペフロの高い空間線量率に寄与したとは考えにくい。

<再掲 第91回 特定原子力施設監視・評価検討会資料>

(参考) BF2-12弁 イメージ図

TEPCO



34

図14 2号機西側原子炉キャビティ差圧調整ライン空気作動弁の状態 (イメージ図)

#### 引用文献等

- 1) 福島県原子力発電所の廃炉に関する安全監視協議会 (令和3年度第3回) 資料3-2 2号機シールドプラグ高濃度汚染への対応状況について、2021年9月9日 東京電力ホールディングス株式会社
- 2) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 (第21回会合) 資料5-3 2号機シールドプラグ高濃度汚染への対応状況について、2021年7月8日 東京電力ホールディングス株式会社
- 3) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 (第10回会合) 資料6-3 1号機原子炉格納容器上蓋の状況確認について、2020年2月4日 東京電力ホールディングス株式会社

(別添3-2-1)

## 2号機シールドプラグの上段と中段の隙間に沈着しているCs-137放射能の推定

### (1) シールドプラグ上部での測定

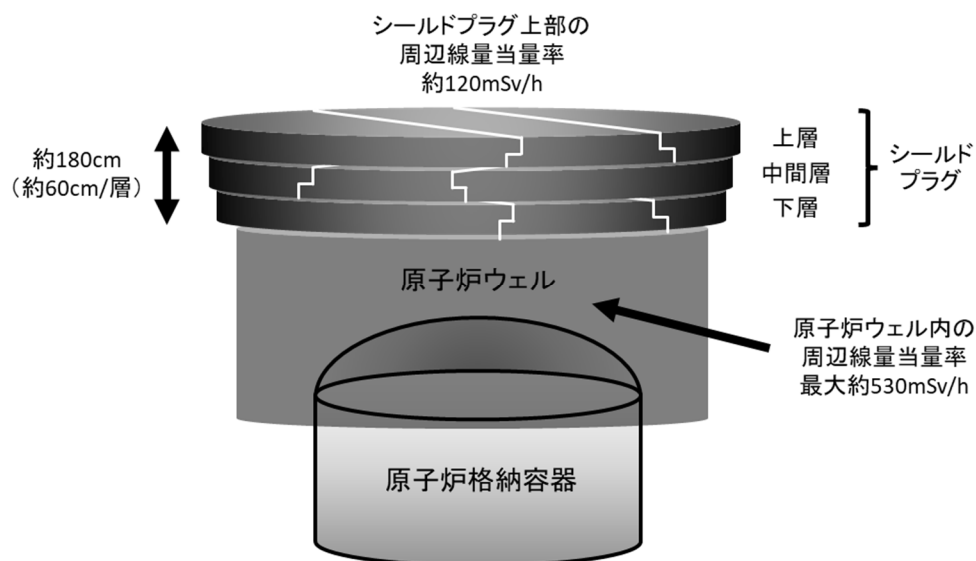
原子力規制庁原子力規制部

東京電力福島第一原子力発電所事故対策室

平山英夫、近藤健次郎、鈴木征四郎、吉田善行、林克己、岩永宏平

#### 1. はじめに

シールドプラグから穿孔により取り出された13個のコンクリートコア表面の汚染密度が最大でも $5.0E+5$  Bq/cm<sup>2</sup>程度であったことから、シールドプラグ上部の高い線量当量率はシールドプラグ上段と中段に沈着しているCs-137等によることは確認されたと言える。どれだけの放射能がどのように隙間(図1)に沈着しているかを知るために、様々な測定が必要であるが、2号機の場合には以下のような制約がある。



第1図：原子炉ウェル及びシールドプラグの配置

- ・2号機ではオペレーションフロア(以下、「オペフロ」という。)の建物構造が健全であることから床・天井・壁にCs-137で汚染した線源が存在する。
- ・現時点でもオペフロ内部、特にシールドプラグ上部の線量当量率が高く、作業者が立ち入って測定することができない。
- ・建物が健全であることから大型の重機による作業や測定はできない。



・結果として、可能な手段は、小型のロボットで操作可能な手法に限定される。

このような制約条件の下で、

- ・オペフロ空間内での線量当量率測定（床面から 150 cm 高さ、大凡シールドプラグ床全体）
- ・コーンカウンター付き  $\gamma$  線線量計による測定（床面から 30.5cm 高さ、床面直径 300mm）
- ・ロボットによるスミア
- ・ガンマカメラによる測定
- ・ $\beta$  線 70 マイクロメートル線量計による表面汚染密度の測定
- ・シールドプラグ表面での線量当量率測定
- ・シールドプラグに掘削した穴内部での測定

が行われ、その解析が行われた。個々の測定にはそれぞれ利点と欠点があり、そのことを理解した上で総合的に考えることが必要である。

半径 6 m という広いシールドプラグの隙間全体の放射能を測定するためには、シールドプラグ全体からの寄与が含まれる床面からの十分離れた位置での「隙間からの光子による線量当量率」の測定が適している。シールドプラグからの距離が十分ある場合には、バルクとしてのコンクリートを対象となるので、密度以外の微細な構造は考慮する必要はない。しかし、オペフロ内部の汚染の寄与が含まれることから、その見積もり評価が重要となる。また、この手法では隙間の汚染分布の情報を得ることはできない。

シールドプラグの隙間の汚染分布の状況を知るためには、線量に寄与する領域を限定した測定をシールドプラグの表面近くやシールドプラグ内部で測定することが必要になる。コーンカウンター付き  $\gamma$  線線量計や穴内部での測定が相当する。コーンカウンター付き  $\gamma$  線線量計は、線量計の位置が床面から 30.5 cm 離れているのでコンクリート内の微細構造の影響は少ないが、床面汚染による寄与を見積もることが必要となること、対象領域がシールドプラグの大きさに比べて非常に狭いのでシールドプラグ全体の汚染状況を知ることが難しい。穴の内部の測定は、オペフロ内部の汚染の影響を受けにくい測定であり、コーンカウンター付き  $\gamma$  線線量計よりは広い領域（大凡半径 50 cm の領域）の汚染分布の情報を得ることができるが、シールドプラグ全体の情報を得ることは難しい。また、コンクリート内部での測定であることから、シールドプラグ内の微細構造の影響を受けやすい。

シールドプラグ上部の線量当量率測定は、限られた場所の測定結果と対応することにより隙間の汚染密度との相関が得られればシールドプラグ全体の放射能の推定に使用できるが、測定された線量当量率にはオペフロ内部の汚染の寄与が含まれていること、測定点が多いとはいえシールドプラグ全体から見れば限られた領域の情報という制約がある。

シールドプラグ隙間の汚染に関する検討は、上記の制約の下で可能な情報の取得や計算による分析を積み重ね情報を増やす取り組みである。以下では、この観点からシールドプラグ上部での測定結果を用いて 2022 年度に実施した検討結果をまとめた。

## 2. 150 cm 位置での周辺線量当量率測定結果の検討

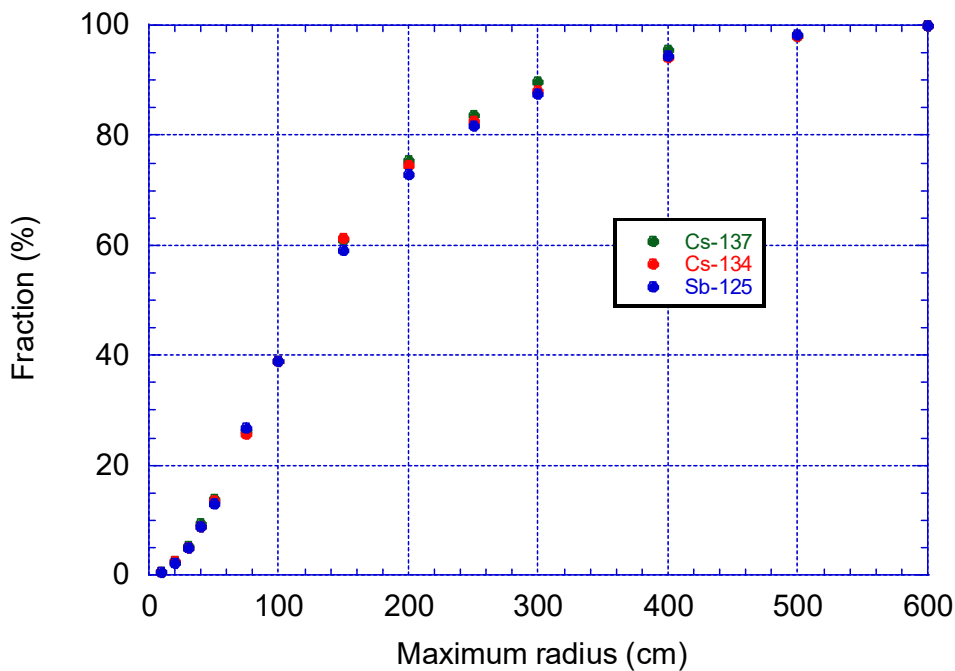
## 2-1 オペフロ内面（床、天井、壁）の汚染の検討

「2号機オペフロ内壁の汚染密度の把握」で詳細に検討しているように、天井全体の汚染密度についてはコーリメーター付き  $\gamma$  線線量計を天井に向けて使用することにより、包括的な情報を取得することができ、平均的な汚染密度として  $3.6 \times 10^5 \text{ Bq/cm}^2$  が得られた。また、床については、これまでに得られていた情報から平均的な汚染密度として  $2.5 \times 10^5 \text{ Bq/cm}^2$  程度と推定した。しかしながら、東西南北の壁については、新たな測定データを取得することができなかつたこと、一様な汚染密度を仮定して計算した各面からの寄与から、東西の壁の寄与が大きくこれまでに得られているそれぞれの汚染密度を用いると実測値を過大評価となることが分かった。各面の汚染が均一であるモデルが影響している可能性があることから、東西南北の壁については新たな測定方法を含めた検討が必要である。

これまでは、「オペフロ内壁の汚染による寄与としては、シールドプラグ以外の領域は、シールドプラグ東側の一部を別にすると 20 から 30 mSv/h のレベルで場所による違いは小さい」という状況からシールドプラグ上部でのオペフロ内壁の汚染による寄与として使用することとした 30 mSv/h を使用した。しかし、内壁の汚染密度の検討から、東壁は他の領域より汚染密度が高い可能性があり、東壁に近い領域の線量率が高い可能性があることが判った。この状況から「シールドプラグ東側の一部を別にして内壁の寄与を推定する」よりも、「東側の測定結果を基に内壁の寄与を推定する」方が適切と考えられる。シールドプラグの東側の 4 箇所平均 61 mSv/h を内壁の寄与とする。

シールドプラグ中心軸上で上段と中段の隙間の半径 6 m の汚染による床面から 150 cm 位置での線量当量率として、これまではコンクリート 60 cm の結果を使用していた。コンクリートの厚さが 61 cm ということが明確になったので、コンクリートの密度が  $2.1 \text{ g/cm}^3$  の場合の計算結果  $1.03 \times 10^{-6} \mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$  (Cs-137 が  $1 \text{ Bq/cm}^2$  で Cs-134 と Sb-125 が  $0.1 \text{ Bq/cm}^2$ ) を使用する。

シールドプラグの中心軸上で床面から 150 cm 位置での周辺線量当量率に半径 6 m の線源のどの領域が寄与しているかを汚染密度が一様な場合について、線源半径依存性を第 2 図に示す。半径 3 m までの領域で全体の約 90% の線量当量率であること、割合は小さいが 6 m まで寄与が見られることが判る。半径 3 m までの寄与が中心であることから、シールドプラグ上部の位置により隙間の汚染密度が一様であっても線量当量率が異なる可能性がある。第 1 表に、シールドプラグの南北の中心位置から東方向に 1, 3, 5 m 離れた位置での周辺線量当量率の比較を示す。東方向への移動距離である Y が大きくなる（シールドプラグの端に近い場所）と線量当量率は小さくなるが、5 m でも 20% 程度と影響は小さい。測定箇所の正確な位置が不明であること、隙間の汚染密度に分布がある可能性があるため、以下ではシールドプラグ上部の位置依存は考慮せず、中心軸上と同じであるとして検討する。



第2図 シールドプラグ中心軸上 150 cm 位置での周辺線量当量率に寄与する線源領域

第1表 シールドプラグ上 150 cm 位置での周辺線量当量率の場所依存

Y position	Cs-137	Cs-134	Sb-125	Total*	Ratio to
m	$\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$				0 m
0	$7.14\text{E-}07 \pm 1.32\text{E-}08$	$2.90\text{E-}06 \pm 4.50\text{E-}08$	$2.75\text{E-}07 \pm 9.51\text{E-}09$	$1.03\text{E-}06$	1.00
1	$7.12\text{E-}07 \pm 1.31\text{E-}08$	$2.89\text{E-}06 \pm 4.49\text{E-}08$	$2.75\text{E-}07 \pm 9.46\text{E-}09$	$1.03\text{E-}06$	1.00
3	$6.99\text{E-}07 \pm 1.28\text{E-}08$	$2.79\text{E-}06 \pm 4.29\text{E-}08$	$2.66\text{E-}07 \pm 9.06\text{E-}09$	$1.01\text{E-}06$	0.97
5	$5.71\text{E-}07 \pm 1.09\text{E-}08$	$2.29\text{E-}06 \pm 3.64\text{E-}08$	$2.18\text{E-}07 \pm 7.58\text{E-}09$	$8.22\text{E-}07$	0.80

\*1 Bq/cm<sup>2</sup> of Cs-137+0.1 Bq/cm<sup>2</sup> of Cs-134 and Sb-125

シールドプラグ上部の測定値は 79 mSv/h から 148 mSv/h の 12 点で平均は 119.3 mSv/h である。オペフロ室内の汚染による線量率を 61 mSv/h とすると、シールドプラグ隙間の汚染による線量率は 58.3 mSv/h なので、Cs-137 の平均汚染密度は  $5.65 \times 10^{10}$  ( $1.74 \times 10^{10} \sim 8.43 \times 10^{10}$ ) Bq/cm<sup>2</sup> である。平均の汚染密度の場合半径 6 m のシールドプラグ全体では 64 PBq となる。

## 2-2 コンクリートの密度の影響

厚さ 61 cm のコンクリートによる $\gamma$ 線の減衰はコンクリートの密度に依存する。これまでの推定では、コンクリートの密度として下限値である 2.1 g/cm<sup>3</sup> を使用してきた。実際のシールドプラグの実効的密度の情報は無いが、実効的密度がより高い可能性がある。密度の影響を見るために、実効的な密度が 2.2 又は 2.3 g/cm<sup>3</sup> の場合の 1 Bq/cm<sup>2</sup> 当たりの周辺線

量率を比較した、結果を第 1 表に示す。

第 1 表 コンクリートの密度による床上部 150 cm での周辺線量当量率の比較

密度	Cs-137		Cs-134		Sb-125		Total*	Ratio to	
g/cm <sup>3</sup>	μSv/h per Bq/cm <sup>2</sup>								2.1 g/cm <sup>3</sup>
2.1	7.14E-07 ± 1.32E-08	2.90E-06 ± 4.50E-08	2.75E-07 ± 9.51E-09	1.03E-06					1.00
2.2	5.28E-07 ± 1.11E-08	2.29E-06 ± 3.96E-08	1.85E-07 ± 7.28E-09	7.75E-07					0.75
2.3	4.03E-07 ± 9.55E-09	1.75E-06 ± 3.31E-08	1.51E-07 ± 6.96E-09	5.94E-07					0.58

### 3. コリメーター付γ線線量計による測定結果の検討

コリメーター付γ線線量計による測定は、オペフロ内面の汚染からの寄与が、対象領域の限られた領域（コリメータの視野領域）であることから、シールドプラグの上段と中段の隙間の Cs-137 汚染密度の推定に使用できる。しかしながら、「2号機オペフロ内壁の汚染状況の把握」で述べたように、コリメーター付γ線線量計で測定される線量率が周辺線量当量率と異なることから、計算で求めた周辺線量当量率から測定される線量率への換算が必要となる。床面の汚染の場合は、周辺線量当量率の 1/1.69 である。この違いは、本来ファントム上で使うことを前提としている線量計を鉛の内部で測定したこと起因するものである。シールドプラグの上段と中段の隙間の汚染による周辺線量当量率は、床面汚染の場合よりエネルギーが低い散乱線の寄与が大きいことから周辺線量当量率と測定される線量率の関係は違いがより大きい可能性がある。使用されている線量計の詳細情報を得ることができないので、スペクトルに合った関係を得ることができないので、過大評価になっていることを前提に、同じ係数を用いて線量計で得られる線量率を求める。

昨年度の報告の際には、コンクリートの厚さを 60 cm として、Cs-137 の計算結果を用いていた。シールドプラグの上段の厚さが 61 cm であることが判明したので、コンクリートの厚さは 61 cm とし、測定当時の状況を踏まえ Cs-137 の 10% の Cs-134 と Sb-125 が存在するとした。汚染密度が一様な面線源による床面 30.5 cm 位置のコリメーター付きγ線線量計の周辺線量当量率を電磁カスケードモンテカルロ計算コード egs5<sup>1)</sup>で計算した。egs5 に「面等方線源と単位球検出器形状を点等方線源と面検出器に変換する手法<sup>2)</sup>」を拡張してコリメーターに対応した平面検出器への入射角度の制限をつけることにより、コリメーター内面での散乱線の寄与を無視した条件<sup>3)</sup>で、形状変換を用いて測定位置での周辺線量当量率を計算した。

床表面汚染の場合及び 61 cm コンクリート下部の場合の計算結果を第 2 表に示す。表中の「total」は、Cs-134 と Nb-125 の放射能は Cs-137 の放射能の 10% であるとした場合の Cs-137 1 Bq/cm<sup>2</sup> 当たりの周辺線量当量率である。第 1 表には、測定された線量率から汚染密度を求める際に使用する線量率（周辺線量当量率を 1.69 で割った値を合わせて示している。

第2表 面線源によるコーリメーター付きγ線線量計の周辺線量当量率

Source position	Cs-137	Cs-134	Sb-125	Total*	Total/1.69
	μSv/h per Bq/cm <sup>2</sup>				
On floor	7.89E-04 ± 6.60E-07	2.00E-03 ± 1.66E-06	6.72E-04 ± 6.29E-07	1.06E-03	6.25E-04
Under 61 cm concrete	2.33E-07 ± 4.55E-09	1.00E-06 ± 1.74E-08	7.99E-08 ± 2.83E-09	3.41E-07	2.02E-07

\*Cs-137+0.1\*(Cs-134+Sb-125)

コーリメーター付きγ線線量計による測定結果<sup>4)</sup>から、床表面（シールドプラグ床表面を除く。）の汚染による平均の線量率は0.86 mSv/hである。一方、シールドプラグ床表面のCs-137汚染が最大の5.0E+05 Bq/cm<sup>2</sup>であると仮定した場合の床表面汚染によるコーリメーター付きγ線線量計による線量率は、計算の結果、0.31 mSv/hとなるので、床表面の測定値の平均0.86 mSv/hを用いることは、シールドプラグ床表面の汚染の影響を過大に推定している可能性がある。ここでは、シールドプラグ床表面の汚染による寄与とし0.86 mSv/hを床表面の汚染を保守的に評価をしていること前提として、シールドプラグ上段と中段の隙間のCs-137汚染密度を求めた。結果を第3表に示す。6か所の平均値4.5E×10<sup>10</sup> Bq/cm<sup>2</sup>は、2-1で床面から150 cm位置での周辺線量当量率の平均値5.65×10<sup>10</sup>とほぼ同じ値である。平均値を使用した場合半径6 mのシールドプラグ全体では51 PBqに相当する。シールドプラグ以外の床表面での汚染密度のばらつきが大きいこと、コーリメーター付γ線線量計の対象領域が狭いことから、6か所の結果で平均の汚染密度を評価することには無理があるが、参考値として他の手法との比較に使用することはできる。

第3表 シールドプラグ上段と中段の隙間のCs-137汚染密度の推定値

測定点	γ線線量当量率 (mSv/h)	床面表面汚染の寄与除去後 (mSv/h)	Cs-137汚染密度 (Bq/cm <sup>2</sup> )
(48)	12	11.1	5.5E+10
(49)	13	12.1	6.0E+10
(50)	7.1	6.2	3.1E+10
(51)	8.0	7.1	3.5E+10
(52)	15	14.1	7.0E+10
(53)	5.0	4.1	2.1E+10
		Average	4.5E+10

参考資料

1. H. Hirayama, Y. Namito, A. F. Bielajew, S. J. Wilderman, W.R. Nelson, "The EGS5 Code System", SLAC-R-730 (2005) and KEK Report 2005-8 (2005).

2. Y. Namito, H. Nakamura, A. Toyoda, K. Iijima, H. Iwase, S. Ban and H. Hirayama, "Transformation of a system consisting of plane isotropic source and unit sphere detector into a system consisting of point isotropic source and plane detector in Monte Carlo calculation", J. Nucl. Sci. Technol, **49**, 167-172 (2012).
3. 波戸 芳仁、平山 英夫、“線源と検出器の形状変換の拡張-コリメーター付き検出器、円柱線源-”、日本原子力学会春の年会 1D01 (オンライン, 2021年3月17日～19日).
4. 東京電力ホールディングス株式会社、“2号機原子炉建屋オペフロ内残置物移動・片付後調査の結果について”、2019年2月28日、  
<[www2.nsr.go.jp/data/000270192.pdf](http://www2.nsr.go.jp/data/000270192.pdf)>

(別添3-2-2)

## 2号機シールドプラグの上段と中段の隙間に沈着しているCs-137放射能の推定

### (2) シールドプラグに穿孔した穴内部での測定

原子力規制庁原子力規制部

東京電力福島第一原子力発電所事故対策室

平山英夫、近藤健次郎、鈴木征四郎、吉田善行、林克己、岩永宏平

#### 1. はじめに

床面から150 cm位置での周辺線量当量率又はコリメータ付γ線線量計による汚染密度の推定は、オペフロ内壁の汚染による寄与を見積もる必要があることから、シールドプラグの上段と中段の間に大量のCs-137が沈着していることを直接確認する測定が求められた。これまでに判明している状況から、床表面の汚染による寄与を念頭にegs5<sup>1)</sup>を使った計算を基に、シールドプラグ上部に線量計を挿入出来る穴を穿孔し、ある程度深い位置での線量当量率の測定を行えば、オペフロ内壁の寄与を考慮せずにシールドプラグ上段と中段の隙間に沈着しているCs-137等による周辺線量当量率をオペフロ内壁の寄与を考量せずに測定出来る可能性があることが判った。この測定の妥当性を実証する目的で、IRIDが汚染サンプル分析のために穿孔した2箇所での測定(2021年8月5日、26日及び9月9日)が東電との共同で実施された。

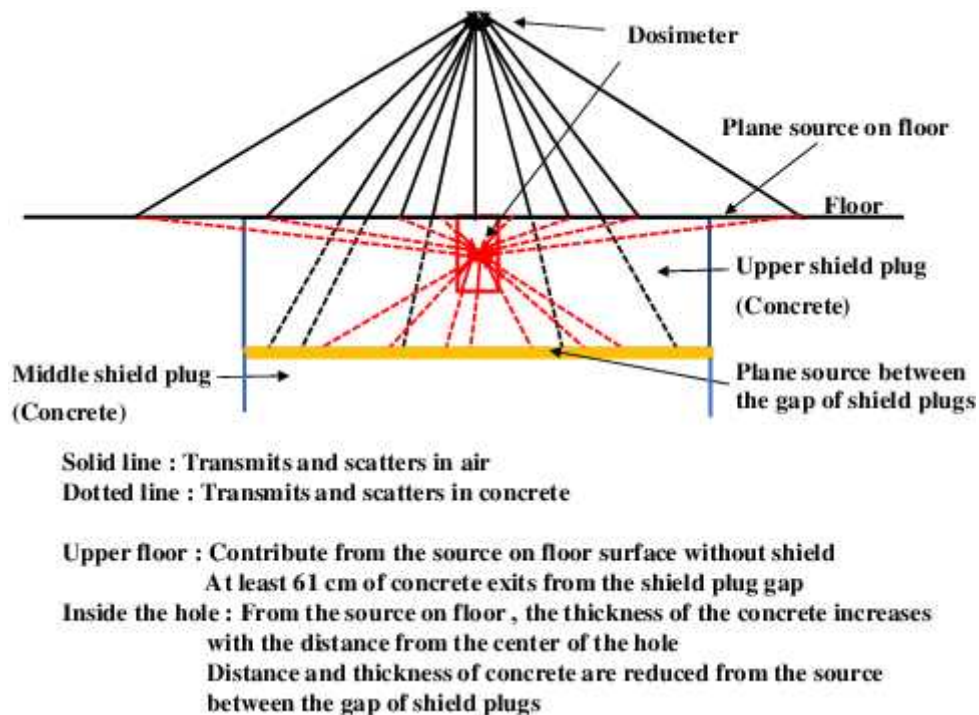
以下、取り組みを具体的に述べる。

#### 2 2号機シールドプラグ穴内での周辺線量当量率測定によるシールドプラグ上段と中段の隙間のCs-137汚染量の測定の可能性についての検討

##### 2-1 測定原理

これまでの推定から、シールドプラグ上部における周辺線量当量率は床表面等オペフロ内部の表面汚染による寄与よりもシールドプラグの上段と中段の隙間の汚染の寄与が大きいと考えられている。

第1図に、測定原理を模式図で示す。床面上部の測定では、測定点から直視出来る壁・床・天井等オペフロ内面の表面汚染からのγ線は空気のみを通過して検出器に達する(図中実線)が、シールドプラグ隙間からの汚染の場合は、最短でも61 cmのコンクリートを透過する(図中点線)ことになる。一方、穴の内部の測定では、床等のオペフロ内部の表面汚染からのγ線は、コンクリートを透過する事になり、測定点から離れた位置ほど透過するコンクリートの距離が長くなるので、線量当量率に寄与する領域が限定される。それに対してシールドプラグ隙間の汚染が線源の場合は、穴の中の測定点の位置が深くなるに連れ、透過するコンクリートの距離が短くなり線量当量率への寄与が増える。



第 1 図 測定原理の模式図

## 2-2 計算による検討

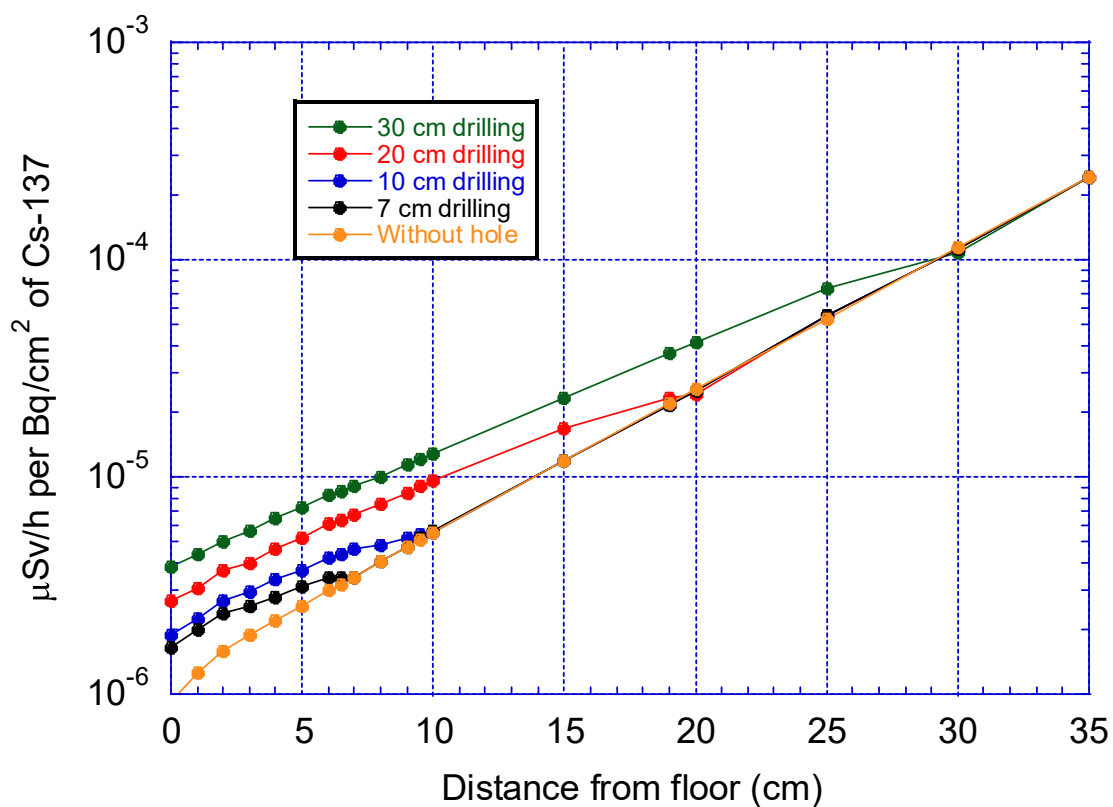
線源の汚染密度が一様であるとして  $\text{egs5}^1)$  を用いて周辺線量当量率を計算した。

穿孔した穴がある場合のシールドプラグ隙間の汚染による計算では、線源（Cs-137 及び Cs-137 の 4.4% の放射能の Cs-134）が、61 cm のコンクリート下部で半径 6 m の領域に一様な密度で分布しているとし、線源領域を円環に分けて各円環の線源による周辺線量当量率を計算した。評価点での周辺線量当量率は各円環からの寄与を積算して計算した。統計精度を上げるために、衝突確率法を適用した。オペフロ内壁の汚染としては床のみを考慮した。床表面の汚染による計算では、線源が床表面に一様に分布しているとして同様の方法で周辺線量当量率を求めた。穴が無い場合には、測定位置の線量当量率を「面等方線源からのガンマ線束を線源と検出器を置き換える手法<sup>2)</sup>」を適用して計算した。コンクリートの密度は  $2.1 \text{ g/cm}^3$  とした。

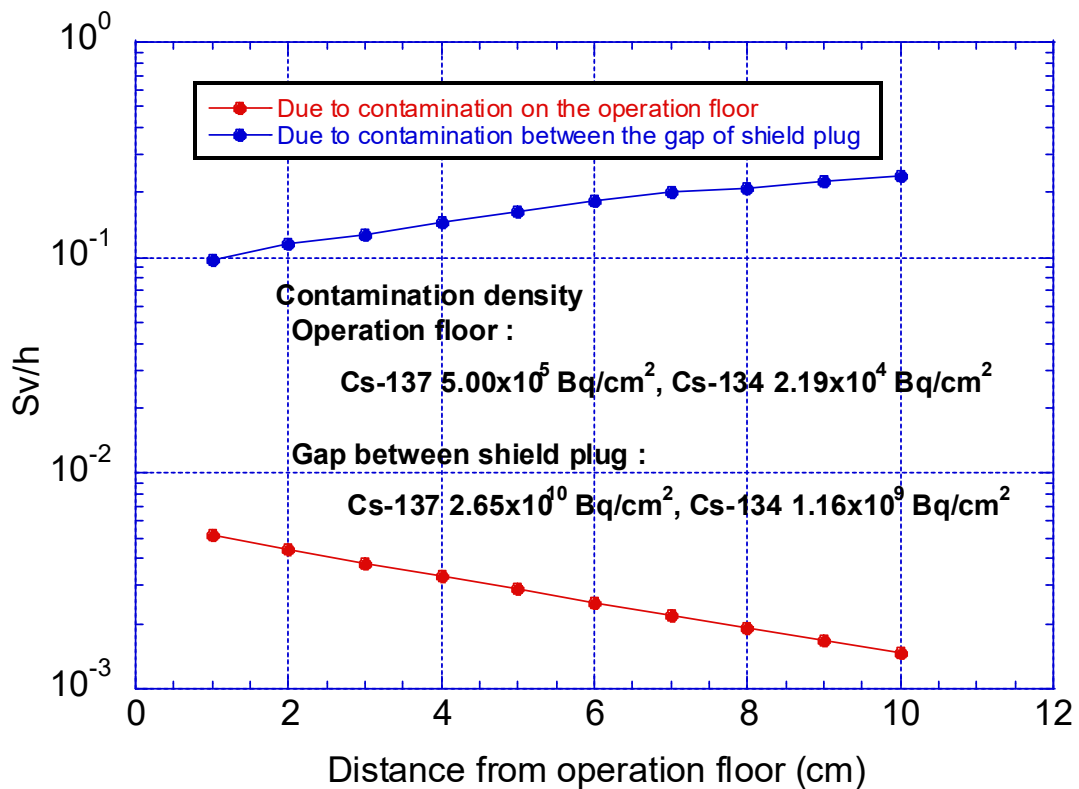
第 2 図に、直径 5 cm で深さが 30 cm、20 cm、10 cm 及び 7 cm の場合のシールドプラグ隙間の汚染によるシールドプラグ穴内の周辺線量当量率を示す。図には、穴が無い場合の結果も併せて示す。横軸はオペフロ床面を 0 cm として、穿孔した穴内の計算評価点の深さを示し、縦軸は「シールドプラグ隙間の汚染（Cs-137  $1 \text{ Bq/cm}^2$  と Cs-134  $0.044 \text{ Bq/cm}^2$ ）からの周辺線量率」を示す。穿孔した穴の深さに応じてオペフロ床面からの距離が同じ位置でも穴内部の線量当量率が増加することが分る。



第3図に、穴の深さが10 cm の場合の床表面汚染による周辺線量当量率とシールドプラグの上段と中段の隙間の汚染による周辺線量当量率の比較を示す。床表面の汚染密度が測定値の最大値  $5 \times 10^5 \text{ Bq/cm}^2$  で、隙間の汚染密度が推定値の最小値である  $2.65 \times 10^{10} \text{ Bq/cm}^2$  (隙間全体で 30 PBq) の場合の比較である。オペフロ床面から 1 cm の深さでは床面の汚染の寄与は上段と中段の隙間からの寄与の 5.4 % , 7 cm より深い位置では 1 % 以下であり、床面からの寄与は無視できるレベルである。



第2図 直径 5 cm (深さが 30 cm、20 cm、10 cm 及び 7 cm) の穴についてのシールドプラグの上段と中段の隙間に存在する Cs-137 と Cs-134 (Cs-137 の 4.4 %) によるシールドプラグ穴内部の周辺線量当量率分布



第3図 穴（直径 5 cm、深さ 10 cm）内における床表面汚染による  
 周辺線量当量率とシールドプラグ隙間の汚染による周辺線量当量率の比較  
 （床の汚染密度： $5 \times 10^5$  Bq/cm<sup>2</sup>、隙間の汚染密度  $2.65 \times 10^{10}$  Bq/cm<sup>2</sup> とした場合）

### 3 IRID の穴を用いた実証測定に向けた取り組み

シールドプラグに新たな穿孔を行なう前に、シールドプラグ内部での測定によりシールドプラグの上段と中段の隙間の Cs-137 汚染密度を測定することが可能であることを確認する必要があった。2号機シールドプラグには、2014年に IRID が建屋内汚染サンプルの分析のために穿孔した半径 2.5 cm 深さ 7 cm の穴があり、この穴を使った実証測定を実施することになった。

#### 3-1 使用する線量計の選定

実証試験で使用する線量計は、新たに穿孔する穴での測定でも使用することを前提に検討した。IRID の穴に挿入可能で、上段と中段の隙間に近い位置での数十 Sv/h レベルまで測定可能な線量計を検討した結果、ATOMTEX 社製の AT2533 線量計<sup>2)</sup>を選定した。第4図に示す様に AT2533 線量計は、低線量率用の GM 検出器（100 mSv/h 以下対象、先端から 5 cm の位置に線量計の中心がある）と高線量率用の Si 検出器（100 mSv/h 以上対象、先端から 1.5 cm に線量計がある）が装備され、線量率により切り替えて使用する仕組みになっている。



第4図 AT2533<sup>3)</sup>のセンサー部

### 3-2 測定治具

AT2533 をロボットに持たせ、シールドプラグに穿孔された穴に挿入して測定を行なうためには、専用の治具が必要である。AT2533 線量計からの出力はデータを保存すると共に PU-33 測定値表示ユニットにケーブル接続して表示させる。測定には高エネルギー加速器研究機構で製作された長さ 1 m で外径 4 cm のアクリル製パイプの上部近くに PU-33 を設置するアルミケースを付けた専用の測定治具を使用した。挿入した深さを確認するために、アクリルパイプの底面から側面にメジャーが貼り付けられている。

### 3-3 穴に入っていた砂状物質中の Cs-137 放射能の推定

2021 年 8 月 6 日に実施された IRID の穴での最初の測定では、穴の中に砂状の物質があり、中央の穴では 1 cm、東側の穴では 2 cm しか挿入出来なかった。穴の中の砂状の物質は、東電により真空掃除機で取り除かれ、掃除機内の 2 つのペール缶に収納された。収納された砂状の物質中の Cs-137 放射能を推定するために、ペール缶中心で、ペール缶蓋上部から 25 cm (ペール缶の底から 61 cm) 位置での周辺線量当量率を ATOMTEX 社製の POLIMASTER<sup>3)</sup> 線量計で 9 月 9 日に測定した。

#### (1) POLIMASTER による測定結果

真空掃除機で回収した砂状物質は、粒子の大きいものはペール缶①に、粒子が細かなものはペール缶②に収納された。ペール缶は、直径 30 cm で高さ 36 cm の円筒の容器である。POLIMASTER による測定結果は、ペール缶①の上部では 1.83 mSv/h で、ペール缶②の上部では 1.09 mSv/h であった。第 5 図にペール缶部の写真(東電提供)を示す。ペール缶を除いて同じ場所で測定した場の線量当量率は、0.444 mSv/h であったので BG として差し引いた線量当量率をペール缶に収納された砂状の物質中の Cs-137 による周辺線量当量率とした。中央の穴と東側の穴から回収された砂状の物質は、混合した状態でペール缶に収納されている。従って、ペール缶①とペール缶②の測定結果を合わせた線量当量率を、中央と東側の穴にあった砂状の物質中の Cs-137 による線量当量率と考えると、BG を引いた 2.03 mSv/h となる。

ペール缶に収納された砂状物質による線量当量率は、回収後東電により、シャロー型電離箱を用いて実施されている。東電の測定結果を第 1 表に示す。「 $\gamma$ 」は、1cm線量当量率であるが「 $\gamma + \beta$ 」は、 $\gamma$  線測定による 1cm線量当量率と  $\beta$  線による 70 マイクロメートル線量当量率の合計である。外

側の測定がペール缶の蓋の上(底面から 36cm)で実施されたとして、 $\gamma$  線の 1cm線量当量率からペール缶の底から POLIMASTER の距離である 61 cm 位置での線量当量率を推定するとペール缶①では 5.48 mSv/h、ペール缶②では 2.98 mSv/h となる。POLIMASTER の測定値より大きいのが、東電の測定では口径が約 10 cm のシャロー型電離箱が使用されていることを考慮するとほぼ対応していると言える。



ペール缶①

ペール缶②

第 5 図 ペール缶に回収された砂状物質

第 1 表 東電による測定結果

測定箇所	ペール缶①		ペール缶②	
	$\gamma$ (mSv/h)	$\gamma+\beta$ (mSv/h)	$\gamma$ (mSv/h)	$\gamma+\beta$ (mSv/h)
外側	11	12	6	8
内側	20	> 100	25	> 100
底	40	45	20	40

## (2) 線源状況等の仮定

中央の穴では 1 cm、東側の穴では 2 cm しか治具を挿入できなかったので、中央の穴には高さ 6 cm、東側の穴には高さ 5 cm の砂状物質があったことになる。穴の直径は 5 cm なので、穴の内部に溜まっていた砂状の物質が全て回収されたとすると、

$$\pi \times (6+5) \times 2.5^2 = 216$$

より、合計で 216 cm<sup>3</sup> となる。ペール缶の半径は 15 cm なので、ペール缶①とペール缶②に均等に撈取されたとし、ペール缶の底に一様にあるとすると、

$$(216/2) / (\pi \times 15^2) = 0.15$$

より、1.5 mm の厚さとなる。実際には、①と②に収納された量が異なっており、回収された砂状の物質がペール缶の底で不均一状態であり、コンクリートの破片が含まれている可能性があると思われるが、以下の検討では試料中の自己遮蔽は無視する。又ペール缶蓋の遮蔽も無視し、厚さの無い

面線源であると仮定する。また、含まれている放射性核種は、Cs-137 のみにとする。

### (3) Cs-137 放射能の推定

自己遮蔽の無い半径 R (cm) の平面線源の中心軸上 h (cm)位置の周辺線量当量率(1cm 線量当量率) q ( $\mu\text{Sv/h per MBq/cm}^2$ ) は、Cs-137 の 1 cm線量当量率定数( $\Gamma_{1\text{cm}}$ :  $0.0927 \mu\text{Sv/h per MBq at 1m}$ )を使って、以下の式で求めることが出来る。

$$q = 10^4 \pi \Gamma_{1\text{cm}} \frac{R^2 + h^2}{h^2}$$

R は 15 cm, h は 61 cm なので、 $q=171 (\mu\text{Sv/h per MBq/cm}^2)$  となる。従って、 $2.03 \text{ mSv/h}$  となる汚染密度は、 $2.03 \times 1000 / 171 = 11.9 \text{ MBq/cm}^2$  となる。総量は、

$$Q = 11.9 \times \pi \times 15^2 = 8410 \text{ MBq}$$

となる。砂状の物質の体積は、 $216 \text{ cm}^3$  なので、Cs-137 の汚染密度は  $38.9 \text{ MBq/cm}^3$  となる。

ペール缶内の線源が中央に点状に存在するとして計算した場合、61 cm 位置で  $2.03 \text{ mSv/h}$  となる Cs-137 放射能は、 $8150 \text{ Bq}$  となるので、上記で求めた結果と対応している。

### (4) 8月5日に実施した穴位置での AT2533 による測定の結果の検討

得られた結果と8月5日に実施した穴位置での AT2533 による測定の結果を比較検討した。

コアを採取するボーリング時には、切削により取り除かれたコンクリート粉を吸引しながら作業が行われたとのことなので、穴の内部の砂状の物質は穴が明けられた後に、周辺の床表面から入ってきたと考えられる。回収された砂状物質が2つの穴に均等に入っていたとすると、8月5日の東側穴での測定時は、上記で推定した合計放射能の半分の  $4080 \text{ MBq}$  の Cs-137 を含む高さ 5 cm の砂状物質の上面から 1.8 cm の位置 (第6図) で測定を行ったことになる。

#### (a) 点線源と見なした場合

Cs-137 が高さ 5.0 cm の砂状物質の中心に点状にあるとすると、点状線源計算による周辺線量当量率は、

$$4080 (\text{MBq}) \times 0.0927 (\mu\text{Sv/h per MBq at 1m}) / ((2.5+1.8)/100)^2 / 1000 = 205 \text{ mSv/h}$$

となる。

#### (b) 想定したモデルによる詳細計算

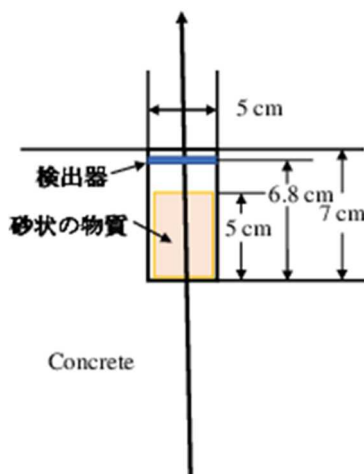
第6図に示す計算形状で、放射性核種は、砂状の物質全体に均等に存在するとして、検出器位置での周辺線量当量率を  $\text{egs5}^{1)}$  で計算した。結果を第2表に示す。

Cs-137 の汚染密度は  $38.9 \text{ MBq/cm}^3$  なので、Cs-137 と Cs-134 (Cs-137 の 4.4 %) による周辺線量当量率は、砂状物質の密度が  $1.0 \text{ g/cm}^3$  の場合は、 $227 \text{ mSv/h}$  となる。

8月5日の東側の穴の測定では床面から 2 cm 挿入時の周辺線量当量率が  $710 \text{ mSv/h}$  で、砂状の物質を取り除いた後に行なった8月26日の測定では同じ位置で  $225 \text{ mSv/h}$  であった。5日の測定時には砂状物質が入っていたので、シールドプラグ隙間の汚染による寄与は  $225 \text{ mSv/h}$  よりは少ないと思われるが、仮に  $225 \text{ mSv/h}$  とした場合には内部の砂状物質による寄与は  $485 \text{ mSv/h}$  である。上記で求めた周辺線量当量率の約2倍の周辺線量当量率である。

8月5日の測定では、中央の穴では時間をかけた測定は行わなかったが、内部の挿入を試みた

時の値は凡そ 900 mSv/h であった。今回の同じ場所(床面から 1 cm)での測定値が 600 mSv/h であったので、東側の穴の場合と同じ比較を行うと砂状物質の寄与は 300 mSv/h で、上記で求めた線量当量率の約 1.5 倍の周辺線量当量率である。



第 6 図 計算形状

第 2 表 放射性核種が砂状物質全体に一様にある場合の計算結果

Source exits whole area (0.0 - 5.0 cm)			
Density of source g/cm <sup>2</sup>	Ambient dose equivalent rate		
	Cs-137	Cs-134	Cs-137+Cs-134 (4.4 %)
	μSv/h per Bq/cm <sup>3</sup>		
Air	5.56E-03 ± 6.39E-06	1.42E-02 ± 1.63E-05	6.18E-03 ± 1.01E-05
1	5.24E-03 ± 6.20E-06	1.35E-02 ± 1.56E-05	5.84E-03 ± 9.67E-06
1.5	5.11E-03 ± 6.13E-06	1.31E-02 ± 1.55E-05	5.68E-03 ± 9.56E-06

(5) 推定のまとめ

ペール缶に回収された砂状物質をペール缶の底から 61 cm 位置で行なった線量当量率の測定値から求めた Cs-137 放射能は、総量で 8410 MBq (8.47 GBq) で、単位体積当たりの汚染密度は 38.9 MBq/cm<sup>3</sup> であった。求めた砂状物質中の Cs-137 汚染密度を用いて、穴の中の砂状物質上部から 1.8 cm 位置での線量当量率は測定結果から推定した線量当量率の約 1/2 程度であった。比較は、砂状の物質中の Cs-137 が一様な密度で分布していると仮定していること、砂状物質と検出器の距離が 1.8 cm と短いので砂状物質中の汚染密度分布の影響を受けやすいことを考慮するとほぼ対応していると考えられる。従って、2つの穴の内部の砂状物質は全量回収されたと考えられる。

#### 4 IRID の穴を用いた実証測定

IRID の穴での実証測定は 2021 年 8 月 26 日と 9 月 9 日の 2 回実施した。

##### 4-1 8 月 26 日の測定

###### (1) 線量計の使用方法

線量計としては、ATOMTEX 社の AT2533 線量計を使用した。3-1 で述べた様に、AT2533 線量計は、低線量率用の GM 検出器（100 mSv/h 以下対象、先端から 5 cm の位置に線量計の中心がある）と高線量率用の Si 検出器（100 mSv/h 以上対象、先端から 1.5 cm に線量計がある）が装備され、周辺線量当量率により切り替えて使用する仕組みになっている。深さ 7 cm の穴の中での情報を得るために、検出器の先端から 1.5 cm 上に中心がある Si 検出器のみを使用するモード（FoF モード）で実施した。従って、測定値の測定下限線量率は 100 mSv/h である。併せて、先端から約 25 cm の高さの治具外側に ATOMTEX 社の POLIMASTER 線量計を設置した。

###### (2) 測定方法

2 号機オペフロは周辺線量当量率が高いため、ロボットに線量計を取り付け、遠隔操作で測定を実施した。AT2533 線量計を高エネルギー加速器研究機構で製作した測定用治具に入れ、PU-33 測定値表示ユニットを治具上部に、POLIMASTER を治具先端から約 25 cm 位置に設置した状態でロボット（Kobra）に持たせて穴に挿入することとした。挿入した深さは、別のロボット（Packbot）で治具に貼り付けた目盛りを読ませることで確認することにした。PU-33 に 1 分毎のデータが記録されるので、回収後読み取ることとした。測定中に線量計が動作していることを確認するために、Packbot で別に用意したライトで表示部を照らし、PU-33 の表示を確認しながら測定を行った。POLIMASTER の測定値も Packbot が写した映像を操作室で読み取った。

###### (3) 測定結果

###### (a) 穴の状況

穴の中の砂状物質除去後に下図に示す測定用アクリル製治具がどこまで挿入できるについての調査が、東電により行われた。提供された写真を第 7 図に示す。中央では 6 cm、東側では 6.5 cm<sup>1</sup>まで挿入できていることが確認できる。7 cm まで挿入できないのは、「コアを折って回収したと聞いている」という東電の情報から、底面のコンクリートが平坦でなく、一部高い箇所があるためと考えられる。

---

<sup>1</sup> 写真からは、6.5 cm の様に見えるが、測定時には 7 cm まで挿入出来た。



中央の穴

東側の穴

第7図 治具挿入時の写真（東電提供）

#### (b) 測定位置

中央の穴については、床から 6 cm 及び 4 cm でそれぞれ 5 分測定すると共に、約 1 cm 移動毎にデータロガーの表示値を読み取ることで測定を行った。

東側の穴では床から 7.0 cm の穴底部から上側に向け同様の測定を行った。

各測定点では、POLIMASTER の線量値を合わせて記録した。

#### (c) 測定結果

測定結果を第 8 図と第 3 表に示す。

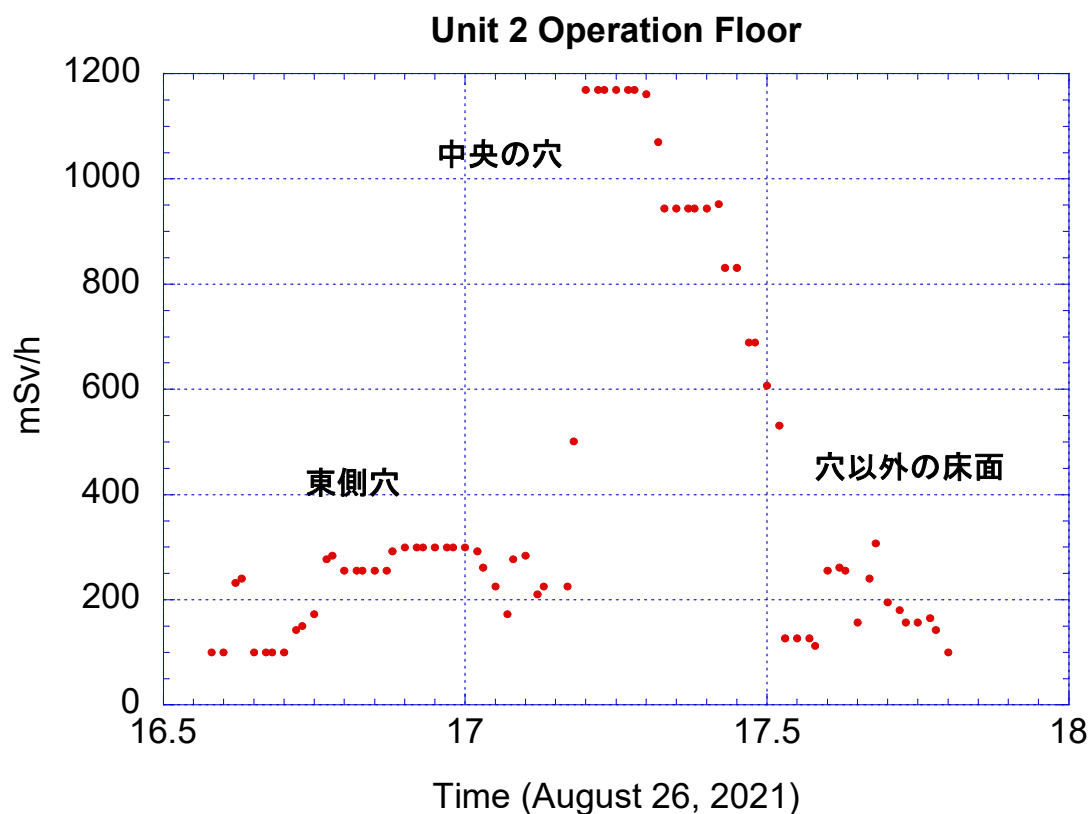
東側の穴では、底まで挿入 (7 cm) 時の線量当量率が 5 cm 挿入時より低かったことから、最後に再度底での測定を行なったが、最初の測定値と同じであることが確認された。中央の穴では、POLIMASTER の結果も従来の測定値より大きかったので、穴内の測定終了後周辺の床面での測定を行なった。穴から 90 cm までは POLIMASTER の線量当量率はほぼ同じで、床面近くの AT2533 の方が若干低いという結果であった。更に離れた位置では、POLIMASTER の方が低くなり、従来の測定結果に対応するレベルになった。以上から、中央の穴の下部周辺の汚染密度が周辺より高いことを反映していると思われる。

東側穴では、床から 7 cm 及び 6 cm での線量当量率が 5 cm での線量当量率より若干低くなった。コア採取の際に残ったコンクリートが穴の底面近くで遮蔽の役割をした可能性が考えられる。<sup>2</sup>

---

<sup>2</sup> IRID が採取したコンクリートの下部は斜めに欠けている部分があり、これに対応したコンクリートが残っていた可能性がある。最初の挿入テストで 6.5 cm まで挿入だったが、測定時には 7 cm まで挿入出来たことからコンクリートの一部が底面に残っている可能性がある。





第 8 図 AT2533 の時系列測定結果

第 3 表 測定結果

測定場所	床表面からの筒底の距離	時刻	AT2533	POLMASTER
	cm		mSv/h	
東	7.0	16:45 - 16:51	255	52.5
	6.0	16:52	277	51.5
	5.0	16:53 - 16:58	290 - 300	52.1
	4.0	16:58	292	50.9
	3.0	16:59	255	50.7
	2.0	17:02	225	51.9
	1.0	17:02	172	51.9
	7.0	17:03	255	51.5
中央	6.0	17:10 - 17:15	1016	230
	5.0	17:15	1070	236
	4.0	17:16 - 17:21	931 - 945	235
	3.0	17:23	825	225
	2.0	17:25	682 - 690	226
	1.0	17:26	600	225
	0.0	17:27	532	225
中央穴から北15cm	0.0	17:25	121	211
中央穴から北30cm	0.0	17:31	105 - 110	210
中央穴から北90cm	0.0	17:35	156	219
中央: 西との中間	0.0	17:40	151	131

(d) 穴に溜まっていた砂状の物質による汚染の影響

2つの方法で、検討を行なった。

① 砂状物質のある状態での中央付近と東側の穴に比較から

中央付近の穴では、床面から1 cmの高さまで砂状物質が詰まっており、その位置での線量当量率は、900 mSv/hであった。一方、東側の穴では、床面から2 cmの高さまで砂状物質が詰まっており、その位置での線量当量率は、700 mSv/hであった。

穴の深さは7 cmであるので、中央付近では6 cmの、東側では5 cmの砂状物質が入っていたことになる。回収した砂状物質に放射性核種が多く含まれていることから、これらの砂状物質が主要な線源であると考えられる。穴ごとに砂状物質の回収を行なうことが出来なかつたので測定結果で示すことは出来ないが、この砂状物質はオペフロ床面から穴内部に入ったとすると、両者の汚染密度は大差ないと思われる。

砂状物質の除去により取り残された Cs-137 を中心とする放射性物質が穴の底に残されて、それが高線量率の線源になったとすると、除去前後での線量当量率の変化は、2つの穴で同じ傾向となると思われる。

中央付近の穴：除去前の 900 mSv/h から 1,016 mSv/h

東側の穴：除去前の 700 mSv/h から 255 mSv/h

であり、両者で逆の傾向となることから、底に残った汚染により高線量率になったとは考えられない。

② 汚染密度の推定から

内部に取り残された汚染物質による影響があるとする、最も深く治具を挿入した時、穴の底に半径 2.5 cm の平面線源の中心位置で中央の穴では 2.8 cm の高さで、東側の穴では 1.8 cm の高さで測定したことになる。

放射性核種を Cs-137 とし、背後のコンクリートからの後方散乱や穴内部での散乱の影響を無視した平面線源からの 1cm 線量当量率は、

$$q = 10^4 \pi \Gamma_{1cm} \ln \frac{R^2 + h^2}{h^2} \quad (\text{MBq/cm}^2)$$

により求めることが出来る。上式で、R (cm) は、面線源の半径、h (cm) は、面線源の中心での線源面からの距離、 $\Gamma_{1cm}$  ( $\mu\text{Sv/h per MBq at 1m}$ ) である。

中央付近の穴で、1,015 mSv/h となる汚染密度は 6.0E+08 Bq/cm<sup>2</sup>

東側の穴で、255 mSv/h となる汚染密度は 8.2E+07 Bq/cm<sup>2</sup>

となる。オペフロ床面の汚染密度は 1E+06 Bq/cm<sup>2</sup> 程度であることを考えると、取り残された砂状物質の汚染密度がこの様な高濃度となることは考えにくい。

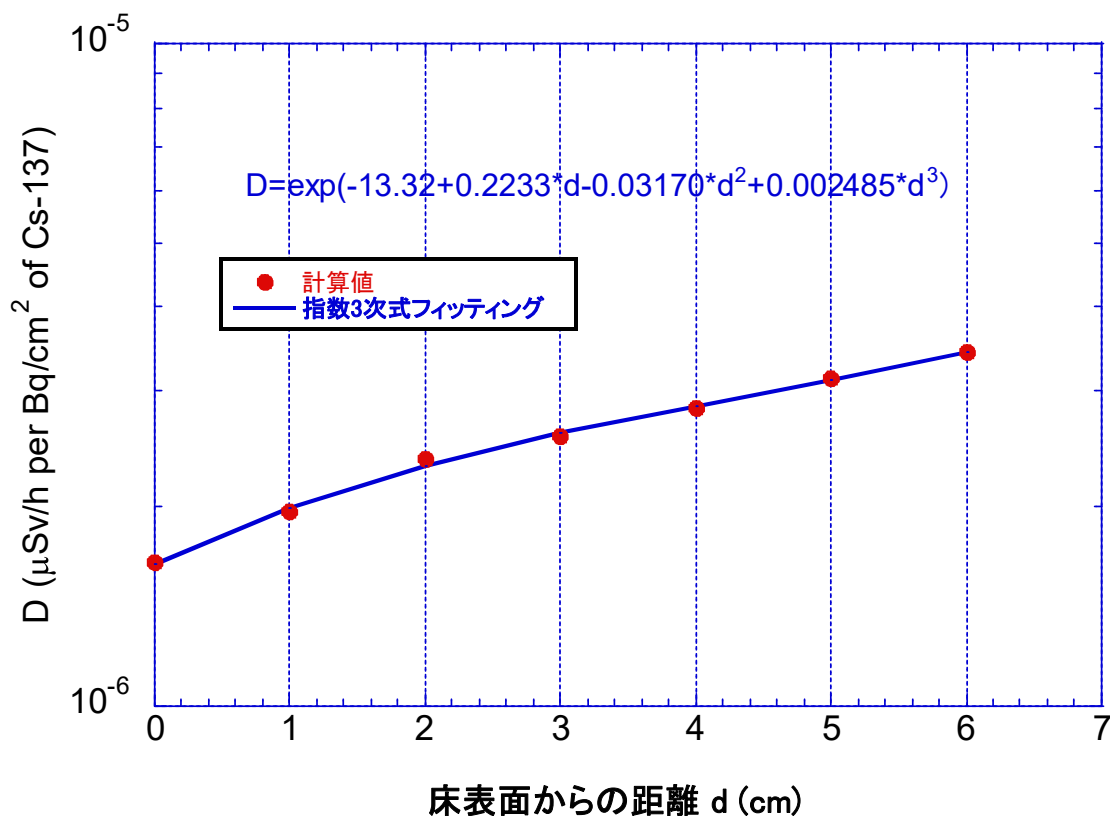
以上の検討から、穴の内部に取り残された汚染が主要な線源となり、高線量当量率となった可能性は無く、穴内部での高線量当量率は、シールドプラグ上段と中段の隙間に沈着している Cs-137 等によると考えられる。

(e) シールドプラグ上段と中段の隙間に蓄積した Cs-137 と Cs-134 による穴内部の線量当量率

シールドプラグの上段と中段の隙間（61 cm のコンクリート下部）の Cs-137 と Cs-134 による 7 cm のボーリング穴内の周辺線量当量率を、電磁カスケードモンテカルロ計算コード egs5<sup>1)</sup> で計算した。汚染は隙間に一様な密度で存在するとした。半減期の違いから Cs-134 の汚染密度は Cs-137 の 4.4 % とした。シールドプラグの上段と中段の間隙における Cs-137 の汚染密度が 1 Bq/cm<sup>2</sup> の時の結果を第 9 図示す。測定位置に対応した床面からの d (cm) で

$$D = \exp(-13.32 + 0.2233 \cdot d - 0.03170 \cdot d^2 + 0.002485 \cdot d^3)$$

で求める。



第 9 図 穴内部の線量当量率分布の計算結果

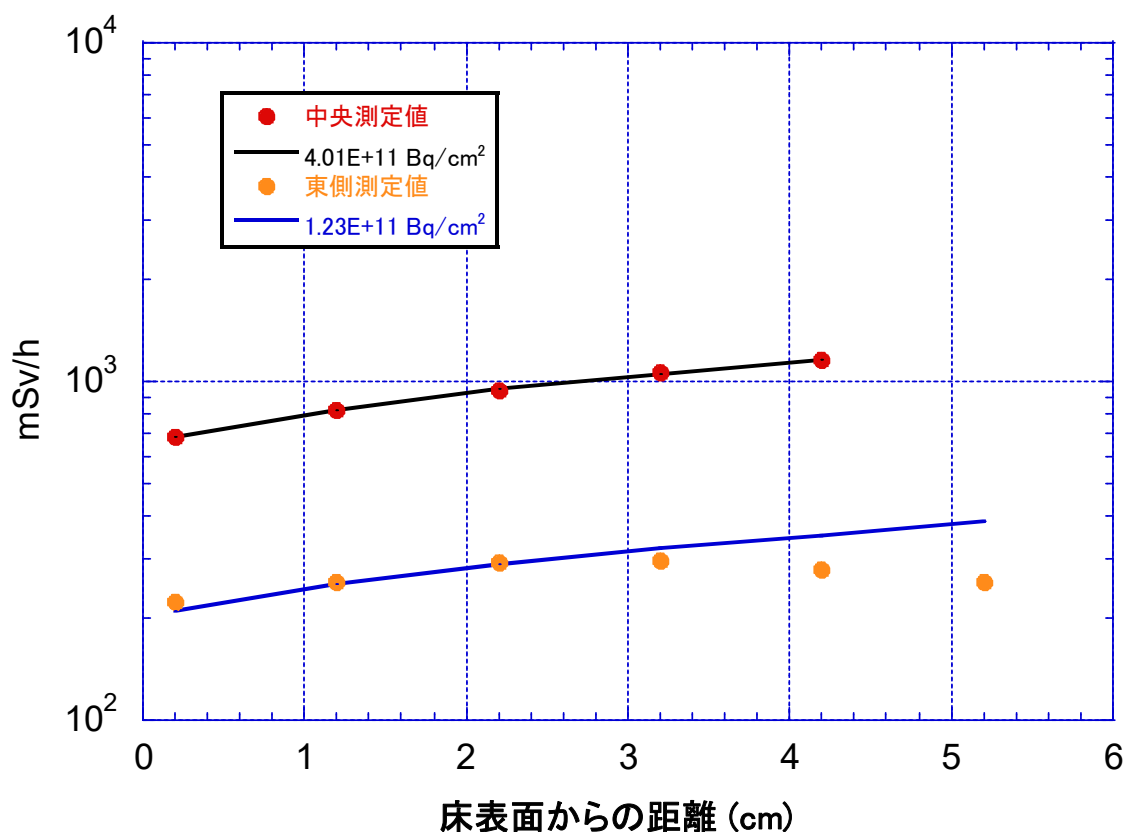
(f) シールドプラグの上段と中段の隙間の汚染密度の推定

AT2533 のセンサー中心は先端から 1.5 cm にあり、治具の底面の厚さが 0.3 cm なので、測定位置は治具の先端位置から 1.8 cm 高い位置に相当する。測定結果と計算結果から求めた Cs-137 の 1 Bq/cm<sup>2</sup> 当たりの周辺線量当量率を用いて Cs-137 汚染密度を求めた。結果を第 4 表に示す。第 10 図に、シールドプラグ上段と中段の隙間の Cs-137 汚染密度が 4.01E+11 Bq/cm<sup>2</sup> (中央の穴に対応)、1.23E+11 Bq/cm<sup>2</sup> (東側の穴に対応) の場合の計算値との比較を示

す。測定値と計算値の深さによる増加傾向は、中央の穴では全ての測定値で良くあっており、東側の穴では、4.5 cm と 5.5 cm 以外では良く合っていることが分る。

第4表 穴の中心から半径 1 m の平均 Cs-137 汚染密度

穴の位置	床からの距離 (cm)	換算係数	AT2533	Cs-137 汚染密度	半径1 m の隙間のCs-137
		$\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$	mSv/h	$\text{Bq/cm}^2$	PBq
中央	-0.8		600		
	0.2	1.71E-06	686	4.00E+11	12.6
	1.2	2.06E-06	825	4.01E+11	12.6
	2.2	2.36E-06	938	3.97E+11	12.5
	3.2	2.63E-06	1070	4.07E+11	12.8
	4.2	2.88E-06	1160	4.03E+11	12.6
東側	-0.8		172		
	0.2	1.71E-06	225	1.31E+11	4.1
	1.2	2.06E-06	255	1.24E+11	3.9
	2.2	2.36E-06	292	1.24E+11	3.9
	3.2	2.63E-06	295	1.12E+11	3.5
	4.2	2.88E-06	277	9.61E+10	3.0
	5.2	3.15E-06	255	8.08E+10	2.5



第10図 測定値と計算値の比較

中央の穴では、内部及び上部の空間での線量当量率が予想していたよりも高かったが、穴内部の線量率変化は計算で推定したものとよく対応していた。東側の穴では、一番深い位置である 7 cm 及び 6 cm まで挿入した時の結果が若干低かったが全体的には計算による線量変化と対応していた。測定値から推定した中央の穴下部の半径 1 m 領域の汚染密度は、東側穴内下部より約 3 倍高かったが、3 号機の測定で見られた隙間の汚染密度のばらつきと同程度であり、汚染密度のばらつきを反映したものと考えられる。

#### 4-2 9月6日の測定

9月6日の穴の中での測定は、8月26日の結果を確認することを主目的であったので、各挿入位置で PU-33 の表示を測定値とし、データの記録のための保持は行わなかった。各挿入位置での周辺線量当量率は、8月26日の結果とよく一致していた。

穴内部の測定に加えて、第 11 図に示す位置で床表面から 1.8 cm (AT2533)、25 cm (POLIMASTER)及び 150 cm (PDR-303<sup>4)</sup>)でマッピングを実施した。線量計の表示の記録に使用した GoPro がバックアップ機を含め 2 機共がビニール養生で放熱ができなかったためか、メモリダウンしたため、分布情報を得ることが出来なかった。

データが取得できた穴内部測定時の 3 つの線量計による測定結果を第 5 表に示す。POLIMASTER と PDR-303 測定結果はほぼ同じで床からの距離が小さい POLIMASTER が若干大きい値であった。

第 5 表 穴内部測定時の比較

測定場所	床表面から筒底までの距離 cm	AT2533	POLIMASTER	PDR-303
		mSv/h		
	治具底からの距離 cm	1.8	25	150
東	7 cm	255	48.4	47.1
	0 cm	150	49.2	47.2
中央	6 cm	1110	205	187
	0 cm	532	193	184

#### 考資料

1. H. Hirayama, Y. Namito, A. F. Bielajew, S. J. Wilderman, W.R. Nelson, “The EGS5 Code System”, SLAC-R-730 (2005) and KEK Report 2005-8 (2005).
2. AT2533
3. POLIMASTER
4. Hitachi PDR-303
5. 特命チーム、“2号機オペフロ内壁の汚染状況の把握”、2022年2月3日.

(別添3-2-3)

2号機シールドプラグの上段と中段の隙間に沈着しているCs-137放射能の推定

(3) シールドプラグに新たに穿孔した穴での測定

原子力規制庁原子力規制部

東京電力福島第一原子力発電所事故対策室

平山英夫、近藤健次郎、鈴木征四郎、吉田善行、林克己、岩永宏平

## 1. はじめに

IRIDが過去に穿孔した2箇所での測定を踏まえて、下記の一連の作業と測定が東電との共同で実施された。

- (1) シールドプラグ表面(表面から3cm)の周辺線量当量率分布測定
- (2) 新たに穿孔する穴の場所の検討
- (3) 新たに穿孔した穴内部での測定(2021年11月30日から)

以下、取り組みを具体的に述べる。

## 2. シールドプラグ床表面のマッピング測定

### 2-1 シールドプラグ上段と中段の汚染分布情報の検討

IRIDの穴での測定結果から推定した上段と中段の隙間の汚染密度が床面150cmでの周辺線量当量率及びコリメータ付きγ線線量計による測定結果から推定した汚染密度より大きかったことから、隙間の汚染密度に分布があることが推測された。新たに穿孔可能な数は限られていることから、上段と中段の隙間に沈着しているCs-137の大凡の総量を推定するためには、隙間の汚染密度分布に対応した情報を測定し、穴内部の測定から推定した汚染密度との関係を求め、その結果と汚染密度分布に対応した情報から総量を推定することを検討した。ロボットを使用した測定で汚染密度分布に対応した情報として測定可能なものとして、シールドプラグ床表面近くでの周辺線量当量率測定を選定した。床表面に近い場所であれば、シールドプラグ上段と中段で測定中心から半径1m程度の領域の寄与を反映することになるので、汚染分布に対応した情報として使用できる可能性がある。但し、当然の事ながら床面上部の測定なのでオペフロ内壁の汚染による寄与が含まれた測定となる。

測定は、10月7日に東電と規制庁の共同調査として、Kobraに装着したPDR-303<sup>1)</sup>の実効中心が床面から3cmの高さの位置になる条件で第1図に示す64箇所で行われた。

測定点は以下の2つの目的に応じて設定しており、それぞれの測定結果概況を以下にまとめる。

- (1) 新たな穿孔箇所の検討のための測定点と線量率の傾向

新たな測定用穴の穿孔位置の検討のために、シールドプラグ上の測定点 41 点を設定した。全体に中心付近が高く周辺が低い傾向であった。また測定点 No.7、62、63 が周辺の傾向と比べ高めで、特に No. 55、58 は特異的に高い。近くに汚染物があったのか、直下の上段中段の隙間の汚染が高いのかは不明である。

#### (2) 事故時セシウムが抜けた痕跡の検討のための測定点と線量率の傾向

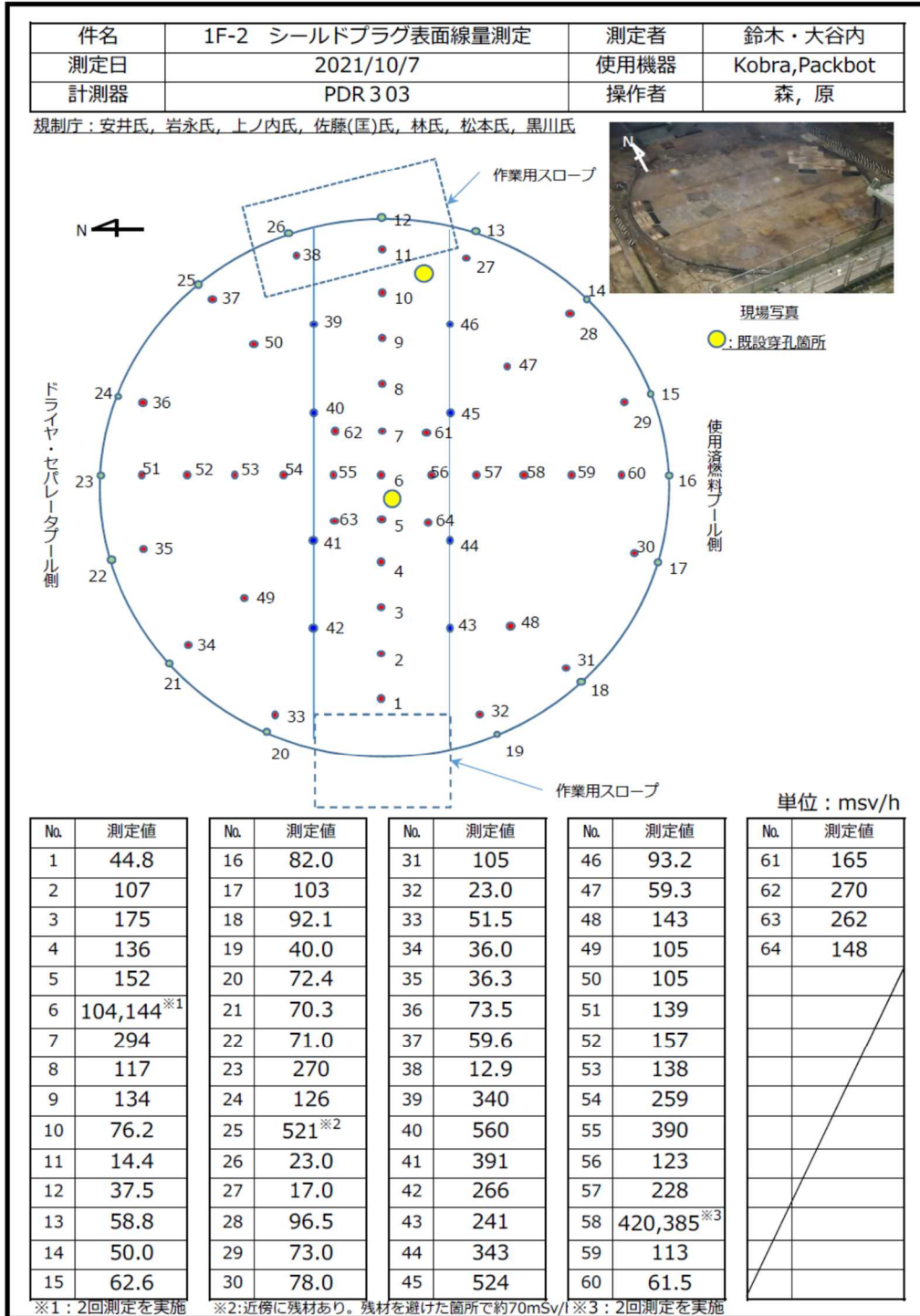
事故時セシウムが抜けた痕跡の可能性の指摘に対する測定点として、プラグ外周隙間 15 点と分割部の隙間 8 点に測定点を設定した。プラグ外周隙間部はその近くのプラグ表面測定点より線量率が高い所がほとんどである。上段プラグ分割部の線量率は全てその近くのプラグ表面測定点より線量率が高く、特に上段プラグの隙間と中段プラグの隙間が交差していると思われる 4 点は周辺に比べ際立って高い線量率となっていた。

シールドプラグ外周部では、測定に使用した 2 台のロボット(測定器移動・把持用の Kobra 及び、測定値読取用の Packbot) の位置関係や段差の関係で上段プラグの隙間部真上での測定ができない箇所も多かった。また 3 分割された上段プラグの隙間部の底には汚染していると考えられる砂状物質が認められたこと、および隙間部からの放射線ストリーミングの影響も考えられる。このため、痕跡の影響を考えるためにはさらなる検討と測定が必要と思われる。

#### 2-2 内壁の汚染の寄与

測定を実施した時点では、床表面の汚染を主たる寄与として想定していたが、「2号機オペフロ内壁の汚染状況の把握<sup>1)</sup>」に示した様に、相対的に平均の汚染密度が高いと思われる東壁及び西壁等の影響があることが分った。第1表に、床、天井及び壁に  $1 \text{ Bq/cm}^2$  の Cs-137 と  $0.044 \text{ Bq/cm}^2$  の Cs-134 が一様な密度で存在している場合の参考文献1の第1図に示すシールドプラグ上部の5箇所での床面から 3 cm と 150 cm の比較を示す。第1表には各面の想定した汚染密度の場合の周辺線量当量率を合わせて示している。各面の汚染密度にも分布があり、東西の壁の平均汚染密度は過大評価になっている可能性が高いのであくまで参考値であるが、内壁の寄与は 3 cm と 150 cm でほぼ変わらないと言える。

# 1F-2号機 オペフロ線量測定記録（規制庁共同調査）



第1図 床面から3cm位置の周辺線量当量率測定箇所と測定結果

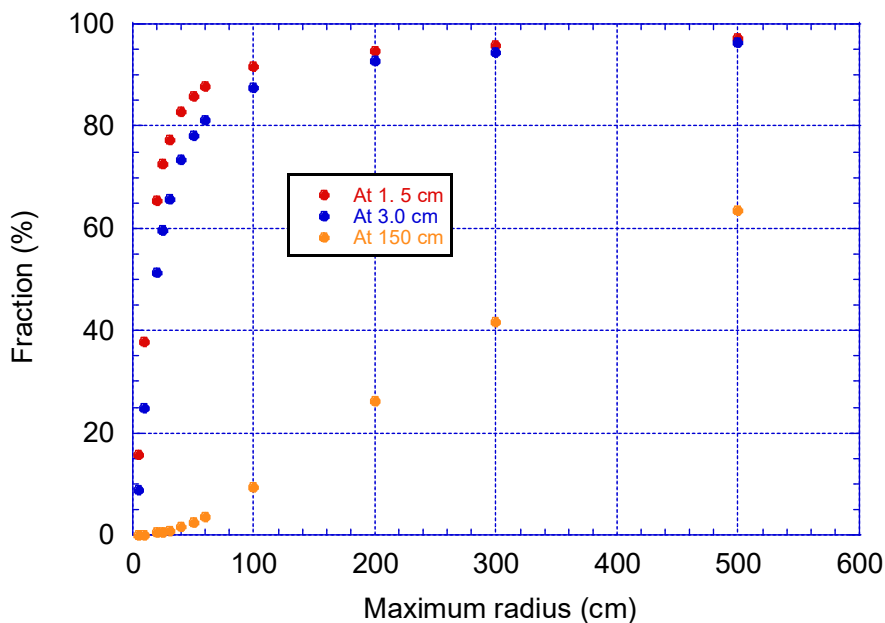


第1表 2号機オペフロ内壁の汚染によるシールドプラグ上部の周辺線量当量率

床面から3 cm						床面から150 cm							
	⑨	⑩	⑪	⑮	⑦		⑨	⑩	⑪	⑮	⑱		
	μSv/h per Bq/cm <sup>2</sup> of Cs-137						μSv/h per Bq/cm <sup>2</sup> of Cs-137						
床	4.69E-02	4.78E-02	4.82E-02	4.77E-02	4.77E-02	床	2.35E-02	2.47E-02	2.51E-02	2.46E-02	2.28E-02		
天井	4.61E-03	4.95E-03	5.12E-03	4.90E-03	4.90E-03	天井	6.00E-03	6.46E-03	6.69E-03	6.40E-03	5.48E-03		
北壁	6.21E-03	6.43E-03	6.49E-03	5.41E-03	7.97E-03	北壁	6.76E-03	7.00E-03	7.06E-03	5.26E-03	2.86E-03		
南壁	6.21E-03	6.43E-03	6.49E-03	7.97E-03	5.41E-03	南壁	6.76E-03	7.00E-03	7.06E-03	8.70E-03	2.47E-02		
東壁	2.47E-02	1.70E-02	1.13E-02	1.64E-02	1.64E-02	東壁	2.93E-02	1.95E-02	1.28E-02	1.89E-02	1.86E-02		
西壁	4.88E-03	6.61E-03	8.44E-03	6.60E-03	6.60E-03	西壁	5.46E-03	7.19E-03	9.45E-03	7.18E-03	7.07E-03		
	Cs-137 density (Bq/cm <sup>2</sup> )	周辺線量当量率 (mSv/h)						Cs-137 density (Bq/cm <sup>2</sup> )	周辺線量当量率 (mSv/h)				
床	2.50E+05	1.17E+01	1.19E+01	1.20E+01	1.19E+01	1.19E+01	床	2.50E+05	5.87E+00	6.16E+00	6.28E+00	6.14E+00	5.70E+00
天井	3.60E+05	1.66E+00	1.78E+00	1.84E+00	1.77E+00	1.77E+00	天井	3.60E+05	2.16E+00	2.33E+00	2.41E+00	2.30E+00	1.97E+00
北壁	8.90E+05	5.52E+00	5.73E+00	5.78E+00	4.81E+00	7.09E+00	北壁	8.90E+05	6.01E+00	6.23E+00	6.28E+00	4.68E+00	2.54E+00
南壁	4.10E+05	2.55E+00	2.64E+00	2.66E+00	3.27E+00	2.22E+00	南壁	4.10E+05	2.77E+00	2.87E+00	2.89E+00	3.57E+00	1.01E+01
東壁	1.40E+06	3.46E+01	2.39E+01	1.59E+01	2.30E+01	2.30E+01	東壁	1.40E+06	4.10E+01	2.73E+01	1.80E+01	2.65E+01	2.60E+01
西壁	1.10E+06	5.37E+00	7.27E+00	9.28E+00	7.26E+00	7.26E+00	西壁	1.10E+06	6.00E+00	7.91E+00	1.04E+01	7.89E+00	7.78E+00
合計 (mSv/h)		6.14E+01	5.32E+01	4.75E+01	5.20E+01	5.33E+01	合計 (mSv/h)		6.38E+01	5.28E+01	4.62E+01	5.11E+01	5.42E+01

2-3 床汚染密度分布の影響

穿孔で取り出されたコア表面の周辺線量当量率から、シールドプラグ床面の汚染密度に分布があることは明らかである。第2図に示す様に、床面から3 cm 位置では下部の半径60 cm の領域からの寄与が80%と大部分である。内壁の内、床面の寄与が最も大きいので、対象となる領域の汚染密度により内壁汚染による周辺線量当量率が変ることになる。



第2図 床面汚染の寄与領域

### 3. 穿孔箇所を選定

各測定点は、直下の上段と下段のシールドプラグの直径1 m程度の汚染密度を反映していることから、できるだけ多くのを穴内での測定が望まれる。しかし、直径12mのシールドプラグ全体の分布を穿孔穴内の測定だけで評価するのに必要な多くの穿孔作業は時間を要することから、廃炉工程へ影響も考慮しなくてはならない。

そこで、今回表面線量率を測定したデータと、今後行う新たな穿孔位置での穴内測定を組み合わせて評価する事を前提にして穿孔位置を選定することにした。選定の際には以下の点を考慮した。

- ・表面線量当量率の測定点の中から最大と最小の線量率範囲がカバーできる測定点を選ぶ。
- ・得られた表面線量当量率の範囲を目安にし、重要な南北と東西の汚染量分布、隙間以外でも特異的に高い位置を含む。

種々の検討の結果、最終的には第4図に示す13か所を穿孔することになった。

### 4. 新たに穿孔した穴での測定

東電と規制庁の共同測定として、新たに穿孔した穴での測定を、2021年11月30日、12月1日、12月6日、12月7日と12月14日の計5回実施した。12月7日には、穴内部の測定に加えて、新たな穿孔で取り出されたコア表面の汚染密度を推定するためにPOLIMASTERを用いて表面での周辺線量当量率を測定した。

#### 4-1 各測定で実施した内容

##### (1) 11月30日

IRIDの穴での測定結果と同様に、穴の内部での線量当量率は100 mSv/hを超えていると想定し、AT2533<sup>2)</sup>をIRIDの穴での測定と同じ様に高線量率モード(100 mSv/h以上対象の「Fof」モード)にして④、⑥、⑫及び⑬の4か所で測定を行った

しかしながら、当初の予想と異なり、ほとんどの測定結果が100 mSv/h以下であることを示す「L99」であった。

##### (2) 12月1日

IRIDの中央穴と新たな穴(⑤)で測定を行い、データロガーの「表示」とデータロガーのデータは対応していることを確認した。穴内部の位置による線量当量率分布が新たにドリリングした穴とIRIDの穴で異なることが分った。

##### (3) 12月6日と7日

有意な線量率を得るために、AT2533を線量率により「GM検出器、表面から5 cmの位置(130 mSv/h以下)」または「Siセンサー、線量計表面から1.5 cmの位置(130 mSv/h以上)」に切り替わる「FoN」モードで測定を実施した。

測定された線量率は、ほとんどが130 mSv/h以下であり、穴の底面4.7 cmより浅い位置であるが、すべての穴で線量率情報を測定することができた。

##### (4) 12月14日

穴の内部の深い位置での線量当量率情報を得るために、POLIMASTER<sup>3)</sup>の GM 検出器を接続ケーブルを使用して線量計から離れた位置に設置できるようにし、治具の底に固定して IRID の 2 つの穴を含む 15 の穴で測定を行った。各穴ではシールドプラグの床面から 1.5 cm 高さで、穴の直上と東西南北の 5 か所での測定を合わせて実施した。POLIMASTER による測定結果は、表示された線量当量率を読み取り記録する方式で行った。

全ての穴内部での線量当量率分布を測定することができた。

#### 4-2 測定結果

##### (1) コア表面の汚染密度

大部分のコアは、バックグラウンドとほぼ同じで、以下の 4 つで有意な値が得られた。

4 番 : 3 mSv/h

6 番 : 1.6 mSv/h (シールドプラグ中心)

12 番 : 870  $\mu$ Sv/h (プラグ継ぎ目)

13 番 : 520  $\mu$ Sv/h (表面での線量当量率が特異に高い箇所)

【参考 1】に示す様に、最大の周辺線量当量率である 4 番の 3 mSv/h の場合で 0.520 MBq/cm<sup>2</sup> に相当する。この事は、シールドプラグ表面の汚染密度が他の床面と同程度であることを確認する直接的なデータである。

##### (2) 穴内部等での測定結果

「FoN モード」で、系統的なデータが取得できた 12 月 6 日と 7 日の測定結果を第 2 表に示す。床表面からセンサーまでの距離は、線量当量率が 130 mSv/h 以下の場合には検出器表面から 5 cm の GM 計数管の位置で、130 mSv/h を超える場合は検出器表面から 1.5 cm の Si センサーの位置である。線量当量率はデータロガーに記録された 1 分毎の線量当量率の 3 分間平均である。但し、表中赤字で示した測定位置では「ノート欄」に「記録なし」がある多数のデータがあり、表示部の値が大きく変動していたので表示部の最小値と最大値で示している。「FoN モード」では、130 mSv/h を境に GM 検出器と Si センサーが使用されるようになっている。GM 検出器の位置では 130 mSv/h を超えており、Si センサーの位置では 130 mSv/h より少ない状況であったことからこのような状況が発生したと考えられる。

12 月 14 日の実施した POLIMASTER による測定結果を第 3 表に示す。全ての位置での線量当量率が得られている。

第2表 12月6日と12月7日の「FoNモード」での測定結果

測定日	穴番号	床表面からの距離		AT2533	表面線量率
		軸の底 cm	センサー中心		
12月6日	1	9.5	4.0	11.1	37.7
		8.0	2.5	14.0	
		6.0	0.5	21.0	
		4.0	-1.6	36.0	
		2.0	-3.6	42.0	
12月6日	2	8.0	2.5	10.5	
		6.0	0.5	15.8	
		4.0	-1.6	42.1	
		2.0	-3.6	52.5	
12月7日	3	10.0	4.5	50	115
		8.0	2.5	51.6	
		6.0	0.5	53.4	
		南床	-1.8	171	
12月6日	4	7.0	1.5	82(139)	157
		6.0	0.5	82(156)	
		4.0	-1.6	105	
		2.0	-3.6	135	
12月6日	5	7.5	2.0	33.9	163
		6.0	0.5	38.0	
		4.0	-1.6	67(199)	
		2.0	-3.6	60(245)	
12月6日	6	7.0	1.5	57.8	191
		6.0	0.5	58.7	
		4.0	-1.6	67(199)	
		2.0	-3.6	75(809)	
12月6日	7	9.0	3.5	68.7	179
		7.0	1.5	69	
		6.0	0.5	68	
		4.0	-1.6	75(180)	
		2.0	-3.6	82(453)	
12月7日	8	9.8	4.3	41.5	209
		8.0	2.5	43.4	
		6.0	0.5	43.3	
		南床	-1.8	210	
12月7日	新9	8.5	3.0	112	
		8.0	2.5	111	
		6.0	0.5	115	
		床	-1.8	277	
12月7日	10	7.5	2.0	8.11	31.3
		6.0	0.5	10.3	
		南床	-1.8	41.4	
12月7日	11	10.0	4.5		19.3
		8.0	2.5	11.1	
		6.0	0.5	13.7	
		東床	-1.8	31.5	
12月6日	12	10.0	4.5		354
		8.0	2.5	117	
		6.0	0.5	119	
		4.0	-1.6	119	
12月6日	13	10.0	4.5	97(135)	104
		8.0	2.5	105	
		6.0	0.5	117	
		4.0	-1.6	120	
		2.0	0.2	134	

第3表 12月14日のPOLIMASTERによる測定結果

穴番号	床表面からの筒底の距離		POLIMASTER	表面線量率	穴番号	床表面からの筒底の距離		POLIMASTER	表面線量率
	軸の底 cm	センサー中心				軸の底 cm	センサー中心		
1	9.5	8.0	7.37	37.7	新9	10.0	8.5	70.2	277
	8.0	6.5	7.35			8.0	6.5	69.5	
	6.0	4.5	10.2			6.0	4.5	91.5	
	4.0	2.5	24.1			4.0	2.5	93.6	
	2.0	0.5	35.3			2.0	0.5	97.4	
	0.0		35.7			0.0		176	
	東		35.9			東		157	
	西		33.5			西		314	
	南		41.6			南		222	
	北		36.0			北		183	
2	9.0	7.5	8.65	47.7	10	7.0	5.5	4.83	31.3
	8.0	6.5	8.15			6.0	4.5	5.34	
	6.0	4.5	8.23			4.0	2.5	6.37	
	4.0	2.5	10.4			2.0	0.5	12.7	
	2.0	0.5	18.5			0.0		24	
	0.0		41.4			東		22.9	
	東		52			西		30.5	
	西		41			南		25.9	
	南		44.2			北		30	
	北		43.9			東		5.9	
3	8.5	7.0	32.3	115	11	6.0	4.5	8.41	35.4
	8.0	6.5	34.7			4.0	2.5	10.6	
	6.0	4.5	43.3			2.0	0.5	15.6	
	4.0	2.5	47.7			0.0		26.8	
	2.0	0.5	65.5			東		26.4	
	0.0		101			西		26.5	
	東		176			南		26	
	西		104			北		26.6	
	南		105			東		87.3	
	北		99.4			6.0	4.5	92.4	
4	7.0	5.5	72.2	157	12	4.0	2.5	95.6	104
	6.0	4.5	66.3			2.0	0.5	111	
	4.0	2.5	86.4			0.0		228	
	2.0	0.5	110			東		440	
	0.0		148			西		138	
	東		157			南		222	
	西		207			北		213	
	南		161			東		75.4	
	北		159			10.0	8.5	76.2	
	5	7.5	6.0			24.5	163	13	
6.0		4.5	25.1	6.0	4.5	88.4			
4.0		2.5	26.2	4.0	2.5	91.3			
2.0		0.5	70.1	2	0.5	182			
0.0			125	0		264			
東			132	東		175			
西			169	西		182			
南			107	南		278			
北			142	北		950			
6		7.0	5.5	42.8	191	RID(中央)			4
	6.0	4.5	44.4	2			0.5	773	
	4.0	2.5	45.9	0				529	
	2.0	0.5	78.1	東				304	
	0.0		169	西				512	
	東		145	南				307	
	西		196	北				302	
	南		191	5			3.5	293	
	北		168	4			2.5	289	
	7	9.0	7.5	52			179	IRID(東)	2
8.0		6.5	51.5	0		136			
6.0		4.5	52.7	東		126			
4.0		2.5	53.9	西		101			
2.0		0.5	72.9	南		74.7			
0.0			112	北		102			
東			243						
西			95.8						
南			147						
北			154						
8	10.0	8.5	36.5	209					
	8.0	6.5	40.4						
	6.0	4.5	45.6						
	4.0	2.5	40.5						
	2.0	0.5	65.5						
	0.0		137						
	東		176						
	西		119						
	南		138						
	北		135						

## 5 測定結果の検討

### 5-1 深さによる線量当量率分布

第4図に、各穴での深さ方向の周辺線量当量率分布を示す。穴の深さが7 cmのIRIDの穴については、8月26日に実施したAT2533による測定結果を合わせて示している。IRIDの穴では東側の深い位置を除いて深さと共に線量率が増加する傾向を示している。一方、新たに穿孔した13か所の穴では、床表面から2 cmまでは深さによりほとんど変わらないか深さと共に若干減少する傾向を示し、0.5 cmより浅くなると増加するというIRIDの穴と異なる傾向を示している。0.5 cmからの上昇の割合は、周辺線量当量率が低い穴の方が顕著である。

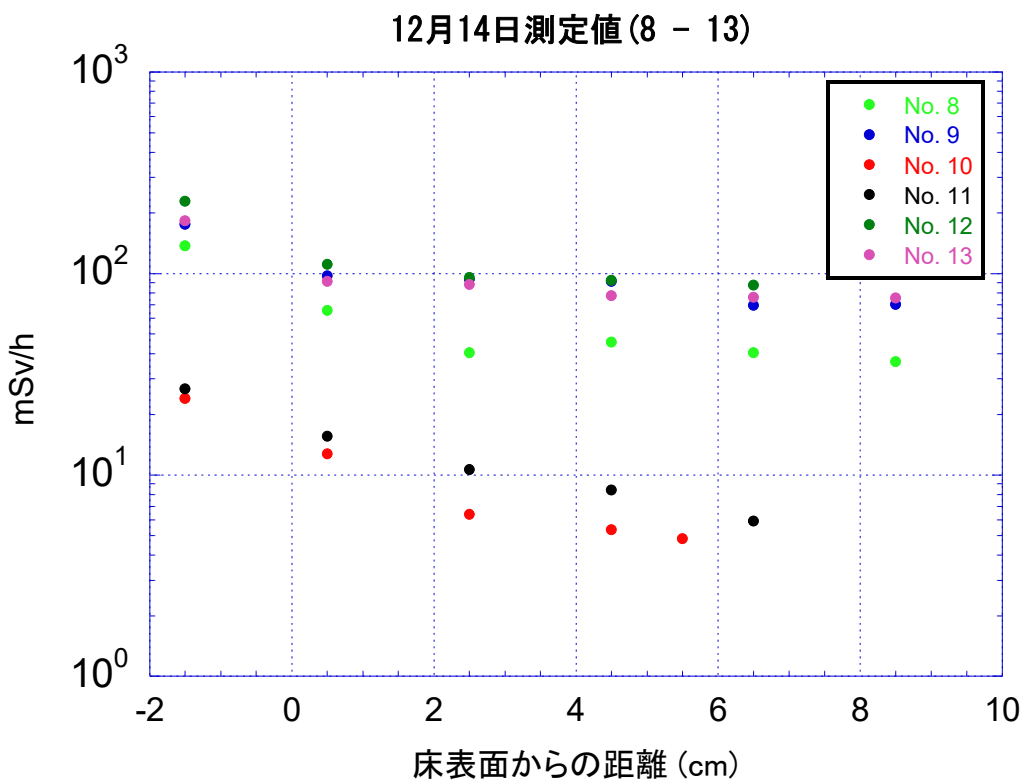
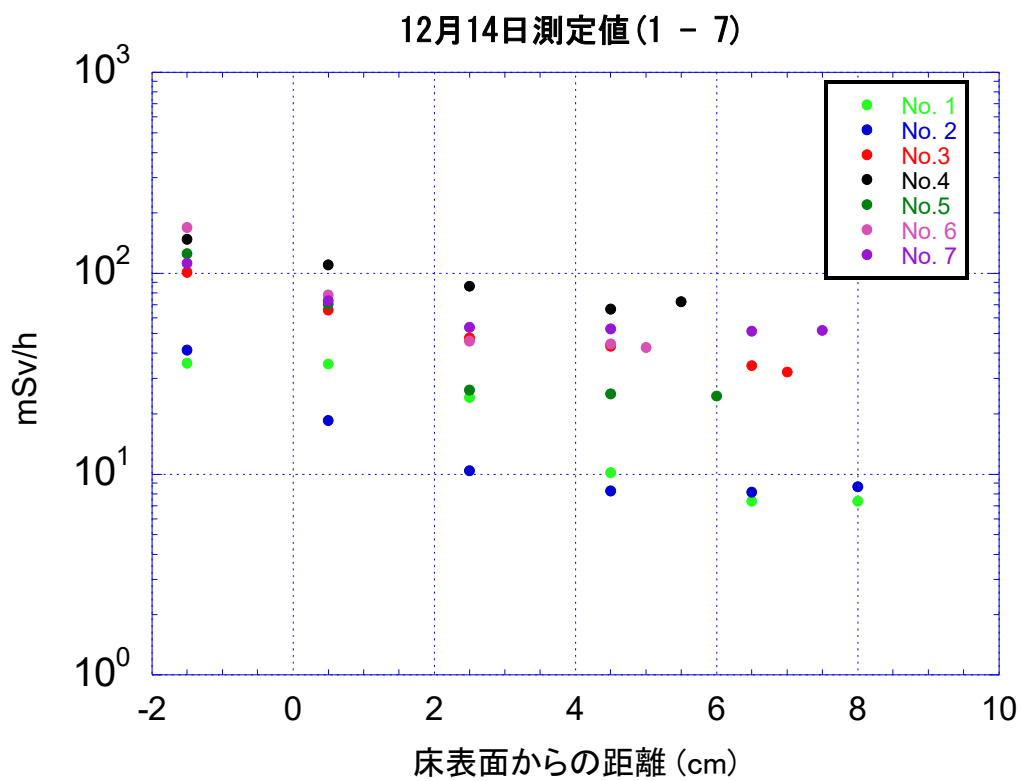
このような違いが生じる原因としては、コンクリート内部の測定であることから、シールドプラグ表面から離れた位置での測定では影響が少なかった鉄筋等のシールドプラグ内部の構造が考えられる。もう一つの要因としてオペフロ内壁の影響が考えられる。シールドプラグ内部での測定を検討した段階では、内壁の寄与として主として床面を考慮した。床面の場合、シールドプラグ上部と内部で線源領域と評価点の関係が顕著に異なることから内壁の汚染による影響は深さと共に急激に減少する。しかしながら、参考資料5で分析した様に、シールドプラグ上部での内壁汚染の寄与として壁と天井に影響が無視できないことが分かった。天井や壁の場合には、床面の場合よりコンクリートによる減衰が緩やかになり、浅い位置での線量当量率に寄与する可能性がある。

### 5-2 床表面1.5 cmでの線量当量率分布

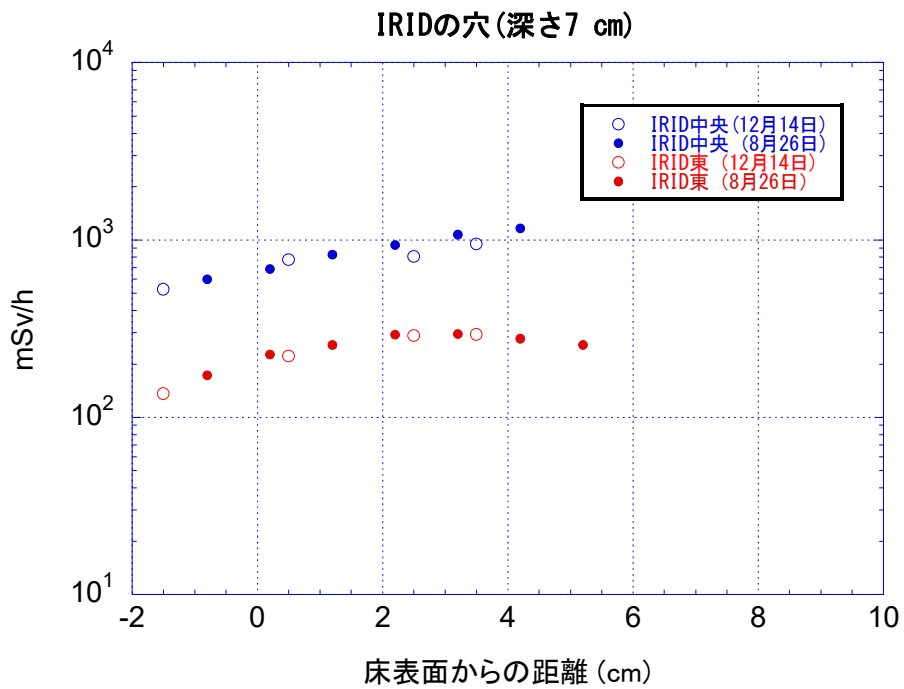
状況を理解する上で、シールドプラグ床面から1.5 cmの高さでの中心軸上と東西南北の周辺線量当量率分布を比較する。東西南北は、治具の端が穴の淵になるようにして測定したので、中心軸から凡そ4.5 cm位置の測定である。第15図に比較を示す。穴の下部が均一な構造であれば、IRIDの中央の穴で見られるように穴の上部が最も高く東西南北はほぼ同じ程度となると考えられる。新たに穿孔した穴周辺はIRIDの穴周辺とは異なる分布となっていることから、内部構造の影響を考慮する必要がある。また、床表面近くでも内壁の様々な壁の影響やKobra筐体の遮蔽効果が影響している可能性がある。

### 5-3 シールドプラグ内鉄筋について

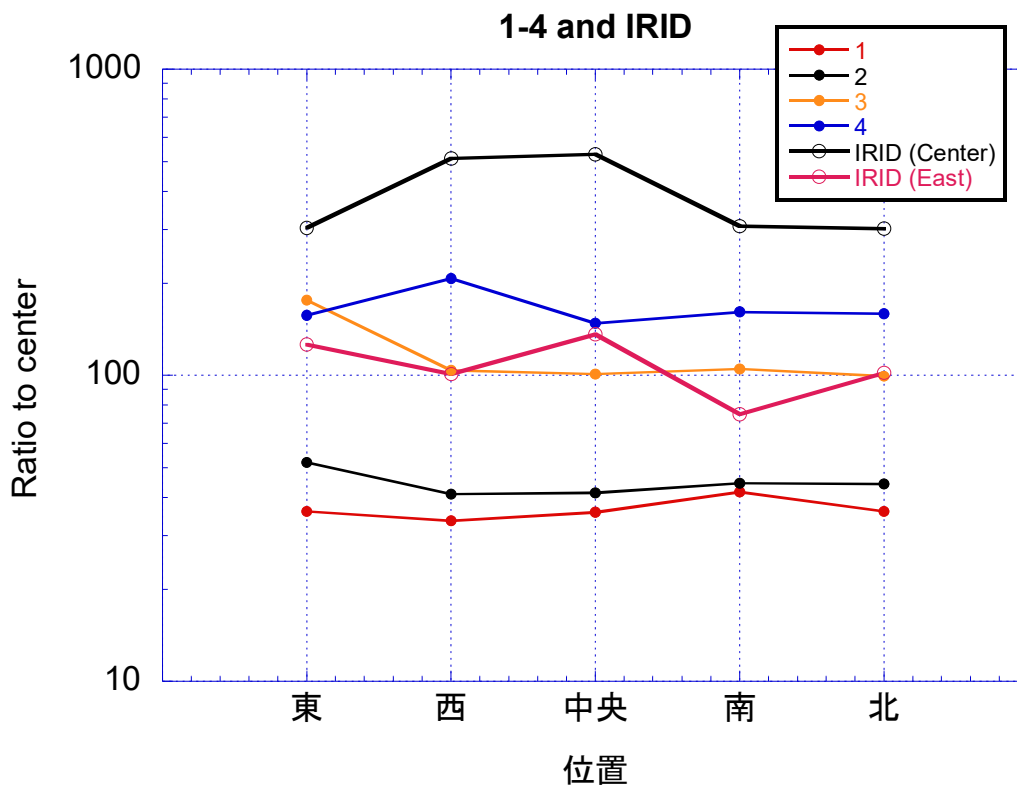
穴内部での線量当量率に影響を与える可能性がある内部構造物として鉄筋が考えられる。東電による設計図面の検討から、第6図に示す様に、上面から10 cmの位置に東西に15 cm間隔でD25（公称直径2.54 cm）の鉄筋が、その下に南北に20 cm間隔で同じD25の鉄筋があること、下面から10 cmの位置に東西に20 cm間隔でD32（公称直径3.18 cm）の鉄筋が、その下に南北に20 cm間隔で同じD32の鉄筋が設置されていることが判った。配筋の実際の場所は図面とはずれがあること、穿孔された穴の位置は撮影画面からの推定であることから、個々の穴と配筋の位置関係は正確には分らない。



第4図 (a) 各穴での深さ方向の線量当量率分布 (新たに穿孔した穴)

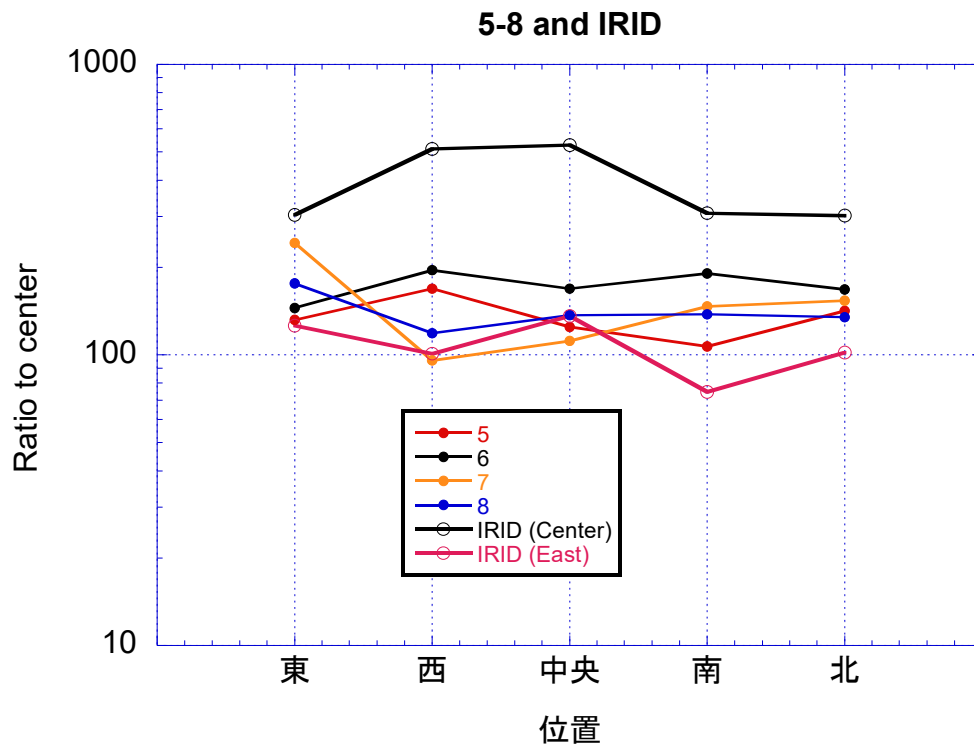


第4図 (b) 各穴での深さ方向の線量当量率分布 (IRID の穴)

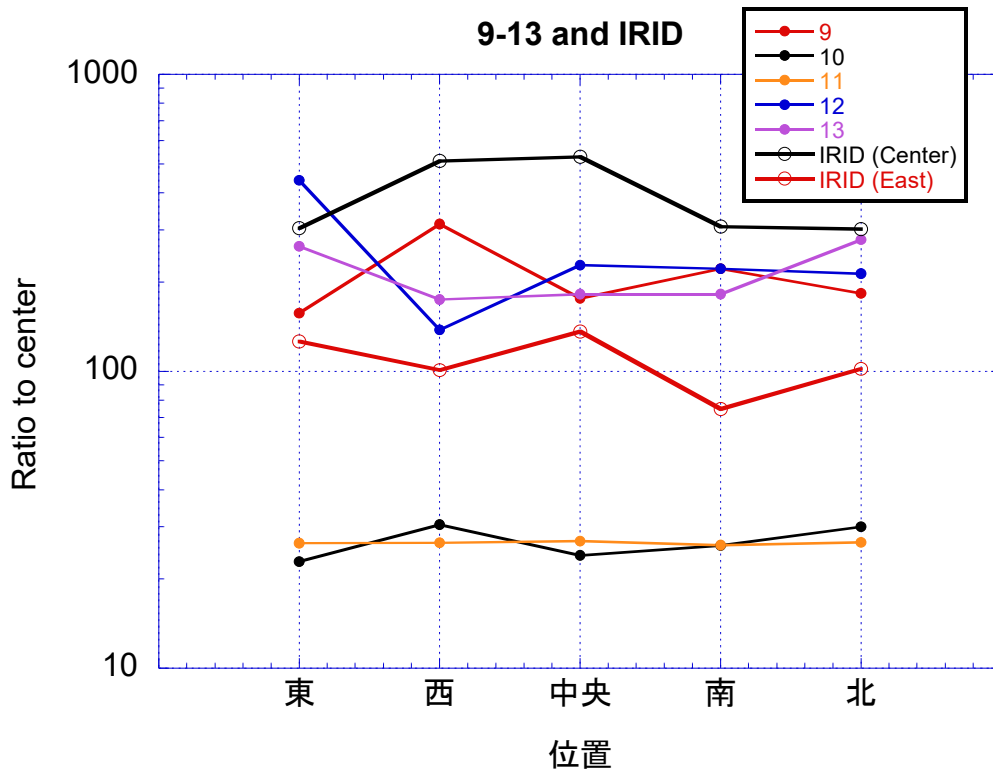


第5図 床表面から 1.5 cm 位置での線量当量率分布 (1-4)

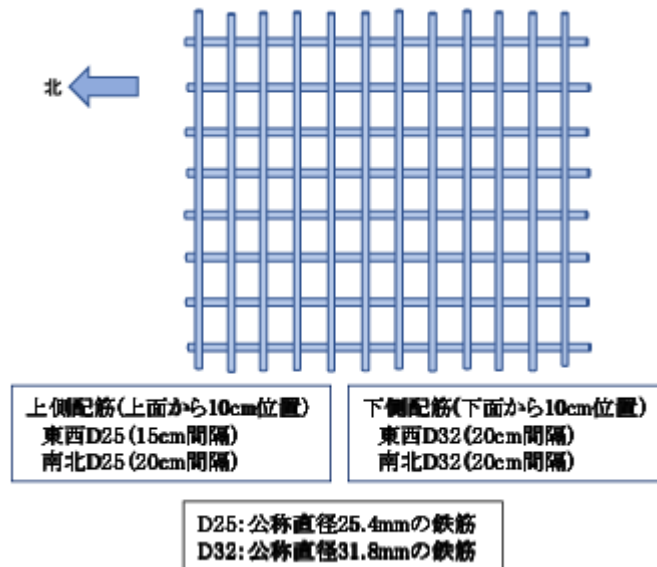




第 5 図 床表面から 1.5 cm 位置での線量当量率分布 (5-8)



第 5 図 床表面から 1.5 cm 位置での線量当量率分布 (9-13)



第6図 シールドプラグの配筋

#### 6. 測定に使用した線量計の相互比較

測定では Atomtex 社製の AT-2533 (低線量率用の GM と高線量率用の Si) , Polimaster (低線量率用 GM) と日立アロカ製の PDR-303 を使用した。実測値の相互比較から各線量計の特性 (エネルギー応答、角度応答) に違いはあるが、【参考 2】に示す様に、測定結果の比較から得られた周辺線量当量率に大きな違いがないことを確認した。

#### 参考資料

1. Hitachi PDR-303
2. AT2533
3. POLIMASTER

## 【参考 1】

### 2 号機シールドプラグのドリリングで採取したコア表面の汚染密度推定

#### 1. はじめに

2 号機のシールドプラグ上段と中段に隙間に沈着している Cs-137 の測定を目的に、シールドプラグ上段に直径 5 cm で深さ 10 cm のドリリングが東京電力ホールディング (株) により行われた。採取したコンクリート表面で、POLIMASTER 線量計で安井氏と岩永氏が測定した結果からコア表面の汚染密度を推定した。

#### 2. 測定結果

測定は、2 号機オペフロ前室で行われた。測定場所の空間線量率は 200 $\mu$ Sv/h で、コア表面での測定値からバックグラウンド値を引いた結果をコア表面の汚染によるとした。

大部分のコアは、バックグラウンドとほぼ同じで、下記のコアで有意な線量率が測定された。

4 番 : 3 mSv/h

6 番 : 1.6 mSv/h (シールドプラグ中心)

12 番 : 870  $\mu$ Sv/h (プラグ継ぎ目)

13 番 : 520  $\mu$ Sv/h (表面での線量当量率が特異に高い箇所)

最大線量率は、4 番の 3 mSv/h であった。

#### 2. 汚染密度の推定

背後のコアによる後方散乱の影響を無視し、自己遮蔽の無い面線源の場合には、解析的に MBq/cm<sup>2</sup> 当たりの 1cm 線量当量率を以下の式で計算することができる。

$$q = 10^4 \pi \Gamma_{1cm} \ln \frac{R^2 + h^2}{h^2}$$

上式で、

R (cm) は、面線源の半径、h (cm) は、面線源の中心での線源面からの距離、 $\Gamma_{1cm}$  ( $\mu$ Sv/h per MBq at 1m) である。

コアの場合は、R=2.5 cm である。測定は、コア表面から 1 cm 位置で測定したとして h=1 cm とする。Cs-137 の 1 cm 線量当量率定数は、0.0927 ( $\mu$ Sv/h per MBq at 1m) であるので、 $q=5789$  ( $\mu$ Sv/h per MBq/cm<sup>2</sup>) となる。従って、3 mSv/h となる汚染密度は、

$$3.0 \cdot 1000 / 5789 = 0.520 \text{ MBq/cm}^2$$

となる。

この汚染密度は、これまで2号機オペフロで測定されている最大で  $1.0\text{E}+06 \text{ Bq/cm}^2$  の範囲内である。

## 【参考 2】

### 2号機シールドプラグでの測定に使用した線量計の比較

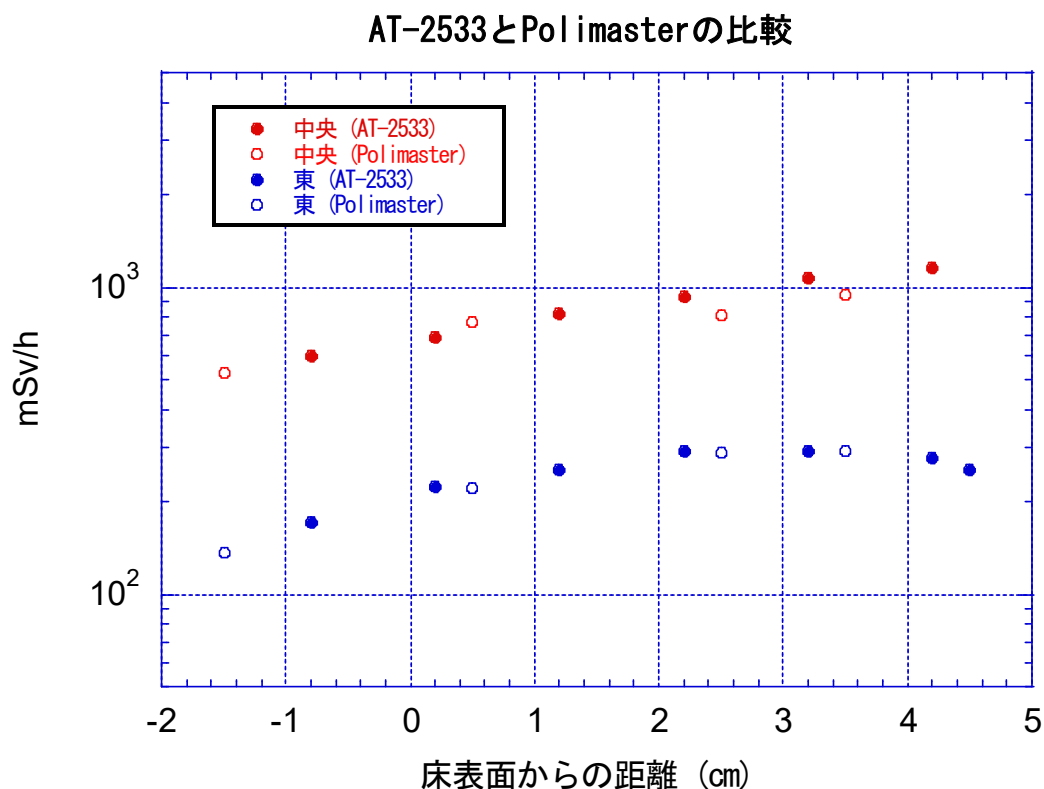
#### 1. はじめに

2号機シールドプラグでの測定では、Atomtex社製のAT-2533（低線量率用のGMと高線量率用のSi）、Polimaster（低線量率用GM）と日立アロカ製のPDR-303を使用した。それぞれの測定結果を比較することにより、得られた周辺線量当量率に大きな違いがないことを確認した。

#### 2. 測定結果の比較

##### 2-1 AT-2533のSi検出器とPolimasterの比較

IRIDの穴での測定結果の比較を第1図に示す。同じ時の測定ではないため、床表面からの距離は若干異なっている可能性がある。中央の穴の深い位置で若干の差が見られる散乱線の寄与が多い場所でもほぼ同じ線量率となっている。AT-2533のSi検出器は、他の線量計に比べてエネルギー応答が悪いが、シールドプラグでの測定はほぼPolimasterと同程度の応答である。



第1図 AT-2533のSi検出器とPolimasterの比較

## 2-2 AT-2533 (GM) と Polimasater (GM)の比較

Fon モードで AT-2533 を使用すると 100 mSv/h までは GM 検出器の結果が、100 mSv/h 以上では Si の結果となる。新たに穿孔した穴での測定結果の比較を第 1 表に示す。AT-2533 の結果は大部分が GM の結果である。一部、GM の位置と Si の位置での線量率の関係から表示がばたつたデータがあった穴の結果は青字としている。ばたつきの無い穴では、両者はほぼ対応している。

第 1 表 Fon モードの AT-2533 と Polimaster の比較

穴番号	表面からの距離	Polimaster	AT2533 (Fon)	穴番号	表面からの距離	Polimaster	AT2533 (Fon)	穴番号	表面からの距離	Polimaster	AT2533 (Fon)
	(cm)	mSv/h			(cm)	mSv/h			(cm)	mSv/h	
①	8	7.37		⑥	5.5	42.8		⑪	6.5	5.9	
	6.5	7.35			4.5	44.4			4.5	8.41	
	4.5	10.2			2.5	45.9			2.5	10.6	11.1
	4.0		11.1		1.5		58.2		0.5	15.6	13.7
	2.5	24.1	14		0.5	78.1	59		-1.5	26.8	
	0.5	35.3	23.1		-1.5	169			6.5	87.3	
	-1.5	35.7			7.5	52			4.5	92.4	
	-1.6		36		6.5	51.5			2.5	95.6	
②	7.5	8.65		⑦	4.5	52.7		⑫	0.5	111	119
	6.5	8.15			3.5		68.5		-1.5	228	
	4.5	8.23			2.5	53.9			-1.6		119
	2.5	10.4	10.5		1.5		69.8		8.5	75.4	
	0.5	18.5	16		0.5	72.9			6.5	76.2	
	-1.5	41.4			-1.5	112			4.5	77.6	
-1.6		42.1	8.5	36.5		2.5	88.4	105			
③	7	32.3		⑧	6.5	40.4		⑬	0.5	91.3	119
	6.5	34.7			4.5	45.6			-1.5	182	
	4.5	43.3	50		4.3		41.5		-1.6		119
	2.5	47.7	51.6		2.5	40.5	43.4				
	0.5	65.5	53.4		0.5	65.5	43.3				
	-1.5	101			-1.5	137					
④	5.5	72.2		⑨	8.5	70.2					
	4.5	66.3			6.5	69.5					
	2.5	86.4			4.5	91.5					
	0.5	110			3		112				
	-1.5	148			2.5	93.6	111				
	-1.6		105		0.5	97.4	115				
⑤	6	24.5		⑩	-1.5	176					
	4.5	25.1			5.5	4.83					
	2.5	26.2			4.5	5.34					
			34.1		2.5	6.37					
	0.5	70.1			2		8.11				
	-1.5	125			0.5	12.7	10.3				
			-1.5	24							

青:表示にばたつきがあるポイント含む

### 2-3 Polimastet と PDR-303 の比較

9月9日の IRID の穴での測定時に治具底から 35 cm に設置した Polimaster と 150 cm の設置した PDR-303 の比較を第2表に示す。測定高さが異なるが、ほぼ同じ周辺線料当量率であることが判る。

### 3. まとめ

使用した線量計によりエネルギー応答が異なるので、線源の $\gamma$ 線よりエネルギーが低い散乱線が中心の場で応答が異なることが懸念されたが、上記の相互比較から大きな違いが無いことを確認することができた。

第2表 Polimaster と PDR-303 の比較

測定場所	治具底からの距離 cm	POLIMASTER	PDR-303
		mSv/h	
		25	150
東	7 cm	48.4	47.1
	0 cm	49.2	47.2
中央	6 cm	205	187
	0 cm	193	184

(別添3-2-4)

2号機シールドプラグのトップカバー下面の汚染に沈着している Cs-137 放射能の推定

(4) 新たに穿孔した穴での計算結果と測定結果の比較検討

原子力規制庁原子力規制部

東京電力福島第一原子力発電所事故対策室

平山英夫、近藤健次郎、鈴木征四郎、吉田善行、林克己、岩永宏平

1. はじめに

新たに穿孔した穴での測定を実施する以前は、シールドプラグ中の鉄筋の影響は小さいとして、密度  $2.1 \text{ g/cm}^2$  の  $61 \text{ cm}$  コンクリートとして穴内部等の周辺線量当量率を計算していた。新たな穴での測定結果から、上部の鉄筋に近い穴の下面では鉄筋との位置により影響が無視できないことが判明し、測定結果から上段と中段の隙間の汚染密度を推定するためには、鉄筋を含んだ計算が必要になった。以下では、鉄筋の配置を考量した egs5<sup>1)</sup> の計算結果と測定結果を比較検討した。

2 鉄筋を考慮した計算

egs5 の計算で鉄筋を組み込むとこれまで使用してきた衝突確率法等の手法の適用が難しいこと、穴の内部での分布状況を計算するには検出器に近い小さな検出領域（半径  $0.5 \text{ cm}$ ）の設定が必要なことから計算の妥当性のチェックが必要である。そこで、点減衰核計算コードである QAD-CGGP2<sup>2)</sup>（以下、「QAD」という。）の結果と比較検討し、egs5 の計算結果を検証した。

鉄筋を含む比較の前に、均一なコンクリート内部での周辺線量当量率を比較した。第1表に、 $61 \text{ cm}$  コンクリート下面の Cs-137 面線源による均一なコンクリート内部での周辺線量当量率の比較を示す。床面から  $0.5 \text{ cm}$  以外のコンクリート内では両者はほぼ一致している。これは計算形状が無限媒質中であり、ビルドアップ係数と対応しているためである。 $0.5 \text{ cm}$  で QAD が大きくなっているのは、この位置から上のコンクリートが無限体系と見なすには薄いためであると思われる。

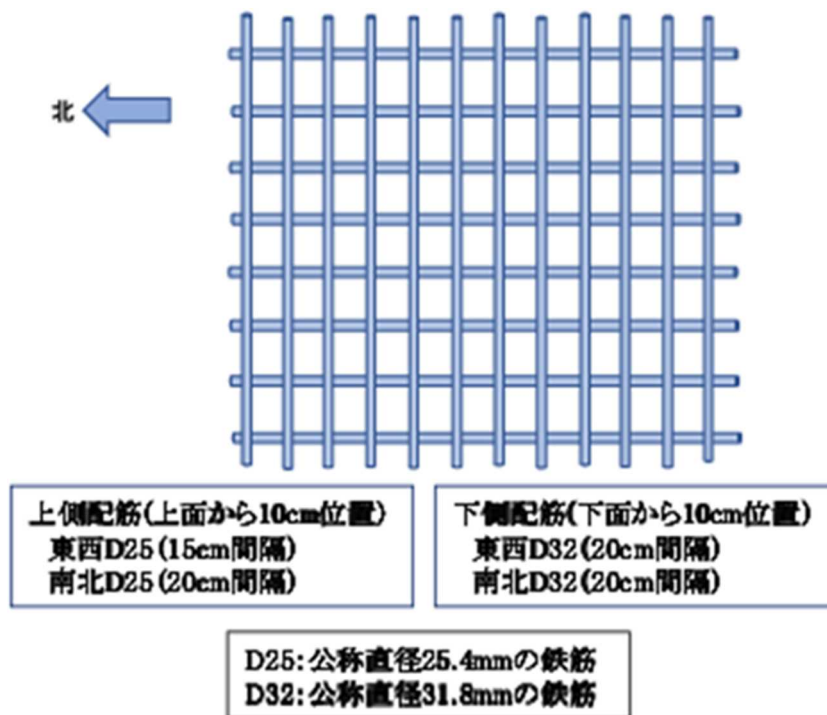
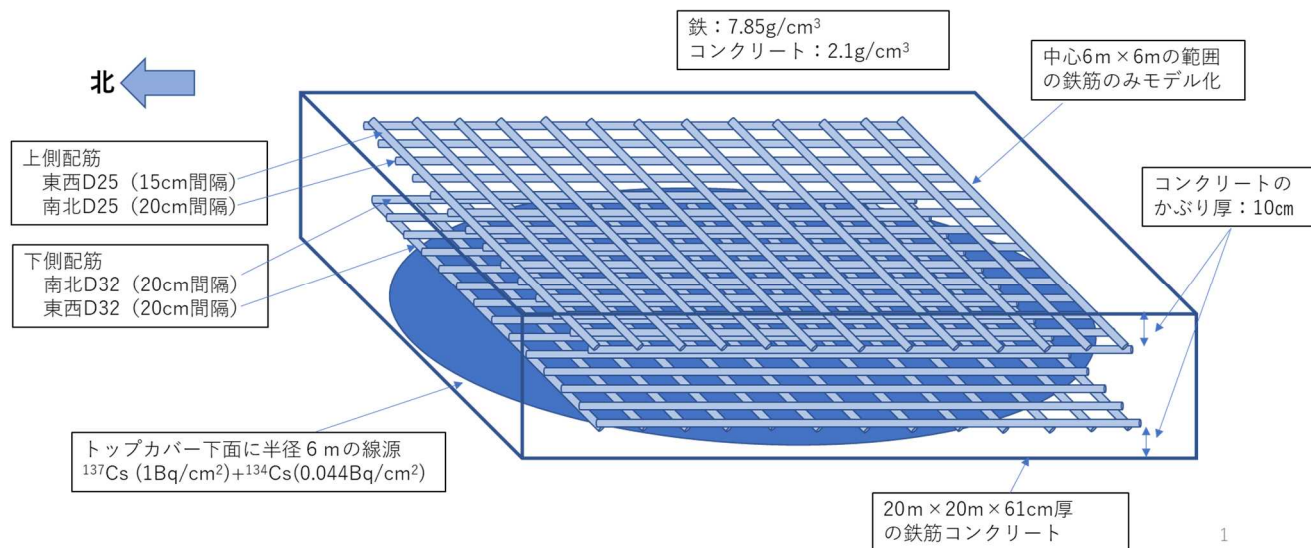
第1表 均一なコンクリート中での Cs-137 による周辺線量当量率の比較

床表面からの 距離 (cm)	QAD	egs5	QAD/egs5
	$\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ (Cs-137)		
0.5	1.12E-06	$9.70\text{E-07} \pm 1.49\text{E-08}$	1.15
2	1.40E-06	$1.33\text{E-06} \pm 1.91\text{E-08}$	1.05
4	1.90E-06	$1.87\text{E-06} \pm 2.14\text{E-08}$	1.02
6	2.58E-06	$2.58\text{E-06} \pm 2.51\text{E-08}$	1.00
8	3.50E-06	$3.52\text{E-06} \pm 2.87\text{E-08}$	1.00
9.75	4.57E-06	$4.70\text{E-06} \pm 3.69\text{E-08}$	0.97



## 2-1 鉄筋を含む計算形状と egs5 と QAD の比較

東電による設計図面の検討から、第1図に示す様に、上面から10cmの位置に東西に15cm間隔でD25(公称直径2.54cm)の鉄筋が、その下に南北に20cm間隔で同じD25の鉄筋があること、下面から10cmの位置に東西に20cm間隔でD32(公称直径3.18cm)の鉄筋が、その下に南北に20cm間隔で同じD32の鉄筋が設置されている。

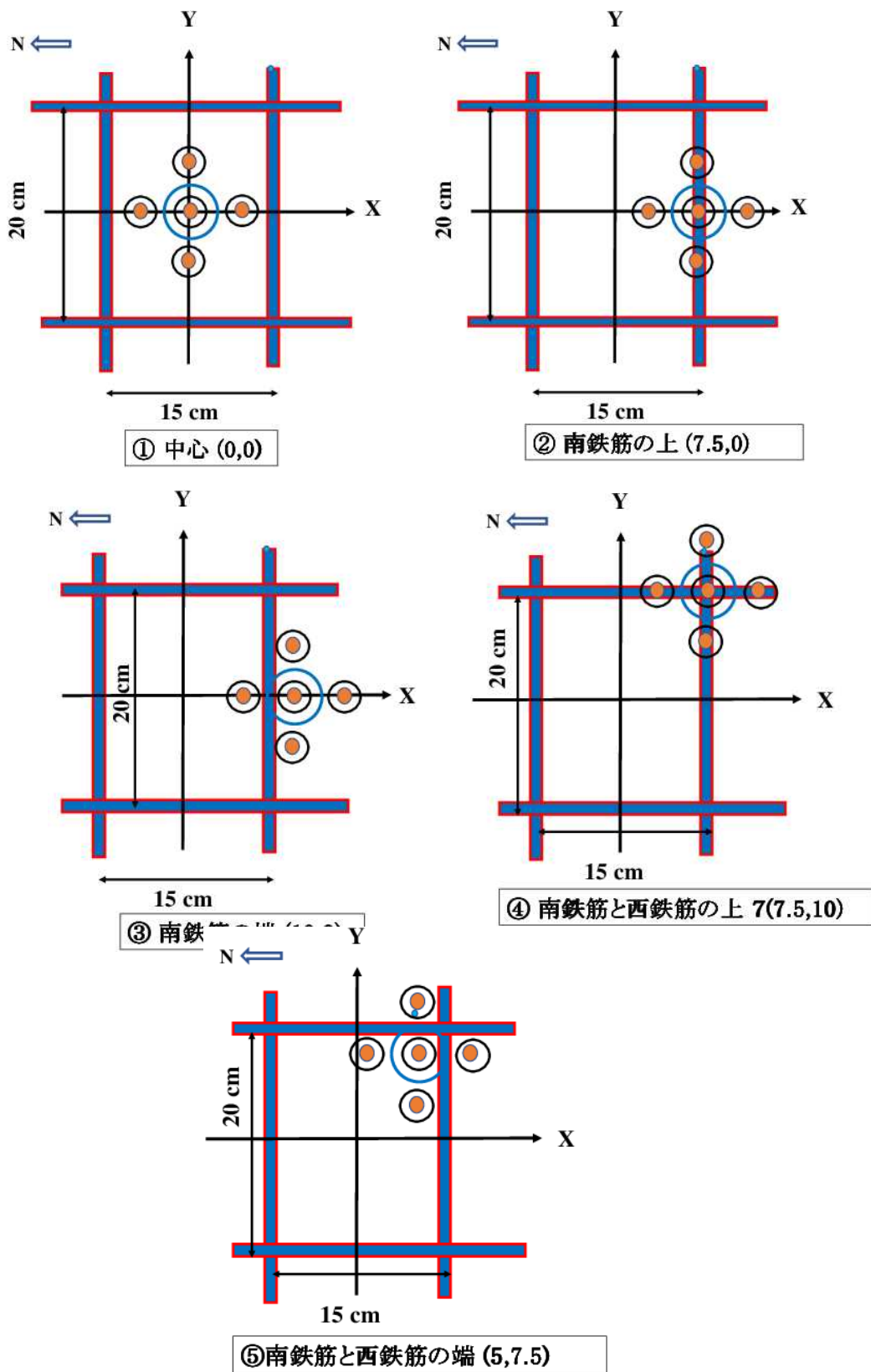


第1図 シールドプラグの配筋

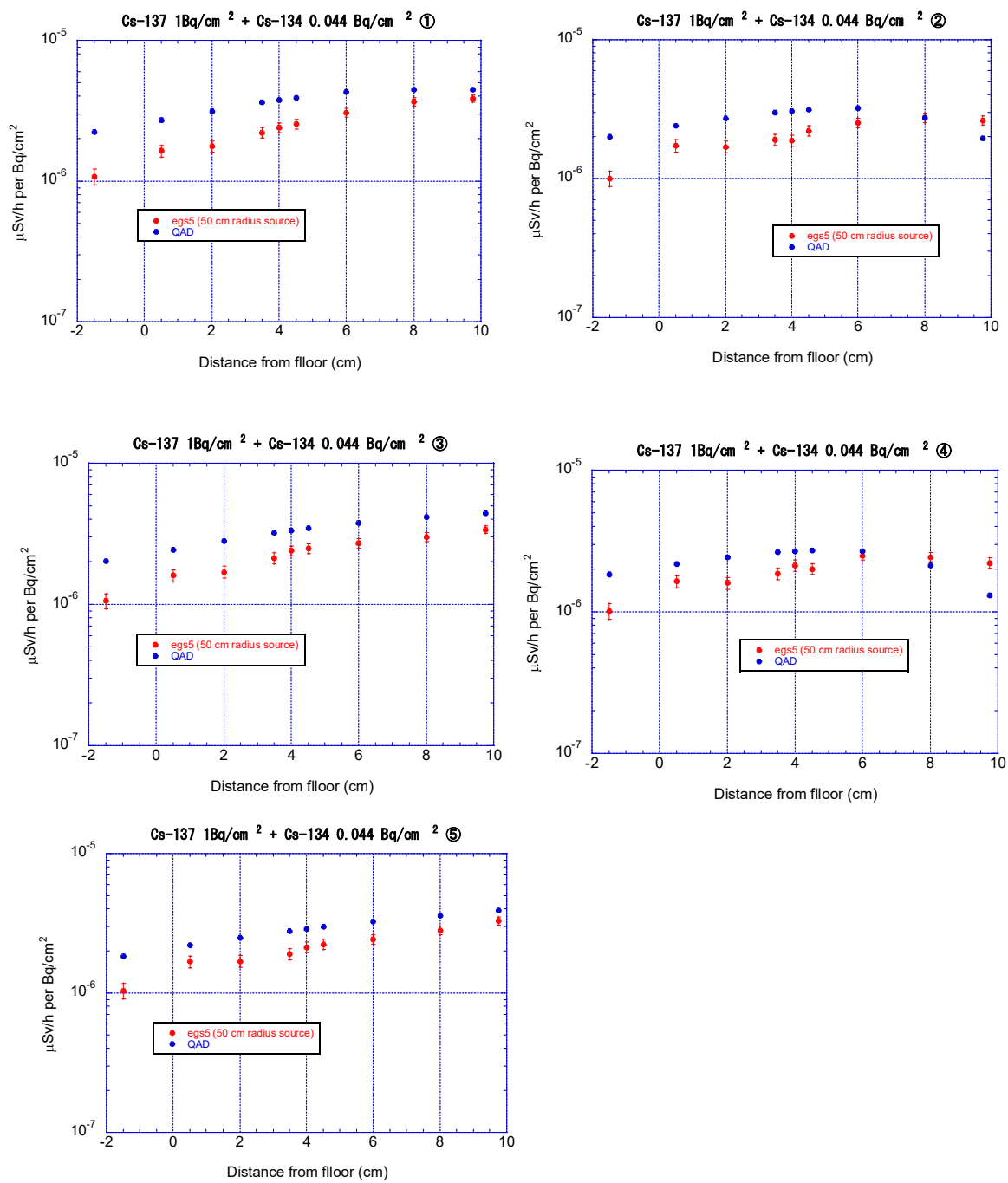
配筋の実際場所は図面とはずれがあること、穿孔された穴の位置は撮影画面からの推定であることから、個々の穴と配筋の位置関係は正確には分らない。そこで、第 2 図に示す典型的な 5 つのケースについてシールドプラグ上段と中段の隙間に沈着している Cs-137 と Cs-134 (Cs-137 の 4.4 %の放射能密度) による穴内部等の周辺線量当量率を計算した。コンクリートの密度は  $2.1 \text{ g/cm}^3$  とし、鉄筋の密度は「公称直径<sup>3)</sup> でモデル化し、その密度は重量を保存して決めた」 $7.85 \text{ g/cm}^3$  とした。

新たに穿孔した深さ 10 cm の穴について、穴の中心軸上 1.5 cm を含む穴内部の周辺線量当量率の比較を第 3 図に、穴の中心軸上を含む床表面から 1.5 cm の東西南北の周辺線量当量率の比較を第 4 図に示す。

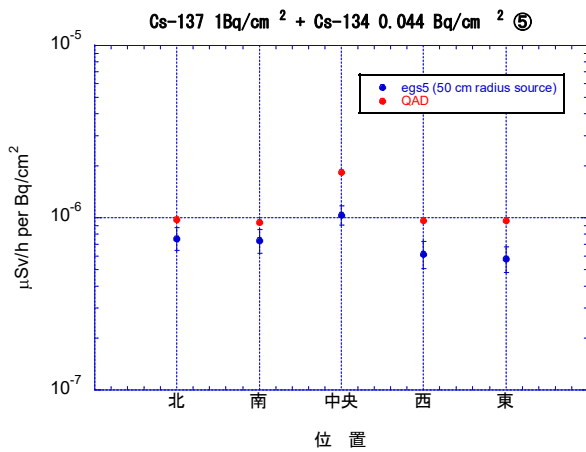
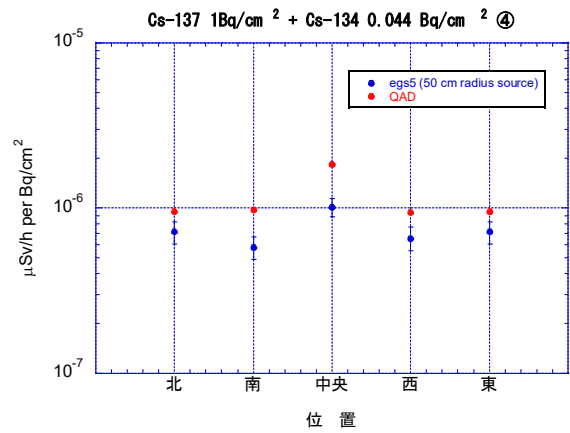
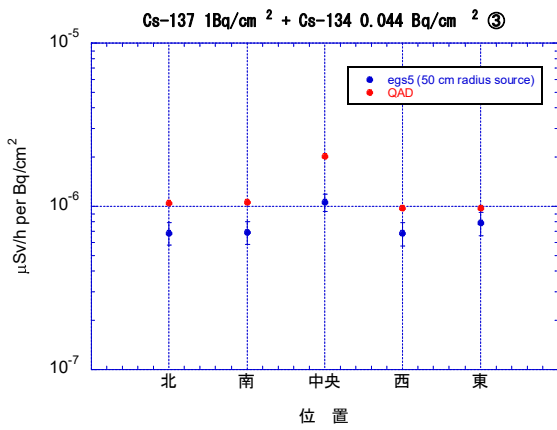
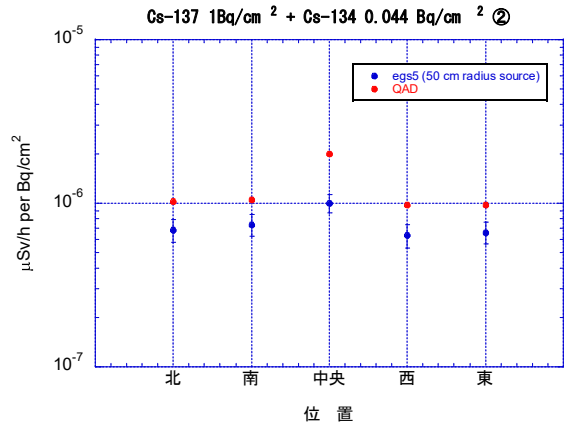
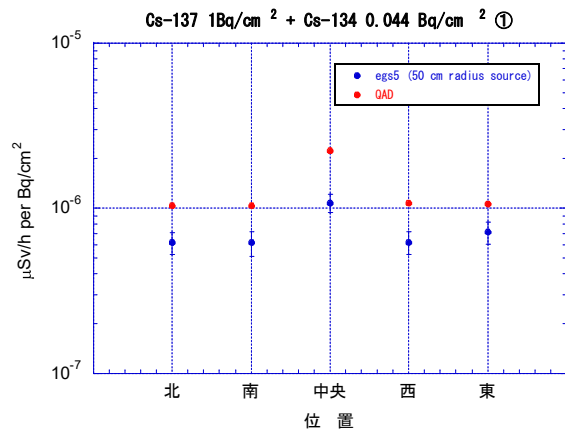
なお、QAD-CGGP2R の結果は別添資料 1 に示したものを使用した。



第2図 鉄筋を含む計算形状



第3図 egs5 と QAD の比較 (穴内部)

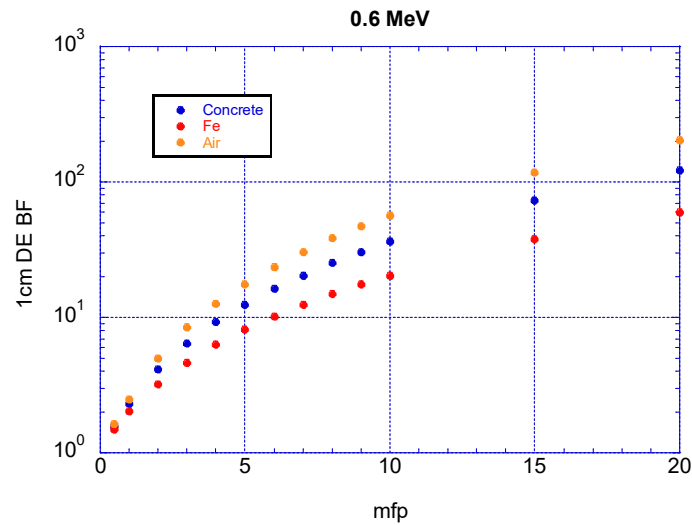


第4図 egs5 と QAD の比較 (床表面 1.5 cm)

## 2-2. 比較の検討

QAD は点減衰核計算コードであるので、周辺線量当量率は直接線（非散乱線）の周辺線量当量率とビルドアップ係数で計算する。ビルドアップ係数としては、本来周辺線量当量に対応する「1 cm 線量当量ビルドアップ係数」を用いるべきであるが、使用した QAD では、ANS-643<sup>4)</sup> の照射線量ビルドアップ係数しか使用できる標準データがなかったので、「照射線量を換算係数で補正する手法」<sup>5)</sup> を適用している。この手法では、遮蔽物質の平均自由行程数（mfp）に伴い換算係数が増加しその後一定になることから、一定になった値を「実効換算係数」として使用している。従って、遮蔽の厚さにより過大評価になる傾向がある。また、QAD では、ビルドアップ係数を適用する物質は 1 つしか指定できないので、本計算ではコンクリートのビルドアップ係数を使用した。ビルドアップ係数は、同じエネルギーの光子であっても物質により異なる。第 5 に Cs-137 からの  $\gamma$  線エネルギーに近い 0.6 MeV 光子に対するコンクリート、鉄、空気の周辺線量当量ビルドアップ係数<sup>4)</sup> の比較を示す。コンクリートのビルドアップ係数は鉄よりも大きいことが分る。異なる物質で構成されている多重層のビルドアップ係数は複雑であるので単純な比較は難しいが、そのことを別としても、コンクリートのみのビルドアップ係数を使用するということは、鉄の部分の mfp をコンクリートの同じ平均自由行程数に置き換えて適用することになる。両者のビルドアップ係数の違いから周辺線量当量率を過大評価する傾向となる。また、使用するビルドアップ係数は、無限体系中のビルドアップ係数である。均一なコンクリート中で egs5 と AQD の結果が一致するのは、ビルドアップ係数が前提としている無限体系中に近いためである。また、空気層の領域では、無限体系よりも有限体系に近い状況となることから、この場合も QAD の結果は過大評価の傾向となる。一方、計算対象となっている穴の底近くでは、線源からの直接線・散乱線に加えて、周辺での散乱線の回り込みが一定寄与する。QAD の計算ではこの効果は考慮されていないので、過小評価の傾向となる。egs5 の計算では、線源をリング上に分割し、得られた結果の合計から対象領域からの周辺線量当量率を計算している。第 3 図、第 4 図及び第 5 図の egs5 の計算結果は線源半径 50 cm の場合の結果である。QAD の計算は半径 6 m の線源の結果である。QAD の計算から半径 50 cm 外部の線源からの寄与が最大で 10 % 程度ある。従って、egs5 の結果は最大で 10 % 程度過小評価となっている。

以上の点を念頭に両者の比較検討を行う。



第5図 周辺線量当量（1cm線量当量）ビルドアップ係数の比較

(1) 穴内部の分布

egs5 と QAD の穴内部の周辺線量当量率分布は、①から⑤のそれぞれでほぼ対応した傾向になっており、egs5 の計算で鉄筋の記述が妥当であることを示している。全体として、QAD の結果が大きく、シールドプラグ表面や上部でその割合が大きくなるのは、QAD のビルドアップ係数に起因すると思われる。②と④のように穴の下面に鉄筋がある形状では穴の底で、egs5 の方が大きくなっている。これは、QAD では扱えない穴周辺からの散乱の影響であると考えられる。

(2) 表面での分布

egs5 と QAD 共に、穴中心部が最も高く東西南北はほぼ同じという結果になっている。全体として QAD の周辺線量当量率が egs5 より大きいのは、(1) と同じ理由である。どちらの結果も形状による分布の違いが小さいことは、コンクリート床面上部では鉄筋と穴との位置関係による影響が小さいことを示している。

2-3 比較のまとめ

上記の比較から egs5 の計算結果は、鉄筋を適切に扱っているといえることができる。

3. 実効線源領域

シールドプラグ表面近く及びシールドプラグのコンクリート内部での周辺線量当量率の評価において、評価結果や測定結果が実効的にどのような広さの領域の汚染密度を反映しているかを見ておく必要がある。実際の汚染密度は均一ではなく分布があることが想定されるが、ここでは汚染密度は均一であるとする。評価点からの距離と共に単位放射能当たりの周辺線量当量率は距離と透過するコンクリートの厚さの違いから急激に減少するが、線源を同じ幅のリングの分割した場合線源からの距離とコンクリートの厚さが同じ領域の

面積が増加するので、両者を加味して実効的な線源領域を設定する必要がある。別添資料 2 に示す様に、シールドプラグの床表面から 3 cm の領域では評価位置下部の半径 50 cm の位置では単位放射能当たりの周辺線量当量率は、評価位置下部全体の 5 % 程度となる。面積を考慮した場合には寄与が若干増えて 10 % 程度となる。半径 40 cm までの領域の寄与が 80 % 程度であることから、汚染密度が実効的に影響する領域は多めに見積もっても半径 50 cm 程度であると言える。このことを考慮して、線源をリング状に分割している egs5 の計算では半径 50 cm までの寄与を線源からの周辺線量当量率とする。50 cm の外側に寄与が最大で 10 % 程度あるので、egs5 の結果は最大で 10 % 程度過小評価となり、測定値から汚染密度を推定する場合には、最大 10 % 過大評価となる。シールドプラグのコンクリート内部の場合、鉄筋との位置関係により寄与分布の形は若干変化するが、半径 50 cm より外側の寄与が 10 % 以下という結果は変わらない。

#### 4. 計算結果を踏まえた測定結果の検討

##### 4-1 計算結果

###### (1) 新たに穿孔した穴内部

①～⑤の計算形状での egs5 計算結果を第 6 図に示す。床表面から 6 cm より深い位置では、穴の下部近辺に鉄筋がある場合には床表面からの距離の増加により周辺線量当量率が減少する傾向やほとんど変化しない領域がある。また、床表面から 6 cm より浅くなると、鉄筋との位置関係により周辺線量当量率は若干異なるが床に近いほど小さくなる傾向となっている。

###### (2) IRID の穴内部

IRID が穿孔した穴と新たに穿孔した穴の違いは、穴の深さである。IRID の穴は 7 cm で新たな穴は 10 cm である。この違いは。

- ・シールドプラグの上側鉄筋の上部は、床から 10 cm であるので、IRID の穴では、穴の底から鉄筋までの間に少なくとも 3 cm のコンクリートがある。

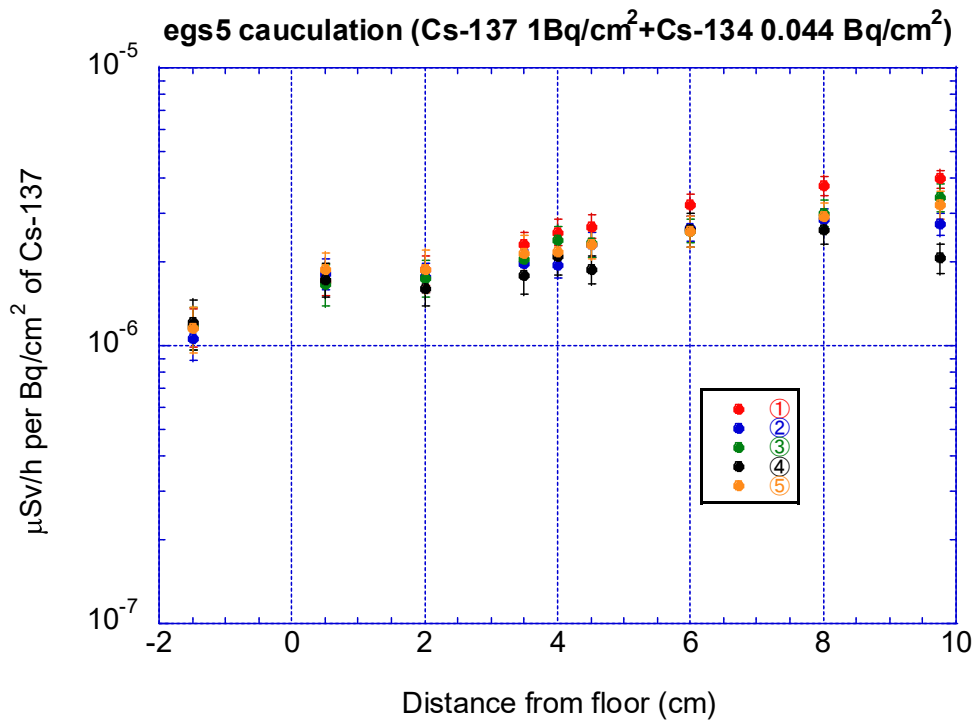
- ・穴内部での測定可能な深さは、線量計の実効中心を考慮すると床表面から 6 cm より浅い位置である。

ことを意味する。IRID の穴内部の計算結果を第 7 図に示す。(1)の結果から推定出来るように、鉄筋との位置により程度の違いはあるが、床に近くなるに伴い周辺線量当量率が減少する傾向になっている。

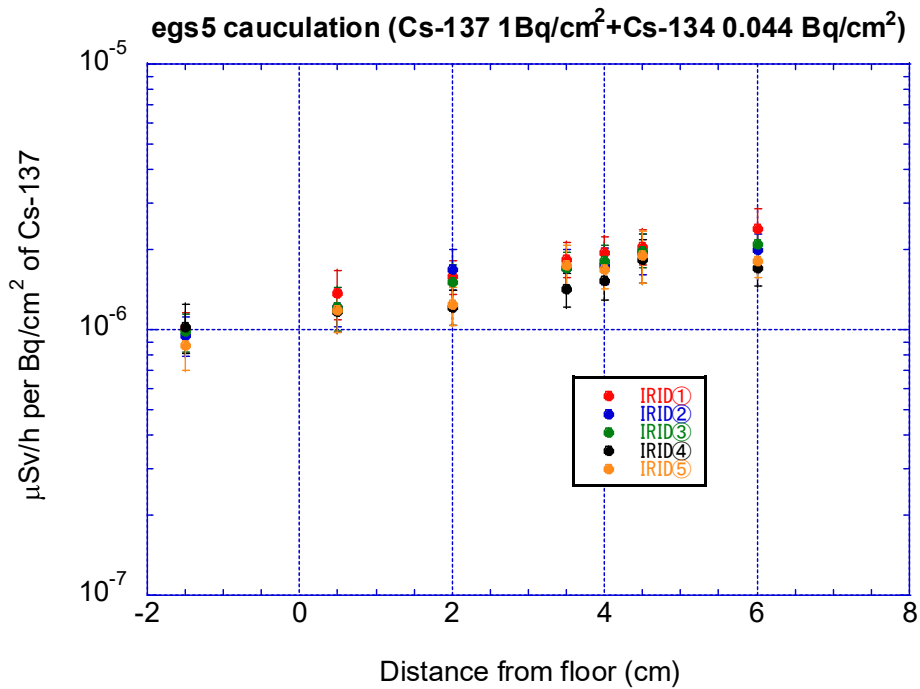
###### (3) 周辺線量当量率からトップカバー下面汚染密度への換算係数

各穴と鉄筋の正確な位置関係が分らないので、トップカバー下面の汚染(1 Bq/cm<sup>2</sup> の Cs-137 と 0.044 Bq/cm<sup>2</sup> の Cs-134)による周辺線量当量率としては、典型的な 5 つの形状に対する結果の平均値を使用することとする。形状により分布の形の違いが少ない 6 cm より浅い位置での換算係数を第 8 図に示す。穴の深さによる値の違いはあるが、新たに掘削した穴と IRID の穴で分布の形には大きな違いが無いことが分る。



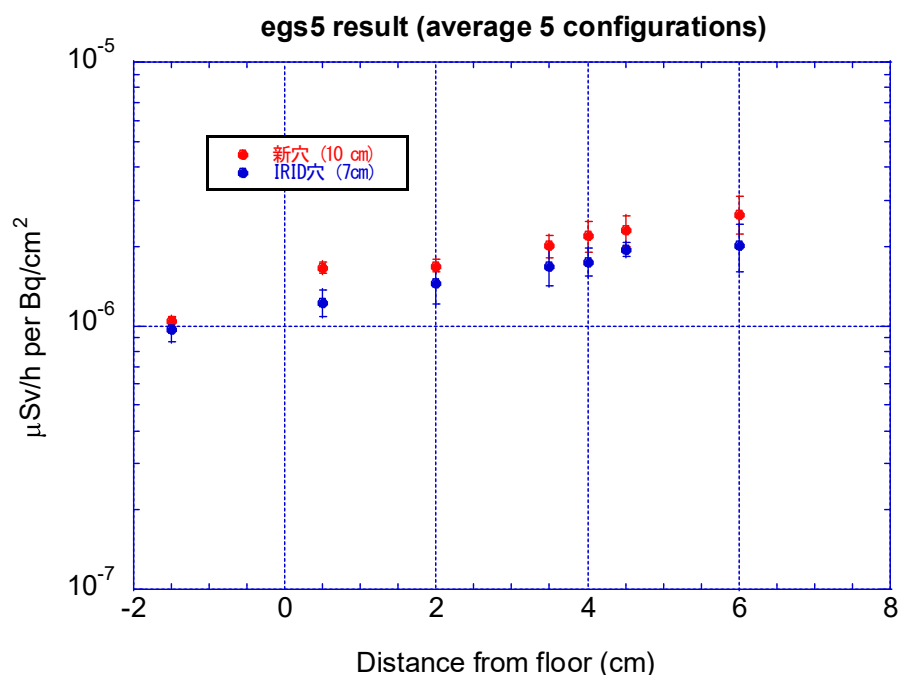


第6図 egs5 の計算結果によるトップカバー下面の Cs-137 1 Bq/cm<sup>2</sup> と Cs-134 0.044 Bq/cm<sup>2</sup> による深さ 10 cm の新しい穴内部の周辺線量当量率分布



第7図 egs5 の計算結果によるトップカバー下面の Cs-137 1 Bq/cm<sup>2</sup> と

Cs-134 0.044 Bq/cm<sup>2</sup>による深さ 7 cm の IRID 穴内部の周辺線量当量率分布



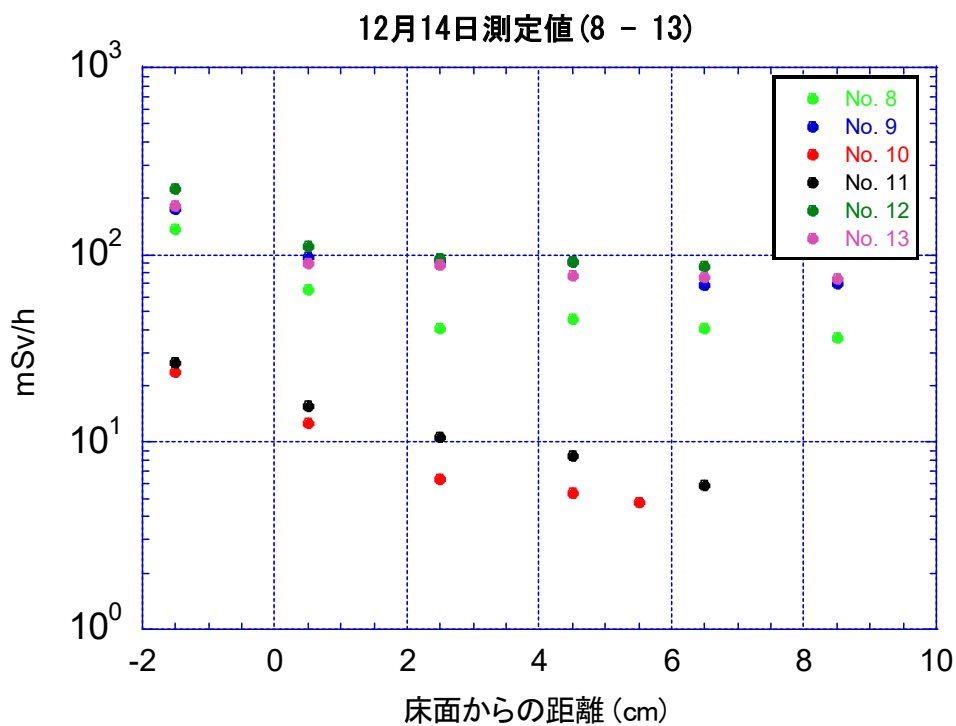
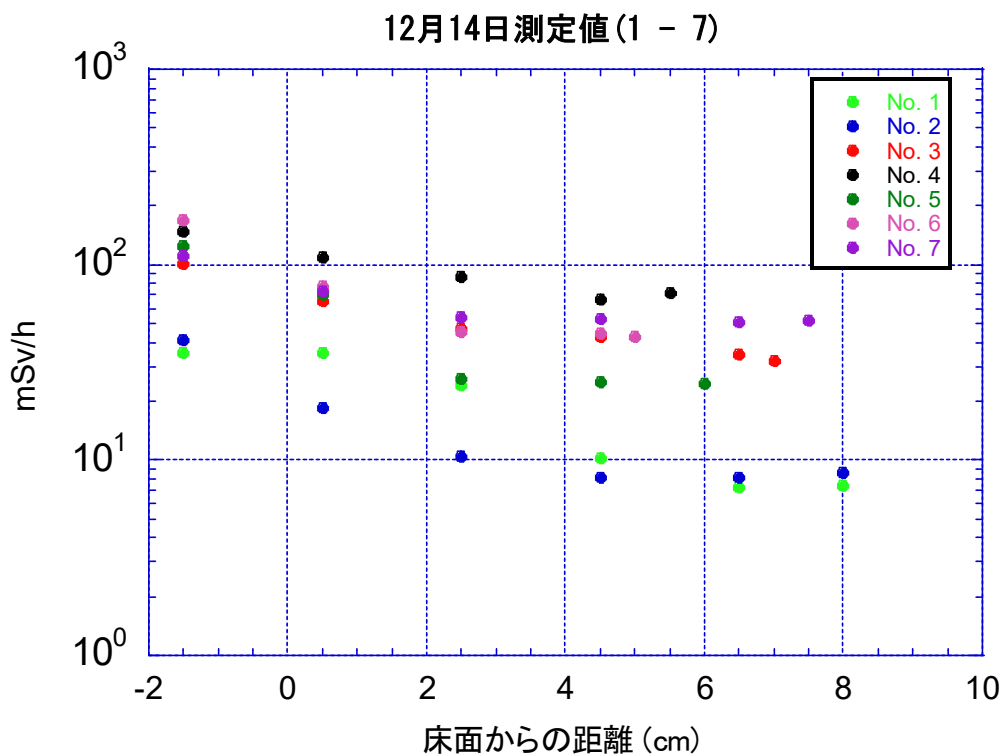
第 8 図 6 cm より浅い位置でのトップカバー下面の Cs-137 と Cs-134 による周辺線量当量率（5つの形状の平均値）

#### 4-2 測定値の検討

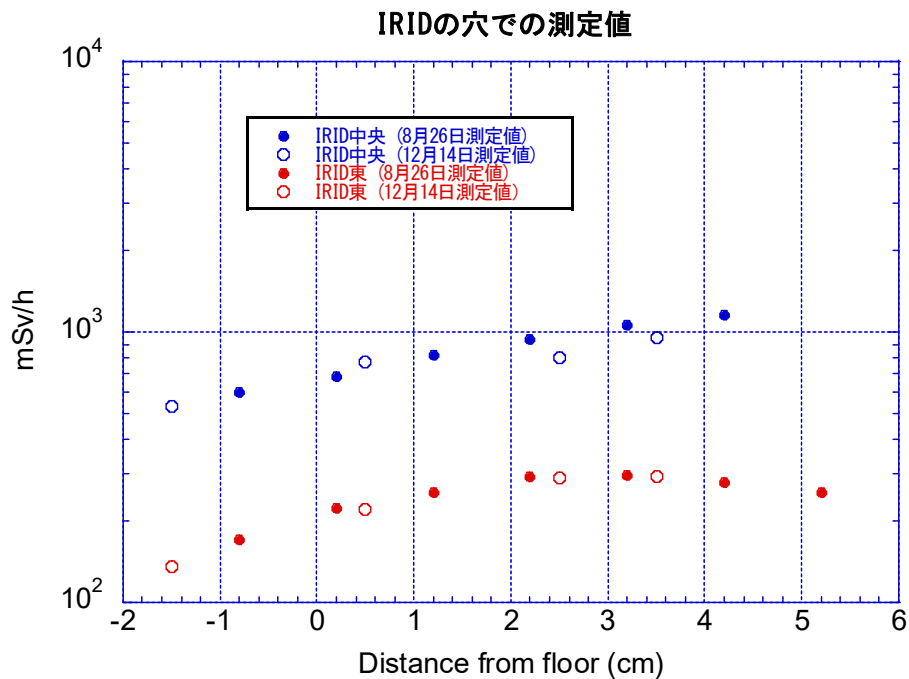
新たに穿孔した穴内部での周辺線量当量率の測定結果は、第 9 図に示す様に、2 cm より浅くなると周辺線量当量率が急激に上昇する傾向となっている。一方、IRID の穴では第 10 図に示す様に、浅い位置から床面 1.5 cm での上昇は見られていない。

床面近くの周辺線量当量率に 3 つに分割されているトップカバーの隙間の汚染が寄与している可能性については、別添資料 3 に示されている様に狭い隙間の上部では周辺線量当量率を高める可能性はあるが、影響する領域が限られていることから床面上部の広い領域の主要な線源とは考えられない。

以下では、IRID の穴と新たに穿孔した穴で測定された周辺線量当量率は、オペフロ内壁の寄与とトップカバー下面の汚染寄与によるというモデルで解析を行い、測定結果と比較しモデルの妥当性を検討する。



第9図 2021年12月14日の測定結果



第 10 図 IRID 穴での測定結果

#### 4-3 新たに穿孔した穴内部の分布モデル

穴内部での周辺線量当量率の分布から、オペフロ内壁汚染による上部からの線量率寄与とトップカバー下面の汚染からの線量率寄与との2つの成分の合成であることが推測された。

##### (1) 床以外（天井と壁）の内壁汚染の寄与

シールドプラグに鉄板を設置し、床面とトップカバー下面汚染の寄与を除いた測定結果は、床上 100 cm 位置で 8 mSv/h (規制庁測定)、床上 150 cm 位置で 9.0 mSv/h (東電測定)であった。

一方、別添資料4 に示す QAD で計算した床以外の内壁(つまり壁と天井)の寄与は、床上 150 cm で 8.5 mSv/h、床上 100 cm では 8.3 mSv/h、また床上から 1.5 cm では 8.0 mSv/h であった。測定値と QAD の結果が 150 cm と 100 cm でほぼ対応しているため 1.5 cm での床以外の内壁寄与を 8.0 mSv/h とした。穴内部の周辺線量当量率は、別添資料4の QAD の計算結果を用いて求めた。

##### (2) 解析モデル

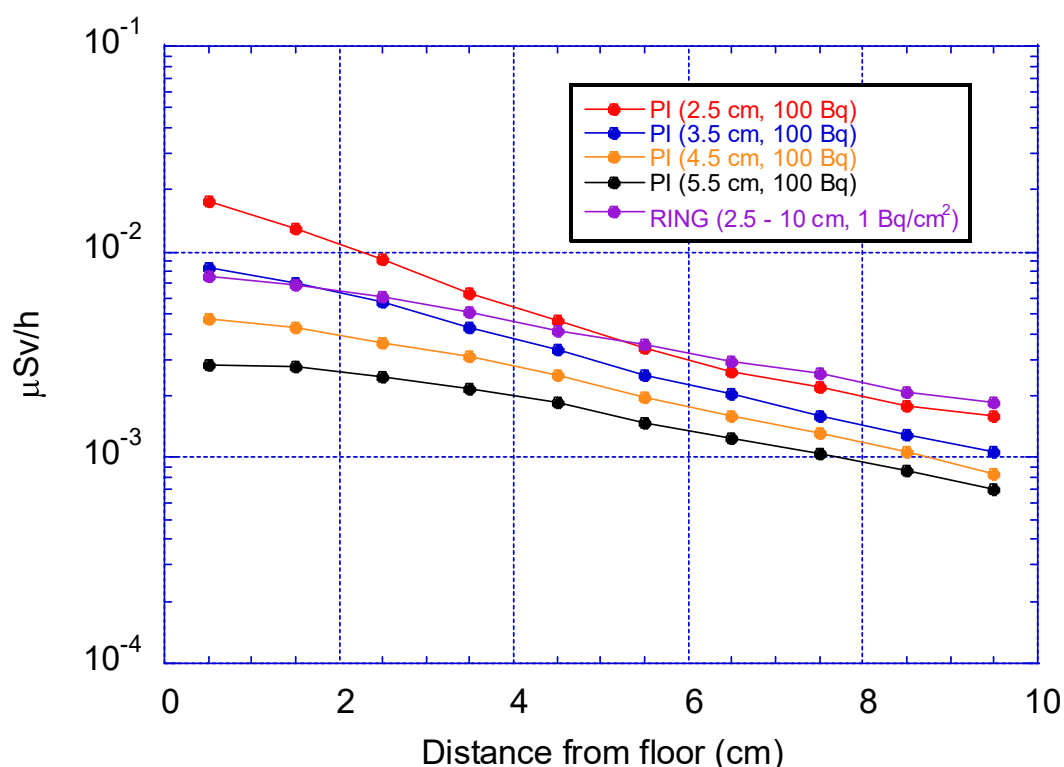
測定値から床以外の内壁汚染の寄与を除いた周辺線量当量率は、床表面の汚染とトップカバー下面の汚染という二つの線源によると考えられる。

##### (a) 床表面汚染の寄与

床表面汚染による寄与は、汚染密度分布による影響が大きいので、

$$D_s \times \exp(-\lambda_{att} \times t)$$

で近似する。 $\lambda_{att}$  は穴内部での減衰係数、 $t$  は床面からの距離である。 $\lambda_{att}$  は、主要な線源が穴近くの点線源 (2.5 cm から 5 cm) と 2.5 cm から 10 cm の同じ汚染密度で分布している場合 (10 cm 分布線源) について egs5 で計算した。結果を第 11 図に示す。計算結果から、 $\lambda_{att}$  は、 $0.165 \text{ cm}^{-1}$  (10 cm 分布線源) から  $0.276 \text{ cm}^{-1}$  (2.5 cm 点線源) の範囲で変化することが分かった。



第 11 図 床表面の汚染状況による穴内部の周辺線量率分布

(b) トップカバー下面の汚染の寄与

トップカバー下面の汚染による寄与は、鉄筋の影響がほとんど無い床面から 6 cm 近辺より浅い領域では、第12 図に示す様に新しい穴と IRID の穴で分布の形はほぼ同じで、指数関数の傾きは、 $0.113 \text{ (cm}^{-1}\text{)}$  で近似することが出来る。

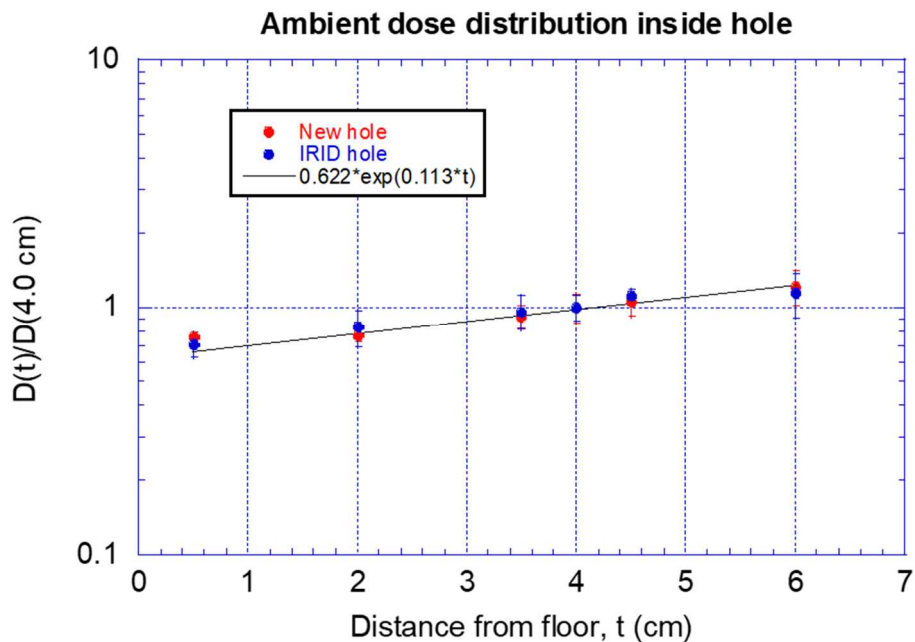
10 cm 深さの穴の場合、トップカバー下面の汚染による  $t$  での周辺線量当量率  $D_B$  (mSv/h) は、

$$D_B = Q_B \times 1.36 \times 10^{-6} \times \exp(0.113 \times t) / 1000$$

となる。IRID の 7 cm 深さの穴では、減衰の傾きは同じ  $0.113 \text{ (cm}^{-1}\text{)}$  として各計算位置で求めた係数の平均値から、

$$D_B = Q_B \times 1.13 \times 10^{-6} \times \exp(0.113 \times t) / 1000$$

となる。



第 12 図 新しい穴と IRID の穴の 4 cm 位置に対する相対値の比較

$b = Q_B * 1.36E-06 / 1000.0$  (新穴) 又は、 $b = Q_B * 1.13E-06 / 1000$  (IRID の穴) とすると、2つの線源による穴内部の周辺線量当量率は、

$$D = D_s * \exp(-\lambda_{att} * t) + b * \exp(0.113 * t)$$

となる。

測定値  $D$  と上記の式から最小二乗法により、 $D_s$  と  $b$  を求め、 $b$  から  $Q_B$  を求めることが課題となる。

### (3) Kaleida Graph を用いた最小二乗解

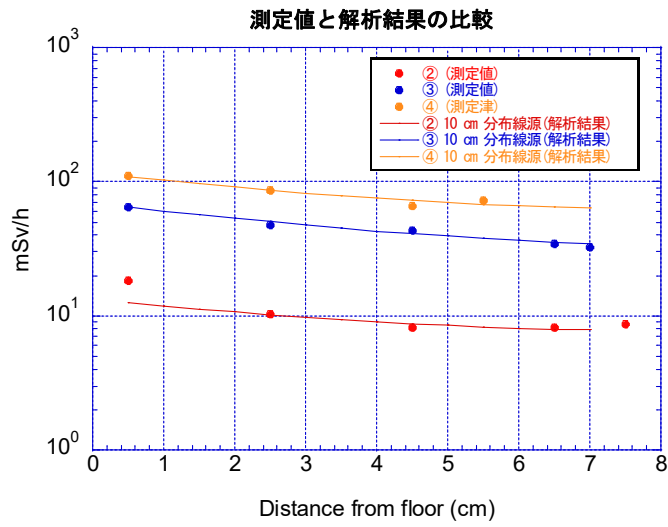
2つの指数関数で構成される上記の式の最小二乗法解を求める問題は、「非線形最小二乗問題」<sup>9)</sup>の一つである。グラフ作成・データ解析ソフトウェアであるカレイダグラフ<sup>10)</sup>には、式を定義して非線形最小二乗法の解法の1つである Levenberg-Marquardt 法により回帰曲線を得る機能がある。 $\lambda_{att}$  をパラメータとして、この機能を使ってトップカバー下面の汚染密度を求めた。No. 2, 5, 6, 10 及び 11 については、0.5 cm を含めると有意な結果が得られなかったため、除外して解析を行った。10 cm 分布線源と 2.5 cm 点線源の場合の結果を第 2 表に示す。他の点線の場合には、両者の間の値となる。No. 1 と No. 10 の 10 cm 分布線源の場合には有意な結果を得ることが出来なかった。No.3 と No.4 を除くと、 $\lambda_{att}$  の違いによるトップカバー下面の汚染密度の違いは 50% 以下である。

第2表 最小二乗法により求めたトップカバー下面の汚染密度

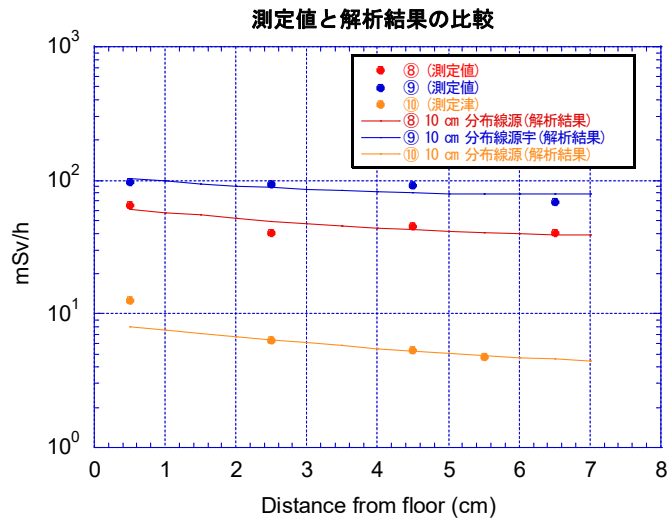
穴番号	解析条件	10 cm 分布線源 (A)		2.5 cm 点線源 (B)		B/A
		Bq/cm <sup>2</sup>				
		Q <sub>B</sub>	Error	Q <sub>B</sub>	Error	
No. 1						
No. 2	0.5 cm 除外	1.26E+09	3.34E+08	1.54E+09	2.04E+08	1.22
No. 3		4.77E+09	1.10E+09	9.03E+09	1.08E+09	1.89
No. 4		1.02E+10	2.63E+09	1.85E+10	1.78E+09	1.82
No. 5	0.5 cm 除外	5.81E+09	3.07E+08	6.48E+09	3.79E+08	1.12
No. 6	0.5 cm 除外	1.05E+10	8.66E+08	1.29E+10	8.61E+08	1.23
No. 7		1.03E+10	1.67E+09	1.43E+10	7.91E+08	1.39
No. 8		7.10E+09	3.14E+09	1.02E+10	2.11E+09	1.43
No. 9		1.73E+10	4.99E+09	2.37E+10	5.13E+09	1.37
No. 10	0.5 cm 除外	5.26E+08	6.15E+07	6.18E+08	5.38E+07	1.17
No. 11	0.5 cm 除外			6.90E+08	1.54E+08	
No. 12		2.06E+10	1.12E+09	2.38E+10	2.64E+09	1.16
No. 13		1.85E+10	2.09E+09	2.38E+10	2.64E+09	1.29
IRID-C		5.95E+11	5.96E+10	6.00E+11	4.36E+10	1.01
IRID-E		1.20E+11	1.82E+10	1.36E+11	1.49E+10	1.14

(4) 解析結果の検証

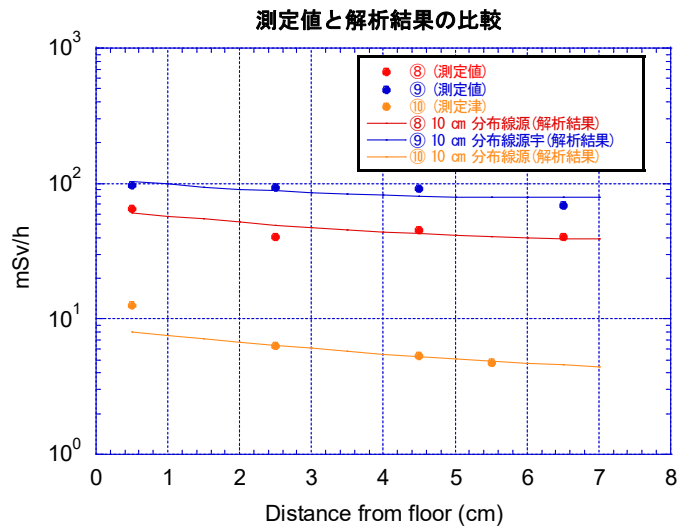
最小二乗法で求めた  $b$  からトップカバー下面の汚染密度  $B$  を求めた。Ds と得られた汚染密度を用いて穴内部の周辺線量当量率（トップカバー下面の寄与、床表面汚染の寄与及び床以外のオペフロ内壁寄与の合計）を求め、測定結果と比較することにより解析結果を検証した。10 cm 分布制限の場合の結果を第 13 図に示す。⑤と⑥で、0.5 cm 位置で違いが見られるが、それ以外の穴内部での分布については実測値と良く合っている。



第 13 図 (②、③及び④)

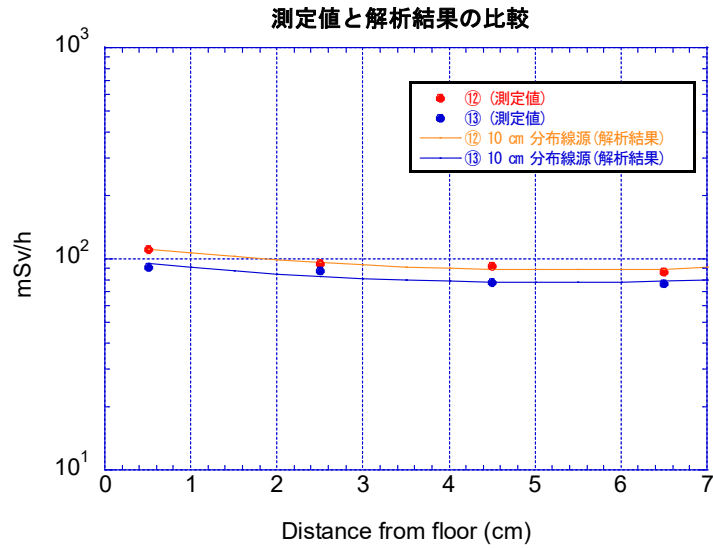


第 13 図 (⑤、⑥、⑦)

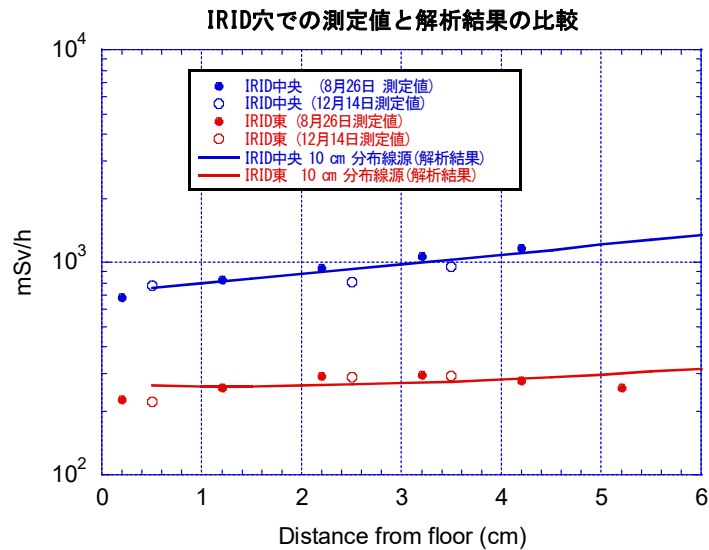


第 13 図 (⑧、⑨、⑩)





第 13 図 ((⑫、⑬))



第 13 図 (IRID 中央、IRID 東)

## 5. 結果の検討

### 5-1 床表面の汚染について

これまで、シールドプラグの床表面の汚染は大凡均一であるとして 0.25 Mbq/cm<sup>2</sup> 程度であるとしてきた。これに対して、穿孔により取り出されたコア表面での周辺線量当量率の測定では、ほとんどのコアでは周辺の線量率と同じ 200 μSv/h 程度で、以下の 4 つのコアでのみ有意な値が測定されている。

④ : 3 mSv/h、⑥ : 1.6 mSv/h、⑫ : 870 μSv/h、⑬ : 520 μSv/h

この事から場所により床表面の汚染の状況が異なることが分る。

床面に近い 1.5 cm 位置での床面の汚染による周辺線量当量は、別添資料5に示す様に、測定

点に近い場所の寄与が大きい。これまでの測定で実証することはできないが、これらの結果から、実効的にシールドプラグ表面近くに汚染密度の高い領域がありそのことが影響している可能性がある、汚染密度の高い領域が存在していた場合、その位置により東西南北の測定値間に大きな違いが生じる要因となることも考えられる。

#### 5-2 トップカバー下面の汚染密度について

4の解析結果の検討から、第3表に示したトップカバー下面の汚染密度は、新たに穿孔した穴の下面と IRID の穴の下面共に実際の汚染密度に対応していると考えられる。第3表で汚染密度が得られた結果では、 $5.26E+08$  から IRID 中央での  $6.00E+11$  Bq/cm<sup>2</sup>と場所による違いが非常に大きいことが分る。トップカバー下面全体の状況を反映している 150 cm 高さでの周辺線量当量率の測定値から求めた推定値でも測定場所により 5 倍近くの差があったことから、トップカバー下面の汚染密度にかなりのばらつきがあることは想定されていたが、第3表で得られた結果ほど大きなばらつきが存在することは、新たに穿孔された穴での測定によりはじめて分った重要なことである。得られた情報は限られていることから限界はあるが、高濃度の放射性核種を含んだガスが3層のシールドプラグからどのような経路でオペフロに出て行ったかを推定する際の参考となるデータになると考えられる。

#### 5-3 東西南北の周辺線量当量率分布について

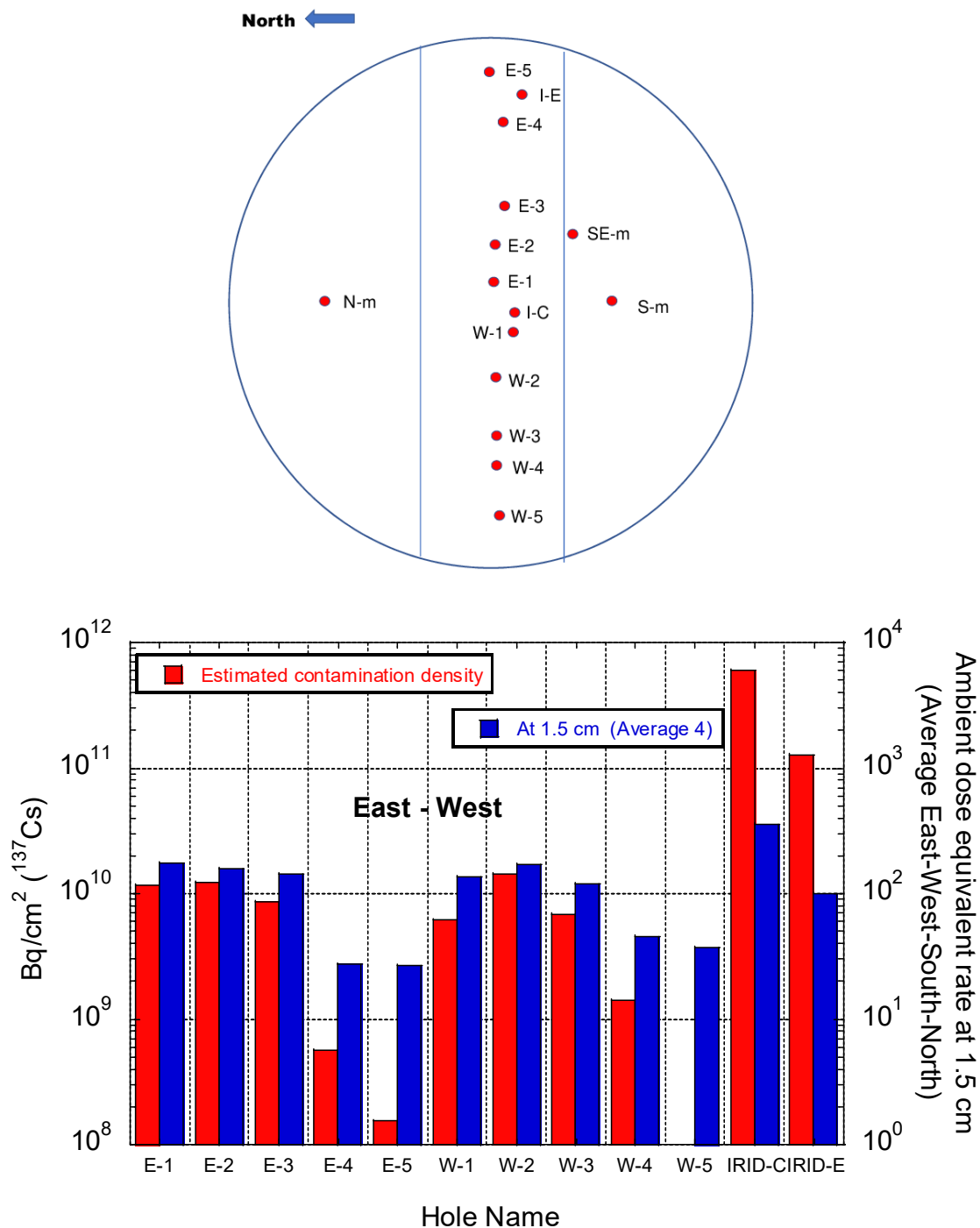
第4図に示されているように、トップカバー下面の汚染密度が一様であれば、鉄筋の影響を考慮しても、シールドプラグの床表面から 1.5 cm 高さでの東西南北と中央での周辺線量当量率の比較では、中央が最も高く、東西南北は中央より低くほぼ同じという結果になっている。床面を含む内壁汚染の寄与については、床面の汚染密度がほぼ一様であれば、東西南北でほぼ同じになる。従って、1.5 cm 高さで見られる様な周辺線量当量率に分布があることは、コア表面の測定結果に示されているように、床表面の汚染密度に大きなばらつきがあることを示していると考えられる。

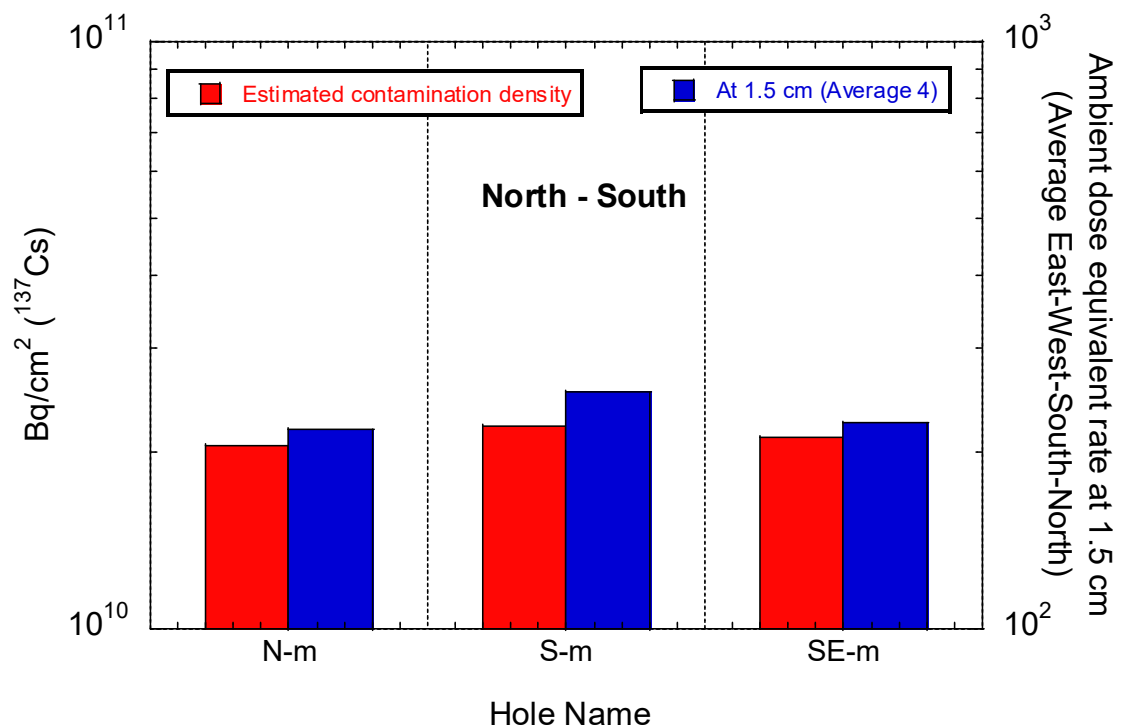
#### 5-4 シールドプラグの床表面近くでの周辺線量当量率とトップカバー下面の汚染密度の関係について

シールドプラグに新たに穿孔する穴の数は時間の制限などから限定されることから、「シールドプラグ表面近くの周辺線量当量率へのトップカバー下面の汚染の寄与はオペフロ内壁汚染による寄与より大きい」と想定し、穿孔位置を検討するための床面から 3 cm 高さでのマッピングを行った。マッピング結果とその解釈は別添資料7に示す。

第14図に、穴の無い状態で測定したマッピングとトップカバー下面汚染密度との関係を知りために、東西南北の測定値の平均の周辺線量当量率の測定値とトップカバー下面の汚染密度との比較を示す。汚染密度は、 $\lambda_{ate}=0.167$  と  $\lambda_{ate}=0.276$  の平均である。IRID の穴と穿孔時に場所を変更した No. 9 以外の穴では、穿孔前に床面から 3 cm の位置で周辺線量当量率を測定していた。しかし、事前の測定した場所と実際に穿孔した場所がずれていたためか穴上部 1.5 cm

での測定値の方が事前の測定値より低い場合もあったこと、IRID の穴と No. 9 を比較に使えないことから、トップカバー下面の汚染密度との関係を見る床表面での周辺線量当量率としては、床面から 1.5 cm での東西南北の平均値を用いた。位置関係を明確にするために、測定番号ではなく東西方向と南北方向が分かる様に付け直した名称で示しているマッピング結果は、トップカバー下面の汚染密度分布状況を反映していると思われる。





第 14 図 床面から 1.5 cm 高さでの周辺線量当量率(東西南北の平均)とトップカバ下面の汚染密

## 6. その他の検討

### 6-1 鉄筋の影響

今回の穿孔穴内部や床表面近くの測定値の検討では、当初から鉄筋の影響が想定されたので鉄筋をモデル化して検討を行った。床上 1.5m の線量率や床上 30cm でのコリメータ付線量計での測定値の検討では鉄筋をモデル化していないので、これらの測定からトップカバ下面の汚染密度分布に対する鉄筋の影響評価については、別添資料 8 に示す。

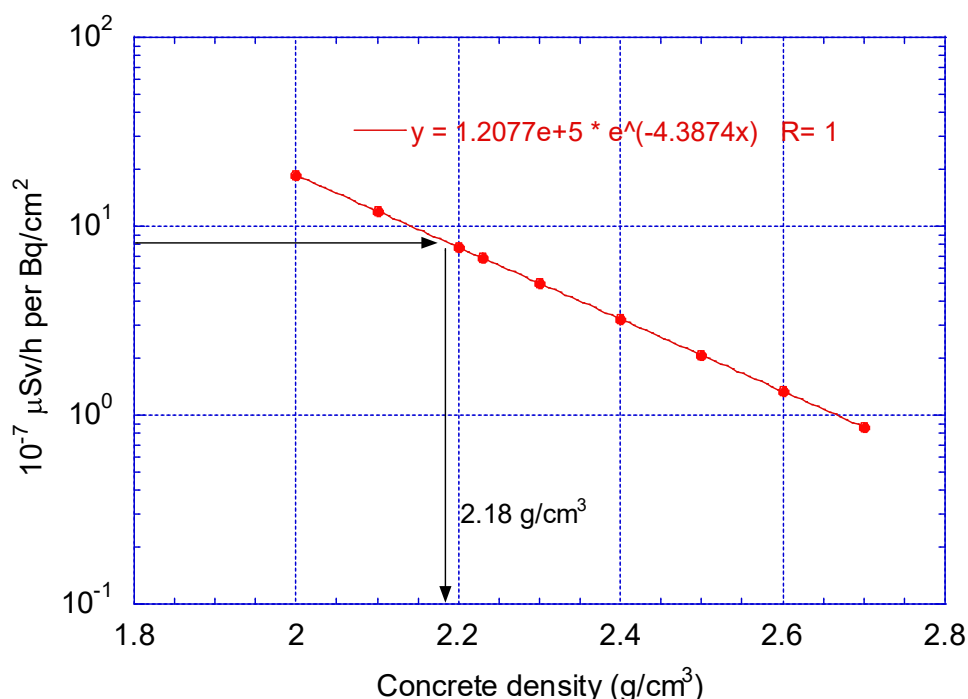
### 6-2 コンクリートの密度についての考察

床面から 150 cm 位置での周辺線量当量率及びコリメータ付き  $\gamma$  線線量計で測定した線量率を用いた推定では、鉄筋を含まない密度 2.1 g/cm<sup>3</sup> のコンクリートとして上段と中段の隙間の Cs-137 と Cs-134 による周辺線量当量率を求めている。鉄筋を含むとコンクリートの「実効的な密度」が大きくなるが、鉄筋はコンクリートに一樣に含まれていないので、平均の密度とは影響が異なる。「実効的な密度」を求めるために、QAD を用いてシールドプラグ中央位置で、「鉄筋を組み込んだ床面から 150 cm 位置での周辺線量当量率」と「コンクリートの密度を 2 g/cm<sup>3</sup> から 2.7 g/cm<sup>3</sup> に変えた一様なコンクリート場合の 150 cm 位置での周辺線量当量率」を計算した。比較した結果を第 4 表に示す。鉄筋の重量と残りのコンクリートの重量から求めた平均の密度である密度 2.23 g/cm<sup>3</sup> となる。平均の密度では、遮蔽効果を過大評価していることが分る。150 cm 位置での周辺線量当量率を実効コンクリー

ト密度の関数として第 15 図に示す。周辺線量当量率は、実効コンクリート密度により指数関数で減衰している。鉄筋モデルに相当する実効コンクリート密度は、 $2.18 \text{ g/cm}^3$ である。

第 4 表 鉄筋モデルと密度を変えたコンクリートモデルの比較 (QAD)

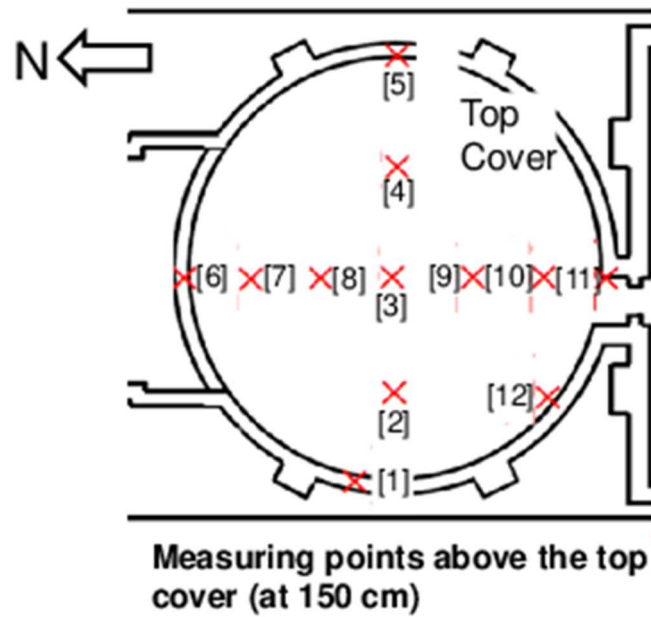
	鉄筋モデル	コンクリートモデル									
コンクリート密度	$2.1 \text{ g/cm}^3$	$2.0 \text{ g/cm}^3$	$2.1 \text{ g/cm}^3$	$2.2 \text{ g/cm}^3$	$2.3 \text{ g/cm}^3$	$2.7 \text{ g/cm}^3$	$2.5 \text{ g/cm}^3$	$2.6 \text{ g/cm}^3$	$2.7 \text{ g/cm}^3$	$2.8 \text{ g/cm}^3$	
鉄筋密度	$7.85 \text{ g/cm}^3$										
線量率( $\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ ) 【Cs137+4.4%Cs134】											
床上150 cm	8.37E-07	1.87E-06	1.20E-06	7.75E-07	6.80E-07	5.00E-07	3.23E-07	2.08E-07	1.34E-07	8.66E-08	



第 15 図 トップカバー下面の Cs-137 ( $1 \text{ Bq/cm}^2$ )と Cs-134 ( $0.044 \text{ Bq/cm}^2$ )による床から 150 cm での周辺線量当量

6-3 鉄筋を考慮した 150 cm 高さでの周辺線量当量率及びコリメータ付き  $\gamma$  線線量計を用いたトップカバー下面の Cs-137 汚染密度の再評価

6-2の結果から、コンクリートの密度を  $2.18 \text{ g/cm}^3$ として 150 cm 高さでの周辺線量当量率及びコリメータ付き  $\gamma$  線線量計を用いて推定したトップカバー下面の Cs-137 汚染密度を再評価した。150 cm 位置でのトップカバー下面の Cs-137  $1 \text{ Bq/cm}^2$ 当たりの周辺線量率は  $7.82\text{E-}07 \text{ } \mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ 、トップカバー下面の Cs-137  $1 \text{ Bq/cm}^2$ 当たりのコリメータ付き  $\gamma$  線線量計の線量率は  $1.67\text{E-}07 \text{ } \mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ となった。この換算係数を使って再評価した結果を第 16 図と 17 図に示す。150 cm 位置での測定結果から求めた汚染密度の平均値を用いると、トップカバー下面全体では、84 PBq に相当する。

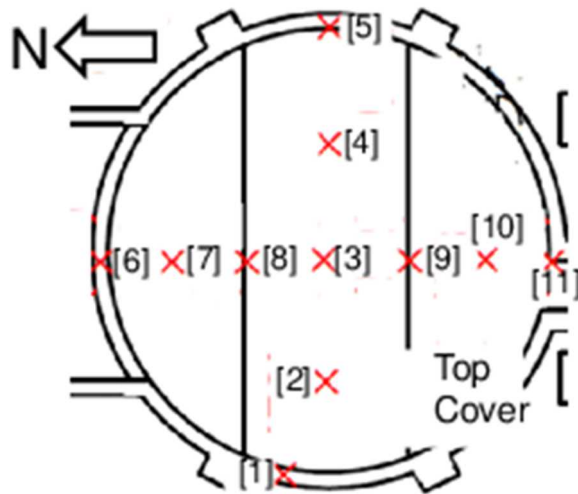


測定点	測定値 <sup>1)</sup>	トップカバー下部寄与	トップカバー下部汚染密度
	mSv/h		Bq/cm <sup>2</sup>
[1]	111	50	6.39E+10
[2]	138	77	9.85E+10
[3]	109	48	6.14E+10
[4]	79	18	2.30E+10
[5]	108	47	6.01E+10
[6]	118	57	7.29E+10
[7]	148	87	1.11E+11
[8]	129	68	8.70E+10
[9]	144	83	1.06E+11
[10]	130	69	8.82E+10
[11]	104	43	5.50E+10
[12]	114	53	6.78E+10
Average			7.46E+10

<sup>1)</sup>2019.2.28 東電測定

<sup>2)</sup>測定値-61 mSv/h (評価値)

第 16 図 150 cm 位置での周辺線量当量率を用いて推定したトップカバー下面の汚染密度



Measuring points above the top cover (γ-dosimeter with collimator)

測定点	γ線線量当量率 <sup>1)</sup>	トップカバー下部寄与 <sup>2)</sup>	トップカバー下部汚染密度
	(mSv/h)		(Bq/cm <sup>2</sup> )
[1]	6.4	5.5	3.3E+10
[2]	7.1	6.2	3.7E+10
[3]	12	11.1	6.7E+10
[4]	8.0	7.1	4.3E+10
[5]	1.0	0.14	8.4E+08
[6]	6.4	5.5	3.3E+10
[7]	12	11.1	6.7E+10
[8]	13	12.1	7.3E+10
[9]	15	14.1	8.5E+10
[10]	5	4.1	2.5E+10
[11]	3.7	2.8	1.7E+10
Average			4.4E+10
Average (外周部の[1], [5], [6], [11]除く)			5.5E+10

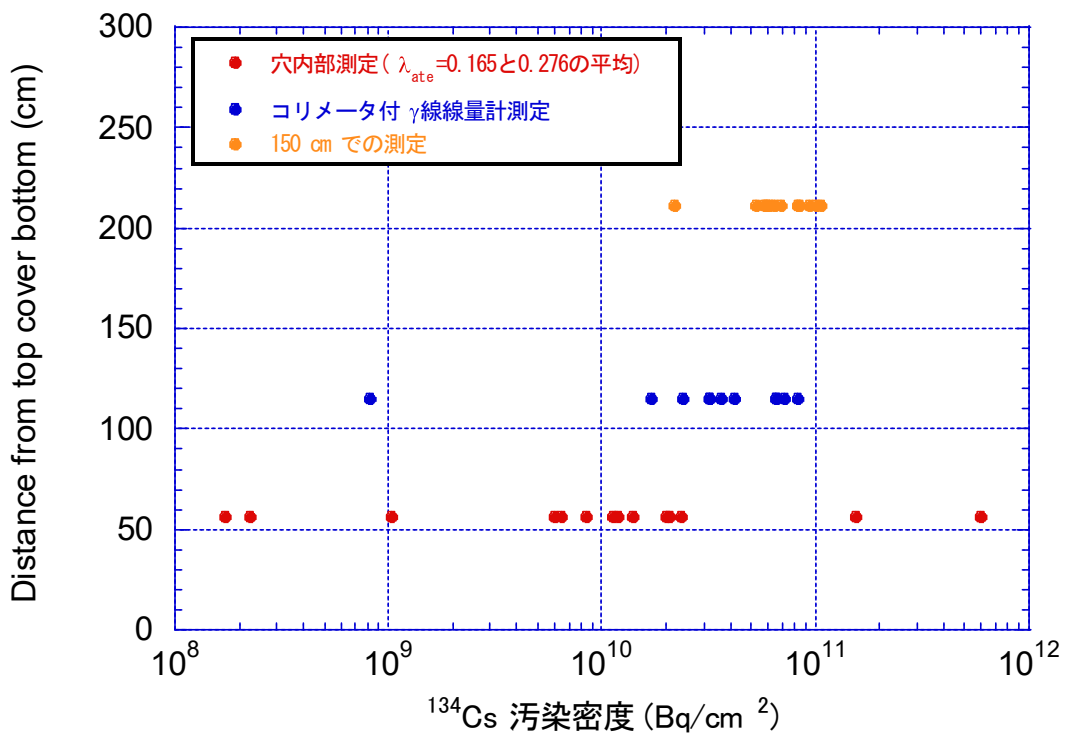
<sup>1)</sup>2019.2.28 東電測定

<sup>2)</sup>測定値 - 0.86 mSv/h (評価値)

第17図 コリメータ付きγ線線量計を用いて推定したトップカバー下面の汚染密度

## 7. 3種類の測定により推定したトップカバー下面の汚染密度の比較

手法の異なる3種類の測定から推定したトップカバー下面の汚染密度の比較を第18図に示す。図には、推定に使用した全ての測定点での推定結果を手法毎のトップカバー下面からの位置にプロットしている。穴内部の測定に基づく推定値は、床面汚染の穴内部での減衰係数 $\lambda_{ate}$ が0.165の場合と0.276の場合の平均値である。線源であるトップカバー下面からの距離が短くなるに伴い汚染密度のばらつきが増えていることが分る。この事を含め、3種類の推定結果の関係は合理的であると言える。



第18図 3種類の測定により推定したトップカバー下面の汚染密度の比較

## 8. まとめ

穿孔穴を使用して床汚染の影響をできるだけ少なくした穴内の測定を計画して、最初のIRID穴の測定を実施した時点では、トップカバー下面の汚染密度が場所によってなだらかに変化している程度と考えていた。

新たに穿孔した穴では穴内線量率分布がIRID穴とは大きく異なることから、今回の解析では、鉄筋の影響、室内汚染（天井・壁・床）を検討した結果を用いたところ、IRID穴と新穿孔穴での穴内線量率分布がトップカバー下面の汚染密度と床汚染密度の両方の影響を強く受けていたことがわかった。そのことを考慮した解析によりトップカバー下面の汚染密度が評価できた。トップカバー下面の汚染は、当初想定していたよりもばらつきの範



囲が大きいことがわかった。床表面の汚染密度についても穿孔により取り出されたコア表面の線量率、各穴周辺の東西南北の測定値から大きなばらつきが存在していることが推測できたが、詳細な分布を求めるにはデータが不足している。

トップカバー下面の汚染密度と床表面での周辺線量当量率の間には、大凡の関係があることが分かり、床表面のマッピングデータは、トップカバー下面に汚染密度の定量的推測に用いることには無理があるが、汚染分布の状況を推測するデータとして役立つことが分かった。

これらの理解が可能になったのは穴内測定を実施した成果と考えている。

### 【参考資料】

1. H. Hirayama, Y. Namito, A. F. Bielajew, S. J. Wilderman, W.R. Nelson, “The EGS5 Code System”, SLAC-R-730 (2005) and KEK Report 2005-8 (2005).
2. QAD-CGGP2 AND G33-GP2 : REVISED VERSION OF QAD-CGGP AND G33-GP2, JAERI-M 90-110, June 1990
3. JIS G 3112:2020 鉄筋コンクリート用棒鋼
4. D. K. Trubey, “New Gamma-Ray Buildup Factor Data for Point Kernel Calculations: ANS-643 Standard Reference Data”, NUREG/CR-5740 and ORNL/RSIC-49/R1 (1991).
5. 平山英夫、田中俊一、“光子遮蔽計算における1センチメートル線量当量”、JAERI-memo 01-013 (1989).

### 【別添資料】

1. 「2号機シールドプラグの IRID 穴と新穿孔穴の穴内線量率分布の比較」2022年6月13日
2. 「61 cm コンクリート下部の Cs 線源の寄与領域の検討」 2022年4月18日
3. 「2号機シールドプラグトップカバーの分割部隙間からの線量率寄与」 2022年4月7日
4. 「2号機オペフロ内壁汚染のシールドプラグ穴内線量率への寄与」 2022年5月26日
5. 「穴内と床上の測定における床上汚染位置による線量率寄与の違いについて」  
2022年7月8日
6. 「高汚染部からの距離による床上および穴内線量率分布の検討」 2022年6月24日
7. 「2号機シールドプラグ床上測定線量率分布図の改訂」 2022年4月7日
8. 「2号機シールドプラグトップカバー下部の汚染密度を評価する場合の鉄筋の影響について」 2022年4月10日

## 【別添資料】

1. 「2号機シールドプラグの IRID 穴と新穿孔穴の穴内線量率分布の比較」  
2022年6月13日 R1 林 克己、平山英夫
2. 「61 cm コンクリート下部の Cs 線源の寄与領域の検討」  
2022年4月18日 平山 英夫、林 克己
3. 「2号機シールドプラグトップカバーの分割部隙間からの線量率寄与」  
2022年4月7日 R6 林 克己、平山 英夫
4. 「2号機オペフロ内壁汚染のシールドプラグ穴内線量率への寄与」  
2022年5月26日 R6 林 克己、平山 英夫
5. 「穴内と床上の測定における床上汚染位置による線量率寄与の違いについて」  
2022年7月8日 R1 林 克己、平山 英夫
6. 「高汚染部からの距離による床上および穴内線量率分布の検討」  
2022年6月24日 R1 林 克己、平山英夫
7. 「2号機シールドプラグ床上測定線量率分布図の改訂」  
2022年4月7日 R3 林 克己、平山 英夫
8. 「2号機シールドプラグトップカバー下部の汚染密度を評価する場合の鉄筋の影響について」 2022年4月10日 R3 林 克己、平山英夫

## 2号機シールドプラグの IRID 穴と新穿孔穴の穴内線量率分布の比較

2022年6月13日 R1

林 克己、平山英夫

### 1. はじめに

2号機シールドプラグのトップカバー下面の Cs<sup>137</sup> 汚染密度については、2018年11月から2019年2月に東京電力ホールディングス（株）（以下東電と略す）が測定した床上1.5m高さでの線量率測定結果や床上30.5cm高さでのコリメータ付測定器による線量率測定結果を使用して、おおよその汚染密度が得られている<sup>1)</sup>。

床上1.5m高さでの測定には、室内の壁、天井、床の汚染からの線量率が寄与する。これらの線量率寄与が少ないと考えられるトップカバーに設けた穴の中での測定が計画され、2021年12月にATOMTEX社のPolimaster 1704Mを使用して、IRIDが穿孔した2個の穴（直径10cm、深さ7cm、以下IRID穴）と新たに穿孔した13個の穴（直径10cm、深さ10cm、以下新穿孔穴）の中の線量率分布が測定された。

測定された穴内線量率分布は、IRID穴2個でもその絶対値は4倍違ひまた分布形状も異なっていた。また新穿孔穴13個はIRIDの穴より絶対値は小さくIRID穴とは異なる分布形状であった。

これらの線量率測定値にはトップカバー下面のうち、直下の半径50cm程度のCs<sup>137</sup>汚染密度が反映されるため、絶対値はそれぞれの穴の位置の直下の汚染密度に依存する。しかし穴内の線量率分布が異なる原因は別にあり、これは厚さ61cmのトップカバー内の鉄筋の効果や、偏在した線源との位置関係などが考えられるが、この資料では鉄筋の効果について検討した。

鉄筋はトップカバーの上面から被りコンクリート10cmの下側にある上側鉄筋、およびトップカバーの下面から被りコンクリート10cmの上側にある上側鉄筋からなり、特に上側鉄筋が穴底に近い穴内の線量率分布の形状に影響すると考えられる。

また、IRID穴と新穿孔穴は深さが異なり、IRID穴では少なくとも鉄筋と穴底まで3cmのコンクリートが存在し鉄筋も遠くなるので、鉄筋の効果は異なることも想定される。

そこで、今回はIRID穴と新穿孔穴について鉄筋との位置関係でどのような分布になるかを検討した。

### 2. IRID 穴と新穿孔穴での穴内線量率分布の評価

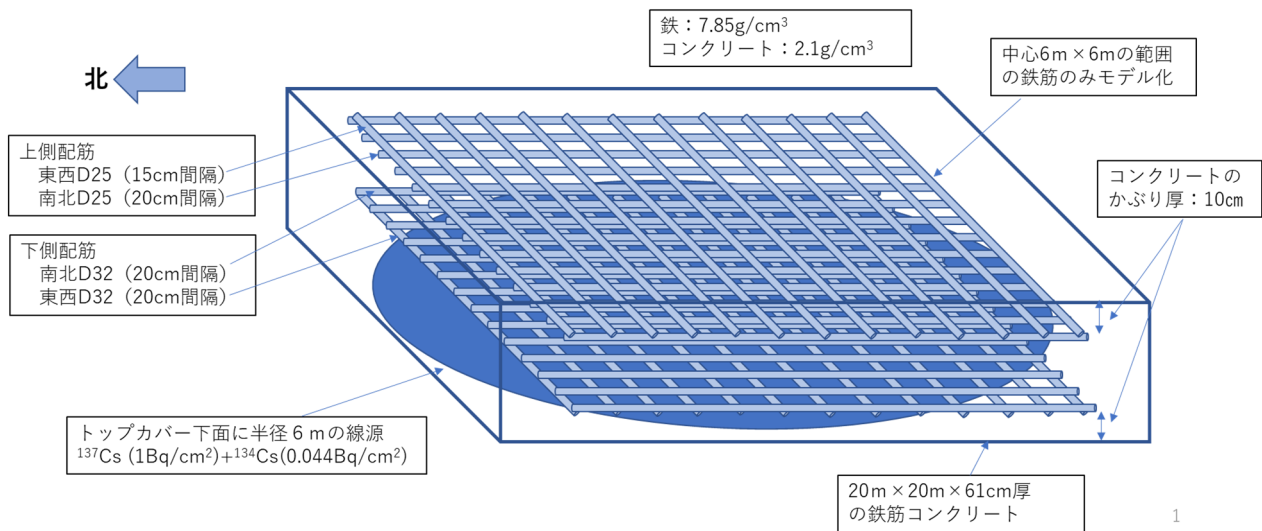
トップカバーの配筋図通りの位置に鉄筋が施工されていたとしても、オペレーションフロアの線量率は高いため人が近づいて穴の正確な位置を測ることはできない。また同様に配筋位置が配筋図どおりになっているかを確認するための非破壊鉄筋探査も線量率が高いためできない。そこで、鉄筋と穴との位置関係に関して5つのパターンについての線量率分布の形状と絶対値の範囲を評価することとした。

新穿孔穴の鉄筋の影響評価については既報<sup>2)</sup>にて報告しているが、今回は穴内計算点を詳細化するとともに、IRID穴についても同様の手法で評価した。また、この線量率分布に寄与する穴の円筒

面から穴に入ってくる成分と穴の底から穴に入ってくる成分に分けて評価し、IRID の穴と新たに穿孔した穴の線量率分布の形成にそれぞれがどのように寄与しているかを調べた。

### 3. 計算モデル

第1図にシールドプラグトップカバーの計算形状を示す。



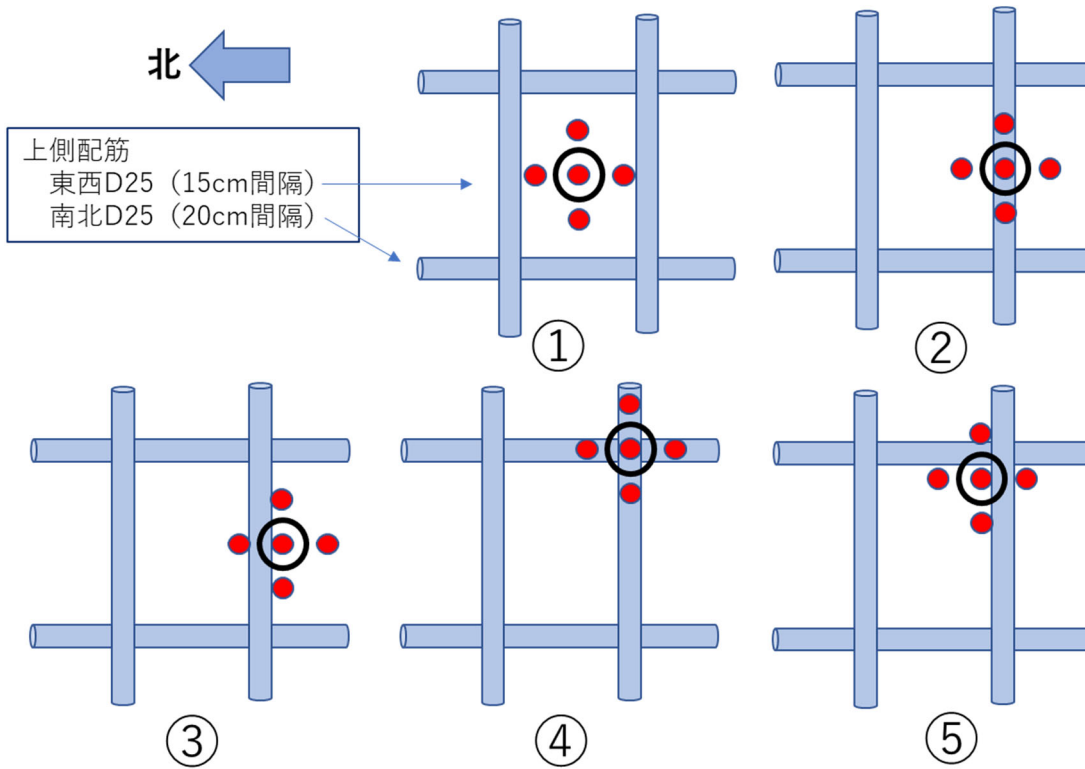
第1図 シールドプラグトップカバーの計算形状

穴の中については深さ方向とその真上及び東西南北の床上で測定が実施されている。

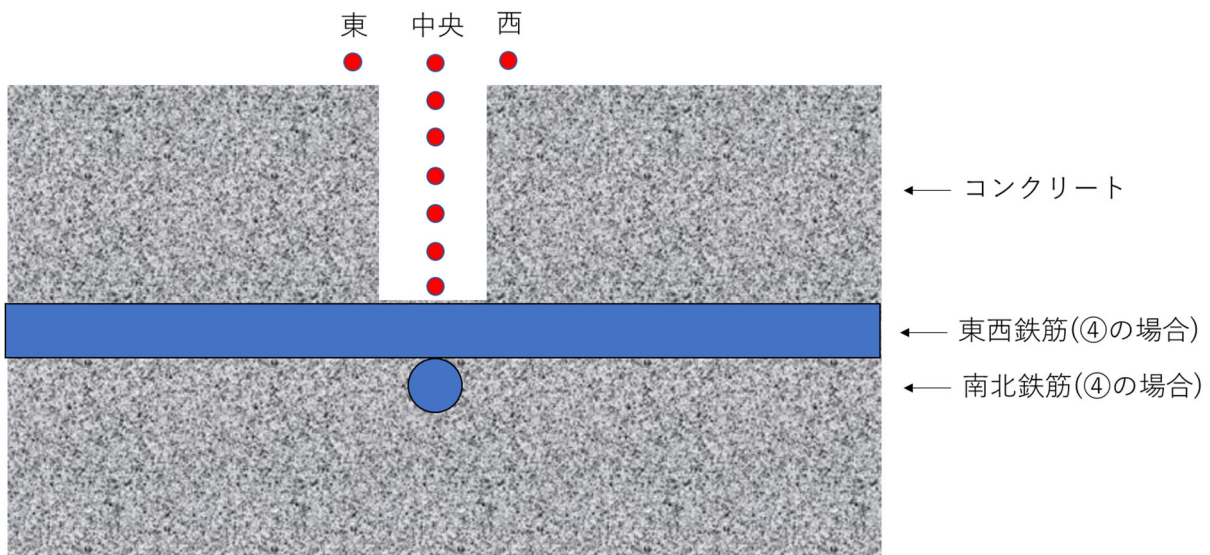
第2図に穴と鉄筋の位置関係のパターン①～⑤を示す。黒丸は穴（IRID 穴は 5cm φ × 7cm、新穿孔穴は 5cm φ × 10cm）の位置を示し、赤丸は計算点を示す。上部鉄筋の影響については以下を想定して5つのパターンを選定した。

- |            |                            |
|------------|----------------------------|
| ①上部鉄筋の間の中心 | すべての測定点に影響が少ないと考えられる       |
| ②東西鉄筋の真上   | 穴の中と東西の床上に影響があると考えられる      |
| ③東西鉄筋の右側   | 穴の中と東西北の床上に少し影響があると考えられる   |
| ④東西南北鉄筋の真上 | 穴の中と東西南北の床上に大きく影響があると考えられる |
| ⑤東西南北鉄筋の内側 | 穴の中と東西南北の床上に少し影響があると考えられる  |

第3図に穴の中の計算点を示す。



第2図 穴と鉄筋の位置関係の5つのパターン



第3図 穴内および床上の計算点

7

トップカバーの下面に半径 6 m の線源 ( $Cs^{137}$  (1Bq/cm<sup>2</sup>) +  $Cs^{134}$  (0.044Bq/cm<sup>2</sup>)) を置いたときの、第 2 図に示す①～⑤のパターンでのそれぞれ穴中央と東西南北の床上 1.5cm、および第 3 図に示す穴内深さ 0.5cm から穴の底まで 0.5cm 毎の線量当量率を QAD-CGGP2R<sup>3)</sup> を使用して求めた。

第 1 表に IRID 穴の真上及び東西南北の床上と穴の中深さ方向線量率計算値を示す。第 2 表に新穿孔穴の真上及び東西南北の床上と穴の中深さ方向線量率計算値を示す。

これらの線量率分布については、穴の壁から穴内に入ってくる成分と穴の底から穴内に入ってくる成分それぞれの線量率分布も示した。

なお、鉄筋の無いモデルとの比較については参考資料<sup>2)</sup>に記載したので割愛する。

第 1 表の IRID 穴の穴の壁からの寄与に注目すると、穴の底から 3cm あたりから穴内線量率への実質的な寄与が始まり穴の底から 6.5cm まで寄与は大きくなっていく。鉄筋と穴の位置関係の①から⑤でほとんど同じ形となる。少しだけ異なるのは鉄筋の影響と考えられる。

IRID 穴の穴の底からの寄与に注目すると、穴の直下に鉄筋の無い①③⑤では穴の底から 2cm 程度はほぼ減衰は無く、穴の底から 2.5cm 以降から減衰が始まっている。穴の直下に鉄筋のある②④では穴の底から 2.5cm 程度まで増加し、その後穴の出口に向かって減衰している。これは穴の底では鉄筋による遮蔽効果が効いているが 2.5cm 程度からはその効果も緩和され①③⑤と同じ減衰が始まると理解できる。ただし穴出口での絶対値は低めとなる。

また IRID 穴の穴出口で穴の壁からの寄与と穴の底からの寄与はほぼ同じ程度となっていることがわかる。IRID 穴の深さは 7cm であるので、この穴の壁からの寄与と穴の底からの寄与の大小関係が、底から 2cm から 3.5cm の間で入れ替わることにより、穴の直下に鉄筋の無い①③⑤では合計した全体の線量率分布が平坦になっていることが判る。穴の直下に鉄筋のある②④では合計線量率分布は底から 2cm 程度までの増加が見えている。

第 2 表の新穿孔穴の穴の壁からの寄与に注目すると、穴の底から 3cm あたりから穴内線量率への実質的な寄与が始まり穴の底から 6.5cm まで寄与は大きくなっていき、その後は平坦になっている。新穿孔穴は IRID 穴より 3cm 深い、穴の底からの分布の形状はほぼ同じである。なお新穿孔穴の穴底位置が IRID 穴の穴底位置より 3cm 分トップカバー下面の汚染に近いので、穴の壁からの寄与の絶対値はその分高くなっている。

新穿孔穴の穴の底からの寄与に注目すると、穴の直下に鉄筋の無い①③⑤では穴の底から 2cm 程度はほぼ減衰は無く、穴の底から 2.5cm 以降から減衰が始まっている。穴の直下に鉄筋のある②④では穴の底から 2.5cm 程度まで増加し、その後穴の出口に向かって減衰している。これは穴の底では鉄筋による遮蔽効果が効いているが 2.5cm 程度からはその効果も緩和され①③⑤と同じ減衰が始まると理解できる。ただし穴出口での絶対値は低めとなる。新穿孔穴は IRID 穴より 3cm 深い、穴の底からの分布の形状はほぼ同じである。なお新穿孔穴の穴底位置が IRID 穴の穴底位置より 3cm 分トップカバー下面の汚染に近いので、穴の底からの寄与の絶対値はその分高くなっている。

また新穿孔穴の穴出口で穴の壁からの寄与は穴の底からの寄与のほぼ 2 倍程度となっていることがわかる。新穿孔穴の深さは 10cm であるので、穴出口では穴の壁からの寄与は一定になっているのに対し、

穴の底からの寄与は穴出口に向かって減衰が続いていることがこの結果になったと考えられる。

合計線量率の穴内分布をみると、穴の壁からの寄与が穴の底から 6.5cm で一定になるのに対して、穴の底からの寄与は減衰が続くので、IRID 穴の分布のように平坦ではなく、新穿孔穴では全体的に穴の出口に向かって減衰が続く形となる。また穴の直下に鉄筋のある②④では合計線量率分布は底から 4cm 程度までの増加が見えている。

IRID 穴と新穿孔穴での穴壁と穴底からの寄与及び合計の線量率分布を、鉄筋と穴の位置関係①～⑤についてそれぞれ第 4 図～第 8 図に示す。

#### 4. まとめ

IRID 穴と新穿孔穴の穴内線量率分布について、その分布形状の元となる穴の壁と穴の底からの成分に分けて評価した。これにより、IRID 穴と新穿孔穴の穴内線量率分布の形状が変わるのは穴の深さの違いが原因の一つであることがみえてきた。

この検討に使用した QAD-CGGP2R は点減衰核積分コードであり、無限媒質中のビルドアップ係数を使っているため、例えばコンクリートから空気に出たあとの線量率は多くて 2 割程度高めに出ること、また媒質が変わった直後、例えば鉄筋からコンクリートに入った直後はコンクリートのビルドアップ係数を使うと今回の体系では倍程度線量率を高目に出すことが、これまでの EGS5<sup>4)</sup> との比較でわかっている。

また、穴内の分布に関してはコンクリートで散乱して鉄筋をまわりこんでくる挙動などは QAD-CGGP2R では計算できず、EGS5 の計算結果と穴内分布形状に差異が見られている。さらに、穴の底から来るガンマ線の角度分布は本来広がっているはずなのに QAD-CGGP2R では線源から直線状に穴の底に来たとして計算するので主に真上の成分だけの角度分布になり、そのため穴の底からの成分の減衰は EGS5 より傾きが緩やかになると思われる。

従って今回の検討は大まかな分布を掴むという位置づけであり、現在進行している EGS5 の解析結果で入れ替える予定である。その後オペフロの壁・床・天井からの穴内への線量率寄与を考慮して測定値との比較検討を進めたい。

#### 5. 参考資料

- 1) 「2号機シールドプラグの上段と中段の隙間に沈着している Cs-137 放射能の推定」  
2022年4月27日 特命チーム
- 2) 「2号機シールドプラグトップカバー下面の汚染密度を評価する場合の鉄筋の影響について」  
2022年4月10日 R3 林 克己、平山英夫
- 3) QAD-CGGP2 AND G33-GP2 : REVISED VERSION OF QAD-CGGP AND G33-GP2,  
JAERI-M 90-110, June 1990
- 4) H. Hirayama, Y. Namito, A. F. Bielajew, S. J. Wilderman and W. R. Nelson,  
“The EGS5 Code System”, SLAC-R-730 (2005) and KEK Report 2005-8 (2005)

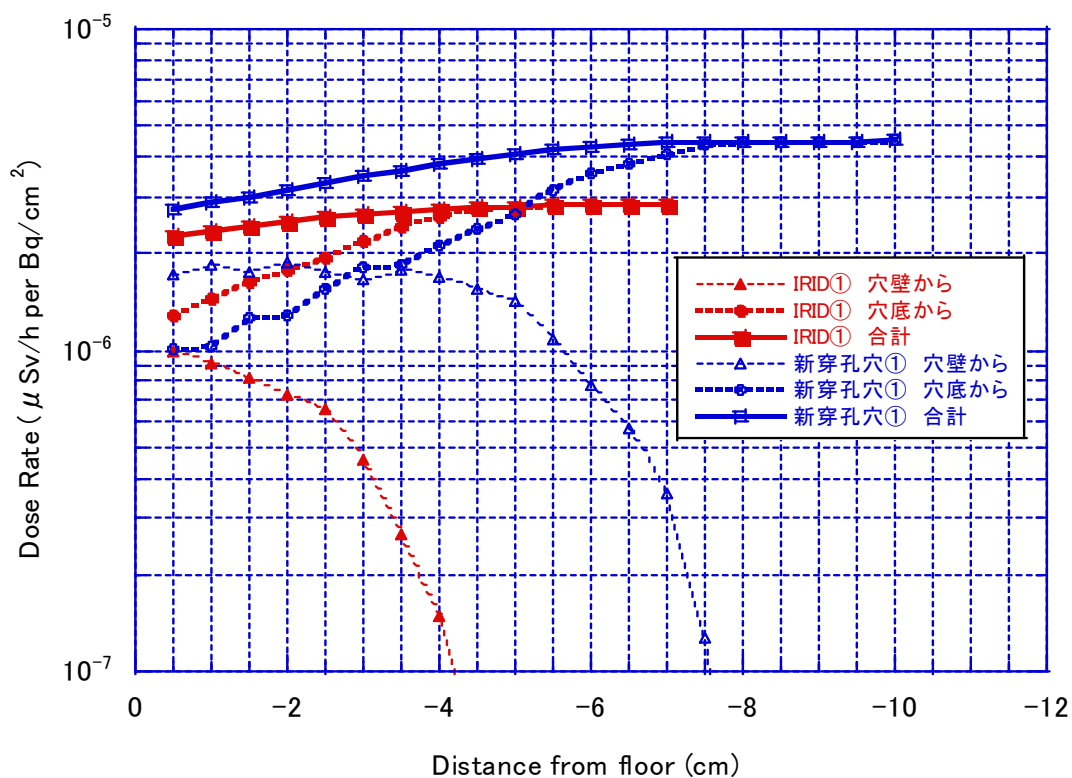
第1表 穴の真上及び東西南北の床上と穴の中深さ方向線量率計算値 (IRID 穴)

計算点位置			線量率( $\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ ) 【Cs137+4.4%Cs134】														
No.	床位置	床上高さ	IRID穴①			IRID穴②			IRID穴③			IRID穴④			IRID穴⑤		
			穴壁から	穴底から	合計	穴壁から	穴底から	合計	穴壁から	穴底から	合計	穴壁から	穴底から	合計	穴壁から	穴底から	合計
1	穿孔穴の中心	1.5	1.134E-06	7.770E-07	1.911E-06	1.062E-06	6.940E-07	1.756E-06	1.045E-06	7.010E-07	1.746E-06	8.971E-07	7.359E-07	1.633E-06	9.766E-07	6.314E-07	1.608E-06
2	穿孔穴の東側	1.5	7.930E-07	1.807E-07	9.737E-07	7.615E-07	1.454E-07	9.069E-07	7.464E-07	1.543E-07	9.007E-07	7.671E-07	1.260E-07	8.931E-07	7.258E-07	1.610E-07	8.868E-07
3	穿孔穴の南側	1.5	7.750E-07	1.803E-07	9.553E-07	8.373E-07	1.402E-07	9.775E-07	8.401E-07	1.533E-07	9.934E-07	8.003E-07	1.193E-07	9.196E-07	7.181E-07	1.545E-07	8.726E-07
4	穿孔穴の西側	1.5	7.930E-07	1.807E-07	9.737E-07	7.615E-07	1.454E-07	9.069E-07	7.464E-07	1.543E-07	9.007E-07	7.693E-07	1.220E-07	8.913E-07	7.815E-07	1.272E-07	9.087E-07
5	穿孔穴の北側	1.5	7.750E-07	1.803E-07	9.553E-07	8.266E-07	1.379E-07	9.645E-07	7.791E-07	1.895E-07	9.686E-07	7.897E-07	1.159E-07	9.056E-07	7.882E-07	1.291E-07	9.173E-07
6	穿孔穴内部	-0.5	9.961E-07	1.288E-06	2.284E-06	1.021E-06	1.018E-06	2.039E-06	9.470E-07	1.103E-06	2.050E-06	9.554E-07	9.136E-07	1.869E-06	9.243E-07	9.357E-07	1.860E-06
7		-1.0	9.128E-07	1.456E-06	2.369E-06	9.558E-07	1.146E-06	2.102E-06	9.027E-07	1.216E-06	2.119E-06	8.910E-07	1.031E-06	1.922E-06	8.758E-07	1.040E-06	1.916E-06
8		-1.5	8.184E-07	1.629E-06	2.447E-06	8.755E-07	1.284E-06	2.159E-06	8.372E-07	1.348E-06	2.185E-06	8.213E-07	1.148E-06	1.969E-06	8.025E-07	1.170E-06	1.972E-06
9		-2.0	7.296E-07	1.793E-06	2.523E-06	7.700E-07	1.441E-06	2.211E-06	7.416E-07	1.512E-06	2.254E-06	7.452E-07	1.264E-06	2.009E-06	7.062E-07	1.311E-06	2.017E-06
10		-2.5	6.534E-07	1.945E-06	2.598E-06	6.429E-07	1.609E-06	2.252E-06	6.291E-07	1.691E-06	2.320E-06	6.477E-07	1.389E-06	2.037E-06	6.015E-07	1.456E-06	2.057E-06
11		-3.0	4.569E-07	2.208E-06	2.665E-06	4.740E-07	1.804E-06	2.278E-06	4.755E-07	1.902E-06	2.377E-06	5.046E-07	1.541E-06	2.046E-06	4.667E-07	1.625E-06	2.092E-06
12		-3.5	2.684E-07	2.451E-06	2.719E-06	3.228E-07	1.962E-06	2.285E-06	3.087E-07	2.110E-06	2.419E-06	3.420E-07	1.693E-06	2.035E-06	3.196E-07	1.794E-06	2.114E-06
13		-4.0	1.486E-07	2.610E-06	2.759E-06	1.707E-07	2.109E-06	2.280E-06	1.653E-07	2.280E-06	2.445E-06	1.863E-07	1.826E-06	2.012E-06	1.812E-07	1.951E-06	2.132E-06
14		-4.5	5.575E-08	2.736E-06	2.792E-06	6.621E-08	2.191E-06	2.257E-06	6.602E-08	2.393E-06	2.459E-06	7.471E-08	1.894E-06	1.969E-06	7.211E-08	2.071E-06	2.143E-06
15		-5.0	1.053E-08	2.803E-06	2.814E-06	1.318E-08	2.206E-06	2.219E-06	1.339E-08	2.462E-06	2.475E-06	1.674E-08	1.895E-06	1.912E-06	1.581E-08	2.130E-06	2.146E-06
16		-5.5	6.127E-10	2.829E-06	2.830E-06	8.659E-10	2.169E-06	2.170E-06	8.189E-10	2.489E-06	2.490E-06	1.061E-09	1.841E-06	1.842E-06	1.019E-09	2.144E-06	2.145E-06
17		-6.0	2.102E-12	2.843E-06	2.843E-06	2.484E-12	2.114E-06	2.114E-06	2.446E-12	2.508E-06	2.508E-06	2.017E-12	1.759E-06	1.759E-06	2.073E-12	2.150E-06	2.150E-06
18		-6.5	2.744E-19	2.851E-06	2.851E-06	2.357E-19	2.042E-06	2.042E-06	2.341E-19	2.532E-06	2.532E-06	2.453E-19	1.669E-06	1.669E-06	2.142E-19	2.168E-06	2.168E-06
19		-7.0	4.888E-30	2.856E-06	2.856E-06	4.888E-30	1.953E-06	1.953E-06	4.888E-30	2.567E-06	2.567E-06	4.887E-30	1.569E-06	1.569E-06	4.888E-30	2.200E-06	2.200E-06

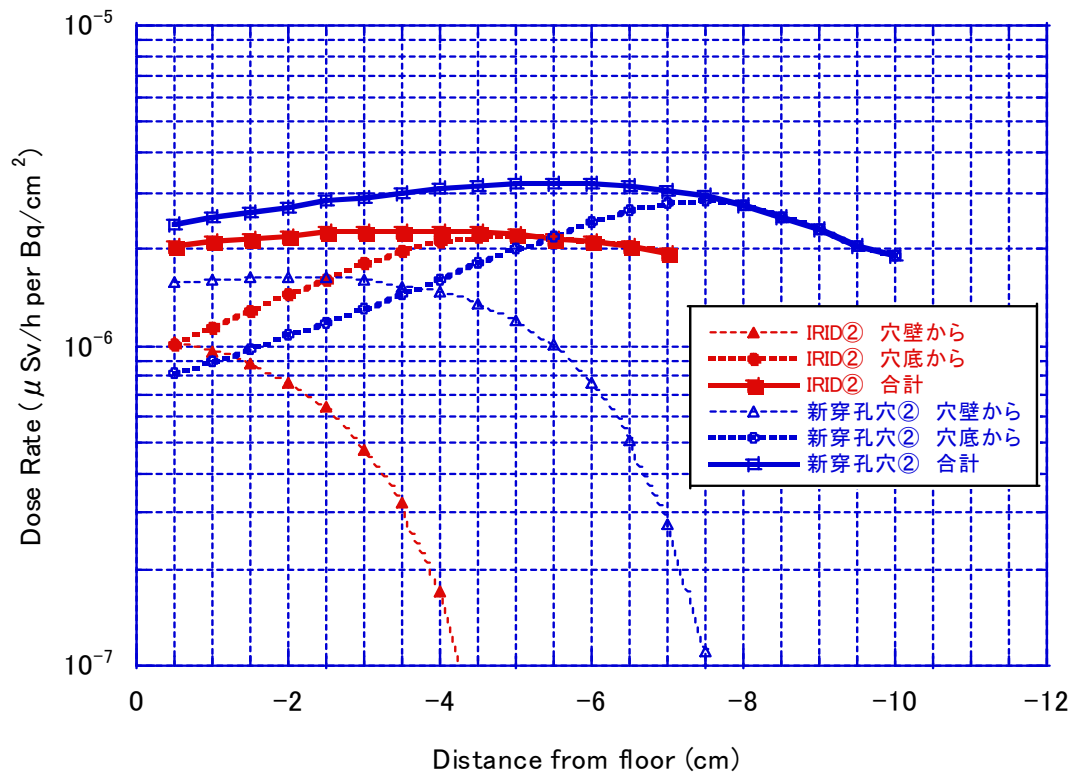


第2表 穴の真上及び東西南北の床上と穴の中深さ方向線量率計算値（新穿孔穴）

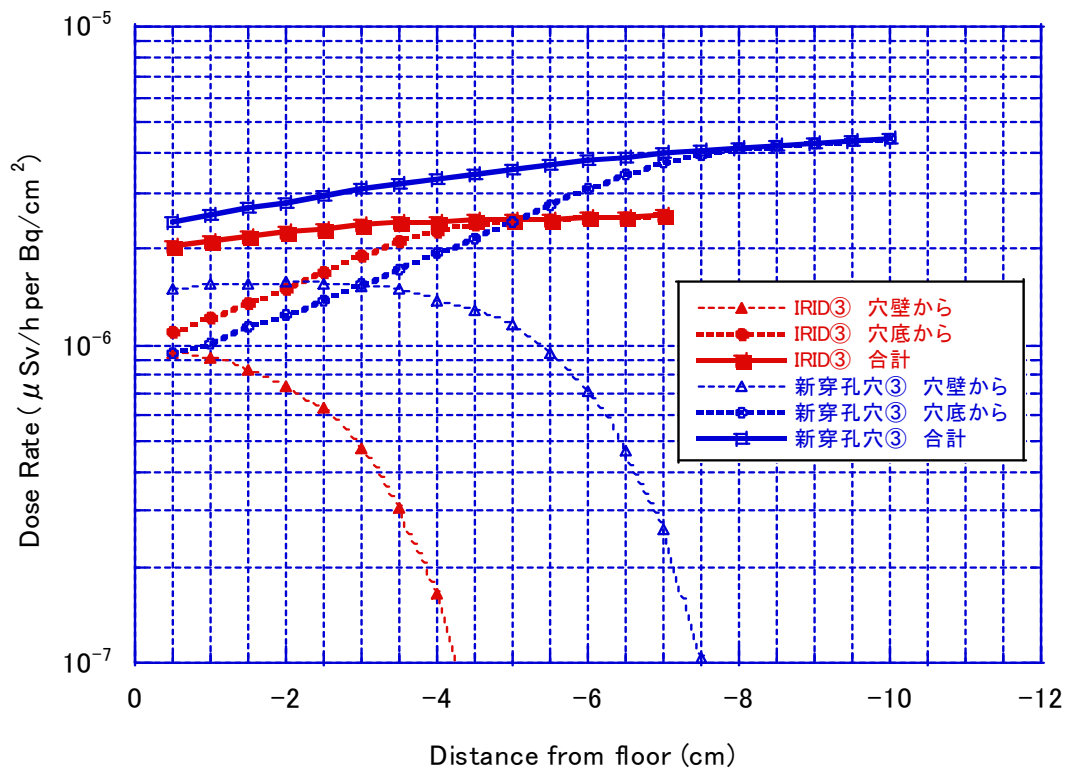
計算点位置			線量率( $\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ ) 【Cs137+4.4%Cs134】														
No.	床位置	床上高さ	新穿孔穴①			新穿孔穴②			新穿孔穴③			新穿孔穴④			新穿孔穴⑤		
			穴壁から	穴底から	合計	穴壁から	穴底から	合計	穴壁から	穴底から	合計	穴壁から	穴底から	合計	穴壁から	穴底から	合計
1	穿孔穴の中心	1.5	1.409E-06	8.160E-07	2.225E-06	1.405E-06	6.050E-07	2.010E-06	1.321E-06	6.990E-07	2.020E-06	1.405E-06	4.300E-07	1.835E-06	1.272E-06	5.740E-07	1.846E-06
2	穿孔穴の東側	1.5	8.448E-07	2.172E-07	1.062E-06	8.203E-07	1.549E-07	9.752E-07	7.923E-07	1.848E-07	9.771E-07	8.309E-07	1.172E-07	9.481E-07	7.760E-07	1.894E-07	9.654E-07
3	穿孔穴の南側	1.5	8.200E-07	2.240E-07	1.044E-06	8.864E-07	1.586E-07	1.045E-06	8.694E-07	1.996E-07	1.069E-06	8.604E-07	1.121E-07	9.725E-07	7.811E-07	1.632E-07	9.443E-07
4	穿孔穴の西側	1.5	8.448E-07	2.172E-07	1.062E-06	8.203E-07	1.549E-07	9.752E-07	7.923E-07	1.848E-07	9.771E-07	8.313E-07	1.142E-07	9.455E-07	8.142E-07	1.567E-07	9.709E-07
5	穿孔穴の北側	1.5	8.200E-07	2.240E-07	1.044E-06	8.713E-07	1.597E-07	1.031E-06	8.417E-07	2.153E-07	1.057E-06	8.432E-07	1.137E-07	9.569E-07	8.216E-07	1.584E-07	9.800E-07
6	穿孔穴内部	-0.5	1.719E-06	1.014E-06	2.733E-06	1.593E-06	8.140E-07	2.407E-06	1.508E-06	9.420E-07	2.450E-06	1.563E-06	6.140E-07	2.177E-06	1.394E-06	8.140E-07	2.208E-06
7		-1.0	1.842E-06	1.029E-06	2.871E-06	1.619E-06	8.900E-07	2.509E-06	1.550E-06	1.014E-06	2.564E-06	1.569E-06	6.990E-07	2.268E-06	1.407E-06	8.940E-07	2.301E-06
8		-1.5	1.748E-06	1.259E-06	3.007E-06	1.638E-06	9.750E-07	2.613E-06	1.541E-06	1.140E-06	2.681E-06	1.584E-06	7.740E-07	2.358E-06	1.424E-06	9.760E-07	2.400E-06
9		-2.0	1.877E-06	1.279E-06	3.156E-06	1.643E-06	1.074E-06	2.717E-06	1.576E-06	1.234E-06	2.810E-06	1.579E-06	8.680E-07	2.447E-06	1.419E-06	1.075E-06	2.494E-06
10		-2.5	1.767E-06	1.543E-06	3.310E-06	1.649E-06	1.170E-06	2.819E-06	1.559E-06	1.385E-06	2.944E-06	1.563E-06	9.650E-07	2.528E-06	1.397E-06	1.195E-06	2.592E-06
11		-3.0	1.663E-06	1.809E-06	3.472E-06	1.616E-06	1.299E-06	2.915E-06	1.538E-06	1.542E-06	3.080E-06	1.509E-06	1.086E-06	2.595E-06	1.378E-06	1.315E-06	2.693E-06
12		-3.5	1.798E-06	1.832E-06	3.630E-06	1.539E-06	1.461E-06	3.000E-06	1.491E-06	1.722E-06	3.213E-06	1.445E-06	1.202E-06	2.647E-06	1.312E-06	1.478E-06	2.790E-06
13		-4.0	1.681E-06	2.104E-06	3.785E-06	1.472E-06	1.610E-06	3.082E-06	1.383E-06	1.955E-06	3.338E-06	1.354E-06	1.342E-06	2.696E-06	1.240E-06	1.652E-06	2.892E-06
14		-4.5	1.559E-06	2.381E-06	3.940E-06	1.349E-06	1.799E-06	3.148E-06	1.290E-06	2.165E-06	3.455E-06	1.233E-06	1.492E-06	2.725E-06	1.148E-06	1.847E-06	2.995E-06
15		-5.0	1.428E-06	2.654E-06	4.082E-06	1.192E-06	2.001E-06	3.193E-06	1.156E-06	2.423E-06	3.579E-06	1.071E-06	1.664E-06	2.735E-06	1.017E-06	2.073E-06	3.090E-06
16		-5.5	1.083E-06	3.125E-06	4.208E-06	1.007E-06	2.208E-06	3.215E-06	9.452E-07	2.749E-06	3.694E-06	9.209E-07	1.798E-06	2.719E-06	8.495E-07	2.324E-06	3.173E-06
17		-6.0	7.782E-07	3.537E-06	4.315E-06	7.723E-07	2.439E-06	3.211E-06	7.095E-07	3.090E-06	3.799E-06	7.161E-07	1.955E-06	2.671E-06	6.697E-07	2.581E-06	3.251E-06
18		-6.5	5.681E-07	3.824E-06	4.392E-06	5.082E-07	2.656E-06	3.164E-06	4.624E-07	3.432E-06	3.894E-06	4.908E-07	2.102E-06	2.593E-06	4.386E-07	2.894E-06	3.333E-06
19		-7.0	3.560E-07	4.090E-06	4.446E-06	2.752E-07	2.795E-06	3.070E-06	2.621E-07	3.724E-06	3.986E-06	2.614E-07	2.217E-06	2.478E-06	2.401E-07	3.178E-06	3.418E-06
20		-7.5	1.276E-07	4.346E-06	4.474E-06	1.101E-07	2.817E-06	2.927E-06	1.038E-07	3.959E-06	4.063E-06	9.865E-08	2.221E-06	2.320E-06	8.997E-08	3.413E-06	3.503E-06
21		-8.0	2.276E-08	4.460E-06	4.483E-06	1.942E-08	2.728E-06	2.747E-06	1.657E-08	4.124E-06	4.141E-06	2.083E-08	2.100E-06	2.121E-06	1.838E-08	3.571E-06	3.589E-06
22		-8.5	7.860E-10	4.486E-06	4.487E-06	8.155E-10	2.538E-06	2.539E-06	6.650E-10	4.217E-06	4.218E-06	1.041E-09	1.898E-06	1.899E-06	8.895E-10	3.680E-06	3.681E-06
23		-9.0	8.826E-13	4.482E-06	4.482E-06	9.181E-13	2.299E-06	2.299E-06	1.048E-12	4.284E-06	4.284E-06	1.260E-12	1.658E-06	1.658E-06	1.160E-12	3.783E-06	3.783E-06
24		-9.5	6.760E-22	4.483E-06	4.483E-06	5.009E-22	2.048E-06	2.048E-06	4.654E-22	4.358E-06	4.358E-06	6.509E-22	1.409E-06	1.409E-06	5.220E-22	3.891E-06	3.891E-06
25		-10.0	4.998E-30	4.490E-06	4.490E-06	4.998E-30	1.910E-06	1.910E-06	4.998E-30	4.432E-06	4.432E-06	4.998E-30	1.237E-06	1.237E-06	4.998E-30	3.996E-06	3.996E-06



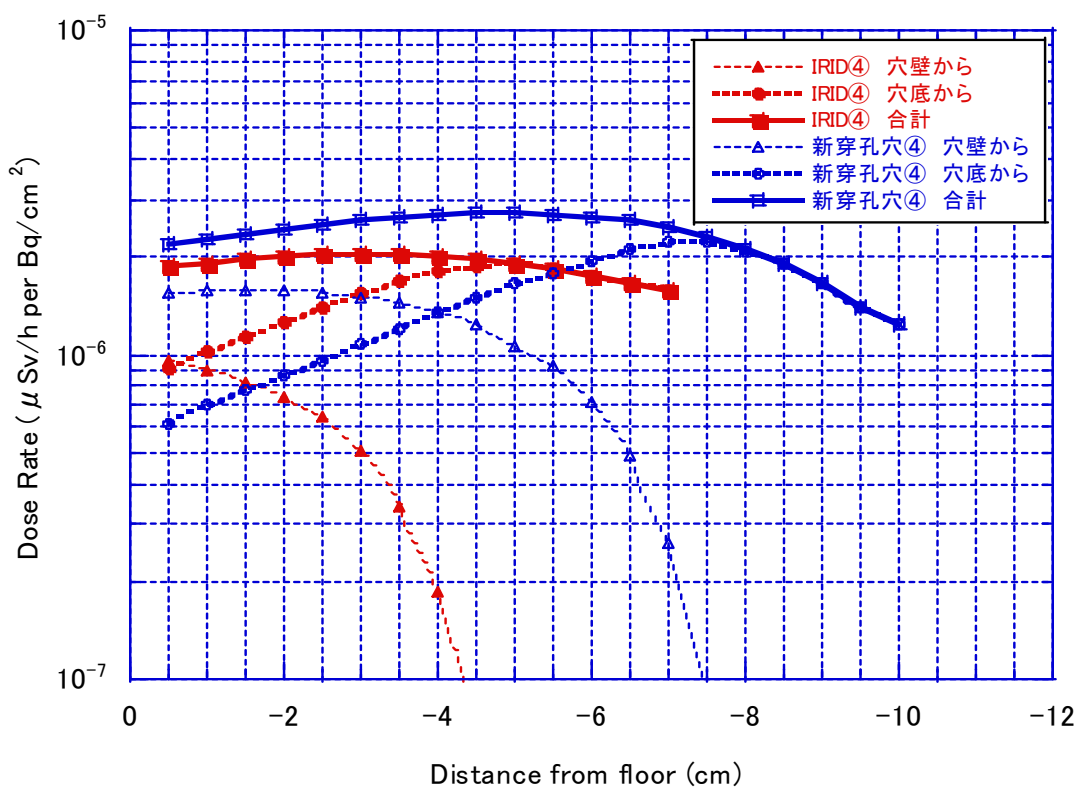
第4図 ①でのIRID穴と新穿孔穴の穴壁と穴底からの寄与と合計の線量率分布



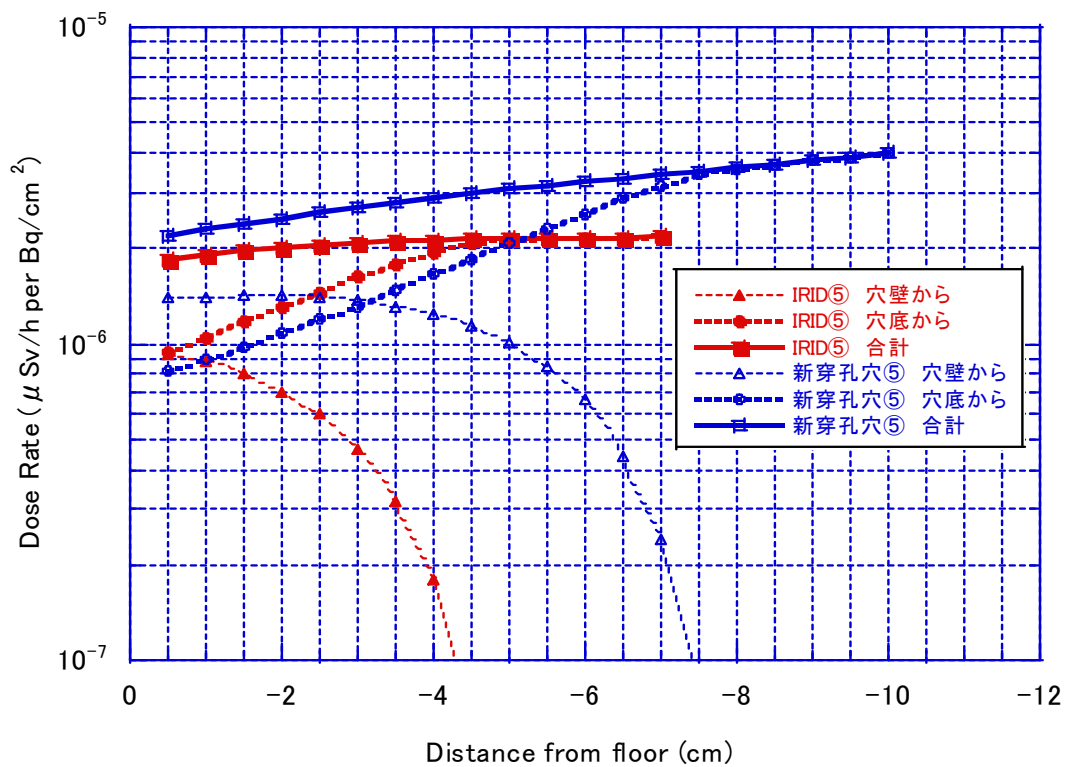
第5図 ②でのIRID穴と新穿孔穴の穴壁と穴底からの寄与と合計の線量率分布



第 6 図 ③での IRID 穴と新穿孔穴の穴壁と穴底からの寄与と合計の線量率分布



第 7 図 ④での IRID 穴と新穿孔穴の穴壁と穴底からの寄与と合計の線量率分布



第8図 ⑤での IRID 穴と新穿孔穴の穴壁と穴底からの寄与と合計の線量率分布

## 61 cm コンクリート下部の Cs 線源の寄与領域の検討

2022 年4月 18 日

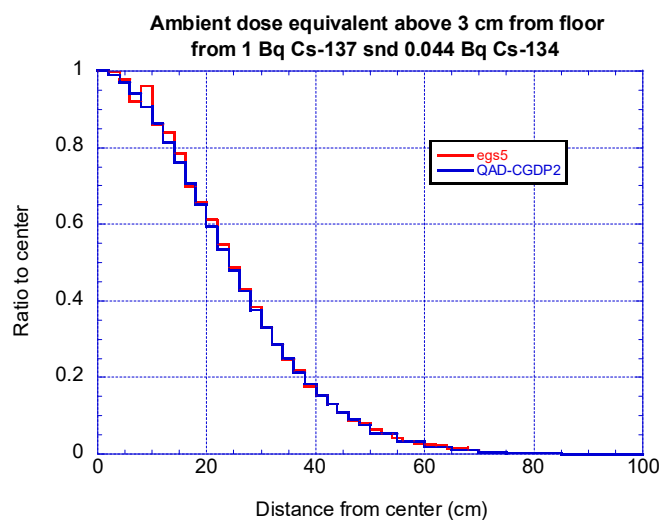
平山 英夫、林 克己

### 1. はじめに

シールドプラグ表面及び新たに穿孔した穴内部での周辺線量当量率の測定から、シールドプラグの上段と中段の隙間に沈着している Cs-137 と Cs-134 の汚染密度の分布が大きい可能性があると考えられる。実際の汚染分布が不明な状態では測定位置の周辺線量当量率の計算は、寄与する領域の汚染密度が一様であるという仮定で行うことになる。計算結果と測定結果を比較検討し、上段と中段の隙間の汚染密度を推定する上では、61 cm のコンクリート下部にある Cs-137 又は Cs-134 から放出された  $\gamma$  線による周辺線量当量率が、線源位置との距離によりどのように変化するかを把握することが必要である。以下では、鉄筋を含まない床表面 3 cm (穴の無い場合) で egs5<sup>1)</sup> と QAD-CGCP2<sup>2)</sup> の比較により位置による相対的な影響が同じであることを確認したうえで、鉄筋を含む複雑な形状での位置による影響については、QAD-CGCP2 を用いて検討した。

### 2. egs5 と QAD-CGCP2 の比較

61 cm のコンクリートの下に、1 Bq の Cs-137 と 0.044 Bq の Cs-134 が存在する時、コンクリート表面から 3 cm の位置で線源位置を中心軸として、中心軸からの距離の変化に伴い周辺線量当量率がどのように変化するかを両コードで計算した。最も周辺線量当量率が高い中心軸上の周辺線量当量率との比での比較を第 1 図に示す。egs5 の計算では、「面等方線源と単位球検出器形状を点等方線源と面検出器に変換する手法<sup>3)</sup>」と衝突確立法を適用した。両者の分布はよく一致しており、QAD-CGCP2 で検討できることが確認できた。

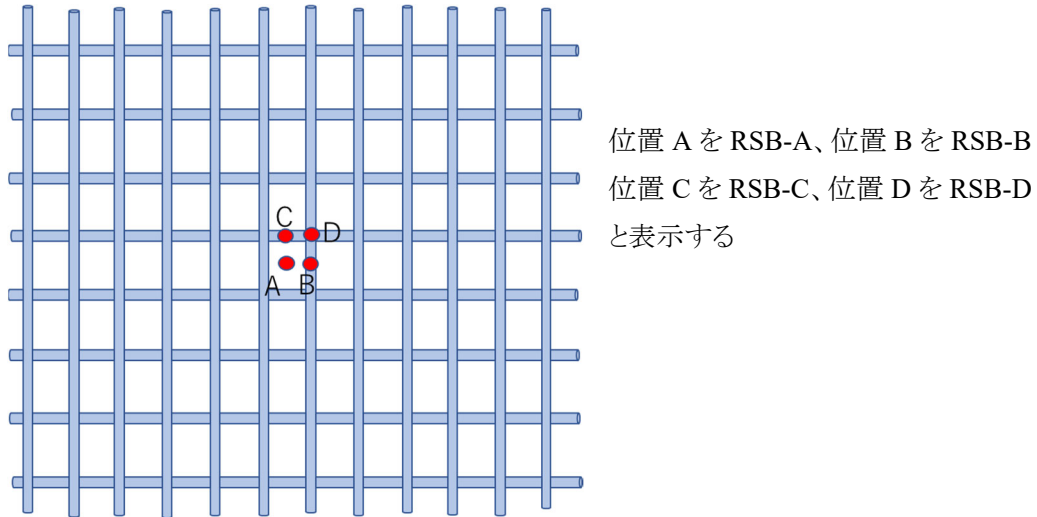


第 1 図 床面上 3 cm での線源との位置の違いによる寄与分布の比較

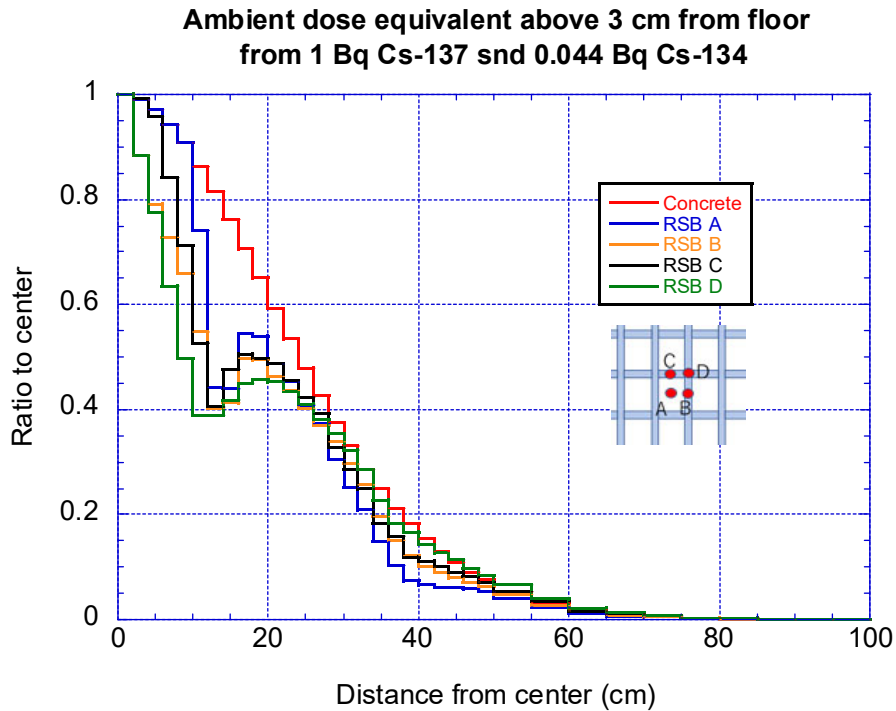
### 3. 線源寄与領域の検討

#### 3-1 シールドプラグ床面から 3 cm 位置での寄与分布

シールドプラグ表面の周辺線量当量率分布の測定に対応した床面から 3 cm 位置での寄与分布を鉄筋を含まない場合と、鉄筋を含む形状で、上部(シールドプラグ表面から 10 cm にある鉄筋)と第 2 図に示す位置にある場所での中心軸からの距離による周辺線量当量率変化を計算した。結果を第 3 図に示す。



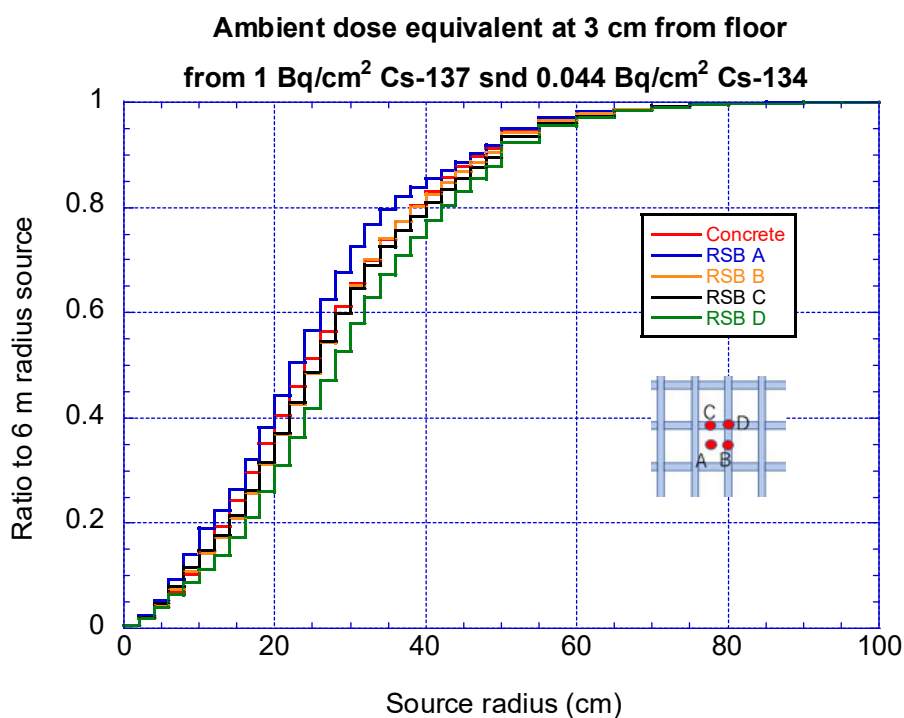
第 2 図 上部鉄筋と評価位置



第 3 図 各評価位置での中心軸からの距離による寄与分布

鉄筋により、中心軸から 20 cm までは評価位置により分布の形が異なるが、20 cm より先では、違いの程度は少ない。また、中心軸から 20 cm 離れると中心軸上の 0.5 から 0.6 に、30 cm 離れると 0.3 から 0.37 の寄与が減少することが分かる。もし、評価位置から 30 cm 離れた位置に汚染密度が 2 倍の領域が存在していたとすると、その領域の上部では評価位置の 2 倍以上の周辺線量当量率になる可能性があることになる。評価位置から 50 cm を超えると中心軸上の 0.1 以下となる。

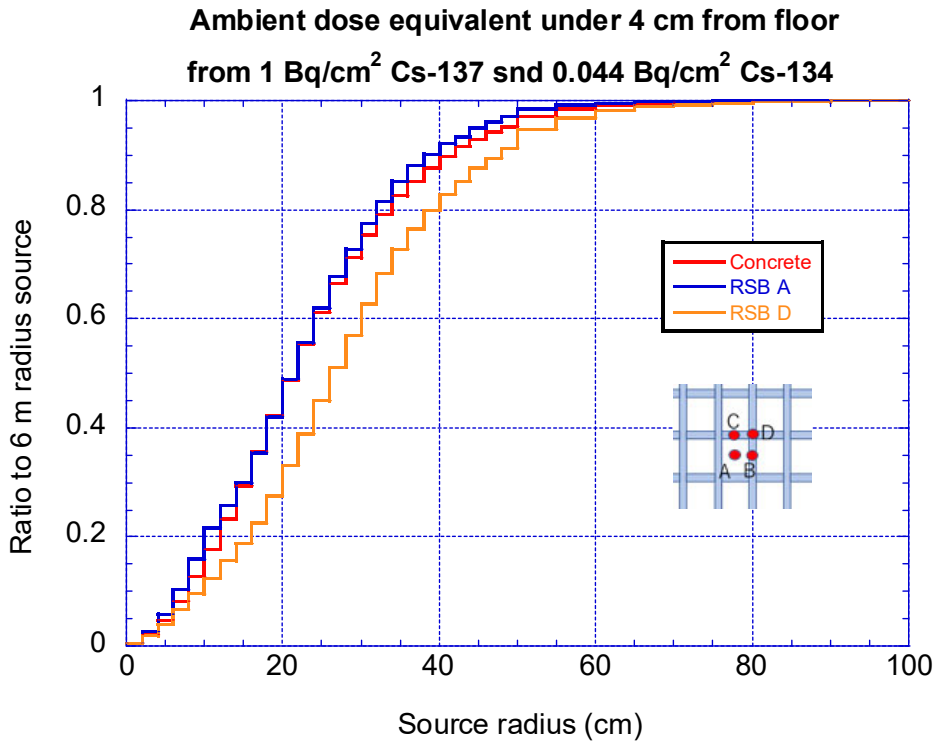
1 Bq/cm<sup>2</sup> の一様な汚染密度の面線源の場合には、中心軸からの距離が同じ円環の面積を掛けた結果が測定位置での周辺線量当量率に寄与する。第 4 図に、線源半径による周辺線量当量率の変化をシールドプラグ全体に相当する半径 6 m の場合の比で示す。半径 50 cm で 90 %程度となることから、測定に寄与している実効的な領域は半径 50 cm 程度であると言える。



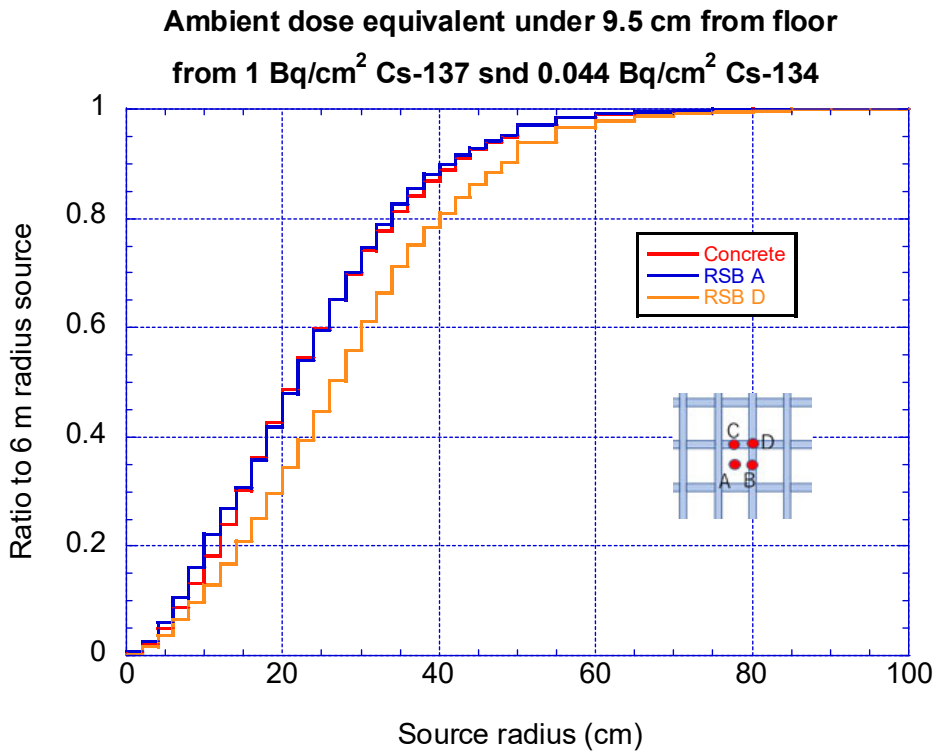
第 4 図 シールドプラグ表面から 3 cm 位置での線源半径による周辺線量当量率変化

### 3-2 シールドプラグのコンクリート内部での寄与分布

第 5 図に床面から 4 cm 下部の穴内部、第 6 図に床面から 9.5 cm 下部の穴内部での線源半径による周辺線量当量率の変化をシールドプラグ全体に相当する半径 6 m の場合の比で示す。穴の下部に鉄筋がある RSB-D の形状では変化の形が若干異なるが、半径 50 cm で 90 %以上となることから、測定に寄与している実効的な領域は床面上部 3 cm の場合と同じように半径 50 cm 程度であると言える。



第 5 図 シールドプラグ表面から 4 cm 下部での線源半径による周辺線量当量率変化



第 6 図 シールドプラグ表面から 9.5 cm 下部での線源半径による周辺線量当量率変化



## 2号機シールドプラグトップカバーの分割部隙間からの線量率寄与

2022年4月7日 R6

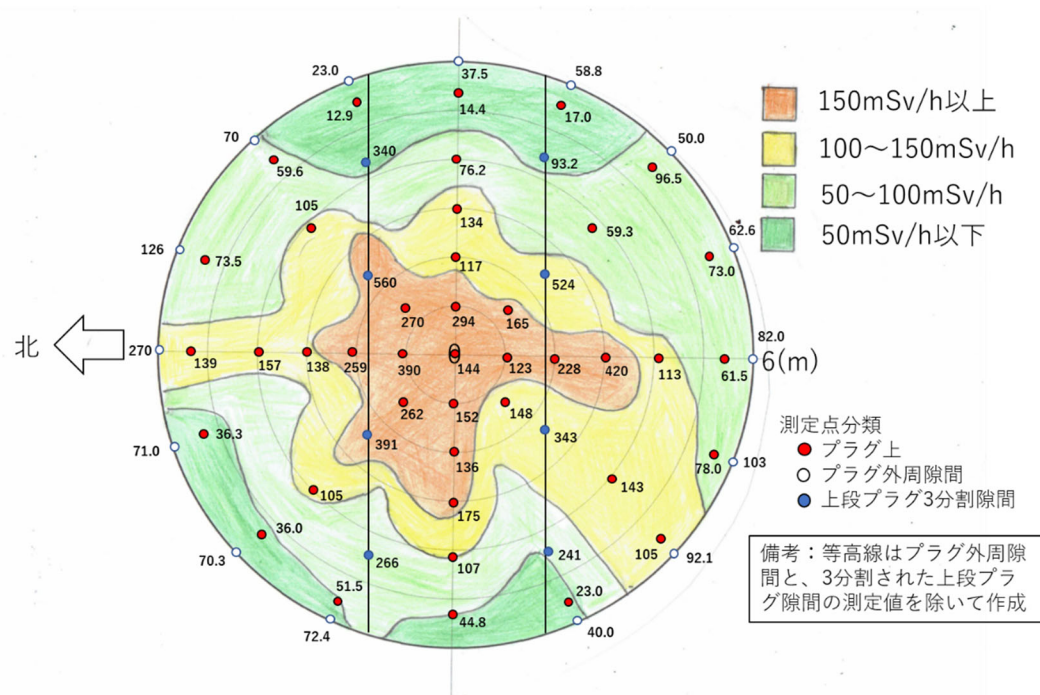
林 克己、平山 英夫

### 1. はじめに

2号機シールドプラグの表面線量率分布の測定結果<sup>1)</sup>(第1図)を見ると、シールドプラグトップカバー(上段)の3分割構造の隙間上の測定点8点全てが、1m程度しか離れていない隙間部以外の測定点と比べて2~10倍線量率が高い。この原因は分割部隙間からのストリーミングと考えられたため、表面線量率分布図やこれを元にしたトップカバー下の汚染密度の検討にはこれらの測定値を除いて検討を進めていたが、今回あらためて分割隙間からの寄与について検討することとした。

隙間上での測定では、以下の寄与が考えられる。

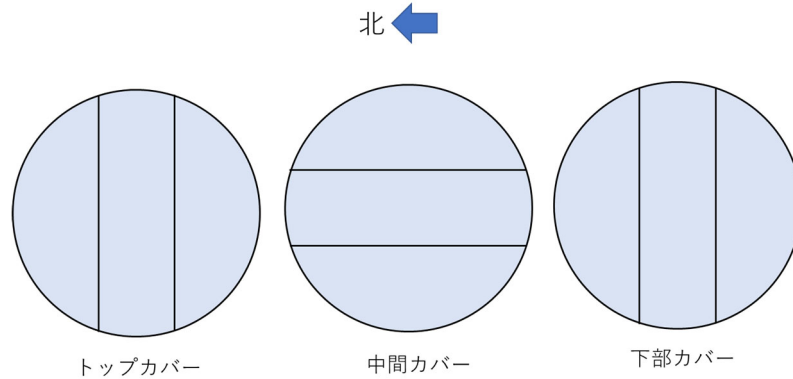
- ① トップカバー下面の汚染からの線量率寄与(隙間無のときの寄与分)
  - ② オペフロの床面、天井、壁の汚染による線量率寄与
  - ③ 分割部隙間を通り抜けてきた成分による線量率寄与
  - ④ 分割部隙間の内面の汚染による線量率寄与
- ①と②については別資料で検討されているので、この資料では③と④について検討した。



第1図 2号機シールドプラグの表面線量率分布の測定結果

## 2. シールドプラグの構造

第2図にシールドプラグの構造を示す。トップカバー、中間カバー、下部カバーの3層構造で、各層は3分割されており、各層の隙間が90度で交差するよう設置されている。また、各層61cm厚のカバーの3分割部の隙間は、遮蔽効果と支持強度の配慮の観点から半分の厚み部分に幅10cmの重ね合わせ構造を有している。



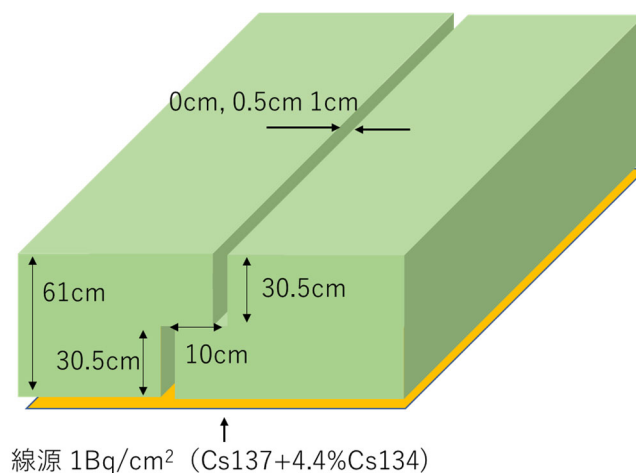
第2図 2号機シールドプラグの構造

## 3. 分割隙間を通り抜けてきた成分による線量率寄与

### 3.1 計算体系

2号機オペフロは線量率が高いため、シールドプラグ分割隙間に近づいて確認することはできないが水素爆発をしていないので事故の影響で隙間が広がっていることはないと思われるため、隙間は島根2号機調査で確認した「広くても5mm以内」と考えられる。そこで、隙間が無いモデルと隙間5mm、10mmのモデルでトップカバー下の汚染からの線量率寄与を計算して、隙間による線量率増加割合を求めた。

計算には QAD-CGGP2R<sup>2)</sup>を使用した。計算体系を第3図に示す。隙間横断方向に床上3cmの線量率分布を求めた。トップカバーのコンクリート密度は2.1g/cm<sup>3</sup>とした。



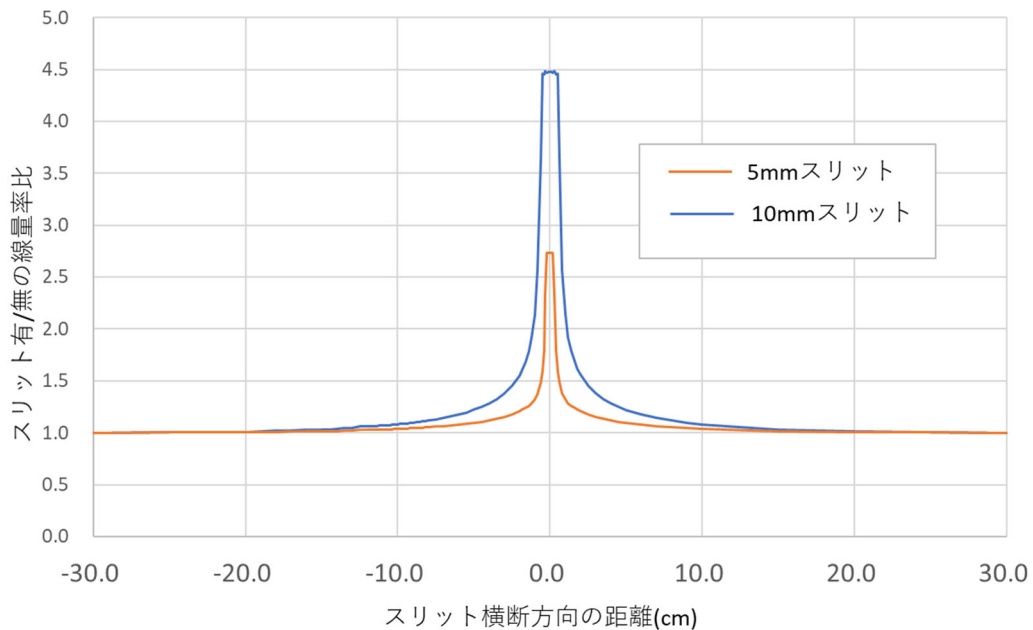
第3図 分割隙間を通り抜けてきた成分の計算体系

### 3.2 計算結果

隙間を設けた計算結果と隙間の無い計算結果の比を第4図に示す。

5mmの隙間があるときは、隙間が無いときに比べて隙間真上では線量率は2.7倍になる。また、10mmの隙間があるときは、隙間が無いときに比べて隙間真上では線量率は4.5倍になる。

スリット長に比べスリット幅が充分狭いので、上のスリットからの漏洩による線量率のピークは見られるが下のスリットからの漏洩による線量率の影響はほとんど見られないこともわかる。

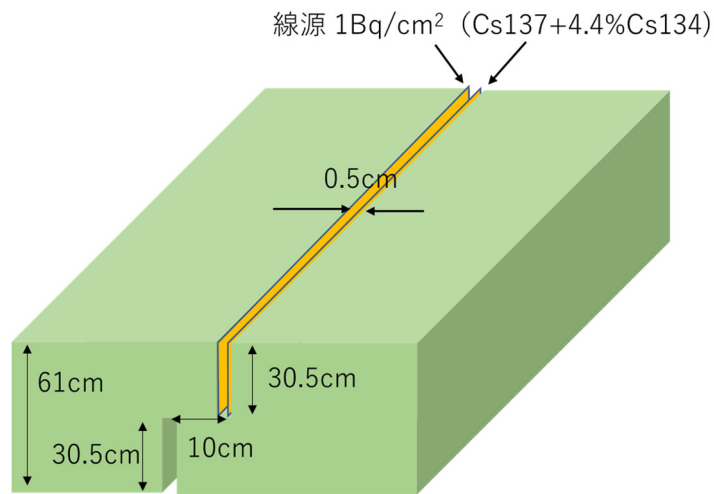


第4図 分割隙間からのストリーミングによる線量率増加率

## 4. 分割隙間の内面の汚染による線量率寄与

### 4.1 計算体系

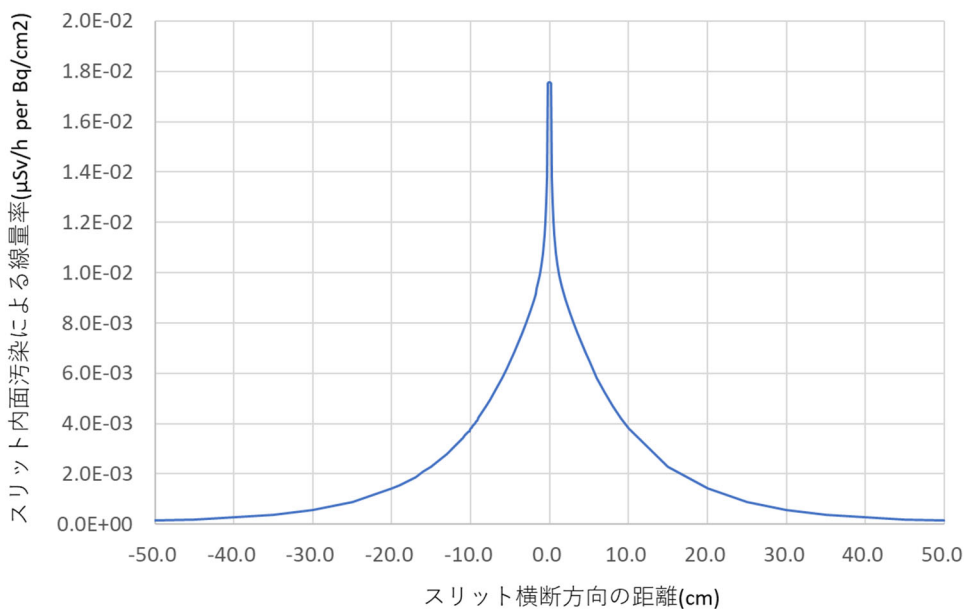
計算には QAD-CGGP2R<sup>2)</sup>を使用した。計算体系を第5図に示す。線源は分割隙間内面の両側に存在するとして、その汚染密度が1 Bq/cm<sup>2</sup>としたときの、隙間横断方向に床上3cmの線量率分布を求めた。トップカバーのコンクリート密度は2.1g/cm<sup>3</sup>とした。



第5図 分割隙間の内面の汚染による線量率計算体系

#### 4.2 計算結果

スリット内面汚染を  $1\text{Bq}/\text{cm}^2$  とした時のスリット横断方向の線量率分布を第6図に示す。隙間真上では  $1.76\text{E}-2 \mu\text{Sv}/\text{h per Bq}/\text{cm}^2$  となる。分割隙間の汚染がオペフロ床汚染と同程度 ( $1\text{MBq}/\text{cm}^2$ ) であるとすると  $17.6\text{mSv}/\text{h}$  となる。(分割隙間の汚染密度の設定については【付録】参照)



第6図 5mm幅のスリットの内面汚染による床上3cm位置での線量率分布

## 5. まとめ

分割隙間の測定点 8 点全てが近くの測定点と比べて 2~10 倍高い原因として 2 つの要因について検討し、これまでに検討した 2 つの要因とあわせてまとめる。

最初に検討した「③分割隙間を通り抜けてきた成分による線量率寄与」については、トップカバー下面の汚染からの寄与は、5mm の隙間があるときは、隙間が無いときに比べて隙間真上では線量率は 2.7 倍になることがわかった。測定に使用した日立アロカ PDR-303 のセンサー半径は 10mm (確認中) であるので、隙間とセンサーの位置関係により測定される値は変わる。例えばセンサーの真ん中にスリットがあったとしても測定値は 0.6 倍になる。したがって 5mm の分割隙間を通り抜けてきた成分による線量率測定値は、 $(2.7-1.0) \times 0.6+1.0=2$  となり 2 倍程度が最大である。

実際には、測定器はロボットで把持され遠隔操作室で位置決めをしているためスリットの中心真上にセンサー中心が来ることはまれであると思われること、また島根 2 号機調査で確認した隙間は広くても 5mm 以内ということからも実際はさらに狭い方向なので線量率測定値はさらに低くなると思われ、近くの測定点と比べて 2~10 倍高い主要因にはなりえない。

次に検討した「④分割隙間の内面の汚染による線量率寄与」については、汚染密度がオペフロ床汚染と同程度であるとする 17.6mSv/h となり、スリットの中心真上にセンサー中心が来たとしてもその 0.6 倍の 11mSv/h がスリットの無い場合の測定値に付加されるだけなので、近くの測定点と比べて 2~10 倍高い主要因にはなりえない。

これまでの検討により、表面での線量率のうち「①トップカバー下の汚染からの線量率寄与」については局所的な汚染の端から 50cm 離れると寄与はほとんどないことが判っている。そのため、1m 程度離れた場所の汚染が 2~10 倍異なっていれば表面での測定値が 2~10 倍異なるのは充分ありえる。

また、表面での線量率のうち「②オペフロの床面、天井、壁の汚染による線量率寄与」については、オペフロ表面での合計はこれまでの検討により、60mSv/h 程度であり、1m 程度しか離れていない測定点で 100mSv/h 以上の差がでる要因とはなりえないので、近くの測定点と比べて 2~10 倍高い主要因にはなりえない。

これらを考え合わせると、隙間部分の測定点の線量が近くの測定点の線量率の 2~10 倍高い原因は、トップカバー下の汚染が局所的に高いところがあることが主要因と考えられる。

6. 参考文献

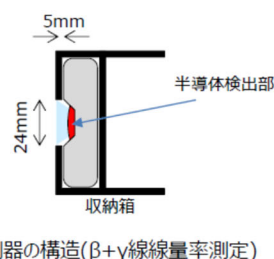
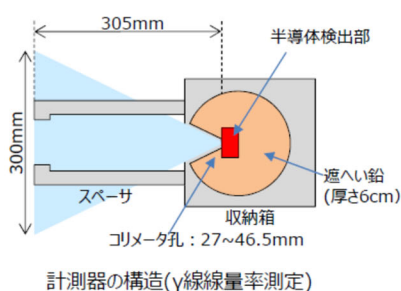
- 1) 第 23 回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会  
資料 3-1 現地調査の実施状況について P12、2021 年 10 月 19 日
- 2) QAD-CGGP2 AND G33-GP2 : REVISED VERSION OF QAD-CGGP AND G33-GP2, JAERI-M 90-110, June 1990
- 3) H. Hirayama, Y. Namito, A. F. Bielajew, S. J. Wilderman and W. R. Nelson, “The EGS5 Code System”, SLAC-R-730 (2005) and KEK Report 2005-8 (2005)
- 4) 東京電力ホールディングス株式会社  
2 号機原子炉建屋オペフロ内残置物移動・片付後調査の結果について  
P24、2019 年 2 月 28 日
- 5) 第 71 回特定原子力施設監視・評価検討会  
資料 2 2 号機原子炉建屋オペフロの放射線等調査結果について  
～残置物移動・片付後～ P11、2019 年 5 月 20 日

【付録】 トップカバー 3 分割隙間の内面の汚染密度の設定について

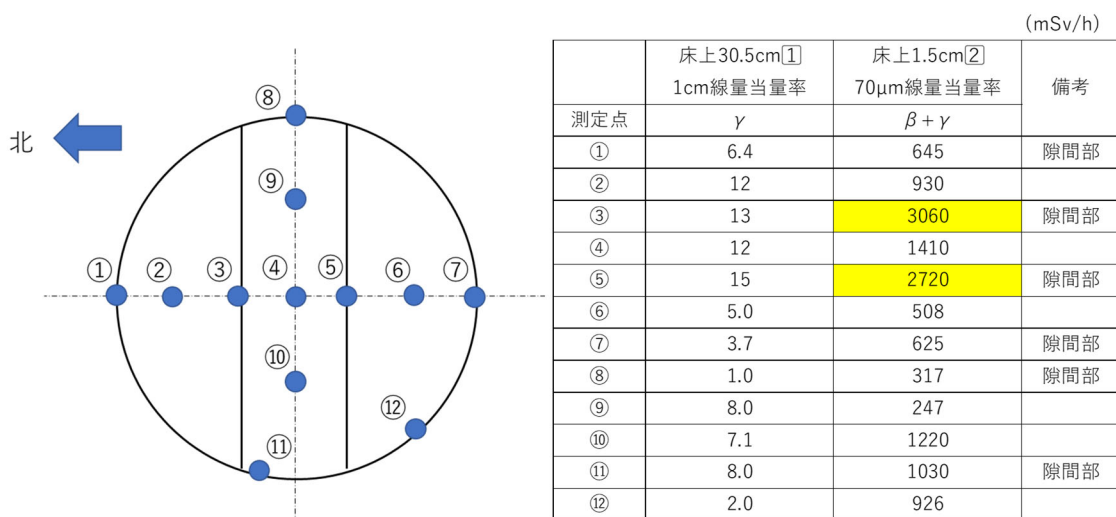
トップカバーの分割隙間の内面汚染密度を測定値から検討した。  
東電がコリメータ付線量計を用いて床上高さ 30.5cm でガンマ線測定したときに同時に床上高さ 1.5cm でベータ線とガンマ線を合わせた 70 $\mu$ m 線量当量率が測定されている<sup>4,5)</sup>。測定に使用された線量計<sup>4)</sup>を第 6 図に示す。また、シールドプラグ上の測定位置と測定値<sup>5)</sup>を第 7 図に示す。

■  $\gamma$ 線線量率(1cm線量当量率)

■  $\beta+\gamma$ 線線量率(70 $\mu$ m線量当量率)



第 6 図 測定器<sup>4)</sup>



第 7 図 シールドプラグ上の測定位置と測定値<sup>5)</sup>

70 $\mu$ m 線量当量率測定器ではベータ線に比べてガンマ線感度がずっと低いので、主にベータ線を測っていることになる。また、そのベータ線は床上や隙間部内面の汚染が測られていることになる。

第 7 図で③～⑤の 1cm 線量当量率は大きな違いがないにもかかわらず 70 $\mu$ m 線量当量率を見てみると、3 分割隙間部の③と⑤ではベータ線が特に多く、近くの④の測定点より 2

倍程度高いことがわかる。これはベータ線としては③と⑤には④と同程度の床汚染の寄与に加え、床汚染と同程度の隙間内面の汚染の寄与が加わっていると考えられる。またこの測定では他の隙間を見てもこれ以上高いベータ線測定値は無いため、これを最大と考えることとした。

次に、床汚染と隙間内面汚染のベータ線 70 $\mu\text{m}$  線量当量率寄与が同じとした場合の汚染密度を決定する必要がある。測定に使用された 70 $\mu\text{m}$  線量計は開口部が 24mm  $\phi$  なので、汚染密度が同じ場合、隙間内面汚染からの寄与を隙間上で測ると深さ方向の両内面の汚染からの寄与をまとめて測ることになるため、床汚染の 24mm  $\phi$  に限られた線源からの寄与より線量率寄与は高くなる。同じ線量率寄与なら床汚染密度より内面汚染密度は低いと考えられるが、保守的に床上と隙間内面の汚染密度は同じレベル (1MBq/cm<sup>2</sup>) と設定することとした。

なお、エアロゾルによる汚染を考えた場合の隙間部での汚染濃度分布などが考えられる。これらを含め現在の測定の範囲では判っていないことも多くあり、今後のエアロゾル等を含む種々の挙動解明の結果により見直していきたい。



## 2号機オペフロ内壁汚染のシールドプラグ穴内線量率への寄与

2022年5月26日 R6

林 克己、平山 英夫

### 1. はじめに

IRID の2つの穴と新たに穿孔した13個の穴の内部の線量率からトップカバー直下の汚染密度の検討を行なっている。穴の内部の線量率にはトップカバー直下の汚染だけではなく、オペフロ内壁（天井、床、壁）の汚染が寄与するため、これを評価した。

### 2. 評価方法

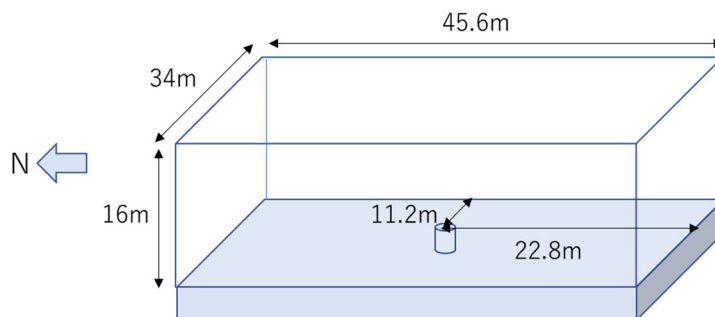
穴をモデル化したEGS5<sup>1)</sup>での計算は長時間必要であるため、QAD-CGGP2R<sup>2)</sup>を使って評価した。QAD-CGGP2Rの計算結果の確認のため穴の無い位置（床上150cm、3cm、1.5cm）でのEGS5での計算と比較し適用性を確認した。

次に、天井、床、東西南北の壁の汚染密度の測定値を使って、穴内の線量率分布を計算した。

### 3. 計算モデル

第1図に計算モデルを示す。オペフロの天井、床、東壁、西壁、北壁、南壁に $Cs^{137}1Bq/cm^2$  +  $Cs^{134}0.044Bq/cm^2$ の汚染があるときの床上および穴内の線量率分布を計算した。

なお、穴の位置はシールドプラグ中心とし、この中心軸の室内線量率の高さ方向分布と穴内の線量率の深さ方向分布を求めた。



第1図 計算モデル

### 4. 単位汚染あたりの室内汚染の線量率寄与計算結果

第1表に結果を示す。第2図に床、単位汚染あたりの室内汚染の線量率寄与のグラフを、第3図に床上3cm以下の詳細図を示す。

天井の汚染による室内線量率は床に近づくほど減少していく。穴内線量率は少しずつ減少するが、床や壁に比べて穴の奥まで影響が続くことが判る。

床の汚染による室内線量率は床から天井方向に離れるほど大きく減少していく。穴内線量率は穴に入った途端大きく減少しその後も深さごとに減少が続く。

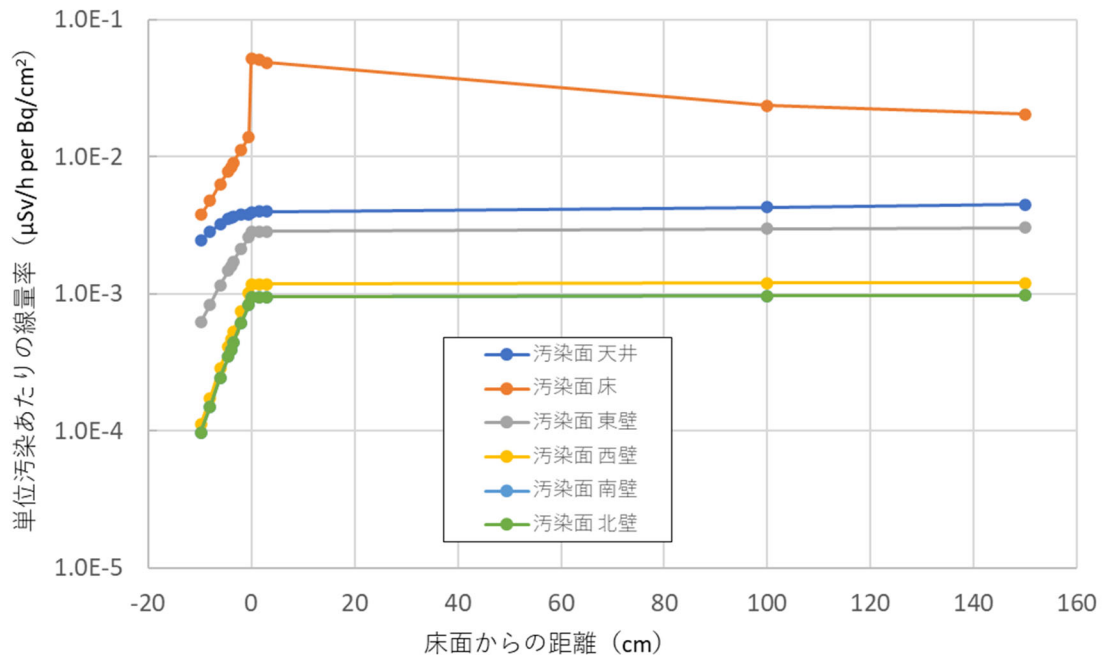
壁の汚染による室内線量率はほぼ一定である。穴内線量率は穴に入った途端大きく減少しその後も減少が続く。壁の中でも東壁は距離が 11.2m と近いので線量率は高くなり、西壁は 22.8m と遠いので線量率は東壁の 40%程度となっている。南壁と北壁は距離が同じ 22.8m であり線量率も同じとなる。南壁と北壁は西壁と距離は同じだが、壁面積の比で  $34/45.6=0.75$  と狭いため、西壁よりその割合で少し低い線量率となる。

全体として、同じ汚染密度の場合の線量率は、室内では大きい順で床、天井、東壁、西壁、南北壁となる。穴の中の線量率は大きい順で、床、天井、東壁、西壁と同じであるが、穴の中の減衰の緩やかな順で、天井、床、東壁、西南北壁となっている。

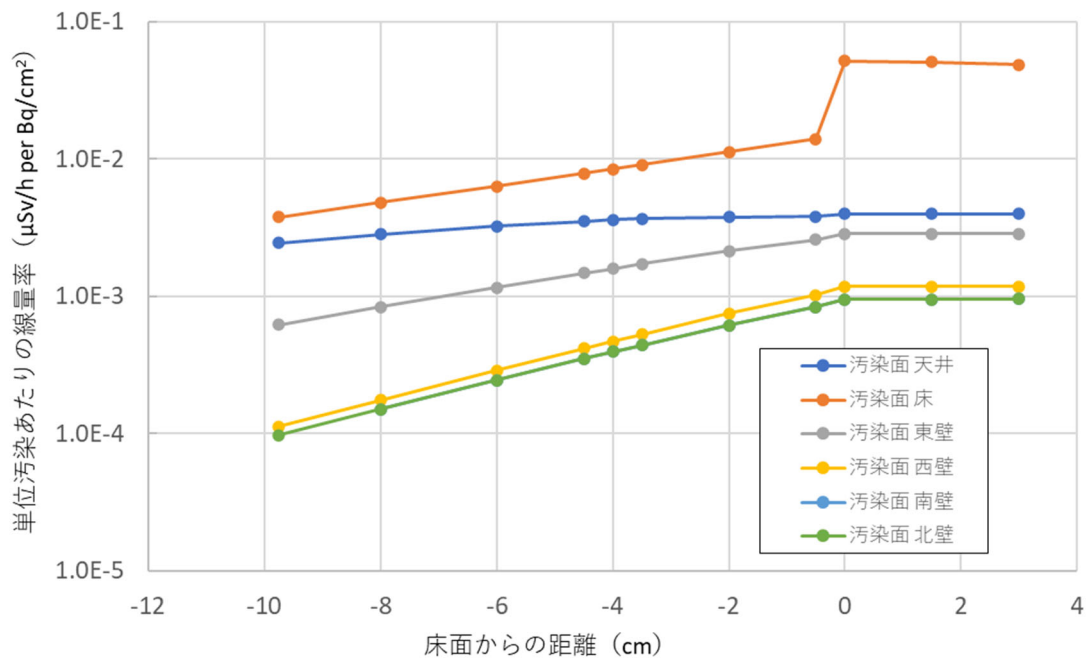
第 1 表 単位汚染あたりの室内汚染の線量率寄与

計算点			線量率( $\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ ) <b>【Cs<sup>137</sup>+4.4%Cs<sup>134</sup>】</b>					
No.	位置	床上高さ (cm)	汚染面					
			天井	床	東壁	西壁	南壁	北壁
1	穿孔穴上部	150	4.475E-03	2.057E-02	3.052E-03	1.208E-03	9.812E-04	9.812E-04
2		100	4.300E-03	2.367E-02	2.990E-03	1.198E-03	9.723E-04	9.723E-04
3		3	3.986E-03	4.873E-02	2.864E-03	1.176E-03	9.534E-04	9.534E-04
4		1.5	3.981E-03	5.095E-02	2.862E-03	1.176E-03	9.531E-04	9.531E-04
5		0	3.976E-03	5.198E-02	2.860E-03	1.175E-03	9.528E-04	9.528E-04
6	穿孔穴内部	-0.5	3.797E-03	1.396E-02	2.586E-03	1.024E-03	8.340E-04	8.340E-04
7		-2	3.787E-03	1.128E-02	2.136E-03	7.490E-04	6.179E-04	6.179E-04
8		-3.5	3.667E-03	9.100E-03	1.719E-03	5.286E-04	4.416E-04	4.416E-04
9		-4	3.601E-03	8.458E-03	1.593E-03	4.693E-04	3.936E-04	3.936E-04
10		-4.5	3.524E-03	7.864E-03	1.474E-03	4.160E-04	3.502E-04	3.502E-04
11		-6	3.249E-03	6.341E-03	1.162E-03	2.881E-04	2.452E-04	2.452E-04
12		-8	2.826E-03	4.801E-03	8.363E-04	1.748E-04	1.509E-04	1.509E-04
13		-9.75	2.448E-03	3.789E-03	6.227E-04	1.122E-04	9.788E-05	9.788E-05

なお QAD-CGGP2R の計算では、線源から計算点まで空気だけを透過する室内計算点では空気のビルドアップファクターを、線源から計算点まで空気とコンクリートを透過する成分がある穴内計算点ではコンクリートのビルドアップファクターを使用した。



第2図 単位汚染あたりの室内汚染の線量率寄与



第3図 単位汚染あたりの室内汚染の線量率寄与 (床上3 cm 以下詳細)

これらの QAD-CGGP2R の計算結果の確認のために、EGS5 で穴が無いモデル<sup>\*</sup>) を設定し、短時間でも統計精度が保てる形状変換法<sup>3)</sup> を使用して室内の線量率求めた。計算結果の比較を第 2 表に示す。( \* 穴がある形状では形状変換法が適用できないため)

第 2 表 計算法による結果比較

計算コード	床上高さ (cm)	汚染面毎の線量率( $\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ )					
		天井	床	東壁	西壁	南壁	北壁
QAD	150	4.475E-03	2.057E-02	3.052E-03	1.208E-03	9.812E-04	9.812E-04
	3	3.986E-03	4.873E-02	2.864E-03	1.176E-03	9.534E-04	9.534E-04
	1.5	3.981E-03	5.095E-02	2.862E-03	1.176E-03	9.531E-04	9.531E-04
EGS	150	5.371E-03	2.048E-02	3.134E-03	1.246E-03	9.662E-04	9.662E-04
	3	4.955E-03	4.778E-02	2.946E-03	1.216E-03	9.405E-04	9.405E-04
	1.5	4.950E-03	5.263E-02	2.944E-03	1.215E-03	9.401E-04	9.401E-04
QAD/EGS	150	0.83	1.00	0.97	0.97	1.02	1.02
	3	0.80	1.02	0.97	0.97	1.01	1.01
	1.5	0.80	0.97	0.97	0.97	1.01	1.01

QAD-CGGP2R は EGS 5 とほぼ同じ結果であることがわかる。違いの原因は以下と考えられる。QAD-CGGP2R は点減衰核積分法なので、線源と計算点を結ぶ直線の通る材料の透過距離による減衰をベースとして、散乱した成分は材質と透過距離で決まるビルドアップファクターを乗じることにより求める。したがって、今回の例では空気を通る部分しか計算しない。このため線源面の建屋コンクリートで後方散乱して計算点に届く成分や、対置するコンクリート面での後方散乱で計算点に届く成分は計算できない。これに対し EGS 5 はモンテカルロ法であり線源面の建屋コンクリートで後方散乱して計算点に届く成分も計算している。特に天井からの後方散乱成分の割合は壁からの後方散乱成分の割合よりも大きくなること、また EGS5 では天井高さを 15.3m と設定している (5%程度大きくなる) ことから、これらを合わせて QAD と 20%程度の差が出ている。

前述したように穴をモデル化した EGS5 での計算は長時間必要であるため、これ以降は QAD-CGGP2R の結果を用いて検討を進めることとした。

## 5. 室内汚染の線量率寄与計算結果

第 3 表に使用した天井、床、壁の汚染密度を示す。これらの汚染密度の設定については参考資料<sup>4)</sup> に示す。東壁、北壁、南壁はガンマカメラ<sup>5) 6)</sup>、天井と西壁はコリメータ付線量計、床は新しい穴の穿孔時に抜き取ったコア表面測定で得られた値である。

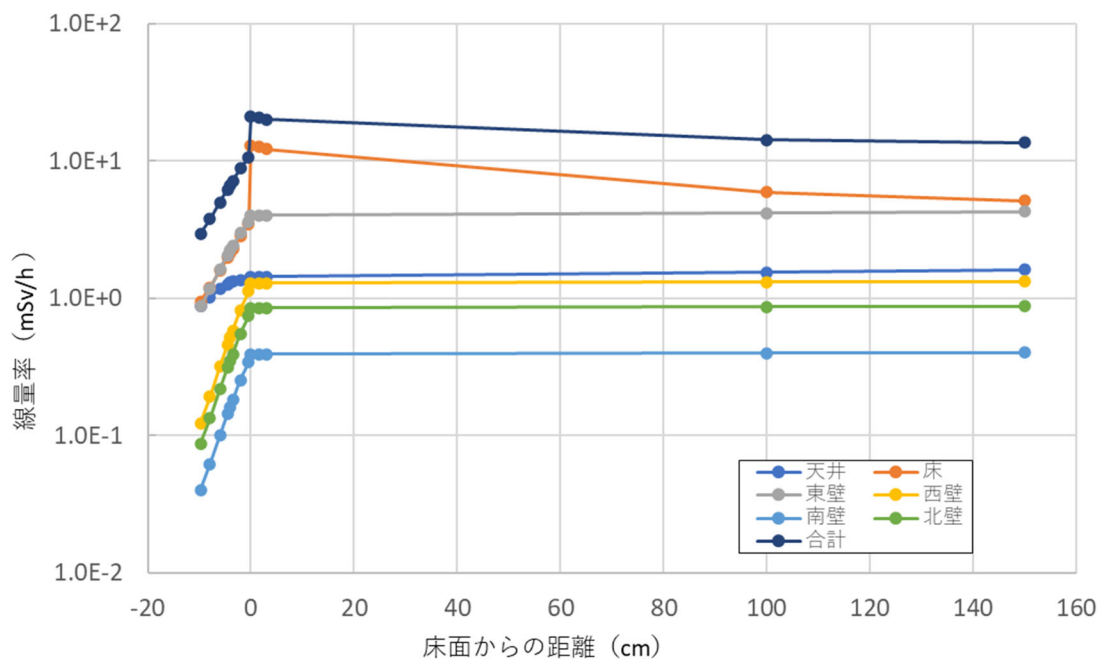
第 4 表に結果を示す。第 4 図に室内汚染の線量率寄与のグラフを、第 5 図に床上 3cm 以下の詳細図を示す。

第3表 天井、床、壁の汚染密度

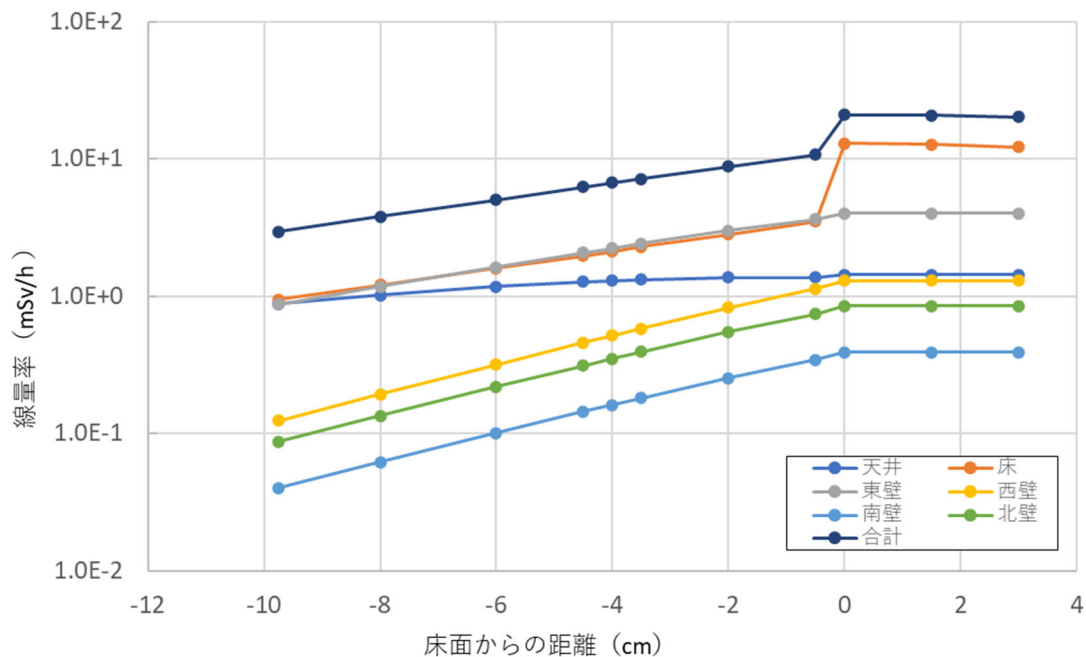
汚染密度 (MBq/cm <sup>2</sup> ) 【Cs <sup>137</sup> +4.4%Cs <sup>134</sup> 】					
天井	床	東壁	西壁	南壁	北壁
0.36	0.25	1.4	1.1	0.41	0.89

第4表 室内汚染の線量率寄与計算結果

計算点			線量率(mSv/h)						合計
No.	位置	(cm)	汚染面						
		床上高さ	天井	床	東壁	西壁	南壁	北壁	
1	穿孔穴上部	150	1.611E+00	5.143E+00	4.273E+00	1.329E+00	4.023E-01	8.733E-01	1.363E+01
2		100	1.548E+00	5.918E+00	4.186E+00	1.318E+00	3.986E-01	8.653E-01	1.423E+01
3		3	1.435E+00	1.218E+01	4.010E+00	1.294E+00	3.909E-01	8.485E-01	2.016E+01
4		1.5	1.433E+00	1.274E+01	4.007E+00	1.294E+00	3.908E-01	8.483E-01	2.071E+01
5		0	1.431E+00	1.300E+01	4.004E+00	1.293E+00	3.906E-01	8.480E-01	2.096E+01
6	穿孔穴内部	-0.5	1.367E+00	3.490E+00	3.620E+00	1.126E+00	3.419E-01	7.423E-01	1.069E+01
7		-2	1.363E+00	2.820E+00	2.990E+00	8.239E-01	2.533E-01	5.499E-01	8.801E+00
8		-3.5	1.320E+00	2.275E+00	2.407E+00	5.815E-01	1.811E-01	3.930E-01	7.157E+00
9		-4	1.296E+00	2.115E+00	2.230E+00	5.162E-01	1.614E-01	3.503E-01	6.669E+00
10		-4.5	1.269E+00	1.966E+00	2.064E+00	4.576E-01	1.436E-01	3.117E-01	6.211E+00
11		-6	1.170E+00	1.585E+00	1.627E+00	3.169E-01	1.005E-01	2.182E-01	5.017E+00
12		-8	1.017E+00	1.200E+00	1.171E+00	1.923E-01	6.187E-02	1.343E-01	3.777E+00
13		-9.75	8.813E-01	9.473E-01	8.718E-01	1.234E-01	4.013E-02	8.711E-02	2.951E+00



第4図 室内汚染の線量率寄与計算結果



第5図 室内汚染の線量率寄与計算結果（床上3cm以下詳細）

第5図から、0.5cmより深い穴内線量率は床からの寄与と東壁からの寄与が同程度であり、天井、西壁、北壁、南壁の寄与は小さいことがわかる。天井の寄与は小さいため、QADでの天井の過小評価（第2表：20%）は合計線量率には影響がほぼ無い。

ここまでの評価で得られた結果を、シールドプラグ上に25cmの鉄板遮蔽を敷設した後の測定値と比較した。鉄板敷設後は床汚染の寄与も無く、またトップカバー下面に存在するCs<sup>137</sup>の汚染からの寄与は0.1μSv/h程度<sup>7)</sup>と小さいので、室内内壁汚染のうち床汚染の寄与を引いた分の線量率だけになる。第4表の合計線量率から床汚染寄与を引いた床上1mの線量率は8.3mSv/h、床上1.5mの線量率は8.5mSv/hである。

NRAが2022年5月12日にシールドプラグ中心床上1mで測定した線量率は8mSv/h（シールドプラグ内全体では7~15mSv/hの範囲）、（添付資料1参照）、東電が5月17日にシールドプラグ中心床上1.5mで測定した線量率は9mSv/h（添付資料2参照）であるので、良く一致している。

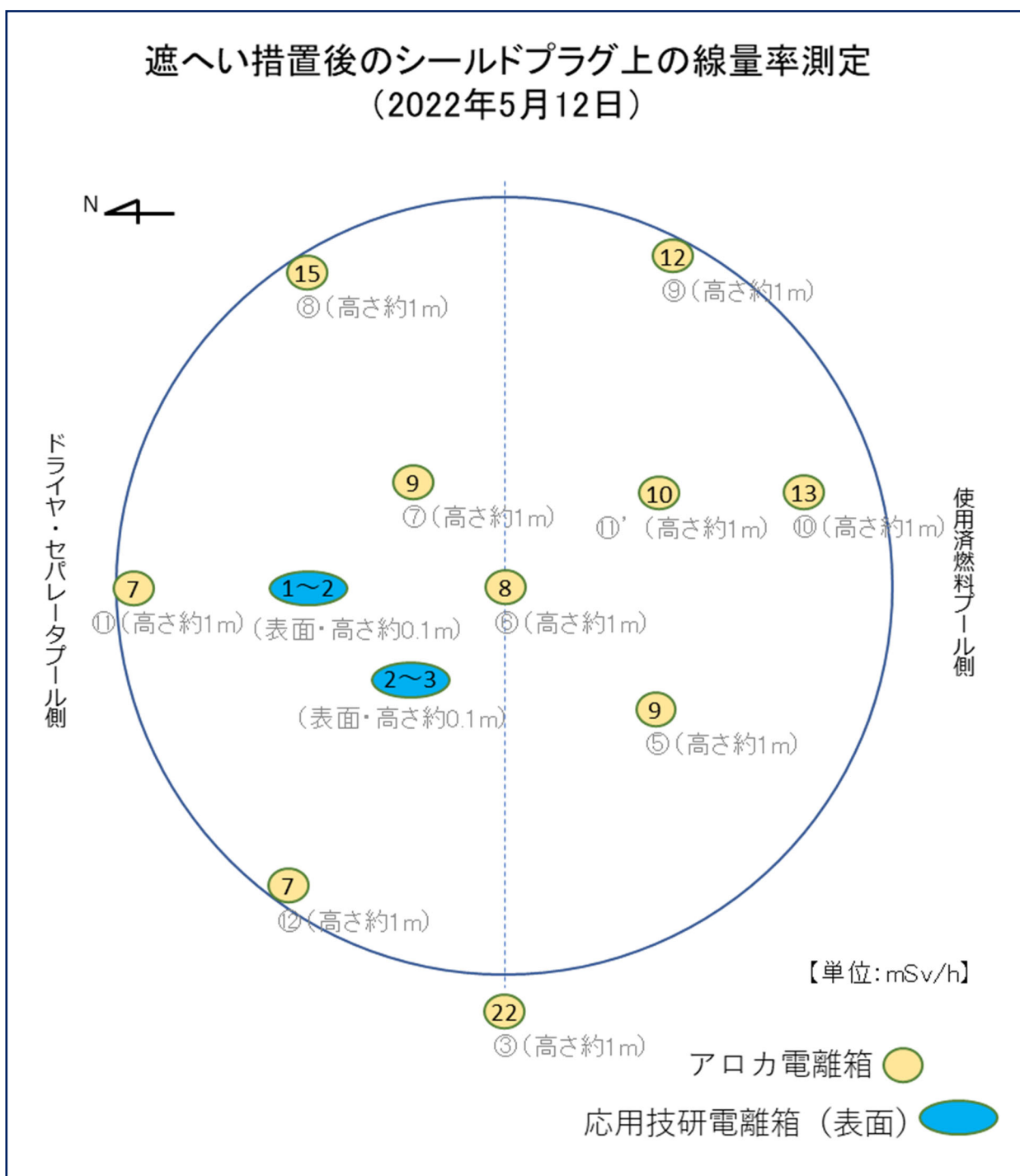
現在までの測定結果を整理して得られている天井、床、壁の汚染密度を使用して、シールドプラグに穿孔された穴内への線量率寄与を評価し、穴内線量率分布を設定した。今後この分布を使用し、穴内で測定された線量率を検討する予定である。

なお、天井、床の汚染密度測定点が限られていること、ガンマカメラの壁汚染密度測定では統計精度が充分ではないことなどから、現在までに得られている測定結果だけではこれ以上建屋内壁からの穴内への線量率寄与の精度を上げることは困難である。

## 7. 参考資料

- 1) H. Hirayama, Y. Namito, A. F. Bielajew, S. J. Wilderman and W. R. Nelson,  
“The EGS5 Code System”, SLAC-R-730 (2005) and KEK Report 2005-8 (2005)
- 2) QAD-CGGP2 AND G33-GP2 : REVISED VERSION OF QAD-CGGP AND G33-GP2,  
JAERI-M 90-110, June 1990
- 3) Y. Namito, H. Nakamura, A. Toyoda, K. Iijima, H. Iwase, S. Ban and H. Hirayama, "Transformation  
of a system consisting of plane isotropic source and unit sphere detector into a system consisting of  
point isotropic source and plane detector in Monte Carlo calculation", J. Nucl. Sci. Technol, **49**, 167-  
172 (2012)
- 4) 「2号機オペフロ内壁の汚染状況の把握 20220203」2020年3月4日 特命チーム
- 5) 「ガンマカメラによる2号機オペレーションフロアの汚染密度の測定結果のまとめ」  
2020年3月4日 R5 特命チーム
- 6) 「ガンマカメラによる2号機オペフロの壁と床の汚染密度の評価」  
(シールドプラグ鉄板遮蔽設置後 2022年5月12日測定分)  
2022年5月22日 R1 林 克己、平山 英夫、岩永 宏平
- 7) 「2号機シールドプラグの鉄板遮蔽敷設の効果について」  
2022年5月25日 R1 林 克己、平山英夫

【添付資料1】



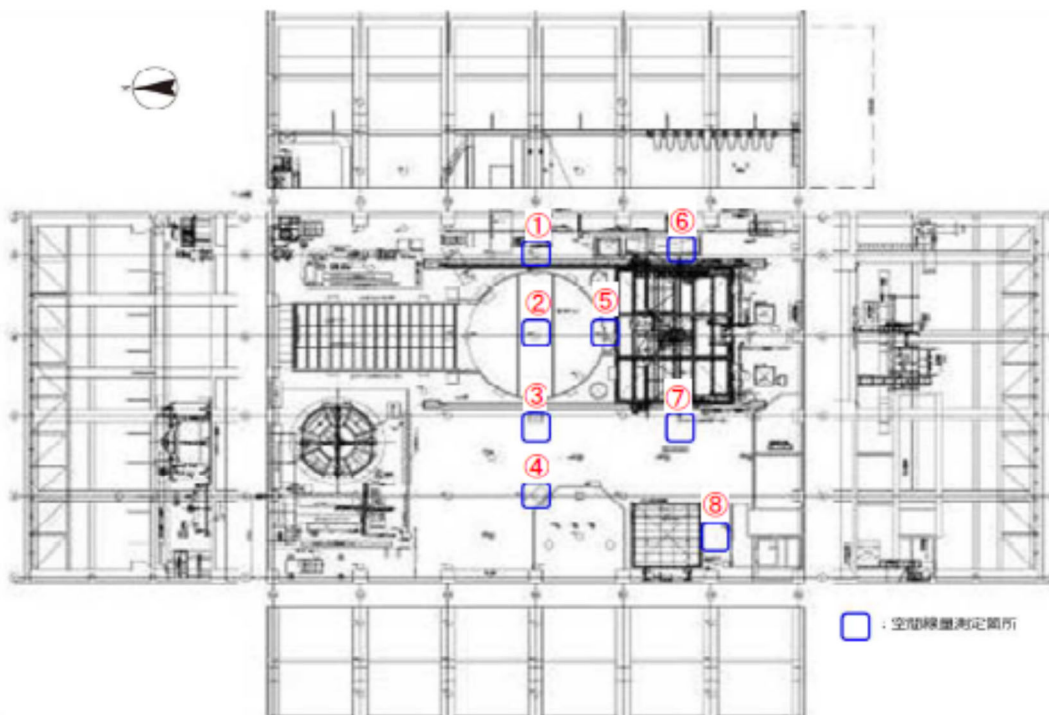


【添付資料2】

### 放射線測定記録

作業件名	1F-2 オペフロ除染業務委託(その1)	測定項目	空間線量
測定場所	2号機 原子炉建屋 オペフロ内	測定者	
作業内容	オペフロ内の線量測定	測定器	PDR-303
測定日	2022年5月17日		
備考 床面より1.5m, Kobra使用			

mSv/h	
測定点	空間線量
①	11
②	9
③	10
④	10
⑤	10
⑥	18
⑦	16
⑧	14



測定場所

## 穴内と床上の測定における床上汚染位置による線量率寄与の違いについて

2022年7月8日 R1

林 克己、平山 英夫

### 1. はじめに

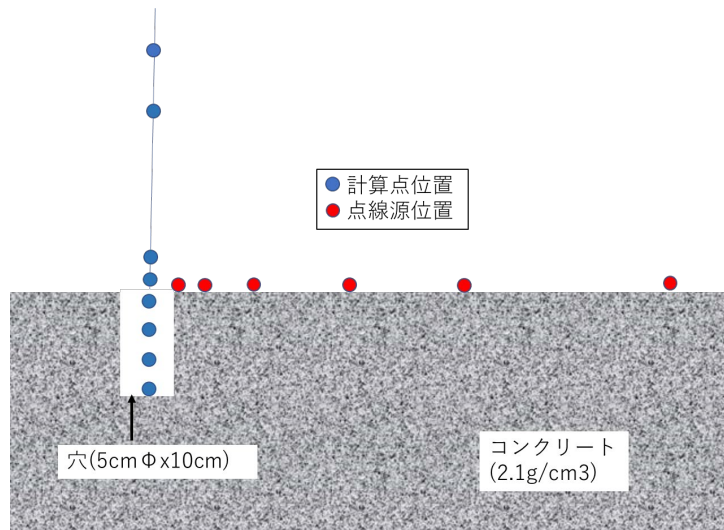
2号機シールドプラグの床上および穴内での測定には、床汚染の寄与が含まれる。現在までに穴内および床上1.5cm、3cm、1m、1.5mでの測定が行われているが、穴内および床に近い高さの測定では床汚染の寄与が大きくなり、さらに床汚染のばらつきが強く反映される。

そこで、汚染の高い場所がある可能性があるときに、その場所から離れた位置でどの程度の寄与があるかを評価した。これは参考資料<sup>1)</sup>で行った円環線源で計算した床上のみの解析ではなく、より一般的に結果を利用できるように点線源で床上と穴内両方について実施した。

### 2. 穴内および床上の汚染箇所位置による線量率寄与の評価

第1図に示す計算モデルで、床上に点線源 ( $Cs^{137}1Bq + Cs^{134}0.044Bq$ ) を置いたときの穴内および床上の線量率寄与を QAD-CGGP2R<sup>2)</sup> を使用して計算した。

点線源は穴の中心軸から2.5cm(穴の端)、5cm、10cm、20cm、30cm、50cmの位置に置き、計算点は穴内の深さ0.5cmずつ10cmの深さまで、また床上は0cm、1.5cm、3cm、1m、1.5mの高さとした。



第1図 床上の汚染箇所位置による線量率寄与の計算モデル

第1表右に、各位置に線源を置いたときの各高さや穴内深さでの線量率寄与を示す。またこれとの比較のため第1表左には線源を床面上(穴開口部除く)に一律に分布させたときの計算結果を示した。第1表にはそれぞれの線源位置毎に床上から穴内までの線量率分布形状比較の参考としてカラーバーで示した。第1表の面線源は半径2.5cmから22m(オペフロ床面積と同等になる半径)に置かれた均一線源の結果であり、今回計算した各位置も含み22mまでの寄与を積分したものになる。

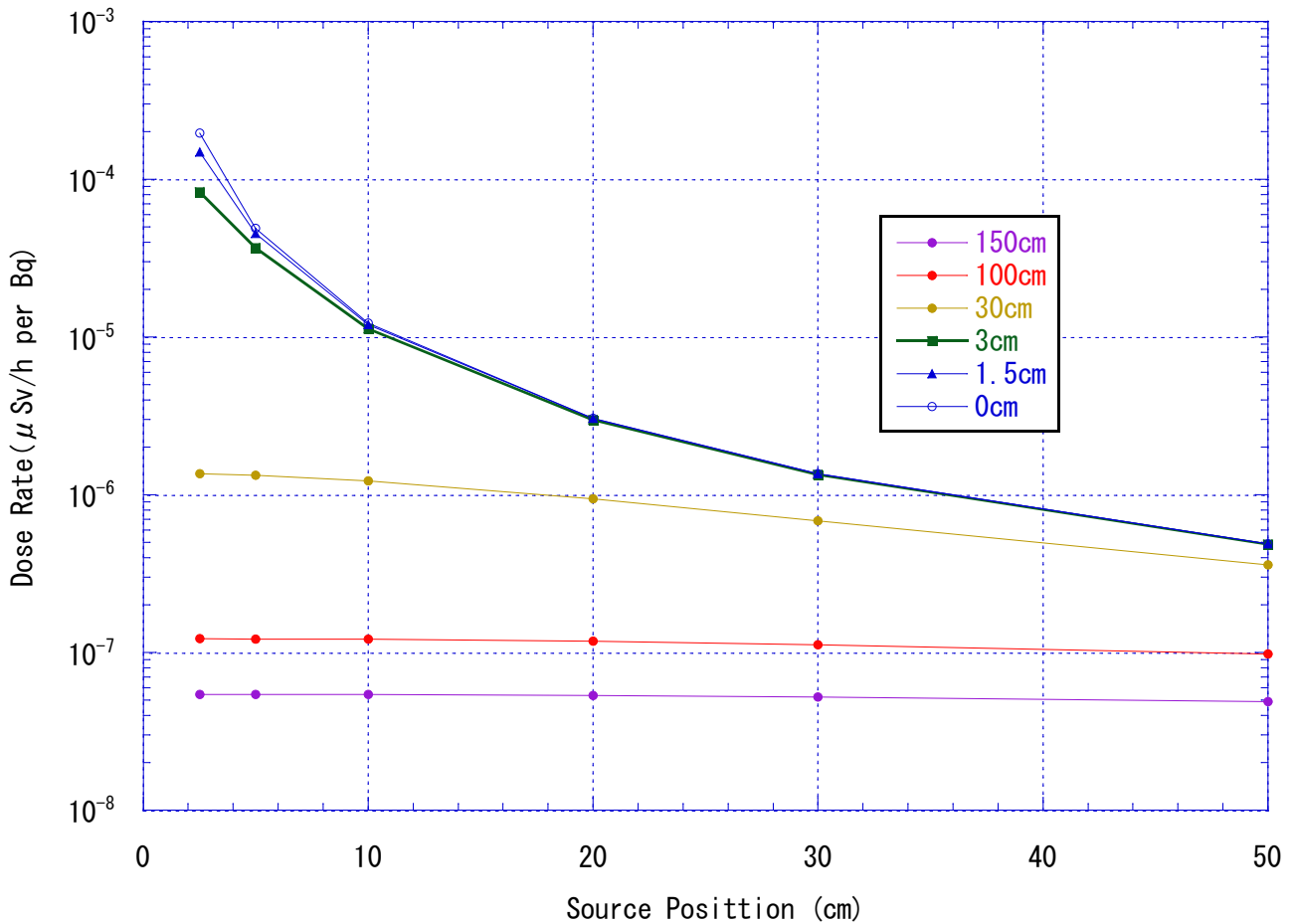
第1表 線源を各位置に置いたときの中心軸上の各高さでの線量率寄与

線源		面線源	点線源						
線源位置(cm)		2.5-2221.5	2.5	5.0	10.0	20.0	30.0	50.0	
計算点位置(cm)		線量率 ( $\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ ) 【Cs137+4.4%Cs134】	線量率( $\mu\text{Sv/h per Bq}$ ) 【Cs137+4.4%Cs134】						
1	穿孔穴上部	150	2.057E-02	5.432E-08	5.428E-08	5.410E-08	5.338E-08	5.224E-08	4.889E-08
2		100	2.367E-02	1.224E-07	1.221E-07	1.212E-07	1.177E-07	1.123E-07	9.789E-08
3		30	3.291E-02	1.359E-06	1.331E-06	1.231E-06	9.455E-07	6.819E-07	3.603E-07
4		3	4.873E-02	8.353E-05	3.665E-05	1.129E-05	2.997E-06	1.347E-06	4.876E-07
5		1.5	5.095E-02	1.492E-04	4.542E-05	1.201E-05	3.045E-06	1.357E-06	4.889E-07
6		0.0	5.198E-02	1.956E-04	4.896E-05	1.224E-05	3.060E-06	1.360E-06	4.892E-07
7	穿孔穴内部	-0.5	1.396E-02	1.853E-04	4.472E-05	9.456E-06	1.250E-06	2.400E-07	1.219E-08
8		-1.0	1.289E-02	1.641E-04	4.277E-05	8.946E-06	1.081E-06	1.866E-07	7.564E-09
9		-1.5	1.207E-02	1.390E-04	4.042E-05	8.646E-06	1.017E-06	1.690E-07	6.301E-09
10		-2.0	1.128E-02	1.149E-04	3.769E-05	8.376E-06	9.797E-07	1.599E-07	5.713E-09
11		-2.5	1.052E-02	9.412E-05	3.473E-05	8.098E-06	9.521E-07	1.540E-07	5.367E-09
12		-3.0	9.788E-03	7.721E-05	3.170E-05	7.803E-06	9.284E-07	1.496E-07	5.134E-09
13		-3.5	9.100E-03	6.374E-05	2.874E-05	7.490E-06	9.064E-07	1.459E-07	4.962E-09
14		-4.0	8.458E-03	5.310E-05	2.593E-05	7.161E-06	8.849E-07	1.427E-07	4.825E-09
15		-4.5	7.864E-03	4.467E-05	2.333E-05	6.822E-06	8.632E-07	1.397E-07	4.711E-09
16		-5.0	7.315E-03	3.795E-05	2.096E-05	6.476E-06	8.412E-07	1.368E-07	4.611E-09
17		-5.5	6.809E-03	3.256E-05	1.882E-05	6.129E-06	8.187E-07	1.340E-07	4.520E-09
18		-6.0	6.341E-03	2.817E-05	1.691E-05	5.783E-06	7.956E-07	1.312E-07	4.436E-09
19		-6.5	5.910E-03	2.458E-05	1.521E-05	5.443E-06	7.720E-07	1.283E-07	4.356E-09
20		-7.0	5.511E-03	2.161E-05	1.370E-05	5.112E-06	7.480E-07	1.255E-07	4.279E-09
21		-7.5	5.142E-03	1.913E-05	1.236E-05	4.791E-06	7.235E-07	1.226E-07	4.204E-09
22		-8.0	4.801E-03	1.704E-05	1.117E-05	4.483E-06	6.988E-07	1.197E-07	4.130E-09
23		-8.5	4.484E-03	1.526E-05	1.012E-05	4.188E-06	6.739E-07	1.167E-07	4.057E-09
24		-9.0	4.191E-03	1.375E-05	9.182E-06	3.908E-06	6.489E-07	1.137E-07	3.984E-09
25		-9.5	3.918E-03	1.244E-05	8.350E-06	3.643E-06	6.239E-07	1.106E-07	3.910E-09
26		-10.0	3.664E-03	1.131E-05	7.608E-06	3.392E-06	5.991E-07	1.076E-07	3.837E-09

第1図に床上1.5m、1m、30cm、3cm、1.5cm、0cm位置での各位置に置いた点線源からの線量率を示す。床上1.5m、1mでは線源位置を50cmまで変えても線量率は2割程度しか変わらない。床上30cmでは線源位置によりゆるやかに減少し50cmで1/4程度になる。床上3cm、1.5cm、0cmと床に近づくほど、線源位置からの距離により急激に減少する。

第2表に線源位置2.5cmに対する各位置の線量率比を示す。例えば床上1.5cm高さの線量率では、基準位置2.5cmから2.5cm離れた5cm位置の線源では30%に、また7.5cm離れた10cm位置の線源では8%に減少していることがわかる。

なお、床上1.5cmの穴の東西南北の測定点では、東西で最大3倍の線量率の違いが出ている穴（新穿孔穴⑫）があった。東西の測定位置は9cm離れているので、床上汚染が局在していたと考えれば充分ありえると思われる。



第1図 床上高さ毎の点線源からの線量率

第2表 線源位置 2.5cm に対する各位置の線量率比

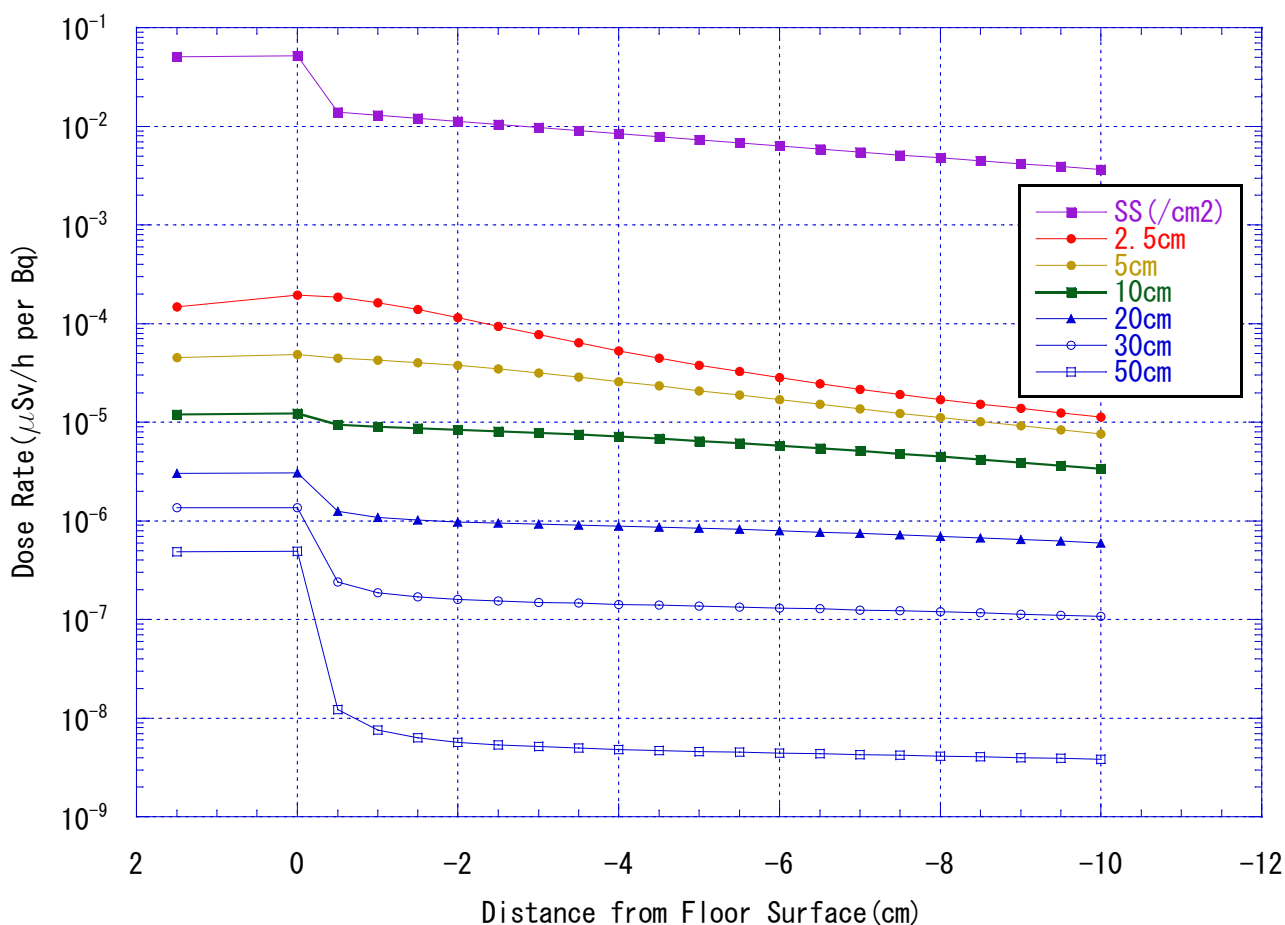
線源位置(cm)	点線源					
	2.5	5.0	10.0	20.0	30.0	50.0
線源間距離(cm)	基準(0.0)	2.5	7.5	17.5	27.5	47.5
床上 3 cm	基準(1.0)	0.4388	0.1352	0.0359	0.0161	0.0058
床上 1.5cm		0.3044	0.0805	0.0204	0.0091	0.0033
床上 0cm		0.2503	0.0626	0.0156	0.0070	0.0025

第2図に点線源位置を変えたときの穴内線量率分布の形状を示す。線源が 2.5cm 位置では床上も穴内もコンクリートを通過しないが、それ以降は穴から遠ざかるに従いコンクリート通過距離が長くなるため急激に穴内への線量率寄与が小さくなる。床上の位置では線源からの距離の二乗で減衰する。これらが組み合わさった形になっており、各点線源の形を床面全体で積分すると SS と表示した面線源のときの減衰形状になる。

第3表に床上 1.5cm と穴内 0.5cm の線量率比を示す。

面線源では 3.6 であるが、点線源では 20cm 位置まではこれより低くなっている。今後の解析で床汚

染を面線源で扱うとき、高汚染部位があると違いが大きくなるパラメータの一つである。



第2図 点線源位置による穴内線量率分布(参考：SS=面線源)

第3表 床上1.5cmと穴内-0.5cmの線量率比

線源位置(cm)	面線源	点線源					
	2.5-2221.5	2.5	5.0	10.0	20.0	30.0	50.0
比(床上1.5cm/ 穴内-0.5cm)	3.6	0.8	1.0	1.3	2.4	5.7	40.1

### 3. 参考資料

- 1) 「床上の汚染位置による線量率寄与の違いについて」2022年6月25日 R0  
林 克己、平山 英夫
- 2) QAD-CGGP2 AND G33-GP2 : REVISED VERSION OF QAD-CGGP AND G33-GP2,  
JAERI-M 90-110, June 1990

## 高汚染部からの距離による床上および穴内線量率分布の検討

2022年6月24日 R1

林 克己、平山英夫

### 1. はじめに

2号機シールドプラグトップカバー下面の汚染密度の評価のための最後の測定として、2021年12月にATOMTEX社のPolimaster 1704Mを使用して、IRIDが穿孔した2個の穴（直径10cm、深さ7cm、以下IRID穴）と新たに穿孔した13個の穴（直径10cm、深さ10cm、以下新穿孔穴）の中の線量率分布が測定された。

測定された穴内線量率分布は、IRID穴2個でもその絶対値は4倍違いまた分布形状も異なっていた。また新穿孔穴13個はIRIDの穴より絶対値は小さくIRID穴とは異なる分布形状であった。

これらの線量率測定値にはトップカバー下面のうち、直下の半径50cm程度のCs137汚染密度が反映されるため、絶対値はそれぞれの穴の位置の直下の汚染密度に依存する。

しかし穴内の線量率分布が異なる原因は別があり、これは厚さ61cmのトップカバー内の鉄筋の効果や、偏在した高汚染部との位置関係などが考えられる。鉄筋の効果については別資料<sup>1)</sup>にて検討したので、この資料では高汚染部との距離の効果について検討した。

### 2. 高汚染部からの床上および穴の中の線量率分布の評価

新穿孔穴の穿孔位置を検討するため予めトップカバー床上3cmでの線量率の測定が行われた。この測定により測定値に大きな幅があったことからトップカバー下面の汚染密度には高汚染部と低汚染部が存在していることが想定されていた。また、この汚染部は床上3cmでの線量率の測定ではトップカバー下面直下の半径50cmの範囲の汚染が反映されるが、測定値をみるとこの範囲の中で高汚染部が偏在または高汚染部から少し離れた位置での測定値である可能性もあることが判ってきた<sup>2) 3)</sup>。

この高汚染部からの距離による違いは、穴内の線量率分布にどのように影響するかを確認するため、参考資料3と同様の方法により、床上1.5cmの中央、東西南北と穴内線量率分布形状について、高汚染部からの距離による違いとともに、汚染がトップカバー下面に均一である場合と比較検討した。特に穴内線量率分布については穴壁等からの寄与と穴底からの寄与についてそれぞれ比較した。

### 3. 計算モデル

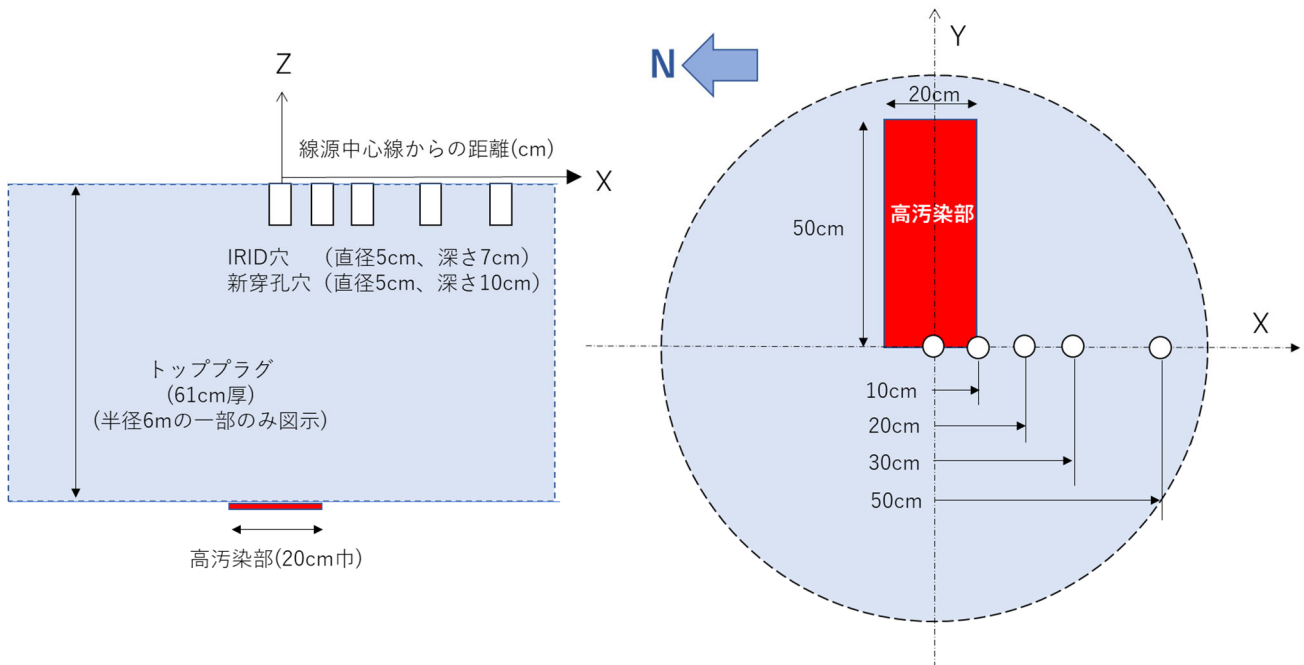
第1図に計算モデルを示す。鉄筋の効果については別途検討済みであり高密度線源からの距離の効果だけ検討するため、トップカバーの鉄筋はモデルに入れず密度2.1g/cm<sup>3</sup>のコンクリートとした。トップカバー下面に幅20cm、長さ50cmの高汚染部を設定し、IRID穴（直径5cm、深さ7cm）、新穿孔穴の（直径5cm、深さ10cm）について、高汚染部の中心(0cm)、高汚染部の端(10cm)、中心から20cm、30cm、50cmの位置に計算ケースごとにずらして設定し、計10ケースについて床上1.5cmで穴の中心と東西南北、および穴内深さ方向に0.5cmずつ計算点を設定した。

参考資料<sup>3)</sup>ではY（東西）方向に±50cmとして長さ100cmの高汚染部を設定していたが、今回は床上1.5cmでの東西方向の違いを見るため、片側だけとした。（Y方向に見る必要がないときは今回の計算値を床上1.5cmの場合は東西の結果の和、その他については2倍すれば、参考資料<sup>3)</sup>での線源設定と同じになる）

穴内の線量率分布については、参考資料1)で明らかになったように、穴の底からの寄与と穴の壁からの寄与それぞれの分布の形に特性があり、その結果、2つの合計で決まる穴内線量率分布の形は穴の深さで変わることが判っている。そのため、今回は高汚染部からの距離によってこの傾向が変わるのかをみるため、穴の底からの寄与を塞ぐことにより穴の壁からの成分を求め、これらを分けて検討した。

なお、床上1.5cmの中央、東西南北についてもこの2つの成分に分けているが、穴の底からの成分以外は「穴の壁等から」と表示してあるように穴をよぎらない成分も入っている。

計算にはQAD-CGGP2R<sup>4)</sup>を使用した。



第1図 高汚染部と穴（各計算で穴は1個のみ）の計算モデル

#### 4. 計算結果と考察

第1表にIRID穴について、第2表に新穿孔穴について高汚染部からの距離による穴の真上及び東西南北の床上と穴の中深さ方向線量率計算値を示す。

第1表のIRID穴と第2表の新穿孔穴の計算点のうち、床上1.5cmの東西南北の線量率について、東西の比と南北の比を第3表に示す。

第3表 IRID 穴と新穿孔穴の床上 1.5cm の東西の比と南北の比

位置		0cm	10cm	20cm	30cm	50cm
IRID穴	東/西	1.02	1.05	1.16	1.31	1.34
	北/南	1.00	1.17	1.17	1.07	1.02
新穿孔穴	東/西	0.75	0.83	1.07	1.31	1.34
	北/南	1.00	1.04	0.90	0.81	0.75

東側だけに線源が置かれているので東西で比べると東が高く、また線源に近いことから南北で比べると北が高くなることが予想される。IRID 穴はこの想定通りになっており、位置によりその比の範囲は、1.00～1.34 となっている。

新穿孔穴はこれが逆となっている箇所があり、この原因は穴底から寄与にあることが第2表からわかる。これらの逆転は穴底から穴を通して穴壁から東西南北の計算点に到達した成分と考えられる。新穿孔穴は IRID 穴より 3cm 深いため穴底の単位汚染密度あたりの線量率が高く、その結果 IRID 穴に比べて穴底の成分が東西南北の計算点への寄与が大きくなると考えられる。東西と南北の比の範囲は 0.75～1.34 と IRID 穴に比べて広がっている。

次に、第1表と第2表の穴の中の分布をみしてみる。

第1表の IRID 穴も第2表の新規穿孔穴も、穴の壁からの寄与と穴の底からの寄与、及びそれらの合計の形は、参考資料1の鉄筋の影響が一番少ない位置（鉄筋との位置関係で①）とほぼ同じ線量率分布形状にみえる。

詳しく見るため第2図から第4図に、高汚染部からの距離による穴内線量率分布の変化について合計線量率の変化、穴壁からの線量率分布の変化、穴底からの線量率の変化を示す。

第2図の合計線量率をみると、IRID 穴も新穿孔穴も穴内分布形状は 20cm 位置までは参考資料1の①と同じなだらかな減衰であるが 30cm 位置では少し変わり 50cm まで離れたところでは形状が異なる。

第3図の穴の壁からの寄与をみると IRID 穴も新穿孔穴も穴底から 3cm（IRID 穴では深さ 4cm 位置、新穿孔穴では深さ 7cm 位置）から寄与があり、参考資料1の①と同じである。

第4図の穴の底からの寄与を見ると 20cm 位置から資料1の①と比べて傾向が変わり始め、30cm 位置、50cm 位置では穴の出口に向かって減衰が大きくなる。これは線源から離れるほど線源から底に入射する角度が大きくなることが原因と考えられる。この穴の底からの寄与が距離により違うことが、合計線量率の形状が 30cm 位置では少し変わり 50cm まで離れたところでは形状が異なる原因となっている。

第5図から第9図に、高汚染部からの距離（0cm、10cm、20cm、30cm、50cm）毎に、IRID 穴と新穿孔穴の穴内線量率分布を示す。



## 5. まとめ

高汚染部からの距離が 20～30cm までは穴内の合計線量率分布の形は大きく変わらないが、50cm 以上では分布形状が変わることがわかった。

参考資料 1 に示した鉄筋と穴の位置関係での穴内線量率分布の変化、参考資料 5 のオペフロ内壁汚染の穴内線量率への寄与評価と合わせ、これらの穴内分布の形は測定データの穴内線量率分布形状の解釈に使う予定である。

## 6. 参考資料

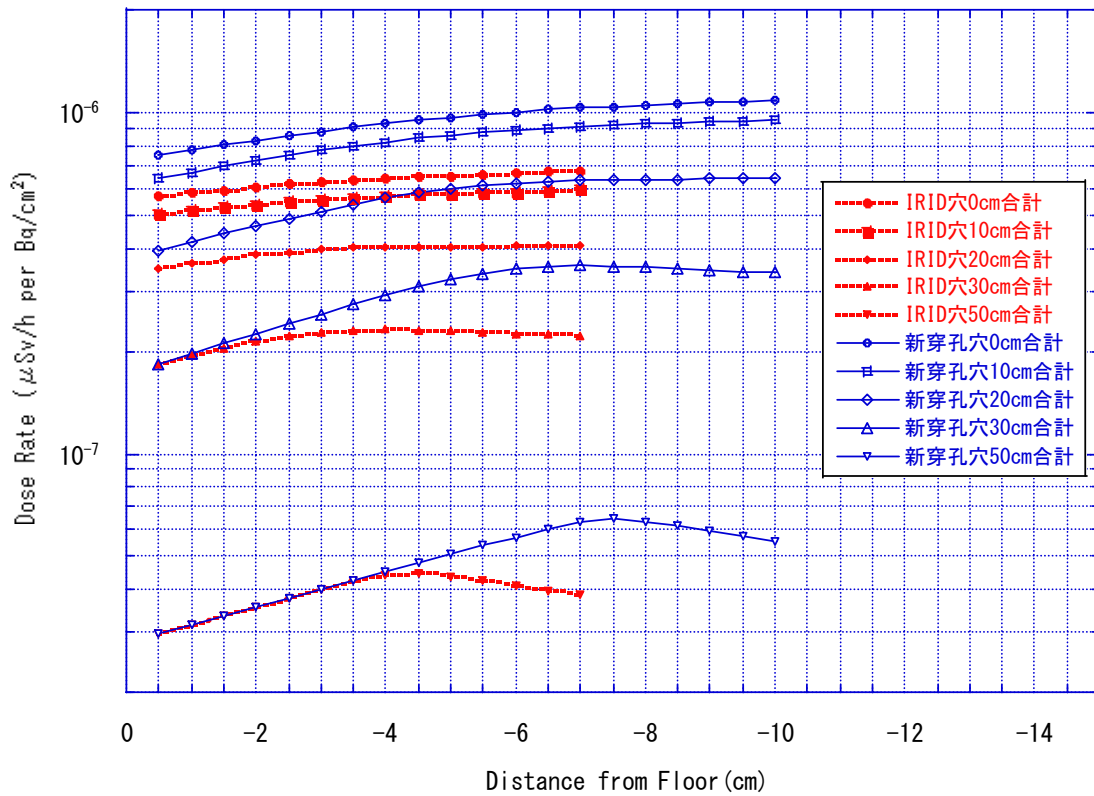
- 1) 「2 号機シールドプラグの IRID 穴と新穿孔穴の穴内線量率分布の比較」  
2022 年 6 月 13 日 R0 林 克己、平山英夫
- 2) 「2 号機シールドプラグ床上測定線量率分布図の改訂」  
2022 年 4 月 7 日 R3 林 克己、平山 英夫
- 3) 「2 号機シールドプラグトップカバーの表面線量率測定での近距離での測定値の違いの考察」  
2022 年 4 月 18 日 R2 林 克己、平山 英夫
- 4) QAD-CGGP2 AND G33-GP2 : REVISED VERSION OF QAD-CGGP AND G33-GP2,  
JAERI-M 90-110, June 1990
- 5) 「2 号機オペフロ内壁汚染のシールドプラグ穴内線量率への寄与」  
2022 年 5 月 26 日 R6 林 克己、平山 英夫

第1表 高汚染部からの距離による穴の真上及び東西南北の床上と穴の中深さ方向線量率計算値 (IRID 穴)

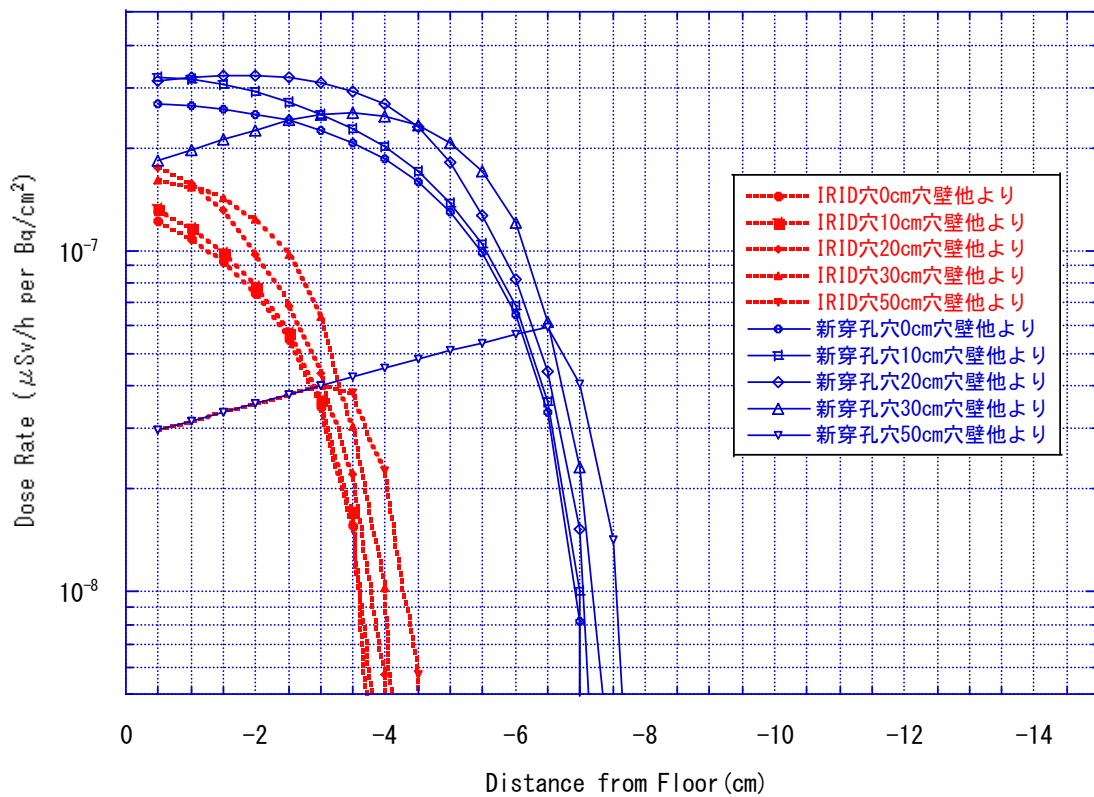
計算点位置			線量率(μSv/h per Bq/cm2) 【Cs137+4.4%Cs134】														
No.	床位置	床上高さ	IRID穴 (0cm) (汚染中心)			IRID穴 (10cm) (汚染端)			IRID穴 (20cm)			IRID穴 (30cm)			IRID穴 (50cm)		
			穴壁等から	穴底から	合計	穴壁等から	穴底から	合計	穴壁等から	穴底から	合計	穴壁等から	穴底から	合計	穴壁等から	穴底から	合計
1	穿孔穴の中心	1.5	1.561E-07	3.498E-07	5.059E-07	1.840E-07	2.591E-07	4.431E-07	2.034E-07	8.420E-08	2.876E-07	1.404E-07	0.000E+00	1.404E-07	2.328E-08	0.000E+00	2.328E-08
2	穿孔穴の東側	1.5	2.523E-07	0.000E+00	2.523E-07	2.256E-07	0.000E+00	2.256E-07	1.621E-07	0.000E+00	1.621E-07	9.530E-08	0.000E+00	9.530E-08	1.994E-08	0.000E+00	1.994E-08
3	穿孔穴の南側	1.5	2.120E-07	0.000E+00	2.120E-07	1.440E-07	3.600E-08	1.800E-07	6.055E-08	8.105E-08	1.416E-07	2.791E-08	7.219E-08	1.001E-07	1.768E-08	7.780E-09	2.546E-08
4	穿孔穴の西側	1.5	8.777E-08	1.607E-07	2.485E-07	9.965E-08	1.158E-07	2.154E-07	1.043E-07	3.540E-08	1.397E-07	7.251E-08	0.000E+00	7.251E-08	1.489E-08	0.000E+00	1.489E-08
5	穿孔穴の北側	1.5	2.120E-07	0.000E+00	2.120E-07	2.097E-07	0.000E+00	2.097E-07	1.663E-07	0.000E+00	1.663E-07	1.071E-07	0.000E+00	1.071E-07	2.604E-08	0.000E+00	2.604E-08
6	穿孔穴内部	-0.5	1.227E-07	4.442E-07	5.669E-07	1.325E-07	3.712E-07	5.037E-07	1.754E-07	1.718E-07	3.472E-07	1.600E-07	2.260E-08	1.826E-07	2.966E-08	0.000E+00	2.966E-08
7		-1.0	1.084E-07	4.724E-07	5.808E-07	1.161E-07	4.009E-07	5.170E-07	1.565E-07	2.042E-07	3.607E-07	1.540E-07	3.960E-08	1.936E-07	3.150E-08	0.000E+00	3.150E-08
8		-1.5	9.246E-08	5.014E-07	5.939E-07	9.844E-08	4.308E-07	5.292E-07	1.309E-07	2.419E-07	3.728E-07	1.421E-07	6.200E-08	2.041E-07	3.344E-08	0.000E+00	3.344E-08
9		-2.0	7.453E-08	5.315E-07	6.060E-07	7.853E-08	4.617E-07	5.402E-07	9.765E-08	2.854E-07	3.830E-07	1.236E-07	8.990E-08	2.135E-07	3.551E-08	0.000E+00	3.551E-08
10		-2.5	5.442E-08	5.624E-07	6.168E-07	5.739E-08	4.924E-07	5.498E-07	6.864E-08	3.223E-07	3.909E-07	9.734E-08	1.242E-07	2.215E-07	3.769E-08	0.000E+00	3.769E-08
11		-3.0	3.458E-08	5.916E-07	6.262E-07	3.663E-08	5.214E-07	5.580E-07	4.348E-08	3.533E-07	3.968E-07	6.408E-08	1.633E-07	2.274E-07	4.000E-08	0.000E+00	4.000E-08
12		-3.5	1.560E-08	6.186E-07	6.342E-07	1.724E-08	5.473E-07	5.645E-07	2.199E-08	3.787E-07	4.007E-07	3.044E-08	2.001E-07	2.305E-07	3.811E-08	4.320E-09	4.243E-08
13		-4.0	1.333E-09	6.396E-07	6.409E-07	2.482E-09	5.672E-07	5.697E-07	5.687E-09	3.973E-07	4.030E-07	1.024E-08	2.210E-07	2.312E-07	2.263E-08	2.164E-08	4.427E-08
14		-4.5	8.110E-32	6.467E-07	6.467E-07	7.913E-32	5.739E-07	5.739E-07	7.376E-32	4.040E-07	4.040E-07	4.856E-10	2.298E-07	2.303E-07	5.715E-09	3.894E-08	4.465E-08
15		-5.0	8.230E-32	6.526E-07	6.526E-07	8.028E-32	5.780E-07	5.780E-07	7.475E-32	4.047E-07	4.047E-07	6.704E-32	2.288E-07	2.288E-07	5.234E-11	4.362E-08	4.367E-08
16		-5.5	8.353E-32	6.585E-07	6.585E-07	8.145E-32	5.822E-07	5.822E-07	7.576E-32	4.053E-07	4.053E-07	6.785E-32	2.272E-07	2.272E-07	5.083E-32	4.237E-08	4.237E-08
17		-6.0	8.479E-32	6.645E-07	6.645E-07	8.264E-32	5.863E-07	5.863E-07	7.679E-32	4.059E-07	4.059E-07	6.867E-32	2.255E-07	2.255E-07	5.129E-32	4.106E-08	4.106E-08
18		-6.5	8.607E-32	6.706E-07	6.706E-07	8.386E-32	5.905E-07	5.905E-07	7.784E-32	4.065E-07	4.065E-07	6.951E-32	2.238E-07	2.238E-07	5.175E-32	3.977E-08	3.977E-08
19		-7.0	8.712E-32	6.768E-07	6.768E-07	8.485E-32	5.947E-07	5.947E-07	7.869E-32	4.069E-07	4.069E-07	7.019E-32	2.220E-07	2.220E-07	5.213E-32	3.848E-08	3.848E-08

第2表 高汚染部からの距離による穴の真上及び東西南北の床上と穴の中深さ方向線量率計算値（新穿孔穴）

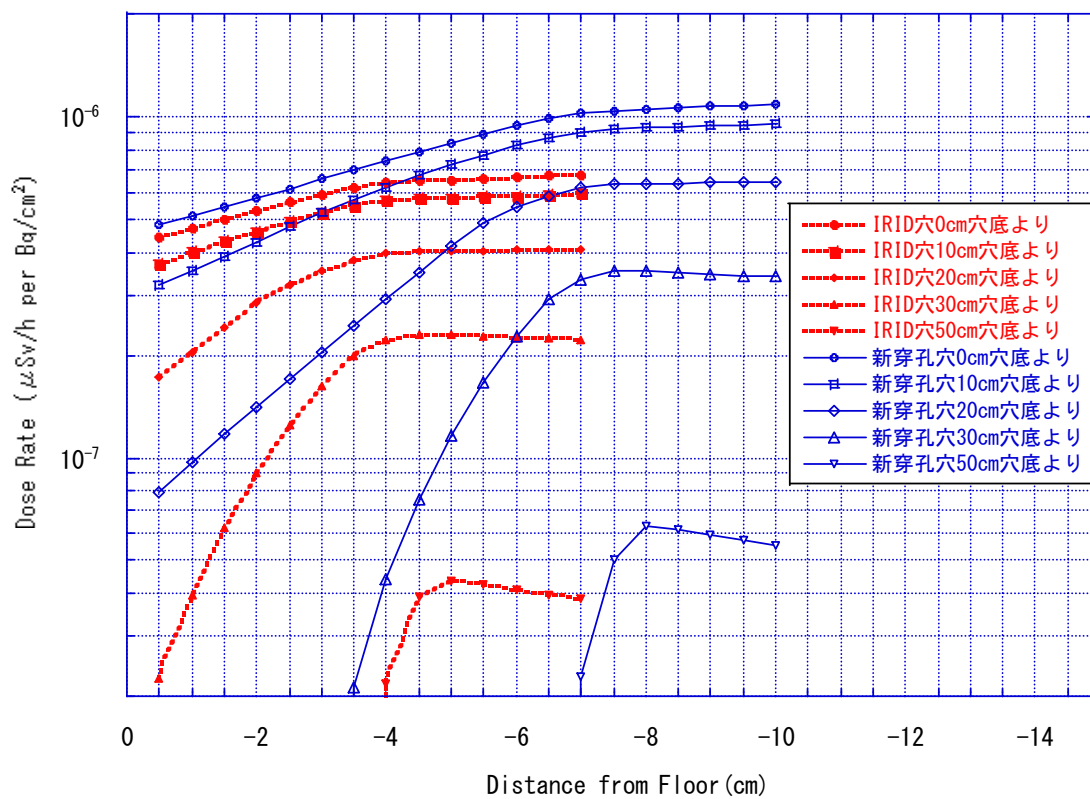
No.	床位置	床上高さ	新穿孔穴(0cm) (汚染中心)			新穿孔穴(10cm) (汚染端)			新穿孔穴(20cm)			新穿孔穴(30cm)			新穿孔穴(50cm)		
			穴壁等から	穴底から	合計	穴壁等から	穴底から	合計	穴壁等から	穴底から	合計	穴壁等から	穴底から	合計	穴壁等から	穴底から	合計
1	穿孔穴の中心	1.5	2.651E-07	3.861E-07	6.512E-07	3.095E-07	2.289E-07	5.384E-07	2.745E-07	3.580E-08	3.103E-07	1.404E-07	0.000E+00	1.404E-07	2.328E-08	0.000E+00	2.328E-08
2	穿孔穴の東側	1.5	2.523E-07	0.000E+00	2.523E-07	2.256E-07	0.000E+00	2.256E-07	1.621E-07	0.000E+00	1.621E-07	9.530E-08	0.000E+00	9.530E-08	1.994E-08	0.000E+00	1.994E-08
3	穿孔穴の南側	1.5	2.041E-07	9.500E-09	2.136E-07	1.326E-07	6.990E-08	2.025E-07	7.079E-08	1.141E-07	1.849E-07	6.918E-08	6.292E-08	1.321E-07	2.618E-08	0.000E+00	2.618E-08
4	穿孔穴の西側	1.5	1.077E-07	2.265E-07	3.342E-07	1.376E-07	1.331E-07	2.707E-07	1.323E-07	1.980E-08	1.521E-07	7.251E-08	0.000E+00	7.251E-08	1.489E-08	0.000E+00	1.489E-08
5	穿孔穴の北側	1.5	2.041E-07	9.500E-09	2.136E-07	2.097E-07	0.000E+00	2.097E-07	1.663E-07	0.000E+00	1.663E-07	1.071E-07	0.000E+00	1.071E-07	2.604E-08	0.000E+00	2.604E-08
6	穿孔穴内部	-0.5	2.686E-07	4.826E-07	7.512E-07	3.218E-07	3.209E-07	6.427E-07	3.157E-07	7.960E-08	3.953E-07	1.839E-07	0.000E+00	1.839E-07	2.966E-08	0.000E+00	2.966E-08
7		-1.0	2.654E-07	5.116E-07	7.770E-07	3.169E-07	3.528E-07	6.697E-07	3.214E-07	9.710E-08	4.185E-07	1.967E-07	0.000E+00	1.967E-07	3.150E-08	0.000E+00	3.150E-08
8		-1.5	2.589E-07	5.440E-07	8.029E-07	3.075E-07	3.893E-07	6.968E-07	3.249E-07	1.174E-07	4.423E-07	2.104E-07	0.000E+00	2.104E-07	3.344E-08	0.000E+00	3.344E-08
9		-2.0	2.509E-07	5.779E-07	8.288E-07	2.933E-07	4.303E-07	7.236E-07	3.251E-07	1.413E-07	4.664E-07	2.250E-07	0.000E+00	2.250E-07	3.551E-08	0.000E+00	3.551E-08
10		-2.5	2.399E-07	6.146E-07	8.545E-07	2.724E-07	4.773E-07	7.497E-07	3.208E-07	1.700E-07	4.908E-07	2.406E-07	0.000E+00	2.406E-07	3.769E-08	0.000E+00	3.769E-08
11		-3.0	2.250E-07	6.547E-07	8.797E-07	2.505E-07	5.241E-07	7.746E-07	3.118E-07	2.031E-07	5.149E-07	2.509E-07	6.300E-09	2.572E-07	4.000E-08	0.000E+00	4.000E-08
12		-3.5	2.073E-07	6.969E-07	9.042E-07	2.263E-07	5.721E-07	7.984E-07	2.935E-07	2.449E-07	5.384E-07	2.531E-07	2.130E-08	2.744E-07	4.244E-08	0.000E+00	4.244E-08
13		-4.0	1.850E-07	7.426E-07	9.276E-07	2.005E-07	6.202E-07	8.207E-07	2.676E-07	2.932E-07	5.608E-07	2.473E-07	4.430E-08	2.916E-07	4.503E-08	0.000E+00	4.503E-08
14		-4.5	1.595E-07	7.903E-07	9.498E-07	1.705E-07	6.710E-07	8.415E-07	2.303E-07	3.509E-07	5.812E-07	2.331E-07	7.520E-08	3.083E-07	4.776E-08	0.000E+00	4.776E-08
15		-5.0	1.300E-07	8.404E-07	9.704E-07	1.380E-07	7.222E-07	8.602E-07	1.808E-07	4.182E-07	5.990E-07	2.077E-07	1.161E-07	3.238E-07	5.066E-08	0.000E+00	5.066E-08
16		-5.5	9.845E-08	8.906E-07	9.890E-07	1.041E-07	7.727E-07	8.768E-07	1.267E-07	4.864E-07	6.131E-07	1.702E-07	1.670E-07	3.372E-07	5.371E-08	0.000E+00	5.371E-08
17		-6.0	6.474E-08	9.403E-07	1.005E-06	6.868E-08	8.222E-07	8.909E-07	8.210E-08	5.414E-07	6.235E-07	1.204E-07	2.271E-07	3.475E-07	5.694E-08	0.000E+00	5.694E-08
18		-6.5	3.343E-08	9.856E-07	1.019E-06	3.619E-08	8.662E-07	9.024E-07	4.439E-08	5.861E-07	6.305E-07	6.169E-08	2.921E-07	3.538E-07	5.980E-08	5.600E-10	6.036E-08
19		-7.0	8.129E-09	1.023E-06	1.031E-06	1.002E-08	9.015E-07	9.115E-07	1.527E-08	6.194E-07	6.347E-07	2.303E-08	3.326E-07	3.556E-07	4.078E-08	2.270E-08	6.348E-08
20		-7.5	8.873E-32	1.041E-06	1.041E-06	8.637E-32	9.187E-07	9.187E-07	2.281E-10	6.363E-07	6.365E-07	2.551E-09	3.518E-07	3.544E-07	1.410E-08	5.049E-08	6.459E-08
21		-8.0	9.010E-32	1.051E-06	1.051E-06	8.767E-32	9.255E-07	9.255E-07	8.111E-32	6.374E-07	6.374E-07	7.210E-32	3.518E-07	3.518E-07	4.272E-10	6.294E-08	6.337E-08
22		-8.5	9.150E-32	1.061E-06	1.061E-06	8.900E-32	9.323E-07	9.323E-07	8.224E-32	6.382E-07	6.382E-07	7.299E-32	3.489E-07	3.489E-07	5.365E-32	6.132E-08	6.132E-08
23		-9.0	9.294E-32	1.071E-06	1.071E-06	9.036E-32	9.391E-07	9.391E-07	8.340E-32	6.389E-07	6.389E-07	7.390E-32	3.459E-07	3.459E-07	5.413E-32	5.924E-08	5.924E-08
24		-9.5	9.440E-32	1.081E-06	1.081E-06	9.174E-32	9.460E-07	9.460E-07	8.458E-32	6.395E-07	6.395E-07	7.482E-32	3.428E-07	3.428E-07	5.462E-32	5.719E-08	5.719E-08
25		-10.0	9.560E-32	1.089E-06	1.089E-06	9.287E-32	9.515E-07	9.515E-07	8.553E-32	6.398E-07	6.398E-07	7.557E-32	3.403E-07	3.403E-07	5.501E-32	5.555E-08	5.555E-08



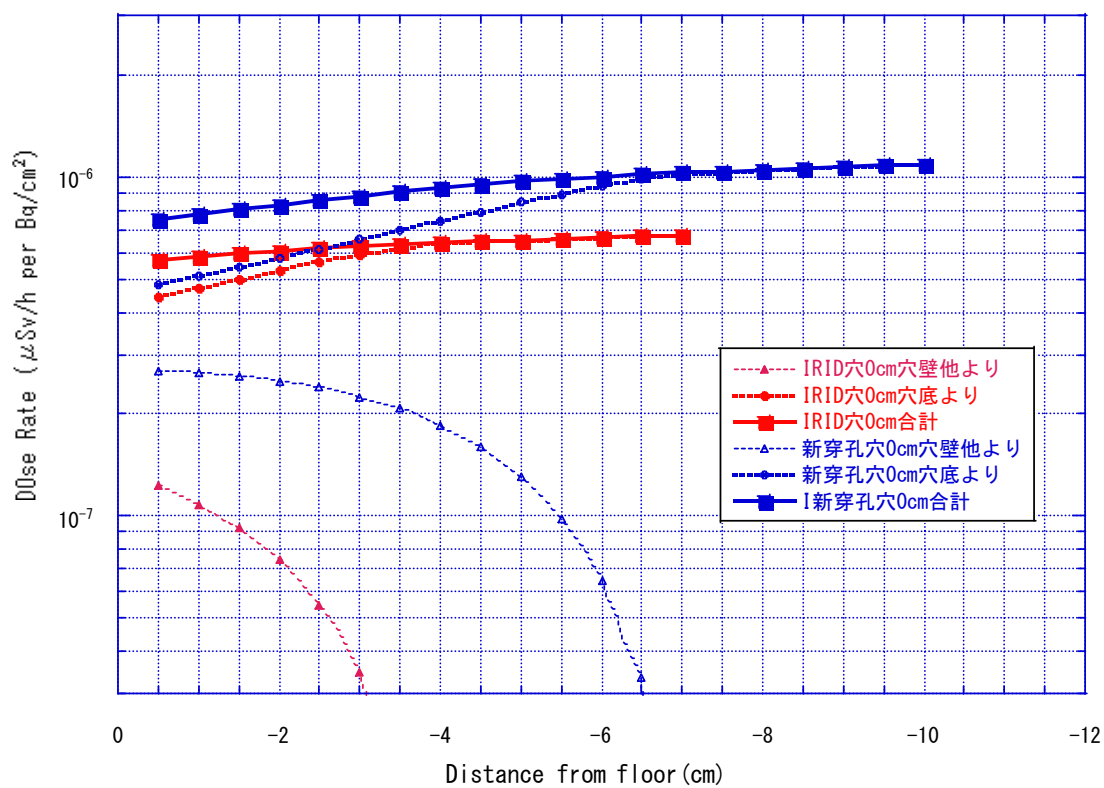
第2図 高汚染部からの距離による穴内線量率分布の変化（合計）



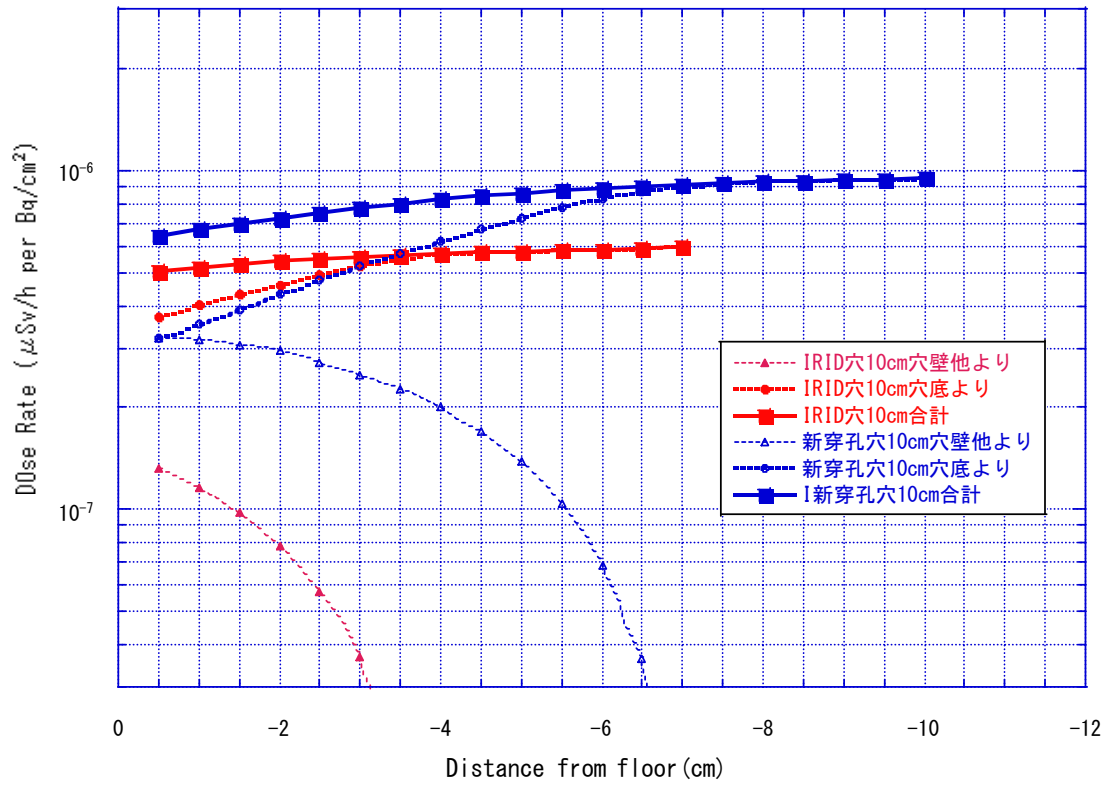
第3図 高汚染部からの距離による穴内線量率分布の変化（穴壁等より）



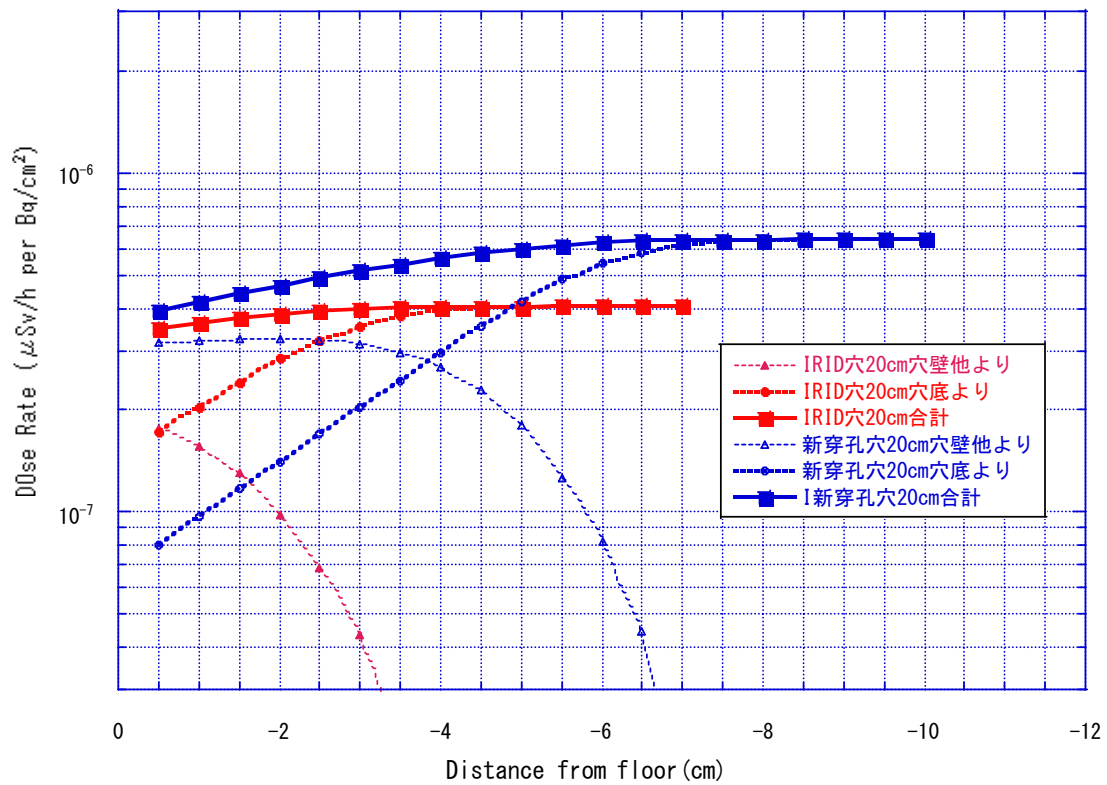
第4図 高汚染部からの距離による穴内線量率分布の変化 (穴底より)



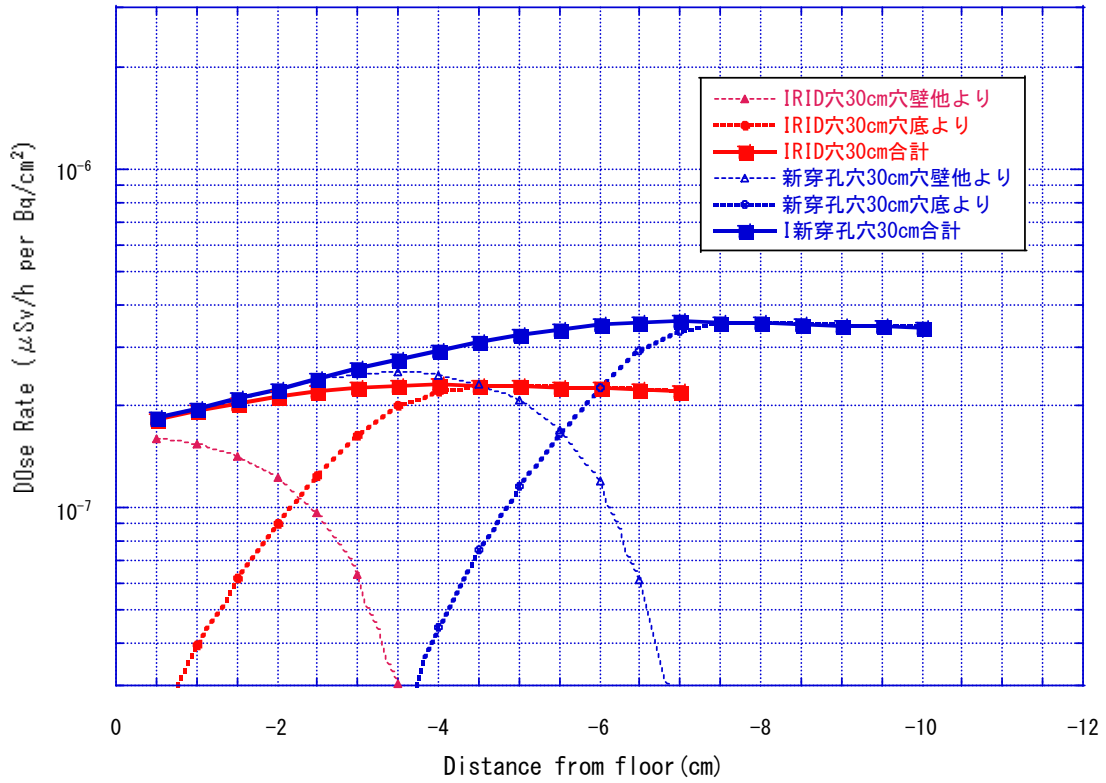
第5図 位置0cm(高汚染部中心)での穴内線量率分布



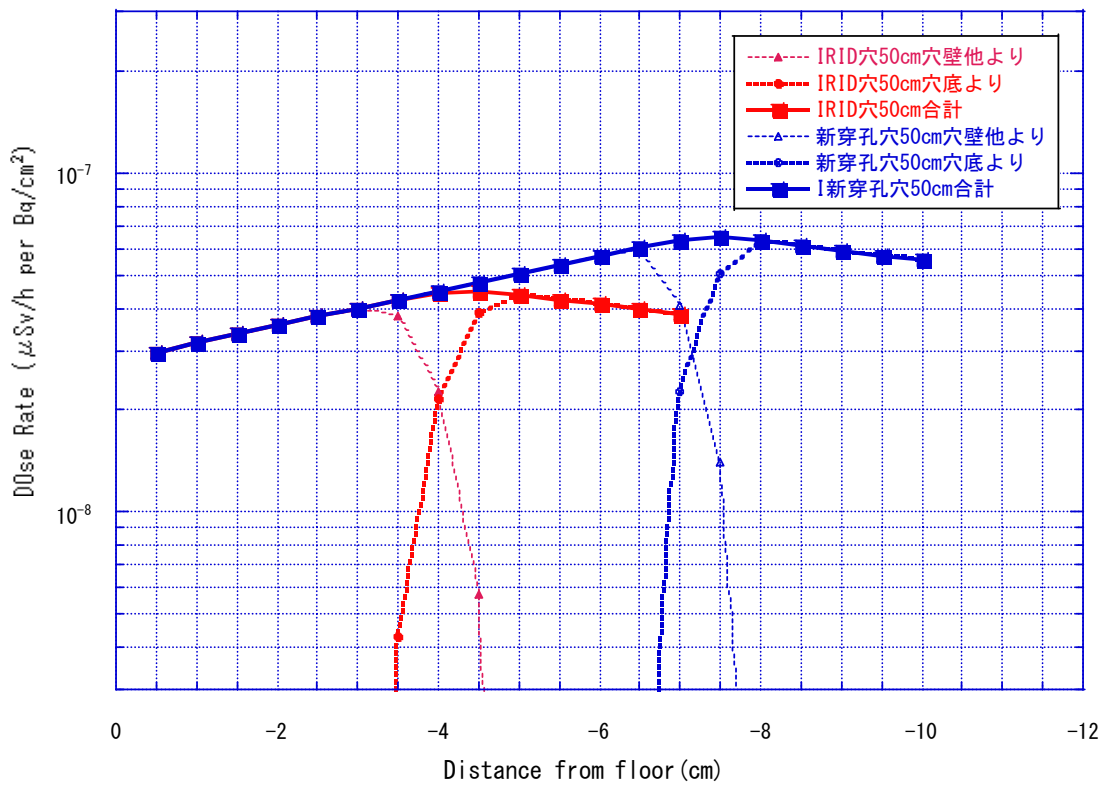
第 6 図 位置 10cm(高汚染部端)での穴内線量率分布



第 7 図 位置 20cm(高汚染部端から 10cm)での穴内線量率分布



第 8 図 位置 30cm(高汚染部端から 20cm)での穴内線量率分布



第 9 図 位置 50cm(高汚染部端から 40cm)での穴内線量率分布

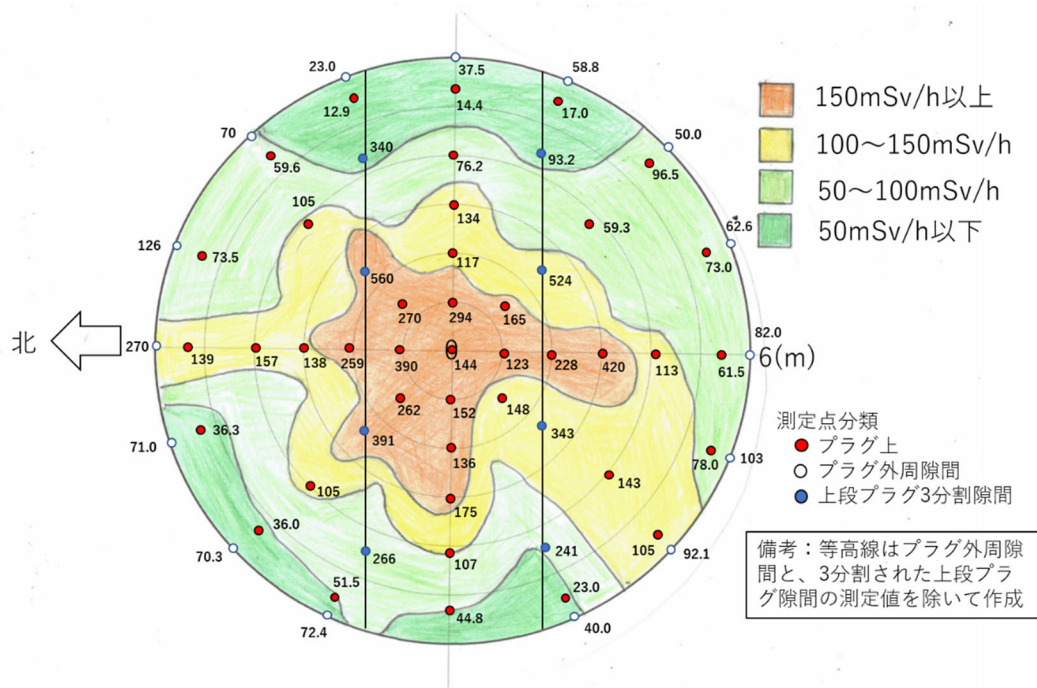
## 2号機シールドプラグ床上測定線量率分布図の改訂

2022年4月7日 R3

林 克己、平山 英夫

### 1. はじめに

2号機シールドプラグの表面線量率分布の測定結果<sup>1)</sup>(第1図)を見ると、シールドプラグトップカバー(上段)の3分割構造の隙間上の測定点8点全てが、1m程度しか離れていない隙間部以外の測定点と比べて2~10倍線量率が高い。この原因は分割部隙間からのストリーミングと考えられたため、表面線量率分布図やこれを元にしたトップカバー下の汚染密度の検討にはこれらの測定値を除いて検討を進めていたが、今回あらためて分割隙間からの寄与について検討した結果<sup>2)</sup>、分割部隙間からのストリーミングと分割部隙間の内面の汚染による寄与は小さく、隙間無のときのトップカバー下面の汚染からの線量率寄与が主であることが判ったため、第1図の改訂を行なった。



第1図 2号機シールドプラグの表面線量率分布の測定結果

### 2. 床上表面線量率分布図の改訂の考え方

以下の考え方で改訂を行なった。

#### (1) 測定値を内挿した分布図は作成しない

日立アロカ製 PDR-303 で測定された床上 64 点の測定値は全て使うが、それを内挿した分布図は作成しない。床上 3cm の測定ではトップカバー下面の直下のほぼ



直径 1m<sup>†</sup>だけの汚染の情報を反映しているので、測定点 64 点だけで内挿して全体の分布図を作成しても離れた測定点間の信頼性は無いこと、それにより誤った理解を引き起こすためである。

(<sup>†</sup> EGS5による解析結果によって直下の直径 1m だけで 90%の寄与があることが判っている)

(2) 日立アロカ製 PDR-303 以外で測定された測定値の扱い

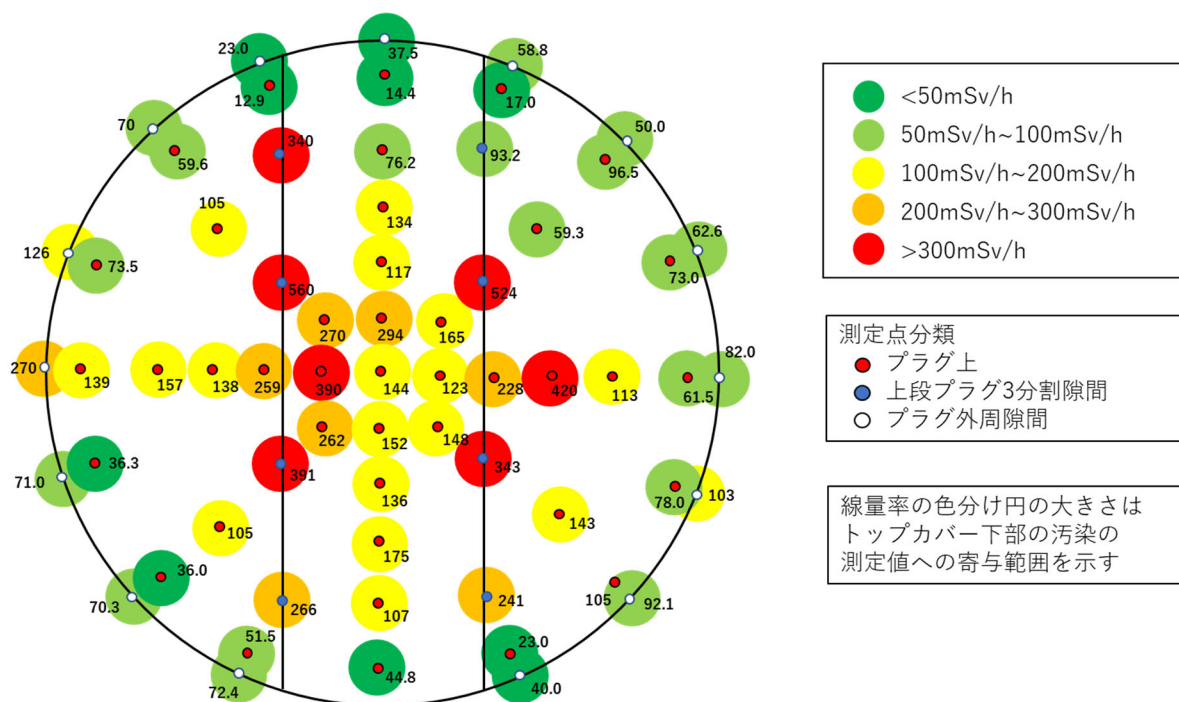
床上 1.5cm の測定では穿孔した穴の脇（東西南北）で Atomtex 社製の AT-2533 の測定結果がある。同じ位置で AT-2533 と PDR-303 を使って測定した結果の比較では、得られた周辺線量当量率に大きな違いがないことが確認されている<sup>3)</sup>。しかし、AT-2533 での穿孔した穴の脇（東西南北）と PDR-303 での床面測定では測定位置が近いものが多いため、また穴の影響も多少あることから採用しないこととした。

(3) トップカバー下面の汚染分布図とトップカバー下面の総汚染量

トップカバー下面の汚染分布図を床上線量率分布図を元に作成していたが、床上線量率分布図と同じ理由で作成しないこととした。また情報の無い領域の内挿によるトップカバー下面の総汚染量の算定も信頼性が無いため行わないこととした。

3. 床上測定線量率分布図

改訂した床上測定線量率分布図を第 2 図に示す。

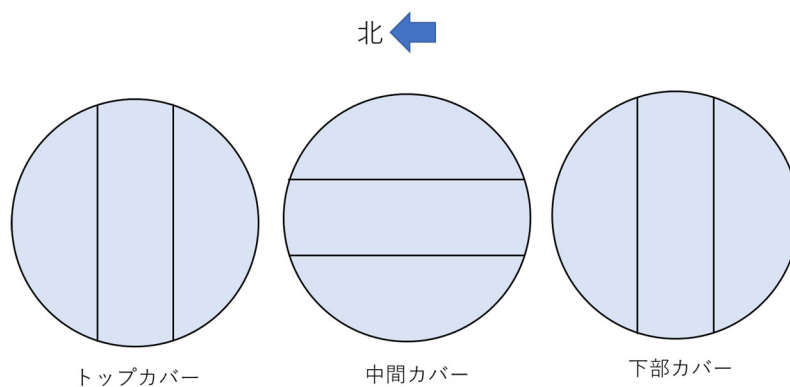


第 2 図 2 号機シールドプラグの表面線量率分布の測定結果 (改訂)

第3図にシールドプラグの構造を示す。トップカバー、中間カバー、下部カバーの3層構造（各層厚さ61cm）で、各層は3分割されており、各層の隙間が90度で交差するように設置されている。

今回はスリットの測定点も採用したことにより、汚染分布としてはトップカバーの東西方向の隙間が高いこと、その中でも中間カバーの南北方向の隙間との交点が特に高いことが判りやすくなった。

なお、線量率の色分け円の直径は1mとして、トップカバー下面の汚染の寄与範囲を示した。これにより、測定点64点だけではシールドプラグ面積の半分以上の汚染が反映されていないこと、また汚染の高い隙間近辺の測定点数がシールドプラグ中心付近測定点数に比べて少ないため、この情報から汚染分布の作成や汚染総量を算定するのは大きな誤りを生むことも想定できる。



第3図 2号機シールドプラグの構造

#### 4. 参考文献

- 1) 第23回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会  
資料3-1 現地調査の実施状況について P12、2021年10月19日
- 2) 2号機シールドプラグトップカバーの分割部隙間からの線量率寄与  
2022年4月5日 R5 林 克己、平山 英夫
- 3) 2号機シールドプラグでの測定に使用した線量計の比較  
2022年3月27日 特命チーム

## 2号機シールドプラグトップカバー下面の汚染密度を評価する場合の 鉄筋の影響について

2022年4月10日 R3

林 克己、平山英夫

### 1. はじめに

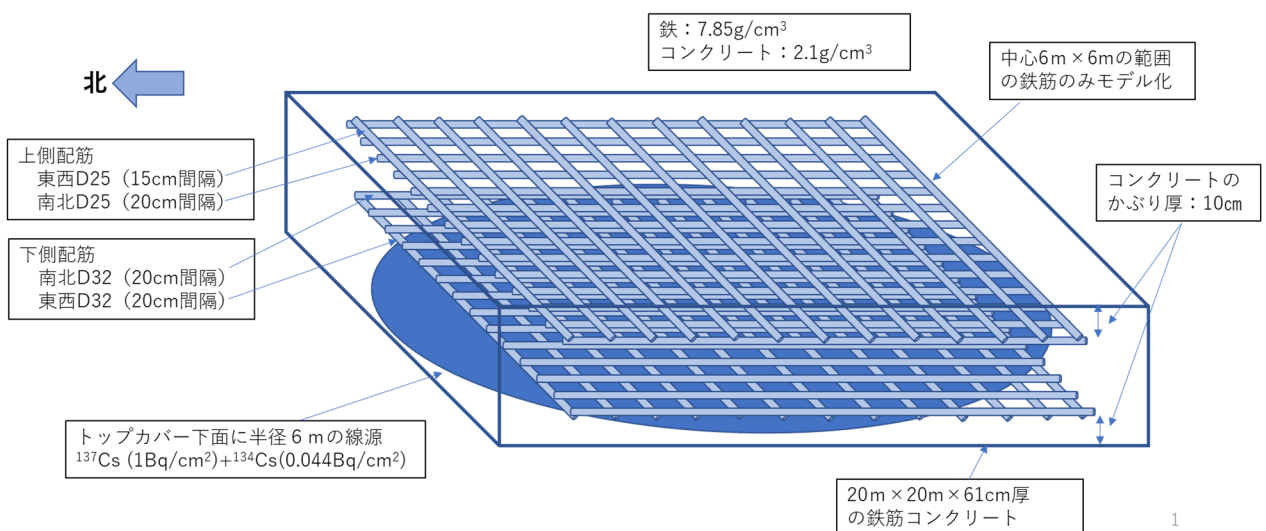
2号機シールドプラグの上方1.5m、30.5cm、3cmや穴の中での測定値を使って、トップカバー（上段）下面の汚染密度の評価を進めている。これまでトップカバーは厚さ61cmのコンクリート（密度 $2.1\text{g/cm}^3$ ）としてその評価を進めていたが、この評価に影響する鉄筋について考察した。

### 2. シールドプラグのトップカバーの鉄筋配置と鉄筋の効果の考え方

トップカバーの鉄筋は上側と下側にそれぞれコンクリート表面からコンクリートかぶり厚10cmの内側に配置されている。上側鉄筋は呼び径D25（異形鉄筋のリブとフシを除いた部分の公称直径は25.4mm）であり、東西方向の鉄筋は15cm間隔で、南北方向は20cm間隔、下側鉄筋は呼び径D32（公称直径は31.8mm）であり、東西方向の鉄筋は20cm間隔で、南北方向は20cm間隔となっている。

鉄筋はコンクリートより遮蔽効果が大きいので線量率に影響するが、その影響の大きさは測定位置により依存する。

床上150cmでの測定では、充分広い範囲となるため鉄筋の効果の位置依存性は現れないと思われるが、床上30cm、床上3cmと近づくと、鉄筋との位置関係に依存する可能性もある。また、穴の中の測定ではコンクリートかぶりがなく鉄筋に近い場合、直下の鉄筋の影響が強く表れる可能性が高い。そこで床上と穴の中についてそれぞれ鉄筋の効果の評価した。



第1図 1F-2 シールドプラグトップカバーの鉄筋モデル

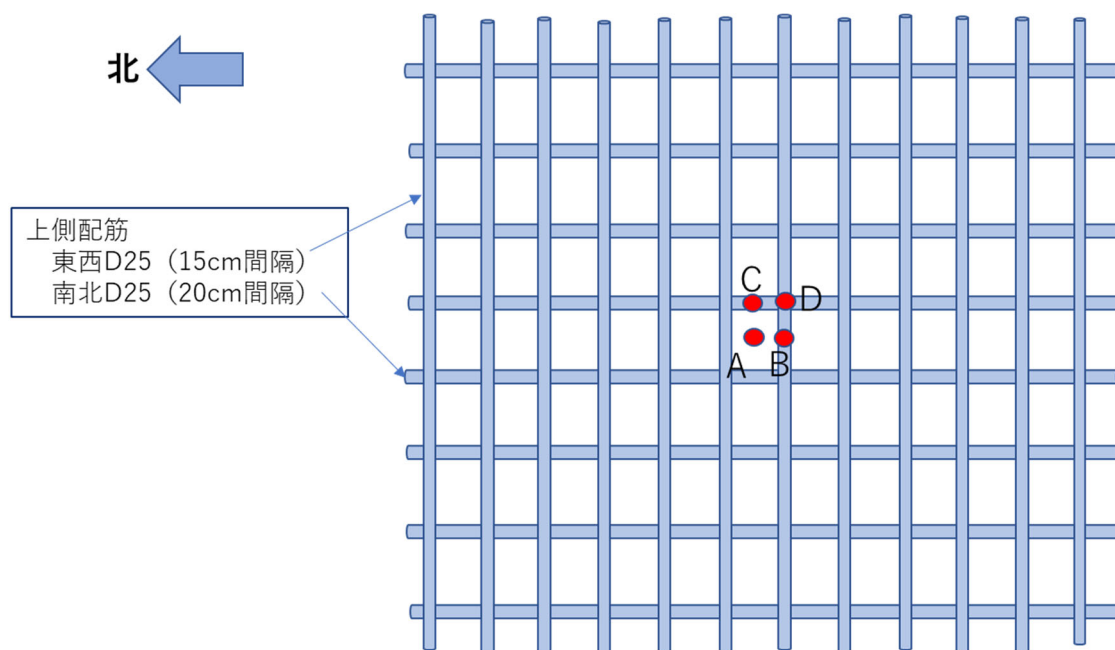
### 3. 床上の測定点での鉄筋の効果

第1図に1F-2 シールドプラグトップカバーの鉄筋モデルを示す。

トップカバーの下面に半径6mの線源 ( $^{137}\text{Cs}$  (1Bq/cm<sup>2</sup>) +  $^{134}\text{Cs}$  (0.044Bq/cm<sup>2</sup>)) を設定した。なお、床上30.5cmの測定だけはコリメータ付線量計であるので、計算ではコリメータで制限される範囲(床面で直径30cm範囲)に対応する線源として、トップカバーの下面に半径45cmの線源を設定した。この方法を使うために床上30.5cmの解析は線源と計算点の位置関係は固定して全部の鉄筋を必要な位置にずらすという方法を取った。

第2図に計算点平面図を示す。計算点に近い上側鉄筋の影響が主と考えられるのでこれを基準として、Aは東西鉄筋及び南北鉄筋の間、Bは東西鉄筋の真上、Cは南北鉄筋の真上、Dは東西及び南北鉄筋の交差部の真上に設定し、A~D位置でのそれぞれ床上高さ150cm、30.5cm、3cmの線量当量率をQAD-CGGP2Rを使用して求めた。

これと比較するために配筋を入れず61cm厚さのコンクリート(密度2.1g/cm<sup>3</sup>)としたときの計算も行い、この計算結果との比で鉄筋の影響を求めた。



第2図 床上での鉄筋効果の計算点

計算結果を第1表に示す。

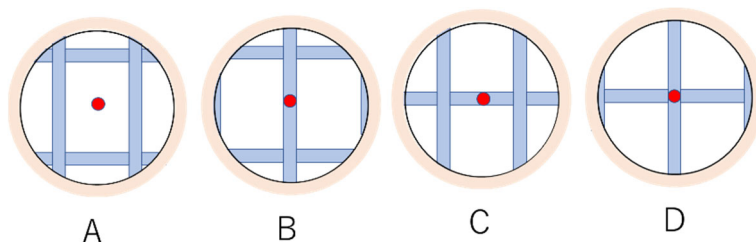
床上3cmでの鉄筋有無の線量率比は、0.68~0.74となっており、鉄筋が無い位置より鉄筋の真上や鉄筋の重なった真上は鉄筋の効果が大きくなっている。線量率からトップカバー下側の汚染密度を換算して求めるときは、鉄筋の考慮により35~47%多くなることになる。

床上30.5cmでの鉄筋有無の線量率比は、0.69~0.72となっており、床上距離が大きくなるため鉄筋位置による違いは少なくなる。A、B位置よりC、D位置がわずかだが線量率が大きくなっている。これはコリメータ付線量計が床面の直径30cmの円内だけ計測していることに起因しており、円内に入る上側鉄筋の面積とコンクリートの面積の割合（第3図参照）は、鉄筋間隔の関係で、A、B位置よりC、D位置が少なくなることが原因と考えられる。実際には上側鉄筋ほどではないが下側鉄筋も少し効いていると思われる。線量率からトップカバー下側の汚染密度を換算して求めるときは、鉄筋の考慮により40~44%多くなることになる。

床上150cmでの鉄筋有無の線量率比は、0.69~0.70となっており、ほぼ鉄筋位置による違いはない。線量率からトップカバー下側の汚染密度を換算して求めるときは、鉄筋の考慮により44%多くなることになる。

第1表 床上での鉄筋効果の計算結果

モデル	位置	A	B	C	D
①【鉄筋コンクリートモデルでの線量率】 鉄筋( $\rho=7.85$ )・コンクリート( $\rho=2.1$ ) ( $\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ )	床上3cm	9.006E-07	8.659E-07	8.627E-07	8.307E-07
	床上30.5cm	5.451E-07	5.428E-07	5.629E-07	5.633E-07
	床上150cm	8.372E-07	8.340E-07	8.375E-07	8.368E-07
②【コンクリートモデルでの線量率】 コンクリート( $\rho=2.1$ ) ( $\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ )	床上3cm	1.218E-06	1.218E-06	1.218E-06	1.218E-06
	床上30.5cm	7.864E-07	7.864E-07	7.864E-07	7.864E-07
	床上150cm	1.202E-06	1.202E-06	1.202E-06	1.202E-06
鉄筋有/鉄筋無の線量率比 ①/②	床上3cm	0.74	0.71	0.71	0.68
	床上30.5cm	0.69	0.69	0.72	0.72
	床上150cm	0.70	0.69	0.70	0.70
鉄筋を考慮した場合のトップカバー下面汚染量 増加割合 (%) (②/①-1)x100	床上3cm	35%	41%	41%	47%
	床上30.5cm	44%	45%	40%	40%
	床上150cm	44%	44%	44%	44%



第3図 直径30cmの視野での上側鉄筋とコンクリートの割合

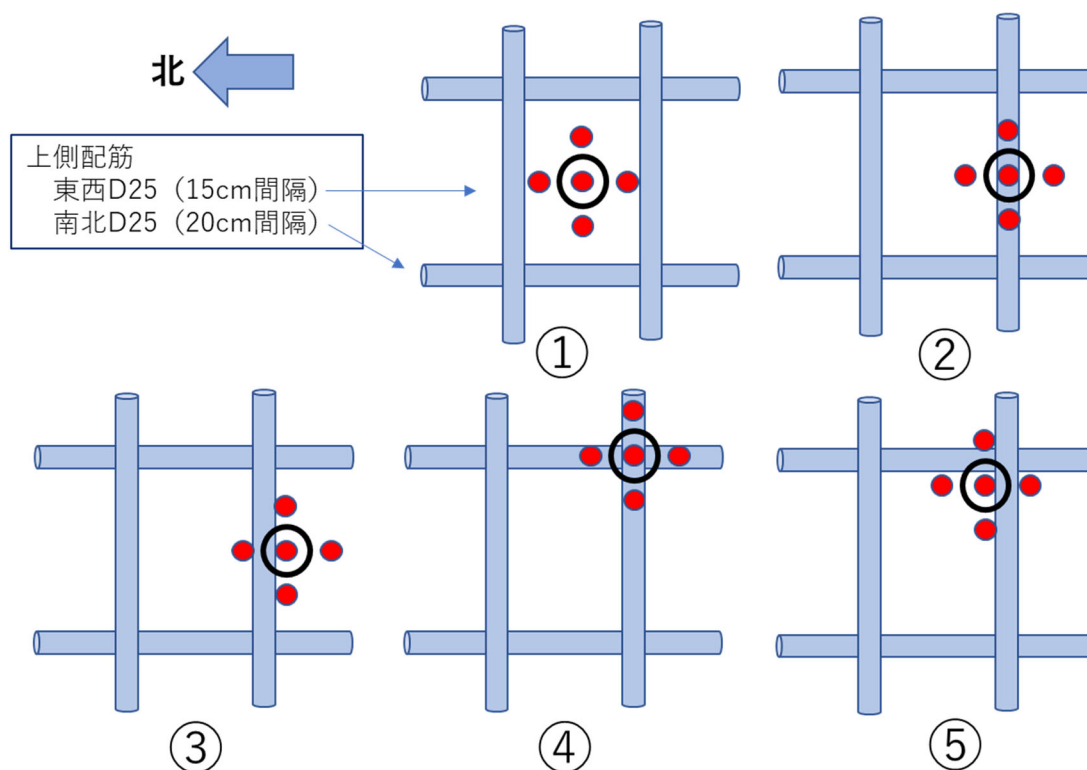
#### 4. 穴の中および穴の脇の床上 1.5cm での測定点での鉄筋の効果

穴の中については深さ方向とその真上及び東西南北の床上で測定が実施されている。線量率の高い場所なので穴の位置を精度よく測ることができず、また鉄筋の位置は施工誤差もあるため、それぞれの穴と鉄筋の位置関係はわからない。そのため、穴と鉄筋の位置関係の5つのパターンについて、鉄筋の測定値への影響を検討した。

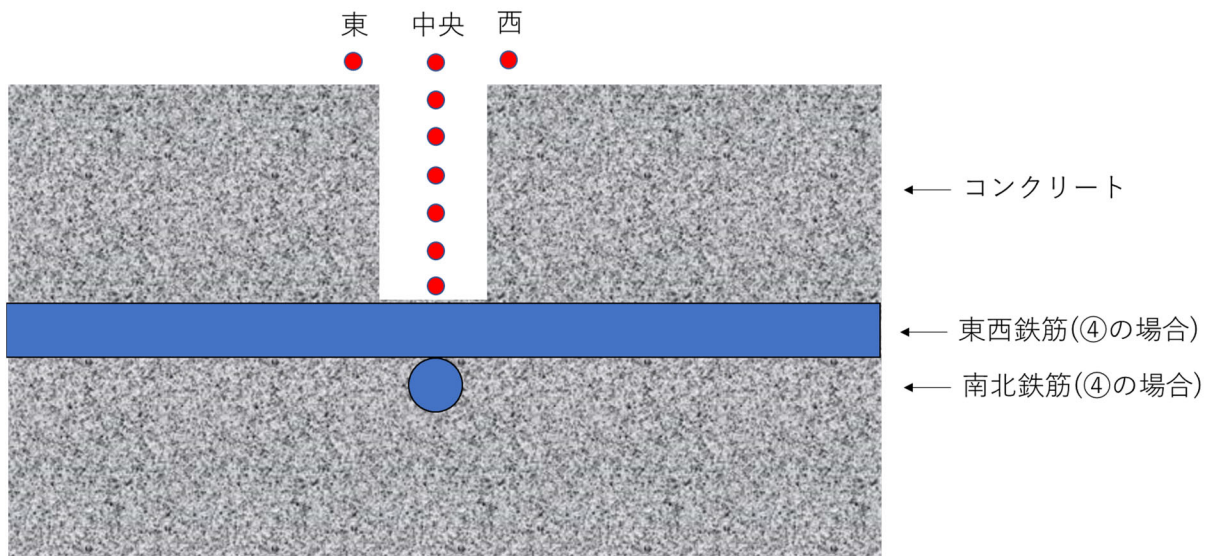
第4図に穴と鉄筋の位置関係のパターン①～⑤を示す。黒丸は穴（5cmφ×10cm）の位置を示し、赤丸は測定器センサー位置を示す。上部鉄筋の影響については以下を想定して5つのパターンを選定した。

- |            |                            |
|------------|----------------------------|
| ①上部鉄筋の間の中心 | すべての測定点に影響が少ないと考えられる       |
| ②東西鉄筋の真上   | 穴の中と東西の床上に影響があると考えられる      |
| ③東西鉄筋の右側   | 穴の中と東西北の床上に少し影響があると考えられる   |
| ④東西南北鉄筋の真上 | 穴の中と東西南北の床上に大きく影響があると考えられる |
| ⑤東西南北鉄筋の内側 | 穴の中と東西南北の床上に少し影響があると考えられる  |

第5図に穴の中の計算点を示す。



第4図 穴と鉄筋の位置関係の5つのパターン



7

第5図 穴内および床上の計算点

トップカバーの下面に半径6 mの線源 ( $^{137}\text{Cs}$  ( $1\text{Bq}/\text{cm}^2$ )+ $^{134}\text{Cs}$  ( $0.044\text{Bq}/\text{cm}^2$ )) を置いたときの、第4図に示す①～⑤のパターンでのそれぞれ穴中央と東西南北の床上1.5cm、および第5図に示す穴内深さ0.5cm、2cm、4cm、6cm、8cm、9.75cmの位置での線量当量率をQAD-CGGP2Rを使用して求めた。

これと比較するために配筋を入れず61 cm厚さのコンクリート (密度  $2.1\text{g}/\text{cm}^3$ ) としたときの計算も行い、この計算結果との比で鉄筋の影響を求めた。

第2表に穴の真上及び東西南北の床上と穴の中深さ方向線量率計算値を示す。

床上高さ1.5cmの穴の真上はそこから横に4.5cm離れた東西南北の線量率を比べると、穴の中心は東西南北に比べて2倍程度となるが、同じ穴では東西南北の違いは10%以下であり、鉄筋の影響は東西南北の大きな違いを生まないことがわかる。

穴の中の深さ方向の分布については、数値に重ねて緑のカラーバーで示した。鉄筋無のモデルでは全く鉄筋がないので穴の底の位置までで、すでに①～⑤の穴の底より線量率が大きくなっている。穴内の分布は①③⑤については鉄筋無の穴内の分布の形に似ているが、②や特に④は直下の鉄筋の影響を強く受けており、穴の底に近づくと減少している。

第2表 穴の真上及び東西南北の床上と穴の中深さ方向線量率計算値

計算点位置			線量率( $\mu\text{Sv/h per Bq/cm}^2$ )					鉄筋無 モデル
No.	床位置	床上高さ (cm)	穿孔穴の鉄筋との位置関係					
			①	②	③	④	⑤	
1	穿孔穴の中心	1.5	2.225E-06	2.010E-06	2.020E-06	1.834E-06	1.845E-06	2.858E-06
2	穿孔穴の東側	1.5	1.080E-06	9.752E-07	9.770E-07	9.481E-07	9.653E-07	1.454E-06
3	穿孔穴の南側	1.5	1.044E-06	1.045E-06	1.069E-06	9.724E-07	9.442E-07	1.454E-06
4	穿孔穴の西側	1.5	1.062E-06	9.752E-07	9.770E-07	9.455E-07	9.708E-07	1.454E-06
5	穿孔穴の北側	1.5	1.044E-06	1.031E-06	1.057E-06	9.568E-07	9.800E-07	1.454E-06
6	穿孔穴内部	-0.5	2.733E-06	2.407E-06	2.450E-06	2.178E-06	2.208E-06	3.486E-06
7		-2	3.155E-06	2.717E-06	2.809E-06	2.447E-06	2.495E-06	4.010E-06
8		-3.5	3.629E-06	3.000E-06	3.213E-06	2.647E-06	2.790E-06	4.547E-06
9		-4	3.785E-06	3.082E-06	3.338E-06	2.696E-06	2.892E-06	4.721E-06
10		-4.5	3.940E-06	3.148E-06	3.455E-06	2.726E-06	2.995E-06	4.886E-06
11		-6	4.296E-06	3.212E-06	3.799E-06	2.671E-06	3.251E-06	5.294E-06
12		-8	4.483E-06	2.747E-06	4.141E-06	2.121E-06	3.588E-06	5.495E-06
13		-9.75	4.487E-06	1.964E-06	4.398E-06	1.313E-06	3.938E-06	5.499E-06

第3表に鉄筋が無いモデルとの各位置での線量率の比を示す。

床上 1.5cm での穴中央と東西南北位置での鉄筋有無の線量率比は、0.64~0.78 となっており、「3. 床上の測定点での鉄筋の効果」での床上 3cm の線量率比と同程度であった。

穴の内部では穴と鉄筋位置の①~⑤のパターンにより異なる。①では 0.78~0.82 となり、穴の底に近づくにつれ少しだけ比が大きくなる。③は 0.70~0.80、⑤は 0.63~0.65、底は 0.72 となる。①③⑤の順に鉄筋の影響が大きくなってきていることがわかる。これらに比べ②と④は穴深さ 4cm より深くなると比が小さくなっていき、底では②が 0.36、④が 0.24 となる。

第3表 鉄筋が無いモデルとの各位置での線量率の比

計算点位置			鉄筋有/鉄筋無の線量率比				
No.	床位置	床上高さ (cm)	穿孔穴の鉄筋との位置関係				
			①	②	③	④	⑤
1	穿孔穴の中心	1.5	0.78	0.70	0.71	0.64	0.65
2	穿孔穴の東側	1.5	0.74	0.67	0.67	0.65	0.66
3	穿孔穴の南側	1.5	0.72	0.72	0.74	0.67	0.65
4	穿孔穴の西側	1.5	0.73	0.67	0.67	0.65	0.67
5	穿孔穴の北側	1.5	0.72	0.71	0.73	0.66	0.67
6	穿孔穴内部	-0.5	0.78	0.69	0.70	0.62	0.63
7		-2	0.79	0.68	0.70	0.61	0.62
8		-3.5	0.80	0.66	0.71	0.58	0.61
9		-4	0.80	0.65	0.71	0.57	0.61
10		-4.5	0.81	0.64	0.71	0.56	0.61
11		-6	0.81	0.61	0.72	0.50	0.61
12		-8	0.82	0.50	0.75	0.39	0.65
13		-9.75	0.82	0.36	0.80	0.24	0.72



第4表にトップカバー下面の推定に鉄筋効果を入れた場合の汚染密度増加を示す。

線量率からトップカバー下側の汚染密度を換算して求めるときは、床上1.5cmの穴中央の測定値を使うときは、鉄筋の考慮により28～55%多くなることになる。また、床上1.5cmの東西南北の測定値を使うときは、鉄筋の考慮により35～54%多くなることになる。

穴内部の測定値を使うときは、鉄筋の考慮により23～319%多くなることになる。鉄筋と穴の正確な位置関係が判らないのでこの幅を縮めることはできない。そこで、測定値としては鉄筋の効果が大きく出ない浅い場所での測定値を利用するのがよいと考えられる。

第4表 トップカバー下面の推定に鉄筋効果を入れた場合の汚染密度増加

計算点位置			トップカバー下面の推定に鉄筋効果を入れた場合の汚染密度増加				
No.	床位置	床上高さ (cm)	穿孔穴の鉄筋との位置関係				
			①	②	③	④	⑤
1	穿孔穴の中心	1.5	28%	42%	41%	56%	55%
2	穿孔穴の東側	1.5	35%	49%	49%	53%	51%
3	穿孔穴の南側	1.5	39%	39%	36%	49%	54%
4	穿孔穴の西側	1.5	37%	49%	49%	54%	50%
5	穿孔穴の北側	1.5	39%	41%	38%	52%	48%
6	穿孔穴内部	-0.5	28%	45%	42%	60%	58%
7		-2	27%	48%	43%	64%	61%
8		-3.5	25%	52%	42%	72%	63%
9		-4	25%	53%	41%	75%	63%
10		-4.5	24%	55%	41%	79%	63%
11		-6	23%	65%	39%	98%	63%
12		-8	23%	100%	33%	159%	53%
13		-9.75	23%	180%	25%	319%	40%

## 5. まとめ

鉄筋の影響について検討した結果、床面より上の測定では線量率は 0.64~0.78 倍に下がり、線量率からトップカバー下側の汚染密度を換算して求めるときは、鉄筋の考慮により 28~55%多くなることが判った。

また、穴内部の測定値を使うときは、鉄筋の考慮により線量率は 0.24~0.82 倍に下がることになる。鉄筋と穴の正確な位置関係が判らないのでこの大きな幅を縮めることはできない。そこで、測定値としては鉄筋と床汚染の効果が大きく出ない浅い場所（例えば 4cm 深さ）での測定値を利用するのがよいと考えられる。

これらの計算に使用した QAD-CGGP2R は点減衰核積分コードであり、無限媒質中のビルドアップ係数を使っているため、例えばコンクリートから空気に出たあとの線量率は多くて 2 割程度高めに出ること、また媒質が変わった直後、例えば鉄筋からコンクリートに入った直後はコンクリートのビルドアップ係数を使うと今回の体系では倍程度線量率を高目に出すことが、これまでの EGS5<sup>2)</sup> との比較でわかっている。そのため今回の検討ではそれが結論に影響を及ぼさないよう、コンクリート体系との比を使って議論した。また、穴内の分布に関してはコンクリートで散乱して鉄筋をまわりこんでくる挙動などは QAD-CGGP2R では計算できず、EGS5 の計算結果と穴内分布形状に差異が見られている。

鉄筋の影響について概略を見るために QAD-CGGP2R で今回まとめたが、今後 EGS5 の結果が出そろってから数値を入れ変える予定である。

## 6. 参考文献

- 1) QAD-CGGP2 AND G33-GP2 : REVISED VERSION OF QAD-CGGP AND G33-GP2, JAERI-M 90-110, June 1990
- 2) H. Hirayama, Y. Namito, A. F. Bielajew, S. J. Wilderman and W. R. Nelson, "The EGS5 Code System", SLAC-R-730 (2005) and KEK Report 2005-8 (2005)

(別添 3-3)

## 2号機シールドプラグの変形

原子力規制庁原子力規制部

東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 佐藤 雄一

### 1. 検討目的

東京電力福島第一原子力発電所事故時の福島第一原子力発電所2号機（以下「1F2号機」という。）における放射性物質の放出経路の推定（シールドプラグのパーツ間のすき間が放射性物質の放出経路となりうるか）に係る検討を行うため、シールドプラグ上層上面の形状に関する検討等を実施した。

### 2. 調査方法

#### (1) シールドプラグ上層上面の形状測定等の実施及びその結果の分析

1F2号機のシールドプラグ上層上面の形状測定を実施し、シールドプラグの表面形状を確認した。

また、比較検討のため、福島第一原子力発電所内でシールドプラグ上層上面の形状測定が実施可能である同発電所5号機（以下「1F5号機」という。）及び6号機（以下「1F6号機」という。）、1F2号機と原子炉格納容器の形式が同じである、中国電力株式会社島根原子力発電所1号機（以下「島根1号機」という。）及び日本原子力発電株式会社敦賀発電所1号機（以下「敦賀1号機」という。）のシールドプラグ上層上面の形状測定を実施し、同様にシールドプラグ上層上面の形状を確認した。

さらに、シールドプラグ上層上面の形状測定を実施した各プラント（以下「調査対象プラント」という。）のシールドプラグ上層上面の状況を現物又は画像にて確認した。

これらについて、1F2号機と他プラントの確認結果を比較し、1F2号機のシールドプラグ上層上面の形状の特異性等を分析した。

#### (2) シールドプラグの形状に影響を与える可能性が考えられる要因に対する調査

調査対象プラントのシールドプラグの開閉履歴等、シールドプラグの形状に影響を与える可能性が考えられる要因に対する情報を調査し、その内容を確認した。

#### (3) 原子力規制庁以外の機関による調査・検討

- ① 日本原子力研究開発機構（JAEA）にて、シールドプラグの自重によるシールドプラグの変形の有無について、解析的な検討が実施された。詳細は、別添3-4に

示す。

- ② 東京電力ホールディングス株式会社（以下「東京電力」という。）にて、福島第一原子力発電所1号機（以下「1F1号機」という。）及び3号機（以下「1F3号機」という。）のシールドプラグの変形状況及び要因に関する検討が実施された。また、1F2号機、1F5号機及び1F6号機のシールドプラグの変形要因について、社内関係者への聞き取り等が実施された。

### 3. シールドプラグの形状測定等の実施

#### (1) シールドプラグ上層上面の形状の確認手順

シールドプラグ上層上面の形状について、以下の手順により確認した。

- ① 3Dレーザースキャナ（FARO社製「Focus S350」）を用いて、調査対象プラントのシールドプラグ上層上面の形状に関するデータ（点群データ）を取得する。
- ② 取得したデータは、点群データ処理ソフト（FARO社製「SCENE」）により3Dモデルを構築した上で、点群データ解析ソフト（富士テクニカルリサーチ社製「Galaxy-Eye Modeler」）により、シールドプラグ上（調査対象プラント間で同様の高さ位置）に仮想平面を作成し、仮想平面とシールドプラグ上層上面の各位置との高低差を差分コンター図により示す。なお、差分コンター図のコンター幅は調査対象プラント間で共通（上下50mm幅）であるが、シールドプラグ上層上面の落ち込み等の程度がわかりにくい場合は、コンター幅を縮小したのもも示す。
- ③ 調査対象プラントの差分コンター図から、調査対象プラントのシールドプラグ上層上面の形状を確認する。
- ④ 1F2号機の差分コンター図と他の調査対象プラントの差分コンター図を比較し、1F2号機のシールドプラグ上層上面の形状の特異性等を分析する。

#### (2) 3Dレーザースキャナによるデータ（点群データ）の取得

3Dレーザースキャナによるデータの取得について、シールドプラグの大きさ（調査対象プラントによって異なるが、概ね直径11～12m程度）及び形状（円形状）を踏まえて、図1の左図に示すような位置に高さ約150cm程度に伸ばした三脚を設置し、その上に3Dレーザースキャナを設置し、シールドプラグ上層上面の形状に関するデータ（点群データ）を取得した。なお、1F2号機のシールドプラグ上層上面の形状に関するデータ（点群データ）は、シールドプラグ上部及びその周辺の周辺線量当量率が高く（数十～100数十mSv/h）、スキャナの設置位置が限られたため、図1の右図に示すような位置に3Dレーザースキャナを設置し、データを取得した。

取得した点群データの例（1F2号機のシールドプラグ上層上面の形状）を図2に示す。右に行くほど拡大したものとなっている。右側の「穿孔箇所付近拡大」のもので約10cm四方のデータとなっており、一つ一つの点にそれぞれ位置情報が付加され

ている。

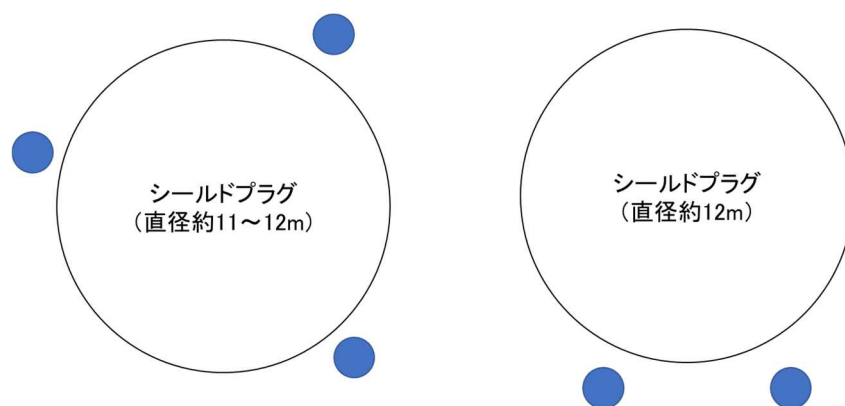


図1 3Dレーザースキャナの設置位置（イメージ）  
（スキャナは青丸部分に設置）  
（左図：1F2号機以外、右図：1F2号機）



図2 取得した点群データの例（1F2号機のシールドプラグ上層上面の形状）

### (3) 3Dレーザースキャナによる測定等の精度

3Dレーザースキャナによる測定精度について、誤差が生じる要素としては以下の2つがある。

#### ① 範囲誤差

「スキャナ設置地点」と「スキャナ設置地点から10m及び25m離れた地点」との2点間の距離に対する前後方向の誤差であり、10m及び25m離れた地点ともに±1mmの誤差が生じる。

#### ② 3D精度

スキャナ設置地点から10m及び25m離れた地点での真値に対する前後、左右、上下方向の誤差であり、10m離れた地点では2mm、25m離れた地点では3mmの誤差

が生じる。

また、3Dレーザースキャナにより取得したデータ（点群データ）の合成時に生じる誤差は、最大約5mm（点群データ内の最大値）であった。

これらを踏まえると、シールドプラグに対してmmオーダーの形状変化を把握することは困難であるが、cmオーダーの変化であれば形状変化を把握することが可能である。

#### （4）差分コンター図

3.（1）②の差分コンター図のイメージを図3に示す。図3の黒点線（赤色の円部分の内側）がシールドプラグの端部となっており、赤色の円部分（黒点線の外側）はシールドプラグ周囲の堰（1F5号機の例を図4に示す）である。

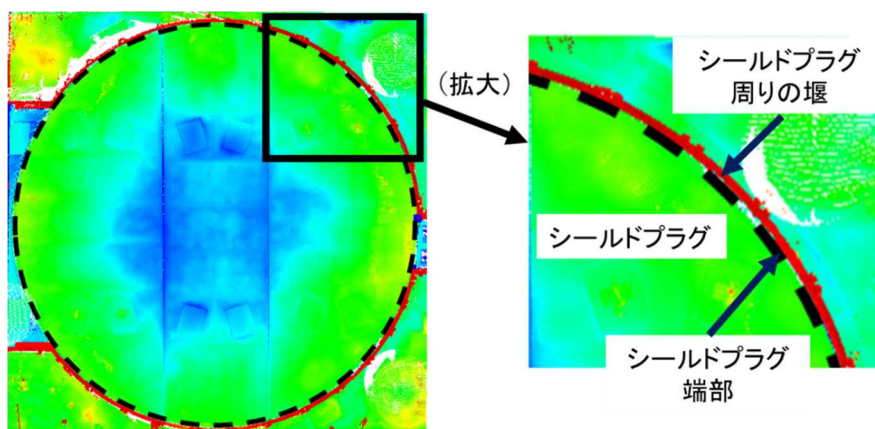


図3 差分コンター図（イメージ）

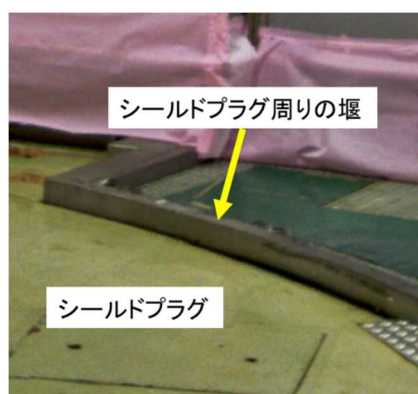


図4 シールドプラグ周囲の堰（1F5号機の例）

#### （5）仮想平面の「高さ0mm」位置

3.（1）②の仮想平面について、調査対象プラント間で共通的に図5の★付近が

「高さ 0mm」位置となるように仮想平面を設定している。

仮想平面の「高さ 0mm」位置については、当初、図 5 の●付近が「高さ 0mm」位置となるように仮想平面を設定していたが、中心パーツの上層上面の形状をより正確に表現するため、仮想平面の「高さ 0mm」位置を図 5 の★付近に変更した。

なお、調査対象プラントのシールドプラグの中心パーツ上端（図 5 の★付近）と下端（図 5 の■付近）の高さは、表 1 に示すようにほぼ同じ（3D レーザースキャナの測定等による誤差（3.（3））の範囲）である。

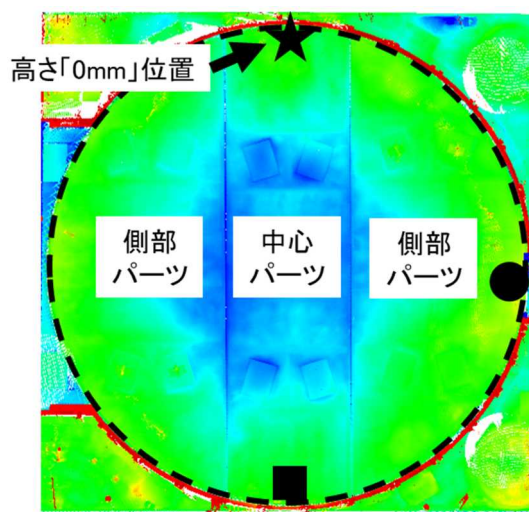


図 5 仮想平面の「高さ 0mm」位置

表 1 中心パーツの上端と下端の高低差

プラント	中心パーツ上端(左図の★位置)の高さを「0mm」とした場合の中心パーツ下端(左図の■位置)の高さ
1F2号機	-4mm
1F5号機	1mm
1F6号機	0
島根1号機	-4mm
敦賀1号機	-1mm

#### 4. シールドプラグ上層上面の形状の確認結果

##### (1) 1 F 2 号機

1 F 2 号機のシールドプラグ上層上面の形状の確認結果を図 6 に、また、シールドプラグ上層の分割イメージを図 7 に示す。

中心パーツに加えて北側パーツの一部及び南側パーツの一部で上層正面の落ち込みが見られた。

また、東西方向（中心線付近）は端部から中心への上層上面の落ち込みが 40mm 程度、南北方向（中心線付近）は端部から中心への上層上面の落ち込みが 60mm 程度あることが確認された。

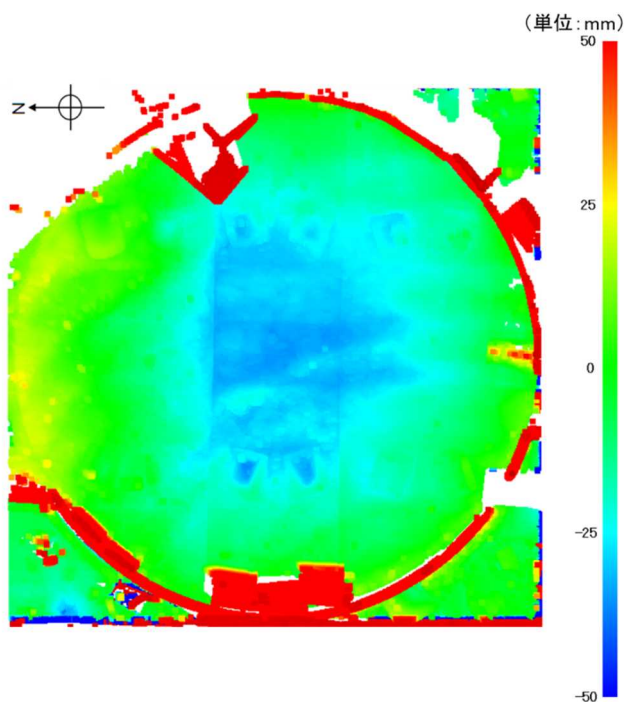


図6 1F2号機シールドプラグ上層上面の形状<sup>1</sup>

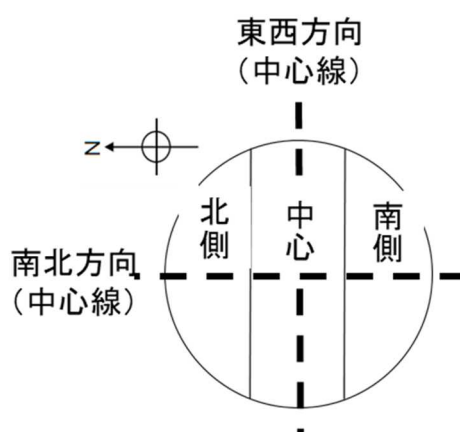


図7 シールドプラグ上層の分割イメージ（1F2号機シールドプラグ）

<sup>1</sup> 2021年12月14日に原子力規制庁にて取得したデータを基に、富士テクニカルリサーチ社の協力の下、「Galaxy-Eye Modeler」により分析



(2) 1 F 5 号機

1 F 5 号機のシールドプラグ上層上面の形状の確認結果を図 8 に、また、シールドプラグ上層の分割イメージを図 9 に示す。

上下 50mm 幅の差分コンター図 (図 8) では、シールドプラグ上層上面の落ち込み等の程度がわかりにくいため、コンター幅を縮小したものを図 10 に示す。

中心パーツに加えて南側パーツの一部で上層上面の落ち込みが見られた。

また、東西方向 (中心線付近) は端部から中心への上層上面の落ち込みが 35mm 程度、南北方向 (中心線付近) は端部から中心への上層上面の落ち込みが 40mm 程度あることが確認された。

さらに、北側パーツと中心パーツの間に 10~20mm 程度の高低差があることが確認された。

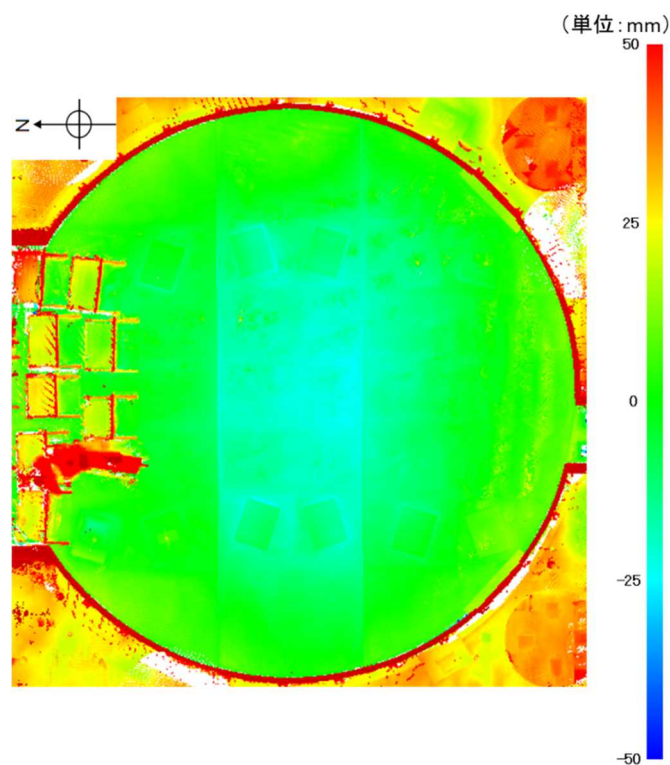


図 8 1 F 5 号機シールドプラグ上層上面の形状<sup>2</sup>

<sup>2</sup> 2022 年 1 月 13 日に原子力規制庁にて取得したデータを基に、富士テクニカルリサーチ社の協力の下、「Galaxy-Eye Modeler」により分析

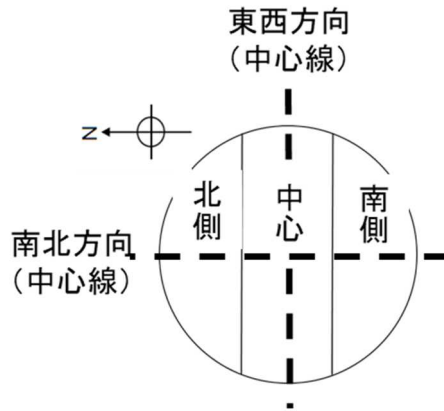


図9 シールドプラグ上層の分割イメージ (1F5号機シールドプラグ)

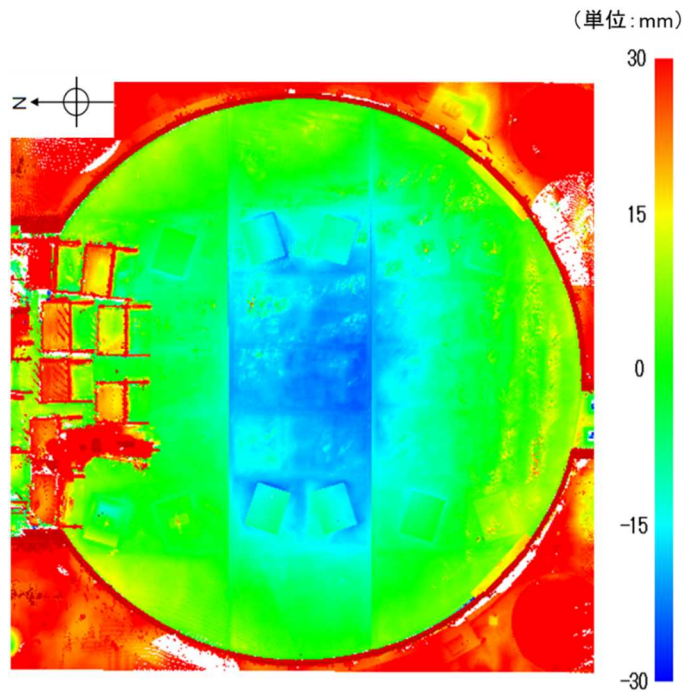


図10 1F5号機シールドプラグ上層上面の形状 (コンター幅を縮小したもの)<sup>3</sup>

### (3) 1F6号機

1F6号機のシールドプラグ上層上面の形状の確認結果を図11に、また、シールドプラグ上層の分割イメージを図12に示す。

上下50mm幅の差分コンター図(図11)では、シールドプラグ上層上面の落ち込み等の程度がわかりにくいため、コンター幅を縮小したものを図12に示す。

中心部分に加えて東側部分の一部及び西側部分の一部で上層上面の落ち込

<sup>3</sup> 2022年1月13日に原子力規制庁にて取得したデータを基に、富士テクニカルリサーチ社の協力の下、「Galaxy-Eye Modeler」により分析

みが見られた。

また、南北方向（中心線付近）は端部から中心への上層上面の落ち込みが 25mm 程度、東西方向（中心線付近）は端部から中心への上層上面の落ち込みが 40mm 程度あることが確認された。

パーツ間の高低差はほとんどないことが確認された。

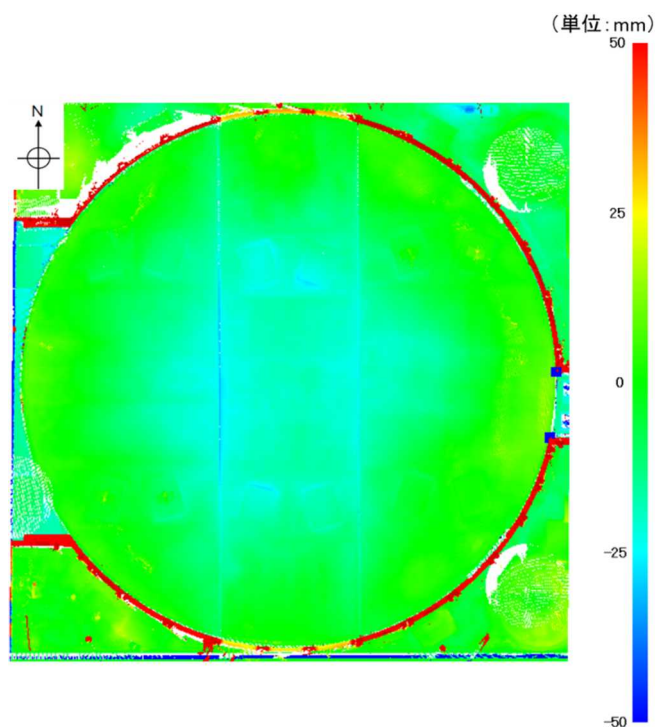


図 1.1 1 F 6 号機シールドプラグ上層上面の形状<sup>4</sup>

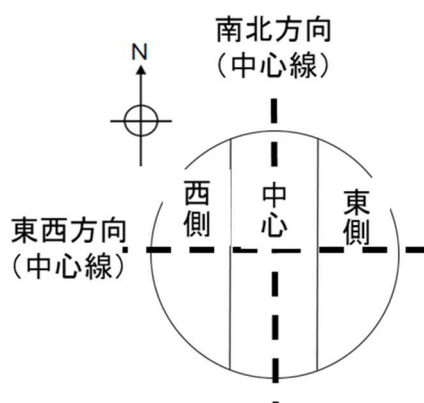


図 1.2 シールドプラグ上層の分割イメージ（1 F 6 号機シールドプラグ）

<sup>4</sup> 2022 年 10 月 13 日に原子力規制庁にて取得したデータを基に、富士テクニカルリサーチ社の協力の下、「Galaxy-Eye Modeler」により分析

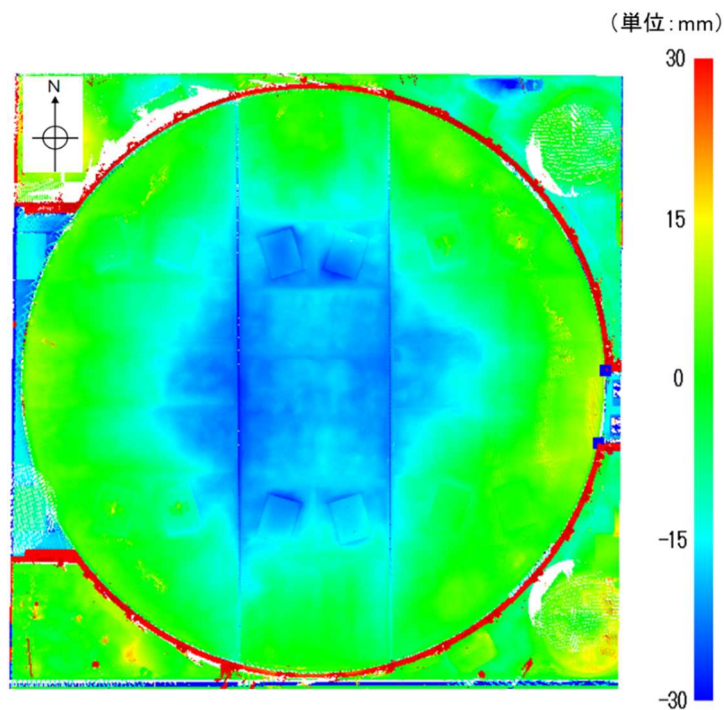


図 1 3 1 F 6 号機シールドプラグ上層上面の形状（コンター幅を縮小したもの）<sup>5</sup>

#### （4）島根 1 号機

島根 1 号機のシールドプラグ上層上面の形状の確認結果を図 1 4 に、また、シールドプラグ上層の分割イメージを図 1 5 に示す。

上下 50mm 幅の差分コンター図（図 1 4）では、シールドプラグ上層上面の落ち込み等の程度がわかりにくいため、コンター幅を縮小したものを図 1 6 に示す。

西端付近は東端に比べて最大 30mm 程度高くなっていることが確認された。

また、東側パーツの中心側で上層上面の落ち込みが見られたが、東西方向（中心線付近）及び南北方向（中心線付近）ともに端部から中心への上層上面の落ち込みはほとんどないことが確認された。

パーツ間の高低差はほとんどないことが確認された。

<sup>5</sup> 2022 年 10 月 13 日に原子力規制庁にて取得したデータを基に、富士テクニカルリサーチ社の協力の下、「Galaxy-Eye Modeler」により分析

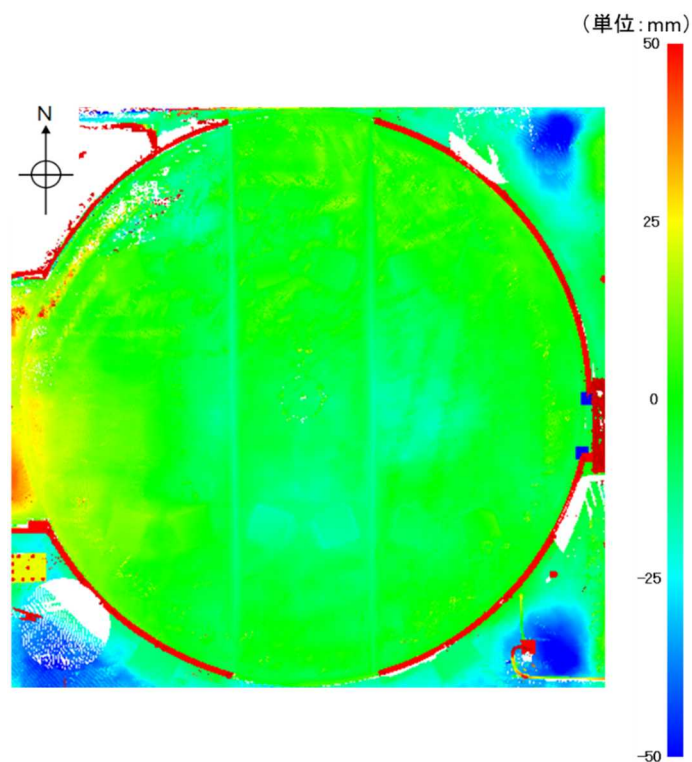


図 1 4 島根 1 号機シールドプラグ上層上面の形状<sup>6</sup>

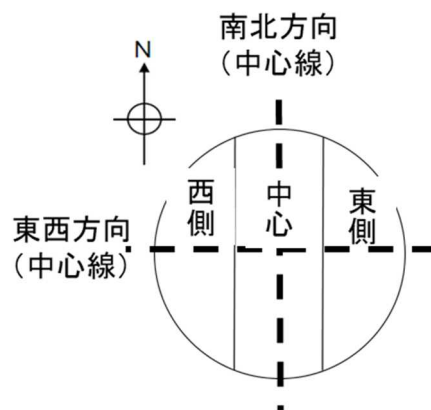


図 1 5 シールドプラグ上層の分割イメージ (島根 1 号機シールドプラグ)

<sup>6</sup> 2022 年 2 月 22 日に原子力規制庁にて取得したデータを基に、富士テクニカルリサーチ社の協力の下、「Galaxy-Eye Modeler」により分析

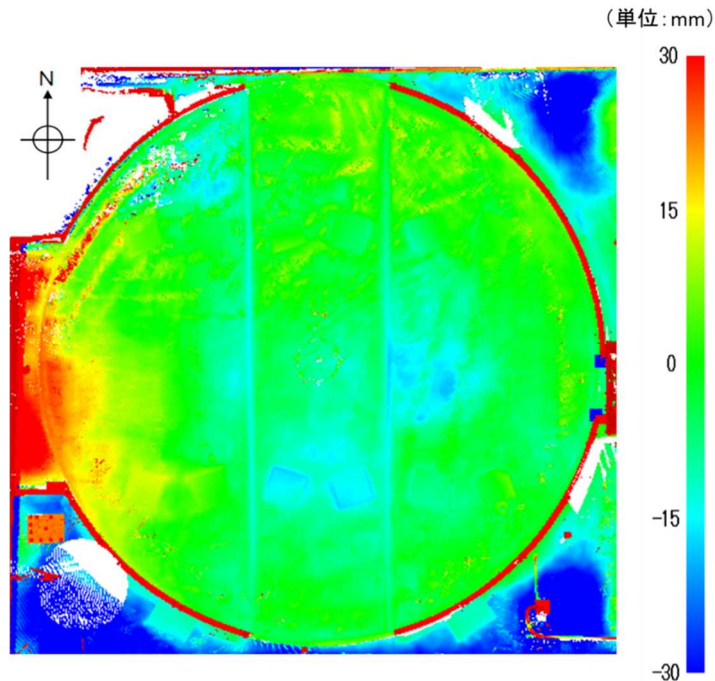


図 1 6 島根 1 号機シールドプラグ上層上面の形状 (コンター幅を縮小したもの)<sup>7</sup>

#### (5) 敦賀 1 号機

敦賀 1 号機のシールドプラグ上層上面の形状の確認結果を図 1 7 に、また、シールドプラグ上層の分割イメージを図 1 8 に示す。

上下 50mm 幅の差分コンター図 (図 1 7) では、シールドプラグ上層上面の落ち込み等の程度がわかりにくいため、コンター幅を縮小したものを図 1 9 に示す。

中心パーツの一部、西側パーツの一部及び東側パーツの一部で上層上面の落ち込みが見られた。

また、東西方向 (中心線付近) は西端から東端への上層正面の落ち込みが 50mm 程度、南北方向 (中心線付近) は端部から中心への上層正面の落ち込みはほとんどないことが確認された。

さらに東端と DSP 側床面 (右図の左端) との間に最大 40mm 程度の高低差があることが確認された (図 2 0 参照)。

パーツ間の高低差はほとんどないことが確認された。

<sup>7</sup> 2022 年 2 月 22 日に原子力規制庁にて取得したデータを基に、富士テクニカルリサーチ社の協力の下、「Galaxy-Eye Modeler」により分析

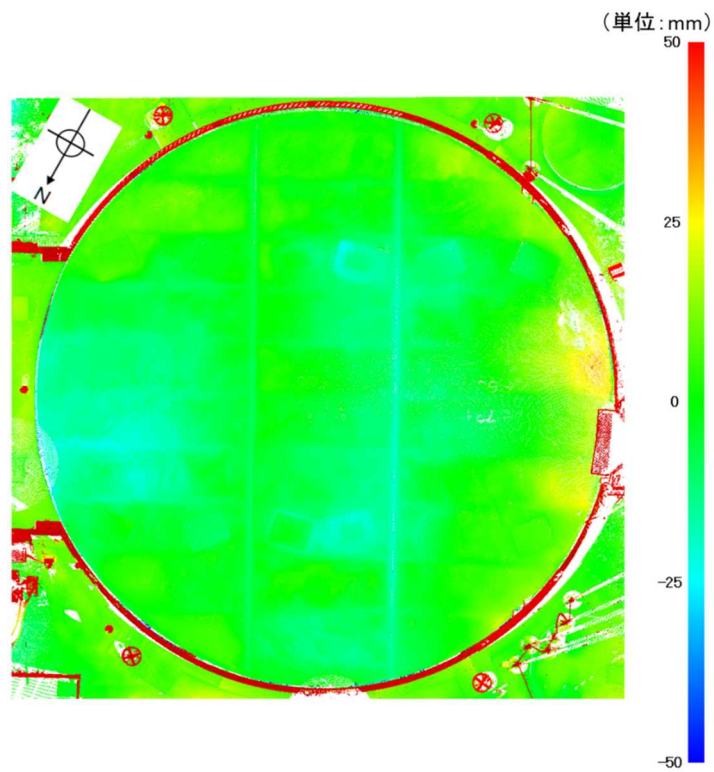


図 1 7 敦賀 1 号機シールドプラグ上層上面の形状<sup>8</sup>

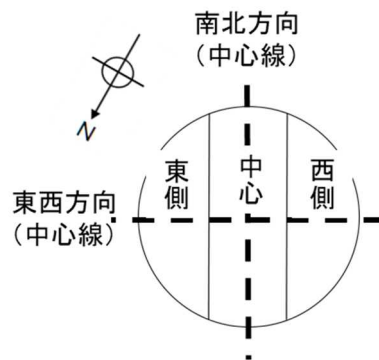


図 1 8 シールドプラグ上層の分割イメージ (敦賀 1 号機シールドプラグ)

<sup>8</sup> 2022 年 4 月 8 日に原子力規制庁にて取得したデータを基に、富士テクニカルリサーチ社の協力の下、「Galaxy-Eye Modeler」により分析

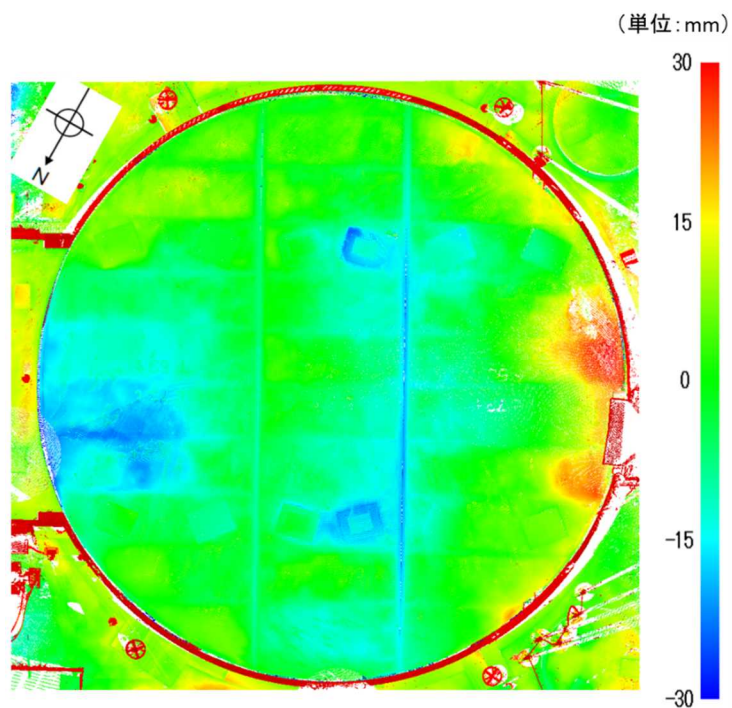


図 1 9 敦賀 1 号機シールドプラグ上層上面の形状 (コンター幅を縮小したもの)<sup>9</sup>



図 2 0 東端と DSP 側床面 (右図の左端) との間の状況<sup>10</sup>

(6) 1 F 2 号機と他プラントの差分コンター図の比較

1 F 2 号機とそれ以外の調査対象プラントの差分コンター図を並べたものを図 2 1 及び図 2 2 に示す。

<sup>9</sup> 2022 年 4 月 8 日に原子力規制庁にて取得したデータを基に、富士テクニカルリサーチ社の協力の下、「Galaxy-Eye Modeler」により分析

<sup>10</sup> 2022 年 4 月 8 日の原子力規制庁調査時に日本原子力発電が撮影



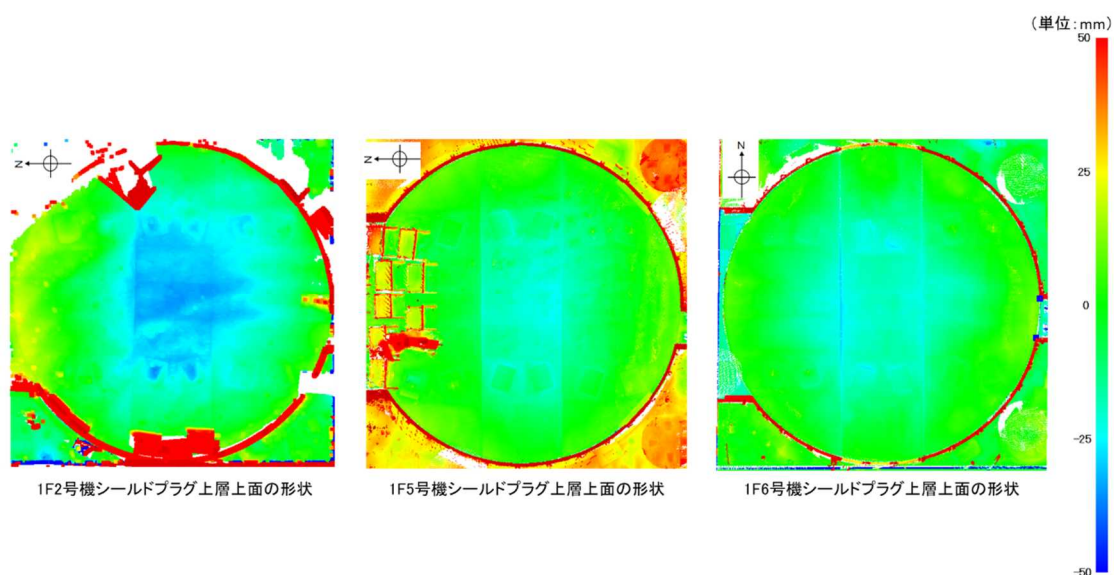


図 2 1 1 F 2 号機と 1 F 5 号機及び 1 F 6 号機の比較

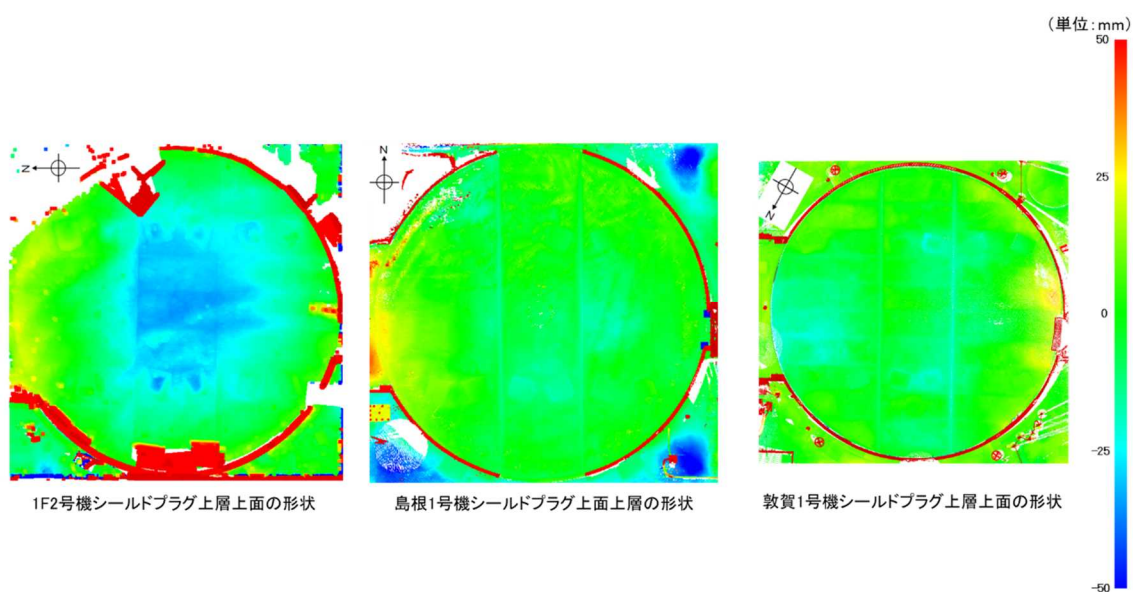


図 2 2 1 F 2 号機と 島根 1 号機及び 敦賀 1 号機の比較

(7) シールドプラグ上層上面の形状の比較 (断面形状の可視化)

調査対象プラントのシールドプラグ上層上面の形状を断面方向から見たデータを取り出し、断面形状の可視化を試みた。

データ (点群データ) の取り出し位置は、図 2 3 に示すようにシールドプラグの中心部分の中心線付近の断面 (図 2 3 の赤線部分) 及びシールドプラグのパーツ間を跨がる方向の中心線付近の断面 (図 2 3 の黒線部分) とした。

取り出したデータ (図 2 4 及び図 2 5 に示しているもの) は、シールドプラグ表面

の断面形状のイメージが分かるように縦横比を大きく変えている。なお、実際のシールドプラグの縦横比は、1:約200（図2-4及び図2-5の縦：約6cm程度、図2-4及び図2-5の横：約11~12m程度）となっている。

取得したデータ数（点の数）が十分でない箇所もあるため、図2-4及び図2-5に示す断面形状はあくまで「イメージ」であることに留意する必要がある。

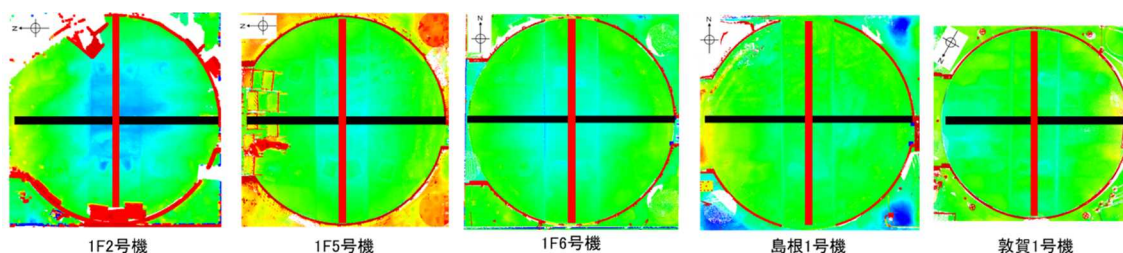


図2-3 点群データの取り出し位置

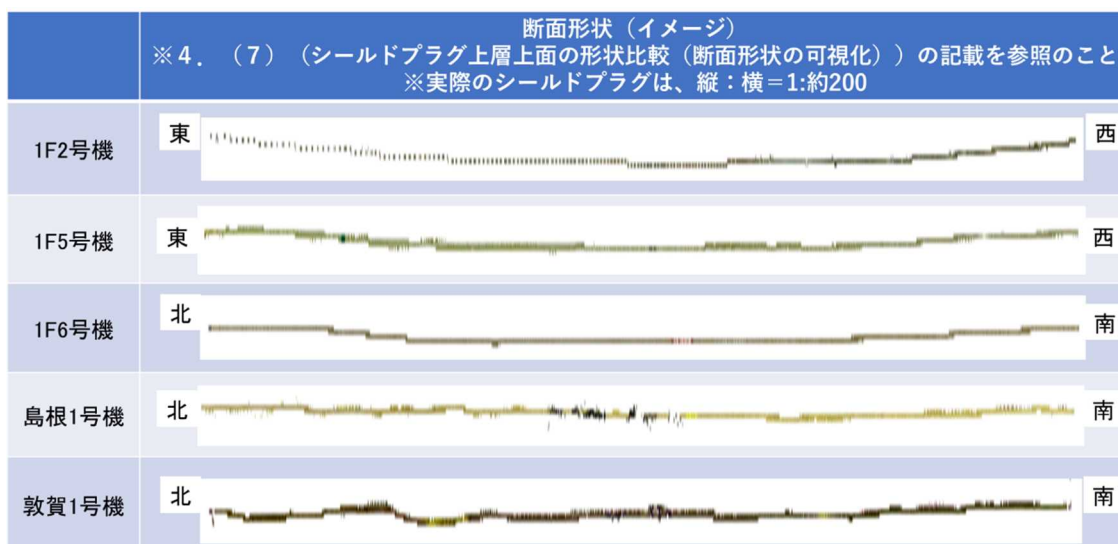


図2-4 取り出した点群データ（中心パーツの中心線付近）

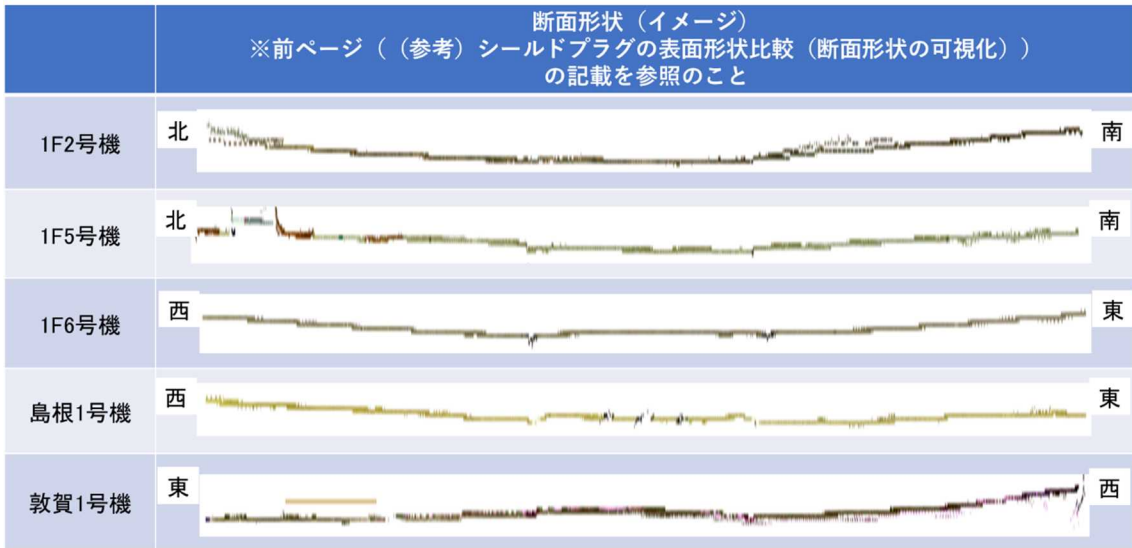


図 2 5 取り出した点群データ (パーツ間に跨がる方向の中心線付近)

(8) シールドプラグ上層上面の状況

調査対象プラントのシールドプラグ上層上面の状況について、調査対象プラントのシールドプラグのデータ (点群データ) 取得時に併せて取得した画像データを図 2 6 ~ 図 3 0 に示す。

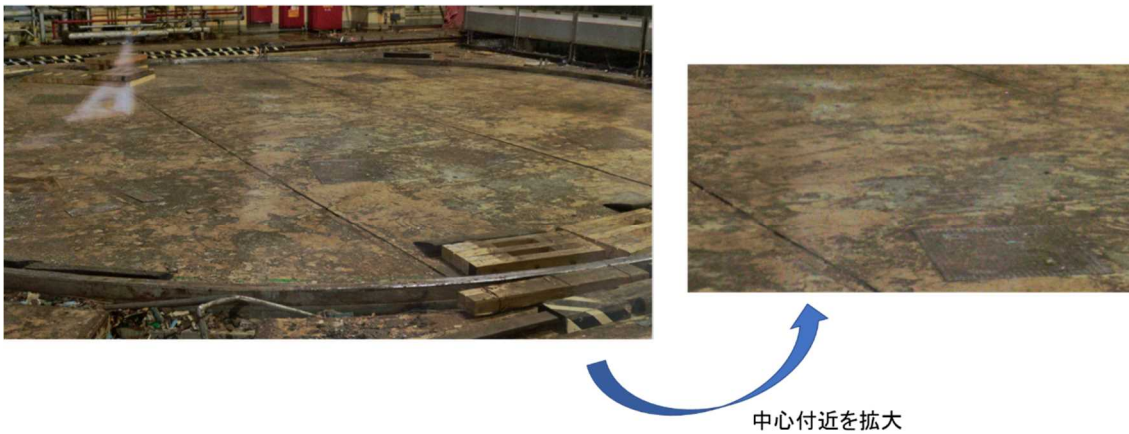


図 2 6 シールドプラグ上層上面の状況 (1 F 2 号機)<sup>11</sup>

<sup>11</sup> 2021 年 12 月 14 日に原子力規制庁撮影

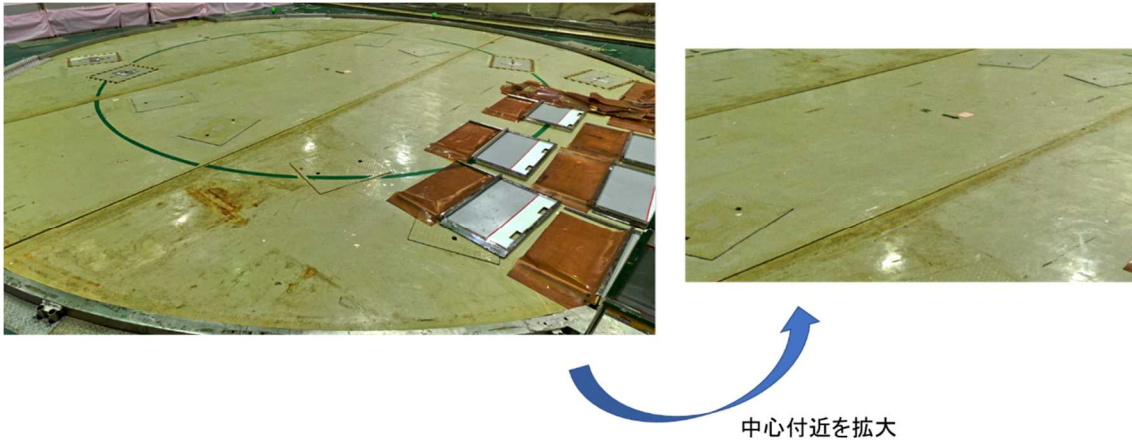


図27 シールドプラグ上層上面の状況（1F5号機）<sup>12</sup>

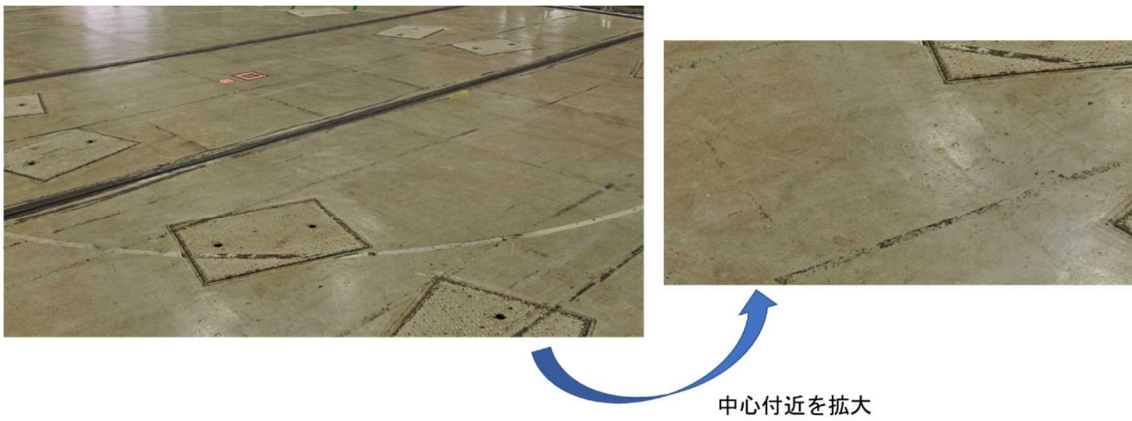


図28 シールドプラグ上層上面の状況（1F6号機）<sup>13</sup>

<sup>12</sup> 2022年1月13日に原子力規制庁撮影

<sup>13</sup> 2022年10月13日に原子力規制庁撮影

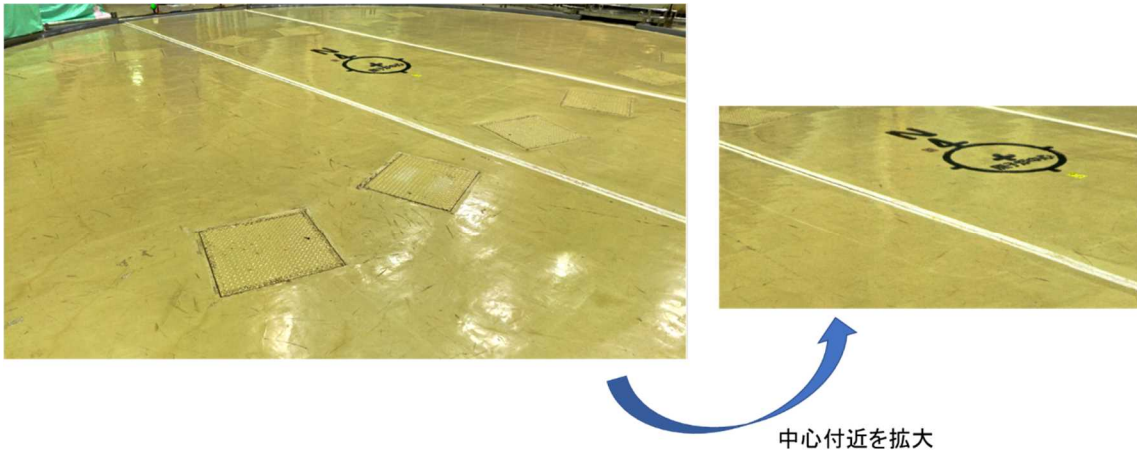


図 29 シールドプラグ上層上面の状況（島根 1 号機）<sup>14</sup>

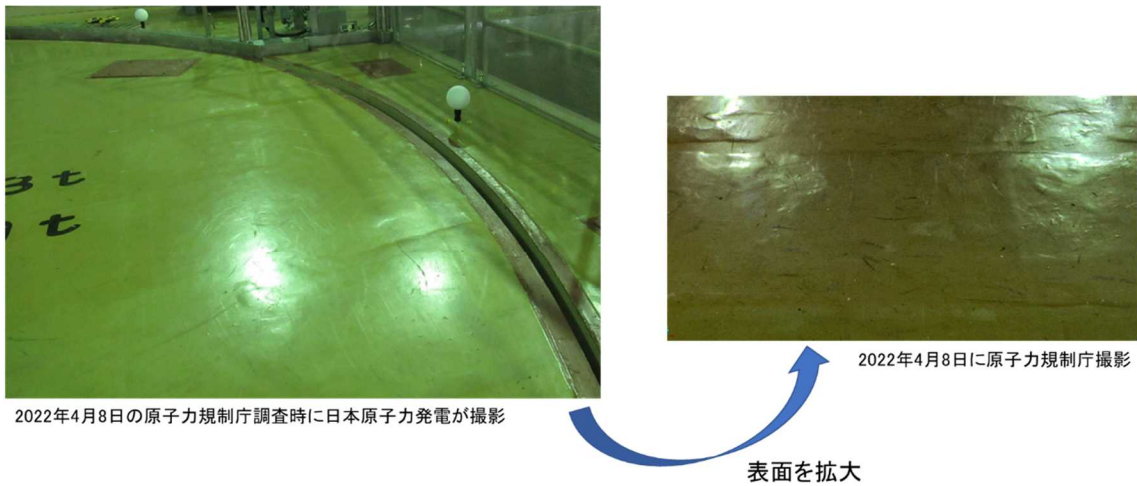


図 30 シールドプラグ上層正面の状況（敦賀 1 号機）<sup>15</sup>






(9) シールドプラグ上層上面の形状の確認結果の比較

調査対象プラントのシールドプラグ上層上面の形状の確認結果について、4.(1)～(5)に示した内容を比較したものを表 2 に示す。

<sup>14</sup> 2022 年 2 月 22 日に原子力規制庁撮影

<sup>15</sup> 2022 年 4 月 8 日の原子力規制庁調査時に日本原子力発電が撮影

表2 シールドプラグ上層上面の形状の確認結果の比較

	1F2号機	1F5号機	1F6号機	島根1号機	敦賀1号機
落ち込みの範囲	中心パーツ 北側パーツの一部 南側パーツの一部	中心パーツ 南側パーツの一部	中心パーツ 東側パーツの一部 西側パーツの一部	東側パーツの 中心側付近	中心パーツ 東側パーツの一部 西側パーツの一部
落ち込みの程度 が大きい範囲	中心パーツ 南側パーツの一部	中心パーツの一部	中心パーツ 東側パーツの一部 西側パーツの一部	東側パーツの 中心側付近	東側パーツの一部
端部から中心部 に向かう落ち込み の程度	東西方向:40mm程度 南北方向:60mm程度	東西方向:35mm程度 南北方向:40mm程度	南北方向:25mm程度 東西方向:40mm程度	ほとんどない	ほとんどない (西端から東端への落 ち込みが50mm程度)
パーツ間の高低 差の有無	(確認できない)	有 北側パーツと 中心パーツの間に 10~20mm程度	無	無	無
シールドプラグ 上層の 分割イメージ					

(10) 目視等によるシールドプラグ上層上面の形状の確認結果

調査対象プラントのシールドプラグ上層上面の形状について、目視等による確認を実施した結果、以下のとおりであった。

① シールドプラグ表面の状況

1F2号機のシールドプラグ上層上面について、画像により確認した結果、目立ったひび割れは確認されなかった。

また、他の調査対象プラントのシールドプラグについては、現物及び画像により確認した結果、1F2号機と同様に目立ったひび割れは確認されなかった。

② シールドプラグのパーツ間の高低差の有無

1F2号機のシールドプラグについては、シールドプラグ上部が高線量のため、現物による確認ができなかったため、パーツ間の高低差は確認できなかった。

1F5号機のシールドプラグについては、現物により確認した結果、北側パーツと中心パーツの間に10~20mm程度の高低差が確認された。

1F6号機、島根1号機及び敦賀1号機のシールドプラグについては、現物により確認した結果、パーツ間の高低差は確認されなかった。

③ その他

現物を確認することができた1F5号機、1F6号機、島根1号機及び敦賀1号機のシールドプラグについて、中心付近の上層上面の落ち込みは、目視では確認できなかった。

5. シールドプラグの形状に影響を与える可能性が考えられる要因に対する調査結果

シールドプラグの形状に影響を与える可能性が考えられる要因として「シールドプラグの構造の違い」「シールドプラグの開閉履歴」「シールドプラグ開閉時のシールドプラグの吊り上げ方法」について、調査対象プラントを所有している各社から提供された情報等を基に検討を行い、シールドプラグの形状に影響を与える要因となるかどうかを確認した。

#### (1) シールドプラグの構造の違い

シールドプラグ上層の直径、分割数及び配筋については、調査対象プラントのシールドプラグ間で大きな差はなかった。

シールドプラグの層数／頂部層の厚さについては、敦賀1号機のみ2層／100cmであり、他プラントは3層／60数cmであった。

シールドプラグの支持方法（端部の切り欠部分にてシールドプラグを支持）、シールドプラグの設置方法（中心パーツの上部に側部パーツを載せる、上層・中間層・下層はそれぞれ互い違いに設置（敦賀1号機のみ、上層と下層は互い違いに設置））は、いずれのプラントともに同様であった。

#### (2) シールドプラグの開閉履歴

東京電力福島第一原子力発電所事故以前は、いずれのプラントも定期検査ごとに開閉を実施していた。

東京電力福島第一原子力発電所事故以降は、調査対象プラントによって開閉回数が異なるが、大きな差はなかった。

至近の取り付け時期（原子炉ウェル上に設置した時期）は、2014年～2016年であり、大きな差はなかった。なお、1F2号機は、東京電力福島第一原子力発電所事故以降は取り外し実績がなかった。

#### (3) シールドプラグ開閉時のシールドプラグの吊り上げ方法

いずれの調査対象プラントともに、シールドプラグ上層上面に設置されている吊り上げ用の治具にバックル・リング等を掛け、これらに繋がっているワイヤー等にて吊り上げる方法を採用していた。

これらの内容をまとめたものを表3に示す。

また、シールドプラグの構造イメージを図3-1（敦賀1号機以外）及び図3-2（敦賀1号機）に示す。

表3 シールドプラグの設計情報等

	1F2号機	1F5号機	1F6号機	島根1号機	敦賀1号機	
電気出力(MWe) <sup>※2</sup>	784	784	1100	460	357	
原子炉形式 <sup>※2</sup>	BWR-4	BWR-4	BWR-5	BWR-3 <sup>※1</sup>	BWR-2	
格納容器形式 <sup>※2</sup>	マークI	マークI	マークII	マークI	マークI	
シールドプラグ <sup>※3</sup>	上層の直径(m)	11.8	11.8	(確認中)	12.4	10.9
	層数	3	3	(確認中)	3	2
	上層の厚さ(cm)	62	62	(確認中)	63	100
	分割数	3	3	3	3	3
	上層の重量(ton)	165	(確認中)	(確認中)	(確認中)	218
	配筋(上端筋/下端筋)	D25,D25/ D25,D32	D25,D25/ D25,D32	(確認中)	D22,D25/ D22,D35	D25,D25/ D25,D35
	形状測定時の状態	原子炉ウエル上部に設置				
	開閉履歴(1F事故以降) (開⇄閉のセットで1回)	—	1	1	2	2
	原子炉ウエル上に設置した時期(直近) (2022年11月までの経過期間)	—	2016年2月 (6年9ヶ月)	2014年8月 (7年3ヶ月)	2016年7月 (6年4ヶ月)	2014年1月 (8年10ヶ月)
	開閉時のつり上げ方法	シールドプラグ上層上面に設置されているつり上げ用の治具にバックル・リング等を掛け、これらに繋がっているワイヤー等にて、つり上げる。				

※1：ECCS は BWR-4 の設計

※2：原子力安全研究協会（編）：軽水炉発電所のあらし（改訂版）（平成4年10月）、p. 348

※3：シールドプラグに関する情報は、各社から提供されたもの

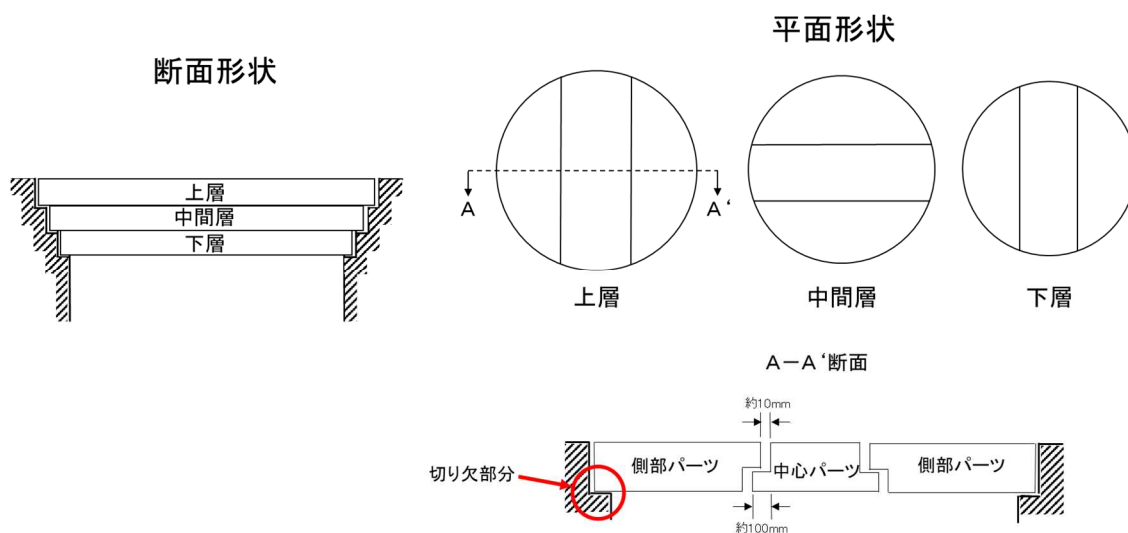


図3-1 シールドプラグの構造イメージ（敦賀1号機以外）



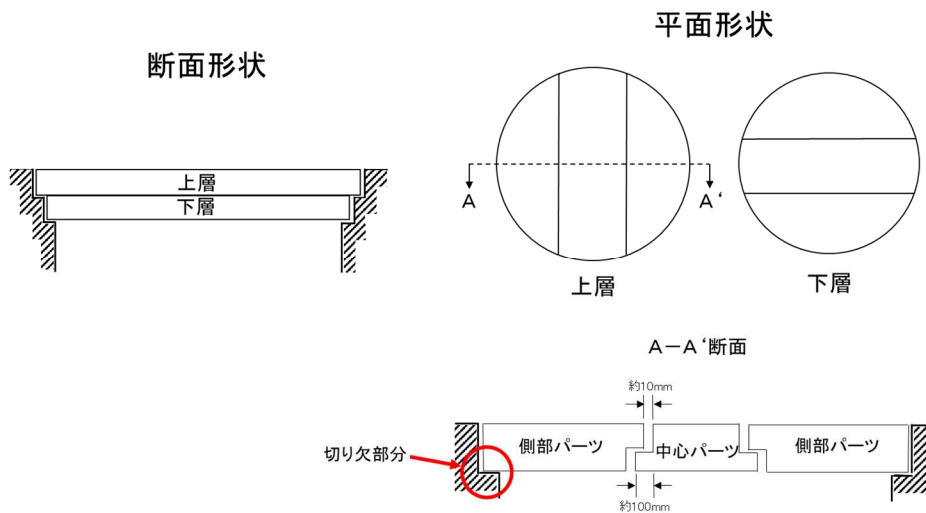


図3-2 シールドプラグの構造イメージ（敦賀1号機）

## 6. 原子力規制庁以外の機関による調査・検討の結果（概要）

### (1) JAEAによる調査・検討

自重によるシールドプラグの変形の有無について、標準的なコンクリートの物性値、1F2号機のシールドプラグの設計情報等を用いて解析コード（Abaqus）により解析した結果、中心のパーツで約6mm、側部のパーツで約4mmの落ち込みが生じたとしている。なお、調査・検討の詳細は、別添3-4に示す。

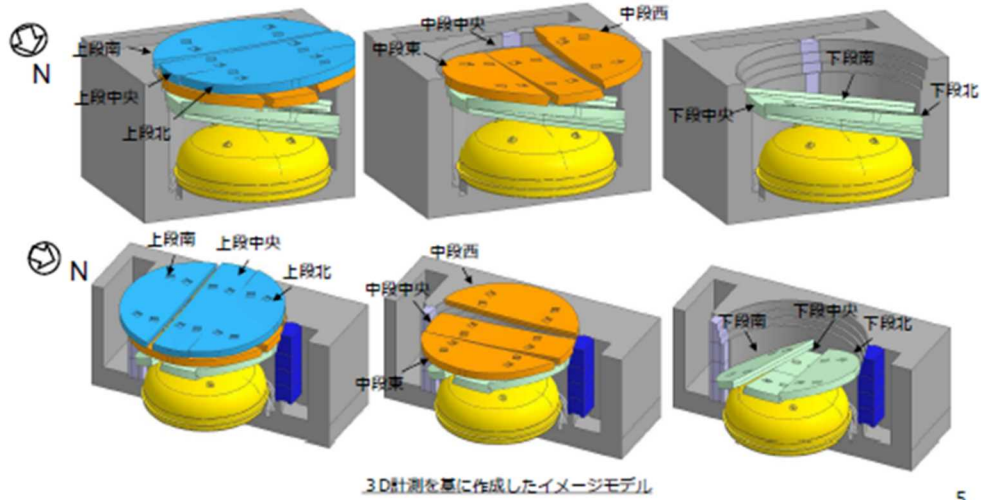
### (2) 東京電力による調査・検討

- ① 1F1号機のシールドプラグの形状を測定した結果、図3-3及び図3-4に示すようにシールドプラグに大きな変形（約40～170mm）があることを確認したとしている。
- ② 1F3号機のシールドプラグ上の調査を実施した結果、図3-5及び図3-6シールドプラグ中央部に変形（約300mm）が確認され、この変形は、シールドプラグにトロリーの主巻フック等が衝突したことによるものと推定されるとしている。
- ③ 1F2号機、1F5号機及び1F6号機のシールドプラグ上層上面の形状について、同号機のオペレーションフロアでの作業に携わった社員及び協力企業の関係者に聞き取り調査をした結果、シールドプラグの上層上面の形状に関する有益な情報は得られなかったとしている。
- ④ 1F2号機、1F5号機及び1F6号機のシールドプラグ上層上面の落ち込みの形成の可能性の1つとして、製作時の精度が考えられるとしているが、明確な根拠はないとしている。

### 3-2 ウェルプラグ調査結果（3D計測）

TEPCO

- プラグの保持状態の確認を目的として3D計測を実施し、上段プラグ下面、中段プラグ上面及び下段プラグ西側の一部について、可能な範囲で寸法情報を取得した結果、プラグにたわみ等の変形があることを確認した。
- 今後、得られた結果に基づいて、ウェルプラグの処置について検討していく。



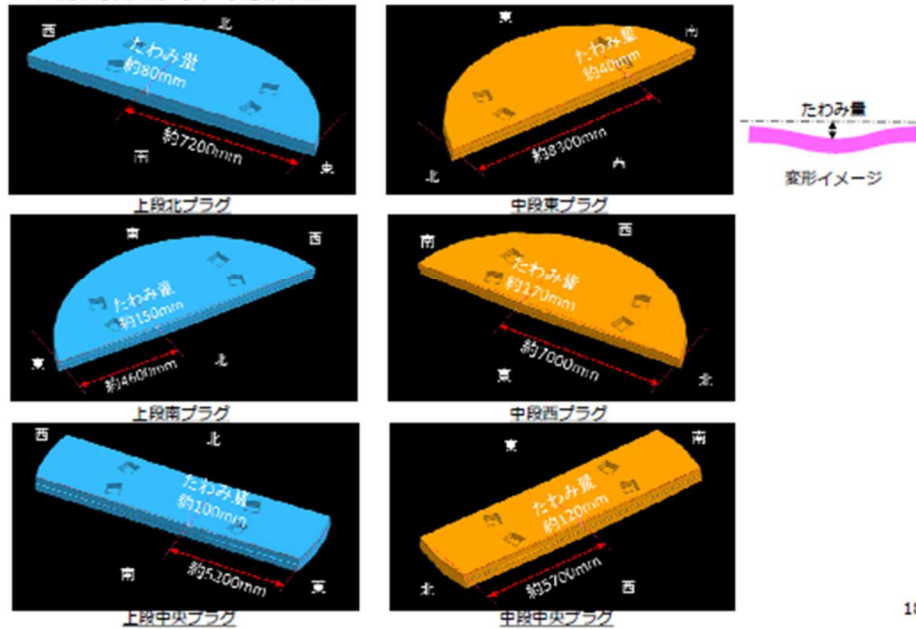
5

図 3 3 東京電力による調査・検討（1号機シールドプラグの調査結果（1 / 2））<sup>16</sup>

### 【参考】ウェルプラグ調査各プラグのたわみ量

TEPCO

- 3D計測による各プラグのたわみ量



18

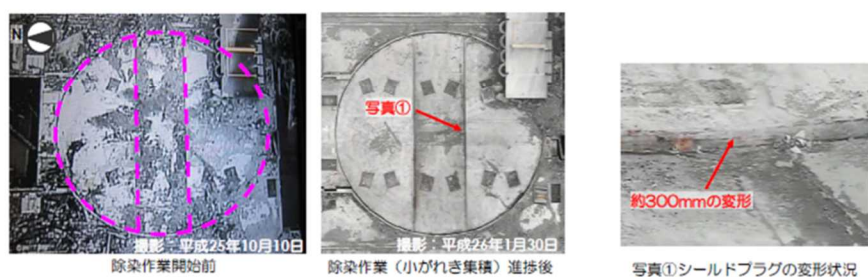
<sup>16</sup> 1号機原子炉建屋ガレキ撤去関連調査結果及び北側屋根鉄骨の切断開始について（2019/9/26 東京電力ホールディングス株式会社）

図 3 4 東京電力による調査・検討（1号機シールドプラグの調査結果（2／2））<sup>17</sup>

## 添付資料2. シールドプラグの変形について

●状況

- ・除染作業開始前はシールドプラグ上に小がれきが堆積しており、詳細な状況確認ができなかった
- ・小がれきの集積撤去、吸引作業後にシールドプラグ上を調査したところ、シールドプラグ中央部に変形（約300mm）が確認された



5

図 3 5 東京電力による調査・検討（3号機シールドプラグの調査結果（1／2））<sup>18</sup>

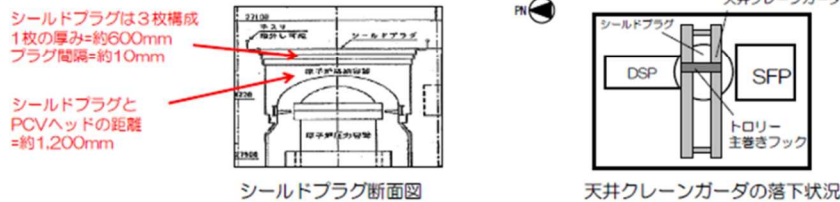
<sup>17</sup> 1号機原子炉建屋ガレキ撤去関連調査結果及び北側屋根鉄骨の切断開始について  
(2019/9/26 東京電力ホールディングス株式会社)

<sup>18</sup> 福島第一原子力発電所3号機原子炉建屋上部ガレキ撤去後の建屋躯体調査結果について  
(平成26年2月14日 東京電力株式会社)

## 添付資料2. シールドプラグの変形について

### ●変形の原因推定

原因として「水素爆発」「天井クレーン等の落下」が考えられるが、シールドプラグ周囲の床スラブ（厚さ:30cm,60cm）が損傷を受けていないことから、水素爆発でシールドプラグ（鉄筋コンクリート製、厚さ約60cm×3層）が変形したとは考え難い。また、落下後の天クレ本体は直接シールドプラグに接していなかったものの、プラグ上部にはトロリーがあり主巻フック等の衝突によるものと推定される。



### ●リスク想定

リスクとして、下記が想定されるが考察を次頁以降に示す。

- ①シールドプラグの変形進行、落下
- ②落下物による更なるシールドプラグの損傷
- ③PCV損傷 ④線量率増加 ⑤ダスト濃度上昇



6

図36 東京電力による調査・検討（3号機シールドプラグの調査結果（2/2））<sup>19</sup>

## 7. まとめ

本検討は、1F2号機のシールドプラグ上層上面の形状を測定したところ、中心付近に上層上面の落ち込みが確認されたことから、他の調査対象プラントのシールドプラグ上層上面の形状の測定を実施したものである。その結果、測定対象とした他の原子力発電所のプラント（島根1号機、敦賀1号機）のシールドプラグには中心付近の上層上面の落ち込みはほとんど見られなかったが、1F5号機及び1F6号機では1F2号機よりも程度が小さいものの中心付近に上層上面の落ち込みが確認された。

JAEAによるシールドプラグの変形解析では、シールドプラグの自重により数mmの変形が生じること、及び中心パーツと側部パーツの変形量の違いにより、中心パーツと側部パーツの間に放射性物質の放出経路が形成されることが示された。また、シールドプラグに数mm程度の変形があれば、300cm<sup>2</sup>程度の流路が生じる可能性があると考えられる。さらに、今回の測定で確認されたシールドプラグ中心付近の上層上面の落ち込みと同程度の落ち込みが、原子炉格納容器からのCsを含む気体放出時までに生じていた場合には、放射性物質の放出経路はより拡大するものと考えられる。

上記の中心付近の上層上面の落ち込みにより中心パーツと側部パーツの間に放射性物質の放出経路が生じるとの分析は、1F2号機のシールドプラグ上部の線量率分布

<sup>19</sup> 福島第一原子力発電所3号機原子炉建屋上部ガレキ撤去後の建屋躯体調査結果について（平成26年2月14日 東京電力株式会社）

(図37参照)及び東京電力が示した放射性物質の放出経路に関する推定(図38)とも整合する。

1F2号機、1F5号機及び1F6号機のシールドプラグでは、それぞれ数十mm程度の上層上面の落ち込みが確認され、自重による変形(数mmの変形)よりも大きな落ち込みとなっている。これは、3Dレーザースキャナによる計測等の誤差(cmオーダーの変化があれば形状変化を把握可能)以上のものである。このため、これらのプラントのシールドプラグでは、自重に加えてそれ以外の何らかの要因によって上層上面の落ち込みが生じていると考えられる。

シールドプラグ上層上面には目立ったひび割れは確認されなかったこと、1F2号機、1F5号機及び1F6号機では、1F3号機のように上部から何らかの重量物が落下した事実が確認されていないことから、1F2号機、1F5号機及び1F6号機のシールドプラグ上層上面の落ち込みが、シールドプラグ上部からの物理的な力によって生じた可能性は低い。

1F5号機及び1F6号機のシールドプラグ上層上面の落ち込みの原因は不明であるが、1F事故に由来するものではない。

1F1号機のシールドプラグでは、1F2号機のシールドプラグよりもさらに大きな変形が生じているが、変形原因が1F2号機と同一であるかどうかは判明していない。

1F3号機のシールドプラグの変形原因について、東京電力は「シールドプラグにトロリーの主巻フック等が衝突したことによるもの」と推定しているが、1F2号機のシールドプラグの変形原因が含まれている可能性は否定できないと考えられる。

本検討における3Dレーザースキャナによるシールドプラグ上層上面の形状の測定結果は、JAEAによるシールドプラグの変形解析(自重により下方へ変形が生じる)と矛盾するものは見つからなかった。

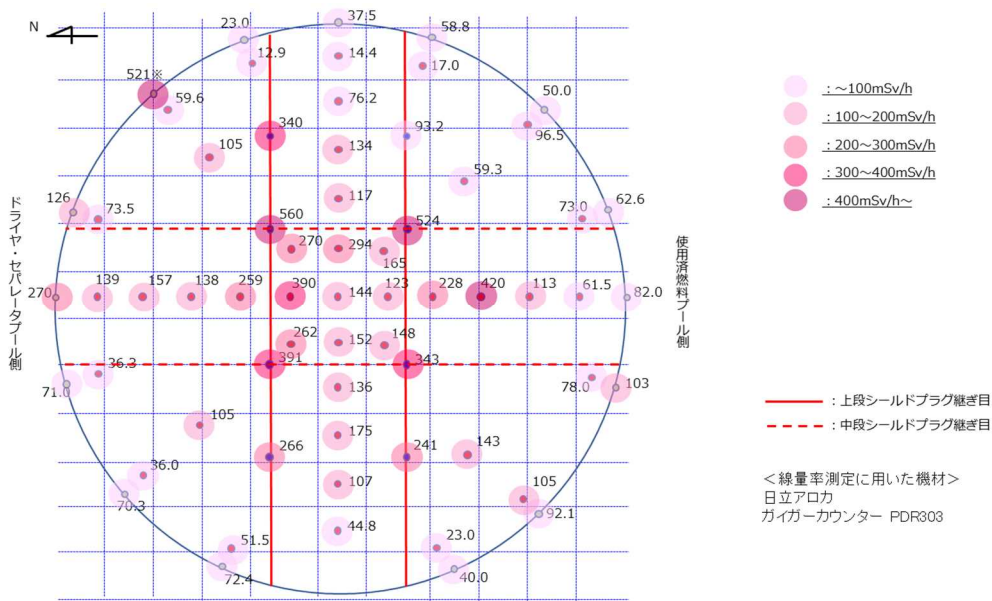


図3-7 1F2号機のシールドプラグ表面の線量率測定結果  
(2021年10月7日、東京電力による測定)<sup>20</sup>

2号機シールドプラグにおける汚染について

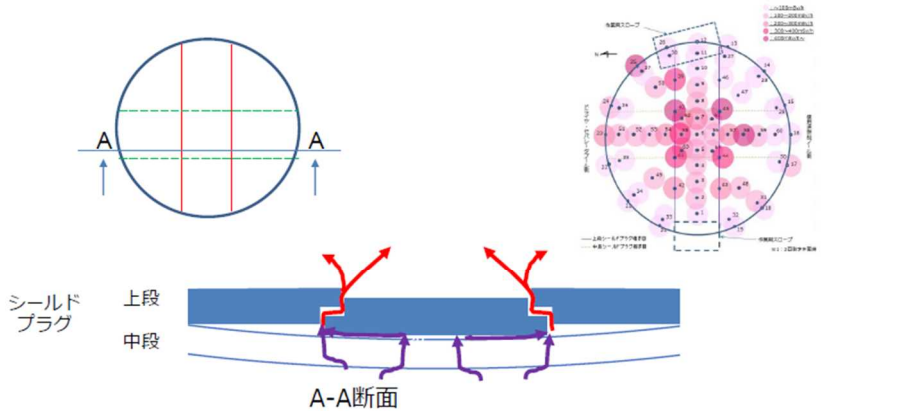


図1 シールドプラグ隙間部での流路の形成 (イメージ図) ※

- シールドプラグの中央部で、継ぎ目の段差部が接触しない状況になると、比較的大きな流路が形成される
- 継ぎ目の流路を通じてキャリアガスが流れFPも流路に沿って付着すると考えられる。中段では隙間部を抜けると、流路が無くなるように見えるが、流路を90度変えて、上段、中段のクロスする場所、および上段と中段の接する狭隘な流路を抜けて上段の隙間部に到達する
- このような流路を前提とすると、実測された線量の分布とも整合する

※シールドプラグの変位量はデフォルメしている 1

図3-8 東京電力による放射性物質の放出経路に関する推定<sup>21</sup>

<sup>20</sup> 2号機シールドプラグトップカバー下面の汚染密度について (第31回事故分析検討会資料3)

<sup>21</sup> 2号機シールドプラグにおける汚染について (第32回事故分析検討会資料4-3)

(別添 3-4)

## シールドプラグの隙間の断面積の評価

日本原子力研究開発機構 安全研究・防災支援部門  
安全研究センター  
真野 晃宏、西田 明美、李 銀生

### 1. 目的と実施内容

2号機のシールドプラグは、図1に示す3層のカバーにより構成される<sup>1</sup>。このうち、頂部カバーの鉛直方向の変形量の実測が行われた。その結果、図2に示す頂部カバーを構成する3枚の板のうち、中心部の板（以下、「中央パーツ」という）の鉛直方向の落ち込みが両端の2枚の板（以下、「側部パーツ」という）よりも大きいことが確認された<sup>2</sup>。この落ち込みによる放射性物質の流路形成の可能性を確認するため、汎用有限要素法構造解析ソフトウェア Abaqus/Standard Ver.2020 による予備的な自重変形解析を行い、中央パーツと側部パーツの間に生じる隙間の断面積を求めた。

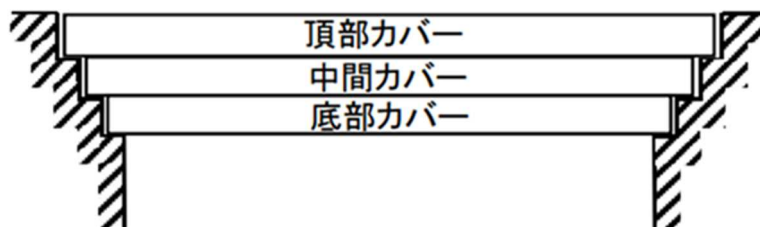


図1 シールドプラグの断面図

<sup>1</sup>原子力規制庁 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室、東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 第28回会合資料 2-1-3、「2号機シールドプラグの変形」、2022年2月28日(<https://www.nra.go.jp/data/000382268.pdf>)

<sup>2</sup>原子力規制庁、東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 第14回会合資料 5-1 追加説明資料、「シールドプラグの設計等について」、2020年10月16日(<https://www.nra.go.jp/data/000331518.pdf>)

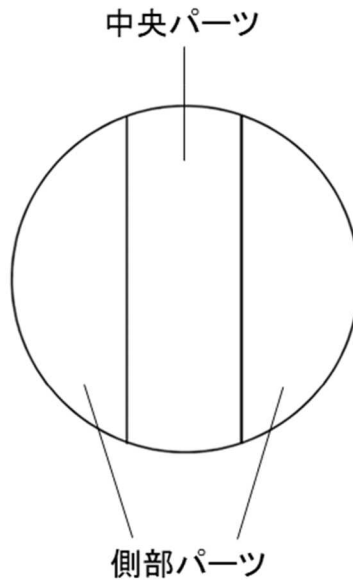


図2 頂部カバーの平面図

## 2. 解析モデルの作成

シールドプラグの寸法値については、設計書類等から適宜設定した。また、図3に示すシールドプラグの継ぎ目の構造図を参考に、側部パーツと中央パーツの間に水平方向5mmの隙間を設定した。

解析モデルの作成に用いた要素は、6面体2次低減積分要素である。要素分割の平面図を図4に、側面図を図5に示す。解析モデル全体の要素数は38272、節点数は174547である。

解析モデルの境界条件を図6に示す。図中(1)はシールドプラグとその支持部との接触である。図7に示すとおりシールドプラグは、約90mmのかかりしろをもって、原子炉建屋(R/B) 躯体により支持されている<sup>3</sup>。そのため、かかりしろが90mmとなるようなリング状の剛体平面をシールドプラグの支持部としてモデル化し、シールドプラグの下面と支持部との間に、変形体と剛体の接触を考慮した。また、(2)の境界条件として、支持部の全方向の変位を拘束した。(3)の境界条件は側部パーツと中央パーツの間の接触である。側部パーツと中央パーツの間の2か所の継ぎ目に対して、変形体と変形体の接触を設定した。

<sup>3</sup>原子力規制庁、東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 第12回 会合 資料3-1、“1~3号機原子炉建屋における線源調査について～汚染密度、核種スペクトル測定の実績～”、令和2年6月25日 (<https://www.nsr.go.jp/data/000315708.pdf>)



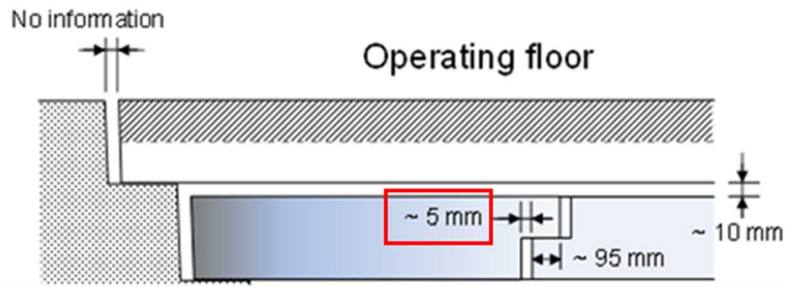


図3 シールドプラグの継ぎ目の構造図

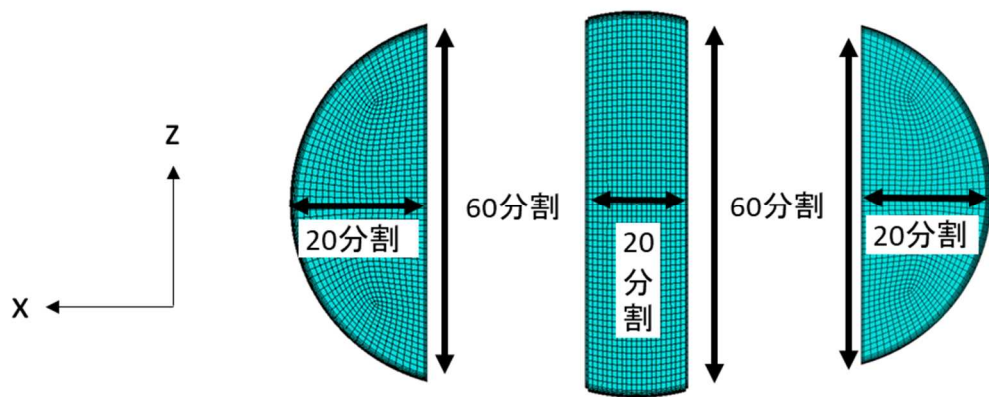


図4 要素分割の平面図

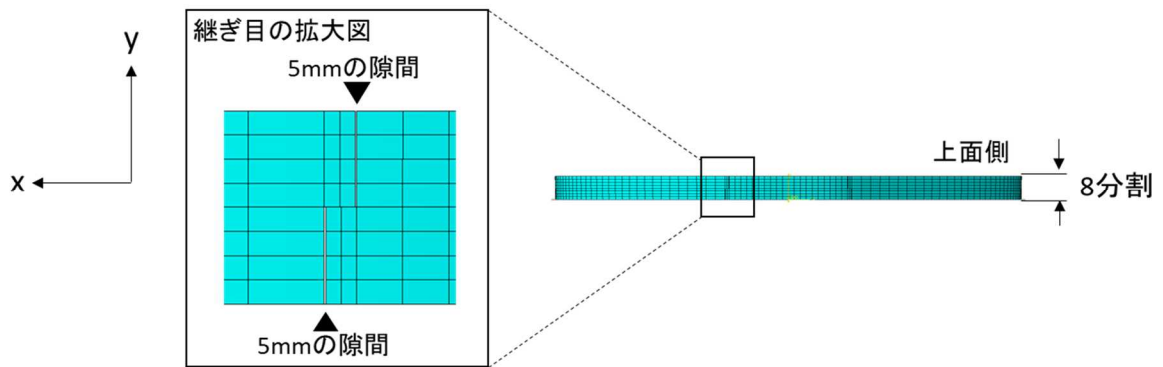


図5 要素分割の側面図

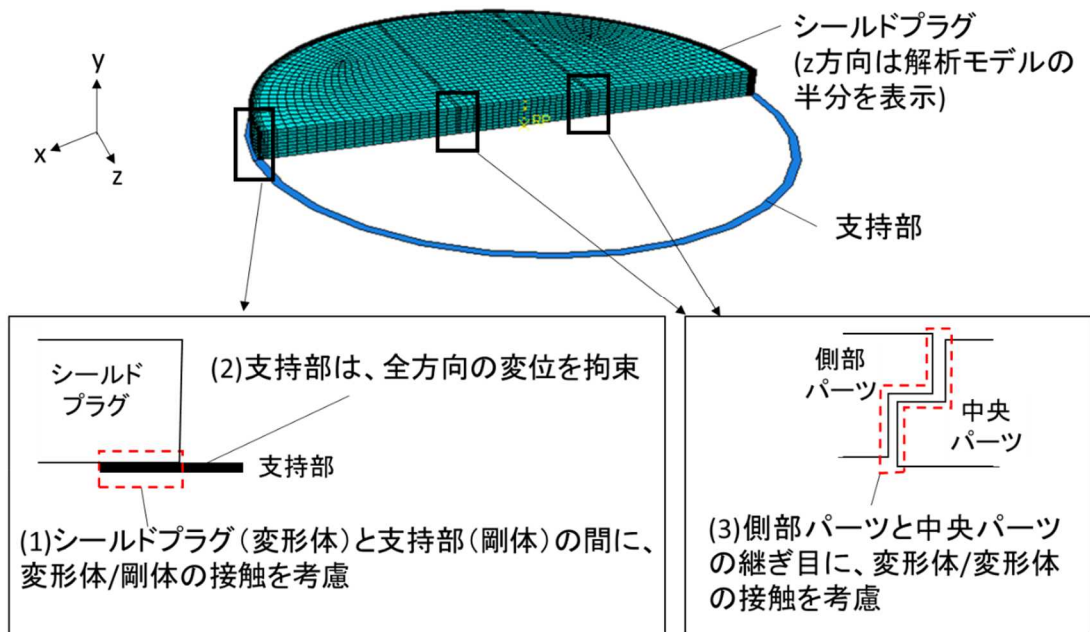


図6 境界条件の設定状況

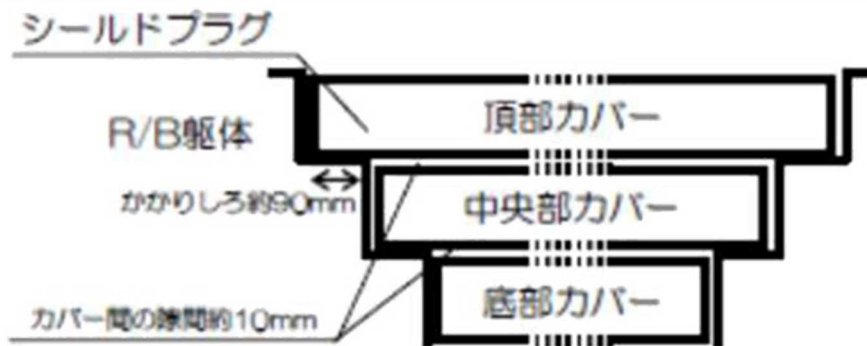


図7 シールドプラグの支持状況<sup>3</sup>

### 3. 自重解析

#### (1) 解析条件

作成した解析モデルを用いて自重解析を行い、中央パーツと側部パーツの間に生じる隙間の断面積を評価した。本解析においては、表 1 に示す室温 (20℃) における鉄筋コンクリートの材料物性値<sup>4</sup>を各パーツに対して一様に適用した。

表 1 鉄筋コンクリートの材料物性値<sup>4</sup>

	単位	物性値
密度	t/mm <sup>3</sup>	2.4×10 <sup>-9</sup>
ヤング率	MPa	25700
ポアソン比	—	0.2

#### (2) 自重解析の結果

自重解析の結果から得られた鉛直方向変位のコンターを図 8 に示す。青色が鉛直下向きの変位、すなわち落ち込み量を示している。シールドプラグの最大の落ち込みは中央パーツで発生し、その値は約 6.2mm であった。一方、側部パーツの最大の落ち込みは約 3.7mm であった。このことから、側部パーツよりも中央パーツの方が大きく落ち込み、継ぎ目において鉛直方向に隙間が生じたことが確認された。

次に、鉛直方向の隙間の断面積を評価するために、継ぎ目における中央パーツと側部パーツのそれぞれの変形後の鉛直方向 (y 方向) 座標を抽出した。着目した継ぎ目は、図 9 に示すとおり 2 箇所ある継ぎ目のうちの 1 つである。継ぎ目における鉛直方向座標の抽出位置は、図 10 に示す位置である。図 11 に鉛直方向座標の抽出結果を示す。青線と赤線は、それぞれ側部パーツと中央パーツの変形後の鉛直方向座標を示す。これらの鉛直方向座標を 4 次多項式で近似し、その差を積分することで求めた隙間の断面積は約 1.8×10<sup>4</sup>mm<sup>2</sup>であった。

また、水平方向の隙間の断面積を、同様の手法により求めた。自重解析の結果から得られた水平方向 (継ぎ目に直交する x 方向) 変位のコンターを図 12 に示す。赤色が紙面左向きの変位を示し、青色が紙面右向きの変位を示している。図より、側部パーツが中央パーツに向かって最大で約 0.5mm 変形し、継ぎ目に直交する水平方向の隙間量がシールドプラグの上面側で初期設定値の 5mm から減少したことが確認された。この結果から、継ぎ目における中央パーツと側部パーツのそれぞれの変形後の水平方向座標を抽出した。着目した継ぎ目は、図 9 に示した 2 箇所ある継ぎ目のうちの 1 つであり、継ぎ目における水平方向座標の抽出位置は、図 13 に示す位置であ

<sup>4</sup>東京電力株式会社、特定原子力施設監視・評価検討会 (第 4 回) 資料 5-1、“福島第一原子力発電所 1～4 号機本館建物の基準地震動 Ss に対する耐震安全性評価について”、平成 25 年 2 月 21 日

る。図 14 に水平方向座標の計測結果を示す。青線と赤線は、側部パーツと中央パーツの変形後の水平方向座標をそれぞれ示す。これらの水平方向座標を 2 次多項式で近似し、その差を積分することで求めた隙間の断面積は約  $5.2 \times 10^4 \text{mm}^2$  であり、断面積の初期値である約  $5.7 \times 10^4 \text{mm}^2$  とほぼ同等であった。

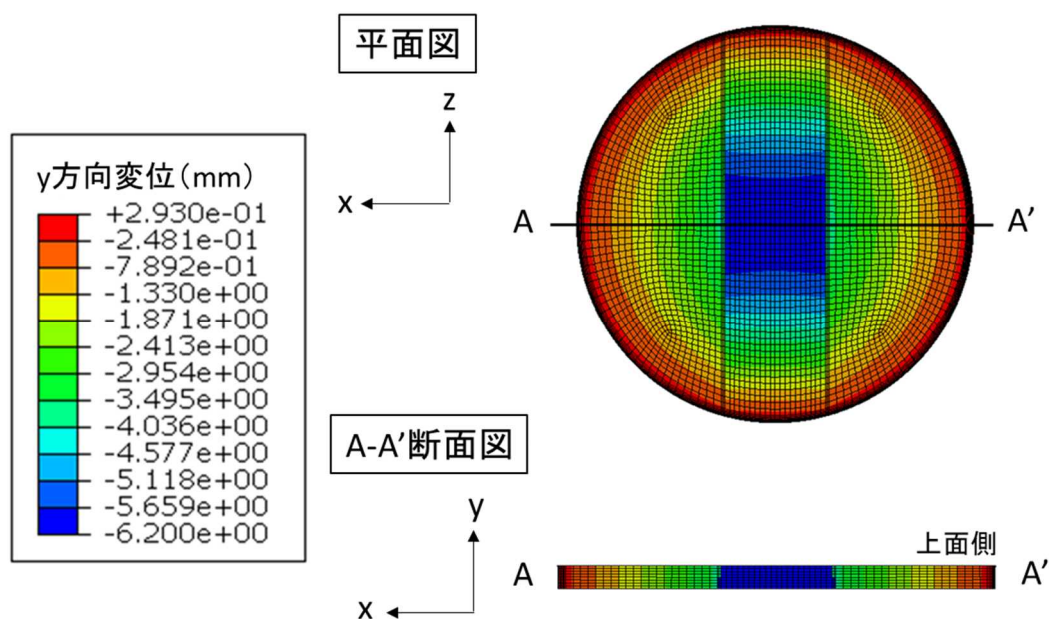


図 8 鉛直方向 (y 方向) 変位のコンター図

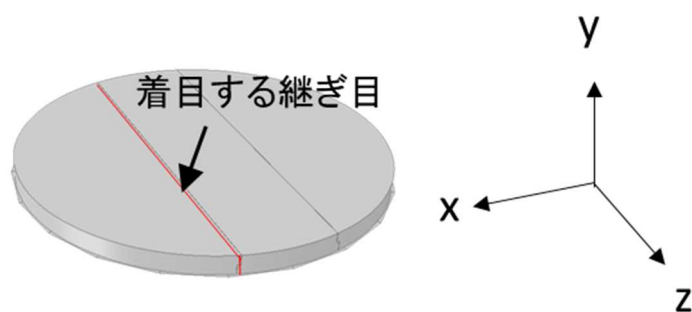


図 9 断面積を評価する継ぎ目位置

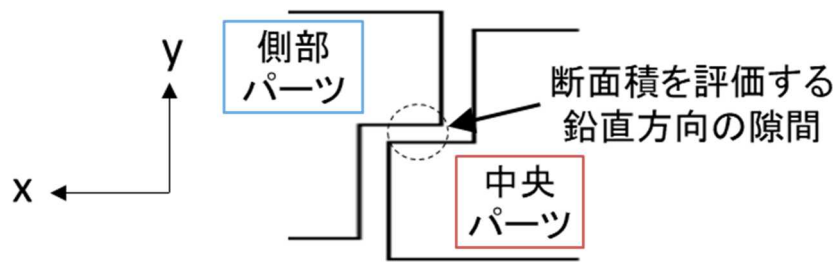


図 10 鉛直方向断面積の評価位置

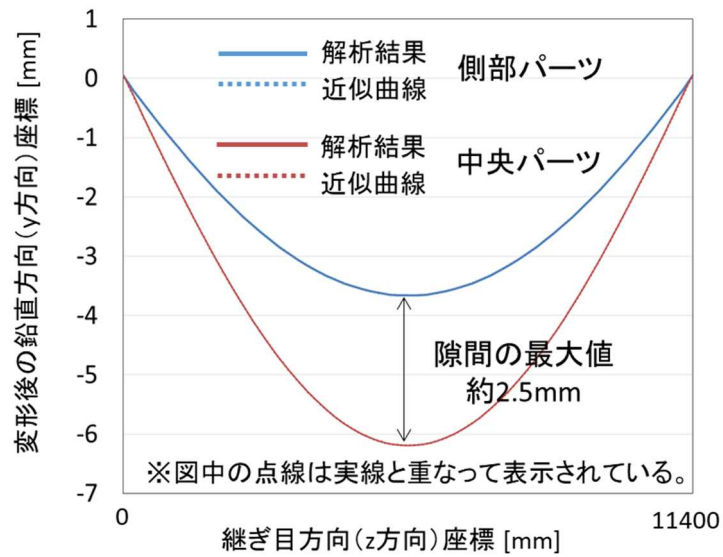


図 11 継ぎ目に沿った変形後の y 方向座標

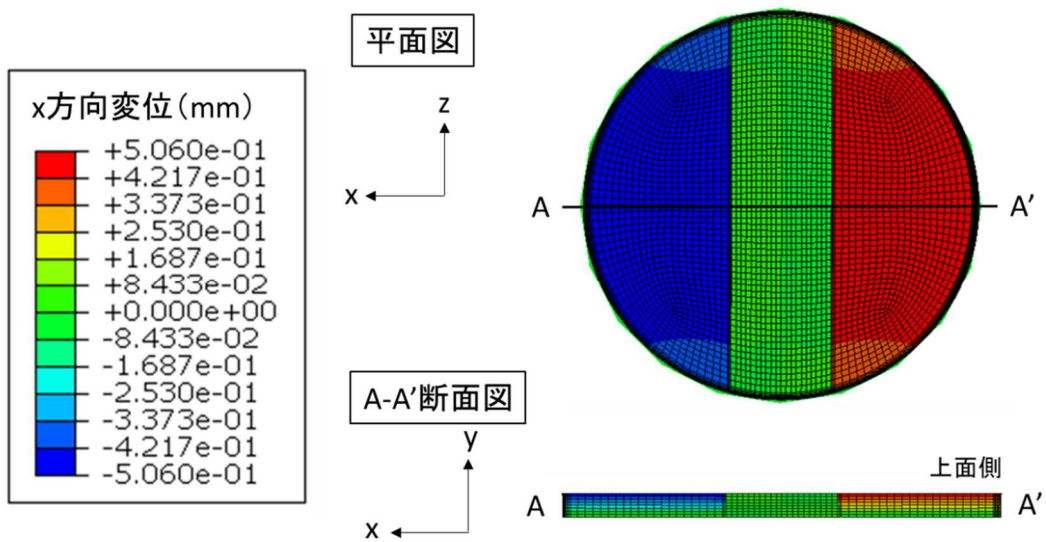


図 12 水平方向（継ぎ目に直交する x 方向）変位のコンター図

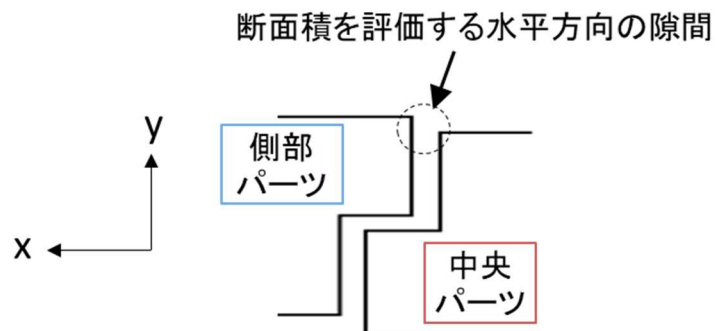


図 13 水平方向断面積の評価位置

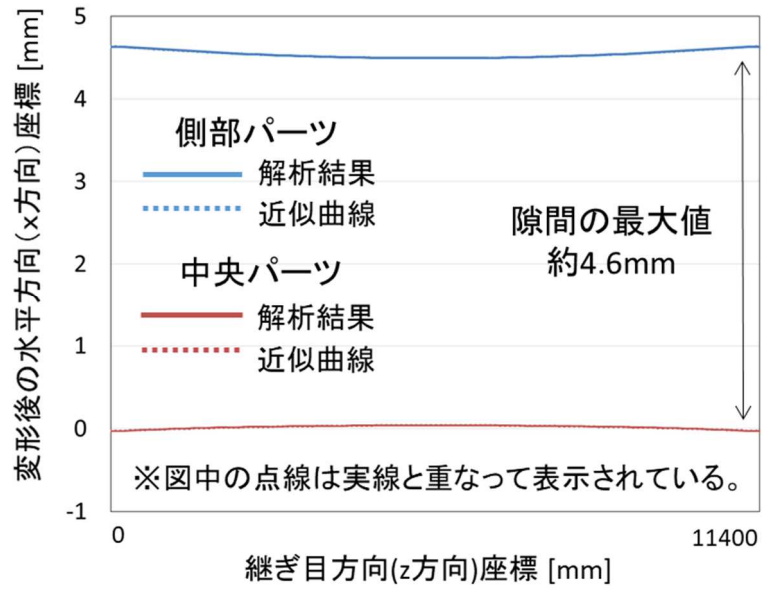


図 14 継ぎ目に沿ったパーツ上面側の変形後の x 方向座標

#### 4. 再現解析

東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会の第 28 回会合では、2 号機のシールドプラグ頂部の落ち込み量の実測値<sup>2</sup>が示され、40mm 程度と推測される。この落ち込み量により側部パーツと中央パーツの間に生じる隙間の断面積を推定するため、落ち込み量が実測値の約 40mm となる条件で自重解析を行った。

上述の室温の鉄筋コンクリートのヤング率を考慮した自重解析では、最大落ち込み量が 6.2mm であった。そのため、落ち込み量が実測値となる鉄筋コンクリートのヤング率を逆算し、その値が 4000MPa であることを確認した。そこで、ヤング率を 4000MPa とした自重解析を、落ち込み量の再現解析として行った。このヤング率は、鉄筋コンクリートの温度が 700℃程度の場合に相当する。

再現解析の結果から得られた鉛直方向（y 方向）変位のコンターを図 15 に示す。青色が鉛直下向きの変位、すなわち落ち込みを示している。シールドプラグの中央パーツの最大の落ち込み量は約 40mm であり、実測された落ち込み量が再現されている。また、側部パーツの最大の落ち込みは約 24mm であり、継ぎ目において、室温のヤング率を考慮した自重解析よりも大きな隙間が鉛直方向に生じていることが確認された。図 10 に示した位置における自重による変形後の鉛直方向座標の抽出結果を図 16 に示す。青線と赤線は、側部パーツと中央パーツの変形後の鉛直方向座標をそれぞれ示す。これらの鉛直方向座標を 4 次多項式で近似し、その差を積分することで求めた隙間の断面積は約  $1.1 \times 10^5 \text{mm}^2$  であった。

また、再現解析の結果から得られた水平方向（継ぎ目に直交する x 方向）変位のコンターを図 17 に示す。赤色は紙面左向きの変位を示し、青色は紙面右向きの変位を示している。図より、側部パーツが中央パーツに向かって約 3.4mm 変形し、継ぎ目に直交する水平方向の隙間量が上面側で初期設定値の 5mm から減少したことが確認された。図 14 に示した位置における自重による変形後の水平方向座標の抽出結果を図 18 に示す。青線と赤線は、側部パーツと中央パーツの変形後の水平方向座標をそれぞれ示す。これらの水平方向座標を 2 次多項式で近似し、その差を積分することで求めた隙間の断面積は約  $2.0 \times 10^4 \text{mm}^2$  であった。



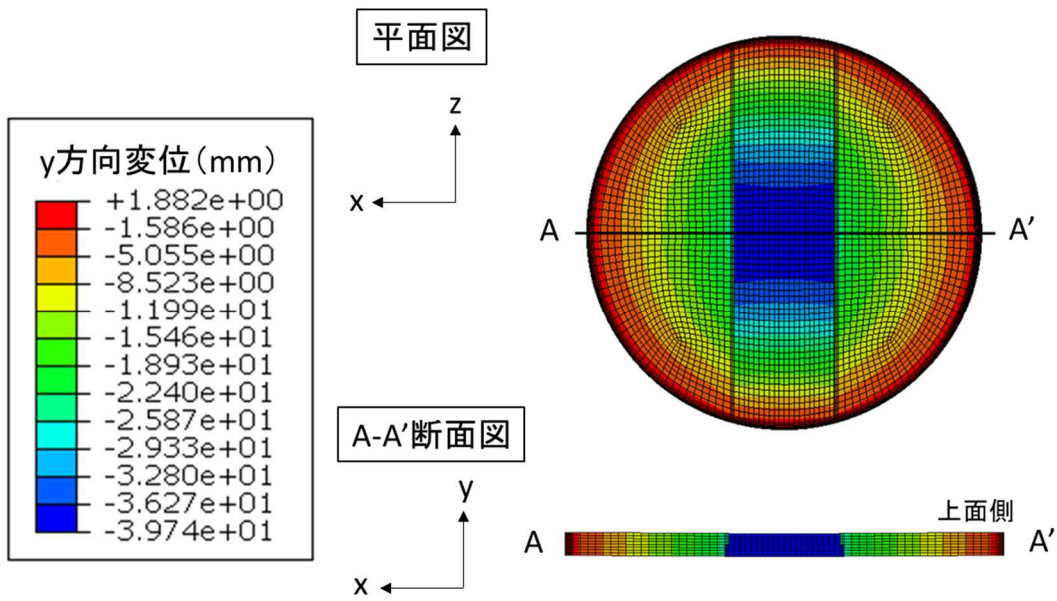


図 15 再現解析における鉛直方向 (y 方向) 変位のコンター図

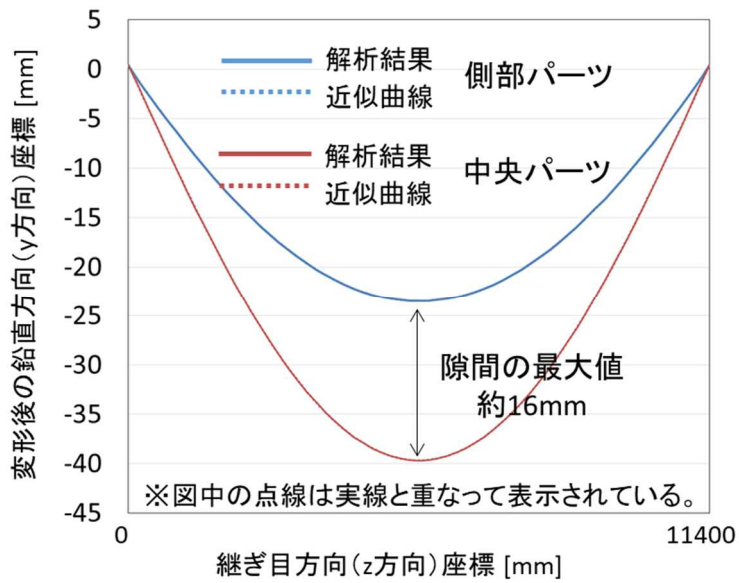


図 16 再現解析における継ぎ目に沿った変形後の y 方向座標

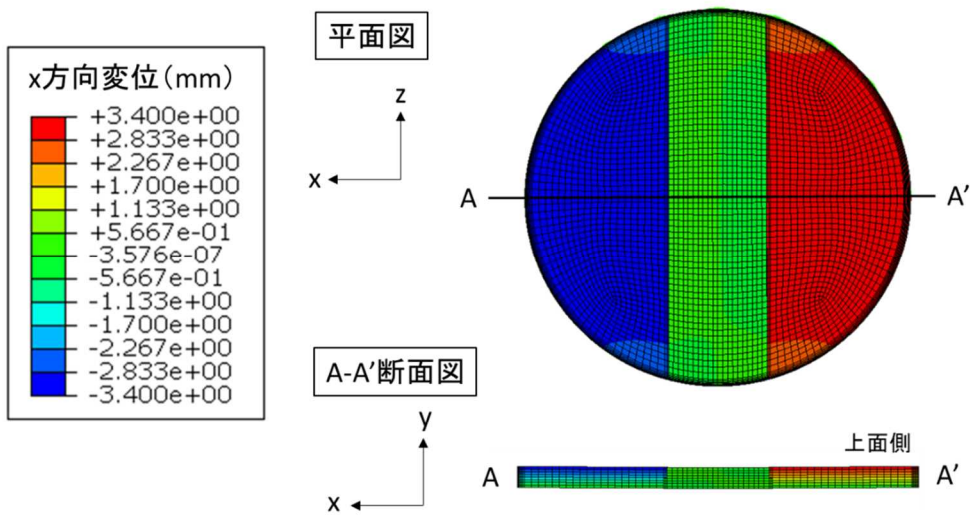


図 17 再現解析における水平方向（継ぎ目に直交する x 方向）変位のコンター図

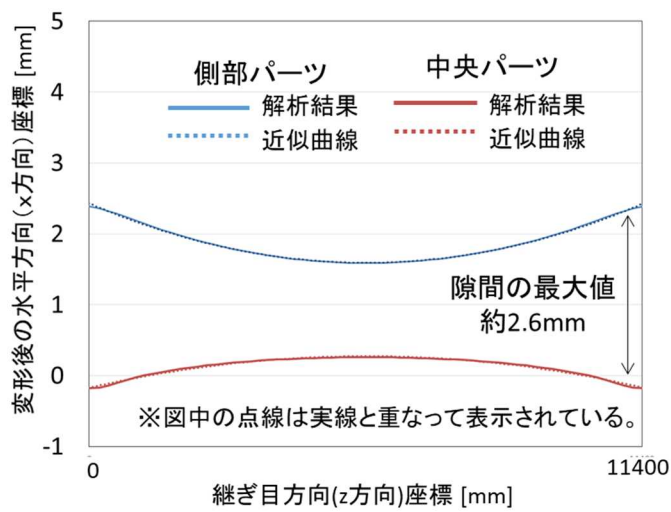


図 18 再現解析における継ぎ目に沿ったパーツ上面側の変形後の x 方向座標

## 5. まとめ

シールドプラグの自重変形による有意な流路形成の可能性を検討するため、頂部シールドプラグの予備的な有限要素法構造解析を実施した。室温の物性値を用いた場合において、シールドプラグの変形により有意な面積を有する流路が形成され得ることが示された。この解析においては、変形（落ち込み）の程度が実測値に比べて大幅に小さい結果となったため、ヤング率を低減した感度解析を行い、鉄筋コンクリートの温度が想定し難い高温の状態に相当するヤング率を用いた場合に、実測値と概ね同等の落ち込みを再現できることを確認した。本感度解析の結果は、自重による落ち込みを大きく超える変形の要因を温度のみに求めることはできないことを示していると考えられる。

(別添 4)

## 1 号機原子炉格納容器内におけるペDESTAL 損傷及び堆積物の形成

原子力規制庁原子力規制部

東京電力福島第一原子力発電所事故対策室 木原 昌二

### 1. 背景及び目的

東京電力及び IRID (International Research Institute for Nuclear Decommissioning\_技術研究組合 国際廃炉研究開発機構) が 2022 年 2 月から実施している水中 ROV (Remotely operated vehicle\_遠隔操作型の無人潜水機) を用いた 1 号機原子炉格納容器内部調査において、1 号機のペDESTAL 外周部に堆積物やペDESTAL 開口部周辺のコンクリート部に損傷が確認されている。

これらの堆積物やペDESTAL の損傷は、従来考えられていた MCCI (Molten Core Concrete Interaction) の事象と異なる可能性があり、その事象進展に関して検討を進めている。

今後、東京電力及び IRID において、堆積物のサンプリングやペDESTAL 内部の調査など、更なる調査が計画されている。

### 2. 調査の概要

東京電力及び IRID が実施している水中 ROV を用いた 1 号機原子炉格納容器内部調査は、これまで①事前対策となるガイドリング取付 (ROV-A)、②ペDESTAL 外の詳細目視 (ROV-A2) 及び③堆積物厚さ測定 (ROV-C) の調査が実施されている。(表 1 参照)

④堆積物デブリ検知・評価 (ROV-D) 以降の調査 (後半調査) については、2022 年 3 月 29 日の②ペDESTAL 外の詳細目視 (ROV-A2) の調査の際の ROV-A2 のカメラの映像不良の発生や、同年 6 月 10 日の③堆積物厚さ測定 (ROV-C) の調査の際に、ROV-C のケーブルが PCV 内の電線管と配管サポート部材の間に挟まり、移動範囲が限定的となる事象が発生した<sup>1</sup>こともあり、調査工程の見直しが行われた。東京電力は、後半調査に向けたモックアップ施設の改良及びトレーニングを実施し、準備が整った 12 月 6 日から後半調査が開始された。(図 1 参照)

<sup>1</sup> 2022 年 6 月 10 日に、ROV-C のケーブルが PCV 内の電線管と配管サポート部材の間に挟まり、移動範囲が限定的となる事象が発生したが、翌 6 月 11 日に予め定めていた手順 (ケーブル挟まり解消作業) に則り操作を行うことで挟まりを解消、その後 ROV-C を回収し、調査を完了している。

		調査時期	調査目的	調査装置等
前半調査	①	2022年2月8日～10日	事前対策となるガイドリング取付	ROV-A
	②	2022年3月14日～16日 <sup>※1</sup> 3月28日～29日 <sup>※2</sup> 5月17日～23日 <sup>※3</sup>	ペDESTAL外の詳細目視	ROV-A2
	③	2022年6月7日～11日	堆積物厚さ測定	ROV-C
後半調査	④	2022年12月6日～10日	堆積物デブリ検知・評価	ROV-D
	⑤	2023年1月中旬予定（1回目） 2月上旬予定（2回目）	堆積物サンプリング	ROV-E
	⑥	2023年2月下旬予定	堆積物3Dマッピング	ROV-B
	②'	2023年3月中旬予定 <sup>※4</sup>	ペDESTAL内部、壁部の詳細目視	ROV-A2

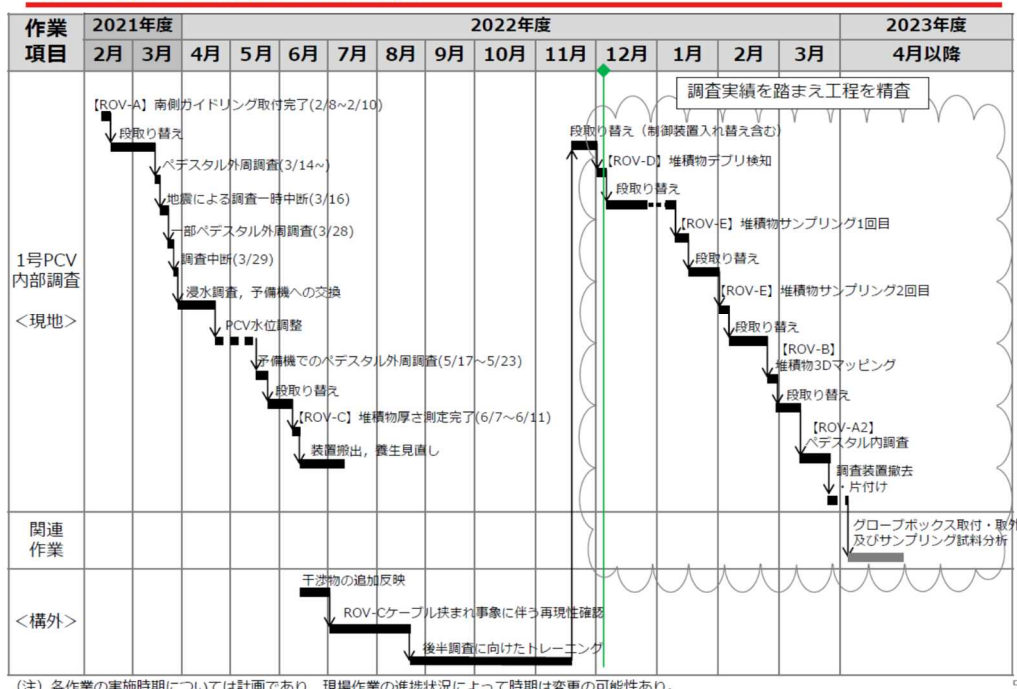
※1：2022年3月16日 福島県沖を震源とする地震による調査の一時中断

※2：2022年3月28日 ペDESTAL外周調査を再開するが、同年3月29日にROV-A2のカメラの映像不良（浸水によるもの）が発生し調査中断

※3：2022年5月17日 ROV-A2 予備機でのペDESTAL外周調査を再開

表1 1号機PCV内部調査の概要

4. 1号機PCV内部調査全体工程



(注) 各作業の実施時期については計画であり、現場作業の進捗状況によって時期は変更の可能性あり。

図1 1号機PCV内部調査の全体工程（2022年12月8日時点）

1号機原子炉格納容器内部調査は、1号機原子炉格納容器のX-2ペネトレーション（X-2ペネ）から水中ROVを投入し、PCV内の水中を遊泳させ、各種調査を行う計画となっており、PCV地下階の0°から215°まで（ペデスタル開口部含む）を大まかな調査範囲としている。（図2、図3参照）

水中ROVは、調査目的に応じて計測器を積載した設計となっている。（図4～図6参照）

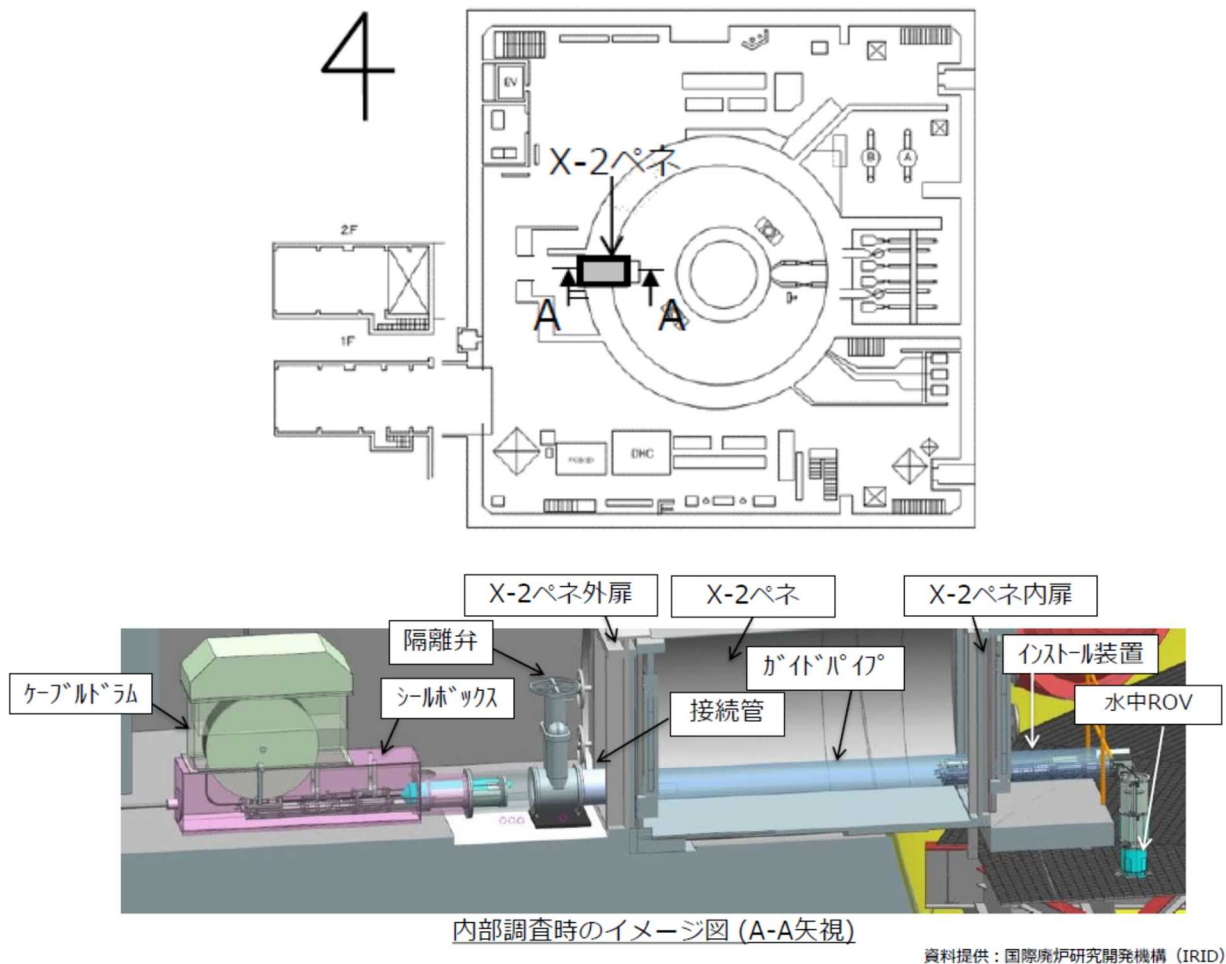


図2 1号機原子炉建屋1階におけるX-2ペネの位置等の概要

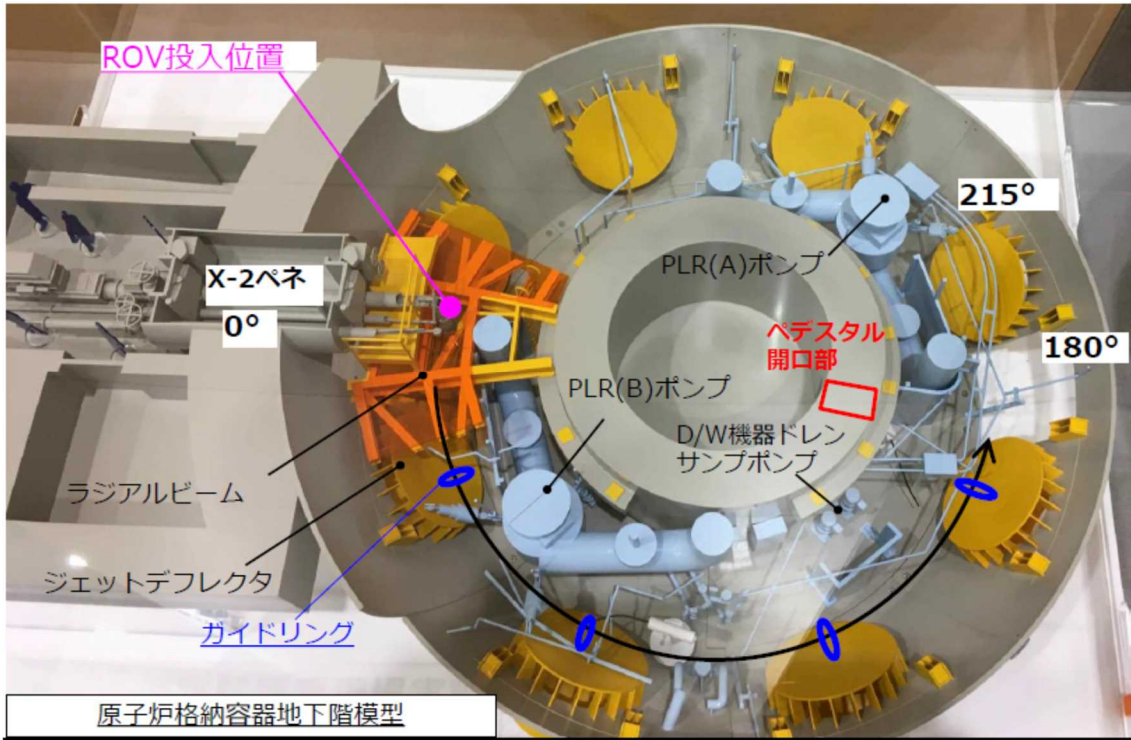


図3-1 1号機原子炉格納容器内部調査の調査範囲の概要  
(ROV-A2 調査の例)

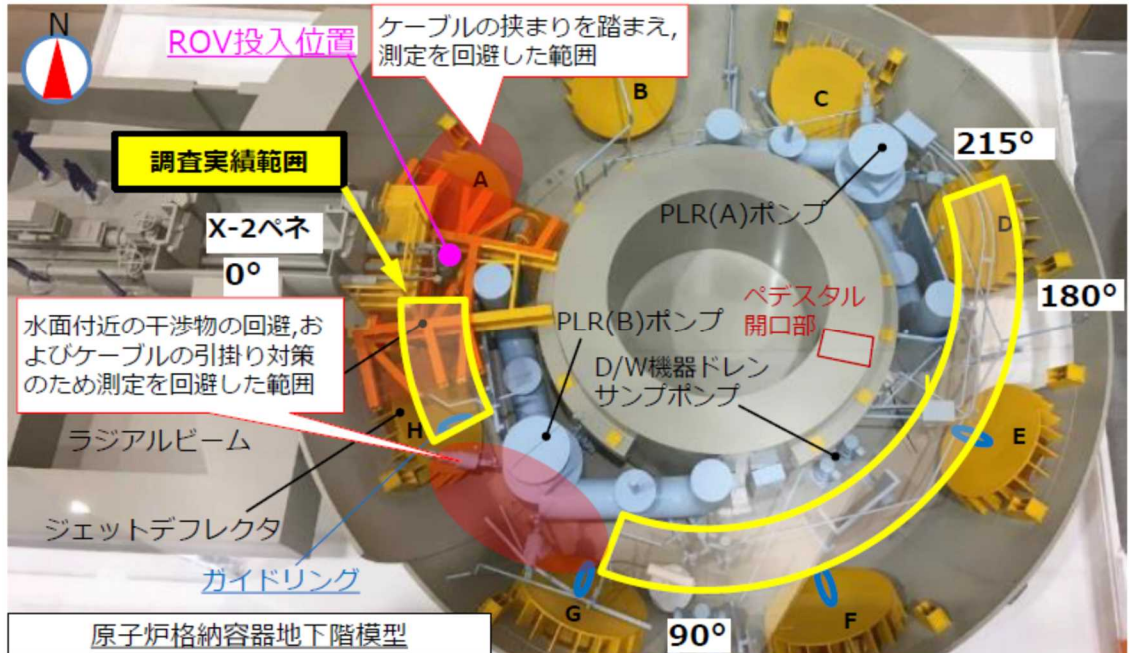
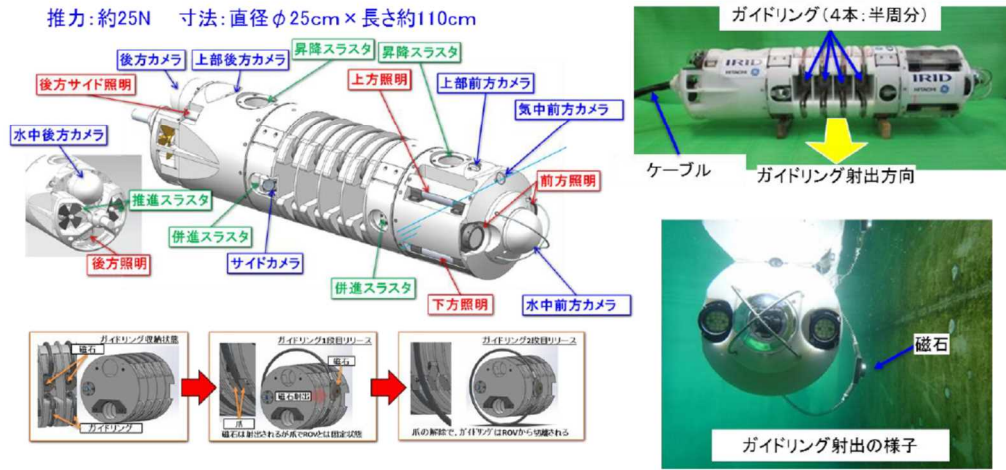


図3-2 1号機原子炉格納容器内部調査の調査範囲の概要  
(ROV-C 調査の例)

(参考) 調査装置詳細 ROV-A\_ガイドリング取付用

調査装置	計測器	実施内容
ROV-A ガイドリング取付	ROV保護用(光ファイバー型γ線量計※) ※: ベDESTAL外調査用と同じ	ケーブルの構造物との干渉回避のためジェットデフにガイドリング(内径300mm(設計値))を取付ける
	員数: 北用1台、南用1台 航続可能時間: 約80時間/台	最初に投入されるROVであるため低摩擦で比較的硬いポリウレタン製ケーブル(φ24mm)を採用

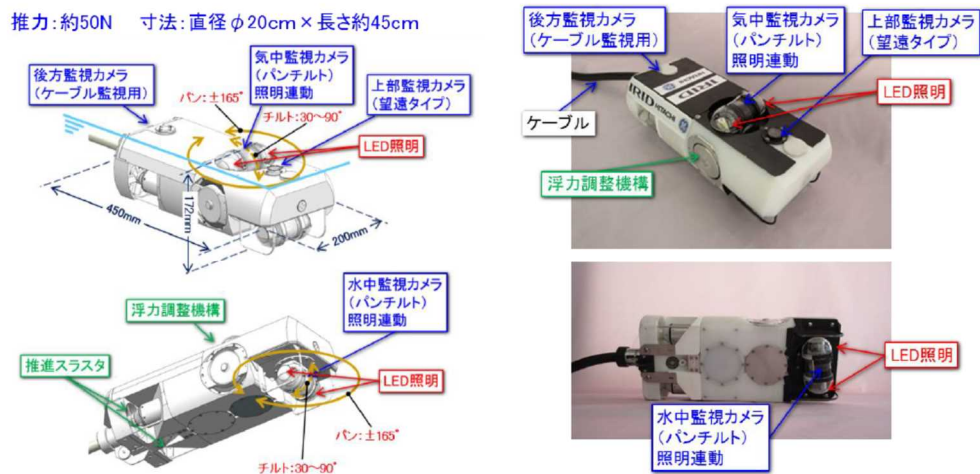


資料提供: 国際廃炉研究開発機構 (IRID) 18

図4 ①調査装置詳細 ROV-A (ガイドリング取付用)

(参考) 調査装置詳細 ROV-A2\_詳細目視調査用

調査装置	計測器	実施内容
ROV-A2 詳細目視	ROV保護用(光ファイバー型γ線量計※, 改良型小型B10検出器) ※: ベDESTAL外調査用と同じ	地下階の広範囲とベDESTAL内(※)のCRDハウジングの脱落状況などカメラによる目視調査を行う(※Aができた場合)
	員数: 2台 航続可能時間: 約80時間/台	調査のために細かく動くため、柔らかいポリ塩化ビニル製のケーブル(φ23mm)を採用



資料提供: 国際廃炉研究開発機構 (IRID) 19

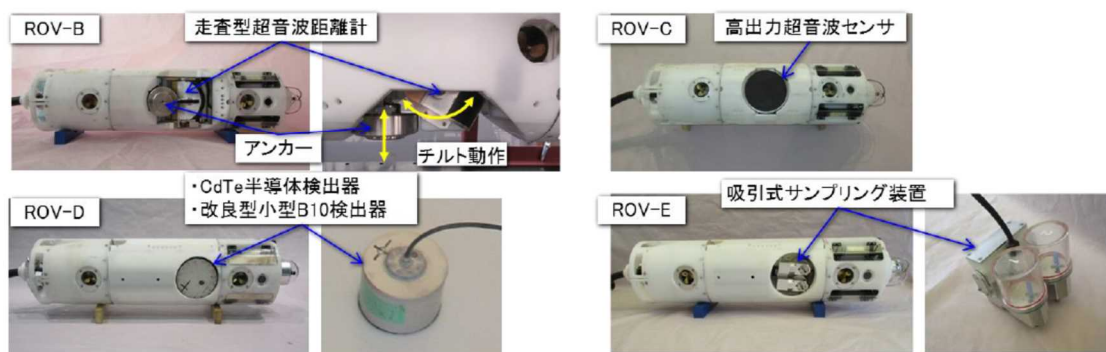
図5 ②調査装置詳細 ROV-A2 (詳細目視調査用)



(参考) 調査装置詳細 ROV-B~E\_各調査用

調査装置	計測器	実施内容
<b>ROV-B</b> 堆積物3Dマッピング	・ 走査型超音波距離計 ・ 水温計	走査型超音波距離計を用いて堆積物の高さ分布を確認する
<b>ROV-C</b> 堆積物厚さ測定	・ 高出力超音波センサ ・ 水温計	高出力超音波センサを用いて堆積物の厚さとその下の物体の状況を計測し、デブリの高さ、分布状況を推定する
<b>ROV-D</b> 堆積物デブリ検知	・ CdTe半導体検出器 ・ 改良型小型B10検出器	デブリ検知センサを堆積物表面に投下し、核種分析と中性子束測定により、デブリ含有状況を確認する
<b>ROV-E</b> 堆積物サンプリング	・ 吸引式カブリカ <sup>®</sup> 装置	堆積物サンプリング装置を堆積物表面に投下し、堆積物表面のサンプリングを行う

員数：各2台ずつ 航続可能時間：約80時間/台 調査のために細かく動くため、柔らかいポリ塩化ビニル製のケーブル (ROV-B：φ33mm, ROV-C：φ30mm, ROV-D：φ30mm, ROV-E：φ30mm)を採用



資料提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID)

33

図6 ③~⑥調査装置詳細 ROV-B,C,D,E

### 3. 調査の結果

#### (1) ROV-A 及び ROV-A2 によるペDESTAL基礎部調査の概要

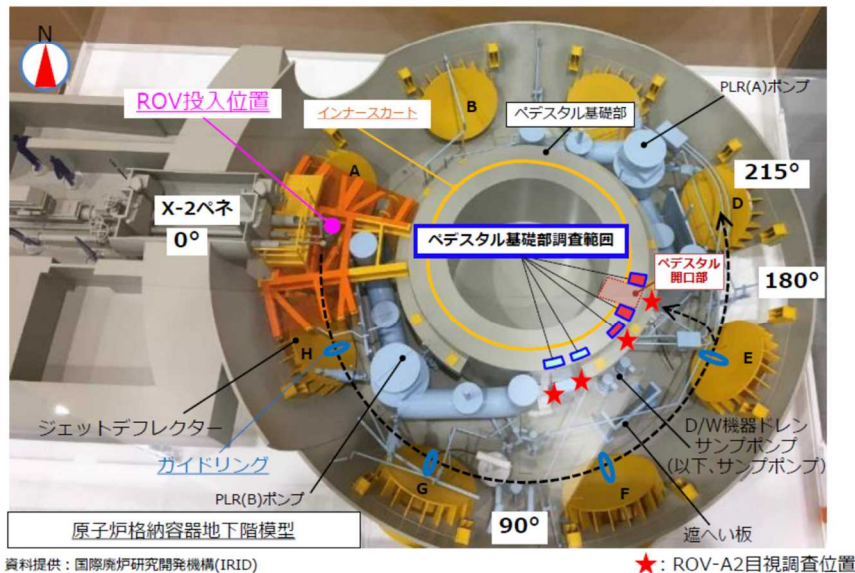
①事前対策となるガイドリング取付 (ROV-A) 及び②ペDESTAL外の詳細目視 (ROV-A2) の調査の結果、ペDESTAL開口部付近において、ペDESTAL基礎部のコンクリートの損傷及び複数の堆積物が確認されている。(図7～図17参照)

特定原子力施設監視・評価検討会 資料  
(2022年6月20日)

IRID  
TEPCO

#### 2. ROV-A2によるペDESTAL基礎部調査の概要と実績

- 調査範囲はPCV地下階の約90°から約180° (ペDESTAL開口部含む) とし、カメラによる目視調査を実施 (主な調査箇所)
  - 既設構造物の状態確認及び堆積物の広がり状況・高さ・傾斜確認。
  - ペDESTAL開口部付近のコンクリート壁状況確認。(下図 調査箇所: 鉄筋露出、露出無)
  - ペDESTAL内部の目視調査は調査実績等を踏まえ、最終でROV-A2を投入予定。



資料提供: 国際廃炉研究開発機構(IRID)

★: ROV-A2目視調査位置

2

図7 ROV-A2によるペDESTAL基礎部調査の概要と実績

### 3. ROV-A2調査実績① ペDESTAL開口エリア(鉄筋露出有り)

#### ■ ペDESTAL開口部壁面の状態(5月18、19日調査)

- ▶ テーブル状の堆積物があり、当該堆積物下部の壁面を確認したところ、コンクリートがなく、鉄筋、インナースカートが露出していることを確認。PCV底部にも堆積物があり、当該堆積物下部の状況は確認できず。ペDESTAL開口部左右共に同様の状態。



図8 ROV-A2 調査実績① ペDESTAL開口エリア (鉄筋露出有り)

#### (ペDESTAL開口部の状況)

- ① ペDESTAL開口部の両側ではコンクリート部が消失している。鉄筋は損傷を受けていないように見える。
- ② ペDESTALのコンクリート部はテラス状構造<sup>2</sup>より下側で消失している。

<sup>2</sup> 東京電力の資料中、「テーブル状の堆積物」とされているもの。本資料では、以下、「テラス状構造」という。

### 3. ROV-A2調査実績② 南側エリア(鉄筋露出確認されず)

#### ■ 電線管中継箱及びサンプポンプ付近の壁面の状況 (3月16日調査)

- PCV底部に堆積物があり、当該堆積物下部の壁面を確認することができなかったが、目視可能な範囲のペDESTAL壁面に鉄筋等が露出していないことを確認。

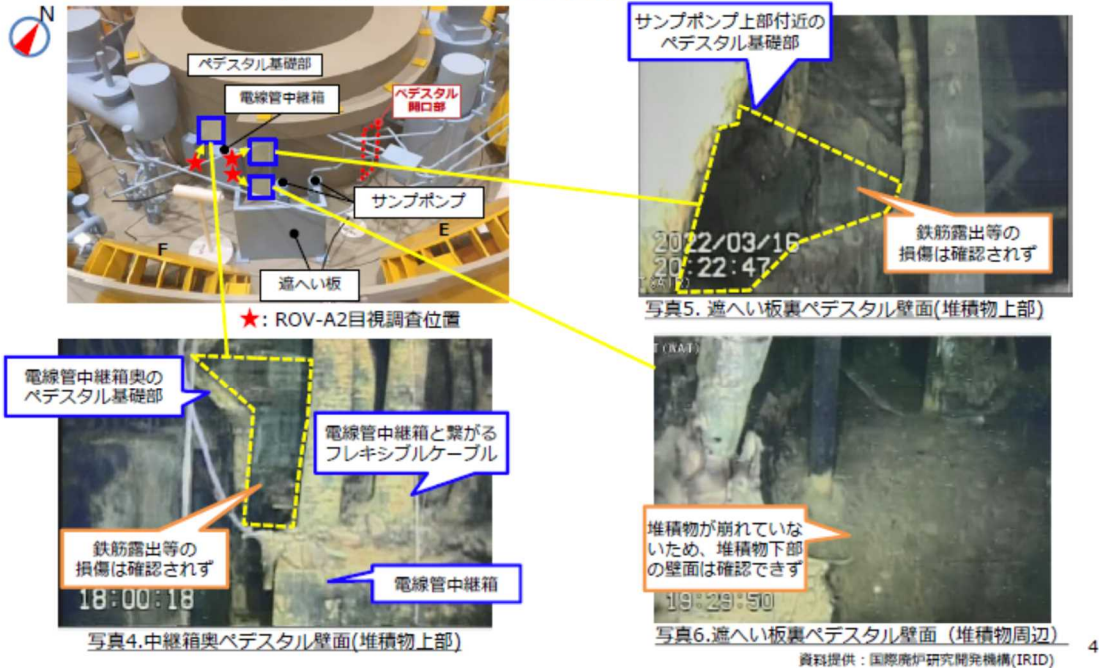


図9 ROV-A2 調査実績② 南側エリア (鉄筋露出確認されず)

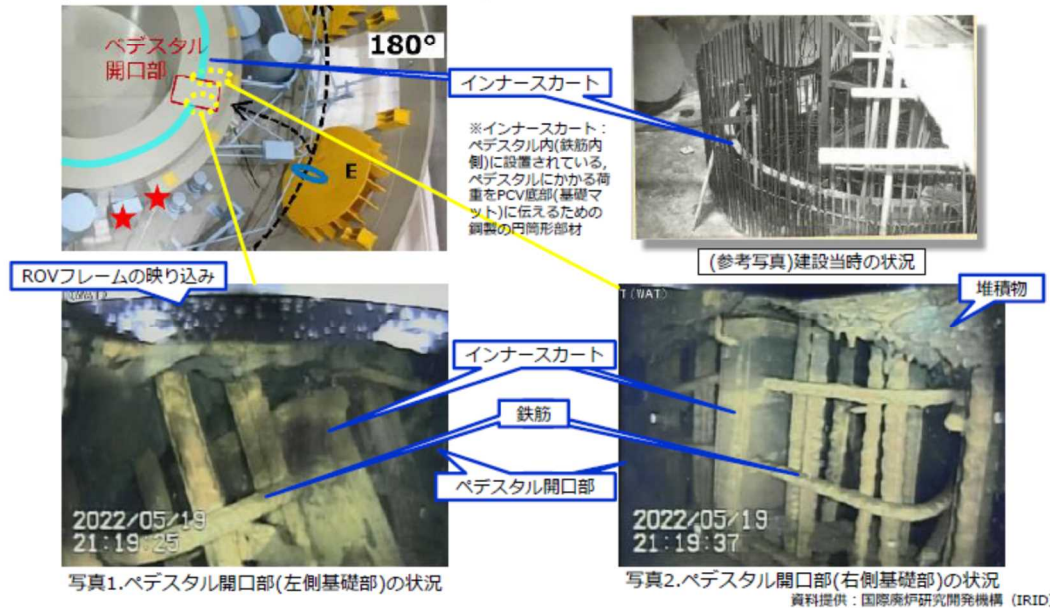
(ペDESTAL開口部南側エリアの状況)

- ② ペDESTALのコンクリート部はテラス状構造より下側で消失している。
- ③ ペDESTAL周辺の種々の配管は大きな損傷を受けていない。

#### 4. 調査実績

##### ペDESTAL開口部(基礎部)の状況(5月19日調査分①)

- ✓ これまで確認されていた鉄筋らしきものについて、近接し確認した映像を、建設当時の写真と比較した結果、ペDESTALの鉄筋であることが確認されました。また、インナースカート※も確認されました。
- ✓ 1号機の原子炉圧力容器及び原子炉格納容器の耐震性については、事故後（2016年度）の評価において、ペDESTALが一部欠損していたとしても、支持機能を大きく損なわないことの確認を行っております。
- ✓ 今回確認された調査結果も踏まえ、今後さらに詳細なデータを取得し、改めて評価を行います。



9

図10 ペDESTAL開口部（基礎部）の状況

#### (ペDESTAL開口部（基礎部）の状況)

- ① ペDESTAL開口部の両側ではコンクリート部が消失している。鉄筋は損傷を受けていないように見える。
- ② ペDESTALのコンクリート部はテラス状構造より下側で消失している。

6. 床面から1m高さの堆積物の状況①

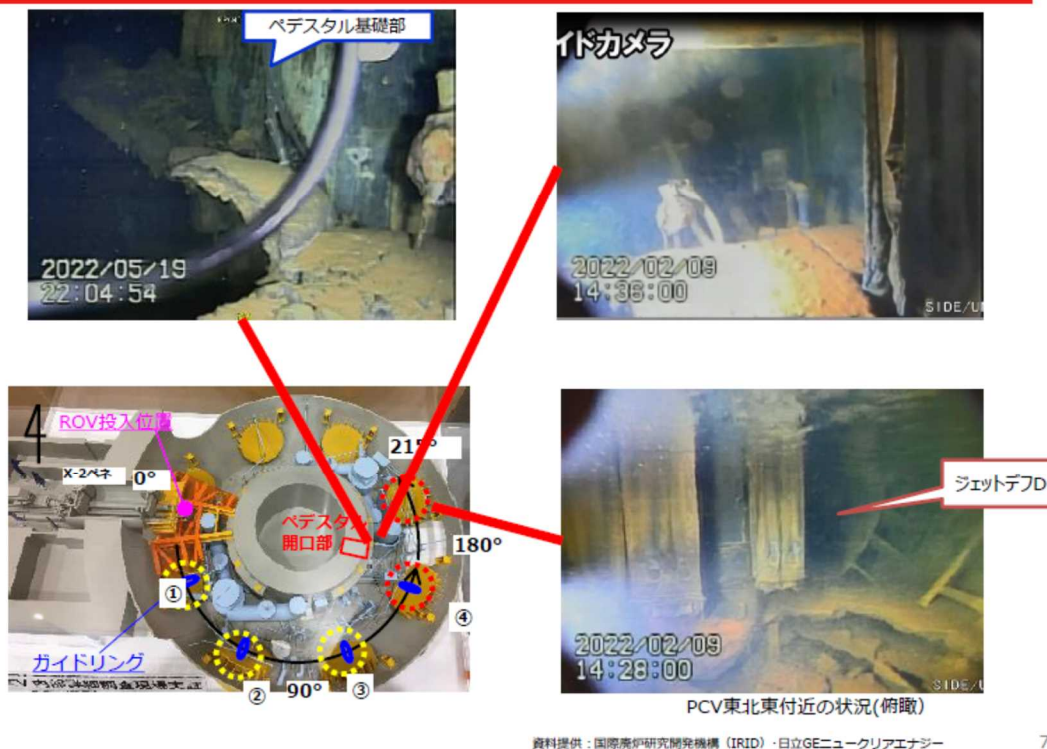


図 11 床面から 1m 高さの堆積物の状況①

(ペDESTAL基礎部及びテーブル状堆積物の状況)

- ② ペDESTALのコンクリート部はテーブル状堆積物より下側で消失している。
- ④ シート状の鉛遮へい（鉛毛マット）は一定の高さで溶融している。
- ⑤ テラス状構造はペDESTAL開口部から反対側に向けて分布している。
- ⑥ テラス状構造はペDESTAL開口部付近が高く（～1.1m）、反対側が低く（～0.4m）になっている。
- ⑦ テラス状構造の上側（表面）は滑らかなように見える。

6. 床面から1m高さの堆積物の状況②



資料提供：国際原子力研究開発機構（IRID）・日立GEニュークリアエナジー

8

図12 床面から1m高さの堆積物の状況②

（ペデスタル基礎部及びテーブル状堆積物の状況）

- ② ペデスタルのコンクリート部はテラス状構造より下側で消失している。
- ③ ペデスタル周辺の種々の配管は大きな損傷を受けていない。
- ⑤ テラス状構造はペデスタル開口部から反対側に向けて分布している。
- ⑥ テラス状構造はペデスタル開口部付近が高く（～1.1m）、反対側が低く（～0.4m）なっている。
- ⑦ テラス状構造の上側（表面）は滑らかなように見える。



図 13 堆積物等の形状①

(堆積物等の形状)

- ⑦ テラス状構造の上側（表面）は滑らかなように見える。
- ⑧ テラス状構造は小さい泡（small bubbles）を含んでおり、3cm の厚さと推定されている。
- ⑬ PCV 床面の正確な状況は不明である。



## 7. ペDESTAL開口部付近調査状況



資料提供：国際原子力研究開発機構 (IRID)・日立GEニュークリアエナジー

10

図 14 堆積物等の形状②

### (堆積物等の形状)

- ⑨ ペDESTAL開口部付近に燃料デブリの小山状の堆積物が確認される。(ただし明瞭なものではない。)
- ⑩ テーブル状のものがまくれあがったような形状 (Large bubble-like) の堆積物はペDESTAL開口部の天井より下に存在するが、その厚さは不明である。

## 5. 前半調査に関する新たな情報

### (2) 堆積物の表面にて確認された物体について



- ペDESTAL開口部入り口左側付近に膨らみのある形状の物体を確認
- デブリとの関係やその形成メカニズムは不明であるが上部からの落下物との関係を含め、継続的に検討を進めていく



資料提供：国際原子力研究開発機構(IRID) 6

図 15 堆積物等の形状③

#### (堆積物等の形状)

- ⑦ テラス状構造の上側（表面）は滑らかなように見える。
- ⑪ 膨らみのある（Bubble-like）の形状のものが PCV 床面のデブリ又は堆積物の表面に確認される。
- ⑬ PCV 床面の正確な状況は不明である。

4. 調査実績

機器ドレンサンプポンプ付近およびPCV底部の状況(5月17日調査分①)

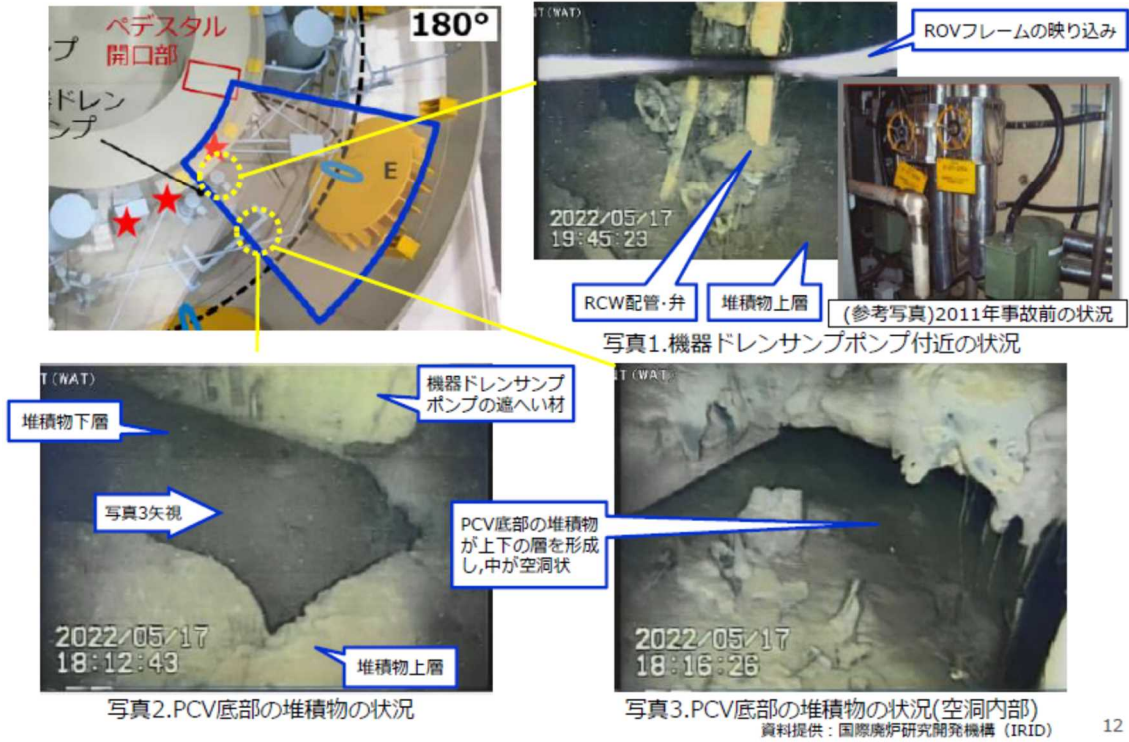


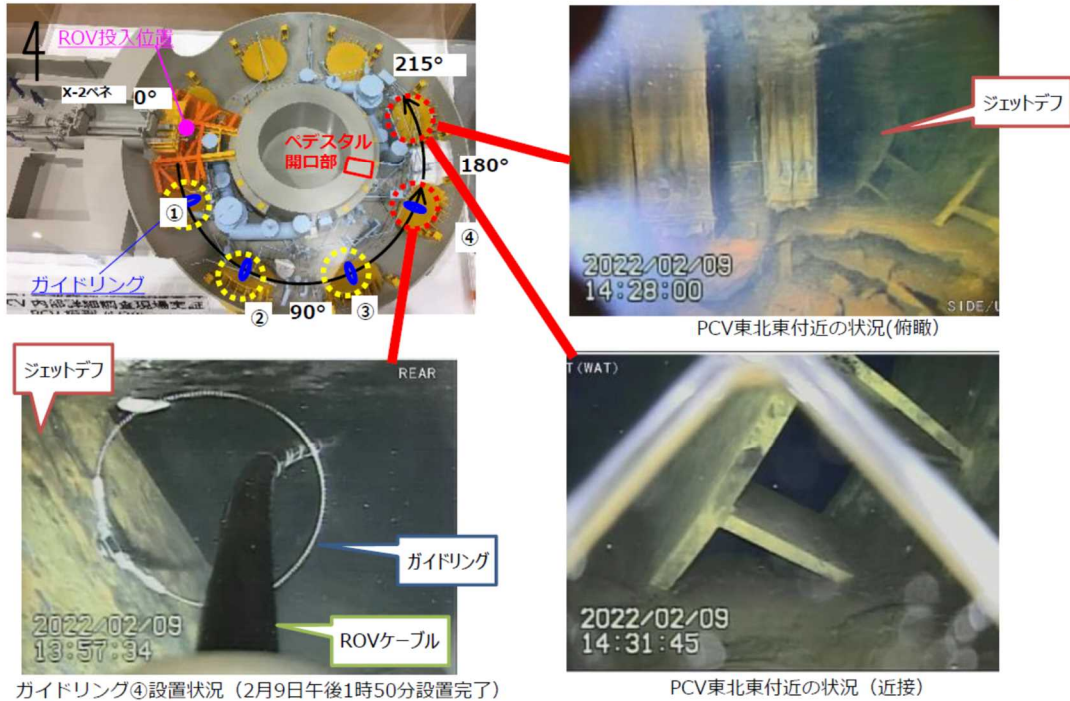
図 16 機器ドレンサンプポンプ付近及び PCV 底部の状況

(配管等の状況及び堆積物等の形状)

- ③ ペデスタル周辺の種々の配管は大きな損傷を受けていない。
- ⑦ テラス状構造の上側（表面）は滑らかなように見える。
- ⑬ PCV 床面の正確な状況は不明である。

6. ガイドリング④設置状況および215°付近調査状況 <2月9日調査分>

※撮影日はいずれも2月9日



ガイドリング④設置状況 (2月9日午後1時50分設置完了)

PCV東北東付近の状況 (近接)

資料提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID)・日立GEニュークリアエナジー

7

図 17 ジェットデフレクターの状況

(PCV 等の状況)

- ⑫ PCV の外壁には損傷は確認されていない。
- ⑬ PCV 床面の正確な状況は不明である。

## 5. 前半調査に関する新たな情報

### (1) 水面より上の構造物への付着物

- 水面より上部の映像を確認したところ、配管やサポートへの付着物を確認
- 一部は熔融金属が固化したような光沢のある付着物を確認



資料提供：国際炉研究開発機構(IRID) 5

図 18 水面より上の構造物への付着物

#### (構造物等の状況)

- ② ペDESTALのコンクリート部はテラス状構造より下側で消失している。
- ④ シート状の鉛遮へい（鉛毛マット）は一定の高さで溶融している。

## (2) 中性子束測定結果 (5月20日、21日調査分)

詳細目視調査用の ROV-A2 は、計測器として改良型小型 B10 検出器を搭載しており、4 箇所で熱中性子の測定を行っている。その結果は図 19 となっている。

東京電力の測定結果では、ペDESTAL開口部付近で熱中性子束が多く確認されているとされているが、使用された検出器（改良型小型 B10 検出器）の測定能力及び熱中性子束への換算等、測定データについては、更なる検討、整理が必要と考えられる。

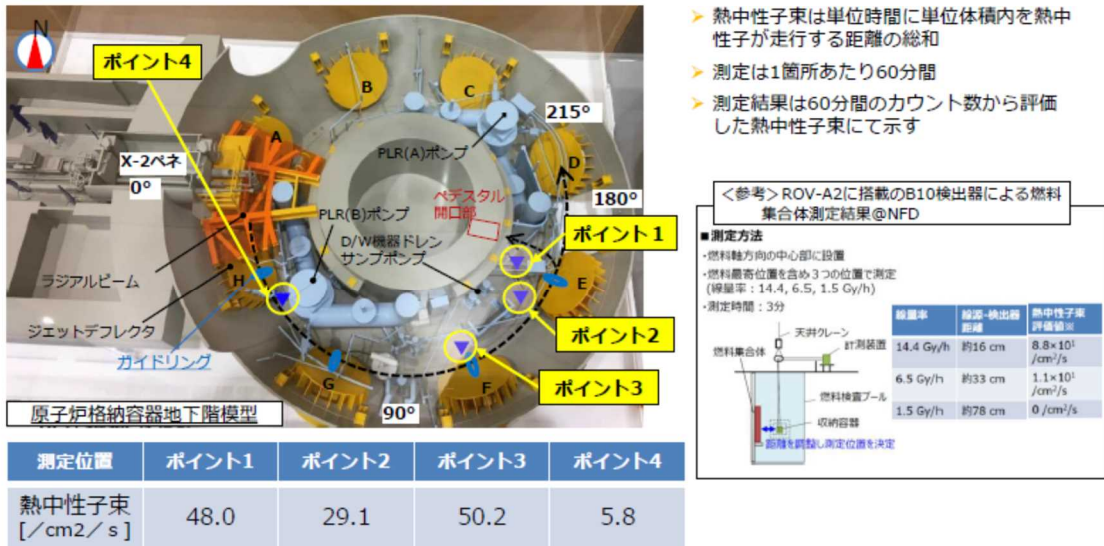
今後、ROV-D（堆積物デブリ検知）において、ガンマ線の核種分析等が予定されていることもあり、ガンマ線や中性子関係のデータを総合的に検討すべきである。

## 4. 調査実績

### 中性子束測定結果 (5月20日,21日調査分)



- 今回測定したポイント全てにおいて熱中性子束を確認
- ペDESTAL開口部付近で熱中性子束が多く確認されていることから、燃料デブリ由来と推定
- 引き続き、後続号機であるROV-C（堆積物厚さ測定）において堆積物の高さや厚さを確認した上で、ROV-D（燃料デブリ検知）において、堆積物への燃料デブリ含有状況を調査する予定



資料提供: 国際廃炉研究開発機構 (IRID) 15

図 19 中性子束測定結果

### (3) ROV-CによるペDESTAL基礎部調査の概要

③堆積物厚さ測定（ROV-C）の調査の結果、PCV 底部からの堆積物厚さについては、ペDESTAL開口部付近が比較的高く（約 1.1～0.8m）、ROV 投入位置である X-2 ペネ付近に近づくにつれて徐々に低くなっている（約 0.4～0.0m）ことが確認された。（図 20 参照）

なお、ROV-C は、水面を一定速で遊泳しながら、堆積物（PCV 底部方向）へ超音波を発信、跳ね返りを受信するものであり、水面から堆積物表面までの距離を測定している。そのため、堆積物内部の空洞の有無等の情報を得られるものではない。

今後、ROV-B（堆積物 3D マッピング）による走査型超音波距離計を用いた堆積物の高さ分布の調査も予定されており、堆積物の分布をより詳細に把握することで、堆積物のもととなる燃料デブリの総量や拡がり方に繋がる情報が得られる可能性がある。

## 5. ROV-Cによる堆積物厚さ測定結果まとめ(全13箇所)



- 超音波測定データ及びROV-C・A2の調査時の映像から、粉状・泥状の堆積物は想定より薄いと評価。また、堆積物（粉状・泥状および板状・塊状の堆積物含む）内部の状態（空洞の存在等）については、今回の調査結果からは評価不可
- PCV底部からの堆積物厚さについては、ペDESTAL開口部付近が比較的高く、ROV投入位置であるX-2ペネ付近に近づくにつれて徐々に低くなっていることを確認
- ペDESTAL開口部前の堆積物が一部低くなっている(下図、青点線囲い部)が、調査映像より堆積物が崩れているためと推定。

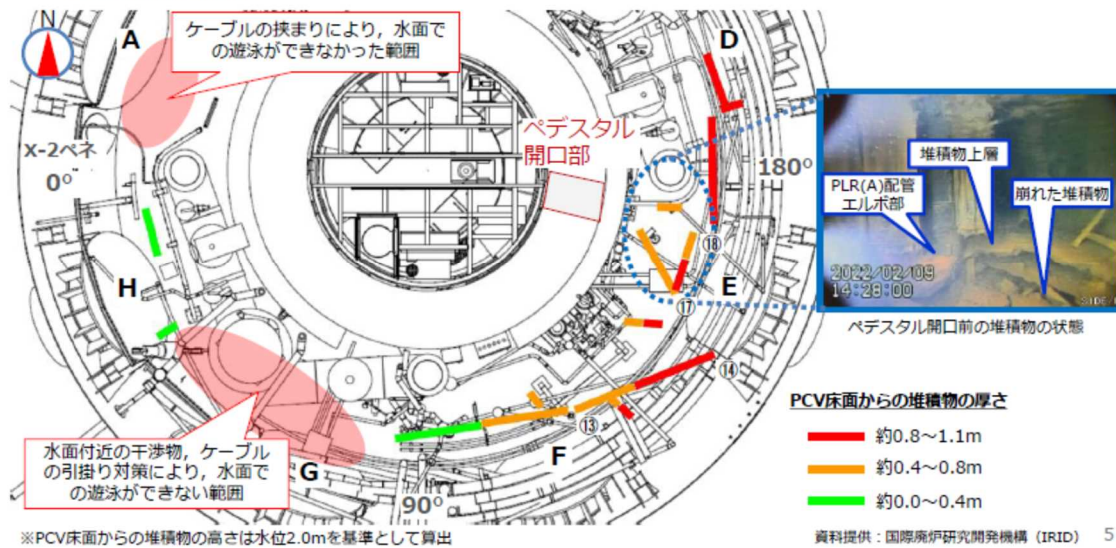


図 20 ROV-Cによる堆積物厚さ測定結果

#### (4) 東京電力における1号機原子炉格納容器内部調査（前半調査）の取りまとめ（2022年12月5日時点）の概要

東京電力は、2022年2月から6月にかけて実施された福島第一原子力発電所1号機の原子炉格納容器内部調査（ROV-A, A2, C）により取得されたすべての映像（準備作業等を除く）の中から、「事故進展の理解に資するもの」との観点で情報を抽出し、同年12月5日の事故分析検討会で前半調査の取りまとめとして報告している。

本中間取りまとめでは、映像の解釈、理解について十分な議論を行っていないが、今後の検討を進めるため、以下の点について情報を整理した。用語の記載については、東京電力の記載によっている。

- ① ペDESTAL開口部の状況に関するもの
- ② 配管及び構造物の状況に関するもの
- ③ 各種堆積物に関するもの
  - ③-1 構造物に付着する堆積物
  - ③-2 局所的な堆積物の盛り上がり
  - ③-3 塊状の堆積物
  - ③-4 糸状堆積物
  - ③-5 半球状堆積物
  - ③-6 棚状（テーブル状）堆積物
  - ③-7 棚状堆積物の破片
  - ③-8 ジェットデフレクター背面の堆積物
- ④ 堆積物高さの分布
- ⑤ 鉛毛マットの破損高さ



① ペDESTAL開口部の状況に関するもの



図 21-1 ペDESTAL開口部 (D/W 床レベル) ①

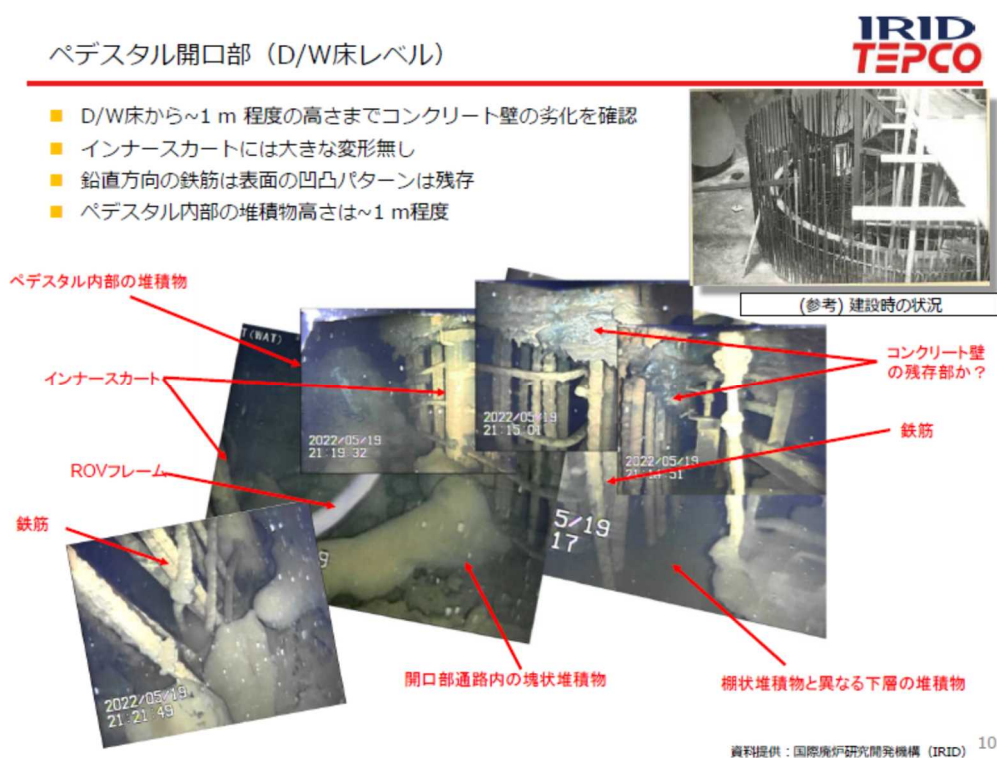


図 21-2 ペDESTAL開口部 (D/W 床レベル) ②

## ② 配管及び構造物の状況に関するもの

### 保温材の劣化について

IRID  
TEPCO

- 水中、気中の複数個所にて、RCW配管を取り囲む保温材の劣化を確認
- ウレタン保温材が消失していることも確認された
- 連結部付近において、光沢のある付着物を確認



図 21-3 保温材の劣化

### 水面より上の配管の状況について

IRID  
TEPCO

- 光沢のある金属的な堆積物はベスタル開口部およびCRD交換用の上部開口部の周辺でも確認されている（主にRCWの格納容器内ヘッダ配管）
- 配管の保温材カバーの剥がれや変形も確認されている

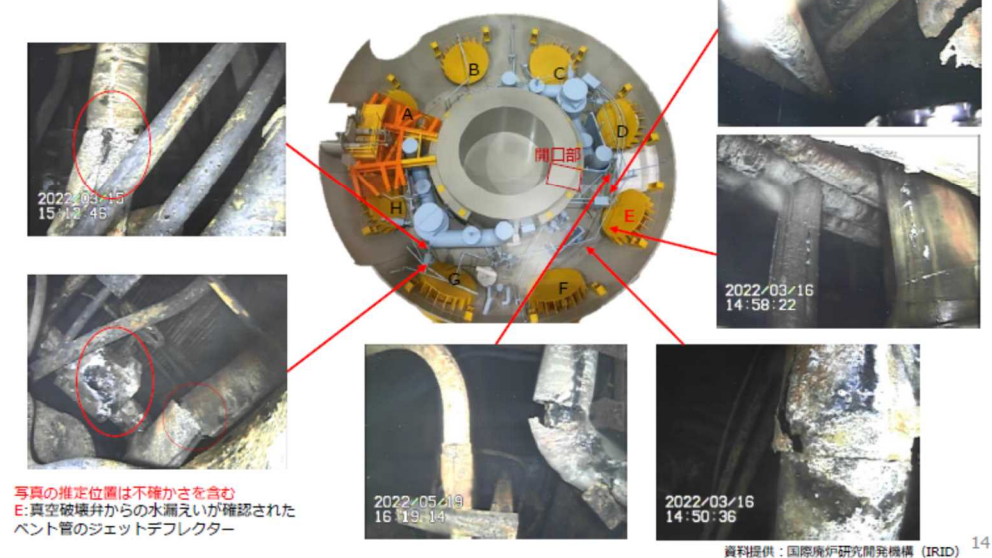


図 21-4 配管の状況

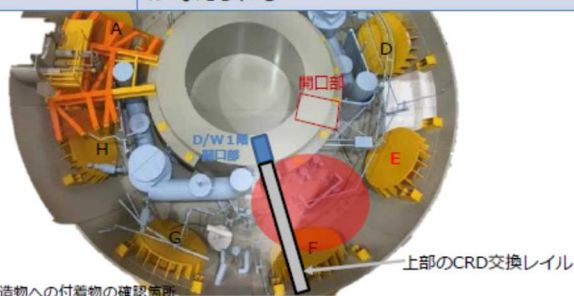
### ③ 各種堆積物に関するもの

#### ③-1 構造物に付着する堆積物

構造物に付着する形で存在する堆積物



外見	多種多様
大きさ	多種多様
確認場所	水中、気中のペDESTAL外機器ドレンサンプ、CRD交換レイル、等の構造物の上面及び側面
起源/ 組成	保温材や遮へい材の高温による劣化 CRD交換レイルの下で確認された堆積物は ①ペDESTAL内部から落下した可能性 ②開口部周辺が局部的に高温化することで生成された可能性 が考えられる



■: 構造物への付着物の確認箇所  
E: 真空破壊弁からの水漏えいが確認されたベント管のジェットデフレクター

資料提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID) 15

図 21-5 構造物に付着する堆積物①

構造物に付着する形で存在する堆積物



- D/W床面より高い位置（水中及び気中）に構造物に付着する形で堆積物が存在  
→ペDESTAL内から開口部を通じてペDESTAL外へ流出したのではなく、上部から落下したものと推定
- CRD交換レイル及びその開口部、ペDESTAL開口部（D/W床面）の周辺は比較的堆積物の量が多い
- D/W床面レベルの堆積物の上に上部から落下してきた堆積物もあると推定 (P25 図③参照)



気中の配管に付着した堆積物



水中の構造物に付着した堆積物  
(機器ドレンサンプの遮蔽体)



カメラ  
ガード  
映り込み

資料提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID) 16

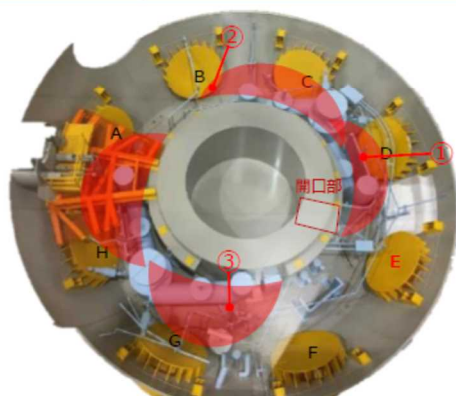
図 21-6 構造物に付着する堆積物②

### ③-2 局所的な堆積物の盛り上がり

#### 局所的な堆積物の盛り上がり

IRID  
TEPCO

外見	表面が滑らかな塊。
大きさ	大きいものは厚さ数十cm、幅数mに達する
確認場所	PLR配管周辺に存在
起源/ 組成	遮蔽用鉛毛マットの熔融落下の可能性



■:局所的な堆積物の盛り上がり確認箇所  
E: 真空破壊弁からの水漏えいが確認されたベント管のジェットデフレクター

資料提供: 国際炉研開発機構 (IRID) 18

図 21-7 局所的な堆積物の盛り上がり①

#### 局所的な堆積物の盛り上がり

IRID  
TEPCO

- 多くはPLR配管の周辺に存在 (鉛遮蔽体との関係性?)
- ベDESTAL開口部から離れるにつれて堆積高さが下がる  
全体的な傾向とは異なり、局所的な盛り上がりとして存在
- 鉛毛マットの接続部の部品が周辺に確認されることもある
- 2011/3/20の格納容器内の測定温度は~400°C\*であり、鉛の融点以上の温度となっていた可能性が高い

\*温度計測用の熱電対の温度計測の上限値相当

- 鉛の融点: 327.5°C
- 堆積物の最高点は鉛遮へいの支持構造物近傍



遮蔽マットの接続具



ROV-A2との接触後の状況



資料提供: 国際炉研開発機構 (IRID) 19



図 21-8 局所的な堆積物の盛り上がり②

### ③-3 塊状の堆積物

#### 塊状の堆積物



外見	表面は滑らか。多種多様。
大きさ	数十cm
確認場所	開口部周辺
起源/ 組成	燃料デブリの可能性？ 表面性状が類似の熔融鉛生成物？



■:塊状の堆積物  
E: 真空破壊弁からの水漏えいが確認されたベント管のジェットデフレクター

資料提供：国際炉研究開発機構 (IRID) 20

図 21-9 塊状の堆積物①

#### 塊状の堆積物



- ベDESTAL開口部のところどころに塊状の堆積物として存在
- 遮へい用の鉛の存在が予想される位置とも重なる
- ベDESTAL内部から移行してきている可能性のある塊状の堆積物（画像が鮮明ではない）もあるものの、この堆積物がベDESTALの内部から出てきたものかどうかの区別は困難
- 外見（大きさ、表面の滑らかさ、等）はPLR配管の周辺で確認されたものと類似
- ベDESTAL内部調査により更なる情報が得られることが期待される



資料提供：国際炉研究開発機構 (IRID) 21

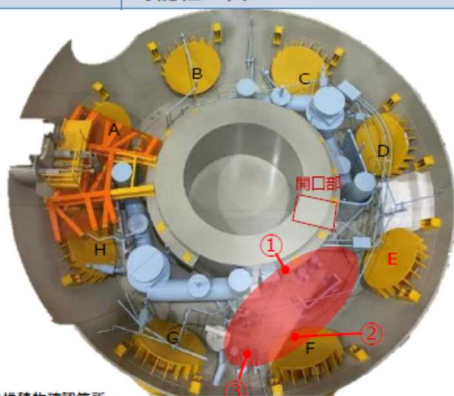
図 21-10 塊状の堆積物②

### ③-4 糸状堆積物

#### 糸状堆積物



外見	細い糸状の堆積物。他の堆積物の上に、もしくは、混在して存在
大きさ	数cm～数mの長さ
確認場所	ペDESTAL外壁からジェットデフレクターF・Eの間
起源/ 組成	鉛毛マット(鉛およびそのカバー)に由来する可能性が高い



■:糸状堆積物確認箇所  
E:真空破壊弁からの水漏れが確認されたベント管のジェットデフレクター

資料提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID) 22

図 21-11 糸状堆積物①

#### 糸状堆積物



- 構造物への付着が見られた箇所の下部に相当する場所で確認されることが多い
- 鉛毛マットのカバーに使用されているグラスファイバー等の糸状の素材の可能性
- 鉛等の溶融物が落下する際に途中で冷却されて糸状の物体に固化した可能性



損傷した鉛毛マットカバーの  
グラスファイバー



気中の糸状物質



気中の溶融固化物(糸状のもの)



不明なメッシュ状物質(水中)



気中の糸状物質



水中の溶融固化物(糸状のもの)

資料提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID) 23

図 21-12 糸状堆積物②

### ③-5 半球状堆積物

#### 半球状堆積物



外見	中空の半球状の物体(薄い殻)
大きさ	数cm
確認場所	ペDESTAL開口部の前周辺
起源/ 組成	不明 上部からの落下物により形成?



■:半球状堆積物確認箇所  
E:真空破壊弁からの水漏えいが確認されたベント管のジェットデフレクター

資料提供:国際廃炉研究開発機構 (IRID) 24

図 21-13 半球状堆積物①

#### 半球状堆積物



- 多くはペDESTAL開口部前周辺で確認
- 薄い殻状の物体は他の箇所でも確認されている(他の堆積物でおおわれていることが多い)ものの、半球状もしくは球状の形状とはなっていない



資料提供:国際廃炉研究開発機構 (IRID) 25

図 21-14 半球状堆積物②

### ③-6 棚状（テーブル状）堆積物

#### 棚状（テーブル状）堆積物



外見	既存の壁に固着した板状の物質
大きさ	厚さは数cmから数十cm。長さは数m。
確認場所	ペDESTAL開口部、ペDESTAL外壁、PCVシェル、高さ1m以上の構造物
起源/組成	不明。ペDESTAL内部から流出した物質により形成された可能性が高い



■: 棚状堆積物確認箇所  
E: 真空破壊弁からの水漏えいが確認されたベント管のジェットデフレクター

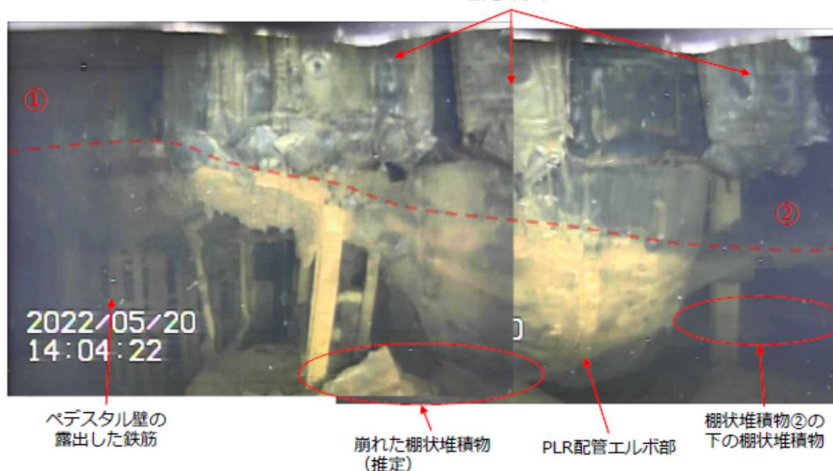
資料提供：国際炉研究開発機構 (IRID) 26

図 21-15 棚状（テーブル状）堆積物①

#### 棚状堆積物



- ①: ペDESTAL開口部に端を発する棚状堆積物は開口部から離れるにつれて堆積高さが減少する
- 棚状堆積物は開口部から離れるにつれて厚みが増す
- ペDESTAL開口部周辺の①の棚状堆積物は1層のみ。(②の下部にはもう1層の棚状堆積物あり)
- PLR配管は上下で2色に分かれており、下部はペDESTAL開口部から続く棚状堆積物の色合いと同じであることから、①と②の棚状堆積物はもともと一体であったものが崩れて分かれたものと推定。



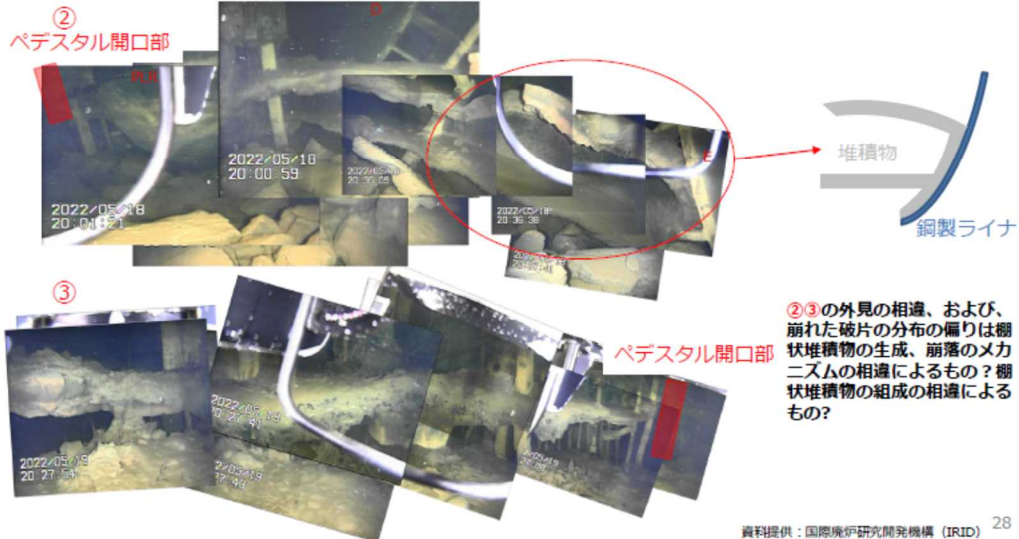
資料提供：国際炉研究開発機構 (IRID) 27

図 21-16 棚状（テーブル状）堆積物②



棚状堆積物

- ②: 2層の棚状堆積物はPCVシェル部では上下が連続的に結合している  
2層に挟まれた構造物には損傷は確認できない  
下層の棚状堆積物は平坦で、内面は滑らか
- ③: 棚状堆積物は上部からの落下物で覆われている。1層のみ確認できる
- 崩れた破片は②周辺でのみ確認できる

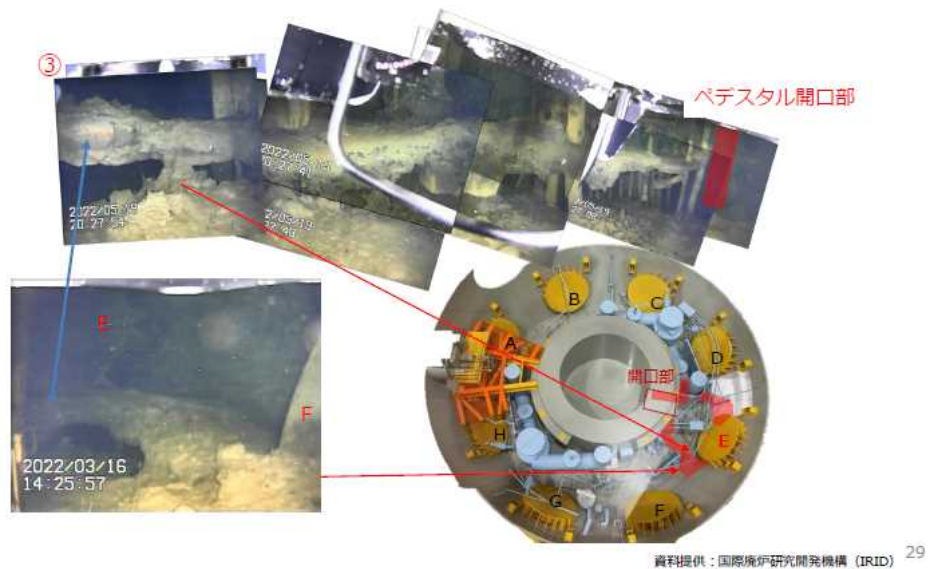


資料提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID) 28

図 21-17 棚状（テーブル状）堆積物③

棚状堆積物

- ジェットデフEとFの間に見える棚状堆積物の下の空洞と、ペDESTAL壁からジェットデフEにつながる棚状堆積物の下の空洞は内部でつながっているように見える

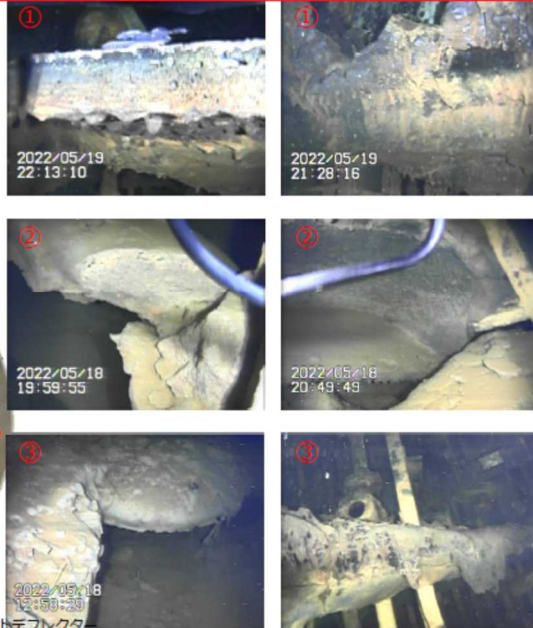


資料提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID) 29

図 21-18 棚状（テーブル状）堆積物④

棚状堆積物

- ①と②の破断面は②の方が厚いものの気孔率はほぼ同等
- ③の破断面は上部からの落下物に覆われており明確には確認できない。
- ①の底面にはつらら/鍾乳石形状あり
- ②、③の底面は比較的滑らか



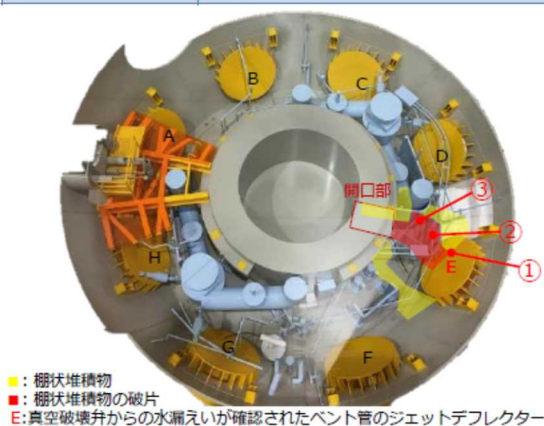
資料提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID) 30

図 21-19 棚状（テーブル状）堆積物⑤

### ③-7 棚状堆積物の破片

#### 棚状堆積物の破片

外見	多種多様。一部の破片では、破片同士の破断面形状が同一であり、元の形状を再現できる
大きさ	数十cm
確認場所	棚状堆積物の周辺(特に開口部の右側に多い)
起源/ 組成	棚状堆積物が崩れたものと推定 組成は不明



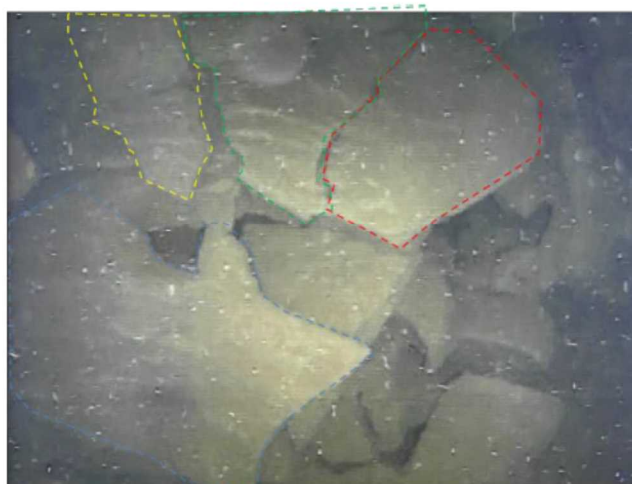
■ : 棚状堆積物  
 ■ : 棚状堆積物の破片  
 E: 真空破壊弁からの水漏えいが確認されたベント管のジェットデフレクター

資料提供：国際炉研開発機構 (IRID) 31

図 21-20 棚状堆積物の破片①

#### 棚状堆積物の破片

- 下図に見える複数の破片は、破断面形状が隣接する破片同士で同一であることから元は一体の棚状堆積物であった可能性が高い



資料提供：国際炉研開発機構 (IRID) 32

図 21-21 棚状堆積物の破片②

棚状堆積物の破片

- 棚状堆積物の破片はベデスタル開口部の右側領域（ジェットデフE～PLR配管～ベデスタル開口部）に偏在
- ベデスタル開口部の左側領域は多量の上部からの落下物に覆われており状態は不明。
- 崩壊した棚状堆積物は上部からの落下物の下にある可能性（一体として棚状堆積物が崩壊している可能性もあり）

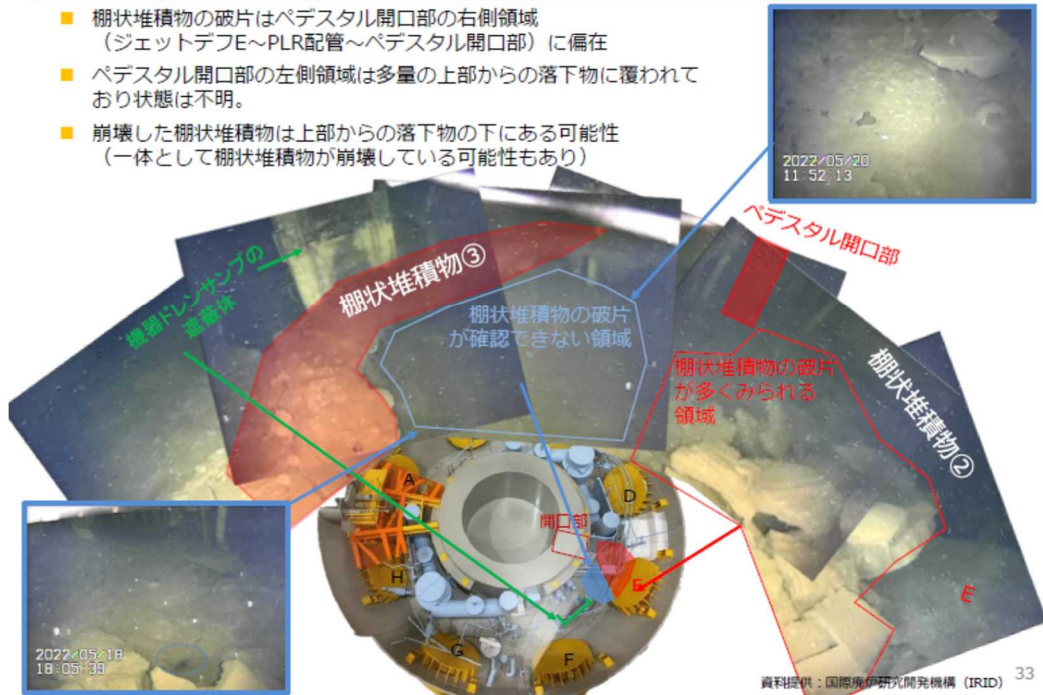


図 21-22 棚状堆積物の破片④

棚状堆積物の破片

- 確認可能な棚状堆積物の破片の破断面における気孔の状況（大きさ、割合）は、場所によらずおおむね同等




図 21-23 棚状堆積物の破片⑤

### ③-8 ジェットデフレクター背面の堆積物

**IRID  
TEPCO**

ジェットデフ背面の堆積物

外見	平坦な堆積のもの、塊状の堆積物もあるもの。	
大きさ	数十cm	
確認場所	ジェットデフD, E, FにはROVが侵入して確認	
起源/ 組成	棚状堆積物と同様、ペダスタル内から流出した物質により生成された可能性、および、上部からの落下物が生成に寄与した可能性	



2022/05/14  
18:17:00



開口部



2022/05/18  
14:57:20



2022/03/15  
21:32:00



2022/03/16  
15:52:52

■：平坦な堆積物のみ確認された箇所 ■：塊状の堆積物も確認された箇所（ROV侵入あり）  
E：真空破壊弁からの水漏れが確認されたベント管のジェットデフレクター

資料提供：国際廃炉研究開発機構（IRID） 35


図 21-24 ジェットデフレクター背面の堆積物①

**IRID  
TEPCO**

ジェットデフ背面の堆積物


- 塊状の堆積物はジェットデフの開口部からベント管（その先はS/C）に向けて流れ込むような形でジェットデフ背面に堆積

左




2022/05/18  
18:00:27

右




2022/03/15  
15:24:15

背面




2022/03/16  
15:52:52

F




2022/05/18  
20:36:35

E




2022/05/18  
13:26:04

E




2022/05/18  
14:17:23

D




2022/05/19  
15:53:33

D



2022/05/19  
13:07:51

D



2022/05/19  
13:56:35

資料提供：国際廃炉研究開発機構（IRID） 36

図 21-25 ジェットデフレクター背面の堆積物②

#### ④ 堆積物高さの分布

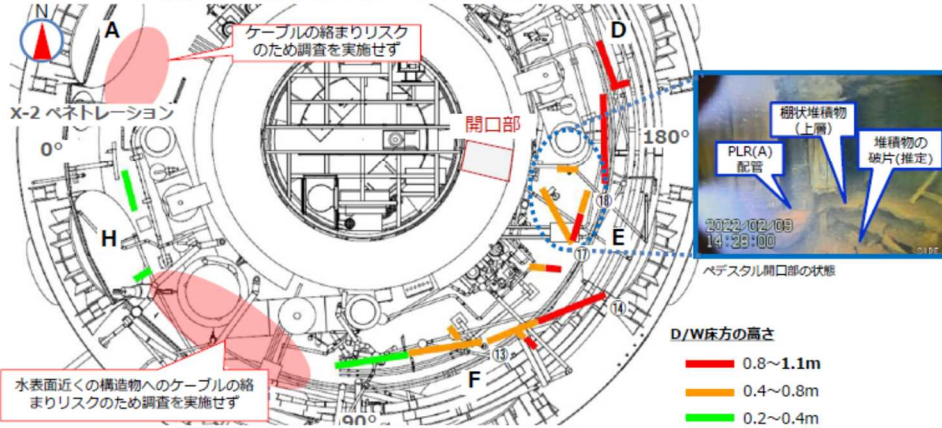
##### 堆積物高さの分布



- 一般的な傾向として、D/W床の開口部からの距離が離れるにしたがって堆積物高さが低くなる
- 堆積高さの最大値は～1.1 m (ベDESTAL内は情報なし)

原子炉内の燃料、炉内構造物が全て溶けたと想定しても、その堆積高さはベDESTAL内で～1.1 m\*程度

\*ベDESTAL内の構造物無し、サンピットへの侵入無し、MCCIの進展なしの概略評価値



水表面近くの構造物へのケーブルの絡まりリスクのため調査を実施せず

測定方法: ROVを浮上させた状態で超音波探査法にて水深を調査

評価手法: 堆積物高さは、D/W床からの水位が2mであるとして、超音波探査による水深評価結果から堆積物高さを評価  
(出典) [https://www.tepco.co.jp/iridcommission/information/committeeroadmap\\_progress/pdf/2022/d220726\\_08-j.pdf#page=4](https://www.tepco.co.jp/iridcommission/information/committeeroadmap_progress/pdf/2022/d220726_08-j.pdf#page=4)

資料提供: 国際炉研開発機構 (IRID)

8

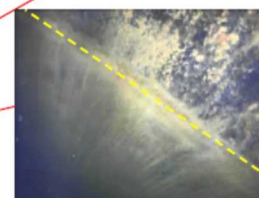
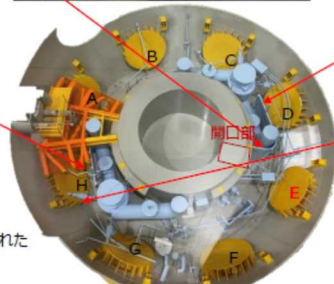
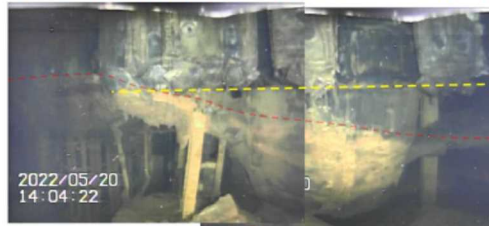
図 21-26 ROV-C による堆積物厚さ測定結果①

#### ⑤ 鉛毛マットの破損高さ

##### 鉛毛マットの破損高さについて



- 堆積物の高さにかかわらず、鉛毛マットは同じ高さで破断している
- 破断の高さ(約1.2m)はD/Wの全領域で見られるPCVシェル、ジェットデフレクタ、構造物の変色の高さと同様。
- 変色は水位や水質と関係がある可能性  
(2011年当時は格納容器圧力が現在よりも高かったため、水位は現在よりも低かったと推定)



E: 真空破壊弁からの水漏れが確認されたベント管のジェットデフレクター

ジェットデフHで確認された変色

資料提供: 国際炉研開発機構 (IRID)

37

図 21-27 鉛毛マットの破損高さ

#### 4. 1号機原子炉格納容器ペデスタルの損傷及び堆積物形成に関する検討

調査チームは、東京電力における3. の調査結果等をもとに、ペデスタル基礎部のコンクリート部が抜け落ち、内部の鉄筋が露出するような損傷がどのような要因によって生じたのか、また、ペデスタル外周に確認されるテラス状構造や塊状堆積物がどのように形成されたのかと言った観点から検討を進めている。

##### (1) 1号機、2号機、3号機における原子炉格納容器内部調査の比較

東京電力及びIRIDにおいては、今回（2022年2月～6月）の1号機原子炉格納容器の内部調査以外にも、2017年7月及び12月には3号機原子炉格納容器について、2018年1月には2号機原子炉格納容器について、調査を実施している。

調査チームでは、各号機におけるペデスタル周辺の状況を比較検討するため、図22～図30を整理した。

その結果、2号機及び3号機の原子炉格納容器内部調査は、制御棒駆動機構（CRD）交換用レールのペデスタル開口部を経由したペデスタル内部の調査であり、1号機原子炉格納容器内部調査で確認されたペデスタル外周部とは調査範囲が異なっているが、1号機で確認されたペデスタル基礎部のコンクリート損傷、テラス状構造、バブル状の堆積物等は、2号機及び3号機では確認されておらず、1号機の原子炉格納容器内での炉心損傷後の事象進展は、2号機及び3号機と異なっている可能性が示唆される。

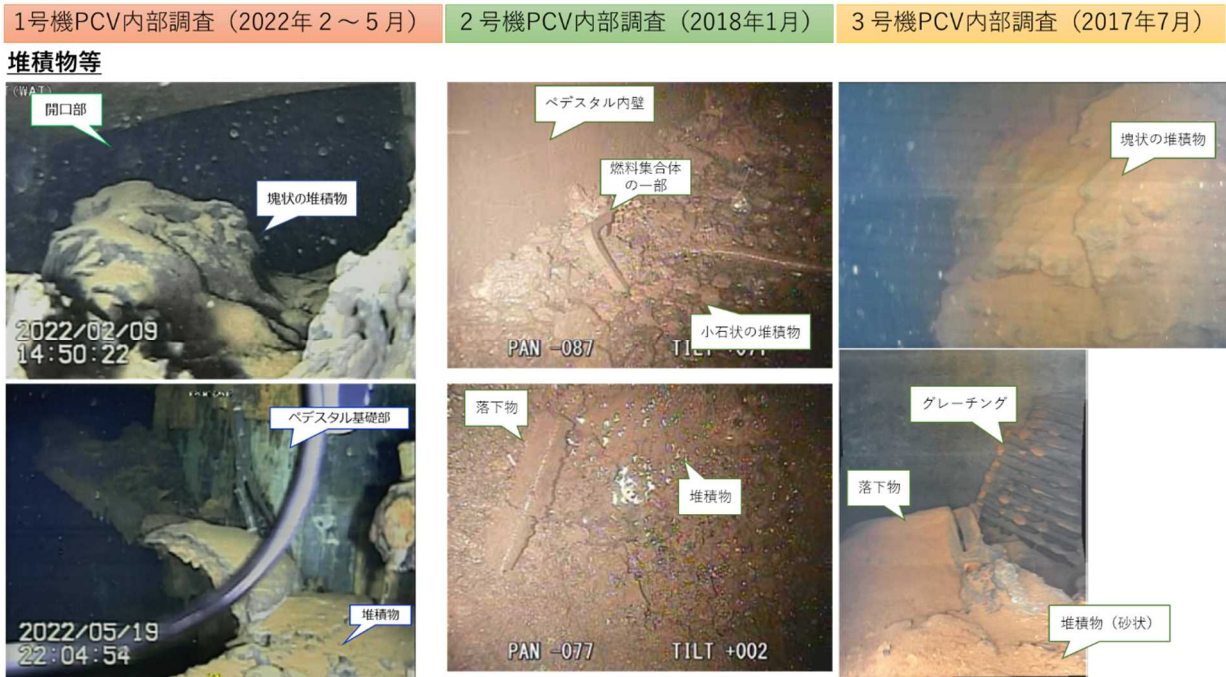


図 22 1号機、2号機、3号機のPCV内部調査の比較①



図 23 1号機、2号機、3号機のPCV内部調査の比較②



1号機PCV内部調査（2022年2～5月）

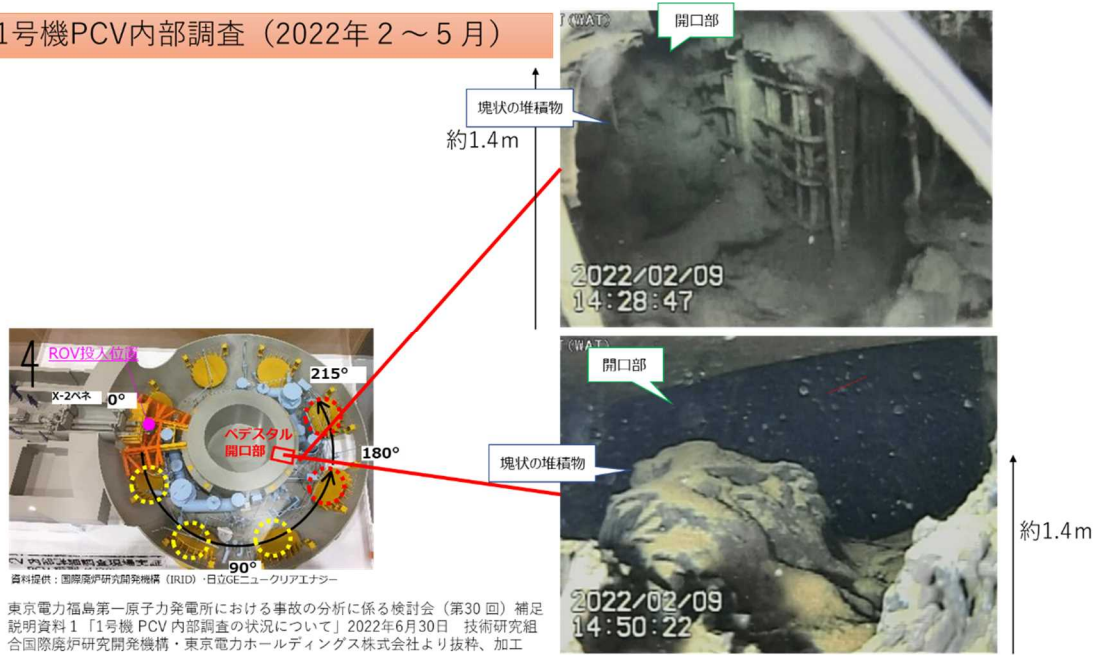


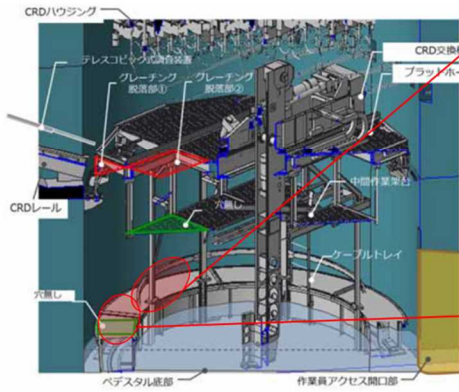
図24 1号機PCV内部調査①

1号機PCV内部調査（2022年2～5月）



図25 1号機PCV内部調査②

2号機PCV内部調査（2018年1月）



福島第一原子力発電所2号機原子炉格納容器内部調査実施結果（速報）  
2018年1月19日 東京電力ホールディングス株式会社より抜粋加工



ペDESTAL内壁面

燃料集合体の一部（上部タイププレート）

小石状の堆積物

2号機  
ペDESTAL底部



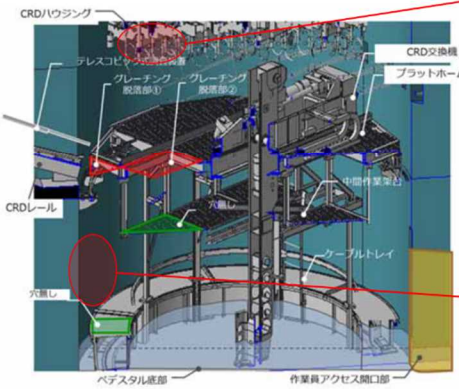
落下物

堆積物

2号機  
ペDESTAL底部

図 26 2号機 PCV 内部調査①

2号機PCV内部調査（2018年1月）



福島第一原子力発電所2号機原子炉格納容器内部調査実施結果（速報）  
2018年1月19日 東京電力ホールディングス株式会社より抜粋加工



CRDハウジング  
支持金具ハン  
ガーロッド

CRDハウジング  
支持金具サポ  
ートバー

PIPケーブル  
大きな損傷は  
確認されず

2号機  
CRDハウジング  
サポート



ペDESTAL内壁  
大きな損傷は  
確認されず

2号機  
ペDESTAL内壁面

図 27 2号機 PCV 内部調査②

3号機PCV内部調査（2017年7月）

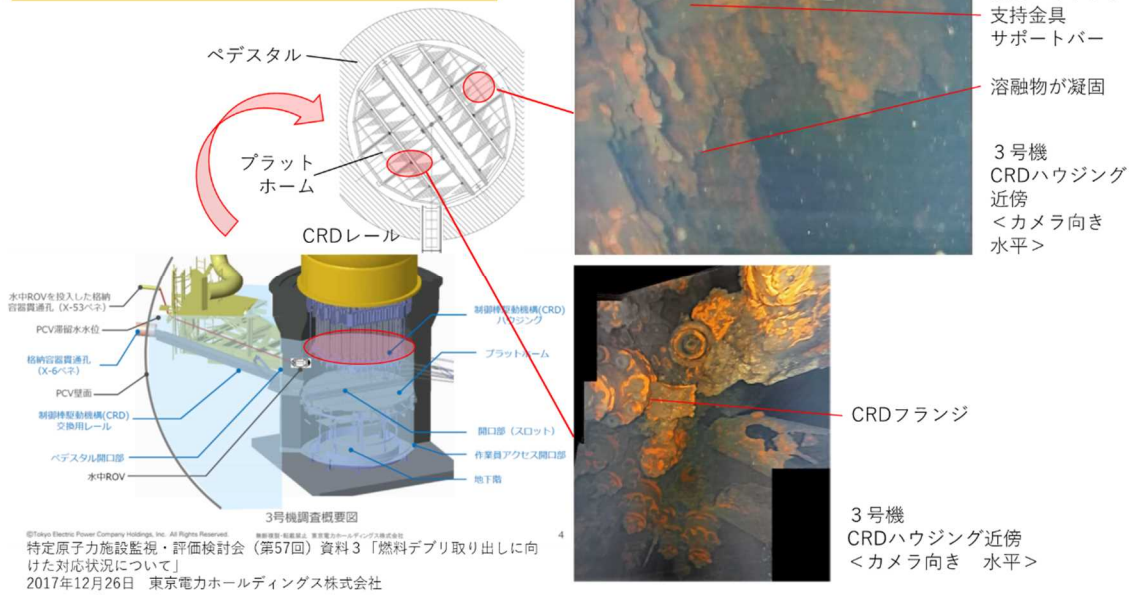


図 28 3号機 PCV 内部調査①

3号機PCV内部調査（2017年7月）

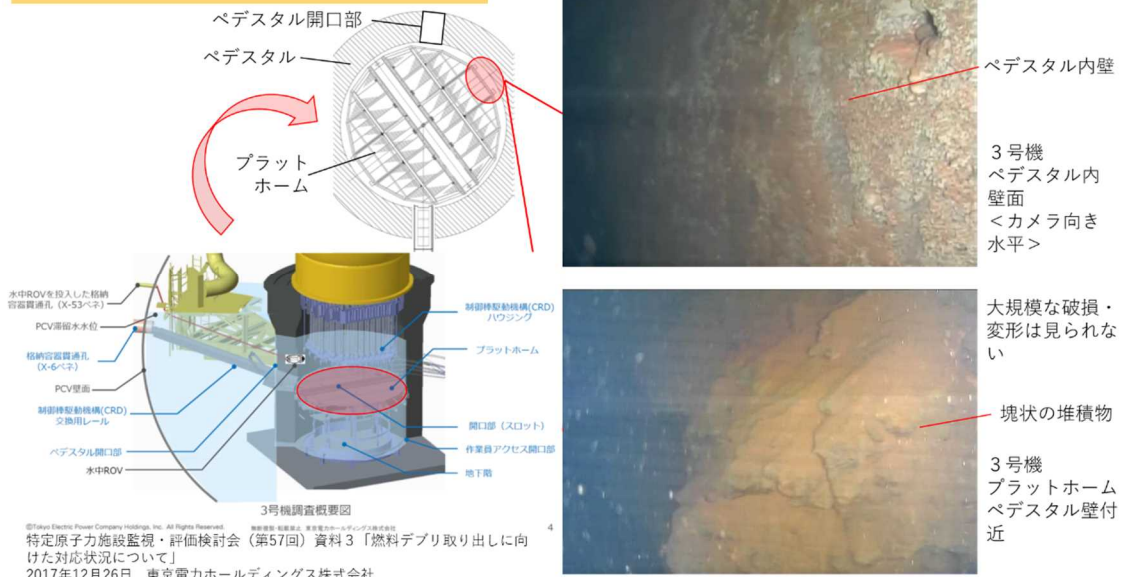


図 29 3号機 PCV 内部調査②

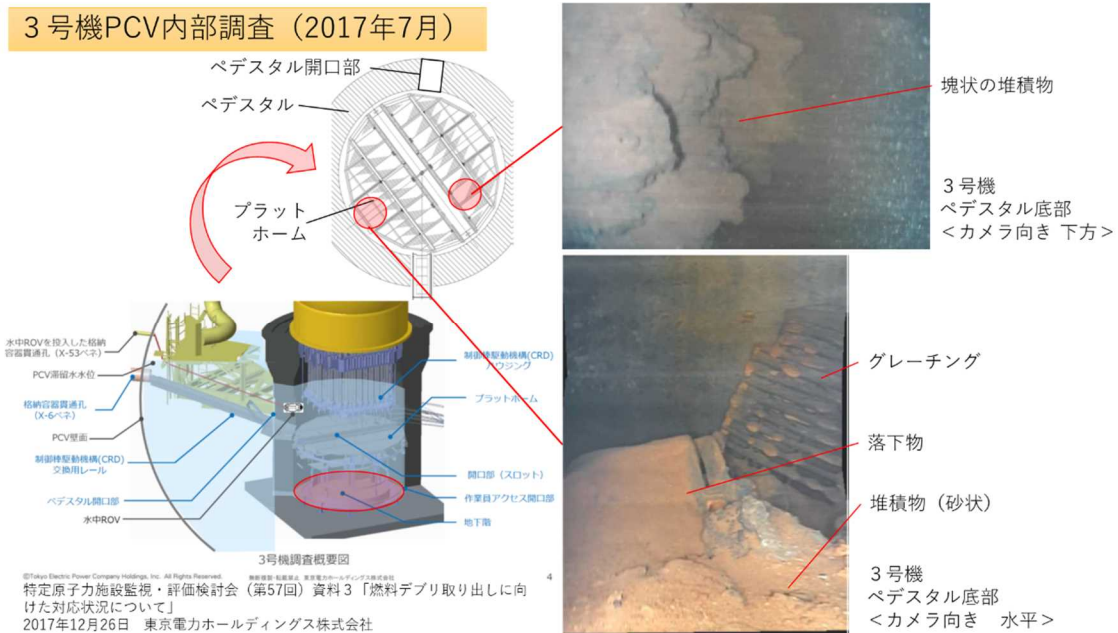


図30 3号機PCV内部調査③

## (2) 仮説の検討

調査チームは、3. 調査結果及び4. (1) 1号機、2号機、3号機における原子炉格納容器内部調査の比較から、1号機原子炉格納容器内部の特徴を以下のよう整理した。

- ① ペデスタル開口部の両側ではコンクリート部が消失している。鉄筋は損傷を受けていないように見える。
- ② ペデスタルのコンクリート部はテーブル状堆積物より下側で消失している。
- ③ ペデスタル周辺の種々の配管は大きな損傷を受けていない。
- ④ シート状の鉛遮へい(鉛毛マット)は一定の高さで溶融している。
- ⑤ テラス状構造はペデスタル開口部から反対側に向けて分布している。
- ⑥ テラス状構造ペデスタル開口部付近が高く(～1.1m)、反対側が低く(～0.4m)になっている。
- ⑦ テラス状構造の上側(表面)は滑らかなように見える。
- ⑧ テラス状構造は小さい泡(small bubbles)を含んでおり、3cmの厚さと推定されている。
- ⑨ ペデスタル開口部付近に燃料デブリの小山状の堆積物が確認される。(ただし明瞭なものではない。)
- ⑩ テーブル状のものがまくれあがったような形状(Large bubble-like)の堆積物はペデスタル開口部の天井より下に存在するが、その厚さは不明である。

- ⑪ 膨らみのある（Bubble-like）の形状のものが PCV 床面のデブリ又は堆積物の表面に確認される。
- ⑫ PCV の外壁には損傷は確認されていない。
- ⑬ PCV 床面の正確な状況は不明である。

上記の特徴から、主に下記の確認点が挙げられる。（図 31 参照）

- 1) なぜ RPV から落下した燃料デブリが拡がっていないのか。
  - 熔融炉心が金属に富んだデブリとなった場合、RPV から落下した熔融炉心は 1200°C より低くなる。
  - RPV から落下したデブリの温度が更に低かった場合、より粘性が高くなることを意味する。
  - その場合、熔融炉心は比較的ゆっくりとペDESTAL床面に落下する。
  
- 2) どのようにしてペDESTAL壁面に沿ってコンクリート部が損傷したのか。
  - 様々な意見が提言されているが、現在、継続して議論しており、調査チームとして結論に達してはいない。  
 例えば、高温によるコンクリート部の熔融、熱衝撃による損傷、コンクリート成分（特に  $\text{SiO}_2$ ）の水への溶出、コンクリート成分（水酸化カルシウム（ $\text{Ca(OH)}_2$ ）・ケイ酸カルシウム水和物（C-S-H））の相変化等が挙げられている。
  - コンクリートの劣化に関する情報を得るためには、東京電力からのコンクリートコア試料の提供及び試験の実施が必要と考えられる。（図 32 参照）
  
- 3) 1号機 PCV 内ではいくつかの形状の堆積物（Crust）が確認されているが、これらの堆積物はどのように形成されたのか。
  - いくつかの仮説が提案されているが、今後、各論を検討する必要がある。  
 例えば、大阪大学<sup>3</sup>からは、MCCI（従来の理解）による形成及びコンクリート成分の水への溶出による形成の提案があり、調査チームにおいても燃料デブリ内のガス成分の膨脹収縮による形成の提案を行っている。
  - これらの仮説は確認されている事象を十分に説明できるものではない。  
 今後、国内外を問わず広く議論されることを期待している。

---

<sup>3</sup> 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 第 32 回会合 資料 1-2 東京電力福島第一原子力発電所 1 号機 PCV 内部調査により確認されたコンクリートに関する事象の検討 大阪大学大学院工学研究科東京電力福島第一原子力発電所事故調査チーム「1F-2050」

## ○1号機PCV内部調査に関する確認点

- ①ペDESTAL外側のPCV底部にテーブル状の堆積物(高さ0.8m~1mの水平面)を確認。燃料デブリは、この高さまで到達しうるのか。
- ②この水平面は、MCCIクラストと言えるのか。  
MCCIクラストの場合、上面のみに形成され得るのか。
- ③ペDESTAL開口部で確認されたコンクリート部の破損は、侵食溶融によるものなのか。(コンクリートが溶けたものなのか。)
- ④コンクリートの破損が生じる可能性のある温度はどれくらいか。

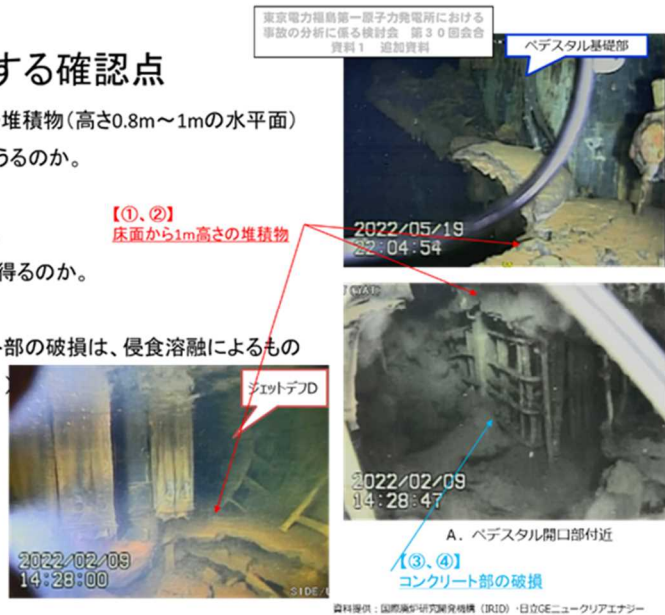


図 31 1号機 PCV 内部調査に関する確認点 (例)

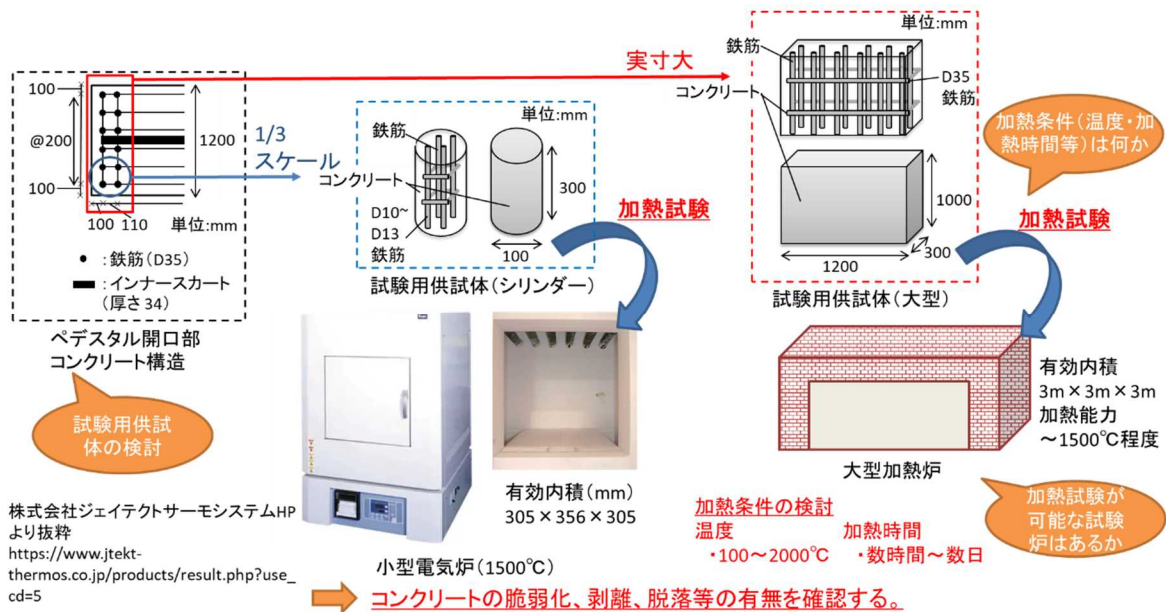


図 32 コンクリート劣化に係る加熱試験

本中間取りまとめでは、上述の1)～3)に示す状態が発生した原因・プロセスを検討するため、事故分析検討会で提案された以下の3つのシナリオ案を整理している。

- ①コンクリートの高温での溶融モデル
- ②コンクリートの水への溶解モデル
- ③ガスによる溶融炉心の膨張モデル

これらは、議論を促進する観点から、ひとまず提起されたものであり、さらなる検討或いは代替案の案出が必要な段階のものでしかない。逆に言えば、現時点では、どのシナリオ案にも十分に説明できない技術的問題点が残されている。

### ①コンクリートの高温での溶融モデル

- i) 炉心溶融物がペDESTAL内に落下し、ペDESTAL開口部を経て拡がる。
- ii) 炉心溶融物がコンクリートを昇温し、コンクリートが溶融する。
- iii) クラストが形成され、内側の溶融物の消失とともにコンクリート損傷と空洞化が発生する。

上記の過程により、落下した炉心溶融物がペDESTAL開口部付近のコンクリートを昇温させた結果コンクリートの破損とテーブル状堆積物の形成に至ったと考える。このシナリオではコンクリートの温度が鉄筋の溶融温度に至らなかったために、コンクリートのみが破損したことになる。

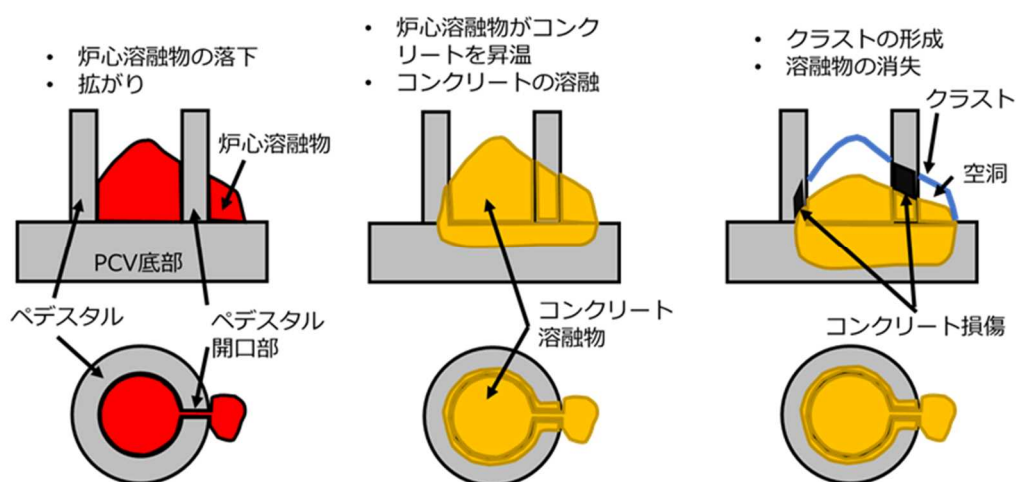


図 33 コンクリートの高温での溶融モデル<sup>4</sup>

<sup>4</sup> 別添5より引用

## ②コンクリートの水への溶解モデル

- i) ペDESTAL内には水または水蒸気が存在する環境下で落下した炉心溶融物により、局所的に水温・圧力が上昇する。
- ii) コンクリート成分の高圧水への溶解によりコンクリートが損傷する。コンクリート成分と多量の水から成る高粘度な液相が形成される。水温上昇、また局所圧力の開放により、水の蒸発が進み、溶解したコンクリート成分が発泡しながら凝固する。
- iii) さらに水が蒸発し、凝固物の下部に空洞が生成される。

上記の過程により、落下した炉心溶融物が高温の水もしくは水蒸気を発生させ、それがコンクリート成分と反応することでコンクリートが破損し、テーブル状堆積物の元となった高粘度の液相の生成に至ったと考える。

高温・高圧の水は、岩石、特に岩石中の $\text{SiO}_2$ を溶かすことが知られている。コンクリートは骨材とセメントから構成されており、骨材に $\text{SiO}_2$ が豊富に含まれている場合は、コンクリート中の骨材が高温・高圧の水に溶解する可能性がある。

また、高温・高圧の水と $\text{SiO}_2$ が反応して生じる水を多量に含んだガラスは、水が蒸発する際に膨張して多孔質になることが知られている。同様の現象が炉内でも生じ、その結果としてテーブル状堆積物が形成された可能性がある。

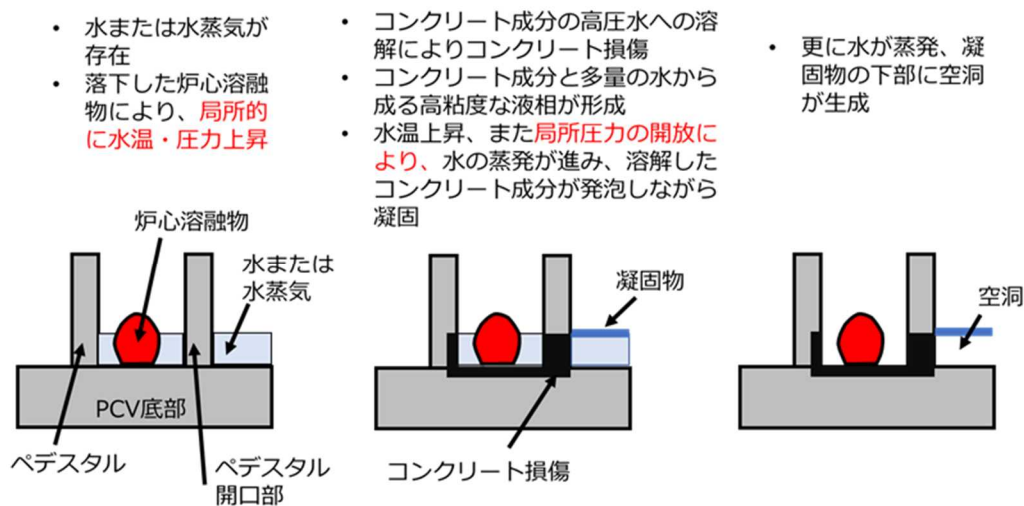


図 34 コンクリートの水への溶解モデル<sup>5</sup>

<sup>5</sup> 別添5より引用



### ③ガスによる溶融炉心の膨張モデル

#### i) 溶融炉心の落下

落下した溶融炉心はペデスタル開口部の奥に 1m 程度の高さの盛り上がりを作成しているように見るとともに、ペデスタル外周部にも広がっている可能性が高い。一方、ペデスタル内の盛り上がりは、ペデスタルを満たしているようには、現時点では見えない。盛り上がりが形成されていることが確認された場合、その成因については、落下炉心の粘性が高かったと言う考えと、落下炉心がある程度下部に溜まった後、ガスなどの噴出口として形成されたという 2 通りの考えが、現段階であり得るのではないかと考えられる。

#### ii) 落下した溶融炉心のペデスタル外周部への拡大（膨張層の形成）

その後、落下した溶融炉心は、ペデスタル開口部を経て、次第にペデスタル外周部に流れ出たと考えられるが、このときの溶融炉心の温度や外周部での広がりや程度などは、今後の PCV 内部調査からの追加情報なしには、確定できない。

この溶融炉心からの輻射による熱エネルギー（γ線などによる効果を含む。）によって、ペデスタル壁の温度が上昇し、コンクリートの分解が進み、強度を失って粉体状になったのではないかと考えられる。強度を失うメカニズムとしては、カルシウムの脱落やコンクリート内の結晶成分の相変化による応力発生などがあり得るが、どれもアイデアの段階であり、実験で検証することが必要である。

輻射による加温破損メカニズムは、溶融炉心とコンクリートが直接接触することを必要とせず、ペデスタル壁の残存鉄筋部に溶融炉心の固化したものがほとんど見られていないことを説明できる可能性がある。また、上記の反応は 700-1000°C 程度でコンクリートの圧縮応力が大きく低下することが知られているが、コンクリートの組成などに大きく影響される可能性があるため、現段階では関連情報として位置付けておく。

結合力が低下したコンクリートは、代替注水が本格化した後、流し出されたと考えることが合理的ではないかと考えられる。

ペデスタル床面やペデスタル壁と溶融炉心が反応すれば、二酸化炭素や水蒸気が発生する。また、炉心から漏れ出た冷却水（量的は限られていたと考えられる）も関与した可能性がある。これらの気体を多く含んだ層（以下「膨張層」と呼ぶ。MCCI 関連の文献の中には「swelled melt」等の用語が用いられていることがあるが、実験条件などがかなり違うため、全く同じような事象を指しているかどうかは明確ではない。）「膨張層」が溶融炉心本体と一体なのか分離していたのかは不明であるが、ここでは分離状態（ビールの泡のイメージ）で考えている。

なお、溶融炉心のペデスタル開口部からの流出と「膨張層」の形成の時間的前後

関係は現時点では不明である。

「膨張層」の上部にコンクリートから分離したシリコン等を含む成分が集まり、膜あるいは層を形成する。この膜は、温度低下などの要因で固化し、周辺の配管や機器に固着することが考えられる。この現象は、これまでの MCCI 実験で「anchoring」と呼ばれている現象であるが、今回のような条件下でも確実に発生するかどうかは確認できていない。この膜の上に粉体化したコンクリートの一部が堆積し、膜の形成を促進した可能性もある。

なお、過去の MCCI 実験で見られた固着した膜/層は比較的脆く、ペDESTAL開口部の前面のように「anchoring」するための配管などが無く、広い空間になっている場所では、自重で崩れることは十分に考えられる。

また、「薄い膜」は多くの気泡を含み、かなりの断熱性を持つ可能性がある。その場合、コンクリートの破損部分が、この「薄い膜」の下部に限定されていることを説明できる可能性がある。

### iii) 落下した熔融炉心を含む堆積物の収縮（薄い膜の残存）

その後、崩壊熱の減少や代替注水の進行によって、「膨張層」の温度が下がり、収縮することにより、「薄い膜」のみが元の位置に取り残されたのではないか。なお、「膨張層」の成長過程で、「薄い膜」に裂け目などが生じた場合には、さらにその上部に「膨張層」と「薄い膜」が形成されることは十分にあり得ることから、テラス状の構造が多層になっている箇所があることを説明できる可能性がある。

ペDESTAL内に「薄い膜」（テラス状の構造）が1m程度の高さの位置に残存している可能性は低いかも知れない。ペDESTALの直径が6m程度である一方、1m程度の高さにはanchoringできる配管などがあまりないと考えられる。さらに、代替注水が本格化した時点でかなりの水量が、圧力容器の破損部分からペDESTALに流下したと考えられるからである。

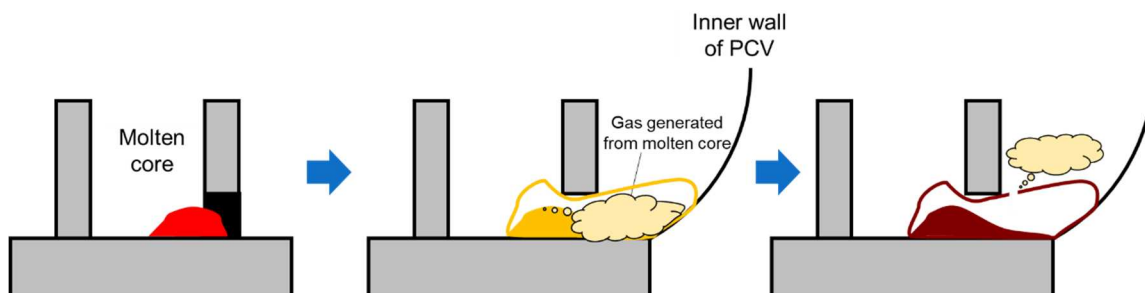


図 35 ガスによる熔融炉心の膨張モデル

本件の議論を進めるためには、以下のような情報が得られることが重要であることについては、東京電力と認識を共有している。今後の東京電力の調査計画にも適宜反映して、入手された追加情報を加えて、検討を深めていくこととする。

- ①テラス状構造物のサンプル分析
- ②PCV 底部に残存しているであろう「熔融炉心」、「コンクリート中に含まれていた礫」や底部に存在する粉体状のもののサンプル分析
- ③加熱におけるコンクリート破損実験
- ④ペDESTAL中心部の熔融炉心の堆積状況及びテラス状構造の有無など
- ⑤ペDESTAL内側のコンクリート破損情報
- ⑥ペDESTAL外周部であって開口部から離れた地点におけるテラス状構造下部の状況（こうした部分でもテラス状構造下部は空洞になっているのかどうか。）

### (3) 東京電力における調査・分析等

東京電力福島第一原子力発電所1号機から3号機までの炉心損傷状況の推定については、2011年11月30日に開催された、福島第一原子力発電所1-3号機の炉心損傷状況の推定に関する技術ワークショップ（旧原子力安全・保安院）にて、2、3号機の炉心スプレイ系からの注水による温度変化等、その時点までに得られた情報を総合的に判断して、原子炉圧力容器の状況と損傷・熔融した燃料の落下状態が推定されている。

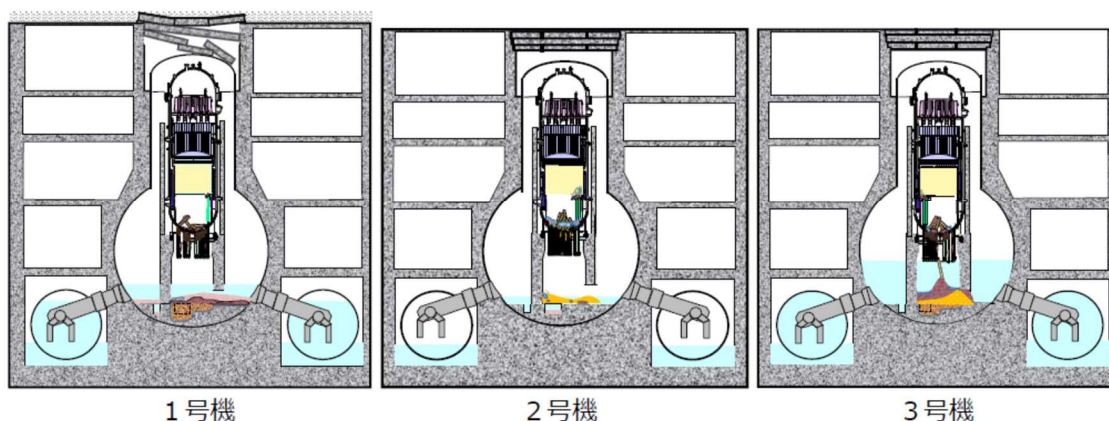
東京電力は、当該炉心損傷状況の推定に2016年度からIRID及びエネルギー総合工学研究所（IAE）が取組んだ「廃炉・汚染水対策事業費補助金（総合的な炉内状況把握の高度化）」事業と協働で、1～3号機の燃料デブリ分布を推定したものを反映させるとともに、継続して調査研究を実施している<sup>6</sup>ことから、これらの知見のフィードバックも重要となってくると考えられる。（図36参照）

---

<sup>6</sup> 福島第一原子力発電所事故発生後の原子炉圧力容器内・格納容器内の状態推定について 2021年7月19日東京電力ホールディングス株式会社  
[https://www.tepco.co.jp/decommission/information/accident\\_unconfirmed/pdf/20210719.pdf](https://www.tepco.co.jp/decommission/information/accident_unconfirmed/pdf/20210719.pdf)

## 炉心・格納容器内の状況推定のまとめ

	炉心部	下部プレナム	格納容器	D/W水位	S/C水位
1号機	ほとんどない	ほとんどない	大部分	約2m	ほぼ満水
2号機	少ない ∨	多い ∨	少ない ∧	約0.3m	低レベル
3号機	少ない	少ない	ある程度	約5m	満水



TEPCO 48

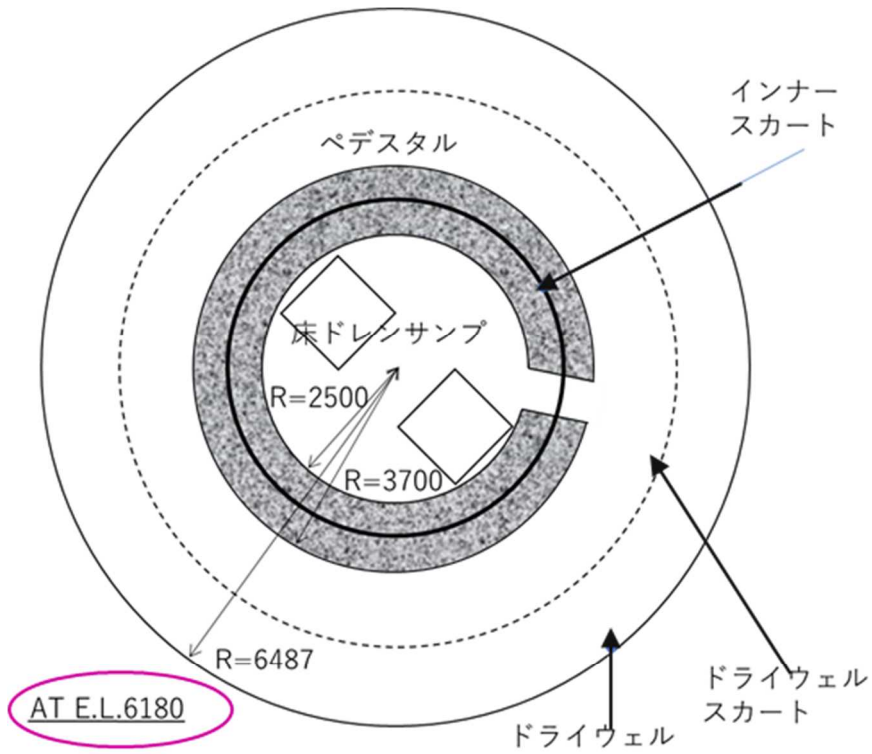
図 36 燃料デブリ分布の推定について<sup>7</sup>

### (4) 設計情報等

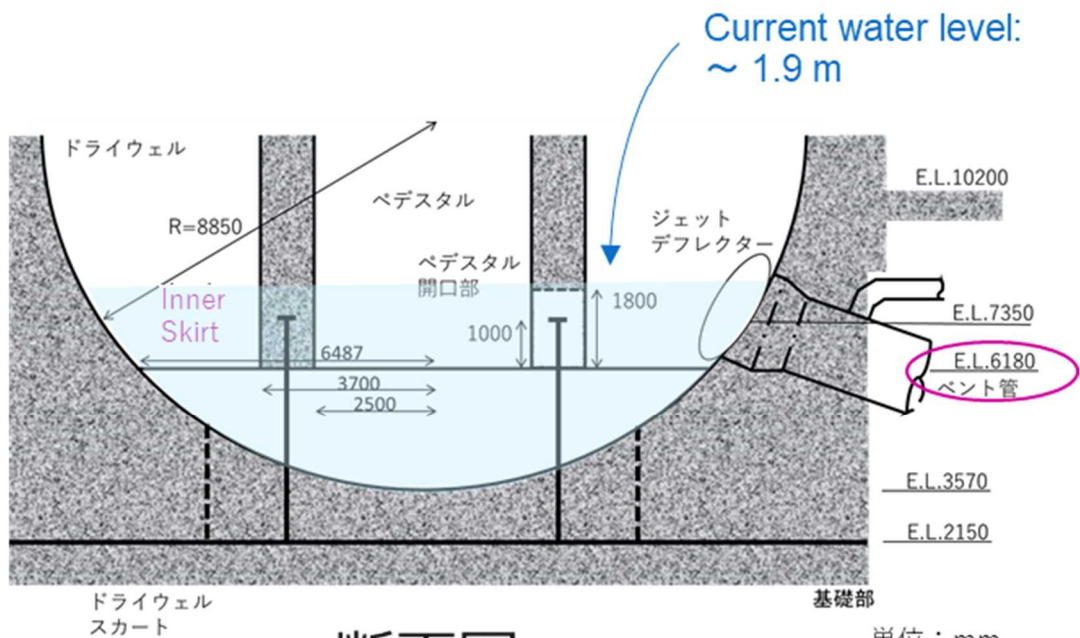
東京電力から提供された情報等を調査チームにおいて整理した。

1号機ペダスタルの構造概要は、図 37 のとおりであり、ペダスタルを含む1号機原子炉建屋等のコンクリート材料及び燃料デブリ等の想定体積、PCV内の水量等の物理量は、表 2 及び表 3 となる。

<sup>7</sup> 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 第33回会合 資料3 福島第一原子力事故発生後の詳細な進展メカニズムに関する未確認・未解明事項の調査・検討結果のご報告～第6回進捗報告～ 東京電力ホールディングス株式会社



平面図



断面図

図 37 1号機ペDESTALの構造概要

品名	産地
粗骨材 (規格: 60mm以下)	新田川産及び御山産(砕石)
粗骨材 (規格: 25mm以下)	新田川産
細骨材 (規格: 5mm以下)	新田川産及び阿武隈川産

東京電力からの提供情報を原子力規制庁において整理。

表2 1号機原子炉建屋等のコンクリート材料

物理量等	確認内容
1 1号機の燃料デブリ発生量	1号機発生重量 279ton (燃料成分(UO <sub>2</sub> 等) 76ton、構造材成分(Zr,SUS等) 73ton、コンクリート成分 130ton) ※東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会(第30回)参考1より引用
2 1号機の燃料デブリの想定体積	約16m <sup>3</sup> UO <sub>2</sub> : 重量 76ton、比重 10.97g/cm <sup>3</sup> 、SUS: 重量 73ton、比重 7.93g/cm <sup>3</sup> (SUS304等)として想定。
3 1号機PCV内の想定水量(LOCA時の水量想定等)	約20cm水位(ベント管下端高さ(約20cm)を超えた水はS/Cに流出) 1号機一次冷却水体積 約145m <sup>3</sup> 1号機ペDESTAL内面積 約20m <sup>2</sup> 1号機ペDESTAL外面積 約90m <sup>2</sup> 1号機S/C頂部付近までの空間容積 約1700m <sup>3</sup> と想定。※PCV内概要参照
4 鉛遮蔽の熔融温度	約330℃(理科年表から引用)
5 UO <sub>2</sub> の熔融温度	約2800℃ H. Hausner: J. of Nucl. Mater., 15, 3, 1965, pp. 179-183
6 Zrの熔融温度	約1850℃(理科年表から引用)
7 SUSの熔融温度	1400~1450℃ 森松工業株式会社「技術関連情報/ステンレス鋼の特性・性能」 <a href="https://www.morimatsu.jp/data/stainless.html">https://www.morimatsu.jp/data/stainless.html</a>

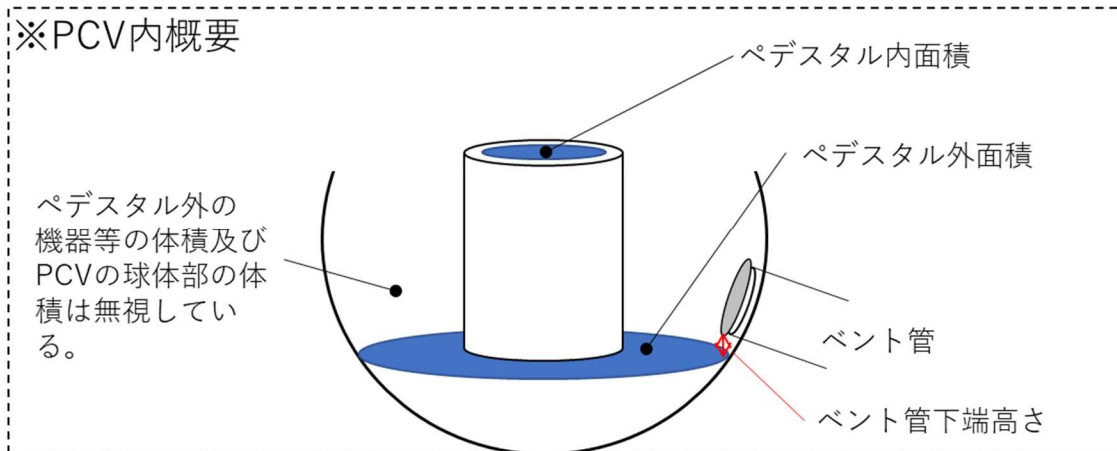


表3 燃料デブリ等の想定体積、PCV内の水量等の物理量等

## 5. まとめ

東京電力及び IRID が 2022 年 2 月から実施している水中 ROV を用いた 1 号機原子炉格納容器内部調査の情報及び事故分析検討会における議論から、調査チームにおいて、1 号機原子炉格納容器内部の特徴を以下のように整理した。

- ① ペDESTAL 開口部の両側ではコンクリート部が消失している。鉄筋は損傷を受けていないように見える。
- ② ペDESTAL のコンクリート部はテーブル状堆積物より下側で消失している。
- ③ ペDESTAL 周辺の種々の配管は大きな損傷を受けていない。
- ④ シート状の鉛遮へい（鉛毛マット）は一定の高さで溶融している。
- ⑤ テラス状構造はペDESTAL 開口部から反対側に向けて分布している。
- ⑥ テラス状構造はペDESTAL 開口部付近が高く（～1.1m）、反対側が低く（～0.4m）なっている。
- ⑦ テラス状構造の上側（表面）は滑らかのように見える。
- ⑧ テラス状構造は小さい泡（small bubbles）を含んでおり、3cm の厚さと推定されている。
- ⑨ ペDESTAL 開口部付近に燃料デブリの小山状の堆積物が確認される。（ただし明瞭なものではない。）
- ⑩ テーブル状のものがまくれあがったような形状（Large bubble-like）の堆積物はペDESTAL 開口部の天井より下に存在するが、その厚さは不明である。
- ⑪ 膨らみのある（Bubble-like）の形状のものが PCV 床面のデブリ又は堆積物の表面に確認される。
- ⑫ PCV の外壁には損傷は確認されていない。
- ⑬ PCV 床面の正確な状況は不明である。

これらの特徴を踏まえ、今後、検討すべき事項を明確にするため、主に下記の確認点を挙げている。

- 1) なぜ RPV から落下した燃料デブリが拡がっていないのか。
- 2) どのようにしてペDESTAL 壁面に沿ってコンクリート部が損傷したのか。
- 3) 1 号機 PCV 内ではいくつかの形状の堆積物（Crust）が確認されているが、これらの堆積物はどのように形成されたのか。

1 号機原子炉格納容器内部調査における確認点については、今後、内部調査で明らかにすべき点、試験等で確認すべき点を含むものであり、国内外の機関等において、更なる仮説の提唱、議論、検討がなされるべきものとする。

## 6. 引き続き調査等が必要な課題

5. に係る議論が広く国内外で行われるためには、東京電力から以下のような更なる情報の提供が重要である。

- ① テラス状構造等の試料採取及び分析
- ② ペDESTAL内部及びペDESTAL内壁の動画・画像等
- ③ ペDESTAL開口部から離れた箇所にあるテラス状構造の下側の動画・画像等
- ④ PCV床面に分布している物質の試料採取及び分析 等

また、5. の確認点以外に以下の点についても、今後、議論が必要と考える。

- ① PCV内の水位の変化
- ② RPVへの注水に関する時間と量
- ③ 1号機原子炉補機冷却水系(RCW)配管、熱交換器及びポンプの高い汚染
- ④ PCV内における再浸水の可能性
- ⑤ 直流電源復帰後の熱電対の指示値

なお、1F事故分析検討会で議論<sup>8</sup>があったが、東京電力及びIRIDが2022年上半期に実施した1号機原子炉格納容器内部調査については、東京電力において公開された動画・画像が限定されており、約5ヶ月後に新たな情報として報告される等、東京電力における調査の情報の公開性、速報性に関して指摘があった。

東京電力からは、調査に係る動画・画像等の容量も大きく、公開するための作業に時間を要している旨の回答があるとともに、その後の対応として、事故分析検討会において、今回の1号機PCV内部調査で取得された全ての映像を2022年12月中に公表する旨の説明及び同年12月から開始する後半の調査についても調査の速報をインターネットにて公表する旨の説明があった<sup>9</sup>。

---

<sup>8</sup> 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 第32回合 議題(1) 1号機原子炉格納容器内部調査の状況について

<sup>9</sup> 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 第33回合 資料1-1 福島第一原子力発電所1号機の格納容器内部調査から得られた情報(前半調査とりまとめ) 2022年12月5日東京電力ホールディングス株式会社



## 引用文献等

- 1) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（第33回会合）資料1-1  
[https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko\\_bunseki01/140000076.html](https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko_bunseki01/140000076.html)
- 2) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（第32回会合）資料1-1  
[https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko\\_bunseki01/140000076.html](https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko_bunseki01/140000076.html)
- 3) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（第31回会合）資料1-1、資料1-2  
[https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko\\_bunseki01/140000075.html](https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko_bunseki01/140000075.html)
- 4) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（第30回会合）資料1-1、補足説明資料1、参考1  
[https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko\\_bunseki01/140000073.html](https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko_bunseki01/140000073.html)  
[動画] 1号機PCV内滞留水水位について（常設監視計器の再設置結果）  
[https://www.tepco.co.jp/tepconews/library/archive-j.html?video\\_uuid=r4u027fz&catid=61699&year=2015](https://www.tepco.co.jp/tepconews/library/archive-j.html?video_uuid=r4u027fz&catid=61699&year=2015)  
[画像] 福島第一原子力発電所1号機 原子炉格納容器内部調査（堆積物サンプリング）撮影日 2017年4月6日  
<https://photo.tepco.co.jp/date/2017/201704-j/170407-01j.html>  
[動画] 1号機原子炉格納容器内部調査時の動画（2022年5月23日 福島第一原子力発電所1号機原子炉格納容器内部調査（ROV-A2）の実施状況（2022年5月17～19日の作業状況）提供：国際廃炉研究開発機構（IRID）・日立GEニュークリア・エナジー）  
[https://www.tepco.co.jp/library/movie/detail-j.html?catid=107299&video\\_uuid=og07od6u](https://www.tepco.co.jp/library/movie/detail-j.html?catid=107299&video_uuid=og07od6u)
- 5) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会（第29回会合）資料3  
[https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko\\_bunseki01/140000070.html](https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko_bunseki01/140000070.html)  
[動画] 1号機原子炉格納容器内部調査時の動画（2022年3月24日 福島第一原子力発電所1号機原子炉格納容器内部調査（ROV-A2）の実施状況（3

月 14～16 日の作業状況) 提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID)・日立  
GEニュークリア・エナジー)

[https://www.tepco.co.jp/library/movie/detail-  
j.html?catid=107299&video\\_uuid=s19dq021](https://www.tepco.co.jp/library/movie/detail-j.html?catid=107299&video_uuid=s19dq021)

- 6) 東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会 (第 28 回会  
合) 資料 4-3 及び資料 4-3 (参考)

[https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko\\_bunseki01/140000  
067.html](https://www.nra.go.jp/disclosure/committee/yuushikisya/jiko_bunseki01/140000067.html)

[動画] 1号機原子炉格納容器内部調査時の動画 (2022年2月9日 福島第一原  
子力発電所 1号機原子炉格納容器内部調査の実施状況 (2月9日調査分)  
について 提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID)・日立GEニュークリ  
ア・エナジー)

[https://www.tepco.co.jp/library/movie/detail-  
j.html?catid=107299&video\\_uuid=k593g02e](https://www.tepco.co.jp/library/movie/detail-j.html?catid=107299&video_uuid=k593g02e)

[動画] 1号機原子炉格納容器内部調査時の動画 (2022年2月8日 福島第一原  
子力発電所 1号機原子炉格納容器内部調査の実施状況 (2月8日調査分)  
について 提供：国際廃炉研究開発機構 (IRID)・日立GEニュークリ  
ア・エナジー)

[https://www.tepco.co.jp/library/movie/detail-  
j.html?catid=107299&video\\_uuid=ykq5a5n6](https://www.tepco.co.jp/library/movie/detail-j.html?catid=107299&video_uuid=ykq5a5n6)

- 7) 福島第一原子力発電所廃炉・事故調査に係る連絡・調整会議 (第10回会合) 資  
料 1-2

<https://www.nra.go.jp/data/000413054.pdf>

(別添 5)

## 東京電力福島第一原子力発電所 1 号機 PCV 内部調査により確認されたコンクリートに関する事象の検討

大阪大学 大学院工学研究科

東京電力福島第一原子力発電所事故調査チーム

「1F-2050」

大石 佑治

### 1. 背景及び目的

大阪大学大学院工学研究科では、附属フューチャーイノベーションセンターに「1F-2050」というチームを設立し、東京電力福島第一原子力発電所事故調査を行っている。本チームは放射線、核燃料、炉物理、炉化学のほか、マテリアルや土木の専門家等から構成される。1F-2050は、得られた最新の情報をもとに事故の過程の研究及び解明に挑み、東京電力福島第一原子力発電所事故の全体解明にアカデミアの立場から貢献することを目指している

1号機原子炉格納容器内部調査により、ペDESTAL開口部におけるコンクリート部の破損、およびペDESTAL外周部にテーブル状堆積物の存在が確認されている。これらは炉心溶融物とコンクリートが反応するという従来の考えでは理解できない事象である可能性がある。そこで、当チームはこれらのコンクリートに関する事象の解明を目的に、様々なシナリオを検討するとともにシナリオに関係した模擬試験を実施している。

### 2. 調査の概要

ペDESTAL開口部におけるコンクリート部の破損については、コンクリートのみが破損して鉄筋は顕著な損傷を受けていないという特徴がある。また、テーブル状堆積物については断面が多孔質に見えること、下部が空洞になっていること、空洞内の配管等への顕著な熱的損傷が見られないこと、堆積物の高さに傾斜があること等の特徴がある。コンクリートの破損、および多孔質な物質の形成に至る可能性のある要因を可能な限り列挙し、鉄筋が顕著な損傷を受けていないといった特徴を説明できるかという観点から検討することで、現時点で可能性が高いと思われる以下の2つのシナリオを抽出した。これらのシナリオを検証するために、コンクリートに用いられている骨材の分析及びコンクリートの加熱試験を実施した。

### (1) コンクリートの高温での溶融シナリオ

本シナリオでは図1のように、落下した炉心溶融物がペDESTAL開口部付近のコンクリートを昇温させた結果コンクリートの破損とテーブル状堆積物の形成に至ったと考える。このシナリオではコンクリートの温度が鉄筋の溶融温度に至らなかったために、コンクリートのみが破損したことになる。

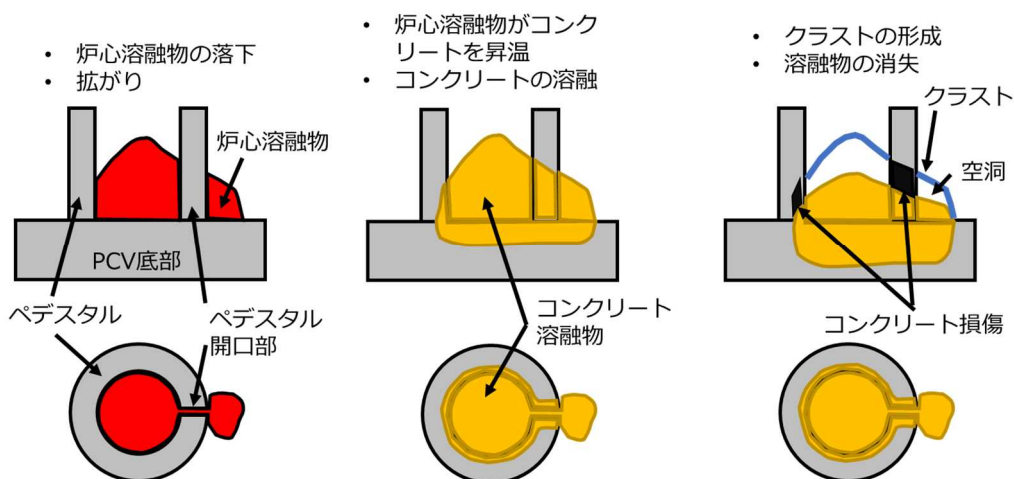


図1 コンクリートの高温での溶融シナリオの概要

### (2) コンクリートの水への溶解シナリオ

本シナリオでは図2のように、落下した炉心溶融物が高温の水もしくは水蒸気を発生させ、それがコンクリート成分と反応することでコンクリートが破損し、テーブル状堆積物の元となった高粘度の液相の生成に至ったと考える。

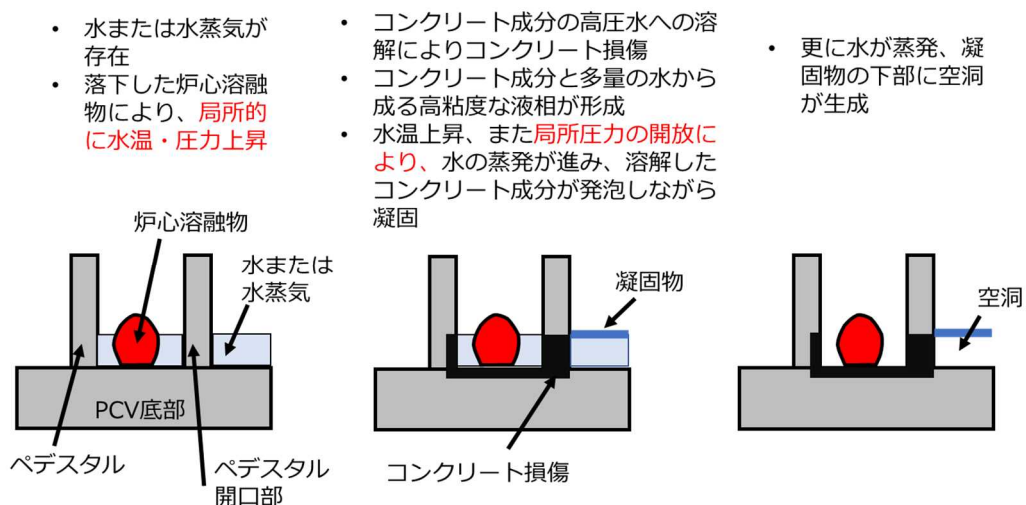


図2 コンクリートの水への溶解シナリオの概要

高温・高圧の水は、図3のように岩石、特に岩石中の  $\text{SiO}_2$  を溶かすことが知られている。コンクリートは骨材とセメントから構成されており、骨材に  $\text{SiO}_2$  が豊富に含まれている場合は、コンクリート中の骨材が高温・高圧の水に溶解する可能性がある。また、高温・高圧の水と  $\text{SiO}_2$  が反応して生じる水を多量に含んだガラスは、水が蒸発する際に膨張して多孔質になることが知られている。同様の現象が炉内でも生じ、その結果としてテーブル状堆積物が形成された可能性がある。

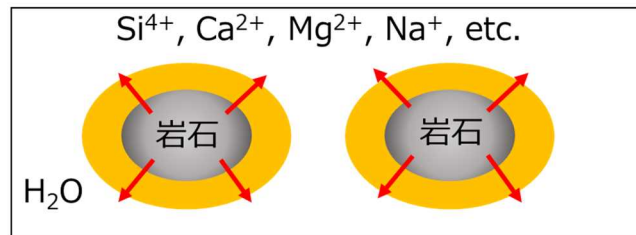


図3 高温・高圧の水が岩石を溶かす様子

### 3. 模擬試験の結果

福島第一原子力発電所では、新田川産の骨材がコンクリートに用いられた。コンクリートの溶融や溶解について検討するためには、その成分を把握する必要がある。そこで、新田川産の砂利の走査型電子顕微鏡 (SEM) /エネルギー分散型 X線分光法 (EDX) による組成分析を行った。その結果を図3に示す。元素としては Si が最も多く含まれていることが分かった。

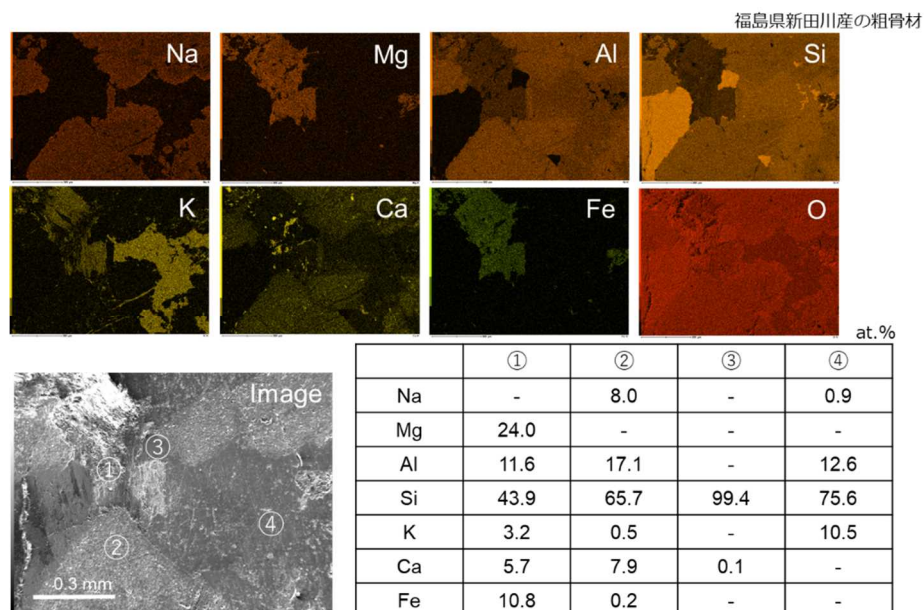


図3 福島県新田川産の砂利の SEM/EDX による元素分析結果

この骨材を用いて鉄筋入りコンクリートを作製し、600℃と1280℃での加熱試験を実施した。保持時間は8時間であり、雰囲気は大気雰囲気である。結果は図4の通りで、600℃で保持したコンクリートは外観上の変化はなかったのに対し、1280℃で保持したコンクリートは溶融して原型をとどめていなかった。1280℃は鉄の融点以下であるため、この温度では鉄筋は大きな損傷を受けずにコンクリートのみが破損する可能性がある。

#### 600℃と1280℃で8時間保持

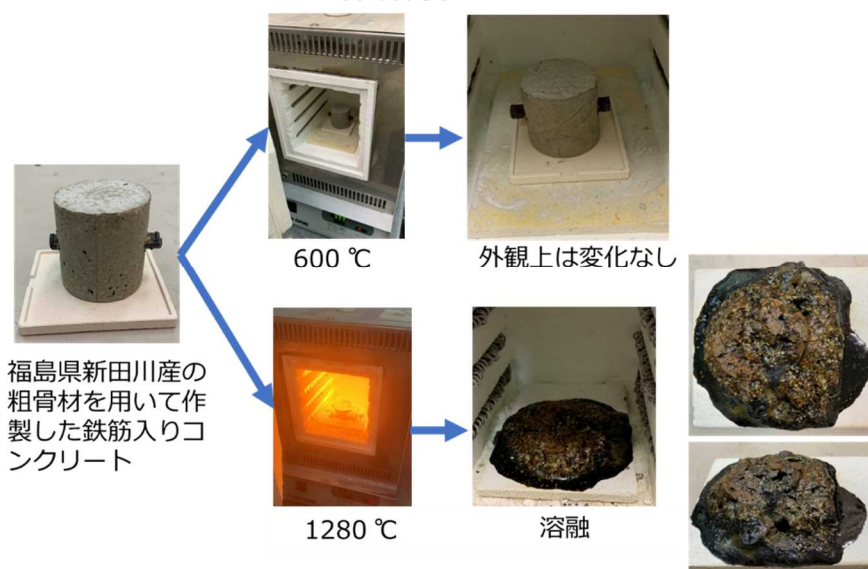


図4 福島県新田川産の骨材を用いて作製した鉄筋入りコンクリートの加熱試験結果

溶融したコンクリートを切断すると、溶融した箇所と溶け残り箇所があることが分かった。溶融した箇所は光沢のある黒色ガラス質であった。この物質をSEM/EDXにより元素分析した結果を図5に示す。溶け残り箇所に比べて、Ca、Fe、Mgが多く含まれていた。共晶反応により、Ca、Fe、Mgを多く含む液相が生じたと考えられる。

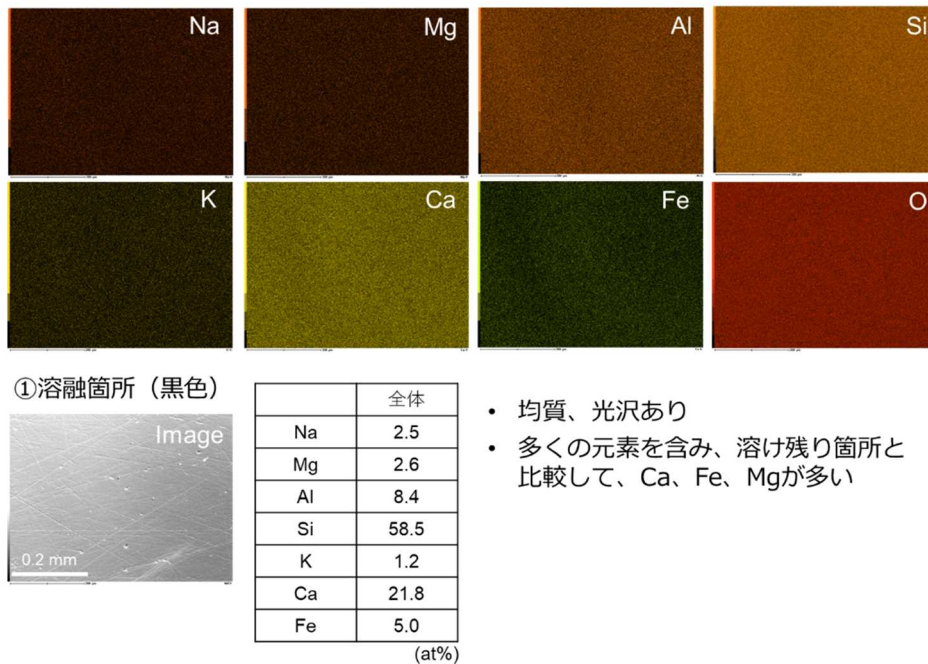


図5 溶融したコンクリートのSEM/EDX 元素分析結果

#### 4. まとめ

1号機ペデスタル開口部におけるコンクリート部の破損、およびペデスタル外周部のテーブル状堆積物について、現時点で可能性が高いと思われる以下の2つのシナリオを抽出した：(1) コンクリートの高温での溶融シナリオ、(2) コンクリートの水への溶解シナリオ。

これらのシナリオを検証するために、模擬試験を行った。(1)、(2)に関連した試験として、コンクリートの骨材として用いられたと考えられる新田川産の砂利の元素分析を実施した結果、Siが最も多く含まれていることが明らかとなった。

(2)のシナリオで主に水へ溶解すると考えられるのはSiO<sub>2</sub>であることから、新田川産の骨材は高温・高圧の水へ溶解する可能性がある。また、(1)に関連した試験としてはコンクリートの加熱試験を実施した結果、鉄の融点以下である1280°Cでコンクリートが溶融した。これは、鉄筋に顕著な熱的損傷を与えずにコンクリートのみが破損するような熱的条件が存在することを示唆している。コンクリートは溶融箇所と溶け残り箇所が存在し、溶融箇所は黒色ガラス質で溶け残り箇所に比べてCa、Fe、Mgを多く含んでいた。コンクリートが熱により溶融した場合、黒色ガラス質の物質が形成されると思われる。この存在が確認されていない現状では、(1)コンクリートの高温での溶融シナリオの可能性は低いと考えている。炉内調査では、コンクリート破損箇所と健全な個所の境界に黒色ガラス質の物質が存在するかを確認していただきたい。